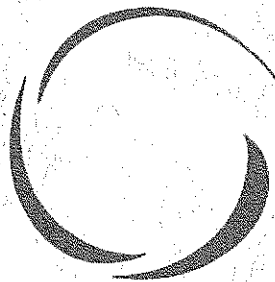

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

海 部 俊 樹 (元内閣総理大臣)

オーラル・ヒストリー

上 巻



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

海部俊樹オーラルヒストリー 上巻《目次》

海部俊樹 略歴……………12

第1回 誕生から早大編入まで（一九三二～五二）……………13

- 名古屋の写真館に生まれる（一九三一年）
- 南久屋国民学校時代（一九三七～四三年）
- 旧制東海中学に入学（一九四三年）
- 三菱発動機への勤労働員
- 空襲下での生活
- 少年航空兵を目指す
- 一九四五年八月十五日
- 弁論を始めたきっかけ
- 弁論大会で優勝
- 弁論の心得と練習法
- 中央大学専門部に入学（一九四八年）
- 六人の兄弟姉妹の中での「突然変異」
- 海部姓と海部郡
- 中央大学「辞達学会」
- 政治との出会い
- 早稲田大学法学部に編入（一九五二年）
- 河野金昇議員の学生秘書として
- あっせん利得罪について

第2回 衆議院初当選まで（一九五二～六〇）……………41

- 河野金昇氏についてI——中野正剛の心酔者

第3回 一、二年生議員時代（一九六〇～六五）……………67

- 河野金昇氏についてII——演説上手
- 政治家への志
- 河野金昇議員の秘書としてI——後援会づくり
- 早稲田大学雄弁会
- 選挙演説の心得
- 大学時代の弁論大会
- 水玉模様のネクタイ
- 三木武夫氏との交流——「県会には外交がない」
- 一期待——河野金昇夫人の立候補
- 三木武夫氏の人物像
- 職場結婚
- 河野金昇議員の秘書としてII——公設秘書
- 衆議院選挙に立候補
- 議員秘書として見た安保改定（一九六〇年）
- 一年生議員としてI——議席は一丁目一番地
- 一年生議員としてII——自民党青年局学生部長
- 一年生議員としてIII——商工委員会、農林水産委員会
- 一年生議員としてIV——国会対策委員会
- 一、二年生議員時代（一九六〇～六五）……………
- 現在の政局から（森内閣不信任案否決）
- ロバート・ケネディの来日
- ドイツ行き（一九六二年八月）
- アメリカ行き（一九六二年九月）

第4回

労働政務次官時代（一九六六～六八）……………

- 海外視察の総括
- 青年局長（一九六三年十二月）
- 青年海外協力隊の構想
- 二回目の選挙（一九六三年十一月）
- アフリカ行き（一九六四年五月）
- 韓国行き（一九六四年十一月）
- 議運・本会議事進行担当（一九六四年十二月）
- 地元後援会との関係と三木派
- 自民党商工部会の副部長（一九六五年八月～）
- 選挙資金と応援
- 選挙の変化（小選挙区制）

- 現在の政局から（自民党総裁選前）
- 労働省政務次官1（政務次官の仕事）
- 労働省政務次官2（政務次官の位置づけ）
- 労働省政務次官3（労働大臣・早川崇）
- 労働省政務次官4（ILO総会に出席）
- 労働省政務次官5（野党対策）
- 労働省政務次官6（海外事情視察）
- 労働省政務次官7（祝日改正法案）
- 労働省政務次官8（保革対決）
- 労働省政務次官9（アジア労働大臣会議）
- 労働省政務次官10（衆議院社労委）
- 労働省政務次官11（ILOでの演説と労働貴族）
- 労働省政務次官12（マイスター制度）
- 自民党青年局長1（青年局と地方青年部）
- 自民党青年局長2（党の組織について）
- 自民党青年局長3（沖縄遊説と津雲國利氏）

97

第5回

議運副委員長時代（一九六九～七二）……………

- 三木武夫と総裁選1（連想されること）
- 三木武夫と総裁選2（佐藤三選と三木票）

- 現在の政局から（自民党総裁選後）
- 大学紛争と大学立法（一九六九～七〇年）
- 国対副委員長・議運理事1（国対副委員長の仕事）
- 国対副委員長・議運理事2（各党の国対）
- 国対副委員長・議運理事3（議運と国対の関係）
- 現在の政局から（自公保連立政権、二〇〇一年）
- 国対副委員長・議運理事4（国対副委員長の仕事）
- 国対副委員長・議運理事5（社会党の国対）
- 国対副委員長・議運理事6（法案を「つるす」）
- よど号事件と山村新治郎（一九七〇～七四年）
- 労働問題調査会副会長（一九七〇～七四年）
- 種々の委員会、議連での活動（一九七〇～七二年）
- 佐藤首相四選問題（一九七〇年）
- 衆議院議員運営委員会委員長（一九七二年十二月）

第6回

田中内閣時代（一九七二～七四）……………

- 現在の政局から（元首相付SP、いわゆる人権派）
- 現在の政局から（小泉政権の誕生、二〇〇一年四月）
- 現在の政局から（田中外相とアーミテージ）
- 田中内閣の成立前夜（一九七二年）
- 田中内閣の成立、三木副総理の入閣（一九七二年七月）
- 自民党人事局長（一九七三年）
- 五回目の当選と選挙応援
- 自民党選挙対策委員会幹事
- 四十七年十二月の総選挙

149

125

第7回

三木内閣時代Ⅰ（一九七四～七五）……………

- 通年国会の議論
- 金大中事件（一九七三年八月）
- 小選挙区制への動き
- 愛知三区の事情
- エジプト、クウェート訪問（一九七四年一月）
- 日米繊維交渉との関わり（一九七四年六月）
- 三木副総理辞任と三木派内の序列
- 三木副総理辞任から椎名裁定まで
- 現在の政局から（都議選・防衛省昇格問題）
- 三木内閣の成立1（官房長官から副長官へ）
- 副幹事長の経験（田中内閣末期）
- 三木内閣の成立2（組閣事情）
- 三木内閣の成立3（三木氏のブレーン）
- 三木内閣の成立4（閣僚への自薦、他薦）
- 三木内閣の成立5（閣僚候補と派閥の推薦）
- 三木内閣の成立6（中曽根幹事長）
- 三木首相と民主主義
- 官房副長官時代1（初閣議と川島副長官）
- 官房副長官時代2（閣議と事務次官会議）
- 官房副長官時代3（閣僚懇談会）
- 官房副長官時代4（議運での日々）
- 官房副長官時代5（井出一太郎官房長官）
- 官房副長官時代6（議運理事兼国対委員長）
- 官房副長官時代7（官房長官代理）
- 官房副長官時代8（夜の三木邸）
- 三木内閣の仕事（独禁法、政治資金規正法の提案）

177

第8回

三木内閣時代Ⅱ（一九七五）……………

- 独禁法と公職選挙法改正1（初閣議での提案）
- 独禁法と公職選挙法改正2（法案）
- 独禁法と公職選挙法改正3（根回し）
- 独禁法と公職選挙法改正4（難航した独禁法改正）
- 独禁法と公職選挙法改正5（参議院と党議拘束）
- 佐藤栄作元総理の国民葬（一九七五年六月）
- 日米首脳会議1（準備）
- 日米首脳会議2（三木・フォード単独会談）
- 日米首脳会議3（シナリオ）
- 日米首脳会議4（議題と共同声明）
- クアラルンプール事件への対応
- 三木総理の靖国神社参拝1（公的と私的）
- 三木総理の靖国神社参拝2（法制局の見解など）
- スト権スト1（労働側、富塚三夫）
- スト権スト2（食糧輸送対策）
- スト権スト3（社会党と民社党）

203

第9回、第10回、第11回（掲載省略）

第12回

三木内閣時代Ⅲ（一九七五～七六）……………

- 新自由クラブ結成への動き1（発端）
- 新自由クラブ結成への動き2（伏線）
- 新自由クラブ結成への動き3（新党結成）
- 新自由クラブ結成への動き4（新党の意味）
- ロッキード事件1（発端）
- ロッキード事件2（フォードへの親書）
- ロッキード事件3（稲葉修法相）
- ロッキード政局1（挙党協の動き）

229

第13回

三木内閣時代Ⅳ（一九七五～七六）……………

- ロッキード政局2（臨時国会召集か解散か）
- ロッキード政局3（松野政調会長）
- ロッキード政局4（一九七六年十二月の総選挙）
- 防衛費GNP一％枠問題
- ミグ二五強制着陸事件（一九七六年九月）
- 三木内閣退陣
- 外交・危機管理問題
（金大中事件の政治決着、クアラルンプール事件）
- 総裁選への予備選挙導入

255

第14回

三木内閣時代Ⅴ～福田内閣時代Ⅰ（一九七六～七七）

◆質問項目

- 現在の政局から1（辻元清美と田中真紀子）

277

第15回

福田内閣時代Ⅱ（一九七六～七七）……………

◆質問項目

- 現在の政局から2（加藤紘一）
- 三木武夫のアメリカ観
- 防衛費一％枠問題
- 鬼頭史郎のニセ電話事件
- 国会対策委員長1（議運と国対）
- 国会対策委員長2（野党対策）
- 国会対策委員長3（国対への適性）
- 国防会議と日米首脳会談
- エリザベス女王からの勲章
- 三木内閣最後の選挙戦
- 「福田内閣時代」
- 文部大臣1（就任）
- 文部大臣2（政務次官について）
- 文部大臣3（文教族）
- 文部大臣4（文部大臣としての仕事）
- 福田内閣の閣議と閣僚懇談会
- 文部大臣5（ゆとり教育の始まり）
- 文部大臣6（学習指導要領の改正）
- 文部大臣7（日教組と社会党）
- 文部大臣8（芸術、文化関係の仕事）
- 文部大臣9（国立大学と入試制度1）
- 文部大臣10（国立大学と入試制度2）
- 文部大臣11（主任制度と学歴偏重打破）
- 文部大臣12（日教組との対立）
- 文部大臣13（心の教育のために）
- 派閥解消と三木派

305

■文部大臣 14 (役所と秘書官)

第16回 福田内閣時代Ⅲ (一九七七～七八) ……………

331

◆質問項目

- 総裁公選と党員獲得 1 (党員獲得競争)
- 総裁公選と党員獲得 2 (党員、党友、職域支部)
- 総裁公選と党員獲得 3 (田中軍団)
- 河本敏夫について 1 (三木派の後継か)
- 河本敏夫について 2 (笑わん殿下)
- 中道四派と三木派
- 自由社会研究会
- 三木派とマスコミ
- 元号法制化問題
- 有事法制の問題
- 日中平和条約問題 1 (覇権問題と台湾問題)
- 日中平和条約問題 2 (靖国問題)
- 松野頼三氏とグラマン問題

第17回 大平内閣時代 (一九七八～八〇) ……………

357

◆質問項目

- 一般消費税導入論と七九年総選挙
- 四十日抗争 1 (三派連携)
- 四十日抗争 2 (福田・大平密約)
- 四十日抗争 3 (主流派と中間派)
- 四十日抗争 4 (分裂の回避と財界)
- 四十日抗争 5 (東西冷戦との関連)
- 四十日抗争 6 (連立政権構想と組合)
- 党広報委員長 1 (広報委員会の位置づけ)
- 党広報委員長 2 (広報委員会の仕事)

■八〇年総選挙

■韓国との関係

■日独議連会長として

■三木派党員数の増減

■自民党刷新連盟

■大平内閣不信任案の可決

第18回 鈴木内閣時代Ⅰ (一九八〇～八二) ……………

383

◆質問項目

- 対北朝鮮交渉について (一九八九年頃)
- 鈴木善幸内閣の成立 1 (後継総理)
- 鈴木善幸内閣の成立 2 (組閣)
- 文教制度調査会長 1 (調査会と部会)
- 文教制度調査会長 2 (高等教育の充実)
- 文教制度調査会長 3 (地域特性の活用)
- 文教制度調査会長 4 (戦後教育の見直し)
- 文教制度調査会長 5 (週休二日制と初任者教育)
- 資料の保存について
- 憲法調査会

第19回 鈴木内閣時代Ⅱ (一九八二～八三) ……………

407

◆質問項目

- 現在の政局から 1 (自由党と民主党)
- 鈴木・レーガン会談と「日米同盟」
- 現在の政局から 2 (イージス艦派遣)
- 自民党、中選挙区事情
- 非核三原則についての議論
- 第二次臨調の始まり
- 参議院への比例代表制導入

- 党国民運動本部長1 (位置づけ)
- 党国民運動本部長2 (仕事)
- 党国民運動本部長3 (副本部長)
- 党国民運動本部長4 (派閥と人脈)
- 党国民運動本部長5 (労働組合対策)
- ワインバーガー米国防長官の来日
- フォークランド紛争
- ロッキード事件の判決1 (判決と反響)
- ロッキード事件の判決2 (灰色高官)

海部俊樹オーラルヒストリー 下巻《目次》

第20回

中曽根内閣成立（一九八二～八三）……………11

◆質問項目

- 現在の政局から1（保守新党）
- 現在の政局から2（保守合同の可能性と解散風）
- 日中教科書問題1（中国訪問）
- 日中教科書問題2（教科書問題）
- 鈴木後継総裁戦1（河本氏の立候補）
- 鈴木後継総裁戦2（総裁戦の様相）
- 中曽根内閣の成立1（海部氏と中曽根氏の関係）
- 中曽根内閣の成立2（中選挙区事情）
- 中川一郎の自殺
- 中曽根内閣の成立3（首相訪韓）
- 中曽根内閣の成立4（不沈空母発言）
- 初の比例代表制・参議院選挙（一九八三年六月）

11

第21回

中曽根内閣時代Ⅱ（一九八三～八四）……………39

◆質問項目

- 現在の政局から（イラク戦争）
- ロッキード事件、田中実刑判決
- 北朝鮮との関係
- 新自由クラブとの連立1（新自由クラブの位置づけ）
- 政治倫理協議会
- 野党との関わり1（石橋・社会党）
- 野党との関わり2（民社党）
- 中曽根・教育臨調
- 韓国・全斗煥大統領の来日
- 二階堂擁立劇
- 筆頭副幹事長1（金丸幹事長と「筆頭」）

39

第22回

中曽根内閣時代Ⅲ（一九八四～八五）……………67

◆質問項目

- 現在の政局から（イラク戦争）
- 筆頭副幹事長3（副幹事長の選任）
- 筆頭副幹事長4（副幹事長の役割）
- 筆頭副幹事長5（金丸幹事長）
- 新自由クラブとの連立2（山口労相入閣）
- 金丸氏と黒川総評議長の会談
- 創政会の旗揚げ1（竹下氏の心の準備）
- 創政会の旗揚げ2（田中氏倒れる）
- 民社党の世代交代
- 定数は正問題
- 金丸氏と北朝鮮
- 中曽根政治1（国鉄民営化問題）
- 中曽根政治2（防衛費一%突破と靖国参拝）
- 中曽根政治3（総理と幹事長）
- 三光汽船の倒産と河本派1（三光汽船の倒産）
- 三光汽船の倒産と河本派2（河本氏と中曽根氏）
- 文部大臣1（就任の経緯）
- 世界政治フォーラム

67

第23回

中曽根内閣時代Ⅳ（一九八五～八六）……………99

◆質問項目

- 文部大臣2（入試改革1）
- 文部大臣3（入試改革2）
- 文部大臣4（いじめ事件）

99

第24回

竹下・宇野内閣時代（一九八六～八九）……………

◆質問項目

- 現在の政局から（自民党総裁前哨戦と解散総選挙）
- 売上税法案の廃案
- 竹下内閣の成立1（中曽根後継、安竹宮の争い）
- 竹下内閣の成立2（中曽根から竹下へ）
- 労働運動の統一、「連合」の結成
- 消費税の導入1（竹下内閣の課題）
- リクルート事件1（事件の経緯）
- リクルート事件2（藤波孝生氏の動き）
- 消費税の導入2（税制改革特別委員会）
- 消費税の導入3（三％の税率）
- 三木派の帰趨1（三木元首相の死去）
- 三木派の帰趨2（河野金昇氏のことなど）
- 三木派の帰趨3（河本敏夫と河本派）
- 昭和から平成へ
- 宇野内閣1（竹下内閣の総辞職と宇野内閣の成立）
- 宇野内閣2（宇野総裁選出の経緯）
- 宇野内閣3（参議院選挙）
- 宇野内閣4（組閣と幻の官房長官）

125

第25回

海部内閣Ⅰ（一九八九）……………

◆質問項目

- 現在の政局から1（二〇〇三年総選挙）
- 現在の政局から2（保守新党の自民党への合流）
- 現在の政局から3（中から見た自民党）
- 現在の政局から4（小泉内閣の現状）
- 総裁戦への経緯1（橋本・河野・海部会談）
- 総裁戦への経緯2（三木派河本と家族の反応）
- 総裁戦への経緯3（派閥の力学）
- 総裁戦への経緯4（海部・林・石原の総裁戦）
- 海部内閣組閣1（官房長官）
- 海部内閣組閣2（女性入閣）
- 海部内閣組閣3（党三役人事）
- 海部内閣組閣4（官房長官辞任、各派閥の動き）
- 海部内閣組閣5（各省次官、官房副長官、秘書官）
- 訪米1（ブッシュ大統領とのテータ・テート）
- 訪米2（全体会議）
- 海部内閣Ⅱ（一九八九～九〇）……………
- ◆質問項目
- 現在の政局から（自衛隊イラク派遣）
- 訪米3（日米構造協議）
- 訪米4（カイフ？フー？の払拭）
- 訪米5（メキシコ、カナダ訪問）
- 日米構造協議1（大店法関連）
- 日米構造協議2（独禁法の強化）
- PLOアラファト議長来日
- 参院補選勝利と総裁再選、政治改革
- 二十一世紀に向けて目指すべき社会を考える懇談会
- ベルリンの壁崩壊1（冷戦の終焉）
- ベルリンの壁崩壊2（体制の選択）

157

第26回

海部内閣Ⅱ（一九八九～九〇）……………

◆質問項目

- 現在の政局から（自衛隊イラク派遣）
- 訪米3（日米構造協議）
- 訪米4（カイフ？フー？の払拭）
- 訪米5（メキシコ、カナダ訪問）
- 日米構造協議1（大店法関連）
- 日米構造協議2（独禁法の強化）
- PLOアラファト議長来日
- 参院補選勝利と総裁再選、政治改革
- 二十一世紀に向けて目指すべき社会を考える懇談会
- ベルリンの壁崩壊1（冷戦の終焉）
- ベルリンの壁崩壊2（体制の選択）

189

第27回

海部内閣Ⅲ（一九九〇）

◆質問項目

- 九〇年総選挙1（年内解散か翌年解散か）
- 九〇年総選挙2（党首公開討論）
- 九〇年総選挙3（選挙戦、応援演説）
- 九〇年総選挙4（選挙期間中の総理職、花押）
- 第二次海部内閣発足1（西岡武夫と加藤六月）
- 第二次海部内閣発足2（竹下氏と金丸氏）
- 第二次海部内閣発足3（官房長官・坂本三十次）
- 第二次海部内閣発足4（国会との関係）
- 日米構造協議1（日米首脳会談）
- 日米構造協議2（コメ問題など）
- 日米構造協議3（国内での反発）
- 政治改革1（小選挙区比例代表並立制）
- 政治改革2（小選挙区の区割）

221

第28回

海部内閣Ⅳ（一九九〇）

◆質問項目

- 南西アジア諸国歴訪1（外交課題として）
- 南西アジア諸国歴訪2（大国インド）
- 南西アジア諸国歴訪3（インドの印象）
- 南西アジア諸国歴訪4（バングラデシュ）
- 南西アジア諸国歴訪5（スリランカ）
- 南西アジア諸国歴訪6（インドネシア）
- 盧泰愚・韓国大統領の来日1（盧泰愚大統領）
- 盧泰愚・韓国大統領の来日2（天皇のお言葉問題）
- カンボジア和平東京会議1（タイ首相チャチャイ）

249

第29回

海部内閣Ⅴ・湾岸戦争1（一九九〇～九一）

◆質問項目

- 現在の政局から（国民年金未納問題）
- 湾岸戦争1（イラクのクウェート侵攻）
- 湾岸戦争2（経済制裁の決定）
- 湾岸戦争3（陛下への内奏）
- 湾岸戦争4（貢献策第一弾・十億ドル拠出）
- 湾岸戦争5（在留邦人の保護）
- 湾岸戦争6（貢献策第二弾・物資輸送）
- 湾岸戦争7（アメリカの要請）
- 湾岸戦争8（党内情勢と人的貢献問題）
- 愛知参院補選（一九九〇年十一月）など
- 湾岸戦争9（国連平和協力法案1―意図）
- 湾岸戦争10（国連平和協力法案2―起案）
- 湾岸戦争11（国連平和協力法案3―廃案）

275

第30回

海部内閣Ⅵ・湾岸戦争2（一九九〇～九一）

◆質問項目

- 子供のための世界サミット（ニューヨーク）
- 湾岸戦争12（ブッシュ大統領との会談）
- 湾岸戦争13（中東歴訪）
- 対北朝鮮交渉1（仲介者）
- 対北朝鮮交渉2（正式国名）
- 対北朝鮮交渉3（韓国の対応など）
- 湾岸戦争14（戦端）
- 湾岸戦争15（開戦と支持表明）
- 湾岸戦争16（危機対策本部の設置）

303

第31回

海部内閣Ⅶ（一九九一）

.....

329

- 湾岸戦争17（被災民移送）
- 湾岸戦争18（九十億ドル追加支援）
- 日米構造協議（九一年四月訪米）
- 湾岸戦争19（掃海艇派遣）

◆質問項目

- 現在の政局から（二〇〇四年参院選）
- 「即位の礼」と式典外交
- 訪韓・盧泰愚大統領との会談
- 東京都知事選（鈴木 vs 磯村）
- 小沢一郎幹事長の辞任
- ゴルバチョフ大統領訪日1（末次一郎氏の役割）
- ゴルバチョフ大統領訪日2（共同声明と北方四島）
- ASEAN歴訪1（マレーシア、シンガポール）
- ASEAN歴訪2（ブルネイ）
- ASEAN歴訪3（フィリピン）
- 中曽根康弘の自民党復党
- 安倍晋太郎の死と安倍派の帰趨
- 国連軍縮京都会議
- 雲仙・普賢岳の火砕流災害
- ロンドン・サミット
- 日本・EC首脳会談

第32回

海部内閣Ⅷ（一九九一）

.....

361

◆質問項目

- 中国・モンゴル訪問
- ソ連邦解体の始まり
- 政治改革の周辺1（政治改革法案の閣議決定）
- 政治改革の周辺2（宮澤派、YKKの動き）
- 政治改革の周辺3（政治改革法案の廃案）
- 政治改革の周辺4（損失補填、佐川急便事件）

第33回

宮沢内閣Ⅰ五五年体制の崩壊（一九九一～九四）

385

- 首相の情報源
- 海部内閣の最後1（「重大な決意」発言）
- 海部内閣の最後2（竹下派の動向）
- 海部内閣の最後3（続投せず）

◆質問項目

- 内閣総辞職以後
- 自民党分裂への序曲1（宮沢内閣の成立）
- 自民党分裂への序曲2（竹下派分裂、羽田派結成）
- 環境問題への取り組み1（地球環境行動会議）
- 環境問題への取り組み2（公害対策の回顧）
- 環境問題への取り組み3（地球規模の環境問題）
- 五五年体制の崩壊1（宮沢内閣不信任案可決）
- 五五年体制の崩壊2（新生党と新党さきがけ）
- 五五年体制の崩壊3（細川内閣の成立）
- 五五年体制の崩壊4（自民党内の動き）
- 五五年体制の崩壊5（羽田内閣の成立）
- 自民党離党と首班指名選挙1（引き金）
- 自民党離党と首班指名選挙2（擁立）
- 自民党離党と首班指名選挙3（決断）

第34回

新進党（一九九四～九七）

.....

413

◆質問項目

- 新進党1（結成、党首就任）
- 新進党2（九五年地方選・参院選での躍進）
- 新進党3（明日の内閣）
- 新進党4（九五年党首選、小沢 vs 羽田）
- 新進党5（住専問題に対するピケ戦術）
- 新進党6（九六年総選挙での議席減）
- 新進党7（基本政策に関する全議員会議）
- 新進党8（小沢一郎党首の保路線）

第35回

- 新進党9 (九七年党首選、小沢vs鹿野)
- 新進党10 (解党)
- 現在の政局から「名古屋市長選」
- 新進党11 (新進党の評価)
- ◆現在まで (一九九八～二〇〇四)

439

- ◆質問項目
- 選挙区・支持者・後援会
- 無所属の会
- 小淵内閣時代1 (小淵恵三の思い出1)
- 小淵内閣時代2 (小淵恵三の思い出2)
- 小淵内閣時代3 (小淵内閣について)
- 自由党への合流と自自連立1
- 自由党への合流と自自連立2
- 自自公連立
- 保守党の結成
- 森内閣から小泉内閣へ
- 保守新党
- 自民党への合流
- 自民党の変化
- 過去から未来へ1 (総理のリーダーシップ)
- 過去から未来へ2 (世界の中の日本)
- 過去から未来へ3

あとがき

楠精一郎

468

海部俊樹(かいふ としき) 略歴

年	月	事 項
昭和 6(1931)年	1月	愛知県名古屋市に生まれる
昭和18(1943)年	3月	名古屋市立南久屋小学校卒業
昭和23(1948)年	3月	旧制東海中学卒業
昭和26(1951)年	3月	中央大学専門部法科卒業
	4月	衆議院議員河野金昇氏秘書
昭和29(1954)年	3月	早稲田大学法学部卒業
昭和35(1960)年	11月	衆議院議員に初当選（以後15回連続当選）
	12月	自由民主党党青年局学生部長
昭和40(1960)年	11月	自由民主党党青年局長
昭和41(1966)年	8月	労働政務次官（佐藤内閣）
昭和47(1972)年	12月	衆議院議員運営委員長
昭和49(1974)年	12月	内閣官房副長官（三木内閣）
昭和51(1976)年	9月	自由民主党国会対策委員長
	12月	文部大臣（福田内閣）
昭和54(1979)年	11月	自由民主党広報委員長
昭和55(1980)年	8月	自由民主党文教制度調査会長
昭和56(1981)年	11月	自由民主党国民運動本部長
昭和59(1984)年	11月	自由民主党筆頭副幹事長
昭和60(1985)年	12月	文部大臣（中曽根内閣）
平成元(1989)年	8月	自由民主党総裁（第14代）、内閣総理大臣（第76代）
平成 2(1990)年	11月	第2次海部内閣（第77代）
平成 3(1991)年	11月	内閣総理大臣辞任
平成 6(1994)年	6月	自由民主党離党
	12月	新進党初代党首
平成11(1999)年	1月	自由党最高顧問
平成12(2000)年	4月	保守党最高顧問
平成14(2002)年	12月	保守新党最高顧問
平成15(2003)年	4月	保守新党の自由民主党への合流により、自由民主党に復党

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 1 回

誕生から早大編入まで（1931 ～ 1952）

【2000年12月18日14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■名古屋の写真館に生まれる（一九三一年）

伊藤 先生は昭和六年のお生まれだということですが、私は七年です。

海部 名乗りを上げるときには、だいたいおれの方が先輩だということ、びつくりしたり、そんなことはないでしょうと反論したりするんですがね（笑い）。

伊藤 愛知県でお生まれだということですが、この『海部俊樹・全人像』（豊田行二著・行政問題研究所）を読んでみますと、どこでお生まれになったのか書いていないんですね。

海部 名古屋です。愛知県で生まれたんです。

伊藤 愛知県というのはわかったんですが、名古屋とは書かれていないものですか。

海部 正確に言うと、名古屋市中区七曲町というのかな。

伊藤 もともと名古屋市の中ですか。

海部 そうです。

伊藤 そしてお父様が写真師だったということ、**「中村写真館」**ということですが、なぜ**「中村写真館」**なんですか。

海部 **「中村写真館」**という屋号でやっていたんですが、なぜ海部写真館でないのか、僕もささやかな疑問をもつて聞いたことがあるんですが、その時の答えは、親戚に中村さんという人がおって、結局それが資本金、スポンサーなんだな。

それで、僕の記憶が正しければ、家は代々徳川の藩に仕えておって、明治維新で武家が替わるときに何をやるかということで、名古屋コーチン（かいふだね）と称して開発し始めている。その一派がいたのと、もう一つ写真をやったほうがいいと言う人がおった。やっぱ写真の方を選んだんでしょうね。

伊藤 武士というのは、尾張藩の武士ですね。

海部 尾張藩です。武家政治がなくなるときは、何々組頭をやって

いた。鉄砲組といったかな。だから僕らが育った名古屋の白壁町というところは城のすぐ近くで、主税町とか、長堀町とかがあった。長堀町というのは読んで字の如く黒い長い堀があったり、白壁町は白い壁があったり、主税町というのは〇〇主税というのがおつたりした。おじいさんがそういうことを詳しく知っておって、話してくれたことを覚えております。

伊藤 その写真館は、もともと武家としての屋敷のあったところにあつたんですか。

海部 栄町の交差点から一町ぐらい離れたところにあつて、当時としては、正直に言いますよ、インチキなんだけれど、おじいさんは「これは鉄筋コンクリートの三階建てだ、西洋館スタイルだ」と言つて威張つていたのを覚えてますね。なるほど正面から見ると三階建てです。けれど裏から回ってみると、二階半だな、というところがあつたな。それは三階が写場になつていたからです。写真を撮る場所です。昔の写真屋というのは大変な労働でして、太陽光線の都合がある。三階、要するに二階半の天井はガラス屋根なんです。温室みたいなものです。光の強いときは白いカーテンで遮る。もっと強くなると黒いカーテンで遮る。だから、母親がよくそのカーテンを作らされたり洗濯させられたりしておったのを、僕は子供の頃に、あれが上に掛かるものなんだな、と思つていたことがありましたね。それを含めての三階建てということですよ。

伊藤 当時としてはハイカラな建物ですね。

海部 そうです、ハイカラです。ですから**「中村写真館」**といつて、「屋」じゃないんですね。味噌たまり屋とかではない。そして母親の在所は写真材料商ですから、**「在所」**というでしょう。方言かな。

伊藤 言いますよ。方言じゃないんじゃないですか。

海部 **「お在所」**と、よく言いますな。それは栄町というところの真ん中にあつたんです。昔の一連の交友範囲というか、遊びの範囲というか。

伊藤 ある程度お金があつて、お坊っちゃんまでお育ちになつたとい

うことですね（笑い）。

海部 そう豊かじゃなかったと思うんですがね。

伊藤 べらぼうにお金持ちではないと思いますが。

海部 とにかく、おやじが写真屋ですから、ずいぶん働いておったことは事実です。何物よりも説得力があるのは、お父さんを見てもらん、ということです。

伊藤 よく働いているではないか、ということですね。

海部 「父親は」朝遅いものですから、僕らが起きて騒ぐと、「静かにしておれ」と言われた。そんな思い出がありますね。

■南久屋国民学校時代（一九三七～四三年）

伊藤 小学校はその土地ですね。

海部 はい。小学校は名古屋の南久屋小学校というところですよ。いま栄町の都市改造で計画道路ができましたが、そこに「南久屋小学校跡地」という石碑があります。恥ずかしながら私が書いて、建て、除幕式をやったんです。学校は燃えてなくなっただけで、いまでも同窓会なんかはきちんとやっております、いろいろなのが出て来ますよ。

伊藤 その頃のお友達で、あとまでおつき合いになった方もいらっしやるんですか。

海部 います。

伊藤 それは選挙区だからですか。

海部 選挙区じゃないんです。

伊藤 そうですか！

海部 僕の場合はいろいろ複雑なんです、最初に出た選挙区は、昔の制度で行くと疎開をしておったところですよ。戦争で名古屋の第一回の空襲のときに、私のインチキの三階建ては焼夷弾の直撃を受けて、全部燃えちゃったんです。

田中 それは何年ですか。

海部 だいたい敗色濃厚になってからですね。それでも終戦の一年ぐらい前ですか。昭和十九年の十一月か十二月か、寒いときに空襲を受けたんじゃないかな。それぐらいのことは調べなければね。調べましょう。

伊藤 じゃあ、とっておられた古い写真なんかはなくなっちゃったんですね。

海部 ありません。ほとんどない。僕がいろいろ引つ掻き回してみても、せいぜい小学校の頃のもの少しかるだけです。僕が議員に当選してから、友達や仲間でいろいろ名乗り出てきたのが多くおつて、そこでもらった写真が、ごく一部ですが、あるということです。伊藤 小学校の頃はどんな子供だったかと自分でお思いですか。秀才であるとか。

佐道 『海部俊樹・全人像』には級長、と書いてありますね。

海部 級長とか。あの頃は通知票じゃなくて通信簿といいましたね。通信簿というのをもらうと、みんな判が捺してあるわけです。甲乙丙丁ですね。「乙」が二つか三つあったんじゃないかな。そして、授業ではいろいろ苦労しながら勉強しました。母親が厳しかったから、通信簿を持っていくと、「通信簿が悪いじゃないか」といって叱られたりしましたね。

伊藤 「あひる」「乙」がある、ということですね（笑い）。

海部 覚え方は、小学校のときには国語の時間の前、テストは書き取りでしょう。だから一夜漬けの試験勉強です。ああいうときは、どうやって覚えたかしらと思うけれど、不思議に忘れないのは、「學校」の「學」という時は難しいんですね。あれは「メモヨカんむり子、木を交える」。それをつぶやきながらなぞっていくと「學校」になる。あの頃は漢字も難しい方の漢字でしたから、「からだ」といったら「骨が豊か」だと覚えて「體」だ。そうやって覚えて、だいたい苦労していい点数を取るように努力をしました。

楠 お得意なのは、どういう科目でしたか。

海部 国語です。国語とか、あの頃は作文といったかな、綴り方と

いったかな、とにかくテーマを出されて、この一枚にまとめると言われて、むしろ僕はそちらの方がよかった。Which is better?という、やっぱり国語、作文。数学とか理科というものは、なかなか暗記で覚えにくいですからね。

楠 では「乙」が二つというのは、理科とか算数だったんですか。

伊藤 でも級長になるぐらいだから、クラスでは成績が良かったんですよ。あの頃はだいたい「級長になるのは」成績ですよ。

海部 あの頃はだいたい、学習指導要領の到達度がそう高くない。

伊藤 それで昭和十八年に小学校卒業ですね。小学校といっても、当時は国民学校ですね。

海部 国民学校ですよ。

伊藤 国民学校を卒業なさって、旧制中学ですね。私も旧制中学には二年だけ行ったんですけれど。

海部 だから六・三・三・四じゃないんですよ。

■旧制東海中学に入学（一九四三年）

伊藤 そして旧制中学にお入りになるわけですね。

海部 それは東海中学校という学校でした。

田中 それは疎開先ですか。

海部 いや、名古屋です。

伊藤 これは私立ですか。

海部 私立です。というのは公立は、正直言うと、落っこちた。愛知一中という公立があったんです。そこをみんなで受けたんだけど、いかなる加減か、クラスから十一名受けて、たしか九人合格したと思う。落っこちたのは二人だけだ。その少数派の中に入っていたので、悲しくて辛くて悔しくて——。それは結果の判定だからしやうがないけれど、たいへん辛かったです。発表を見に行かなければよかったのに、見に行ったものだから、友達喜んで「ああ出ていた、出ていた、何番だ」という。それで「俊ちゃん、あんた出

ていたか」というけれど、「いや、俺のは出てないんだ」といって、ポロポロ涙が出てくるわけ。

そうしたら、「悔しかったら、こんなところで泣いてもしょうがないから帰ろう」という。あの時は母親と一緒に見に行ったんですね。あれが人生最初の屈辱でしたな。おかげで、その後選挙に落選しなくなっただけから用心深くなったと思うんだけど、最初は落選で失敗ですよ。その時愛知一中という公立中学校は失敗したけれど、その次に受けた東海中学校というのが宗教の学校で、浄土宗の宗立学校です。

楠 校長先生がお坊さんなんですね。

海部 椎尾弁匡（しいお・べんきょう）さんという人が、われわれの初代の校長で、その後指導してくれた林靈法さんという人が弁論部の部長でした。あとから出て来ますが、この人は京都の知恩院の大法主を最後にやった人だから、坊主としてはかなり偉い方だったんでしょうな。けれども、そんなことは当時は知る由もありません。そうしたらその晩父親に、「なに、おまえは今日めそめそ泣いておつたろう」。スパルタ教育だな、あれは。「そんなことでめそめそ泣くもんじゃない」と怒られた。

伊藤 落ちた上に怒られて——。

海部 そういうときには覚えてるものですね。「悔しかったら、それを追い抜いて見返せばいいんだ。人生というのは百メートル競走じゃないよ」というような話を、おやじが盛んにしたわけです。だから、よしわかった、ということ、落ち武者が集まる浄土宗の東海中学という学校を狙ったわけです。

その頃、一中を落ちると、名古屋のあたりではみんな東海に行っただけです。名前を出すのは気の毒かもしれないが、梅原猛とか、黒川紀章だって、僕らのちよつと上かちよつと下なんだけれど、みんな一中を落っこちて東海に拾ってもらっているわけだ。

伊藤 異才が集まるところなんですね。だけどお入りになったのが昭和十八年ですから、当時は一年ぐらいは授業をやったんですね。

海部 いや、そう授業らしいものは――。本を買ったり、ノートを与えられたりはしたけれど、どうかな。「おまえらは近く工場から動員が来る。軍需工場に行つて働くんだけれど、それはお国のためだ」と言われた。

伊藤 あの時たしか、中学二年生から工場動員なんです。一年のときはいちおう授業があるんですが、勤労奉仕があるんですね。海部 芋掘りです。八事の畑に行つて、芋を作つていたんですよ。だから一年生の時は行く工場もなかったんだ。一年生はたしかそうなんだ、結局は勤労奉仕をやつた。

■三菱発動機への勤労働員

伊藤 それで二年になつて三菱発動機に動員されるんですね。これは通うわけですか。

海部 通つたんです。

伊藤 どれくらいかかるんですか。

海部 一時間半ぐらいかかったんじゃないですか。大曽根の端です。

伊藤 結構大変ですね。朝ちゃんと時間に出るんでしょう。

海部 朝早く起きて――。

伊藤 夜遅くまで、ですね。

海部 はい。それで、勉強はほとんどなしだ。工場で休憩時間に先生が集めてやる授業があるんですが、先生もその頃になると、とぼけちゃつて「今日はいいや、休みにしよう」と言つていたけれども、「君ら是一所懸命働かなければならぬから、いちおう形だけ講義をやる」といつていろいろ教えてくれた。あの頃の勉強というのは、軍需工場、三菱発動機に行きながら、何曜日の何時から何時までは〇〇先生の〇〇といつて授業があるわけですから、授業量は普通の三分の一か四分の一になつていました。やつぱり全部集められて、そこで授業があつた。身には入っていませんな。

伊藤 三菱発動機には、東海中学だけではなくて、他の中学校とか女学校とか、そういうところから集まつているんでしょう。

海部 来ています。

伊藤 そこではどういう作業をするわけですか。工員がやるようなことはできないでしょう。やつぱりやるんですか。

海部 だつて能力がない。しかも中学の一年生や二年生で、まあ生意気盛りですよ。

伊藤 当時としては、自分ではけっこう大きくなつたつもりでいるんですよ。

海部 口だけは一人前だけれど、ロッキングといつて、発動機に針金をくつつけて、ネジが戻らないように穴を通して、クルクルと曲げて、その針金を巻いて止める、そういう作業をするんです。けれども、なかなかそれが検査に合格しないわけだ。それで監督官が来て、やり方が緩いと、「駄目だ」といつて、せっかくやつたのをボチンツと切つて、「やり直し」という。そういうことをやつた。そういうロッキングという小技の難しいことができないのは、あれは懲罰の意味もあつたんだらうね、何がロッキングか、何がなんだかわからない、タガネを持つてきて、それを叩いて、二ミリぐらいの厚さで切つていくんですね。ところが素手でそこを叩くわけでしょう。手元が狂うとこの辺「手」をしょつちゅう叩くわけ。「脇見をしたり注意が散漫だ」といふと「手」をしょつちゅう叩かれる。

「精神一到すればできるはずだ、やつてみる」なんて言われる。

手が痛いから、あまり振り上げないわけですよ。ゴルフと一緒だね。あんまり振り上げたら当たらない。近いところでこうやつて叩いているものだから、はかがいれない。そんなことをやりながら、それでも毎日工場に通つたんですよ。

伊藤 監督をしているのは工場の人ですか。

海部 工場の人と、学校からついてきている教師です。

伊藤 上級生なんかも一緒ですか。

海部 いや、上級生はほかの工場に行きましたね。

伊藤　そうですか。そこに上級生がいたらまた大変だ。

海部　上級生がいたら、上級生にいじめられるとか、しごかれるということになるんだろうけれど。

伊藤　ほかの女学校の生徒なんかとは交流はありませんでしたか。

海部　あの頃はそんな精神の余裕は（笑い）、なかったな。

伊藤　そうですか。それは残念なことをした。

田中　いろいろな中学から来ているということになると、授業はそれぞれ別々にやっていたんですか。

海部　別です。それぞれ別です。

田中　そういう「授業をする」部屋は、特別に工場の中に作ってくれたんですか。

海部　あれはなんというんでしょう、工場の中でも、黒板なんかを置いて、工員に作業工程を教えるとか、そういう部屋があったじゃないですか。そういうところを使っただと思いますね。

■空襲下での生活

伊藤　工場もだんだん爆撃されることになりますね。やっぱり、この工場も駄目になるんですか。

海部　駄目になった。一回爆撃されたんです。

伊藤　爆撃されたときは、いらつしやらなかったわけですか。

海部　そのとき、おつたんです。あの頃は昼の爆撃というのがあった。爆撃というより焼夷弾攻撃ですね。爆弾を落としてどんどんやるよりも、焼夷弾が落ちてくる。だから焼夷弾の音が、同世代で思い出してもらうなら、シウルシウルシウルと聞こえてくる。

「ああ落ちてくるぞ」なんて言って、「防空壕に」入って行けばいい。防空壕の入り口にわれわれは座っているわけ。ああ音がした、もういかんよ、といって、スツと中に潜り込む。それぐらいの余裕はあったんです。

それが夜になると花火のようにバーツとなる。線香花火でしたね。

焼夷弾が落ちてくるときはそのように見えたけれど。僕らの時は昼間の攻撃が多かった。音だけは非常に不気味に覚えていますね。

伊藤　でも焼夷弾だったら、工場ががっちりできていれば、燃えたりはしないでしょう。

海部　ドーン、ドーンと落ちてきて、穴が空いて、やっぱり燃えますよ。そして工場よりも、ある時住んでおる白壁町の方の落ちて、これが燃えちゃった。あの頃はそれを「焼け出され」と言いましたけれどね。

伊藤　そうしたら帰るところがなくなったわけですね。

海部　なくなっちゃった。それで、いろいろ当時のつてをつたって、愛知県中島郡平和村という、名前こそ平和ですが、そこに疎開したわけです。それは、後日ご縁があつて選挙区になるところです。

田中　工場にはそこから通われたわけですか。

海部　一時期はそこから通いました。工場といっても、焼夷弾が落ちてしまうと、天井には穴がブツブツ空いて、下は消火で水をかけて機械が駄目になっています。三菱発動機は大きいんです。電車の駅で二つぐらいありますからね。だから同じ三菱でも別棟の工場に行つて、違う仕事をやつたということですね。

伊藤　そうしたら、通うのは大変だったということはありませんか。

海部　通うのは大変でしたよ、それは。名鉄電車といつても輸送量が限定されおりますし、たくさん行きますし、朝の時間も作業の関係で急に早められたりしますから、通うのは大変でした。

それからあの頃は、まともな靴がない頃ですからね。われわれは剣道部の時は格好よく朴歯の下駄を履いていたんですね。歩くときカラカララツと音がする。その鼻緒の太いのを作らせた。その下駄だものだから、遠いところまで電車に乗って通うのがこれまた一つの苦勞で、なんとか軽い下駄はないかな、と思つたけれど、なかったことを覚えております。

楠　いま剣道部とおっしゃいましたけれど、剣道をやってらつしたんですか。

海部 はい、はじめは剣道部です。

伊藤 はじめ、というのは中学に入ったときですか。

海部 中学に入ったとき。一年生の時はちゃんと部があつて、剣道か柔道か、あるいは銃剣道か、どれかとりなさいといわれて、それで剣道です。

伊藤 道具はあつたんですか。

海部 学校がずっと持っていました。あの饅えた匂いをご存知でしょう。大人の汗が染みついている饅えた匂い。だけどあれが格好いいから身につけてやろうということで、つけてやったりしましたね。そんなのはごくわずかな時間だけれど、一年生の時はありました。

伊藤 動員になったら、もうなしですか。

海部 なしです。工場に行くようになったら、剣道部もくそもない。楠 じゃあその後、剣道はなさっていないんですか。いま警察署

海部 やつていません。ちよつと脱線していいですか。いま警察署の道場で、子供を集めて剣道をやっていますね。それで麹町警察にうちの孫が、いきなり孫の話で悪いけれど、行つておつて、おとこの日曜日に昇級昇段試験があつた。まだ小学校の一年生ですよ。けれども偉そうに剣道をやっているのを見ていましたら、ああ俺も昔はあれをやつたんだな、と思つた。素振り二十回とか、「前進、

左面、小手打ち」なんていうと、前進していつて、「メーン」とやるわけだ。それを警察の人がちゃんと教えている。ああいうことを東京都内の警察全部でやつてらつしやるんだそうだけれど、残念ながら麹町署では、一年生から六年生まで全部で二十五、六人かな。

あれがもつと大きくなると、人間の精神的な抛り所がすっかりしてくると思つて、みんなが行くようにするといふと思うんだが、この頃はそれを強制的に募集もできないし、というような悩みをちらつと言つていましたが、教える方は熱心に教えている。ちよつと脱線しました。

田中 それで何工場に移られたんですか。

海部 二ツ杵（ふたつり）の工場です。

田中 これも三菱の工場ですか。

海部 三菱です。みんな三菱系統です。その三菱系統の工場が、当時は名鉄の津島線といひましたな、私どもの疎開先の平和村から名古屋に出ていく電車です。

伊藤 いまもある電車ですか。

海部 いまもあります。

伊藤 これも発動機の工場なんですか。

海部 発動機の工場です。

■少年航空兵を目指す

伊藤 それで少年航空兵というのは何年から行かれたんですか。

海部 正直に言うくと、少年航空兵というのは、どうせ下「地上」でこんなこと「タガネを叩くこと」をやつていたつて――。

伊藤 僕も同じことを考えていました。

海部 手を叩いて血を流してやつていて、上から変な音がするとサ―ツと防空壕の中に入ると、ドドドドーンと「焼夷弾が」落ちてくる。一回、近所に落ちたときは、やられたやつもおつて、歩いて帰つたこともあつたんです。こんなことなら、できた飛行機に乗つていつてやつた方が格好いいじゃないか。要するに格好いいということの方が、素直な感じだつたと思うな。

伊藤 これは何年生から行くんですか。

海部 二年生。

伊藤 中二を終わったところで行くんですか。

海部 そう。当時はしかし、四月から入隊ではなかつたんです。たしか速成が必要だから、僕らは十月入隊組だつたんですよ。

伊藤 二年生の「十月」、ですか。勤労動員がずいぶん続いたのかと思つたら、それほどではなかつたんですね。

海部 その時はみんなが受けましたね。理由は、僕のように、そういう日常性の中から脱却して、格好いいことをやろうということ

はなしに――。そうかもしれないけれど、親がこうであつたからとか、いろいろあるんです。

伊藤 いろいろあるんですね。

田中 どういうことがあるんですか。

伊藤 やっぱ格好いいというか、一兵卒でやられたら大変だ、というところもあるでしょうし。

海部 どうせこんなところにおつても、いつまでたつても逃げ回つてやられるだけなら、一つ出てやつた方が格好いいじゃないかと。

田中 それはもうほとんど死ぬことですか。

海部 まあ、死ぬことでしょうね。

伊藤 だいたいみんな死ぬと思つていたんですから。

海部 現実の恐怖感がなかったかと言われると、そこまで具体的に自分を置いて、深刻に悩み考えたということはなかったけれど、母親は「行っちゃいかん」と言いましたね。「そんなところに志願しなくても、いままで通りちゃんとおつていけばそのうちに、そのうちに世の中変わるよ」と言うけれど、こっちは「行くんだ。その方がお母さんたちもいいよ。僕が上でちゃんと守つてあげるから」とかなんとか、いろいろ格好いいことを言つたんだらうな。とうとう納得させて、受けて合格しちゃつたんですから。

佐道 飛行機乗りになるんだ、というイメージですか。

海部 はい。陸軍少年飛行兵という学校があつたでしょう。そしてそれは、あの頃特別幹部候補生とか、特別な人とかというのがついていた。入隊は僕の場合は九月だったと思うんですよ。そして正規の三年間の少年飛行兵学校の本科をやつて、それから操縦学校へ行って、ということもちよつとスキップできてね。そして、いろいろいわゆる格好いいことをさかんに宣伝もしていた。

伊藤 「少年航空兵募集」というポスターがありましたね。

田中 一年ぐらいで乗れたんですか。

海部 いや、行く前に終戦ですもの。だから半分ホツとしたような、半分がっかりしたような。ですから終戦の時までずっと続いておれ

ば放り込まれたらうけれど、もう戦争は終わつちやつたんだから。佐道 十九年十月だったら――。

海部 その頃は、一日入隊といつて大津の少年飛行兵学校に集められるんです。そうすると、練習しているところを見せるわけだ。

「海部練習生第三号機登場、科目離着陸、報告終わります」というと、「よし、元気があつてよろしい」なんて、そういう練習をさせながら、志を引っ張つていくように、軍も相当やつていたな。だから僕らはその方が面白いわけだ。工場に行つて、こんなこと「タガネを叩く格好」をやつて、工場の職工さんに怒られているぐらいなら、そっちの方がいい。見学に行つたら、みんなタツタツと走っているし、線が入つた帽子をかぶっている。よし、それではその飛行機に俺が乗ろう、というようなことになるわけだ。

■一九四五年八月十五日

伊藤 それでは終戦の時には、工場にいらつちやつたわけですか。

海部 そうです。工場で聞いたんです。意味不明ですわ。雑音だけわかつて、断片的になんとかかんとか聞こえたけれど、何を話されておつたのか、意味は不明。ところがわかつておつたのは、軍から来ておる配属将校。あれが全部あとで、「ただいまの陛下の畏れ多くもご詔勅は」とか言う。そうするとみんな氣をつけをしなければならぬから、「氣をつけ」なんていわれて、「誠にあれだけれど、今日でもつて、あれは終わる」というようなことを言う。「あれ、戦争済んだの？ さっきの話はそれだったの？」とみんなに聞いたつて、みんなあんまりわかつていないわけだ。ただでさえよくないスピーカーがガーガー言っている。

伊藤 それで終戦になつたら、工場通いは途端にバタツと終わりますか。

海部 その時は、その日の帰りに、「明日からは学校へ来い」と言われた。

伊藤 学校は被災していなかったわけですか。

海部 学校は残っていたんです。鉄筋の学校ですから、残っていたんですよ。そして学校は当時、農場で作った芋とか麦を持ってきたのは、野積みして積んであるわけです。そういうようなことで、学校へもちよいちよい動員させられて行ったことはありますね。収穫をしたり、運んだり、掃除をしたり。ですから学校へ来いといわれても、別にどうということはないけれど、ホッとしたことも事実ですね。やれやれ、これで終わった、もう工場へは行かなくてもいいんだな、と思った。

そして生きるの死ぬの、と言っておった航空兵にもならないことになった。だって、一年先輩では死んだ人はいなかったかもしれないが、二年先輩では、持って行かれると、突っ込んでおるわけですからね。だから剣道部の先輩でも、二年上の木元さんとか伊藤さんとかという人たちが、みんなそれに行ってきたという話をいろいろ聞くわけです。

伊藤 あれは八月十五日ですから、学校で言えば夏休みの真つ最中ですね。九月から、ということですか。

海部 夏休みという概念はその頃なかった。毎日、工場へ行ってあったわけですから、もう工場へ行かなくてもいい、学校へ来いというところで、学校へ行った。そのとき校長がいろいろ訓辞をしたんだな。そして授業というものは、その頃あまり行なわれなくて――。

伊藤 戦争が終わってからですか。

海部 ええ。

伊藤 じゃあ何をしていたんですか。

楠 芋掘りですか。

海部 いや芋掘りに行ったり、麦を片づけたり、いろいろしておったけれど、ようやく元に戻ってきたのは、夏が終わって涼しくなってきたからですね、僕の記憶に間違いなければ。それとあの頃は、精神的混乱の真ん中におったものだから、こちらが真面目に学校に行かなかったのかもしれない。そして、その頃は授業といっても面白

くないから、みんなでさぼる。さぼって、当時は屋上に上がっていつて、いろいろ話をするようなずっこけた子供時代があった。

伊藤 それは中学三年生ですね。

海部 三年生が始まって、日本が駄目になって、学校へ戻れといわれて戻って、勉強はほとんどしていませんもの。

伊藤 旧制中学が新制に切り換わるときは、先生はどうだったんですか。たしか三年か四年ぐらいの時に切り換わるんじゃないですか。海部 切り換わるけれど、僕は旧制の五年生で卒業したいといって早道を志願したんです。それは大学生になれるから。

田中 高校に行かなくていい。

海部 はい。旧制中学でも、僕は卒業するから、新制高校へは行かない。その選択の自由があつたんです。僕の一期後輩の人までは旧制中学の卒業生になれたんです。

伊藤 そうですか。そうすると大学に入るときは、大学はまだ旧制の募集をしていたんですか。

海部 旧制の募集です。旧制で卒業をして、旧制の中央大学専門部法科には受験資格があるというので、受けて、行ったんです。旧制中学五年生から。

伊藤 じゃあ、一応「旧制中学の」四年、五年ぐらいは少しは勉強したんですね。

海部 いや、正直に言うと、あまりしていません。

伊藤 でも一応大学予科に入るわけですから。

海部 勉強は、あまりできる環境でもないし、雰囲気でもないし。伊藤 でもこれ「『海部俊樹・全人像』」を見ると、「スポーツに汗を流す」なんて書いてありますね。

■弁論を始めたきっかけ

佐道 その頃はもう弁論部で活躍をされていたわけですね。

海部 弁論部を作りましてね。

伊藤 それはいつ頃ですか。

海部 それはいきなり部長になったんだから、最高学年でしょうね。五年生になっておったでしょうね。あるいは四年生の終わり頃かもしれない。

伊藤 それは何がきっかけですか。

海部 そのきっかけは、屋上に集まって、授業をさぼって煙草を吸っておったことにある。それが見つかった。だいたずる仲間がい十人ぐらいおったんじゃないですか。そこへ校長が上がって来たんだな。校長は偉かったと思いますよ。

佐道 校長先生みずから上がってきたんですか。

海部 みずから。だから脱線しますが、僕が文部大臣の頃に、「校長が校長室に朝から晩まで座っているから駄目なんだ。暇なときは学校の中をぐるぐる歩いて来い。それからずっこけ生徒が煙草を吸っているところがあったら、そこをちゃんとチェックしてこい。それが学校がきれいに变身するもとだ」という話をしたのは、その時の原体験があるからです。そのとき校長が上がってきたときには、やっぱり大変なことになったと思いましたね。

佐道 それはそうですね。

海部 あっという間にみんな煙草の火は消すしね。

佐道 煙は消えないですけどね。

海部 煙は消えないけれど、知らん顔をしていた。上がって来た校長はわかってるんだろけれど、「君らは暇そうだな、みんな」とかいつて、「そんなに暇だったら、やってくれないか。弁論大会があるから誰か出る」という。

伊藤 そこから始まるんですか。

海部 そこから始まるんです。屋上へ行つてずっこけて煙草を吸っておるものだから。悪いことにその時、空気銃を持ってくるやつもおるんですから。なぜ空気銃を持っていたかというと、学校の裏門の前の道に、当時はまだ馬車というものがあつた。荷馬車を馬が引いて通る。その馬の尻を狙って、バーンと空気銃を撃つわけだ。

当時は包み弾ではなくて丸弾ですから、殺傷力はないわけですね。況んや相手は馬ですから、全部跳ね返されちゃうわけで、痛くも痒くもないでしょう。それを持ってきて撃っていた悪いやつもおつたので、それだけは隠せと言ったんだけれど、「校長先生が」おるものだから、隠すわけにはいかん。そうしたら、「誰か弁論大会に行つてくれるやつはおらんか」という。京都であるという。

田中 先生は中学でも級長とかをやっていたんですか。

海部 級長ではなかったけれど。

伊藤 番長じゃない？

田中 ああ、番長ですか。

海部 それは悪い響きのほうが多いけれど、そうですよ。仕方がないな、それは。それで、そういうときは名乗り出なきゃならん。名乗り出るからこそ、「おまえらに代わってやったじゃないか、偉そうなことを言うな」と幅が利く。そうしたら、そこらがあの先生が宗教家だったんだな、「帰りにちよつと校長室に来いよ」と言われた。怒られるのかな、と思つたらそうじゃない。行ったら、たしかに最初は『ジャン・クリストフ』を引つ張り出して、「これをつっぺん暇なときに読みなさい。どこを読んでもいい、これを読むとなかなか感じるところがあるはずだ。このことに関係なくてもいいから、君らがいまこれをしなきゃならん、こうするんだ、というところがあつたら、弁論大会というのはそういうものを話すところなんだ」という。

それでその本を借りていろいろな読んだんですが、世の中にこんなかわいそうな人がおるのかな、と思うような受け止め方しかできなかったんです。恋をすればふられちゃうしね。残り火を掻き立ててなんとかかんとか、という非常に寂しい話の本だけれど、とにかくそれを読んだんです。

そうしたらしばらくたって、「あの本が少し難しすぎたら、これもあるよ」といつて、今度はデンマークの話を出してくれた。デンマークが滅びたとき、「デンマークは本当に滅びたのか。たしかに

戦争をやってプロシアには負けた。だから見るものみな灰になったけれど、デンマーク人の心は滅びていないんだ。人間の心さえ残っておれば、この国は必ず蘇る」ということを、グルンドウィツヒといったかな、牧師が馬に乗って辻説教をやった。いまの街頭演説の走りみたいなものだ。そしてデンマークを蘇らせるわけです。そんなこともいろいろ勉強したんです。結局、そういうときに非常に新鮮な気持ちで勉強したことが、後になってからも役に立っておるんです。

これまたちよつと脱線になって申し訳ありませんが、EU・ジャパン・フェスティバルという仕組みがありまして、私は日本側の名誉委員長なんです。毎年どこかでフェスティバルをやるんです。EUは、EU参加国の中から一国だけ選んで、当番にするんですね。そうすると、そこにいろいろな出し物を持って行って、みんなに見せるわけです。日本からも何か持っていかなければならん、というので、毎年毎年替わりますが、それぞれの国に行くわけです。

たまたまデンマークでそれをやったときに、私がスピーチで、

「デンマークという国は、もつと胸を張っていいんだ。われわれが中学生の日に、デンマークのグルンドウィツヒという牧師さんが、いかに逞しい精神力でこの国を支えたか、という話を読んだ。戦争に負けたって、そんなことは関係ないんだ。人間の心さえしっかりしていたらいいんだ。そういうことを中学生の日に教わって、自分は全国の中学校弁論大会でデンマークの話をしたんだ」と言ったんです。

そうしたら、会場の聴衆が喜んだな。終わってからみんなが来て「やあ、やあ」という。当時EUの議会に議員として出ていたのがハーダーといったかな、その議員が来て、「いい話を聞かせてくれた、グルンドウィツヒの話は、われわれにも非常に影響力のある話だけれど——そこから先が寂しいんだな——、このごろそのことを語る人がいなくなっただんだ。日本のあなたにあれだけ言ってもらって、俺は我が意を得て嬉しかった」といって胸を張るんだな。デン

マーク出身の欧州議会の議員です。そんなことがあって、やっぱりいろいろなことを若き日にやっておくといふことなんだな、ということになるわけです。

■弁論大会で優勝

伊藤 その弁論大会は、どこの弁論大会なんですか。
海部 最初は名古屋です。

伊藤 その時は何を演題になさったんですか。
海部 「文化国家建設とわれらの使命」。

佐道 難しそうなお話ですね。

伊藤 いや、難しそうじゃなくて、その当時一般的な――。

海部 要するに「日本は、軍事国家はいけなかった。近所の人にも迷惑をかけた。再びそれをやったら嫌われるだろう。やるべき道は何か。平和国家か」。あのころ生意気なことを言ったもので、「平和」というのは、ただ弾が飛んでこないということ、斬り合いがないということ、それだけでは私は不満足だ、充分じゃない。その静かな環境の中に、心の豊かさというものをそれぞれみんなが見つけるようなことが文化だ。日本が目指すのは文化国家であるべきだ」というようなことを言ったんですね。

伊藤 名古屋でやったというのは、愛知県の「大会」、ということなんですか。それとも中部圏ということですか。

海部 はじめは愛知県です。

伊藤 あれは選抜していくわけでしょう。

海部 選抜していくわけです。そのうちに愛知県だけでは、ということになって、新聞社なんか色が気を出して後援する。新聞社が後援すると全国になるわけです。全国に支局があるから、そうやってきたんですね。はじめは、愛知県の県下中学生優勝雄弁大会といたしました。ちよつと時代がかつているな。優勝、一等、二等だから、優勝なんですか。

伊藤 それで優勝されたんですか。

海部 はい。

佐道 初めて出られた大会ですか。

海部 初めて出た会で、その林先生の指導が良かったから優勝したんです。

佐道 それまでに、人前で話をするという機会はありましたか。

海部 あまりありません。そんなチャンスはないじゃない。人前に立つて、私は将来政治家になりたいと思います、なんて言ったら、あれは馬鹿じゃないか、ちよつと診察を受けてこいと言われるような雰囲気でしょう。それはないですよ。だからあの時校長がそういうチャンスを与えてくれたことが、私の人生を大きく左右したんでしょうね。

伊藤 それはすごいですね。

佐道 初めて出て優勝というのは、本当に才能ですね。

海部 だから話は飛ぶが、その人が京都の知恩院の大法主をやっているときも、後輩の東海中学の学生たちはみんなそこに行くわけです。泊まり込みで錬成、精神教育を受けに行く。国会議員に当選してから、私はその会場にちよつと顔を出したことがあります。林靈法さんが去年お隠れになったときに、地元の新聞がいろいろなことを覚えていて、「海部先生とは特別な関係がおりのはずです」と言ってきたものだから、「ああ、大ありだ、そういうことがあったよ」と言った。昔その新聞がそういうことを書いたことがあった。そうしたら、元首相が告別式に参加すると書かれちゃったものだから、みんなから問い合わせがあった。これは言った以上そこに行かないやいかん。あれは何か忙しいさなかだったな、欠席届を出して、こういうわけで行きますといつて、議会の手続きをした。それで行ったけれど、行ってよかったと思います。私の方向を決めてくれた師でしたからね。それがずいぶん長生きして、去年死んだんです。

伊藤 じゃあ相当な歳ですね。

海部 相当な歳ですよ。

楠 弁論部には黒川紀章さんがいたんですね。

海部 黒川紀章、あれは二、三年後輩のはずだな。後輩だというと、みんな、向こうの方がひねっているじゃないか、と言って笑うけれど、それは頭も向こうの方が上だけれど、僕の方が単純にいうと先輩だったんです。

佐道 黒川さんというのはどんな弁論をされるんですか。

海部 人の悪口になるから言いませんけれど――。

伊藤 それでわかりました（笑い）。

海部 個性豊かな弁論をしましたよ。脱線するようだが、今でもそうでしょう。森喜朗というと、早稲田大学雄弁会だと必ず言われるでしょう。小淵恵三、藤波孝生までは、俺の写真を探していると出てくるんだ。カップを持っていて写真にも出てくる。けれど森喜朗が写っている写真ってないんだよ。調べてみると、雄弁会には入っておったけれど、大会に出たという実績、経験がないんだ。むしろラグビー部だったということが有名になっているけれど、ラグビー部を洗ってみたら、ラグビー部の選手にもスターティングメンバーにも入っていないんだな（笑い）。これは取り消しておきましょう。

■弁論の心得と練習法

伊藤 その中学の時にも全国大会にお出になったんですか。

海部 はい。京都の立命館大学主催の全国中学校弁論大会というのがあったんです。

伊藤 それは大学が主催しているんですか。

海部 そうです。その時立命館のことも勉強してなるほど思ったが、新島襄先生が、私学が最初にできる頃に、早稲田や慶應と同じように立命館をつくったんですね。それで「将来この国を支えるために、国家的に必要な数だとか種類は国立大学がやればよろしい、それは官吏養成所だ。けれども、この国はそういう頭だけいい官吏

だけでできるものではない。それぞれ建学の精神とか、建学の理想があるものである。したがってわが校は」といって、それぞれ建学の理想があつたわけです。その新島襄さんがつくった学校が初めて、全国の中学校の弁論大会をやってくれたんです。それまでは、全国の中学校の大会というのはなかったはずですよ。もしあつたとしても、当時は中学校の生徒が府県を超えてしゃべりに行くということはない、あまり好ましいことではない、とされた。検閲が下りなかつたんでしような。

田中 戦後的な現象ですね。この時にも「文化国家の建設とわれらが使命」ということでお話になつたわけですか。

海部 はい。その頃はもうそれ一筋ですからね。思い込んだら命がけ、だから。だって、場所が変わつたからまた軍国国家に戻れとか、もういつペンやろうとか、なぜ負けたか反省しようということにはならんから。文化国家建設といつて、日本は文化国家になるんだ、その前の平和国家というのは平和だけではいけない、弾が飛んでこないだけではいけない、心が豊かでなければいかんと言つた。それは『ジャン・クリストフ』の話とか、グルンドウィツヒの、人間というのは心の中で自分自身で生きるんだとか、宗教の学校だから、そういう話は事欠かないわけです。

自浄正常心なんていうことも林校長が教えてくれた。思つた通りスツと話すことが一番いいことなんだ。ああだろう、こうだろうといろいろなことをみんな思うから、話が間違つてくるんだ。格好いいことを言うな、ということになる。それよりも思つた通り、サツと言う。思つた通りサツと言つて、それが間違つていない、恥ずかしくないんだというところに到達するがためには、悔しかつたら勉強しなさいよ、とオチはそこにくるわけだね。だから本を読んで勉強したり、自分で書いてある。本に書いてあつた通りに演説をやるのは間違いだ。最低だ。自分で自分のものにして、何回も書き直して、自分の言葉にする。自分のものにしてから話さなければ説得力が出てこない、迫力が出てこない、というのが、林霊法さんの教

えだったな。

伊藤 優勝すると優勝杯をくれるんですか。

海部 優勝杯をくれるんですが――。

伊藤 これがそうなんですか「『全人像』の口絵を示す」。

海部 それは早稲田の時にもらった大学の優勝杯ですから、それは別ですね。中学校の時は盾が多かつたですね。物が無い頃だから。

伊藤 それは個人にくれるんですか。

海部 個人にくれました。だから学校へ持つていきました。持つていくと校長は、校長室にガガツと並べるから。

田中 ガガツと並べるといふことは、いくつかそういう大会に出られたということですか。

海部 だいが出ましたね。ほかに出る人がいなくなつちやつたものだから。けれども、僕のあとでも優勝するやつが出て来ました。類は友を呼ぶというのかな、みんな頑張つた。だからその頃、僕に刺激されて弁論部に入つて、いま米屋のおやじになつて名古屋で成功しているやつがいるんですね。米常の安田君といつて、これなんかが続いて優勝した。

黒川紀章なんかも大会には出たでしょうけれど、弁論大会で優勝したということは――、あるのかもしれない。われわれのあとでね。

それよりも何よりも、そちらの方ではなく、設計屋の方で有名になつた。梅原先輩も、弁論部を作つたんだとおっしゃるけれども、あの頃はなかつたはずなんだな（一同笑い）。

けれどそういう話というのは、神話・伝説と一緒に、生まれてくるとみんなに支持されるんだ。だから僕らもそれには全く反対しない。今日のでもあるんですよ。例えば竹下登さんが早稲田大学雄弁会の第一号だという。竹下さんの頃に早稲田大学雄弁会というのはまだなかつたんだよ。戦争中で、雄弁会は生意気言うから。ところが、どうしたんだといういろいろ聞いてみたら、「もしあつたとしたら、当然わては入っているわな」という。そうするとみんなが、あの頃若くして当選した人が早稲田の雄弁会の先輩におるんだと言えば、

金の卵ですからね。そういうことにしちゃって、いまやマスコミの方でも定着しちゃったんですよ。だから森内閣ができたときに、早稲田大学雄弁会卒業の総理大臣はこれで四人目だと書いてあるんだ。竹下登から書いてある。ここまで定着すれば、神話・伝説ではなくなる(笑い)。定着した話で、世論が支持しているんだから。

楠 話術なども勉強したんですか。

海部 したんだよ。

楠 弁論部というのは独特の抑揚をつけたりますね。ああいうのはやっぱり勉強したんですか。

海部 僕はああいうことは嫌いだから、そういう指導は僕は後輩には絶対にしませんけれど、早稲田の雄弁会では、一年生が入つてくると、みんな大隈庭園にある小さな木の前にずっと立たせて、一人ひとりいろいろ言わせるわけです。例えば雄弁会の会旨というのがありますね。「わが早稲田大学雄弁会は、経国済民の志を有する情熱と実践力の溢れる学生の集まりであつて、大隈老公の建学の精神である——この辺で手をあげる——学の自由と独立を死守し」なんていう会旨があるんです。それを教えて、「やれ！」といつて反復させるわけですね。

その時に、ただ言うだけではいかんから、そこから先がスパルタになるわけです。小さい石を拾つて、「洗えば汚くない」と言つて洗つて、口の中に入れる。石を口の中に入れると発音しにくいですよ。その石を口の中に入れても、発音して聞き取れるようにやれ、ということ、で、「わが早稲田大学雄弁会は「石を口に入れたようなしゃべり方で」と言つてやる。

伊藤 飴を口に入れてしゃべるようで、よだれが出そうだな。

海部 それをきちんとやっておくと、ここの「口の周りの」筋肉が発達しますから、石を抜いてやると非常にメリハリが利くんですね。語尾がはつきりしてくる。「ああ」とか「ええ」ということを言わなくても済むようになる。それがレッスン・ワン、第一課です。

田中 それは中学の時からやっていたんですか。

海部 中学の時は、そんなことを指導してくれる先輩はいないから、それは大学に入ってからです。中央大学の辞達学会というところに入ったときから、細々とやっていたんです。

田中 ちよつと戻るようなんですが、「中学時代の」弁論部の指導には、林校長と松濤基道先生と書かれています。松濤先生というのはどういう感じの方ですか。

海部 松濤基道先生というのは、名前のように、それも坊主だ。お寺の住職で、あだ名は「ロッパ」といって、音楽の先生が本職だったんです。だから、直接弁論部の先生ではなかったけれど、いまだいう副担任のような格好だったのかな。

田中 特に松濤先生からは、テーマ的なことを教えてもらったんですか。こういう話をしろとか、あるいは話し方とか。どういう点ですか。

海部 松濤先生というのは弁論部の副担任みたいなものですから、この人に教えを請いに行ったりはしなかったですね。林先生が全部やつてくれましたね。あの当時、予算も窮屈だった頃だろうけれど、校長のポケットマネーを出して、頑張つて来いよ、といつて。

伊藤 弁論大会に出かけるときですか。

海部 出かけるとき。京都まで行つて、当時の中学生が一泊してくるんですから。ああいうことは、人徳の思い出ですね。

■中央大学専門部に入学（一九四八年）

伊藤 さっきのお話では、中学を五年で卒業なさったということでしたが、それは何か先のことを考えてのことだったんですか。

海部 何か格好いい答えを用意すればいいんだけど、正直に言うとなんかよくなくて、そんなに中長期のことは考えていない。中学生から早く大学生になりたい。そういう制度があるんだから。しかも俺はその端境期だ。これを五年生で卒業しておけば旧制大学の専門部に入れる。旧制大学の専門部は角帽が被れる、これも格好いいわ

けだ。それならば、そちらに行こうと。

伊藤 進学することについては、お宅はどうなんですか。

海部 おやじ、おふくろに話をした。あの頃は、写真館というのは生業として成り立たなくなっておったんです、戦後厳しい世の中で伊藤 なかなか記念写真を撮ったりする人は少なくなつたということですか。

海部 はい。それからいわゆるお見合い写真なんていうものも、あまりはやらなくなつた。だからおやじに言わせれば、「自分の思うとおり、好きなことをやれよ。その代わり弱音を吐くな、それで帰つてきても責任を持たんぞ、頑張つてやつて来い」ということで、私は中央大学専門部に入った。

伊藤 なんで中大で法学部なんですか。

海部 中央大学の法学部をなぜ選んだかという、あの頃は文化国家建設なんて偉そうに言っていたが、法と秩序がなければ文化も育ちませんし、法と秩序が必要だと思つておつたものですから。自由の裏には責任も伴う規律もあるんだ、だから法と秩序で行くならば、法は国家社会の秩序を維持し形成し、これを実現するためのものがある。だからいけないものをいけないといつて排除するためには、やはり法律が要るんだということで、法学を学ばなければならんと思つた。

幸いにも、私の身边にそういうことの相談役がおりました。おやじの弟が、当時東京の地方裁判所か高等裁判所の裁判官で、学校に入ったときには泊まるころがないものだから、叔父さんのところ——はじめ田無というところにあつたんですが——に泊まつて、そこから学校に通つていました。彼は裁判官であつたので、出勤が当時は一日おきでした。一日おきに家で判決の下書きをやっているわけだ。そして、「悩みは尽きんな」なんて言いながら、一所懸命判決を書いているわけだ。どういふことかと聴いたら、いろいろ裁判の話もしてくれましたね。

伊藤 専門部というのは要するに旧制高校ですね。

海部 旧制高校です。

伊藤 専門部の学生というのはだいたい旧制高校と同じで、専門のことは少ないわけでしょう。

海部 いやいや、旧制の大学予科というのが、昔の旧制ナンバースクール。専門部というのは、それはウイズアウトして、一般の教養とか語学はどうでもいい。法学部の専門部は、法律の単位をきちんととる。ですから、いまの概念でいったらわかりにくいんじゃないかな。

楠 専門部は、そこを卒業して終わりということになるわけですね。予科とは違つて。

海部 そうですよ。専門部を卒業したら終わりです。

田中 それで大学卒業になるんですか。

海部 ああ、そうですね。

楠 予科と専門部とは違うんですね。

海部 予科は、予科から学部に行くわけですね。専門部は専門部で終わります。

伊藤 専門部から学部に行くということではないんですか。

海部 専門部から学部に行くというのは、僕のように珍しいタイプだけでしょ。しかも、よその学校の学部に行った、なんていうのは珍しいでしょう。

伊藤 そうですか、専門部はそれで終わりなんですか。知らなかつた。

田中 四年制ですか。

海部 三年です。予科というのは昔は二年じゃなかったですか。

伊藤 いや、三年でしょう。

海部 予科は三年でしたかな。

楠 それで大学三年ですから。予科というのが旧制高校ですね。私立は予科といたんですね。

伊藤 専門部というのは別なんですね。じゃあそれは完全に法律を叩き込まれるわけですか。

海部 そうですよ。だから中央大学の専門部の法科のときが、海部俊樹の人生でいちばん真面目に勉強した時期であった。まったく新しい世界に入って、次から次へと新しいものが出て来て、珍しく本当に充実した感慨で勉強したと思う。それが終わってから、進路の選択を誤って早稲田大学の法学部に入ったときには、まったく同じことをまた教えられた。そんなことなら、もっと違うことを勉強すれば良かったなと思っても、もう遅い。

伊藤 じゃあ、早稲田に入ったのは、法学部に入ったんじゃないくて、弁論部に入ったわけですね（笑い）。

海部 だから変な話だが、早稲田では教室へ行かなくなつて、試験だけは、勉強は中央大学で一所懸命やつておいたから、できるんだ。同じ相続法、同じ刑法だから、勉強し直す必要はないんです。そんなことを言うのと失礼だが、心おきなく全国遊説をやつた（笑い）。

田中 法科はいろいろあるけれど、専門部では先生は何がお得意だったんですか。

海部 やつぱり刑法です。世の中のここに正義に反するものがあつたら、ここはこうだとかいうようなことをどんどん押ししていく。

伊藤 専門部の時も弁論部ですか。

海部 そうです。

伊藤 これは心おきなくは、できないでしょう。

海部 あの時は勉強しなければならんから。いちばん勉強したんですから。といつても、放つておくわけにはいかんから。これが専門部のときだ「『全人像』の写真を指す」。

楠 じゃあ二年ですか、専門部は。

海部 いや、三年ですよ。これは二年の修了式の時に、内閣総理大臣杯も取つて、全国制覇したから努力賞というのをくれたんです。

楠 先ほど先生がおっしゃつていたことと、この『全人像』とちよつと違うことが書いてあるんです。お父様は、先生が中大の法科に進むときに大変びっくりして、考え直してくれないかと翻意を促したと書いてありますが。

海部 それはちよつと事実には反するな。これは豊田行二君とかいう作家が書いた本だよ。あの時は、おやじは自分が自信喪失していたから、商売のために下手なことを言うより、「国がこういうことになつちやつたんだから、そちらで思うようにしろ。その代わり自分で責任を持てよ。弱音を吐いて、あの時はああだった、こうだったとか言うな」といった。その時おやじがホツとしたのは、これでもう写真屋をやめてもいいようになるかもしれんな、と思つたんですよ。

■六人の兄弟姉妹の中での「突然変異」

田中 ちよつと失礼ですが、先生のご兄弟というのはどういう感じでしょう。これ「『全人像』」には出ていなかったんですが。

海部 出ていません。男が三人と女が三人いる兄弟姉妹の中で、私は男の中の一番上で、女の中には姉が一人おりました。だから上から二番目です。

田中 では女・男と来て――。

海部 女・男・女・女・男・男ですね。

伊藤 当時としては普通ですね。

海部 ごく普通ですね。六人兄弟ですから、当時、育つ頃は、物がない頃だから、家庭は苦労したでしょう。写真屋というのは、それまでは儲かつておつたらうけれど、その頃はだんだん斜陽産業になつてきていますからね。そして、よく僕が例に引く話ですけれども、世の中には自分の思うとおりにならないことがあるんだということを実感として体験するのは、兄弟姉妹の中の関係です。母親は夏になるとおやつを買いに行く。子供の頭数だけ覚えておつて、スイカをムキで買ってくる。それで出して、さあ取つて食べろと言う。スイカの切り方はいろいろあるから、大きい小さいがすぐわかるわけだ。一番大きいのを取る自信はあつたけれど、取れて私は取らなかつた。なぜかという、母親が「二番目のを取れ」と僕に言う。歳

の順に食べるという。だから、海部家では歳が絶対的な基準であつたんだな。男性社会で長男が一番大きいのを食べてもいいという基準ではなかったんだ。

田中 戦前からですか。

海部 いや、それは知らない。われわれを育てるときにそうだったんだから。それで僕は大きいのを取る自信があつた。お母さん、けちだな、どうせスイカを買うときは丸ごと一つ買ってきて、ドンと置くものだ。そして腹一杯食べさせるものだ。今に見ておれ、俺が大きくなったら丸ごと買ってきて、腹一杯食べて、余ったらそれはぶっつけてあげるから、そのつもりでおれと思つたけれど、そこで抑える。それを言うとな怒られるから。そんなことを言つたら、そこそこまた物差しでピターンと叩かれるのが関の山ですからね。よく物差しで叩かれたのを覚えています。だから思つただけで口にはしなかった。そのとき、それでも収めておつた大変な説得力は、いつも子供の数だけ買ってきたということだね。母親は自分も食べたかつたろうけれど、自分の分は買わなかつたということだ。子供の分だけ買ってきて食べさせているから、それが大変な説得力だったと、僕はいまでもそう思つております。

選挙が始まつて地方遊説に行つて、時間の調整を間違えると、そんな話をしている。いまや腹一杯食べられるような時節が来たからいいけれど、と言つてね。

伊藤 いろいろな話をたくさん持つていないと、間（ま）が持たないことがあるんですね。

海部 間が持たない。

田中 ついでによろしいですか。いまのお姉さまと、二人の妹様と男の方は、どういふ職業でいらつしやいますか。

海部 歳の順でいくと、一番上の姉は女学校を卒業して、当時の小学校の教師になりました、ずっと子供の教育をしておつて、ご縁があつて、トヨタ自動車の系統の入谷幸平さんという、戦争中にトヨタのジープを製造した人のところに嫁いだ。幸か不幸か子種に恵ま

れなかつたんです。けれども今でも足腰、もちろん口も健全だから、しゃべりゃばと物を言つて、それが健康の秘訣かもしれんけれど、僕の選挙事務所まで出張してきて、ああたうだと采配して頑張つている。しかも教師であつたということで、たまたまその間の勤務地が私が疎開しておつた平和村。その学校にも勤務しておるから、教え子というのは選挙になると強いんだな。どこで幸いするかわからない。それが一つ。

その下の妹は、平凡な結婚をして薬局に嫁いで、薬局のおかみをやっています。三番目の妹もそうだな。四日市に行つて、山田薬局というところにいる。薬局だ。二人とも女の姉妹は薬局だ。薬局のおかみになって、ドンとしていますな。

男は、すぐ下の弟が尚樹（なおき）といいまして、これは就職するときは、大蔵省で大蔵事務官になって、配属が愛知県になって、東海財務局というところにはしばらくおりました。けれども、私が志をもつて立候補すると決めたときには、「おまえさん、いつまでもそんなところにおつても駄目だ」と言つて、決心して、東海財務局を退職して、海部俊樹政治事務所の一員となつて、選挙が始まつたときには私の秘書になって、その後今までもずっと続いて秘書をやつていてくれます。

最後の弟は幸也（ゆきや）という名前です。これは名古屋大学を卒業して、すぐ鉄の会社に入りました。岡谷鋼機というんです。これがまた就職の時に相談に来たので、僕は、「名古屋だから中電とか、名鉄とか、昔から五摂家といつて五つの大きな大企業があるから、そこに入つたらいい」と言つたら、もうあんな頃から時代が変わつたんだな。調べ上げてきて、「兄さん、あなたの言うところは、それはたしかに立派で一生大丈夫だけれど、そこは大きすぎて、俺が頑張つたつて重役になれるかどうかからんよ」という。「じゃあどこに行きたいんだ」と言つたら、「もうちよつとこぢんまりした、人の能力を見出してくれるところ。せめて、おるうちに重役ぐらいにはなつて責任のある仕事ができるようなところへ行つたほう

がいいと思うが、どこか知っているか」という。結局は最後に岡谷鋼機という鉄の会社があつて、そこへ入りました。

田中 それは先生のご紹介ですか。

海部 はい。僕の紹介と言うより、むしろ岡谷鋼機の店主が僕の父親やおじいさんと非常に懇意な人で、白壁町の近くに住んでおった人なんだ。「僕の」おじいさんは、岡谷惣助という岡谷株式会社を創設した人と明治の末期頃からのいろいろな往き来があつて、写真は海部さんのところに行つて写せという家であつたので、「幸也君は海部さんのところの孫か、じゃあうちに来て働きなさい」ということで、行つた。重宝されて、アメリカ勤務が長くなつて、シカゴの支店長をやつたり、ニューヨークの支店長をやつたりした。今はまだ定年前ですから、帰つてきて、東京の本社で常務取締役という名前かな、それをやっております。それが幸也という下の弟です。

田中 政治家は先生だけですね。

海部 そう。突然変異ですから。そしてもつと変わったことをいえば、天体望遠鏡の「すばる」を知っているでしょう、ハワイにできた。あれを作つたときの予算をとつていちばん熱心に働いたのは、これを言つたら具合が悪いかもしれないけれど、海部宣男という男で、天文台の台長になりました。このあいだオーブニング・セレモニーに僕が行つたら、フォーリー大使やアメリカの議員もみんな来ておつた。これは立派だ、ハップルスよりも解像力が非常にいい望遠鏡を作つて、よく開発してやつておる。海部宣男というのがわが一族に一人おるんですね。突然変異です。

もう一人変わったのがおつて、これは叔母の子供だから小林誠というんですが、これは学士院のあれをもらつて、なんというか、僕はそちらの方は弱いからいかんけれど、中間子理論の研究で「小林・益川理論」というのがある。それがもしかすると、何かもらえるぞといつも言われている。「これは海部先生のおんなご親戚ですね」というから、「そうだけれど、突然変異だよ」と言っている。

■海部姓と海部郡

伊藤 そもそも海部という姓は、あまりほかにはないんじゃないですか。そうでもないんですか。

海部 あまりポピュラーな名前じゃないですね。けれどまったくないかというところ、いるんです。いっぺんびつくりしたのは、例の海部八郎というのがおつたらう。そうしたら、人の好い元警視總監の田中栄一という人がちやうどここに来て、「海部先生、ご心配でしようけれど、何かございましたら、私の方でいっぺん、できるだけ環境整備はさせていただきます」というから、「なんだろうな、何の話ですか」といったら、「海部八郎様というのは、先生のご関係の、お兄さまではないと思いますが——」というから、「ああ、あれか、あれは全然赤の他人です。無関係という関係だから」と言つたんですけれどね。

田中 海部という名前は名古屋に多いというわけではないんですか。

海部 名古屋にもあるんです。それから淡路島にもあるんです。

楠 愛知県に海部（あま）郡がありますね。「海部」と書きますが、その地名と何か関係があるんですか。

海部 よく聞かれるんですけど、徳川が廃藩したときに、みんなに禄を与えたんですね。その時に、うちもなにがしかの物をもらったわけだ。それまでもらつていたから。

ところが、海部郡がなぜ「あま」と読むかというと、海に生活が属している人はみんな海がつくわけですね。山に属している人は「山部」とか、物に属している人は「物部」とか、服に属している人は「織部」とか「服部」とか。そういう意味だから、君のところは海に属しているという。「かいふ」というのは珍しいので、「うみべ」とか「あま」という呼び方がある。だから四国に行くと、三木武夫の選挙区には海部（かいふ）郡というのがありますね。和歌山県も海部（かいふ）郡というのがあります。海部（あま）郡と

読むのは愛知県だけです。

だからはじめの頃の選挙はそれを逆手にとって、「徳島にご親戚がある方、ちよっと手をあげてみてよ。聞いてみてちよっだい、徳島に「海部」と書いて「かいふ」と読む郡があるんだよ。和歌山にもある。ところが愛知県、私の住んでいるところも「海部（あま）郡」という」と言ったら、みんなワーツと笑うんだな。「笑った人はどうか同情してください。あれが海部（かいふ）郡だったら、僕の票はそれだけ増えた（笑い）」と、逆手にとって演説をやった。

伊藤 そうですか。なんでも利用するんですね。

海部 何でもそういうふうを利用しては街頭演説をやっていくと、みんなの記憶に残るわけだ。

楠 先生の有名なスローガンで、「財布を落としても、海部を落とすな」というのがありましたね（笑い）。

海部 あれは井出一太郎。井出さんが応援に来てくれたな。

楠 先生が作られたんじゃないんですか。

海部 自分で言いません（笑い）。それは言わないけれど、井出さんが、「財布は落としても、海部は落とすなよ」と言った。だから四国とか和歌山に行くと、ちよっと取っつきにくいな、会場を少しもみほぐさなければならんなどと思ったら、いきなり、「さすがに徳島の方はみんな頭のいい人が多い。見渡すとみんな非常に賢そうなお顔をしてくる」という。みんなぼやとしてるんだな。

「それは、私の名前は」というとだいたいわかってくるんだ。「私の地元では海部（あま）郡と読みます。兵庫かどこかは、海部（あまべ）郡という読み方をされるところもある。それは、毎日新聞の出した『日本の苗字』という本に詳しいんです。ところが徳島に来たら、みんな私のことを、さっきも司会の先生が、海部（かいふ）先生、海部（かいふ）先生と正しく正確に発音してください」というと、みんなワーツと喜ぶわけです。「どうしてだろう、徳島には海部（かいふ）郡というのがあるんです。さすがに徳島の方は頭もいいし、素直だし、ものを正しく受け止められる」というと、

また喜ぶわけだな。「だからよろしくお願いします」という（笑い）。どこででも使える。

■中央大学「辞達学会」

伊藤 中央大学の専門部に入られるときは、それで終わりにするおつもりで入られたわけですか。これは入試は非常に倍率が高かったんでしょか。

海部 あの頃は、今ほど高くないんじゃないですか。俺が受かったんだから。

田中 勉強されたんですね。

佐道 中央大学の弁論部というのは、どのぐらいの規模ですか。

伊藤 弁論部は、大学と専門部で一緒なんですか。

海部 はい一緒です。「辞達学会」といいました。

伊藤 「辞達」というのはどういう意味ですか。

海部 「辞達」というのは、言葉が達するをもって――。

田中 中国の古典からとったんですか。

海部 そうです。なんといったかな、創設者がそう命名したんです。最高裁判事をされた有名な弁護士の花井忠さんが決めたんですね。

伊藤 ちよっとほかにはないですね。だいたい弁論部「という名前をつけているところが多い」ですね。

海部 弁論部とか雄弁会というけれど、言葉達すればそれでいいんだ、大言壮語、美辞麗句は必要ない、人の心を打つような言葉だけが必要なんだ、といったのが、中央大学の辞達学会でしたな。

田中 このメンバーで、いま有名な方はいらつしやいますか。

海部 当時、同じ頃におった人で、あまり政治家になったというのはいないけれど、強いて思い出せば、自民党の系統では中山正暉、あれは中央大学で辞達学会ですよ。それから前に民社党におった塚本三郎、あれはたしか名古屋で僕の一年先輩じゃないかな。

田中 大学が一年先輩ということですか。

海部 そう。中学は別々です。

佐道 では、大学時代には塚本さんとか親しく話をされたりとかしたんですか。

海部 親しく話もしたし、花井杯争奪弁論大会なんていうのが学内である、だいたい悪いけれど、塚本さんたちにはお隠れになってもらって、俺がもらってくるということになっていた。

田中 その頃のテーマは、どんなテーマになっていたんですか。

伊藤 だんだん変わってくるでしょう。

海部 あの頃は、初めのうちは大学法案の問題についてよく議論した。当時むしろ、われわれは弁論大会でテーマを決められて、一方的に話すのではあまり面白くないじゃないかというので、大学・高専同士の討論会を開いて、テーマを決めてやったのが楽しかったですね。

伊藤 じゃあディベートみたいな形になるわけですね。

海部 はい。

田中 大学法案なんていうと、政治に関わっていくようなテーマですね。

海部 当時、大学の学生自治会というのは、意識的に共産党細胞から執行委員が出て来る。そこで編み出した戦略戦術は、定員が定数に足りたという議決をしたら、それから延々と専門用語の難しいことを言っていると、真面目な奴はだんだん帰っていくわけだ。そこで、決めた通りの方に誘導できるようにする。だから全然関係がない、なにやらの学生生活協同組合のあれが高すぎるから安くしろとか、何か、いかにも親孝行ストライキを計画しているような言い方をする。そうでしょう、生活必需品を安くすれば、それだけ親の仕送りが少なくとも済むという奇妙きつな理屈を作って、これが親孝行なんだ、親孝行ストライキに参加しよう、とかなんとかいって、みんな集めるけれど、最後は学校に対して、これはいかん、これはいかんという初めの結論に持っていく。だいたい夜が深々と更けてからそういうことが決まっていたんですけれど、そんなこと

をよくやられたし、やったりしたんだな。

伊藤 やった方ですか。

海部 いや、やられた方です。

田中 全学連のクラス委員を務めていたということですね。

海部 それは全学連のクラス委員という制度があったんですけれど、正式には学生委員といていた。

田中 それは具体的にはどういう仕事なんですか。

海部 選ばれて、学生委員会に行くと、時間がかかるような、愚にもつかない話をいつまでもやったり。僕がいつぱい捕まったのは、あのテーマは何だったかな。

伊藤 公安条例でしょう。

海部 公安条例とか大学法案ができた頃の話で、東宝撮影所の争議があつたときに、有名ななんとかという女優が、「ごらんさい、ここに戦車が来ていないだけで、ここに戦車を持ってきたら戦争になる、戦争映画の通りだ」というようなアジ演説をやっていたというのも記憶に残っておる。そんな頃ですよ。

伊藤 じゃあ、応援に行つたということですか。

海部 いや、応援という大それたことではなくて、面白半分の野次馬だな。見に行つた。

楠 GHQに一週間引つ張られたというのはどういうことですか。

海部 それは東京都庁、いまとは位置が違いますよ、公安条例反対といつて騒ぐでしょう。

伊藤 大騒ぎになったでしょう。

海部 先頭に立って、「公安条例反対！」といつて、辞達学会はシユプレヒコールのリード役をやるでしょう。

伊藤 辞達学会がやるわけですか。

海部 声が大きいもの。

田中 でも普通、弁論部というと右翼といいますが、どちらかというと右の方の感じですね。違うんですか。

海部 右も左もないんだよ、あの頃は。左のやつとは徹底的にそこ

ではやっておったけれど、全体からいうと、強いて言えば左寄りのことを言いながら、右翼ではない。右翼のやつとはまたそこで一線を画していた。だからあの頃、これは伏せておいた方がいいかもしれないが、右翼の学生で今もおるやつで、僕のところにあの頃文句を言ってきたのは、その後自民党の議員になった高橋辰夫とか、渡部昇一とかね。「なんだ、おまえら」といつていたら、「あの頃元気が良かったな、お互いに」とか言う。政務次官になった頃だよ。私が官房副長官の時に、みんな政務次官だから。政務次官会議の主宰者だから、そういう思ひ出話をしたこともありますけどね。競馬監督官にあとからなつて、農林省の役人になった、昔のことを覚えていて。それから林野庁に行ったら、林野庁の労働組合の執行委員長かなにかの山田というのが、当時学生の頃はこちらにいた。だから左の連中からも恨まれたり、右の連中からも恨まれたり、両方に八つ当たりしておったんだな。それが学生の道だというようなことを言いながら（笑い）。

■政治との出会い

佐道 ちょうど朝鮮戦争が起こったときですけど、先生ご自身は朝鮮戦争が起こったということについて、どういう印象を持たれましたか。

海部 さあ、正確に覚えていないけれど、「一衣帯水」という言葉があるように、寄つていけば見えるようなところで始まったというでしょう。これは、さあ大変なことになったという緊張感は覚えただけれど、あの頃はまだ個別的自衛権だとか集団的自衛権なんていうことは議論にもなっていなかったんですよ。

佐道 日本に影響がありそうだとか、日本に危険が及びそうだとか、そういう意識というのは、それほどでもなかったですか。

海部 あの頃は、最初は警察予備隊といったかな、警察予備隊がでるきつかけになったんじゃないですか。警察予備隊に、できたら

参加してくれんか、というから、学生がそんな警察予備隊もくそもないだろう、と言っておったことを覚えていますね。一般の人にはそういう誘いがあつたみたいだな。思い出しました。

伊藤 たしかに雰囲気としては警察予備隊ができたり、いわゆる「逆コース」といわれるような雰囲気は多少はあつたことは間違いないんですが、僕らも、釜山の近くまで北朝鮮軍が攻めてきたときには、これはそうとう危ないな、とは思っていましたけれどね。

海部 追いつめられるんじゃないかという非常に危機的な状況があつて――。

伊藤 ダンケルクになると言われましたね。

海部 そうそう、その頃、韓国の国会議員が日本に実情説明に来て、僕は当時、自民党の学生部長で――。

伊藤、楠 えっ？

海部 いや、自民党じゃない。

伊藤 自由党ですか。

楠 朝鮮戦争の頃ですか。

海部 昭和二十五年頃でしょう。だから学校が終わって――。

田中 先生は昭和二十六年、専門部を卒業、となつてますね。

海部 だから学生部だ。

伊藤 もう政治に関わっておられたんですか。

海部 あの頃、韓国の青年代表が来て、そこで朝鮮戦争の話をしたときに、あそこは絶対追い出されんだ、ということをおさかに言っていたな。

伊藤 自由党の学生部というのは、どういう関わりなんですか。

海部 改進黨という政党がその前にあつて、改進黨の学生部。

伊藤 改進黨だ。自由党じゃない。あとあと三木派になるんだから。

海部 そう、三木さんの組だったから。改進黨は芦田均さんの流れを受けておったから、再軍備賛成の方だった。

伊藤 直接の関係者は誰なんですか。

海部 三木さんですよ。

伊藤 その頃から三木さんですか。

海部 はい、そうですよ。

伊藤 三木さんとはどういう出会いなんですか。

海部 三木さんとの出会いは、河野金昇という政治家だ。その人が愛知県の私の選挙区となった尾張地区を地盤として、三木さんの所属する政党的の国民協同党から当選しておった。その人が、愛知県の弁論大会があると、加藤鏖五郎さんとか赤松勇さんとか（いまの赤松広隆のおやじですね）、そういう人たちと一緒に審査員の一人だった。僕は弁士の一人だった。その関係で、審査員と弁士の出場者が終わってから飯の会なんかで会って、だんだん親しくなっていた。それがご縁で、学生になったときに転がり込むところがないので、とりあえず最初に河野金昇代議士の家に、体のいい居候をさせてもらったということです。

佐道 書生という感じがですね。

海部 書生ということです。

伊藤 東京での学生生活は、書生でやっておられたんですか。

海部 一時、ですね。

楠 その河野金昇さんに、GHQからもらい下げをしてもらったと書いてありますが。

伊藤 じゃあ、MPに捕まったんですか。

海部 あの頃は、捕まえにいったのはMPじゃなかったですか。警察じゃないですもの。

伊藤 警察も捕まえていますけれど、公安条例の事件の時には、たしかMPが出てきているんですね。

海部 どっちに指揮権があるとか、どっちが指導権があるとかいうことは定かではないけれど、MPも警察も両方おったんじゃないかな。

佐道 昭和二十七年四月までは占領が続いているわけですからね。

伊藤 そうですよ。公安条例は三月頃でしょう。

海部 なにしろ公安条例で騒いだときだ。それでもなければ、われ

われが出て行ってやることもない。悪いことに東京都庁の看板が外れたでしょう。あれを外してワーワー言っているときに、そこにおったものだから、教唆煽動しておったので、ちよつと引つ張られて叱られて、すいません、ということだ。

伊藤 どこに引つ張られたんですか。

海部 どこだったろうな。警察の奥の大部屋みたいところですよ。それで、これはいかんといってすぐ外に出してもらったんですね。出るために先生に電話して、明日仕事があるから、誰々と約束してあるから、国会における約束があるから、という理由で出られたんだな。

田中 ということは、その頃もう河野金昇先生の秘書をやつてらしたということですか。

海部 はい。

伊藤 じゃあ、専門部にいらつしやる頃、一所懸命勉強しながら、弁論部もやりながら、学生委員もやりながら、けっこう忙しいですね。

海部 そういうときの方が、勉強つてできるんじゃないかな、と思いますよ。というのは他にやるべきことが何もなかった。

伊藤 あまりお酒を飲んだり、ということはないな。

海部 幸か不幸か、お酒には弱いんです。受けつけません。だから、これも脱線するが、『エリゼー宮の食卓』という本を毎日新聞の外信部長が書いて、あれにいろいろ詳しく出てくる。誰の時はどういうワインでもてなされた、海部さんはこのワインとこのワイン、あのときは時期も良かったから、なんて書かれる。破格の待遇を受けたんだけど、本人はその破格の待遇を受けても、あまり強くないんです。飲めないわけです。

だからTBSテレビで、SMA Pの連中でソムリエになる話がありましたでしょう。あの時二度ほど僕は頼まれて出て行って、稲垣なんかとかというのの相手をして、このワインは何かといったときに、「一九四五のシャトー・ラトゥールだ」と言ったら、「先生、そ

ういう難しいワインはありませんから」といわれて、笑っちゃったんだけれどね。だいぶそういうところで機会はあったんだけど、残念ながら飲めません。

楠 煙草はお吸いになりませんか。

海部 やめました。

楠 中学の時に？

海部 はい。

佐道 校長先生に見つかってから。

海部 いや、それほど素直じゃなかったから、そのあともちよいちよいち嗜むというよりも、面白半分ですね。煙草を持っていると幅が利きましたからね。あの頃は煙草とは言わないんだな、「エンタ」というんだな。隠語で「エンタ」という言葉がわかる人は、顔が利くわけだ。

伊藤 それは知りませんでしたよ。

海部 そうですか。じゃあ、煙草は――。

伊藤 煙草は吸わなかったですよ、大学に入るまでは。

海部 「私は」大学に入ってからはずっかりやめました。いたずら半分にやっていたようなものですから。ちようどいまのブッシュと同じだな。

■早稲田大学法学部に編入（一九五二年）

田中 先生、「二十六年に海部俊樹は専門部を卒業して法学部に進んだ」と『『全人像』』には書いてありますが、これは専門部を一応卒業して、改めて法学部に入ったんですか。

海部 そうですよ、専門部は卒業しちゃわないと。それで法学部は、手続きは途中からの編入なんです。それは豊田行二君は何と書いたか知らんけれど、中央大学の法学部へ入ったというよりも、俺はどうせ行くなら早稲田に行こう、調べたら早稲田も三年生編入試験がありそうだ、ということになったんですね。

田中 中央大学法学部には行っていないんですか。

海部 行っていないです。

伊藤 何か、これを見るとそう読めるんだけど。

海部 それはさっきの話のようなもので、どこか違っているところがあるわけですね。専門部はたしかに卒業です。

伊藤 それで早稲田の法学部に――。

海部 専門部を卒業すると、学校は新制学部三年生に自動的に登録するわけです。そうすると、授業料の請求書が出せるから。

田中 三年生になったので、あわてて早稲田を受験したということですか。

海部 そうしたら、どうせ三年生をまたやるならば、同じところで二回やるよりも――。正確にいうと、早稲田の籍に本当に入ったのは二十七年じゃないですか。

伊藤 これは一年生から受験してというのではなくて。

海部 編入学です。

楠 専門部というのはいまの短大と同じですね。短大から、四大の三年生に移ったんですね。

田中 いままでの学士入学とは違うんですね。

海部 学士入学とは違います。

楠 学士入学は四年制を卒業してからですからね。

海部 とにかく、どこかに入って籍を置いて、身分を確保してないと、もう帰って来いやと家で言われる。そろそろそんな頃になって、勧める人もあるから、また中村写真館を再開しようかというような山気も父親にはあったでしょうし、家で修養したミクニチロウさんという人が成功してやっているから、おれもやってやれないことはないな、とおやじは思ったかもしれない。だから「おまえは学校をいつ終わるのか、いま本当に入っているのか」と言うので、本当に入っていることにならないと駄目になるので、それでどこかにきちんと身分を確保するというのが、東京で勉強生活を続ける理由であつたわけですね。

伊藤 では学歴としては切れていないわけですね。

海部 切れていないわけです。そして大学院まで足を突っ込んでしまったのは、そういうことなんです(笑い)。

伊藤 すると専門部から、今度は早稲田大学の法学部の三年生になるわけですね。

海部 そう、三年生に入った。当時はそういう過渡期ですから、各大学ごとに必要な制度がいろいろあったんですね。

伊藤 早稲田は新制大学ですね。

海部 新制大学です。

伊藤 早稲田も一、二年は教養課程なのかな。

海部 ですから、三年生しか採ってくれなかったんです。

伊藤 三年からは専門課程ですね。そうすると、さっきおっしゃったように、同じことをまたやるということになるわけだ。

海部 調べてみたら、みんな済んだ科目ばかりだった。

伊藤 その時は、金昇先生の秘書、それから改進黨の学生部の委員。そして学生、それから今度は弁論部、雄弁会ですね。

海部 早稲田に行ってから雄弁会です。

伊藤 そういう生活だったんですね。

■河野金昇議員の学生秘書として

佐道 この本によりますと、先生が早稲田に入ったあとに、河野金昇代議士が、「どうだ、俺のところではやらないか」ということになったというのですが。

海部 早稲田に替わった瞬間にそういうことになったんですよ。

田中 年表によりますと、二十六年三月に中央大学を卒業されていて、四月に衆議院議員河野金昇の秘書になり、早稲田には二十七年四月に入学されている。この間はどういう状態だったんですか。

伊藤 やっぱ間が空いているんじゃないですか。

海部 ですから、中央大学のあれに入学して、月謝を払えと言われ

たときは続いていたんだけど、早稲田の試験というのは編入の制度があることを知って、それじゃあ受けましようというてやるために、そこに隙間があるわけです。

伊藤 じゃあ、専任的な秘書になっていた時期が一年ぐらいあるんじゃないですか。

田中 そうじゃないかと思うのは、特別国家公務員の肩書きがつくというんですから、学生をやっている国家公務員をやっているのかと思うたんですね。

海部 いや、あの頃はできたのかも知らんけれど、今日ほどカチカチに固まっていなかったから。しかし学歴詐称とか、地位詐称とか、身分詐称という問題は全くなかったな。当時、申請を出したら、全部通るわけでしょう。

田中 公務員だから、これは給料をもらっていたんですね。

海部 もらっていたでしょう。

田中 早稲田に入られてからもずっと給料をもらっていたんですか。

海部 もらっていました。

伊藤 それは、私立大学はいんだよ。国立大学はうるさいけれど。海部 あれはなんというんだろう、みんなそれぞれアルバイトの人でも、学生アルバイトをやっている、企業から認められて「正社員になれや」と言われる。学校をまだ卒業しておらんけれど、途中から身分を切り替えて給料をもらっているやつがおったわけですから、それは別に禁止事項じゃなかったと思いますけどね。

伊藤 秘書というのは、どういう仕事をやっておられたんですか。

議員さんだから、当然議員会館なんですね。

海部 そうです。議員会館におるべきなんだ。だから僕も議員会館にいました。

田中 どこにあつたんですか。

伊藤 いまと同じ場所でしょう。

田中 いまのあそこと同じですか、国会の裏側の。

海部 はい。

伊藤 あそこに木造であつたんですね。

海部 昔は木造の病院のような感じでしたね。いまはきれいになっていけるけれど。いまでも僕は議員会館に部屋をもらっていますけれど、あそこは一般の人がよく来る銀座通りみたいなところだから、門札を見て、開いていると、ちよつと寄つていこうかな、と入ってくる人がいっぱいあるので、そういうのをいちいち断つておるのもいから。

伊藤 あれはエレベータを下りたすぐのあたりにあつたら駄目ですね。

海部 駄目。そういうことですよ。

伊藤 じゃあそこに詰めていたわけですか。

海部 だいたいそこに朝行つた。そこにおると、面会の申し込みが来るから、次々呼んでは待つてゐる。それから役所と関係のある話。これはいま思うんだな、口利き幹旋罪が出て来たらう。あればかりやつていたわけだね。郷里の町長だの村長だのが出てきて、この橋が架かる順番を早めてくれとか、ここの鉄道の「駅間の」距離が広すぎるから、二・五キロ空いているから、ここに一つぐらい駅があつた方が住民のためになるとか、いろいろ言うでしょう。そういうのを連れて役所まで行くわけです。そうすると、秘書でもついていて話を直接してやるのと、外から来た人だけが行くのでは扱いが違ふし、その方が心強いから、一緒に行つてくれと言われる。ずいぶんそれをやっていましたね。いわゆる幹旋業だ。

伊藤 それでお金をもらえば――。

海部 もらえばこれなんだ「両手にお縄、の格好をする」。当時はまだ職務権限を行使するほど地位も高くない。そうでしょう。だからそれは何の抵抗も感じないで、これをしてあげることが地元のためになるんだと思つて、一所懸命してあげましたね。

伊藤 でも、そういうことをやらなければいからのでしよう。

海部 良い悪いは別にして、そういうことをしてあげて、地元の連中はみんな期待しているんだと思いますね。

■あつせん利得罪について

海部 変な話で、ちよつと脱線しますが、どうしても厚生年金だけでは足りないから、厚生年金保険の上積み分をつくつてほしいという。組合の加入者が自分たちで掛け金を出してつくる厚生年金基金という制度がありましたね。あれはたしか昭和四十何年の話ですよ。あれは申請を出したらみんな認めればいいと思つたのに、ああでもない、こうでもないといつて、役所に行くところ窓口にやられるわけだね。それでいきなり行つても、頭ごなしにそれは駄目ですよ、という。どうして駄目なのか言つてみてくれよと言つて、いろいろ話をしながら、やつとつくつてあげた愛知県羊毛紡績組合の厚生年金基金があつたんですよ。それも一時期はよかつた。あれは民法の四〇四条でしたか、金利は五%をめどと書いてあるんです。五%をめどとすると書いてあるのに、いまは――。

伊藤 コンマ以下ですね。

海部 ですから、それはできっこない。そこで解散したい。解散も解散したかつたら、その時なんとかいう名目で積み立てたお金があるはずだから、その分だけ耳を揃えて拠金してくれとかいう。そうすると、いまみんなこういう時期に弱い企業は、とてもそんなものは出せっこない。これ以上、毎月何千万円と損がたまつていく、これだけはやめてもらいたい。そんなことまで頼みに行つて、理解させて説得させて、ゴーサインを取らなければ解散すらいけない状況であつたので、昔を思い出しながら、また――。この頃行くと役所が嫌いますからね。「来てもらつたら仕事の邪魔になるし、御用があつたら呼んでください、そつちまで行きます。その方がいいですから」とかいう。

伊藤 海部先生に來られちゃあね。

海部 言うことを聞かなければならんから。それで放つておくと、ここへ局長以下みんな来て、それじゃあ、あれしてもらいますから、

こうしましようといつて、やめるんだよな。けれどよく考えると、その時も何ももらったらいかんわけよ。あつせん利得罪になるわけだから。こつちはまったく正しいことを天地神明に誓ってやっても、そこでもちろんもらおうという下心はないけれど、そういうことですよ。それは厳しく縛らなければいかんと僕は言っておるんです。

ちよつと脱線で、現にこのあいだ、銀行を救済するのは日本を救うことになるというので五〇兆、それを上積みして六〇兆円、金融機関に出したんです。あれで金融機関はいぶ助かったから、金融不安が起こらなかつたんですね。そうしたら、大きいところだけ助けて小さいところは助けないのか。いま言った愛知羊毛紡績会なんかに入っているところは小さいところで、その枠に入らないわけです。そこで去年、われわれのところ毎週末来ますから、予算の陳情だ何だといつて。役所にこつちから、そればかり言うんです。役所まで行くが目立つから、「中小企業の方もなんとか助けなければいけませんよ。金融危機は大企業だけじゃないんだから」といった。そうしたら、それが二〇兆ついた。それがなんのканの理屈をつけて三〇兆になったわけ。ですから中小企業を救済するための資金は三〇兆出して、現にやっているわけだよ。

やり出したら、まあこれは恥ずかしい身内の話ですな。その制度に便乗するというか、あれをやってくれ、これをやってくれといつて、口利きがいぶん入って来て、そして多額のあれ「あつせん利得」をみんなこれ「自分の懐に入れ」しているわけでしょう。構わんから、そういうのは一罰百戒で縛っちゃえ。やらなきや駄目だ、といったら、ようやくこのあいだ逮捕しましたね。現職の都議会議員も逮捕された。

だから政策というのは、発案者の志に反して、妙な方にグググツと行くことが多い。あつせん利得罪なんていうのは過渡期ですから、厳しくきちんとやらないとならん、とこの頃しみじみ思っている。伊藤 かし下手をすると政治的に利用される危険性もありますね。海部 東京だけで、新聞を見ると四百何十人も口利きをやったんで

しよう。国会議員と都議会議員が。それは呼んで聞いてみた。あの中の一人、名前は勘弁してもらおうけれど、「おまえは駄目じゃないか」と言ったら、「いや先生、みんな言ってこられるんだけれど、選挙の時に頼む頼むといつて世話になった人だから、そういうときに冷たいことを言っていると今度やつてもらえなくなる」という。「今度やつてもらえないからという理由だけだったら、それを言つて、取っちゃいかん。上前をハネたんだらう」というと、「いやハネたんじゃないけれど、どうしてもと言われたら——」ということになって、落とし穴にはまっていくわけですね。だからそこを断たないと、きれいによくなつていかないと思うんです。

伊藤 本当に難しいところですね。つまり、あつせん利得の利得のところ、どこまでが利得なのか、というところですね。

海部 あれも大急ぎでつくりましたからね。身を正すことを国民に知らせなければ選挙にならんからといって。

伊藤 いや、実際問題は大変だと思いますね。どういうふうに運用するか、これは大変ですね。

それでは、次回は早稲田大学の雄弁会のあたりからお話を伺うことにします。どうもありがとうございました。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 2 回

衆議院初当選まで（1952～1960）

【2001年1月29日14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■河野金昇氏について――中野正剛の心酔者

伊藤 前回、中央大学から早稲田に移られたというところぐらいまで、お話を伺いました。ふつうお話を伺っている方で、第一回目で政治までたどり着くことは滅多にないんですが、先生の場合は学生時代から政治と関わられておられますので、第一回目で政治まで行ってしまうって、あらあらと思っております。

さつき私は田川誠一さんのところに伺っておりました。やはりオラルヒストリーをやっております、いまになって冊子をつくるものですから、写真を撮らねばならないということで、写真撮影に立ち会いに行っております。

海部 元気でしたか。

伊藤 お元気ですよ。

海部 心身共に、ですか

伊藤 ええ。今度冊子ができましたら、お持ちいたします。僕が「今日これから海部さんのところへ行くんです」と言ったら、「ああ、あれは議員会館ですぐ近所だったから、よくつき合っていた」と言っておられました。

海部 当選が一緒だもの。そう言わなかった？

伊藤 そうです。その時に河野金昇さんの名前が出てきて、
「自分は松村謙三さんのところで、海部さんは河野金昇さんのところだった」と言っておられました。

海部 当選したのが一緒だったのですからね。彼がその後、社会労働委員長が何かをやったえらい苦労した時、私も社会労働委員会の理事を頼むと言われて、入って行って少し見たことがあるんですね。その頃、浜田幸一という暴れん坊、何ともならんやつがおった。田川誠一はああいうおとなしい紳士だから、普通の話をまともにしていればいいと思うていろいろ口をきくものだから、「浜田幸一に」すこまれちゃってね。すこまれても、どうするか。ああいうの

「浜田」はいい加減な連中でね。ほんとうにいい加減だよ。そして僕のところに来て「今度は田川を刺すから」と言うんだよね。刺すって、まさに暴力団そのものだ。「なぜ刺すんだ」と言ったら、「刺さなきゃ、あの野郎、委員会を始めちゃって採決しちゃうよ」と言うんです。そんなやりとりがありましたね。まあ、脱線はやめておきましょう。

伊藤 それで、この前のお話では、河野金昇さんの秘書のような役割をずつとされたということでしたが、「秘書のような役割」というのは秘書そのものなんですね。

海部 はい。「秘書のような役割」と言ったのは、自分が大学から時々エスケープして行っていたものだから、二足の草鞋ですね。けれども、国家公務員としての登録は正式はされておったし、その縁があつていろいろやりましたからね。

伊藤 その河野さんという代議士は、どういうお方なのかということ、ちよつとだけでもお話しただけませんか。

海部 はい。どのへんから話したらいいものか。ものの考え方としては、いちおう中野正剛に心酔しておったんですね。中野正剛の「東方会」というのがあつたんです。その東方会の、学生部といったか青年部といったか知りませんが、そこに属していました。そのとき河野金昇さんと一緒に中野正剛のところに居候していたというか、中野正剛の学生部で薫陶を受けた青年の中に、のちほど功成つて国会議員になった人を僕は二人知っているんです。それで「その二人が」河野さんのところに遊びに来て、思い出話を実に楽しそうにやっている。

一人が、これは社会党へ行ってしまったけれど、茜ヶ久保重光という早稲田の人です。もう一人は永田正義で、最後は国会議員は落選して、鹿児島県の市長で終わった人です。国会議員に一回だけ当選しているんです。

その永田正義の後継者になって出てきた議員に渡瀬憲明というのがいたけれども、このあいだ落選してしまいました。その縁があつ

て、僕は何回も応援に行つた。

それから一度、大変悪いなと思つたことがある。永田正義さんは河野金昇さんの仲間だということは知つておつたが、あまり昵懇ではなくて、しばらくおつき合いがなかつたんです。そして私が自由民主党の学生部長になつて、選挙となるといろいろ応援に行つていんです。あるとき選挙の応援に行つて、あれ、この人よく知つた人だなと思つたら、永田正義のポスターがあるんです。待てよ、今日俺が応援にきたのは永田正義じゃなかつたはずだと思つて手帳を見たら、そうじゃない。だから困りました。たしか、そのとき一緒に行つていたのが、青年局長の竹下登です。俺も竹下も、その首長候補とはあまり深い関わりがなかつたけれど、とにかく党として頑張らなければ駄目な地域だと言われて、俺と竹下とで応援に行つたんだ。八代というところだ。

伊藤 熊本ですね。

海部 ところが、マイクを持つて「八代（やつしろ）の皆さん」なんて言つたら、「それでは、票にならんばい。『やつちろ』と言つてください」という。「『やつちろ』と読むのかい」と言つたら、「そうだ」と言われた。そんなこともあつて、ここは途上国だなと笑つたこともあつたけれども。

まあ、脱線はやめにして、そこでふつとみたら、永田正義のポスターがあるわけだ。「永田さんは」何回も河野さんのところに来て、一緒に酒を飲みながら飯を喰つて談論風発して帰つた人だから。

伊藤 ああ、僕はその人に会つたことがある。

海部 あります。色が浅黒くて、さつまいもみたいな顔していた。伊藤 ええ。どこかの市長さんですね。

海部 市長ですよ。市長に当選してから面白いんだけど、僕の古い方の事務所に来て、「海部さん、君のあれ「応援」は、僕が事前に頼まなかつたから悪かつたね」というような受け取り方をしてくれるんです（伊藤 よかつたですね）。「事前に頼めば、あんたは僕のところへ来てくれたと思うけれどもねえ」なんていう。そう

いうおとなしいところがあつた。中野正剛の家のくせに。そのことは、帰つてきてみんなで大笑いになりましたけれどね。

もうひとりの茜ヶ久保重光という人は社会党の闘士になつちやつたものだから、委員会でも本会議でも正面からワーワーやり合う仲で、とてもそんな思い出はないけれど。その頃、河野金昇さんという人は、それらの人と集まつては、中野正剛の思い出話をしたり、いろいろなことをしていましたね。ただ、「河野金昇さんが」立候補した頃は愛知県警の警察からは要注意人物にされておつたんじゃないかな。立会演説なんかの時に、わかるわね、刑事が「おると」。

田中 最初は何党から出てきたんですか。

海部 最初は国民協同党といわなかつたかな。

田中 三木さんと同じですか。

海部 三木さんと同じです。三木さんと政治行動を共にしていたんだもの。

田中 東方会と三木さんとは、国民協同党はどういう感じになるんでしょう。

伊藤 三木さんもそちの方かも知れない（笑）。

海部 三木さんは東方会と関係ないんです。中野正剛をそんなによく知らないんです。河野さんは、中野正剛の思想信条というか東方会の考え方に惹かれるものがあつて出入りしておつたんですね。出入りしておつた頃に、永田正義とも茜ヶ久保重光ともつき合つていた。そのほか、佐藤という人がいて、この人は何回立候補しても当選しなくて、全国の清掃業組合の親分になつた人だ。紹介されて、これは将来あれをやるからつき合つてやつてくれと言われたきりであつたけれども。そんな人たちを自分の家と呼んだり、自分が呼ばれて出て行つたというつき合いをずっとしていました。

■河野金昇氏についてⅡ―演説上手

伊藤 河野金昇さんは、専門といいますが、どの分野が強い人だつ

たんですか。

海部 政治家としては、結局、票の関係で繊維産業はやらなければならんね。私がそうであつたように。あの愛知県の尾張というところは、ガチャン、ガチャンと機械の音で育つてくるところですから、それを一所懸命やつておつた。あの頃、河野金昇代議士は、議員立法の走りのようなことをしました。中小企業の促進法のような法律、正確な名前はどこかで探しますけれども、をつくつた時に、法律的には制限列挙ということがありますね。その中に燃糸業、糸を燃る商いは入っていません。それで、これはいけない、燃糸が落ちていく、燃糸をここへ入れるにはどうしたらいいかということで法制局へ行って議論をしたら、ただ単に、通産省の繊維局の役人が書くときに忘れていたにすぎなかったわけです。だけど、自分のほうで忘れていたとは言えない。だから「河野さんが」、こうこうこういう理由で燃糸業も入れてもらうことが、業法が効果を現わして、国民的に経済の復興に役立つんだ、というような理屈をつけてやったことを覚えていますよ。当時は商工委員会と言いましたか、通産産業委員会の前の段階だった。商工省という役所はもうなかったと思うな。通産産業省にはなつていたと思います。が、国会の委員会とは依然として商工省の頃の商工委員会というところ、それをやつておりましたね。

楠 もともと河野さんという方は何をされていた方なんです。新聞記者ですか。

海部 いや、もともと中野正剛の門を叩いて書生になつちやつたんだ。早稲田大学を卒業して、東方会の青年部といったか学生部といったか。

伊藤 もしかしたら羽織袴ですか。

海部 いや、そんなものじゃなくて、もうちよつと近代的な詰襟の洋服ですね。

伊藤 じゃあ、黒シャツ隊の方だ（笑い）。

海部 詰襟の洋服のほうだ。

伊藤 さつき田川さんが、「いやあ、あれはよく弁の立つ人」とおっしゃっていましたけれど――。

海部 河野さんのことですか。ああ、弁が立つ。それは新橋の野外で人を集めて、仮設の演壇の上に立つて、「もうじき吉田茂がこのへんを通つて、アメリカへ物乞い外交に行くだろう。日本は悲しいやつを総理大臣にしたものだ」とかなんとかいう演説をやつて、やんやの拍手喝采だった。いまから思えばアジ演説の一つだな。

伊藤 やはり東方会で鍛えられたかな。

海部 東方会だから、東条の弾圧に負けずに戦わなければならんから。そして「言論には言論で返せ。やられたからやつちやあいかな。力には力をもってやつてはいけないんだ」というようなことですから、やつぱりしゃべる方に力を入れたんでしょね。

だから、初めて立候補した時に街頭演説はうまかつたですよ。ついで歩いてるわれわれが聞いていても、「そうだ、しっかりやれ」という掛け声が自然に出てくるような、そういう演説をやつていたように思う。

伊藤 最初に立候補した時というのは、河野金昇さんが、ですか。

海部 はい。

伊藤 その頃から、もう海部先生は――。

海部 いや、それは聞いていただけ。聴衆の一人ですもの。僕がなつたのは、もうちよつとあとです。

伊藤 もう何回か当選されてからですか。

海部 いやいや、そうではありません。最初の金昇さんの選挙の演説も僕は聞きましたよ。その頃、そこには江崎真澄さんとか、佐藤観樹のおやじの佐藤観次郎とか、そういう連中がおつて、立会演説をやつていたんだから。それから田嶋好文とか、加藤鏖五郎とかもいた。出世頭は加藤鏖五郎だと思うな。衆議院議長に出ますから。

伊藤 鏖々たる名前ですね。

海部 僕はそれらの演説を聞きにいったり、いろいろして覚えしました。赤松勇というのもいたな。いまの広隆のおやじだよ。そうい

う時にはくじで順番を決めていましたね。あの頃は大選挙区ですから、赤松の後でやらされたり、加藤の後でやらされたり、くじ順でやるわけです。いま赤松君がここで演説文を書いていただけたらね。あの人は昔は、気にいらんことがあると煙突へ上がっていつて、煙突の上で赤旗を振って降りてこなかった人だから。そんなことを平気でやっておったんだな。

伊藤　じゃあ、そんなにベテランの代議士というわけではない人のところに、秘書としてお付きになられたわけですね。

海部　はい。もちろんベテランでもなんでもない。ただそこは、将来自分の選挙区になるような地域ですから。

■政治家への志

田中　先生、いまのお話は昭和二十年の選挙のお話ですよ。大選挙区は二十年ですね。先生がお生まれになったのは、一九三一年ですよ。

海部　生まれたのは昭和六年ですよ。

田中　十四歳で、もうすでに政治家になるつもりでいらしたんですか。

海部　十四、五の頃に敗戦のショックを受けているわけです。中学の弁論部というのは、非常にそういう時は燃えておったんです。いまの中学生とちよつと違っていたな。

伊藤　僕もわかります。中学生というのはそういうものだ。

海部　あえて屁理屈をいうと、あの頃われわれの周辺には、ほかに情熱のはけ口が何もなかったんだ。演説でもやって、世の中はみんな間違っておると言つて、「乃公出でずんば」というようなことしかなかった。パチンコ屋もなかったし、ダンスホールもなかった。だから時間つぶし、暇つぶしというのかな。暇つぶしという言い方は悪いが、持て余した時間を持つていくところが、あの頃のわれわれにとっては、弁論部みたいなところだった。そこでいろいろな

社会雑学を耳にしたり、本を読まされたり、しゃべったり、いろいろ変わったことを知っているやつを連れてきて話を聞いたり、というようなことをしていた。

この前ちよつと触れたと思いますが、そういういろいろと鬱積したものを持つておる者たちのところへ来て、弁論大会に出るということにスポットをあててくれたリーダーがいたということかな。そういう校長さんがいた。

楠　前回、ご家庭の環境などを伺いましたけれども、ご家庭の中に先生が政治に進むような要素というのとはなかったんですか。

海部　家庭の中にはなかったと思うな。

楠　あるいは親戚とかも含めて、いかがですか。

海部　よく聞かれるんですが、そういうのはうちの系図の中にはないですね。

伊藤　それは両親ともですか。

海部　あまり強くない侍大将で、ご先祖は四国で滅ぼされて、命からがら船に乗って逃げてきた人でしよう。それが司馬遼太郎の『夏草の賦』という本のモデルに書かれているわけだ。それから、うちの三代、四代前は、何をやっても結局成功しなかった。

伊藤　武士の商法なんですか。

海部　武家政治の終わりだから。ニワトリを飼ってもあまり成功しない、ブタを飼っても成功しない。イギリスへ行つて養豚と養鶏がいいと知りながら、小牧で飼つても成功しなかった。かろうじてニワトリだけが、後世「海部種」といわれるようなものに生き延びてきたということなんでしょうね。

■河野金昇議員の秘書として――後援会づくり

伊藤　じゃあ大学在学中は、ずっと金昇さんの秘書をやっておられたんですか。

海部　正確には覚えていませんけれども、時々遊びに行ったり、こ

ういうところ「議員事務所」に遊びに来たりしていた。あの頃の衆議院の食堂にはあまりおいしいものはなかったんだけど、とにかくあるんだよ。だから友達と一緒に「おう、行こうよ」といって、顔を出しているうちに、先生が「ああいうことがある、こういうことがある」といって、親しくなっていくわけですから。

伊藤 その秘書というのは、選挙の時になると一緒に行って弁舌をするわけですか。

海部 選挙の時になると、ほかの人はどうか知りませんが、僕の場合は大学は全部休んじゃって、選挙事務所へ入り込んで、昼間は街頭演説の前座をやりますね。夜は演説会場へ行って、そこでも前座をやる。そして、いかに政治というものは毎日毎日の生活に関係があるのかということを、秘書の立場で見ておって体験したことを話そうとした。

そんな頃、これは細かく書かれると利益誘導になるかもしれないが、集まった人に、「あんた方の生活が苦しいのは、朝から晩まで織機で布を織って働いたって、いくら来るのかわからんからだ。やがていつの日かは（いまはできているから言う）と恥ずかしい話ですが」最低賃金法でもつくって、一日働いたら、これだけは所得があるんだということを保証しないといけない。それから、つくったものが、外国へ売らなければいけない（いまと主要目的がまるつきり違うんです）。だからものを作って、どんどん輸出して、そして日本の国の全体の富を増やすようにしよう」と言ったりしていた。

あるいは、「高い山へ登ってみると、このごろはそのへんの煙突から煙がいつぱい出ているけれども、これは公害の元だ。どうしてあの煙をきれいにするかを考えなければいかん。昔小学校の頃には、一番情け深いのは仁徳天皇だと習った。小高き丘に登って、『民の竈の煙がない』と言った。そして三年間役務と税を取らない。思い切って三年間取らなかつたら、『ああ、見えた、見えた。民の竈は賑わいにけり』と言って喜ばれた、という話があった」というようなことも織り交ぜて、「殖産振興、それはいい。ただ富国強兵がい

かんのだ。今日までの日本は殖産振興はいいんだ。この地域は先祖由来の繊維産業の中心地だから、どんどんやらなければならん。やったら、外国にも売って、金を儲けなければならん。それが貯まり貯まって、日本の国が運営できるんだ」と言った。

初めの頃はそうでしょう。『楠氏の方を向いて』君は専門家だからなあ。間違っていたら後から訂正しておいてよ。輸入と輸出のバランスで、日本が黒字になったのはたしか昭和二十六年からだね。

当時、経済企画庁長官が国会で、「国際収支はどうだ」と聞かれて、「おかげさまで今年からとんたんにになりました」と答えたことがあった。新聞は、たちどころに「とんとん大臣」と見出しに書いたよね。僕らは「とんとんって何だ？」といって聞いてみたら、輸出・輸入のバランスがようやくイコール・フィッティングの状態になつてきたということだ。そういうことを言った人が「とんとん大臣」といって名を馳せたわけだ。ですから、あのころの政策は、輸出をとにかくやれということだ。簡単に言えば、外国にものを売って儲けるということでした。それが国を興すもどだったわけですから。

そんなことも言いながら、「そのためには、まずこの地場産業である繊維を豊かにしなければならん。繊維をやると染色染液のきかない水が流れますが、それはそれで、こちらでこうやって解決して、住民の皆さんの健康は守ります。そういうことを一所懸命やっておるので、どうぞ安心して、みんなそろって票はください。終わったら、そこに帳面を置いておくから、いい人はみんな住所氏名を書いていってください。この次からは連絡します」とかなんとか言いながら、後援会づくりを一所懸命、これは河野代議士のためにやっています。

伊藤 その頃は、街頭は車で回ったんですか。

海部 「バタバタ」というものがあつたのはご存じですか。オート三輪みたいなものだった。気が利いていたのは、そのオート三輪に屋根がついていて、風雨を払うようになっていた。中には粗末なものもある。ちやうど今日バンコックへ行かれると、まだあるんじゃない

ないかな。

伊藤 ああ。時々テレビの画面に出てきますね。

海部 ええ。風防がついているあれですよ。乗用車なんていうものは、ほんのごく一部しかなかった頃ですからね。

ちよつと脱線するようだが、その乗用車は当時輸出貢献企業といっていた。対前年で比べてどれだけ輸出をたくさんしたか。たしか一〇%以上輸出して、納税額も一〇%以上になると、輸出貢献企業として、税務署長かなにかつまらんとところから表彰状が来たんです。税務署長、税務署からの表彰状を掛けておくと、税務署からガサが入った時に、「これがあるじゃないか、これがあるように一所懸命やれば、いっぺんは見逃してくれるという話だぞ」といって、追いつ返した。使えたものですよ。それをやるのが日本の国がよくなることだといつて、いまとは全く逆の方向でやったわけですね。輸出貢献企業をつくるということが、当時われわれの地元に対しても皆さんの暮らしが豊かになることですよ、ということでしたね。

伊藤 その河野さんは、何回ぐらい当選なさったんですか。

海部 最後に政務次官が終わって、入閣の寸前に病で倒れたわけですから、当選五回はしていますね。当選五回しないと、政務次官にはなれないんだもの。

伊藤 いまはもっと早いでしょう。

海部 いまは二回ですよ。僕らは二回で政務次官だもの。いまは一回でもなるわな。当選一回でも政務次官になりますわ。

田中 いまは政務官ですね。

海部 政務官なんていうのができちゃって、副大臣という中二階がある。俺に何か仕事役割をよこせといえ、それを世間が期待すれば、答弁でも何でもさせてくれるけれど、なかなかそこまでいかんだらうな。

だから僕は脱線するようだが、このあいだ選挙が終わった時に、一年生、二年生の若手に言ったんだ。いま保守党には、衆参合わせてもそんなにおらんから。「君らはやがて必ず政務次官なり政務官

なりにするけれども、それも絶対絶好のチャンスだから、そこでバンバン答える。そこで、あつ、あれはなかなか詳しいぞとか、あれはいい度胸をしておるぞ、大臣が助かるぞ、というような風評が立てば、君らは必ず成長できるんだ。ただ、それをやろうと思うと、知っていなければいかん。知っておると同時に、役所から来る紙に書いてある言い方ではいかんから、順番を入れ替えたり、表記方法を変えたり、自分なりに政策を説明する能力を持たなければならん。大いに勉強してくれ。これからは非常に希望の持てる時代になった。われわれが初めて当選した頃は、なにせ上がいっぱいおるものだから、俺が大臣になるまでには、まだ少なく見積もっても十五、六年はかかると思ったものだ。私も実際になったのは、十八年経った時でした」と言ったら、みんな笑っていたな（笑い）。

■早稲田大学雄弁会

伊藤 それで早稲田に入られて、当然雄弁会ですね。この前ちよつと雄弁会のお話もございましたけれども、仲間はこういう人たちですか。

海部 みんなそれぞれ、自分の父親の生業とか、家柄とかといううなものだんだん落ちぶれてきて、いい言葉でいえば、大きな志「ボーイズ・ビー・アンビシャス」。小さく言えば、何かひとつ一発ヤマを当てねばいかん。ヤマを当てるには、ひとつ大風呂敷を広げて政治家にでもなるのが一番早いだろう、というような大それたことを考えている者がおるわけですね。中には成功して、いまでも政治家として残っている者もおりますけれど。

伊藤 同じ時に雄弁会にいた人で、ですね。

海部 同じ時にやって、一所懸命練習もして、相争ってね。もちろん、落ちこぼれたやつもたくさんおるけれど。

伊藤 政治家になったのは誰ですか。

海部 だいたい田舎の中小企業の経営者の息子とか、豪農の息子と

か、そんな者でしたね。豪農というのは、家がだんだん没落して全部取り上げられた。それじゃあいかん。「ようし、いまに見ておれ、俺が」というような、家を再興しようという志を持ったやつだ。それから地方の商家の息子たちは、やはり父親の努力を見てきたから、われわれもやはり頑張らなきゃならんとか、いろいろなことがあるだろう。

だから、フォー・エグザンプルで例を挙げれば、伊勢のお饅頭屋の息子であった藤波孝生。あれは饅頭屋だよ。窓月堂の息子だもの。僕はよく遊びに行つて食べたけれど、饅頭のあんこが黒くないのが、俺にとつては大変不満だった。「お前のところの饅頭は小豆じゃねえじゃないか」と言ったら、「馬鹿、そういうものしか喰つたことがないやつはそういうことを言う」と言われた。グリーンピースがあるでしょう、春の色のお豆。あれでつくつた上品な饅頭が藤波の家の藤屋窓月堂ですから。

それから渡部恒三。いま副議長になつておるけれども、あれも路線を間違えずにわれわれと一緒にやつておれば、今ごろは「副」じゃない普通の議長になれるような男だったと思う。残念ながら彼は道を間違えて、変な方に行つちやつたから、副議長でいま止まつてゐるけれども。だから、もう一回選挙が済んだら、保守再合同して、本当の二大政党時代にもつていくように。小選挙区が本当に本当に理解されるようになるためには、回り道ですけれども、選挙の度に選ばれるほうを替えたり、そういうこともきちんとしていかなければならんと思う。

伊藤 藤波さんのほかに――。

海部 いっぱいいますよ。いまの二人はまああの例ですね。閣僚にもなつた。閣僚にもなれなかつたやつで、演説だけはやたらうまかつたなと思うのが、小島静馬という男だ。あれも参議院にしばらくおつて、それから衆議院にも来たけれども、運がなくて、いまはどこかの仕出し屋の旦那になつちやつたけれどもね。

それから柏崎福治というのは、とうとう政治家にはなれなかつた

けれども、原子力燃料公社ができた時に、そこへ入れてやつた。田中 山口光一さんというのは自民党本部の事務長をやっている人ですか。

海部 山口光一というのは、いまは違いますけれども、自民党の事務局の次長をやつた。僕らも先輩だから、「おい、プーさん、プーさん」といつてやつていたけれども、あれは当選しなかつたな。それからNHKへ行つた高塩和巳というのは、お父さんも代議士だったから、こいつはなるだろうと思つたら、残念ながら利あらず、代議士にはなれなくて、俺の応援団にまわつてゐる。茨城県のスガヤシュウイチというのも、とうとう校長先生で終わつちやつた。代議士になるなると言つていたけれど。

田中 ここ『全人像』にいっぱい名前が書いてありますが、實際代議士になつていないけれども、基本的には代議士を志望した人は、いっぱいいたということですか。

海部 いや、私より少なくとも能力があつたらうと私が認めるやつです。演説をやらせても、俺よりはうまかつたらうし、頭もよかつたらうし、勉強もよくしたらうけれども、やはり「天の時、地の利、人の和」というのが、ひとつ大きな絶対条件として政治家になるためには必要なんです。それが揃うだけではないかと、そうともいかなんだよな。いかに天の時があるうが、地の利があるうが、いい地盤をもらおうが、やはり本人が先頭に立つて、これは学問的に精錬された言葉じゃないけれども、「よし、よろしい、お前を支持してやろう」というような、沸き上がるような大衆の気持ちを作りあげて、引つ張つていく力があるのかどうか。

■選挙演説の心得

海部 だから、今度の小選挙区になつてからでも、若い連中が来ては、「ああ、困つた、この頃は昔と違つて、選挙のやり方が変わつちやつた」というんだな。当たり前じゃないか。要するに人が集ま

らないようになった。だから、昔のように公民館とかお寺とか、そういうところへたくさん人を集めて、集めた人に壇の上から偉そうに演説をやって、帰りにちよっとお土産をもつて帰ってもらって、それでまとまった、というような発想の中で育ってきた子どもたちが、大きくなって自分が候補者になった時は、そうやっても集まらないんだ。だから、「そういう時は、お前が街へ出て行け。集まらなかったら、自分が出て行って集めて聞かせるよりしようがないじゃないか」と言うんだ。

例が悪いけれども「楠氏を見て」、君のところの父さん（元参議院議員・楠正俊）、これは書かんでもいいですが、よく理解してもらうために言おう。君のところのお父さんと、また村上の親分になつちやつた玉置和郎は仲が良かったろう。そしてもうひとり長谷川仁というのがあった。三人だ。宗教団体の熱烈なる基盤を持っていた人だ。この三人を呼ぶと、苦勞しなくても「公民館のような」箱にいっぱい集まるんだよ。だから、僕のところの、一宮とか津島とか稲沢の公民館とか公会堂にも、何回来たかわからんなあ。その地域の信者さまたちがみな集まってくるわけだ。

こつちもだんだん狡くなったから、「ここでは殺し文句は何ですか」と言つて教わるんだよ。「どうもありがとうございます。ただただ感謝だ」「そうですか」「はい、ありがとうございます」でいっぱい集まってくれる。それは命令一下でしょう。

だから、そういうところで育つて、そういうものを垣間見て、ああ政治家になりたいなあと思った人は、会場に人が集まらなくなる、と、ガックリして青菜に塩になっちゃうんです。「馬鹿野郎、自分で集めに行け」と言う、「どうしたらいいんですか」と聞くから、「例えばそこにスーパーマーケットの大きながある。そのすぐ出口でやつたら、『馬鹿野郎、うるさい』と怒られるから、離れたところ、声が聞こえるぐらいのところで、自分でマイクを持って演説するんだ。ほんの一分聞いただけでも、ああ、この話はここから先、何を言うんだらうと思つて聞きなさる。それだけ何十、何百と時の

話題やいろいろなものを持つていなければならん。それくらいの努力をしなかったら当選なんかできっこないよ」と言う、みんながやるんだ。

それをやったやつらは当選していますよ、今度の選挙でも。だから、元大臣だとかなんとかいつてやつている連中が、東京でも軒並み落ちるけれども、当たり前だ。会場を借りて、そこへ集まった人だけ聞かせるというのではね。だから、やはり駅から降りてきた人が家へ帰つていく前に、何か変なのに出会つたけれども、せめて名前と、何を言つたかという一言ぐらいは覚えて帰さなければいかん。だから、時計がカチカチいつていると時を刻んでいるなというだけだけれども、あれがチンチンと鳴れば、二時かと思うでしょう。だから、何かワーワー聞こえたら、これは誰が何を話しているかということがわかるようにしなさい。大変勇気もいりますよ。

それは、俺も人から説教されたことだが、街頭演説が一番いいなあとと思う。そんな部屋に集めて、そこへ来てくれる人が全部票だと思つたら大間違いだ。鍋の中に入つたものは放つておけばいいんだ、という言い方でした。

それを上品に言つたのが、大隈重信だったんだ。大きな木が枯れる時、心配して枯れているところばかり、埃を落としたり、水をかけても何の役にも立たない。根っこを掘れ。木の根っこを耕せ。根っこを掘れば、太陽の光線も空気も自然の滋養も入つて行く。木はみずみずしく蘇る。政治家にとつて根っこは何だといったら、有権者だ。国民を怖れておつたんじゃない。交流はない。だから自分で入つて行け。マイクを持って語りかける。人が止まって聞いてくれるかどうかということが、説得力のある街頭演説になるかどうかということだ。もちろん会場に集めて、たくさん大勢で総決起大会をやる方がいいけないというんじゃないけれど、それよりもこちらの方が、直接心の通い路を求めることができる。

そういうことを言われて街頭演説をやつておつても、聞いてくれんやつがおるよね。知らん顔して行つちやうのもおるし、やかまし

いと思つて行つちやうのもおる。けれども、そういう時に、やはり大隈重信の本に書いてあつたことを思い出して、政治家というのはそういう状況の中にあつて、なおかつ聞いてくださる僅かな人々に對して、心の通い路を感じ、心の温かさを感じたら、それが政治家冥利に尽きるはずだ。一人ひとりのところにいつて握手をしてこい。自分で下の句までつけて終わつたら、みんなそばへ行つて、ありがとうと言う。それで秘書に、住所氏名を聞いておけよ、と言う。余計なことだけれども、聞いておくと、そこへはがきを出したりできる。そういうつながりをつくつていつたやつが、やはり勝つていますよ。

考えてみれば、まことに馬鹿馬鹿しい努力だと思われるかもしれないし、そのことと天下国家、株の値段とは関係ないじゃないかというのは、その通りです。けれども、そういう心のつながりがある者の中から、共に明日を考え、今日のこの疲弊した地元をどうやつて榮えさせるかを考える。その心のぬくもりが、まず大事じゃないか。「大事だと思つた人、いま領いた人、ひとつ拍手をしてください」というと、みんな手を叩く。そうやつて誘導していくんだ。

■大学時代の弁論大会

伊藤 例え、東京都内の各大学の弁論部とか雄弁会のあいだでは、試合というのも変ですが、競技会みたいなものがあるわけですか。

海部 それはこの前申し上げたかどうか、大隈杯争奪の弁論大会とか、総理大臣杯争奪の弁論大会とかがある。

伊藤 総理杯ということになると、全国ですね。

海部 当時は、全関東大学高専雄弁大会ということでした。私の記憶では、全国大会になったのはしばらくあとになってからだと思ひます。

伊藤 先生がそこに出て行くためには、例えば早稲田なら早稲田の代表として出ていくわけですか。

海部 早稲田の代表として出る。変な話だけれども、「俺が」といつて手を挙げたら、おのずからエボルブされちゃう代表と、そうはいかんから先生方を連れてきて、並べて点をつけてもらつて選ばれるという代表の二種類があります。「今度は俺が行くよ」というと、たいてい行かせるけれども、あまり「俺が行く、俺が行く」ばかりで、みんなを蹴飛ばしておるといふかんから、その次は「俺は行かないから、みんな手を挙げて、手を挙げたやつだけでやつてみよう」といつてみたり、初めから予選をやつて点をつけて、その点の高かつた者が出るとか、いろいろな方法がありましたね。

伊藤 それで大学時代にも、いろいろトロフィーや何かをもらつたりされたわけですか。

海部 やはりあれ「トロフィーなど」を持つていたということが、ステータスの一つだったんです。だから、ここから先はちよつと書かずにおいてほしいんだけど、いま、誰々は雄弁会におつたかどうかということがよく判定されますね。そういう「トロフィー」などを取つたことがない」連中は、そういう写真に絶対載つたことがないんです。けれども、載つたことがないやつに、載つた、載つたと言ふのは、またそこに優越感を感じるから、それもいふかん。だから、俺はカップがいくつあるとか、賞状が何枚あるとか、そういうことはやめにしようということ、早稲田ではその後あまりそういうことは言わなくなつたんですね。じゃあ、お前は今度演練幹事をやれ、お前は副幹事長になれ、という話になる。

伊藤 「演練」というのは何ですか。

海部 「演説練習部」です。それが、やはり後日の談合の走りになつたんですね。

伊藤 ちよつと大袈裟じゃないですか（笑）。

海部 カップの数とか賞状の数というのは事実になるわけですね。今度いつぱい、大学の頃の写真を見せますわ。そう言われて見ると、かううじて出てきているのが、やはり渡部恒三とか藤波孝生とかですね。

伊藤 ほかの大学や高専から出てきた弁士で、「おお、これは」という記憶に残っている方はいらっしゃいますか。

海部 当時慶應大学からは、大野君というのがよく出てきました。これは卒業してから鐘紡へ就職して、国会議員になるといつておつたが、結局こんにちまでなつておらん。それから宮田君というのがおつて、これは伊豆半島の方から出て、慶應大学を終わって県会議員になりましたね。それも国会議員になるといつても、同じ選挙区に早稲田の小島静馬というのがおつて、これに負けて、早慶戦は卒業後も勝負つかず、ということになりましたね。

それから、北海道へ落ちていった山口真人というのは道会議員まではほとんど拍子で当選したが、北海道議会の自民党政調会長とかそのへんのところが終わりで。僕はいつぱん応援にも行つたんですよ。あんまり大きな声で言えないが、ここにおける秘書で息子をあずかった、北海道の佐々木利昭というのが出てくるわけです。これも国会議員になるために後援会をつくって講演に行つたんですが、どうも利あらずして、立候補できなかった。

伊藤 それは早稲田の方ですか。

海部 早稲田の雄弁会だった。

伊藤 その弁論大会は、官立も一緒ですか。

海部 一緒ですが、官立のやつらは問題にならないですね。

伊藤 問題にならない（笑い）。そうですか。東大の弁論部は駄目ですか。

海部 駄目。頭がいいというだけだから。それで、なにか理屈が多すぎる。

楠 私の大学時代の指導教授が中村菊男という、当時タレント教授がいました。

海部 慶應の雄弁会の指導者だったな。

楠 その先生が、そういうコンクルの審査員をしていたということとで、「海部さんという方はその時から目立っていて、将来あの人は何かになると思っていた」と私は学生時代に中村先生から聞きま

した。

海部 中村菊男さんからですか。へえ。

楠 ええ。その頃、昭和四十年代の終わり頃ですから、まだ先生が大臣になれる前ですね。

海部 前です。駆け出しの頃です。

楠 でも、もう次官はされていましたね。

海部 私は昭和三十五年に当選して、四十一、二年頃に労働次官をやっていましたからね。

楠 四十年代の終わり頃の話ですから、もう先生も政界である程度頭角を現された頃だったんですが、その話は鮮明に覚えています。

中村先生は何かの大会で審査員をされていたそうなんです。

伊藤 そういふ大会はけっこう多かったんですか。

海部 多かったです。慶應大学というのは、比較的そういう大会を主催したんですよ。僕は慶應大学へ行っても、慶應大学の創設者のことは褒めない。

伊藤 福沢さんを褒めないで、大隈さんを褒めた（笑い）。

海部 「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」なんて調子のいいこと言つたつて駄目、と言つてね。「よい、どん」といったら、子どもだって一所懸命走つたやつが一番になり、二番になり、三番になる。その時に「天は人の前に人を置かず、人の後に人を置かず、みんな同着だ」といったら、誰が徒競走なんかやりますか。ただ、徒競走ができたからお前は偉かったんだ、それが全てに通ずるパスポートだと言つてしまつては終わりだから、ジャスト・ジス・ピース・オブ・ランニング、ちようどこで走つた中でお前は優れておつたんだ、と言うだけにしておかなければいかん、というような屁理屈をこねてね。言うことがないものだから。

■水玉模様のネクタイ

伊藤 この中「『全人像』」では、海部さんはスマートな感じだつ

たということが、さかんに書いていますが、当時の雄弁会あたりだと、バンカラが多かったんですか。

海部 はい。バンカラぶることがよかったですね。バンカラは多かった。

伊藤 先生がそうならなかったというのは――。

海部 そこもまたいささか引つかかるんだけど、繊維の産地だと申し上げたでしょう。それで、繊維の品評会を当時からやっていました。これが一等、これが二等といって繊維会社が決めて、もらったのがあるわけです。それを「どうぞ」と言つて、くれるわけです。

伊藤 誰がもらうんですか。

海部 学生が。だから、学生の頃に僕は初めてそれをもらった。

伊藤 それは秘書だからですか。

海部 秘書だからですね。それで、着ておつたことは事実ですな。

伊藤 じゃあ、もともとおしやれなんじゃないですか。

海部 いや、そうでもないと思いますけどね。そうおしやれなほうじやなかったと思うんです。といつても、バンカラでもなかった。それでも、中学生の頃は非常にバンカラだったと言われておつたんです。朴歯下駄を初めて履いたり、いろいろしましたからね。

楠 お父上はハイカラな方だったんじゃないですか。

海部 ハイカラだった。写真家だもの。

伊藤 やはり、そういう影響はあるんですね。

田中 ネクタイなんかは、学生のころから趣味があつたんですか。

楠 先生の、その水玉「のネクタイ」はいつからなさっているんですか。

海部 これは、かなり前からですね。かなり前といつても、やはり政務次官になって、それから官房副長官になった前後じゃないでしょうか。というのは、朝から国会のある時や、政調会のある時なんかは忙しくて、そんなにゆつくり身づくりしている時間も暇もないんですよ。そこで、パツと目について気に入ったものをつける。そ

うするとお世辞を言うやつがおつて、「それはいいネクタイだ、似合うな」なんてちよつとでも言われると、その気になっちゃうんだな。そもそもそういうことだったと思うんです。

官房副長官になると、ときどき各党のテレビ討論会に出なければならぬ。そうしたら「いつ見ても海部さんは水玉のネクタイばかりしておる。一本しかないのしら。かわいそうだ。このあいだ水玉のネクタイを見つけたから、買って送ってあげます」なんていう手紙が来たこともあつた。丁重に返事を書いて、「何本かあります。けれど、いただいたものは大変感激しました。この次もしテレビに映る機会があつたら、それをしていくつもりですから、見とつてください」なんていつておつた。そんなことがあつた。笑えん話ですけども。

伊藤 やはり議会あたり、国会あたりをうろろしていると、ちゃんとした格好をしていないとまずいでしょうね。

海部 そうですよ。うろろろではないんですけれども（爆笑）。やはり目的意識があつて動いていますから、しゃんとしていないとね。

伊藤 秘書としては――。

海部 ステータスがある。だからその頃から、あまりしみたれた格好をするやつは、人間として信頼されなくなるんだな。話をする時に、対等に扱ってくれない。大事な話なんか一緒に相談してくれませんか、変な汚いのは。だからきれいか汚いか、着ているものがよれよれで臭いようなの、ネクタイもはめていないのは、それによつて人間を評価してはいけない。いけないんですけれども、やはり国会なんか来ていると、各省の人間とか、対外的ないろいろなよその国の人も出入りしているでしょう。どこで顔を合わせるかわからん。そういう時に、ネクタイもつけておらんような異様な格好ではいけない。

伊藤 そういう格好で雄弁会へ行ったら目立つでしょう。

海部 だから時々目立つたんですね。だって、頭にポマードをつけたというだけで、だいぶ言われたもの。「悔しかったらお前らもつ

けてこい」とか言ってるね（笑い）。

■三木武夫氏との交流―「県会には外交がない」

伊藤 そういう時代ですか。それでこの前のお話ですと、大学の三年に編入したんですか。

海部 はい。

伊藤 そうすると、大学は二年間だけ――。

海部 要するに大学というのは、釈迦に説法だが、前期が二年間で後期が二年間でしょう。前期・後期の区分けはいまでもあると思うんですが（伊藤 だんだんなくなってきましたが）、私の時は旧制から新制へ変わる時ですから、そのへんはまことにアバウトかつルーズであつた。手を挙げて希望したものは、だいたいそこで大学専門部の過程を修了したものとみなすということで、修了証書を与えるんです。それは専門部だけで卒業してもいいし、卒業しない人は、大学の前期二年間の過程を修了したものとみなして、三年からの専門学部というんですか、そこへ入ることを認めるということなんです。

伊藤 ともかく大学を移られたんでしょう。

海部 そう。僕は残つて大学の三年生へ入ったんですが、専門部だけでなく、いい、といって出て行ったのもいますね、当然のことながら。

伊藤 でも大学を、中大から早稲田に替わられたわけですね。その時は試験も何もしませんか。

海部 たしか、何か簡単な試験がありました。

伊藤 それで、あと残りの学部を二年おやりになったけれど、前「専門部」とだいたい同じことだから、ということですね。

海部 全く同じことでした。

伊藤 全くだすか。それで卒業なさるわけですね。普通の大学を卒業して、さあどうしようか、ということになるわけですが、先のこ

とも考えておられましたか。

海部 考えておりました。卒業する頃は、よし早い機会に立候補しようと思つてた。だから、有名会社へ就職しようとか、月給が一銭でも多い会社を探そうとか、面接を受けようとか、そんな気持ちには全くありませんでした。早く立候補しないといけないと思つた。

二十九歳になる前、大学を卒業してすぐに、県会議員の選挙というチャンスがあつたんです。僕は立候補して県議員にまず当選してやろうと思つたら、三木さんから止められたんです。

伊藤 その頃、もうすでに三木さんと――。

海部 ああ。よく知っていました。

伊藤 そうですか。河野さんの筋からですか。

海部 そうです。何事でも相談に来いよ、と言われていた。その時に立候補して当選したのが渡部恒三です。

伊藤 県会議員ですか。

海部 県会議員です。あの時の県会議員の選挙に、渡部恒三は福島県で立候補して当選したんです。

私は愛知県で県会議員で立候補しようと思つたけれども、いかなる加減か、三木さんが、待てと言う。「県会（けんくわい）議員を卒業してすぐに国会（こつくわい）に出て、これは駄目だ」と言う。「どうして駄目ですか」と言ったら、「一歩一歩、一段一段と経験していくものじゃなくて、県議会（けんぎくわい）には県議会（けんぎくわい）の敷居やしきたりや問題意識がある。国会（こつくわい）は君、国のことだよ。立法へ行こうとするものは、この国がどうなるかということをしつかりとしなければならぬ。県会（けんくわい）がいけないとは言わんけれども、スケールが小さい。県会（けんくわい）には外交（ぐわいこう）がない」と言つたな。あの言葉はよう忘れんな。

伊藤 その頃三木さんの事務所はどこにありましたか。

海部 四谷です。その事務所は木造で、いまはもう跡形もありませんけれども、隣が台湾の中華学校でした。

伊藤 じゃあ、河野さんは事務所は特にあつたわけではなくて、議員会館ですか。

海部 議員会館だけですな。

伊藤 もちろん三木派の会合なんていうと――。

海部 三木さんの事務所へ行つて、やつた。

田中 三木さんと先生との関係というのは、いつから始まったんですか。

海部 いつから始まったんだろうな。手帳につけてないからわからんしな。

伊藤 河野さんのところに入入りしていたから、そうだったんですか。

海部 河野さんのところへ行つたから、河野さんの代わりに「三木さんのところへ」お使いにも行つたりした。それから向こうも目をかけてくれて、「おう、海部（くわいふ）さんよ、何をしているかい」という。

伊藤 「海部（くわいふ）さん」ですか。

海部 「海部（くわいふ）さん」というんだ。「国会（こつくわい）」ですよ、「国会（こつかい）」じゃない。

伊藤 これは徳島の発音なんですか。

海部 だから、「先生、お菓子（おつくわし）をどうぞ」という。

「お菓子（おかし）」じゃないんだ。「徳島の菓子（くわし）」はい。

「はいよ、これは」と言うんですな。

伊藤 それはすごいことですね。

海部 そんな頃から出入りしておつた。いろいろな人の顔も知つておりました。それで、結婚するときに仲人をやつてもらつた。

伊藤 卒業して、大学院に行かれることになるわけですね。

海部 そうです。

伊藤 それは、籍を置いておくということですか。

楠 県会に立とうと考えられたのはどのあたりですか。大学院に入る前ですか。

海部 前です。県会議員の選挙が来年あるというので、それで恒三なんかでもぞもぞして、「俺は今度県会議員に推されて、なるんだからな」と言っていた。おじいさんが県会議員だったからね。

伊藤 県会議員の被選挙権は何歳ですか。

海部 二十五歳です。

伊藤 じゃあそれは簡単だ。だけど、大学を卒業して――。

海部 翌年に立候補できるんですよ。投票日に満二十五歳になっておれば、それでいいんです。

■一期待て―河野金昇夫人の立候補

楠 しかし、県会を諦めて大学院へ行かれるわけですね。たまたまその後、河野さんが亡くなられたから、ひとり奥様を挟んで先生が出られたわけですけれども、大学院に入った時点では河野代議士が健在なわけですから、将来は全然見通しが立たなかったということですか。

海部 いや、そんなことはない。もっと稀有広大な見通しがある。

僕の生まれ育つたのは名古屋の東区です。そこには、もうどうにもならん加藤鏖五郎という大物がおつて、足腰ご不自由で、まあ、悪口は書き留めないでいたきたいが、立つのに一分、そこまで二分かかる人だ。「そんな人にいつまでもいつまでも名古屋のことは任せておけない。俺が替わってやる」と言ったら、怒られた。「そういうことは、思つても口に出すものじゃない」と言われた。

伊藤 だけど、もうちよつと年数が経たないと立候補できませんよね。

海部 そうですよ。だから、それでいい。将来はここに目標がある、と思つておるうちにだんだん足元の情勢が変わつてきた。

海部 それで、「海部さん、一回だけは「河野金昇さんの」奥さんを出しておきなさい。日本人の選挙に対する基本的な心構えは、選挙は情緒だ」。三木さんも選挙はよくやつて知っているわなあ。

「君が出たって、いまは当選できっこないんだから」と言われた。年もまだ、あの頃はたしか満二十五歳には足りていなかったんじゃないかな。

伊藤 衆議院は何歳ですか。

海部 二十五歳です。いずれにしても、奥さんを出して、地盤を守ったほうがいいということでした。

伊藤 それで、その「河野さんの奥さんの」選挙は一所懸命おやりになったわけですね。

海部 応援したんですよ。僕が候補者代理で演説をやったんだもの。立会演説からなにか全部やりました。

楠 その河野さんの奥さんという方は、あまり政治家向きの方ではなかったということですね。

海部 あまりね。人間的にもあそこで立候補させるのはお気の毒でした。だから、立会演説にも出ないんだもの。

伊藤 でもよく当選できましたね。

海部 終わり頃にはようやく、「主人がいろいろお世話になりました。ありがとうございます。皆さんの勧めがあつて、今度私が候補者になります。お務めできるかどうかわかりませんが、主人の志を継いで長いこと一緒に生活もしてくださった海部さんが、引き続いてやってくださることになっております。だから主人の政策や主人のお約束したことは全部私も一緒になって頑張りますから、どうぞよろしく」と、それぐらいの話をしてもらったんですね。

伊藤 じゃあ、その時はもう路線ができていたということですね。

海部 もう、あんたやれ、ということになっておったんですから。ただ三木さんが、いまここですぐ替わるというも――。

伊藤 ああ、そうですか。さつき三木さんの事務所の話が出ましたが、お宅にもしよっちゅう行っていましたね。

海部 しよっちゅう行っていました。吉祥寺というところになりましたね。東京女子大の向かいでした。

伊藤 じゃあ奥様の睦子さんにも可愛がられるということになるわ

けですか。

海部 可愛がってくれたか、邪魔くさいと思ったか、行けばとにかく遅くまで喋り込むから。河野金昇さんが国会で党を代表して演説に立つ頃なんかは、国民協同党といいましたからね。それからだんだん改進黨となってきたんだけど、中小政党ですから、党首の三木さんは忙しいんです。だから、なんだかんだと河野さんが、三木の代理で行って話をする。そういう時は偉いと思った。いつでも原稿の粗書きだけは、全部三木さんが自分で書いて、「こんなようなことで頼むよ。これ、お前いっぺんそこで立って読んでみい」と言われて、こっちがそれを読むと、「つつかかるところはないかね」と言う。「つつかかるところありません」と言うんですが、そうやってチェックされたんだなあ。

■三木武夫氏の人物像

伊藤 三木さんという政治家については、どんな印象でございますか。あれは「バルカン政治家」と言われて、百戦錬磨の政治家だということですね。

海部 虚像ですな。あれはマスコミがつくった虚像です。もちろんそれは少数で小さい政党のリーダーで生きてきましたから、バルカン政治家といって当たっていないこともありかもしれませんね。

伊藤 まあ、中曽根さんだって小さいところでやって、「風見鶏」と言われていたわけですからね。

海部 みんなそうだもの。それから自民党といったって、僕らにいわせれば、あれは緩やかな自由主義者連合といっている。だから、各派閥というものは、なんですかいね。

伊藤 ひとつの政党みたいなものでしょう。

海部 最近の例でも、政党が生き残りをかけていろいろやっているようなもので、派閥の中でもそう。だから、加藤派と池田派がどうなるのかなんていうのも、われわれから見ると、あれは政党と政

党の争いでしかないな。だから、そういうことをいえば、三木武夫がバルカン政治家だったというのは、そうだと思いますよ。けれども数が大きくなって、みんな右向けといったら、一斉に右を向くというような政治は気持ちが悪い、というような基本的な考え方ですよ。言いたいことがあったら言えればいい。その代わり、人に言わせた以上、居眠りしておってはいけませんよ。聞かなくていい。言われたほうも、ここに間違いがあると思つたら、言えればいい。言われたほうも、胸に手を当てて考え直せばいい。考え直した結果、より高いところに第三の新しいものができた時に、それが民主主義の議会（ぎくわい）政治というものなんだ。ほんとうに、花が咲き実が実ることになるんだ。間違えてはいけないのは、それは国民のためです。国民のために考え直すのだという一言を忘れてはいかん。そう思つて聞いておつたな、僕は。

伊藤 今日、田川さんに言つたら、「あつ、三木さんに膝を触られた」と言っていました（笑い）。

海部 あれは国内だけではありませんからね。

伊藤 ああ、そうなんですか。

海部 三木さんが触るのは、だから俺は、「それは先生、やめた方がいいですよ」と言つた。アメリカのほうでは、そういう風俗習慣はないでしょう。

伊藤 日本だつてあまりないですよ。

海部 日本でも、こんなところ「膝を」さわられたら、おかしいものだけだね。あれは親密な気持ちを出すためにやっちゃうんだな。

大統領がフォードの頃、フォードさんも二十何年間の議員生活があつたから、話をしたら意気投合したんだ。意気投合すると、だんだん近寄つていって、危ねえな、と思つた。あれは親愛の情を表わすつもりか、説得するつもりなんでしょうね。男だつたら、もうちよつとこうやつて「楠氏の左上腕部を掴むように格好で」話をするんだ。三木さんがフォードに「どうだい」と言いながら。だから田川さんが膝さすられたことぐらいは、覚えておりません。膝をさす

るといふのは、ちよつと表現がなあ。

伊藤 いろいろな人から聞きますよ、あの人は膝を触るんだと。

海部 親愛の情の示し方じゃないかな。

伊藤 なかなか難しい親愛の情ですね。

田中 触らない人っているんですか。三木先生ですら触らない人は、伊藤 それはいるでしょう。それを女性にやったらまずいよ（笑い）。ところでその前後から、自分の政治師匠は三木さんだと決めておられたわけですか。

海部 そうですね。話を聞いておつて、いちいち枝葉の部分には別に、奥深いところで、そうだと同感できるところが多い。それから三木さんが、ときどき俺に「そうだろう、そう思わんかい、君」なんていう話の中で、熱心に説得して、結論を三木さん自身が出す。俺も、それはそうだなと思うことが多かった。特に政治改革を私が自分の内閣を賭けてでもやらなければいかんと思つたのは、三木さんに説得されたことの結論でした。金が左右する、金が幅を利かせるような政治では駄目だということを教わつたんですね。だから「門前の小僧、習わぬ経を読む」という言葉があるけれども、初めから、政治家になりたいと思つた頃から、影響力を与え続けてくれたわね。

■職場結婚

田中 この「河野金昇の代議士の死」のところ「『全人像』第5章」で、奥様と結婚していますね。奥様とはどういう関係で知り合いになられたんでしょう。

伊藤 さつき三木さんの媒酌の話が出ましたね。

海部 いまからいろいろ話すと、きれいな事になつちゃうから。

伊藤 きれいな事でもいいですよ。

田中 「当時交際中であつた幸世夫人と結婚」と書いてありますね。楠 奥様も秘書をされていたんですよね、別の議員の方の。

海部 岐阜ですからね。

伊藤 議員さんの秘書ですか。

海部 そうです。

楠 早い話が職場結婚ということになりますね。

伊藤 じゃあ、議員会館で近所ですか。

海部 ええ。

伊藤 男でも、ご近所が親しくなるという話ですけども。

海部 そうですね。中曽根さんとか。それから比較的親しくなっておる秘書の、支持者と代議士からは、やはり目をかけてもらえるようになるかな。僕は中曽根さんと部屋が近くて、中曽根さんのところにおった上和田「義彦」君というのが早稲田大学の卒業生ですからね。

伊藤 そうやっていろいろな縁ができるんですね。

海部 ええ。それから、その中曽根さんのところへ、当時五分刈り頭ぐらいの早稲田の学生が訪ねてきておったのが、のちの日の小淵恵三という男だ。

伊藤 そうですか！ 小淵さんは、中曽根さんのほうに出入りしていたんですか。

海部 そうです。出入りしたのは、要するにあの人のお父さんが、選挙に出て中曽根さんのところでやられちゃったわけでしょう。それで、俺もいつの日かと思っておった。ところが中曽根さんの部屋から一つおいたこっちの部屋には俺がおるもんだから、それで俺のところへ寄っておったわけだ。

伊藤 奥様は、どなたの秘書だったんですか。

海部 柳原三郎という岐阜の出身の代議士です。

田中 自民党ですか。

海部 自民党じゃない。当時は国民協同党といったな。

田中 同じ「党」ですか。

海部 そうだよ。国民協同党の代議士だった。

伊藤 その時は先生も秘書ですから、経済的には、まあ食っていけ

るわけですね。

海部 秘書の給料というのはそんなに高くはなかったけれども、家庭生活を維持するぐらいはありましたね。

伊藤 何かこのあいだ問題になっていたじゃないですか、秘書の給料のピンハネが。

海部 あれはどういうものだろう。

伊藤 ちゃんといたいておられましたか。

海部 ちゃんともらっていました。人並みに生活もできましたからね。

田中 結婚されても、奥さんはやはり柳原先生の秘書をやっていたか。

海部 いやいや、結婚と同時にもちろん辞めました。むこうはそんなに正式の職業婦人になろうという気もなかっただろうし。

伊藤 当時はそうでしょうね。今ごろは辞めないでしょうけれど。

田中 当時としては女性秘書というのは珍しかったんじゃないですか。

海部 例えば、益谷秀次さんのところに有名な女性秘書がおったし、加藤鏖五郎さんのところにも有名な女性秘書がおった。女性秘書というのは、ここが日本の面白いところだよ。女性というのは数に依りては、男と肩を並べるだけの多くの数があるわけだ、有権者の中に。そして女性の秘書がおって、それを親切に扱うと、女性の有権者はやはり身近なものを感じるんじゃないかしら。

だから僕の選挙も、ここ十年ぐらいの選挙は、僕はほとんど自分の選挙区へは帰らなかったが、それ前は自分でずっと回っていた。みんなに応援に来てもらった。けれどもその頃、僕と一緒に家内や娘がマイクを持って回ったりすると、そちらの方が評判よくなるわけだな。先生は忙しいだろうから、奥さんとお嬢さんが来てくれればそれでいいや、というようなことになった。だから、ここ十年ぐらいの選挙は、正直に言うと、私は選挙区はあまり回らずに、家内と娘が回っている。そちらの方が人気がいいんです。けれども残念

ながら、このごろ孫ができちゃったものだから、まさか孫つきで選挙の応援には行けませんよ、というんだけど。

伊藤 そうすると議員会館で女性の秘書がいるということは、いいことなんですね。

海部 いいことでしょうね。

伊藤 いまはどこに入っても、だいたい二人が男で、一人は女という感じですね。

■河野金昇議員の秘書としてⅡ―公設秘書

楠 ところで河野代議士の秘書をされていた時は、秘書は何人いたんですか。

海部 二人だな。女はいなかった。

楠 先生は第一秘書ですか。第二秘書ですか。

海部 公設秘書といったな。

伊藤 公設秘書は二人でしょう。

海部 バッジと、携帯の秘書の身分証明書がある。写真付きだ。

伊藤 あれはバッジがあるわけですか。

海部 あるんですよ。それで、しばらくたってから、第二秘書を二人にしましょうということになったんです。

楠 じゃあ、その当時は公設秘書は一人ですか。

海部 一人です。

楠 その公設秘書をされていたんですね。じゃあ、補助的な秘書がもう一人いたわけですか。

海部 いました。その頃は地元から、竹田君という中央大学の学生がひとり来ておった。

伊藤 あと、代議士は地元にも秘書がいるでしょう、国家老という。

海部 地元にもいますよ。

伊藤 これは、どうしてもいないといけないんですね。

海部 まあ、そうですね。僕のところにも何人かいますけれども。

伊藤 しかし、秘書と称する人もいるわけでしょう。

海部 ああ。だから、秘書として生活しているように、こちらが公認で認めておる人もおれば、好きでしよつちゅう勝手に出入りして、いろいろな仕事があると口利きをしたりする。

伊藤 それで、名刺にちゃんと「海部俊樹秘書」とか書いて――。

海部 「秘書」とは書かせません。その代わり、「連絡場所、海部俊樹事務所」とする。そういうのを私設秘書とかいうんだな。「お前らが事件を起こすと、お前らは私設秘書だから厳しく書かれるぞ」といつて、いやみを言っているんだけど。

伊藤 じゃあ奥様は、ちゃんと公設秘書だったんですか。

海部 いやいや、そうじゃありません。私設秘書です。

伊藤 非常にプライベートなことをお聞きするようですが、その頃どこにお住まいでございましたか。

海部 初め、結婚した頃はどこに住んでおったかな。

伊藤 やはり借家、借間ですか。

海部 いやいや、あの頃はちよつとワルをしましてね、秘書団の団長も経験しておったものですから、住宅公団の当選を当たるようにせいといつて――。

田中 当たったわけですね。

海部 それはたしか、三回続いて落選すると「当選する」率がよくなるんです。そういうことである格好だけはつけておいた。そして、そこへ入りました。たまたまその公団住宅の向かいに森繁久弥が住んでおりましたね。あれは早稲田の先輩だから、あれを使つた。雄弁会の資金がなくなると、よく「先輩、先輩」といつておだててね。あの頃、草笛光子とか、いろいろな人を連れては大隈講堂に来てくれるんです。それで整理券を売って、雄弁会の資金にするわけです。そんなことでよく森繁はつきあってくれた。

だから、僕が晩年総理になった時に、森繁久弥文化勲章の時に、「あんた足が弱っているそうだから、車椅子でいいように、天皇陛下にお話ししておいたから」と言ったら、「いやあ、歩けるところ

は歩きますよ」と言つて、よたよた歩いていくので、見るに見かねて助けてあげたら、その写真が新聞に載つて、親孝行だ、これは大事なことだ、と言われてね（笑い）。脱線しましたけれど、そんなことです。

伊藤 いろいろな方からお話を伺うときに、奥さんのお話を聞くのはなかなか大変なんです。ご結婚の経緯とかいうようなものは。

海部 スラッと言えんことがあるからな、みんな。

伊藤 終わり頃にまた聞くと、また別の話になるんです。じゃあ、当選なさるまでの間はずっと秘書をやっておられたわけですか。

海部 そうです。たしか最初に当選した時には、「国會議員秘書」というふうに載ったはずですよ。

伊藤 そうか、今度は「河野金昇氏の」奥様の秘書もやられたわけですね。

田中 もう一度確認したいんですけど、媒酌人は、先ほど三木先生がやられたと言っていましたね。これ『『全人像』第5章』によりますと、三木先生は媒酌人代理になつていて、しかも三木武夫と丹羽兵助代議士が代理人を務めたと書いてあるんですけれど。この記述は間違いですか。

伊藤 年譜を見ると、媒酌人は三木武夫夫妻と書いてある。

田中 けれど、こちらの本文は、媒酌人は河野金昇代議士であつて、金昇代議士は病床にあつたから、代わりに三木先生となつていますね。

海部 正確にその頃、豊田行二君に話してなかったかもしれないけれども、河野金昇さんという人は病に倒れて、動けない身になつたんです。それで、僕のことをいろいろ耳にして心配して、「早く結婚して身を固めろ。身を固めないと、選挙をやる時にもマイナスになるぞ」と言っておられた。だから僕が申し上げたように、加藤鎌五郎さんのところが空きそうだというような知恵をつけたのも河野さんですよ。それは、誰も自分が死ぬことを前提に、俺の後をやれなんて、そんな淋しい、もの悲しい話を思う人はいないからね。

「隣のあれのところに行くのが、日本の政治をほんとうに変えるいいチャンスだから」とかなんとか言われて、そういう気持ちになつていたことも事実ですね。半分ぐらい河野さんもその氣だったんじゃないかな。だから、「正月の年賀状なんというのは、自分の中学や小学校の同級生や、そういうのを中心に出しやあいなんだ、出せよ」と言われて、やつていましたよ。

伊藤 じゃあ、やはりその東区から出ようということですね。

海部 ええ、東区にまず根を張ろうと思つてね。

伊藤 丹羽兵助さんは、どういうご関係ですか。

海部 丹羽兵助さんは、三木先生の家来です。

伊藤 もう城代家老みたいなものですか。

海部 まあ、そこまで偉くないけれども、丹羽兵助さんという人は、若者頭みたいなものです。

伊藤 その当時は、三木さんの一番の側近は誰なんですか。

海部 井出一太郎じゃないかな。

田中 井出さんはずっと側近じゃないですか。

伊藤 まあ井出さんは、「三木さん、三木さん」で終わりの、ということですね。

海部 そうそう。それから松浦周太郎というおじいさんがおつたけれども、あの人はどちらかといえば、むしろ頼られていたのは金のほうだな。

伊藤 でも三木さんは自分の親戚やなんかで金づるはいっぱいあるわけでしょう。

海部 ああ、金づるは三木さんのほうもありますよ。けれども、そうは言つても、その金づるは奥さんの系統の金づるだから、その金づるは使わなくて済むなら使わないでおきたいと思うでしょうね。

伊藤 やはり金づるは複線化しておかないといかんわけですね。

海部 そうだろうと思うよ。

伊藤 けれど、本当に自分が金持ちだと、なかなか人がお金をくれない。金持ちが立候補しては駄目だということです。小坂さんなん

かはそうですけれどもね。

海部 そうだろうね。結局金がなくなった時に、政治生命も終わっちゃうから。

伊藤 人からお金をもらうのは、ああいう人は駄目なんだそうですよ。人もくれないし、自分ももらいにいかない。

■衆議院選挙に立候補

伊藤 それで、河野孝子さんとおっしゃいますか、この方は次の選挙では、もうお出にならないで、昭和三十五年の衆議院選挙に先生がお出になるということになったわけですね。その時は、次はもう海部先生だということで支持者はだいたい納得していったんですか。海部 支持者の大半は納得してましたね。県会議員が一人だけ、どうしても出たいなんて思っていた。

伊藤 その地盤を引き継いで、ですか。

海部 三木さんなんかもそれを見て、「いまあれと一騎打ちをやったら、あれはあれなりに地盤もあるう」といって、一目置いておった県会議員がおったんですけれどもね、それが病気になるってひっくり返っちゃった。雷が落ちてきたようなものですわ。それで、僕やる時には、その人はいなくなつた。

伊藤 じゃあ、あまり強い対抗馬がない。

海部 はい。あえて言えば、海部がやるなら俺の方が、と思った労働組合の委員長とか、社会党の全電通の委員長とかいうようなのが出た。そうしたら、農協の代表の柴田なんとかというのも出たりして、八人立候補したのかな。

伊藤 定員は何名ですか。

海部 三人です。

伊藤 八名というのは、ずいぶん多いですね。

海部 けれど、まあ運命だから、こうなったら、やって負けたら負けた、勝ったら勝つただと腹を決めてやったものですから。

伊藤 でも、確信もありになったんでしょう、大丈夫だという。

海部 それは、一所懸命事前運動もやりましたもの。一軒一軒訪ねて歩いてね。

伊藤 だいたい自分の目算として、これはまあなんとかいけるといってお考えでしたか。

海部 また、そういう時に慌てるといけないから、一期待つて、みんなが海部よく我慢して待ったな、よく奥さんにやらせてやってくれたな、という気持ちで伝わると、選挙というものは情緒だとかなんて言われるからね。そういう環境づくりとかいうのかな。こちらはまだまだ大学で習ったことだけで、実際には役に立っていないからということ、地元回りをやったり、奥さんの秘書もやった。お先は真つ暗じやないから、それはできるわけです。三木さんも、「頑張つてやつておれ。そうすればボタンタッチする時に、スムーズに行く」と言っていましたから。

伊藤 最初に立候補なさると、やはり三木派の人々が応援にきてくれるわけですか。

海部 応援に来てくれました。いま名前が出たような人は、だいたいみんな来てくれた。井出一太郎さんなんていうのは、「財布は落としても、海部は落とさないかんよ。そうすると、この町の大きな損になる」なんていう話をした。

伊藤 それがその時ですか。

海部 その時の話です。最初の選挙に出ようとした時です。だから、井出さんのところは、息子の正一の時には、僕が代わりに何回も応援に行つた。

伊藤 そういう選挙というのは、公認ももちろんとれていたわけでしょう。

海部 ああ、公認はもらいました。

伊藤 党がその全体の応援の体制をつくることも、もちろんあるんでしょう。

海部 あります。けれどもね、だいたい派閥のものところには、

派閥のものが行くんですよ。

伊藤 そうですか。やはり派閥選挙みたいな感じなんですか。

海部 そういうところもありますね。しかし別の面からみると、例えば僕が総理の時に、衆議院も参議院も選挙をやりましたけれども、自分の仲間だからといって優先は絶対にしないんですよ。それは、もう各派閥ごとに、選挙管理委員とか副幹事長とか副総務会長とか目付役みたいなものが出てきていて、それがリストを出しますから。総理の日程で、何日はここに、ということになる。そうすると、また各派から来ている腕利きが、「じゃあ総理、ちよつとすいませんがここに寄っていただけますか。ここではこの二人の名前を出してもらってもいいですから」とかなんとかうまいことを言う。あれは本当の応援にはなっていないと思うんだな。僕らが応援に行くでしょう。党として公認候補は全部応援しますからね。別々にその人の選挙事務所だけ行くというのならまだいいけれども、みんな集めておいて、これとこれとこれを頼むといつても、票は一票しかない（笑い）。

伊藤 誰でもいいから入れてくれ、自民党であればいいということですね（笑い）。

海部 そうそう。またそういう演説をこつちもやっちゃったものだから、いささか慙愧に堪えんのですけれども。しかし、個人個人のところをみんな回るといことは、とても時間がなくてできませんわ。

伊藤 この時は、もうちゃんと自民党ですからね。

海部 国協党とか、そんなことはありません。

楠 公認をとるのは大変だったとか、そういうことはないですか。

海部 大変だったろうと思うが、その時は三木さんに頼んでおけば、三木さんがごて取って来てくれるから。

伊藤 三木さんはそういうことは頑張るそうですから。

海部 電話がかかってきて、「取ったよ。ポスター、もう刷っているから」と言う。

伊藤 ああそうか。ポスターが刷れないんですね。

海部 はい。「公認」と書いて刷つて「公認が取れなかった」たら、使えなくなっちゃうでしょう。

楠 同じ自民党の江崎さんは、その当時は何派だったんですか。

海部 藤山派かな。

■議員秘書として見た安保改定（一九六〇年）

田中 ちよつとまた話が少し変わるんですが、この時は、安保条約という大事件がありますね。

海部 樺美智子さんが、そこで「窓から見える国会を指す」亡くなりますよね。その正門前で。

伊藤 正門ではなくて南門です。いまはなくなりましたけれどもね。楠 「伊藤氏に向かつて」指揮していたんですか。

伊藤 いや、指揮なんかしていないよ。僕は見ていただけです。田中 その当時、「海部」先生がどのようなことをやっていらしたかなと思つて聞いたんですが。

海部 あの時、私も見ていました。

田中 秘書で、ですか。

海部 秘書団で。

伊藤 先生は、「国会の」中から見ておられたわけでしょう。

海部 はい。

伊藤 私は外から、地下鉄の入り口からです。地下鉄の入り口も変わったんですよ。

海部 中は、清瀬一郎が議長で、なんかこうおろおろして、ワーワーしたデモの雰囲気になっちゃっていた。「警察官を導入してでもやりませう」というようなことを悲愴な声で訴えていたのを聞いておる。秘書団の人は、それぞれの自分の所属する議員の皆さんを守る。といつても、そんな秘書が一人や二人で守れるわけじゃない。秘書団といつても、警察官がいっぱい出ているから、警察官の後か

ら見ておったようなものだけだ。

田中 特になにか意見を述べたり、そういうようなことをやられたわけではないですね。

海部 やりません。そんな雰囲気じゃなかったよ、あの時は。早稲田大学騒動の時ぐらいなら俺が出て行って、マイクを持ってがなったり抑えたり、よくしたけれども、ここへ来たら、もう……。しかも自分がまだ秘書でしょう。社会党のやり手やら共産党もあの時は張り切ったからね。学生だって秘書団だって、日頃顔を知らないのが動員されていっぱい来ているわけだ。そういう連中が、ここを終わって引き揚げていったのは、これは書かないでください、政法大学です。あそこへ寝泊まりしておった。「全部あとをつけていけ、どこへ行くか見てこい」なんて言われましてね。動員されて来たのもたくさんおったわけです。

伊藤 なんだか腕っ節の強い学生たちが、棒みたいなものを持って、あそこの南門をガンガン、ガンガンぶっ壊してしまいましたね。

海部 そうだ、門が壊れちゃったんだよね。

伊藤 門はなくなっただけですね。

海部 あれは位置が移動したんだ。

伊藤 そうです。だから、いま僕は頭の中では思い出せますけれども、現地へ行ってみると、どこだったかな、と思いますね。やはり秘書団は動員されて防衛ですね。もうそれ以外あり得ない。

海部 自分たちの所属する議員を、まずみんなは気をつける。

■一年生議員として――議席は一丁目一番地

伊藤 そのあと、この年十一月に池田内閣で選挙ですね。

海部 あれは、池田内閣で空気を变えたんです。そして岸さんが官邸で刺された。刺されたという話が出て、刺されて死んじゃったのかと思ったら、そうじゃない。ちよつと血が出ただけで終わったので、「なんだ、そうか。死んだんじゃねえのか」とか無責任なこと

を言いながらやってたことを思い出すな。

伊藤 二十九歳というのは、非常に若い代議士ですか。

海部 当時としては。いまでもそうですけれどもね。

伊藤 いまはそうでしょうね。

海部 いまでもそうですけれども、当時としては、二十九歳というのは若かったです。だから一丁目一番地の議席へ座らされたのは、「あんたが目立つからだから、そのつもりで」と幹事長やら池田総裁に言われたなあ。だから、一丁目一番地で居眠りしている漫画を描かれて、「今度の一年生には相当なのがいる」なんて下に書いてあるんだ。こうやって「両腕に頭を突っ伏す格好をする」寝ているんだ。しかもその議席が一丁目一番地だから、海部俊樹と書いてなくても、俺のことを描いてあるとわかるんだ。だけど、俺はそんなことをして寝た覚えはないといってさかんに怒ったんだけれど。

伊藤 あれは、やはり年次が上がっていくと、「議席は」だんだん上へ、上へと行くんですか。いまは一番上のほうにおられるんですか。

海部 一番、どん上に。

伊藤 あれは、面白いですね。議席を決めるのは――。

海部 議員運営委員会が決める。

伊藤 議運が決めるんですか。各党は、もちろん希望を出したりするんでしょうね。

海部 そうです。それで、僕らは必ず通路側のところに議席があるんです。だから議員運営委員会の理事が、「先生、ご希望は？」というから、「通路際」というと、「わかりました」という。

伊藤 何かあると、サツと出られる。

海部 サツと出れるでしょう。出るときは、サツと出られるわけだ。伊藤 でも海部先生が代議士になってから、あまり乱闘とかそういうことはないでしょう。

海部 ありません。ただ、この間、これ「コップの水を引っかける身振りをする」をやった時に、「連れてこい」といって、あの松浪

を呼んだんだ。あれはああいう性格の男だから、「駄目だ。ここはいいけれども、出たらいっぱい新聞記者がおるから、言い訳したりなんかするんじゃない。なにか反省の態度をとってやれ」と怒ってやっただけです。ところがそこもテレビが写しているわけだ。「あんな、怒った人と怒り合いをやっておいたら五分と五分だ」という。「いや、そうじゃない」といって、大笑いしたんだけれどね。

伊藤 一番下のところというのは、つまり一番演壇に近いところでしょう。そこから見ているのと、上から見るとではだいぶ違うでしょう。

海部 ずいぶん違います。僕は全部から見た経験があります。演壇で演説をやっていると、全部見えますね。全部視野に入るわけだから、変な話だが、誰が野次ったか、まずすぐにわかります。わかつたら、野次ったやつの方を見ながら、二言三言話してやると、必ず目を伏せるわけです。あの野郎、野次ったなと思って言葉を返すと馬鹿に見えるからね。淡々と演説を続けながら、へつと見てやると目を伏せますから。「俺が野次ったことが」わかつたか」と聞くから、「お前だ」ということがわかつたよ」と言ってるね。

■一年生議員としてⅡ―自民党青年局学生部長

伊藤 それで、当選なさった年に、さつきもちよとお話が出ました青年局の学生部長ということになりますが、学生部といっても、もう学生じゃないんでしょう。

海部 学籍はもうなくなったのか、あるいは大学院に特別学生という制度があったのか。大学側は損をしないですよ、いくら取るから。

伊藤 それで、実際には出てこない。

海部 授業には出ていかない。その代わり、図書館の特権だとか共同組合の特権だとか、いろいろなものがあつたわけですよ。早慶戦の切符だとか。あの頃、学割という制度があつたでしょう。いろいろ

るなところで学割が使えたんだね、早稲田の特別学生だということ。そんなことより何よりも、僕は「あんな、そんなところで遊んでいるくらいなら、もう家へ帰ってらっしゃい」と言われるので、

「いや、大学が終わるまでは駄目だよ」と言いながらずっと引張ってきたんだ。だから選挙に出るまでは帰れないかなと思っていた。それまではなんとか肩書きをつけておかねばならん。だから、「早稲田大学大学院に学ぶ」と書いてあるんです。卒業とか修了とか書くと、いつ卒業したんですか、いつ修了したんですかということになるから。

伊藤 経歴詐称か何かになっちゃう。

海部 経歴詐称というのは、意外と重いんだよね。あとになって気がついたけれども。

楠 それで辞めた議員もいますからね。

海部 それで棒に振っちゃった人もおるぐらいだ。僕はあの頃から「早稲田大学大学院に学ぶ」と言っていた。誰に教わったかしらんが、「学ぶ」と書いておけばいいんだ。学んだことは間違いないだろう。卒業じゃないし、修了じゃないから。卒業とか修了とか書くとか詐称になるが、「学ぶ」だったらそれでいいんだ。それで「学ぶ」と書いておこうと。

伊藤 在籍していればいいわけですから。その自民党の中の青年局の学生部長というのは、いちおう自民党本部にそういう部屋があつたりするわけですか。

海部 はい。自民党の青年局青年部。それは、僕は二代目のはずだが、学生部というのができたんですよ。学生部というのは何かというと、要するに学生がその頃から少しずつ政治に関心を寄せるようになったので、学生でも自由民主党の部員を希望する人は入ってよろしい。入党をする人もいる以上は学生部をつくらう、ということになった。それには、学生とやっていることや、年や、頭の程度がよう似ているのがいいということ、このあいだまで学生だったから「自分がなった」。

その頃、竹下登が青年部長だった。俺を呼んで、「俺は喜んでるんだぞ。お前が当選するまでは、一番ビリのペーパーは竹下登だと思んが思ってたけれども、俺の家来が一人できたからなあ。年だけは、君なあ、いくら頑張っても俺の上には行けねえんだから、我慢しろよ。その代わり、人前では「はい、はい」と敬語を使つて、俺に答えておれ。何回か答えたなら、一杯ずつ飲ませるから」という。そんな話がある頃からもあった。もちろん冗談ですよ。そして学生部長になった。

伊藤 やはり自民党の学生部に入ってくるような人たちというのは、雄弁会とか弁論部とか、そういう人が多いんですか。

海部 そういうのが多いですね。各大学から来ましたよ。

伊藤 やはり将来の政治家志望。

海部 政治家になろうと思つて。僕は驚いたのは、東大の現役の学生でも学生部へ入ってきたのがおります。当時おつたんですね。

伊藤 そういう人たちは、例えばいろいろな応援演説とか、そういうものに動員するわけですね。

海部 頼んでね。「そういうことを希望するやつは行つてこい」といつて。

伊藤 まあ、実地の訓練ですね。

海部 はい。

■一年生議員としてⅢ—商工委員会、農林水産委員会

田中 先生は代議士に当選されました、最初に商工委員会と農林水産委員会に所属されていますね。これは特にこの二つの委員会を希望されたんですか。

海部 常任委員会は、ほんとうは一つという決め事があるけれども、しかし、希望が多い人は、どこか取つてよろしい、とこういうことになったわけだ。それで僕が商工委員会に入つた理由は、先ほどもちよつと申し上げたように、私の有権者とか選挙区の明日を考える

と、商工委員会がしっかりしなければならんと思うわけだ。そして貿易振興の政策をやつてやらなければならん。そのためには、そこへ入つていなければならん。もつといえ、繊維産業がだんだん下向きになる時は、支えて盛り上げなきゃならん。

僕は最近でも、繊維のセーフガードをいよいよやらせますよ。こへ通産省の局長を呼んで、やれという。こんなにひどいじゃないか。特にユニクロなんかがあんなに來たら、全部中小零細業者はつぶれちゃうよ。ああいうのは駄目だ。被害なきところに規制なしというのがGATTの頃からの精神で、いまはWTOと言いますけれども、あれも何か特定のものが被害をくつた時は、数量制限ができる。私になつた頃は、繊維がアメリカにカットされて大変苦労したんですから、今度は綿製品なんかのカットはやめてやろう。この前の選挙の頃、今年のお正月に帰つた時も、私はその話をしてやつた。ただし、いまそれをやつたからといって、日本の繊維産業界が急に目に見えてよくなるものではありませんよ。けれども、國際的に認められたそういう権利があつて、輸入というのはその國の基礎生産の何割以上になつた時、たしか五〇%以上だったかになつた時は、止めることができる。それがセーフガードだ。その発動をせよといままたさかんに言い出したんです。それもできます。そういうことをやろうと思つと、商工委員会を顎で使わなければならぬ。

もう一つの農林水産委員会というのは、当時から日本の食糧というのはいま。農林水産関係というのは、いまひどい目にあつてゐるんです。例えば、私のところではもう本當にひどいものの集中みたいなもので、繊維は、いま言つたようにユニクロが來たがために綿製品をはじめ全部すつ飛んじやつた。毛織物なんかはその前からすつ飛んでゐる。ところが、愛知県の私の故郷のあたりは、土のついた蓮根、あれもこの頃中国から安いのがドーソんと入つて來て駄目になつた。それから生姜、あの紅生姜とかお寿司屋のつまみに出す生姜も、中国からドーソんと入つて來るから駄目になる。

そればかりだと思つたら、愛知県の海部郡弥富町は金魚の産地で

すが、あのランチュウという金魚が人工衛星に乗って宇宙を回って、えらく名を売っておりですね、あれもこのごろ中国から、安くいっぱい入ってくるから、日本の金魚が売れなくなつた。対米輸出や対欧州への観賞用の金魚が出なくなつた。ことほどさように、全部駄目になつちやつた。

それで、こういったものを救つてやるのも農林水産だと思う。もつとも、正直にいうと、初めは一番強い圧力団体が農協だったわけですよ。この圧力団体の実態を解明して、できればわが方へ票を誘導する。誘導するためにはどうしたらいいかという非常に自分本位の考え方もあつて、農林水産へ入つたわけです。ただ私は、何が何でも米の値段を上げるといふ一辺倒の旗振りには、あまりやりませんでした。それは、米の値段の値上げだけだったら、今度は消費者の方に向かつてものを言う時、ものが言えなくなるでしょう。だから、両方のことを考えながらやつていかなければならぬなあということ、その頃からそこはかたない疑問を持っていました。そういう疑問を持つていううちは、やはり農林水産委員会へいつて、いろいろ流れとか動きとかを知っていなければならぬという強い気持ちがありましたね。

■一年生議員としてⅣ―国会対策委員会

伊藤 党の役職としては、学生部長でしようけれども、国対には属するんでしょう。

海部 属します。国会対策の副委員長になって、最後は国会対策委員長もずっとやりました。国会対策というところへずっと入れられておつた。入れられておつた、というと言い方が悪いな。

伊藤 竹下さんもそういうお話でございまして、「ますらお派出夫会」とか彼は言っていましたけれども、ほんとうによく委員会で採決があるという、こっちに行け、あっちに行け、とやらされたと言っていました。

海部 竹下の話になると、「国対八段」とか、そんな話はしませんでしたか。国会対策がどの程度までできるかで、「この人は国対五段だ」とか「海部さんは国対八段だ」といつていましたね。任せておいて法案を預けておけば、一週間徹夜してでも、この人はつくりあげてくれる人だ、とかね。その代わり、野党の議員の議員宿舎に夜、（手みやげを自分で買つて持つて行かなきゃならんのだけど）、行つて話をしたりね。国対というのはそこまでやるんですよ。

楠 初当選の時から、国対に属しておられたのですか。

海部 はい。国対の採決要員です。

伊藤 それは、もう必ずなるそうです。

海部 はい。全員必ずなつて、そこでじつといつも座つていゝのが、出世の糸口の第一歩です。

伊藤 ずっと座つていないといけないそうです。彼はだから「ますらお派出夫会」と言っていましたね。

海部 二年生になると、そこへ出席を取りに行くことができるわけだ。一年生は、みな座つてゐるから。

伊藤 階級制で厳しいでしょう。

海部 それをやると、政務次官に行く道が開けてくるわけだ。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 3 回

一、二年生議員時代（1960～1965）

【2001年3月5日16:00～18:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

〔記録、編集〕 丹羽 清隆

■現在の政局から（森内閣不信任案否決）

海部 「内閣不信任案の採決に関して」山崎拓なんか上がって投票しているんだ。田中真紀子も投票しているんだ。みんなにワーツと野次られておったな。

伊藤 しかしなんでこの時期に「内閣不信任案を」出したんですか。否決されるとわかってるのに。

海部 だから四党も四党だ、と思うんですけれどね。

楠 でも否決されたということは信任されたということだから、その直後の自民党大会で降ろすというわけにいかないですよね。

伊藤 森さんを助けているみたいな感じになってね。

海部 全部森を助けてあげている。だからある意味では、森君というのは非常に幸運だったんだ。一番の見せ場に加藤紘一が現れてくれた。加藤紘一の乱が、森の方へと党内結束の力を与えたわけだ。それで緊張感がガタツとなくなった。ところが今になると「否決はしたけれども信任したという意味ではない」とか、いろいろなことを言い出しているけれど、これは大きな筋から言って間違いですね。

伊藤 そうですね。議会政治なんですからね。

海部 そう、だから議会で手続きをとって信任したら、もう信任ですよ。ほかに何事もなければ、この次の時まで森を取り替えることはできないわけですね。

伊藤 自民党もやりにくいだろうな。

海部 本当にそうですよ。

伊藤 新聞を見ていると、いつ替わるか、ということになっているけれど。

海部 新聞はそんなことばかり書いていますけれどもね。そして、もうすぐ替えるぐらいのことを言ってくださいというんだけれども、そうもいかない。

伊藤 本人が辞めないと言うんだから。

海部 本人は次々といろいろな問題を出して、「これをやります、全力をあげて一所懸命やります」と言っていれば、それは別に悪いことじゃないから。そうでしょう。悔しかったら選挙で勝ってこい、ということですから、これはしょうがないですね。

■ロバート・ケネディの来日

伊藤 それではよろしいですか。前は、昭和三十五「一九六〇」年に当選なさって、初期の頃の国会とか党の役割みたいなことをちよつと伺いました。そして昭和三十八「一九六三」年に再選されますが、その間に西ドイツとアメリカにいらつしやいますね。このへんのことからちよつとお話をいただけるでしょうか。

海部 いろいろ思い出そうと思って、資料を引っ張り出して見ておったんです。当選をした時に、早稲田大学に司法長官だった頃のロバート・ケネディが来ました。それで演壇の上に、靴も脱がずに腰をおろしたので、前の方の連中が騒いだ。やつぱりあれはブレッシユ・マナーだといって、みんな指をさして騒ぎ出す。左翼の連中で、それに便乗してアメリカ帝国主義は駄目だから、こんなものを歓迎すること自体も反対だという勢力もあつたんですよね。

伊藤 それが主ではないんですか。

海部 まあ、腹の中にあつたのはそれですけどもね。だから、何か事があつたらぶつ飛ばしてやれ、ということですね。歓迎委員会をやっていたのは、当時商学部長の中島正信という教授です。雄弁会の会長ではなかった。僕らはその先生から頼まれて行っていたわけです。「若い政治家もいるし、それはみんなわが輩（中島教授）が育てたんだ」と言って自慢していた教授ですから、みんなが行った。あの時、なぜあんなことになったかという、僕もつまびらかな事情はわからない。とにかく演壇の上へ腰掛けちゃってから騒ぎ

が大きくなったんです。「帰れ、帰れ」とか、左翼独特のシュプレヒコールがあつたわけです。雄弁会の会長の時子山「常三郎」先生は僕らに「なんとか、君、学生を抑えてくれ」と言われる。そこでちよつと待てということで、みんなで抑えた。最後はそこで「都の西北」、早稲田の歌を合唱して、それでやめにしようといって、収まったことは収まったんですが、とにかく土足のままで演壇に腰掛けてはいけない、これがあの頃の主張だったんですね。

伊藤 いちおう話はできたんですか。

海部 できたんです。その時はみんな「都の西北」を合唱して終わったんです。当時は、体育会の連中もだいたい入っていましたから、僕らもそういうものと横の連絡があつたし、右の学生も左の学生も、早稲田の歌を歌う時には一緒になるところがありましたから、それはそれでよかったです。

その時ロバート・ケネディを案内して来ていたのが、セリッグマンと呼んでいましたが、アメリカの書記官です。日本語ができる。そして「アメリカでこういうことになっても、そんなにアメリカの学生は騒ぎませんよ」と言う。「そんなことを言っても、ここは日本だ。お前ら、そんなことを言っているから駄目なんだ。東南アジアへ行ってもどこへ行っても、アメリカはあれだけ協力しながら、あれだけお金を出しながら、いつでもこういう目に遭うじゃないか。それは、その国の文化や歴史や伝統をきちんと理解しないで物を言ったり、援助さえすればいいだろうというような態度があるから、逆にこういう時には反発をかうんだ。ケネディにもこのことを言え」と言ったら、言いました。

そうしたら、ロバート・ケネディが「あなた、いつペンアメリカへ来い。来たら、どこの大学にでも行って、演壇に腰掛けて話をしてくれ。絶対怒らないことを私が保証する。それがアメリカの民主主義と日本の民主主義の違いだ」と言うんだ。「民主主義」という言葉を使ったかどうか、僕はそう理解したんですが、僕は「アメリカはアメリカ、日本は日本のやり方があるから、ここでそんなこと

をやつては駄目なんだ」ということを言ったことを覚えています。

セリッグマンという書記官が、そのやり取りが大変興味深かったといって覚えていて、帰ってからすぐに私にアメリカへいっぺん来てくれという。「一切合財ご迷惑をかけずに、あなたが行きたいところ、見たいところをご招待します。まさにアメリカ民主主義というものは何であるかということを、実際に見てもらうための旅行に招待するんです」というわけです。

けれども僕は、そのちよつと前にドイツからの招待をもらっていました。ドイツのスポーツ・ユーゲントに招かれて、ドイツの青少年活動を一ヶ月視察に行くことでOKをとっていたんです。日本のいろいろな青少年グループの代表団が行く団の顧問ということについていくことになっていたものですから、「それが済んでからでいいか」といったら、「それが済んでからどうぞ」ということでした。

■ドイツ行き（一九六二年八月）

海部 だからいまから思うと、ずいぶんのどかな時代でした。夏休みに一ヶ月ドイツに行つて、南端のバイエルンの山の中まで行つてスポーツ・ユーゲントと一緒に遊び回ったんだから。いや、あの頃はもう代議士になっていたんだから、遊び回った、ではなくて、いろいろいろいろ勉強したり、刺激し合ったり。私も青年学生部長ですから。

ドイツにはあの頃「ゴールデン・プラン」、青少年育成のための黄金計画というものがあつた。家庭青少年問題大臣というのがいて、その法案が通つたことをわれわれに説明しました。いまでも覚えていますが、これはドイツ的だけれども、暇な時間を自由にさせておいてはよくないということをちよいちよい見たり聞いたりするから、それを全部いただいて、暇な時間を良い方向に使えるように指導してやろうということですね。日本流に訳してもらったら、「余

暇善導政策」だというんだ。余った時間を善い方に導く。その余暇善導政策の主たるものは何であるかというと、日頃都会の中で生活している都会人の甘つちよろい、なまっちよろい青年をバイエルンの山の中で合宿させて、朝はきちんと起こして鍛えてやる、そしてスポーツに打ち込む、というんです。

伊藤 メインがスポーツなんですか。

海部 スポーツ・ユーゲントといました、よく調べてみたら。

伊藤 ヒットラー・ユーゲントですか(笑い)。

海部 ヒットラー・ユーゲントじゃないんです、スポーツ・ユーゲントです。でも見ていると、似たようなものです。テントの中でみんなが団体生活をする。僕の記憶に間違いなければ、そこに来ているのはみんな、その土地の小学校、中学校、青年学校の中の先生の有志なんですね。強制ではないんです。それから集められているスポーツ少年団の連中は全ドイツから来ていました。だから日頃接触のない先生と生徒が、たまたま合宿期間中だけ、教師と子どもという関係になっている。あまり勉強はやっていないみたいで、朝からかけ声を出して駆け回っている。日本のように飯盒炊さんはやりませんが、「川の」ほとりでニワトリを追いかけて、ブタを追いかけてたりして、みんながそれぞれ自分たちの食事をつくっていました。

伊藤 ボーイスカウトみたいなものですか。

海部 そうです。昔のヒットラー・ユーゲントじゃないけれども、スポーツ・ユーゲントというんですね。

伊藤 子どもですか。

海部 いいえ、学生です。

伊藤 大学生ぐらいですか。

海部 ええ。大学生、高校生です。向こうの高校生、中学生というのは、当時のわれわれと比べたって立派なものですよ。堂々として筋骨隆々たるもので、相撲を教えるも向こうのほうが強いような者がいっぱいいましたね。そういうところで四十日、ほうぼうを転戦しました。これは申し上げたどうか忘れましたが、最後は必ずベル

リンに連れて行くんです。ドイツ政府の計らいです。

まだベルリンの壁のできた翌年ですからね。そこでハンカチを振って泣いている人がいたとか、そこで殺された人がいるとか、生々しい話を見せられたりする。分裂国家がいかに悲惨なものか、というのを盛んに教えられたことを覚えておりますね。あの頃は物見台のようなところをちよつと上がっていくと、東側が見えるんです。西ベルリンから東ベルリンが見える。そういうところに行つて、それを見ながら、またそのうちに一緒にやるんだ、という祖国再統一への誓いをみんな心の中に育てるというような教育に利用していたと私は思います。

楠 まだ当選一回目の頃ですね。それで四十日間ですか。選挙区のこととは心配ではありませんでしたか(笑い)。

海部 今から思うとね。最近は何ウェートに行つても、式典が終わればすぐ飛んで帰ってくる。そして今度は絵の展覧会と呼ばれているから、絵を持ってエジプトに行きますが、これも行つたら二日間で展覧会を終えて、向こうの大臣がもしいたらみんなと会おうというのでいま日程を組ませていますが、行つて帰つてくれればせいぜい一週間です。

ところがその時は四十日もバイエルンの山の中にいた。それのみならず、さっきの話でアメリカ大使館から「それじゃあ帰りに来てください。そこまで迎えに行きます」と言われているわけだ。迎えに行きますといつても、パンアメリカンの飛行機があるから、それで行つた。いまから思えばよく受けたなあと思います。四十日間のドイツが終わって、一緒に行動していた青年団の代表たちとはさようならをして、僕だけ、アメリカのお使いと一緒に、太平洋を越えてアメリカに行つたんですからね。

伊藤 それはベルリンからですか。

海部 ええ、国務省の招待です。

伊藤 議会は閉会中だったんですか。

海部 夏休みですから、閉会中だったと思います。

田中 ドイツの管轄の役所は文部省になるんですか。

海部 ドイツのわれわれを招待したところですか。どこでしょう。文部省というのは、あとから調べたら、ドイツを統一していた時の文部省というのを戦後一時的になくしたんです。文部省を使つてドイツ連邦全部に適用するような学制改革をしたり、歴史教科書を変えたりするから、それはなくす。そして全部地方自治で、地方の町村単位の教育委員会みたいなものがやるんだといつて、アメリカの占領軍の指令を拒否する理由にしたんです。

■アメリカ行き（一九六二年九月）

田中 当時は自民党の部会というのがありましたね。先生は文教族というか、その頃はまだ入っていらしゃってなかったんですか。

海部 あの頃は、文教部会とか、社会労働部会とか、私の選挙区は繊維の産地ですから、商工部会とかに入っておりましたけれども、そんなところで「族」と言われるほど、まだ興味も持っていなかったし、人も認めていなかった。それより幅が利くのは、組織委員会の青年学生部長になったことです。それでやっていたほうが面白いし、やり甲斐があるというので、自民党の青年学生部長というのをやっていたんです。

田中 すると、特にそういう文教部会に入っていたからこういうお話があった、ということではないんですね。

海部 そうではありません。青年学生部長で、一番最年少の議員だったから、「フォーリン・ヤング・リーダー・エクスチェンジ・プログラム」という名前のプログラムに乗せよう、ということでした。伊藤 それはアメリカのほうですか。

海部 アメリカのほうです。そして、アメリカの方がそれに乗せるといつてきた。それからドイツのほうは、ドイツから憲政会とか日本青年団体連合会とか、堅山さんの友愛青年同志会のようなところ

へ「代表者を招待します」という話が来たものだから、そういうところが代表者を選んだのでしよう。その時に、どなたかリーダー役がいるというので、じゃあ国会議員が入ったらいということになった。私はその時は、これは大変役得だったんですが、昭和生まれのたつた一人の議員だった。それはだいぶ新聞もPRしていてくれたので、ドイツのほうもはまったということでした。

それからアメリカのほうへ行つた。アメリカは団体旅行ではありませんから、今度は一人です。オンリーワンで、しかも常に人がついて「どこでもご案内します。行きたいところへ行ってください」と言われた。いまから思い出すと、ワシントンの国務省の中にそういうセクションがあるんです。外国の若い者を招待する。またそれを受ける受け皿が、全アメリカに網の目のように張られているわけです。それが受け入れをつくつて、本人の希望を聞いて、ザッと回してくれる。あれはいい制度だったと思います。

伊藤 これは何日間ぐらいですか。

海部 アメリカは、やはり四十五日間です。それでその四十五日間、一日二十ドルずつのお小遣いをくれた。一ドルが三百六十円の時ですよ。そして忘れませんが、本とレコード、当時はLPレコードの全盛時代でしたが、全部タダでした。欲しいものがあつたら、選んで、身分証明書を見せて、サインをすればいいという。ただ、ちょっとそこは錯覚しましたが、そんなに調子がいいなら、たくさん買って持つて帰ればお土産にも困らないと思つた。当時は「アメリカン・ザ・ビューティフル」というのがはやっていた頃で、「これがシネラマだ」という映画が日本でも封切られた頃です。その映画の冒頭と最後に「バック・グラウンド・ミュージックが「アメリカン・ザ・ビューティフル」というんです。それは全部は忘れたけれど、初めの方は「J・オー・ビューティフル、オー・スペイシャス・ガイ」と、メロディーもすごくいいわけです。これをみんなに土産に買ってやればいいと思つたら、あるレコード屋で「二枚目からは自分で払ってください。一枚だけがお土産だ。そう

書いてあるじゃないか」と言われた。こっちは英語の能力がないから、裏を見てもわからないわけだ。それで一枚だけもらった。一枚が二ドル二十五セントぐらいでしたね。もう一枚はお金を払って、二枚買って帰ってきたことを覚えています。

本の方は全部タダだから、なるべく部厚いきれいな本を買えといっている。当時、ニクソンとケネディのキャンペーンの予備選のいろいろな背景を書いた本や、マコーマックというアメリカの下院議長の息子がケネディと予備選を争った時の本とかがあった。写真もきれいなものが入っている。なにしろあの頃本棚にはきれいな本があまりなかったので、よし、この金文字の背表紙のなるべくきれいなものを買っていいこうと思って、どんと買った。本は一冊ずつですけれども、タダでくれた。

ですからアメリカの政策というのは非常に面白いと思うんです。そしていろいろなことを全部、ピンからキリまでとってあるわけです。そして去年、そこに掛けてありますけれども「壁に掛けた額を指す」、ニュー・ミレニアムでフォーリン・ヤング・リーダーのみならず、アメリカの国務省がインバイトしたお客さんを選んで、もう一度集めるセンチメンタル・ジャーニーをやったんです。僕も選ばれて、来てくれますかと今の大使が言ってきたので、行ってきました。

そうしたら、その時に驚いたけれど、ワシントンへ着いたら、飛行場に人が来ていて、「Oh, Mr. Kaifu, very good. Nice to see you again.」なんて言う。よく顔を見ると、これは四十八年前に俺を案内してくれたアメリカ国務省の通訳だ。「Are you Mike?」と言ったら、「Oh, yes.」と言う。覚えていたわけだ。記録に基づいて、海部を案内してアメリカと一緒に回ったのはマイク・ニシムラだということがわかるから、それに連絡をとって、「今度ミレニアムの表彰者を呼ぶから、お前が来て彼と一緒に回れ」という手配をしたんですね。そういうところは心憎いですよ（楠 芸が細かいですね）。そして国務省でみんな集めてセレモニーをやって、それでさよう

ならではないんです。みんなを表彰してくれて、「アメリカへ来た旅行を活かしながら、それぞれの国の認識のために貢献している皆さんです。そして今回も、どこへでも行きたいところへどうぞ行ってください。もし、ご希望がないようなら、アメリカ側から希望を申し上げます。ミスター海部さんには、テキサスの連中がもう一回歓迎したいといってお待ちしておりますから、テキサスへ行つて、スピーチをやつてやってください」という。そして当時の新聞をとってある。テキサスでミスター海部がスピーチしたとかいう記事が載っているんですね。

僕はあのころは生意気だったから、偉そうなスピーチをしているわけです。アメリカの民衆に対して、「A piece of good advice to you.」なんて、そういうところだけ英語でゆつくり言つてね。「白黒問題を片づけない限り、いくらあなた方が自由陣営の親分だといっても、東南アジアへ来た時にみんな石を投げられてほうほうの体で帰るじゃないか。私はあえて、早稲田大学に来た時に演壇へ腰掛けたからというようなことは言わない（言っちゃつてから言わないと言っている）。あんなことは僕はもう忘れちゃっているんだ（ここでみんなはワーツと言うね）。けれどもそれ以外でも、せっかく善意の国アメリカが、僕は善意の国だと思うけれど、なぜ排斥されるのか。やはりそれは白黒問題が片づいていないからでしょう」ということを言つた。

新聞がその通りに書いた。そうしたら、あの人をいっぺん招待して、黒人ばかりの住んでいるところがあるんですが、そこにご招待するから、そこでいっぺん生活と労働を共にして、暮らしてもらつて、その後もう一回われわれはそういうご意見を聞きたいと思う、というようなことまで言われた。まあ當時はいろいろ生意気なことを言ってきたなあと思つたんですけれども、その速記録がみんなとってあるんです。よろしかったらお持ちくださいといわれて持ってきたけれど、「お前のところは、これをとっていたのか。えらい執念深いなあ」と言ってきた。しかし、「あの海部さんが将来総理大

臣になるだろうなんていうことは誰も思わなかったけれども、これは将来性のある政治家をみんな呼んだんだから、何を言ったか、何を考えているかは、全部とっておく」ということだった。

それで僕が表彰された理由は、のちに総理大臣になったからではなくて、日本に青年海外協力隊という制度をつくって、やってくれた、そのことで表彰させてもらうんだ、と表彰理由を言うわけです。面白い国だなと思いましたね。

伊藤 それで四十数日間アメリカ中を回っていたわけですか。

海部 はい。回ってきました。

田中 具体的にはどこですか。

海部 行きたいところはみんな行っただけです。まずワシントンに入って、日程をつくらしたりするのに四、五日かかった。それからもちろん、ニューヨークへ行きたい、シカゴへ行きたい、セントルイスに行きたい。セントルイスには伯父が一人おりましたからね。それからアメリカ案内で覚えていたグラントキャニオンへ行っただけ。エローストーンにも行きたいといったけれど、あそこは遠すぎて行けなかった。山火事があるから危ないとかで、グラントキャニオンへ行っただけ。それから今度はダラスへ行って、チルドレスという小さい町へ行っただけ。それはチルドレスという町の商工会議所や傷痍軍人会がスピーチを聴きたいというので、何でもやりましょうということで行っただけです。

それからボストンへ行っただけ。そしてそこでボストンポップスを聴きたい。ボストンフィルと違って、ボストンポップスは野原に寝転がって軽い音楽をやる。日本でも本で知っていたから、それを見たいと言ったら、結構ですということだった。それも後日談があるけれど、アーサー・フュードラーというのが、ボストンポップスになると指揮をするんです。ボストン・シンフォニーの時は、ほかの人がやるんです。それで行って見せてもらった。

そして今度はハーバード大学でスピーチをやった。そのスピーチも偉そうなことを言っているけれど、向こうはみんな残しているん

です。「日本はこんなに、アメリカの民主主義のいいところだけみんもらって、民主主義の国になった。そして率直にいうと、民主主義というのは、日本が戦争で痛めつけられて圧制で人間性がなかった時代に、アメリカが達成した制度であって、人間の制度では一番いいと思っている。けれども、今度アメリカへ来たら、率直に勉強させてもらって日本へ帰る。いまはもう日本には民主主義が根付いている。根付いた証拠が、ここへこうやって来ているんだから。私は本当ならば日本で国会議員になれる立場ではなかったけれども、大学を卒業してしばらくたって、一所懸命演説をやったらみんなが投票してくれた。いまは当選したから、私は民主主義の本当に生きた証拠だ」。

そこだけでやめておけばよかったのに、「けれども、アメリカの民主主義を全部真似はしない。例の白黒問題がある」。これは、早稲田の中島正信に教わったんですね。「そういうことがあるから、せっかく善意でもっていい国にしてやろうと思ってるおやりになっても、排斥される。ああいったことは、やはりやめた方がいいんだ。率直に言わせてもらえればそういうことだけれど、まだほかにいいところも悪いところがいっぱいあるだろう。今度は全部を見せてもらって、いいことはそのまま受け止め、日本へ持ち帰って新しい日本の国づくりに私は利用させてもらおう。それが今度招待を受けた私の唯一のお返しなんだ」というようなことを偉そうに言っていた。当時の記録が、みんなとってあるのには驚きましたね。

楠 先生は、そういう演説をずっとご記憶なさっているんですか。今回ここでお話くださるために、どこからか記録を読んだというわけではないんですか。

海部 それは正直にいうと、マイク・ニシムラという僕を案内した通訳がいて、去年のことだから、その後も仲良くやっております。それで、「今度おれはいろいろなことがあるから、あの時お前がおれに見せてくれた新聞の切り抜きを全部送ってくれ。それから演説の控えももう一回見たい」と言ったら、全部コピーして送ってくれた。

それがある晩、ずっと繚いたら、ずいぶん思い出しました。その頃マイク・ニシムラが連れて行ったのが、アイゼンハワーの孫かなにかで、マイケル・ギルという名前の男がいて、将来自分はアメリカの大統領になるんだという志と希望だけはやけに大きい青年がいて、その青年とすることについて議論したもので残っているわけです。あの頃はずいぶん偉そうなことを言ったものだと思うんですが。そしてそういう青年「海部氏自身」と連絡をつけて、また呼んだということだ。僕と一緒にいった中には、いろいろ珍しい人がいた。副首相になっていたり、女で大臣をやったりした人も、当時のヤング・リーダー・エクスチェンジ・プログラムに招かれた中にいたわけですね。アメリカの外交政策というのは、やはり目盛りが相当に長いということが言えますね。

伊藤 そうですね。それは世界各国ですね。

海部 はい、世界各国です。フリーキャンプには全部出ていましたね。共産国からは呼んでいないけれど。

田中 ボストンとハーバードに行かれて、西海岸にも行かれたんですね。

海部 はい。最後は、また話が飛ぶけれども、その頃大統領選挙の予備選挙をやっていたんじゃないかな。そしてあの年は、たしか負けに負けていたニクソンが、最後にまた負けた。カリフォルニアの知事選挙で。僕はそれを聞きにいつて、見にいつて、ああ負けたなと思つて見てきたけれども、「ニクソンは」その後、蘇るんだよね。その次の大統領選挙で蘇るわけだ。偉いものだなと思つた。その思ひ出はずいぶん強烈です。

田中 アメリカで何を学ばれたのか、そのへんのことをちよつとお願いします。

海部 アメリカから学んだのは、人間を大切にすることです。そして一人ひとりの意見というものを大事にするということでしょうね。だから、全体がこうだからといって少数意見を抹殺しないで、一人ひとりの意見を大事にするということではないでしょうか。僕

の感想からいくとそういうことです。しかしながら、社会全体に広く黒人問題という大きな病んでいるところがある。それはいまでも変わりません。

■海外視察の総括

伊藤 そんなに長い期間日本を離れているときには、いちおう議会の承認を得て行くわけですか。

海部 もちろんです。議会の承認を得て行く。当時、たしか三木武夫先生が与党自民党の幹事長かなにか枢要なポストにおったから、「頼む」と言うと、「うん、うん、大いに勉強してこい」ということです。「国会（こつくわい）もちようど夏休みに入るよ」と言つてね。

伊藤 両方とも費用は向こう持ちなんですね。

海部 そうです。アメリカの如きはお小遣いまでくれた。ドイツへ行った時は、三木さんから当然のここのように小遣いをもらつていった。あの時代はいい時代ですよ、いまから思うと、（政治資金の）届け出も何もしていい時代ですね。

伊藤 やはり「行つてまいります」というと、三木さんがくれるんですね。

海部 ええ。ちよつと脱線だけでも、僕はその後もときどきヨーロッパへ行きましたけれども、ここ「楠氏を指す」のお父さんで行つた時なんか忘れませんのは、フランスの大使が来て、驚きました。「これを先生にお渡しするように」といつて、フランスの金を持つて来た。百万円ぐらいかな、あれは。

楠 フランス駐在の日本の大使ですか。

海部 はい。どうしてかといつたら、わかりませんが、当時は三木さんが外務大臣の頃だな。外務大臣から来ましたという。あの頃から大臣交際費というのがあったのかな。詳しく聞いてもおらんし、

領収書を書けとも言われない。しかしいま、こういう事件が起こっているのを見ると、何か胸が痛むわな。というのは、あの時は、干天の慈雨のようで大喜んだ。ここのお父さんはその共犯者です。一緒にもらって飲んだり喰ったりしたから。

楠 聞いたこと、なかったな。

海部 大変楽しい旅行をやったわけだが、脱線話はやめておきましょう。

伊藤 当選一回でずいぶん楽しい思いをされたわけですね。

海部 一番若いということと重宝されました。全国で選挙があると必ず応援に行かされた。そうすると「自民党もいま生まれ変わっております。一番若い代議士は自民党にあります。社会党ではありません」というようなことを、おれを連れて行ったところで、わざと司会者が紹介した。

伊藤 そうですね。その頃は社会党はだいぶ老齢化していますからね。

海部 例えば佐藤観樹のお父さんの佐藤観次郎なんていう人は、中央公論の編集長を終わってからなった人だから、推して知るべしでしょう。それから佐々木更三なんていう人が委員長でいたけれども、「アメリカ帝国主義は、日中共同のテチ（敵）だあ」なんて演説をやっている頃だから。「日中共同の『テチ』だと言っているようでは駄目だ。正確に『テキ』だと発音できるようにしたらご挨拶に来い」と言っていると、みんなワースと喜んだ時代ですからね。ずいぶん言いたいことを言っていました。

だから、目立って自民党が若かったんです。中でも僕が一番若かったものですから、いろいろ役得があったということですね。

伊藤 まあ、使い勝手もよかったですよね。

海部 そうですね。簡単にほうぼうに連れて行かれて、国会を休もうが、委員会を欠席しようが、「党のために選挙の応援に行っている方が、君、大切なことだよ」という。

伊藤 それは三木さんですか。

海部 三木さんです。そう言われて使いに出されたんですからね。

伊藤 三木さんも、いいのが来たなと思ったでしょう（笑い）。

海部 けれども、おかげでいろいろな役得がある。当時の話からいって、僕ぐらいいろいろなところを見て知っている議員はおりませんでした（伊藤 国内ですか）。はい。党内でもね。だからそれだけは、教育されて大変よかったと思う。

伊藤 これからあとも、ずいぶん外国に行っていらいっしやいますけれども、最初の時ですからね。

海部 初めから、一年生からそんなに行かれる人はいないもの。それはありがたいことでした。

伊藤 やはり若くして「国会議員に」なったというのはいいことですね。

田中 ドイツへ行かれた時は、飛行機ですか。

海部 飛行機でした。

伊藤 このころの飛行機だとまだ直行便じゃないでしょう。

海部 ストップしていますね。いまから思うと、南回りで行ったものですから、最初はたしか香港に止まって、シンガポールに止まって、それからインドのどこかへ降りて、それからテヘラン、そのへんに寄ったのかな。よくわからないが、南回りということだった。そしてまる一日半以上時間がかかっているのに、ヨーロッパへ着いてもまだ同じ日だった。嘘みたいな話だ。そんな旅行でした。

伊藤 やはり最初の外国旅行ですから、非常に印象的だったということですね。

海部 大変印象的でした。しかもそれがドイツとアメリカですから。ドイツというのは、当時池田勇人さんが総理大臣でしたが、「海部君、ドイツへ行ったらアデナウアーに会ってこい。あれは傑物だよ。わしが紹介状を書きよ」と言っていて、池田勇人が紹介状を書いてくれたんです。

伊藤 それでお会いになったんですか。

海部 会いました。ボンの大統領官邸というんですか。それからア

アメリカでは、言うまでもなくケネディ大統領に会った。行っていたときに、ちょうど『サーティーン・デイズ』という映画で描かれた時期の前後ですから。簡単に会ってくれると思っただけなのに、なかなか会ってくれない。長く待たせる。なんだ、長く待たせるな、なんてブツブツ文句を言いながら待っていた。ようやく会えることになって、「こちらの部屋へどうぞ」ということで行ったら、出てきた。やあやあとお手取りして、その場で写真にサインした。そして、「どうぞゆっくり見ていってください。今日はいろいろご苦労さんでした」とかなんとか言って、スツと引き込んでいった。けれども、それが当時の日記と比べ合わせてみると、ぼつぼつキューバの問題が航空写真でわかり始めた頃ですね。そしてあの『サーティーン・デイズ』という映画を改めて見直したら、ソレンセンという当時の秘書が書いた回顧録が出て、その中に、これは間違いないという写真が出てきて、国家安全保障会議が非公開に開かれた日にあたるわけですね。あの時はそんなことを全然感じなかったけれど、時期が経ってから、ああそうか、よく考えるとあの頃か、ということですね。

■青年局次長（一九六三年十二月）

田中 先生は自民党の青年局の学生部長をやって、二回目の当選の時には青年局次長をやったということですが、自民党の青年局というのは具体的にどんなお仕事をやっていたんですか。

海部 自民党の青年局というのは、党の中に若い党員をたくさん入れるための尖兵だったんです。当時僕の一年先輩には、際立って若いのがいなかったわけですね。僕の一級上では、竹下登が一番若かったです。その頃までは学生部なんというものもなかったが、僕が入って学生部長になって、学生部をつくった。

伊藤 やはり各大学の弁論部とか、そういうところの人たちが入るんでしょね。

海部 結局そうですね。みんな顔馴染みでしょう。だから、各大学の弁論部へ行くと、「海部さんでも当選して代議士になったんだから、おれも頑張ろう」というのが出てきたわけですね。大学の雄弁会の学生というのは、だいたいそういうのが多いから。

伊藤 そういうのを囲い込むわけですね。

海部 はい。

田中 特に早稲田で努力されたということはありますか。

海部 特に努力をしなくても、早稲田には初めからそういうのが多いわけだ。むしろ慶應とか東大から来るのは珍しかったから、もてたでしょう。「お前は東大か、よろしい」といって、大事にちやほやされるんだ。慶應もそうだ。

楠 当時は左翼全盛の時代ですね。特に大学の学生で保守政党支持なんていうのは、ちょっと気後れするような時代だったんじゃないかと思うんですが、そのあたりはいかがでしたか。

海部 その通りですよ。だから僕たちは、それは間違いだと言って、よく雄弁会の演説練習を校庭でやったりするんです。七十周年記念のときに早稲田で演説をやっていたときには、襲われて引きずり降ろされて、大変な目に遭ったこともあるんだ。これは当時の学生の頃の古い古いアルバムです「アルバムを示す」。今日これを見ていたら、そんなことになっているんです。この中に、「人生劇場青春篇、早稲田大学法学部」なんて書いてある。

伊藤 よくとってありますね。説明のキャプションがついているじゃないですか。

海部 ここにぶん殴られた写真があつて、「頬の傷いまだ完全に快くならず、闘志五体にみなぎる」なんて書いてある。ここに貼ってあつた写真のほうに、殴られた怪我のあとがよくわかったんでしょね。

伊藤 なんて殴られたんですか。

海部 早稲田大学事件の時に、十二時になるまでに退去してくれといわれて、退去しないでいたら、本富士署と高田馬場の警察が雪崩

れ込んできて、みんなぶん殴られて検挙されたんです。僕が三年の時の二年生の山崎栄一というのは、その後毎日新聞へ行った。杉浦長太郎というのは大日本海上火災へ行った。これはお父さんがそちらの会社の関係だったから、コネで入ったんですけれども。これらがみんな一緒だった。

伊藤 左翼全盛といっても、左翼じゃない学生だっているわけですからね。

海部 そうです。だから、みんな喜んで僕らの演説を聞きにくるわけです。また、そんなことよりも早慶戦のほうが動員力があつたんですね。それでその切符をざざと持っている、もてるわけだ。切符をやるから来いという。そういうことがありました。

田中 その時、例えば自民党の青年部と左翼と討論会をやったとか、そんなようなことはあつたんですか。

海部 左翼と討論会はやらなくても、学校で討論会をよくやる。早慶討論会とかね。そういうところに必ず左翼が紛れ込んでくるんです。それはよくやりました。

伊藤 野次るわけですか。

海部 野次るわけです。それから勇気のあるやつは、慶應側でも左翼がかつたやつを代表に出す。それから早稲田にも、あの頃民青と言いましたね、あいつは民青だから気をつけるなんて言っていたけれど、民青から来ているやつが入ってきた。たわいもない題ですよ。「徴兵制度は是非か」という題で、くじで是非を決めるんですから。あんな納得できないこともないけれど、それは教授に言わせると、そういうところでどういう論理構成をしてくるかということなんだ。

楠 今というディベートですね。

海部 そうなんです。だから僕はたしか「徴兵制度、これぐらい民主的な、みんなで国の役割を分担する制度はないんだ。志願制度にしたりますと、金持ちの息子だけは兵隊にならないし、貧乏人の息子がみんな兵隊にされるんだ」なんていうことをどこかで聞きかじ

つてきては、喋っていたんです。

伊藤 反対の立場に立てば、また別の意見ですね。

海部 はい、別の意見です。「パチンコは健全娯楽かどうか」というのもありました。

田中 それもくじですか。

海部 くじです。僕は「パチンコは健全娯楽である」という方でした。

田中 それはどういう理屈をつけたんですか。

海部 当時は速射法はありませんから、一発ずつですからね。「その一発ずつの玉を見ていると、釘を通り抜けて、ポンと穴へ入ってじゃらじゃらという快音がして、玉が五個ないし多くても十個だが、出てくる」。たいてい五個です。入る位置が違えば三個とかでしたね。「その時の音と快感は何物にも換えられない。これは健全だ。そこでみんな欲求不満を解消しているわけだから、こんな健全なことではない」というような演説をやったことを覚えています。勝手だなあ。

■青年海外協力隊の構想

伊藤 年譜を見ますと、自民党青年婦人対策特別委員会の副委員長と書いてありますけれども、これは青年部のものですか。

海部 青年部とか学生部というのは、党の組織委員会の中の党员組織としての青年対策です。それからその青年婦人対策特別委員会というのは、政務調査会の青年対策特別委員会です。

田中 政調会ですか。

海部 はい。だから、法律とかいろいろなもので、政策的にこれはやるべきだという時にはそちらを使う。だから上の方は、いつも重なっていたと思うんです。

伊藤 そういうことをおやりになることと、その次の年に海外青年

協力隊の構想をまとめられることは、関係があるわけですか。

海部 あるわけです。それは重要な青少年政策だと、私は受け止めたんです。それはケネディが大学でやった演説で、「将来のために平和と繁栄を切り拓くためには、青年が先頭に立つて頑張れ」という、アメリカン・ピース・コーですね。あの演説を聴いて、これは日本も当然一緒になってやろう、やれると思ったんです。

ごく初めの頃に、アメリカの青年がアフリカのどこかの国で書いたハガキが現地で拾われてしまった。書いてあったことが、「ここはひどい国で、ここに住んでいる人は人間じゃない」というようなことだった。それはなんだと言って、反米感情をもたれて、みんな叩き返された事件があったんです。われわれはそうじゃないと思っていましたが、アメリカのピース・コーのやっていることを調べてみると、アフリカだけではない、アジアでもみんな排斥されているんです。

アジアで排斥された理由は、自分たちは手を汚さない、足も汚さない、農業指導を要求しても、口で教えてはくれるけれども、やられるのは現地人だけで、アメリカのピース・コーは中へ入ってやらない。またやろうと思っても、いまから思えば、あれは無理だったと思うんです。リサーチ不足です。われわれは稲作民族だからすぐできるけれども、あのぬかるみの田んぼの中に入っていくことはアメリカ人にはできないですよ。ところが現地の青年や現地の人々が欲しがっているのは、そういったものだったわけだ。

最初の頃アメリカは、バングラデシュのコミュラーというところでもそういう失敗をしていたんです。田んぼに入っていないんです。もちろん入った経験がないからですが。そこに日本の青年が行ったら、すぐ「田んぼに」入って行って、すぐにやり始めた。鮮やかに田んぼをつくって、一年経ったら収穫する。それまでコムラの農業は手蒔きですからね。ミレーの「晩鐘」のような田植えをやっていたわけだ。それを、本当に入っていて、苗をつくることを教えて、苗を苗代から植えて収穫しましたから、同じ所で収穫が

一挙に四倍になった。それはそうでしょう。耕すこともしないで手で投げていた農業と比べればね。それで大変評価を受けて、バングラデシュのコミュラーというところでは、最初に行った日本の青年が神様のように尊敬された。それは収穫が一挙に上がったからです。それだから、じゃあ行けというて、また第二陣を出したら、みんなできるんです。それで、日本青年協力隊も自信を持って、これは行けるなと思った。これからは、なにも農業だけではない、調査をしたらいろいろなことがあるはずだ。何ができるか調べてみようというて、四つの班をつくって、ずっとアジア、アフリカを調査したんです。私はその時に、アフリカの方へ行っただけです。

伊藤 この青年海外協力隊は、いったいいつ発足したんですか。

海部 もうかれこれ二十年以上になるな。

伊藤 そうでしょうけれど、先生がアフリカに行かれたのは昭和三十九年ですね。これは事前の調査なんですか。

海部 はい。

伊藤 正式には、そのあとにできるわけですね。

海部 『青年協力隊二十年史』という本があったから、ちょっと見ていたんですけれどね。

伊藤 これは、言い出しつべは誰なんですか。アメリカの真似してやろうという。

海部 言い出しつべは、みんな「俺だ、俺だ」と言っているんですよ。のちになると、みんなが「あれを言い出したのは俺だ」というので、一年以上がながいから、年の順だ。先輩だったのは、竹下いか」というふうに言うね。それから宇野宗佑は「竹さん、わしのほうが早い。わしが聞いてきて、どうやと言ったら、なあ海部、お前、賛成、賛成と言ったろう、あの時」と言うんだ。それで、俺も初めから聞いてきたんだ、と言うんだけれど。

田中 そのお三方ということですか。

海部 御三家ですよ。だから、二十周年記念誌を見ると、ちゃんと

そのことが書いてあるんです。青年協力隊の事務局長は、「トンコ節」の久保幸江という歌手がおったでしょう、あの旦那のなんとかという人です。彼が青年協力隊発足の裏話なんというのをいろいろ面白おかしく書いていたけれども、それを読んでみても、竹下登と宇野宗佑と海部俊樹さんがどこかで聞いてきて、「俺だ」といったというようなことが書いてある。じゃあその三人が、ということになったんだ。

けれども、本当に力をつけてくれたのは、坂田道太さんと秋田大助さんかな。もうちょっとまじめな話で、アメリカの大使館の然るべき人から聞いてきた。そしてわれわれ竹下、海部、宇野というのが、当時の青年局の三羽鳥ということで、こういう話をアメリカから聞いたんだといって教えてくれたのは、間違いなく坂田道太さん、それから秋田大助さん。

伊藤 坂田さんはもちろん三木派でしょう。

海部 坂田さんは石井派です。それから秋田大助さんというのは、三木さんと同じ選挙区で、三木さんと一番仲の悪い人なんだ。そんな話はどうでもいいけれども。

伊藤 いや、どうでもよくはないですよ（笑い）。

海部 それで俺は三木さんのところへ行つて、「三木先生。坂田さんと、どうせバレルから言っておくけれど、秋田さんから、『海部さん、あなた方のやっていることは素晴らしいことだから、大いにやりなさい』と激励されました」と言ったら、三木さんは、「いいことはいい、誰がやっても」とシレッとしていたな。秋田さんは、同じ選挙区で一番仲が悪い。当時は中選挙区ですからね。だからどんなにいいことを言ってもやつても、いかん、ということになっちゃうんだ。

伊藤 お互いにそうなんでしょう。

海部 それでも、「そんなのはやめておけ。応援するな」と僕らだつたら言いますけれどね。「なに、そんなことを言ったか。あいつがやっていることなら、もうやめておけ」と言うけれど、三木さん

は「いいことはいいいんだよ」と簡単に言ったな。さすが、わが親方だと思いました。

伊藤 坂田さんとは、なぜなんですか。

海部 また話は戻つてややこしいけれども、僕が青年学生部長で、宇野宗佑と竹下登が青年局長、青年局長をやっているときに、さつき政調の青年婦人対策特別委員会というのがあるという話をしましたね。その委員長が坂田道太なんです。ある程度、政務次官、委員長を経験したような人が、政調では委員長になるんです、自民党では。

伊藤 ああそうですか。そうすると、二回目の当選をされたあとに日本ユネスコ国内委員会の委員をやっておられますが、これも坂田さんですか。

海部 いや違います。ユネスコ国内委員会の委員というのは、本会議で決める問題です。割り当てです。これは何人か出さなければならぬ。ユネスコの会議というのはちよつと次元の違う話であつて、要するに一言でいうと、票にならない話だな。そうでしょう。だからよほど人の好いやつか、よし頼まれたら何でもやってみよう、というようなのが入ったんですね。ユネスコの委員会の話というのは面白くもおかしくもなかったですね。学者の難しい話だった。そして票になりません。先生、これをやってくださいという陳情も来ない。だから、だんだんみんな離れていったんじゃないかな。

伊藤 そうですか。いちおうこれは文部省の管轄でしょう。

海部 そうです。官房長が頼みに来て、引き受けて、なつて、何回か義務があつて委員会には出るんです。そういうことです。

伊藤 何か関連があるかなと思つたので。

海部 ありません、そこだけは。

■二回目の選挙（一九六三年十一月）

伊藤 この二回目の選挙は、もちろん当選なさいますが、いかがでございましたか。

海部 一回目の選挙は最初ですから、定員三人のところ、ビリの三番目でした。だから票も少なくて、五万票すれすれの得票、四万九千いくらかでした。二回目の選挙の結果はいくらか増えたんです。「票は、初めは少しでいいんだ。そのかわり、選挙の度に増えていかなければいけないんだ」と三木さんが言ったな。「選挙の度に票が減っていく人は淋しい人だ。選挙の度に票が増えていく人は将来がある人だ」と言って激励してくれたなあ。

伊藤 順位も上がったんですか。

海部 順位は、まだ二度目の時は三番じゃありませんか。票は増えたけれども、三回目の時に初めて二番になったんじゃないですかね。それとも二回目の時に二番になったかな。

伊藤 あちこちに出かけられたりしていて、地元での選挙に向けての活動はどうだったんですか。

海部 それはやりました。一年生の頃は、地元で今よりやりました。伊藤 大変でしょう。だって、一回当選したからといって、別段票が固まったわけでもないでしょうし。

海部 だから旅行に長く行ったら、帰ってきてちゃんと報告会をやった。ずっと回りをまして、町村ごとに集めて、それはやりました。

伊藤 いいタネがたくさんありますね。

海部 それからもうひとつ、私の選挙区の事情からいうと、繊維産業ですからね。いまでこそユニクロが出店して、いろいろな影響を受けて、それじゃあセーフガードを発動して救ってやろうかというようなことをやっていますけれども、当時もそういったことを気軽に聞いてあげて、すぐ反映してあげました。普通の人や普通の織物組合が陳情に行っても、なかなか役所では、時間がないとかなんだかんだと言って、責任ある答えのできる人は会ってもくれない。僕らが委員会へ行つて質問すると、答弁は義務だから出てきて答えてくれますね。それをやって、今度はその速記録を送ってやるんです。

そうすると、組合の人は喜んで集まってきましたね。

当時は立場が逆で、日本が安いものを売り過ぎるというので、アメリカからさんざんやられた頃でしょう。最初の日米繊維製品交渉は、日本を抑えるためにアメリカがやった手でした。それで輸出は許さない、対前年数量の三%増しをもつてストッパーということでした。それは自主努力にしました。そんなことの最初の頃でしたから、ずいぶんほうぼうへ行つて理由を聞いたりました。

それから織物の面倒だけ見ていれればいいというものではありませんから、農業をやっている人のところへ行く。そうすると、税金が高い、税金が高いという話ばかりだ。どうしてかいたら、農家がショウガをつくっていると、お前のところはこれだけの広さだから、これだけだ、と頭ごなしに「税金を」かけられる。本当にとれていないのになんだ、という批判があるんですね。そういう時は現場まで行つて、税務署の署長に来てくれと頼んで、「こういう不平が出ているがどうだ」と、いろいろすつたもんだやつた。これが地元の実状だといえ、自分の身についていますから、委員会でする時にも強いわけです。

そうしたら、その時僕はなるほどと思つたが、その何反歩という中でどれだけ採れるというものを税務署は税務署なりに決めていたけれども僕は、「そういうことをやるから、痒いところに手が届く」というきめの細かさには君らは欠けるんだ。行つて見てみる。どこでも踏んで歩いていたら、せつかくのショウガが踏まれて腐っちゃうぞ。だから歩く通路、例えば十平方のところでも通路というものがいる。それを畦道という。畦道の部分は課税対象から外さない、ショウガがとれないじゃないか」とやったわけです。そうしたら、「なるほど先生、おっしゃる通りですね。よく相談します」といって、相談して、「その地域に対しては、いままでは一反歩当たりいくらか決めていたものを、どれだけか引いて、一反歩当たりこれだけにしますが、いかがですか」といつてくるから、「それだけそちらもやるならば、よろしい」といった。それで組合大会

を開いて、そこで報告してやるわけです。そうするとみんな喜んで「ありがとう、ありがとう」という。そうすると、それは票になるということでしょう。

今度はその話を聞いて、レンコン組合が、レンコンもなんとかしてくれという。「これはショウガとは違うけれども、みんな体ごと中に入っていつて一本一本掘らなければならない、大変な労働だ」というようなことを話す。「よし、わかった。それも任せておけ。できるだけやってみるから」ということで、できるだけ努力をしてあげる。そうするとみんなが喜ぶ。だんだんそういうことで、生活の実感がわかる。わかって、自分になるほどと思ったことは、取り次いであげればいいんです。そしてそこに正義に反するものがあると思ったら、やればいいんですね。あまりそれをやり損なうと、勝手にゴリ押しばかりしているとか、いろいろなことになりますから、よく勉強していかなければならないけれども。

田中 一番お若い代議士だった頃は、浮動票なんかをいっぱい集めたような気がするんですが。

海部 それはいっぱいありましたよ。だって後援会の会員名簿なんて、まだまだ少ない頃だから。みんなにお札の手紙を出そうと思っても、誰が入れてくれた人かわかりません。だいたい、よう忘れません、最初の選挙は五万票、二度目が八万何千票、九万票近くなつて、三回目になつて十万票の大会に乗って、だんだん勝てるようになった。その頃は二番になりました。それから江崎真澄さんという強い人に勝ったのは、当選五回か六回の頃です。その時はトップになった。

しかし、人を追いかけている方が楽だった。追いかける立場になると、票を減らしたり、二番になつたら、今までの成果がガタ落ちだから、これはいかんと考えた。恥ずかしい話ですが、そういうことを直接街頭演説でも訴えて、「今まで入れてくれた人が入れてもらっただけでは、海部俊樹は育たない。入れてくれなかった人にも頼んで入れてもらわないと、これは駄目だ。また、あの問題に

片を付けようと思つて、この話をしようと思つても、後にいる皆さんの数が多いか少ないか、選挙区の本当の意志を体しているかどうかというのを官僚は見えていて、それによつて言うことを聞くんだから、おれを使おうと思つたら勝たせてくれ。力を与えてください。そうすれば必ず勝てるんです」とやっただよね。若い頃の演説は、「楠氏を指して」そんな頃に、一所懸命頼んでは来てもらつて、客寄せパンダをやつてもらつたりしましたよ。この人のお父さんが来ると、あの組織がみんな集まるから、これは強いですよ。

伊藤 そうでしょうね。確実に票になるわけですから。

海部 おれの言っている内容なんか、どうでもいいわけだ。

伊藤 その江崎さんが強いというのは、やはり地元の面倒をよく見ているからじゃないんですか。

海部 まあ、結局そういうことでしょうね。

伊藤 そうしたら、同じですね。

海部 ところが江崎さんの方は、言にくい話だから言いたくないけれども、大金持ちとか大地主とか、そういう大きいところの票をたんと持っている。こつちは農業とかレンコン組合とかショウガ組合とか、それから洋服の方でも染色整理組合とか補修組合とか、そういうところから入つていった。昔は毛工連（毛織物工業組合）というのは大きいところで、江崎さんが「やあ、やあ」といつて仲良くしていたんだけど、その組合長といつてのまにか一緒になつて、向こうが後援会長もやってくれるものだから、それで私の方がずっと有利になつたという裏もありますが、そのほかプラス・サムシング・モアです。

これは、ちよつと言にくいですが、「楠氏を指して」ここのお父さんは玉置「和郎」さんとも仲が良かった。それで、このごろ時の人になつた村上「正邦」もよく知つているでしょう。あのころ村上はカバンを持つてついてきたんですよ。玉置和郎さんは、ここのお父さんの家来だから。

楠 家来じゃないですけども。

海部 このお父さんを呼べば、家来だから玉置が呼ばれてくるわけです。ありがとうございましたと言つて。その時に、そのまた靴持ちでついてきていたのが村上だ。それはどうでもいいけれども。伊藤 だいぶ時間が経つと、変なことになるんだな。

海部 いろいろなことがあるな。

田中 自民党の組織調査会は三木先生がやっていらつしやいましたよね。このへんには、先生はなにか絡んでいらつしやいましたか。

海部 はい。組織調査会というのは、自民党は生まれ変わらなければならぬというのが三木さんの口癖だったんです。そしてそのためには自民党はどうするかという問題を調べ上げて、どうしたらいいかという新しい組織のあり方を考えた。みんな村へ行つて顔役に頼んで人を集めて、さあ一杯飲もうといつて、金を持っていって一杯飲んで土産をやつて、飲んだら票を入れるよ、というような選挙ではいけない。そうではなくて、こういう問題はこうすれば良くなるんだという政策を訴えて支持してもらふようにならなければならぬという、組織の理想論を言ったんだな、三木さんは。僕はその頃はまだ走り使いの方ですから、「はい、はい」と言っていた。

田中 特に何か書いたとか、そういうことはありませんでしたか。

海部 ありません。三木さんは自分で書くもの。

田中 そうですか。自分でお書きになったんですか。何か青年問題について、「海部君、何か意見があるかね」というようなことはなかったですか。

海部 「青年部のあり方はどうなんだ」とか、「政党に青年が入らないというのは、どうしたらいいとお前は思うんだ」と言われて、いろいろ意見を具申したことはありませんけれどもね。

■アフリカ行き（一九六四年五月）

伊藤 先ほどアフリカに行かれた話がございましたね。これはどん

な経験でございましたか。アフリカのどこに行きましたか。

海部 ちよつと長い目盛りでいうと、僕はアジアとアフリカというのは、日本で今日まで色がついていないところだと思う。アメリカやヨーロッパは、アフリカや何かに植民地をつくつたり戦争に加担したりして色がついているけれども、アフリカには、日本は色がついていない。だから「青年協力隊を送つて、生活と労働を共にしながら、発展途上国の発展を助ける」ということは素晴らしいことであつて、アフリカを是非やるべきだ。初めが大事だ、アジアだけではいけない」と偉そうなことを事前の会合で僕がぶつていたわけです。ですから調査に行く時は、「君はアフリカが好きだから、アフリカへ行け」と言われた。言い続けておつた以上しようがありませんから、「行きましょう」と言つて、行つたんですね。

伊藤 どこですか。

海部 エジプトから入りました。エジプトは、できたらナイル川の周辺の殺伐たる砂漠に緑化地帯をつくつて、穀物がとれるような地域をつくつてあげようと。これは結局できませんでしたね。そこから南下していつて、ナイジェリア、ガーナ、ダオメー「ベナンの旧称」の線です。アフリカの下半分を切つた横の線です。それからザイルのレオポルドビル「キンシャサの旧称」、コンゴがあつて、サハラのほうへ上がった。それで、どれだけ派遣できるかということとを調べてきたんです。

伊藤 どういう要求があり得たんですか。

海部 あの時アフリカのことはさっぱりわかりませんから、行つてどうなんだ、ということですね。向こうからはやはり、灌漑排水をもつとできる用にしてくれたら農業ができるじゃないか、実りがとれるじゃないか、というようなことでしようね。

伊藤 灌漑といつても、水源は――。

海部 北の方はナイル川からです。それから下「南」の方、ダオメーとかナイジェリアとかに來ると、井戸です。

伊藤 やはり井戸ですか。そうすると井戸を掘らなければならない。

海部 はい。それから横断して西のほうへ行っても、やっぱり井戸でしたね。だからナイル川のあたりは大変な文化ができる。また、できていたんですね。けれども、水は流れつ放しで、引いてきて灌漑排水に使わないものだから、そういったこともできないだろうかというようなことをいろいろ調査して、向こうが希望すれば報告します、といった。

あとは付け足したいなのですが、そういうことのほかに日本は非常に強い国だ。強い国というのは、国力とか軍隊が強いというのではなくて、一人ひとりが武道をよく知っている。あのへんで種族と種族の争いを盛んにやっている国は、泥棒をやつて、警察官が捕まえても、捕まえた時に、例えば血を出させたとか、顔をはれさせたりすると、部族で必ず復讐があるんです。目には目を、手には手をと、ということですね。なんとかそれがやめられるような方法はないだろうかという相談を受けたんです。

伊藤 また難しい相談ですね（笑い）。

海部 難しいでしょう。けれどもその時に、そこで武蔵は考えた、というわけです。武道をやれといった。

伊藤 ますます戦いが激しくなるんじゃないですか（笑い）。

海部 これがいい、ということで武道をやれといった。そして教師を送つてあげるといふような話にした。それから、「警察学校とか村の将来のリーダーは、いつぺん日本に來ないか。青年技術者の招へい計画があるから呼んであげるの、武道を日本の講道館でやれ。そうすると、相手がたとえ木刀を持っていたても、素手でやつつける方法も教えてくれる。また柔道が強くなると、こうして引く手押す手の中から、こうやればいい」とか、いろいろと、聞きかじりしことを言った。

そうしたら、そちらの方に非常に興味を持たれて、それはいい話だということ、最近ではむしろそちらのほうが盛況になっています。だから、合気道の植芝道場なんていうところからは、定期的にアフリカに人が出ています。

伊藤 かしいま、アフリカはどうにもならないような状態になっているんじゃないですか。

海部 食糧生産とか農業生産を上げるための灌漑排水といつても、よほどの資金と大量の技術者を連れて行かないと、なかなかできないですね。

伊藤 部族間の抗争はどうしても止まらないでしょう。

海部 止まらないです。ですから、公権力を背景に持っている取り締まりの警察が、一般のワルが悪いことをしたんといつて逮捕しても、逮捕する時に取っ組み合いをやつて、怪我をさせたりすると、必ず報復される。あのへんには、報復がいいことだといふような教えがあるんですね。そんな相談を受けて大変困ったんですけれども、しかし協力隊の中で、大変よくなつてきたのは逮捕術です。合気道なんていうのが一番いいです。

伊藤 そうですか。思いもかけぬ青年協力隊だなあ。

海部 青年海外協力隊で、合気道の有段者があつたらぜひ推薦してください。喜んで相手国は受け入れます。ですから植芝道場へ行つてもらつと、そういう人がうようよいいます。

話が飛ぶが、最近、ワレサのポーランド、あそこに青年海外協力隊を送つたら、合気道を教えてくだいなんていう人がいた。だから、東欧にも合気道という言葉を教えちゃったんだ。その意味で、私はいま日本の合気道の全役員代表ということにされている。

田中 それ以来のことですか。

海部 それ以来です。その協力隊の時にいろいろ関わり合いができて、向こうから頼まれたのがきつかけだったんですが、部族と部族の争いをやめさせるためには、殴ったり蹴ったりではなしに、こうやつて「やわらかく」捕まえると、神様だといふんだ。神様の技がいいと言っているんだ。まあ、合気道はいろいろなことに使われます。

田中 その時の調査団には、外務省だとかそういうところも一緒に同行されたんですか。

海部 現地に外務省から行っている経済協力の専門家がおりますね。それからもちろんこちらからも一人、言葉の関係で同行させた人もおります。

伊藤 言葉といっても大変ですよ。エジプトから始まってガーナとか、いろいろな言葉でしょう。

海部 だから、途中でもちろん替わらなければいけません。現地の大使館に言葉の専門家がおりますから。例えば単純な言葉を二つずつ並べていく国もありましたよ。「スマン、スマン、トロ、トロ」とかね。イグザクトリーなんかといつてね。いろいろなことを経験してきたけれども、あの言葉は面白かったね（笑い）。

■韓国行き（一九六四年十一月）

伊藤 同じ年に韓国にも行つてらっしゃいますね。これも初めてですね。

海部 初めてです。その時は、まだ三十八度線問題に片が付いていないし、たしかまだ日韓の国交が始まる前です。その前に来てくれということで行ったんです。その時は、宇野宗佑と私が青年局の代表で、二人で行ったんです。

伊藤 韓国の反日感情はどうでしたか。

海部 反日感情があるから、気をつけろと言われた。

伊藤 実際行ってみていかがでしたか。

海部 まあ、気をつけなければならぬことは、ずいぶんありましたけれども。

伊藤 やはりタブーには気をつける。まだこれは池田内閣の時代ですからね。

海部 その時は青年部であつたけれど、非公式の形で行く。外務省の肩書きのある人が行くというさから、あなた方が青年協力隊だといつて韓国を視察に来たということで行つてくれということだ、

向こうのトップと会えるようにしておいてくれたんです。

伊藤 トップというのは誰ですか。

海部 議会の長です。それで議会で、議長に、三十八度線の下のところのどこか帰属のつかない部分、もうひとつは海の権益のために韓国が魚をとつていいという専管水域の線をどこへ引いたらいいかということ韓国側の説明を十分聞いた。それを日本に持ち帰つて、それでいいならば、いいと言つてくれればいいし、いけないかったら、代案をまた持つて来てくれ、という。

伊藤 漁業問題で、日本と韓国は李承晩ラインが大問題でしたね。

海部 大問題だった。それをやつてこいと言われた。当時、たしか農林水産大臣が河野一郎先生だと思ふな。考えてみれば、なぜそういうことになったかという、当時宇野宗佑というのは河野派の一年生だったからです。それで行かされたんですね。

伊藤 これはどこからお金が出たわけですか。

海部 官房機密費でしょうね。それは冗談ですけど、各省に旅費というのがかなりあるんです。けれどもそういう時には、内閣の仕事を手伝うんだから、これを持つていつて、お土産かなにかにしろというようなことは、ずいぶん昔からあつたんですよ。

伊藤 これは自分が行きたいから行つたわけではないんですか。

海部 そうではありません。行つてくれと言われて行つたわけですが、また、そういうルートがなければ、まだ国交もないですから、危なくて怖ろしくて行けないじゃないですか。

田中 その時の団長は誰ですか。宇野さんとたつた二人で行かれたんですか。

海部 宇野宗佑と二人です。その代わり、向こうに日本の大使館の連中がいますからね。いや、大使館はまだないんだ。何事務所といったんだらう。

伊藤 何か連絡事務所みたいなものがあつたんですね。

海部 何かあつたんだな。そこにいる人が迎えに来て、車を一台つけてくれて、ずっと案内してもらつた。

■議運・本会議事進行担当（一九六四年十二月）

田中 年譜で大野伴睦が「昭和三十九年」五月二十九日に死去して、七月十日に池田総理が三選すると書いてありますけれども、この頃先生は政局がらみの話ではどういう活躍をなさったんでしょうか。

海部 岸か石井か石橋かの時じゃないね、大野伴睦なら。

田中 大野伴睦はもう亡くなって、今度は池田三選になるときですね。

伊藤 佐藤さんが出た時ですか。

田中 そうですね。出たんですが、出て負けた。

海部 三木さんはまだその頃は――。

田中 特に先生が動いたとか、何かそういうことはありませんか。

海部 まだその頃はありませぬね。三木さんがやるようになってからです。三木さんが立候補した時には、票集めをやったり、こそこそと呼び出して頼んだり、推薦人になってくれといったりね。三十人ぐらいいる時期があったものだから。

田中 衆議院議員運営委員会本会議事進行担当というのは、野田聖子さんのあれですか。

海部 「議長く！」とやるやつです。

田中 これはどういう方が選ばれるのが通例なんですか。

海部 あれはやはり、日本語が正確で、標準より大きな声で、肺活量も人一倍あって、切っけはいけないところでは切らない。長い「何々に関する何々一部を改正する法律案を議題とし」とそこまで言える。そういったことが議事進行担当だね。

田中 これはみなさんなりたがるものですか。

海部 これは有名人の入り口だもの。若手議員の出世段階で、有名人になる第一歩ですよ。

伊藤 登竜門ですか。じゃあ、野田聖子さんはそうなんですね。

田中 総理候補の登竜門ですか。

海部 そうです。進行係になった人がみな総理になったとは限らないけれども。

田中 竹下さんはやっていましたか。

海部 ちよっとだけやった。

田中 そうですか。

伊藤 竹下さんがそういうことをやったんですか（笑い）。

■地元後援会との関係と三木派

楠 話が少し戻って恐縮なんですけれども、初当選の時、前の河野金昇さんの奥様の後を継いで出られたわけですよ。その後援会の関係はどうなったんですか。そっくりそのまま引き継いだんですか。

海部 いや、河野孝子さんの代は、奥さんはそんな未来永劫にやろうなんて思っていないし、後援会の関係は押さえていないから、やはり三木さんが来て、みんなを説得してもらわないといけないから、まだ三木さんの神通力が大変あったわけだ。後援会の幹部を集めて、「まあ、皆さん海部（くわいふ）君は、河野さんの考え方をそっくり身につけて一所懸命やって、あの孝子さんも助けたんですよ。海部（くわいふ）君を、それは皆さん、褒めてやってください」なんて説得をして、みんなそこで賛成を決めてくれた。

けれども、残念ながらその時は、全会一致で全員漏れなく私を支持してくれたわけではなかったんです。当時、複数の幹部が、「海部さんではまだ若すぎる。うちの息子よりもまだ若いじゃないか。そんな坊に日本の国の政治ができるか。だからまず、県議員ぐらいいからやらせたらどうだ」というような意見です。

楠 県会議員はどうですか。河野さんを推していた県会議員がいると思うんですが。

海部 いるんです。だからその県会議員たちが反対するとともに、

県会議員の中に一人、衆議院議員になりたいと思っていたやつもいる。それで、「海部、君はまだ早いから、初めに県会に出て、それからでもまだ遅くないよ」というようなことをいろいろ言ったね。それで三木さんに相談する。

その前にも、僕は三木さんに一回相談するチャンスがあった。相談した時に三木さんから、「志があったら初めが大事だ。県会（けんくわい）に出て地方議会に入っては駄目だ。初めから国会（こっくわい）をやれ」と言われたことがあったんだね。「それじゃあ」ということで待ちました。

われわれの仲間で、その年の選挙で一番早く当選したのが渡部恒三だよ。県会議員です。僕はその時当然出なかったんだけど、三木さんが「県会からやるな。器が違ってくる。志を持ったら初めから国会をやれ」と言われて、その時には県会に出るのはやめました。だから、こつちが国会をやるうという時に、他の連中が県会からやれといつても、「まあ、ちよつと大それたことを言うかもしれないが、やっぱりやるなら国会からやらせてください」と言つて、みんなに頼んだんです。けれども、最後までそういう人たちは僕を支持しませんでした。だからそこで離れていった。

伊藤 ある部分が残ったわけですね。

海部 はい。マジョリテイは残ったんですが、一部はそこで外れた。外れたけれども、まあここから先はあまり言いたくないけれども、その人は結局は立候補できなかった。それで私が立候補したけれども、その時には競争相手がたくさんおりました。あんな人がやるなら私のほうがいい、という人がずいぶんいてね。労働組合の組合長とかね。民社党は全織同盟ですから。それから社会党からは、普通の労働組合が出てきて、いろいろあったんです。

伊藤 ちよつと一般的な話ですが、三木さんの派閥に入られたでしょう。その三木派の会合というのは、しょつちゅうあるんですか。

海部 あります。

伊藤 定期的に、ですか。

海部 定期的にあつたんです。一週間に一回ずつ、三木事務所というところへ集まつて、朝食を食べながらやるんです。

伊藤 それは、三木さんが話をされるんですか。

海部 三木さんがときどき話をします。

伊藤 そのほかは。

海部 ほかは、議員運営委員会へ行っているのが、今週の予定とか、今度の国会の重要法案はこれだとか、野党はこうなっている、というような見通しをずっと話すわけです。

伊藤 三木派というのは、親分が三木さんで、幹部は――。

海部 井出一太郎、松浦周太郎、そんなところが両横綱みたいな顔をして、代貸しみたいに横に座っていた。やや下に、赤澤正道とか毛利松平だとかいろいろなのがいいたわけです。

伊藤 その一番外れに――。

海部 海部俊樹がいたわけです（笑い）。

伊藤 三木派は総勢で、衆参両院合わせてもそんなに大きくなっていないですね。

海部 大きくないです。両方で三十人ぐらいじゃなかったな。端数は間違っているかもしれないが、衆議院が二十人ぐらい、参議院が十人ぐらい。だから両方合わせると三十人ぐらいで、第四派閥か第五派閥かです。だから時移り、世が流れ変わって、俺がやろうという時になったら、あんな小さい派閥で何ができるかという問題も、乗り越えなければならぬ一つのテーマだった。

伊藤 そうですね。そんな小派閥が何人も総理大臣を出してけしからんと。

海部 と言われたね。けれども、青年局の頃からの横のつながりが派閥を越えて、ありがたいことにみんな仲間になっているから、支持も支援もしてくれましたね。

伊藤 そうすると、やはり出発点の青年局というのは意味が大きいですね。

海部 大きいんです。そして全国に仲間や家来がおるわけでしょう。

青年局の大会という、必ず行きましたものね。しかも今でも続いているんですから。最後に出てくる話ですが、僕が、自民党はけしからんといつて三行半を突きつけて飛び出してからも、地方へ行く、いま地方の県会の県連の大ボスたちになっている者たち、自民党ですが、「やあ、一杯飲もう」と懐かしがるんですね。初めの頃にワイワイと言いつつ仲ですから、これは懐かしいですね。

伊藤 老年局になつてきた（笑い）。

海部 老年局ではいかなからな。

田中 これからは老人の時代ですから。

伊藤 自民党の部会の副部長とか、衆議院の委員会の理事とか、そういうのはだいたい二回当選ぐらいですか。

海部 早い人は二回生からそれをやります。

伊藤 先生は二回からやっているじゃないですか。

海部 はい。二回からやりました。

伊藤 やはり理事とか副部長とかというのは、相当力を持つわけですか。

海部 そこで働く力がつくし、そこで頑張ると認められる、ということでしょう。

伊藤 試されているみたいですね。

海部 そうでしょう。兵隊の位でいうと下士官になれるかどうか。結局、見習下士官ですかね。それで一年、二年と理事をやつて、いとみんなも認めて、永久に理事にしてくれるとか、どうにもならない奴はそこで交替させられるとか、になりますね。その条件として、選挙が強くなければなかなか務まらないわけです。ときどき選挙区へ帰つていっちゃったり、陳情団と一緒にいまあそこを回っているとか、ここへ行っている、といつていたのでは、いざという時に力にならない。だから、選挙区だけは安心できるようにしておいて、与えられた仕事を一所懸命やると、だんだんそこから上がれるということになるんですね。

■自民党商工部会の副部長（一九六五年八月）

田中 昭和四十年に自民党商工部会の副部長におなりですが、その頃の副部長としてのお仕事では、どんなことを覚えていらつしやいますか。

海部 商工部会の副部長で僕がやったことは、中小企業の業種別の指定です。指定を受けると、何のメリットだったかな、何か優遇されるメリットがついたんです。だから、いろいろな業種ごとに、これは本当に育てていい業種なのかどうか、ということをやったんです。特にそういう時は、一所懸命繊維のことはやっかし、さつき話したように農業のことなんかを頼まれると、どうしてもやるんですね。

伊藤 繊維関係でも、いろいろな業種があるわけでしょう。

海部 あります。だから綿工連と喧嘩をしたり、絹工連と喧嘩になったりする。こちらは毛織工業協同組合連合会だから、毛工連というんです。いま一番困っているのは綿工連です。それから絹工連というのも、中国にやれちゃつてさんざっぱらですね。ユニクロの被害を一番受けているのが綿工連と絹工連です。

伊藤 その中で、例えば染色とか、いろいろ細かい工程ごとに組合があるわけでしょう。

海部 もちろんありますが、工場の規模からいくと、染色整理工場というのはかなり資金がいるんです。資本がいるんです。普通の織布業とか、最後の仕上げを見る修正業というものと比べると資金の量もかなり違う。だから染色業というのは、比較によりけりですけれども、概して大きい中企業です。それで小企業はいろいろありますけれども、そういうふうな差がついてくるわけですね。

伊藤 繊維産業というのは、糸から始まって織物まで、いろいろな工程でそれぞれ職種があるわけですね。

海部 あります。糸というのは、まず撚糸業というのがあります。

伊藤 撚糸工連がありましたね。

海部 糸撚りをかけるでしょう。あの糸撚りをかけた時に、僕のところも糸撚りの中心地だったものですから、いろいろなところで、「いいですか、大丈夫ですか」と聞かれたけれども、結局石川県が一番悪かったんだ。

それが済むと、今度はその糸を使って織るんです。織布という。織布をやって、それから今度は染色です。それから整理です。染色整理ということもあるし、染色業と整理業と分けることもあります。整理というのは、毛羽立てたりすることです。色をつけて、それを整理する。そういう、生地になる前の状況があつて、できあがつた生地はちよつと匂いも臭いし、しわしわよれよれになっていきますから、それにダーツと熱氣をかけて、お湯の中を通して、色がさめなようにしてから、今度はシャーンと仕上げなければならぬ。糊をつけて仕上げたのはいけませんから、きちんとやるんです。

伊藤 そういう工程があるんですね。

海部 だから、何回も熱をかけたなり、風を通したりしてやっているんです。それから今度は縫製業。縫製というのは、粗っぽく断つ。いろいろあるんですね。

伊藤 またつくるものによつても、組合があるわけですね。シャツをつくるか、下着をつくるか。

海部 それはもちろんいろいろあります。洋服をつくるとか。洋服をつくる組合は、やはりちよつと俺たちは、というような格好がどうしてもあるんですね。

伊藤 偉いんですね。

海部 パンツをつくっているよりも偉いわけだ。あれらは、あれだからと言う。裏の話はそうです。

伊藤 そういう繊維産業の全体の組合というのはないわけですか。海部 それは、毛に関しては毛織工業協同組合、絹に関しては絹工連、綿に関しては綿工連で、それを全部集めたのが繊維産業連盟と

いうんです。このあいだ、そこで旗を振ってデモをやつて、WTOを早く発動してセーフガードで救つてくれ、といって歩いていたのはオール繊維です。ユニクロが出てきて、みんな取つ払われたのが綿工連や絹工連です。

伊藤 そうですか。それが先生のかなり大きなバックなんですね。

海部 けれども、綿工連の連中は僕に対してはあまり――。一時、毛工連と綿工連が喧嘩をやつた時に、こちらは毛工連を一〇〇%支持していますからね。それから、染色整理の登録機械の制度の時も毛工連が扱いが一番有利だった。一番早く権利をもらった。それで綿工連とはちよつと喧嘩になった。しかし、だんだん毛工連は愛知県尾張郡にかたまつてくる。綿工連というのは静岡の浜松のあたり。そういうふうに分かれてくるんです。これはしかたありませんね。全繊維産業連盟という、一時期は宮崎輝が親分になって旗を振つたことがありますね。

伊藤 旭化成ですね。愛知県の繊維産業というのはそんなに大企業ではないでしょう。

海部 そうですね。みんな中小企業です。中小企業の中でも、染色整理は大きいところがたくさんありますよ。毛織工業もたくさんあります。愛知県が中心で、たしか全国の六八%のシェアを持っていますから、愛知県がトップですね。綿はやはり静岡とかあつちの方がたくさんあります。それから化繊になると、石川県、富山県ですね。

田中 大手の東レだとかありますでしょう。それはまた別のカテゴリーですか。

海部 あれは大企業で、東レなんかの周辺にある企業群は、その下請けみたいな関係が多いんじゃないですか。前田勝之助の組ですよ。前田勝之助の組、といったら悪いけれど、東レのいまの会長ですね。田中 それは、先生といろいろな協力関係はないのですか。

海部 あります、昔から。あれは同じ年だから。だから利害関係が一致する問題になると、協力関係ですよ。対米交渉をやるときもそ

うです。だから今度のように、中国から安物をどこかに入れてくる時に、なんとかセーフガードで、WTOできちんと数量制限をかけようと思うと、これはやはりみんなが力を合わせないと、とてもできる相談じゃありませんからね。

伊藤 佐藤内閣で沖縄返還と繊維問題という絡みになりますが、それに至るまでの間、ずっと繊維問題というのはもめ続けるということですね。

海部 もめ続けるというよりも、だんだん成長し続けるわけです。成長するものですから、それだけアメリカへはかなければならない。それから中国などの市場は伸びてこないように、日本が抑えているから逆に安い。アメリカ市場を押さえたのも、いまのユニクロの全く逆だったんです。「ワンダラー・ブラウス」という言葉があったように、一ドルで女性のブラウスをどんどん売った。

伊藤 日本がアメリカにユニクロをつくったような話ですね。

海部 同じことです。

伊藤 因果は巡っているんだ。

海部 まさにその通り。

伊藤 農業団体の方は、農協ですか。

海部 農協です。農協の中に生産単位組合があるんです。

伊藤 さっきおっしゃったレンコンとか――。

海部 ショウガ組合とかレンコン組合です。それからキンギョ組合とかね。

伊藤 キンギョは農業ですか（笑い）。

楠 漁協じゃないんですか（笑い）

海部 農業です。

田中 農水省が担当しているんですね。

伊藤 そうすると、だいたい農業と繊維ですか。

海部 それさえ押さえていればいい。愛知県の尾張地方にはそれ以外のものがないもの。最近に至って、繊維が不況になってきたので、

新しい仕事をしようということ、ようやくプラスティックの関連工業とか、いろいろなもの comes ですね。

楠 だいたい先生の選挙区は純農村ですね。

海部 昔はそうです。そして中小の、千二百年来の繊維産業というのが続いていたわけですね。

田中 千二百年というと、奈良時代からですね。

海部 だからあの辺に国府があつて、それを国府宮と言いますね。それがいまでも樺祭りで有名になっている。それも千二百年前からやっていたという歴史があるんです。もつと近くなつてくると、確実なものは、ここは徳川家康が、ここは織田信長が、といって、それぞれ遊びにきていたところや、管轄としていた神社仏閣があるわけです。

伊藤 それは歴史のあるところで、東北地方とは違う。

■選挙資金と応援

楠 では、あまり浮動票なんていうのはない地域ですね。いまはどうかわかりませんが。

伊藤 だけど、あるでしょう。

海部 初めの頃は、浮動票なんていうものはあまりない頃で、どの村へ行つて、どの字へ行つて、とやっていた。そうすると、「ここは海部さんの村だ」とか、「ここは江崎さんとこだでな」といって、おおよそ決まっていたんだ。いまはもう違うかもしれないよ。

田中 いつ頃から変わりましたか。昔は選挙の前日には張り番を立てたというのを聞きますよね。

海部 十年ぐらい前までは、やはり張り番を立てたりしておったね。地方の字へ行くとね。村の字で、ここからこちらへ入るとあれだからというので、村の青年が張り番したり、警防団や消防が張り番し

ているところがあります。こちらの「びく」というと変だが、こちらが張り番をしているところだと、えいっというて、そこでちゃんと情報をみんな伝える。いかに一所懸命自分たちが張り番しているか、ここは誰が入り込んでくるか、ここはどうしたか、なんていうことをやっていたんです。

ところが一時期から、僕らがそんなことには関心を持ってもらえないような時代が来た。選挙になっても帰らないから。そうするとまたそこで、押したり引いたりしたりの乱戦が行なわれたこともあった。乱戦の時には、みんな物を持っていつて配ってこなければ、票をこちらへ向けるわけにはいかないでしょう。だから、やはり選挙に物が絡むいやな状況、買収が生まれてきたんでしょうね。そういう買収を手っ取り早くやるのは、農業協同組合とか金融組合とかを、組合ごと買収して、組合ごと会議を開いてそこで推薦する。

伊藤 でも推薦したからといって、みんな必ずしも言うことを聞くわけじゃないでしょう。そういう大きな団体や組織を大づかみにつかまえないと駄目なんでしょうが、実際には、個々につかまえないければ駄目でしょう。

海部 まあ大綱を打っておいて、同質社会意識を作りあげて、そこで一対一の頼まれごとをきちんとやってやるのか、一緒に遊んでやるのか、結婚式に行つてやるのか、葬式には必ず行つてやるのかするんです。そうすると、そういう噂が何回も何回も続いて、ダーツと大きくなつていくんです。

伊藤 だけど、選挙法改正やなかで次々と制限されていきますね。

海部 制限をされて、本当に厳しくやっていくようになれば、もう困いをつくつちやつたこちらは楽ですね。全然ないところに、とてつもない金持ちが現れて、ダーツと買収なんかを始めたら、それを防戦するのは大変だろうと思う。でもみんなが厳しくきちんとやって、演説会だけで政策を訴えてやるといったら、こんなにありがたいことはないな。

伊藤 そんなものですかね。二回目は選挙の時は、最初から公認に

なりますね。

海部 もちろんそうです。

伊藤 そうすると公認料をもらうでしょう。これは誰からもらうんですか。

海部 党からです。

伊藤 党からでしょうか、具体的には。

海部 具体的には、党に公認証書をもらいにいくと、総裁が公認証書をくれますね。帰りに隣の部屋に寄つていけと言われて、隣の部屋へ入つていくと、これに判を押してというので、そこへ受領の判を押すと、公認料金五百万というやつをポーンとくれるわけです。それが公認料というんです。

伊藤 小切手じゃなくて現金ですか。

海部 現金です。

伊藤 五百万というと、結構分量があるでしょう。

海部 五百万というと、これぐらいです「指を数センチ開く」。

伊藤 じゃあ紙袋にいっぱい入るようになると、それはすごい量なんです。

海部 紙袋にいっぱいあるというのは神話伝説の類になつていて、こいつは比較的選挙にも強いぞというやつは、無駄金をやらないでも当選してくるだろう、だからこの次にポストをやればいい、といううのがだいぶあるわけです。だから自分で言うのも変だけれど、僕らはそんなにたくさんもらったことは、初めから一度もない。袋にいっぱい持てないぐらい持つて帰るやつがいるな。それは自民党の金権政治の一番悪い走りだったと思うね。

伊藤 そうですか。

海部 公認料のほかに、派閥の金もある。派閥の金をもつても公認料をもつても、どうしても足りないやつには、貸付金というのがある。

伊藤 どこからですか。

海部 党からです。

伊藤 お願いますと。いって借りるんですね。これは返さなければならぬ。

海部 いやあ、あれは返さなかったんじゃないか。

伊藤 名前は「貸付金」だけれども。あと、個人の政治団体、集金団体はなかったですか。

海部 個人の集金能力のある政治団体ができたのは、もうちょっとあとだったと思う。初めの頃は、困ったら三木さんのところに取りに行っていた。

伊藤 それは三木さんの代貸しみたいな人がくれるわけではないんですか。

楠 例えば松浦さんとか。

海部 松浦さんとか井出さんというのは、あまりくれなかったな。まあ、こつちも取りに行かなかったから。

田中 一つの選挙で何回も行かれるわけですか。一回こつきりですか、それとも選挙期間中に、お金がなくなつたからもう一回行くという感じですか。

海部 いやいや、そんなことはやりません。そんなことばかりやっているやつは出世しないわ。

田中 じゃあ、もらったきりですね。

伊藤 あとは応援演説に来てもらわなければいけないでしょう。

海部 それはそうです。応援に来る時は、ちゃんと持って来て、置いていってくれる。

楠 第一回目の時は、三木さんだけしか来なかったと本に書いてありましたけれども。

海部 松浦周太郎さんも、最初の選挙の時は一回か二回は来たな。

楠 二回目の時は派閥を超えて来たんですか。

海部 はい。

伊藤 それは、党の遊説部が全部割り振るんですか。

海部 そうです。こいつは当選しそうだということがわかると、

割り振ってやりますね。それはこんにちでも、自民党という政党では続いていますよ。もう、いまはそんなことまで配慮しないが、僕が総裁の時は、党の選対が持ってきて来て「総理、今度ここここをお願います。ここここは調査の結果がもう一步ということですよ」という日程をつくって持ってくるんです。遊説部が。そうすると、中にはあまり虫の好かないやつもいるけれど、そんなことも言っていられないな。「よし」といって行って、その代わり、ここへ行くなら帰りにここへ寄るとかね。だってそうでしょうよ、怒られるもの、身内から。

楠 やはり議員さんも人間だから、好き嫌いとかがあるんですね。

海部 あるんだよ。

伊藤 それはないわけにはいかないでしょう。

海部 それはそうでしょう。

楠 それはあるでしょうけれども。

海部 あんな野郎、と思つたって、党が行ってくださいといえなければならぬ。

伊藤 行ったら、褒めなければならぬでしょう。

海部 もちろんです。どこを褒めるかということを考えないといけない。ただ、私が総理をやっていた頃は、いまのように一人一区の小選挙区じゃないからね。必ず中選挙区で、複数いるわけです。

伊藤 難しいですね。

楠 効果が薄まりますね。

海部 みんな来いといつて、みんなが来れば、間違えないようにみんなを褒めなければならぬわけだ。

田中 そういうふうにはやっていたんですか。中選挙区時代は、一人の人ではなくて、その選挙区から出ている、例えば三人なら三人の候補を全部応援してやるんですか。

海部 いやそうではなく、総理になった時の総理遊説です。中選挙区だった頃でも、責任ある立場にない頃は、それはもう好き嫌いで応援します。派閥が違つても、もちろん応援します。一番困るのは、

同じ派閥の人がいる選挙区で、青年局長だから同じ派閥ではない若者を応援に行くと、怒られるな。よく怒られたよ（笑い）。

楠 竹下さんは来てくれましたか。

海部 来たよ。竹下も来たし、安倍も来た。あの頃は竹下とか安倍とか、若手では毛利松平とか――。

楠 先ほどのお話だと、宇野さんとはもう初当選の頃から親しかったわけですか。

海部 はい。宇野宗佑の時は、俺が応援に行ったほうだもの。だってあそこには、前から、堤康次郎さんとか草野一郎平さんとか、ああいふ錚々たる大先生方がいるものだから、「海部、頼む、来てくれ」と言われて、行ったことがあった。竹下のところも行ったんですよ。

伊藤 島根ですか。

海部 はい。応援に。派閥が違っても平気なんです。だから青木幹雄なんていうのは、この前の選挙の時は、島根県全部ずっと応援してあげた、竹さんが来てくれというから。渡海元三郎のところにも行ったんだ。だからそういう派閥を超えたつき合いが、僕らにはずいぶんあったということだ。派閥が違っていても、ずいぶん応援にも行きましたな。まあそういう時は、なるべく気をつけて行ったけれども、ときどき同じ派閥のお年寄りに怒られたこともあった。仕方ないよね。そうやっていかなければ、戦友の連帯が生まれてこないから。

■選挙の変化（小選挙区制）

田中 そういうことが、いまはそういうものはなくなっちゃった、ということですか。

海部 いまはもうだいたなくなっちゃったけれども――。そんなことは、小選挙区になってからは、とてもやっていない。けれども、やはり

来てくれという人もいる。一人一区ですから、そういうことを、そう気にしなくてもいいから。

伊藤 これは党派を超えて、ということはないでしょう。

海部 党派は超えてはいけません。もともと、いまは連立与党ですからね。

伊藤 連立だったらいんですか。

海部 いいんだよ。ただ、言いにくいな。

伊藤 別に外に出るわけではないですから、もう何をしゃべってもいいです。

海部 公明だけは応援に行かないわ。それでも、五、六人行ってやったな、公明党も。どうしても来てください、というから。

楠 やはり、中選挙区制より小選挙区制のほうがずっと選挙は厳しいですか。

海部 これは厳しいよ。一対一だもの。勝つか負けるかだもの。だから昔はVサインを出して、勝利のサインはVサイン、とこんな写真まで撮った人がいるけれども、いまはこれ「指二本のVサイン」では駄目だからね。これだ「人さし指を一本だけ突き立てる」。

伊藤 そういうことですか。

海部 オア「O」では駄目だから、これ「指一本」じゃないといけない。小選挙区では二番というのはあり得ないんだ。

伊藤 中選挙区で、例えば自民党なら自民党が定員いっぱい公認して、そのほかに推薦を出して、というふうなことはやっていたじゃないですか。それで切磋琢磨して――。

海部 切磋琢磨して、当選したら入れちゃう。

伊藤 今度は一人一区ですから、出ようと思っても、公認がとれないければ、中立、無所属で出て、頑張つてやる以外にないわけですね。

海部 はい、そうです。

伊藤 それはなかなか厳しいですね。

海部 小選挙区になってからは、無所属で当選した人が、現職を落として出てきますね。そうすると自民党も、さすがそこまでは厚か

ましくできないから、しばらくは罰則みたいな感覚で入れないわけです。入れてもらえない人たちが「二十一世紀クラブ」とか「無所属クラブ」ということをいって、努力しておるわけだ。

伊藤 その次の選挙が大変ですね。

海部 その次の選挙では、自民党の方が、自民党ゼロだということが屈辱だと思えば、今度は自分の方がいいのを出すでしょう。

それから、その無所属クラブの人たちは、次までに当選しようと思つて切磋琢磨するじゃないですか。票を掻き集めるじゃないですか。そうすると、そこで公認がもらえるかどうかということになるわけです。たぶん公認はしないですよ。戦え、当選したら今度はこうしよう、ということになるんですね。

それから自民党もこれだけ数が少なくなってきたので、この前の選挙の時は、自分たちのところの候補者を降ろしてでも、無所属とかよその党の人を公認することがありましたね。それから公認をしなくても、推薦という制度がある。このあいだの選挙なんかは、一人一区ですから、僕のところは自民党から推薦しますといつてきて、「その代わり推薦状を受け取ってもらえないと党が赤っ恥かくから断わるなんて言われると困ります」なんて、あらかじめ聞きにくるから、「まあ選挙になれば邪魔なものはないから、もうただけでよければもらつておいてやる」と言つた。そうしたら公明党も推薦しますと持つてくるから、「まあ邪魔にならないから、みなもらつておけ」と言つて、もらつておいた。連立与党だから、お互いにその中では――。

じゃあみんな推薦が行なわれたかというのと、そうでもないんだよね。いろいろなしがらみがある。けれども、それがあまり過ぎると、政策がぼやけちゃつて、いかんです（伊藤 本当にそうですよ）。だから僕らは、推薦は邪魔にならないからもらつておいた。下手に断つて角を立てる必要はないから。けれども、「あなたの方の応援はしないし、あなたのほうの褒め言葉も言わないから、それはわかつておいてくれ」といって選挙をやりました。だから、いつまで

こんなことが続くんだか、ちよつと気になります。境界がぼけちゃつて、いかな。

伊藤 昭和四十一年に労働政務次官になれますよね。だいたいその前のところまで、なんとか伺つたような感じですので、次回は政務次官のあたりから始めさせていたきたいと思います。この時は、その少し前に池田さんが亡くなつて、佐藤さんが総理になるという時期ですね。それはもうずっと上の方の話だと思いますが、何か特別に覚えがございますか。まだ、雲の上の話ですか。

海部 まだ雲の上の話で、夜集まつて、あまだこうだと言ひ合つたこともない。けれども、あの頃は佐藤派の方から竹下登あたりに、「お前、青年部の仲間のところをみんな回つて頼んでこい」というような指示が出たんでしょうね。そう言われてみればそういうことがあつた。当時は三木さんはまだ出ていないから。最初の頃は頼まれたらなし。

伊藤 草刈り場になつていたんですね。三木さんだつて、自分のところは引き締めておかなければならないですからね。

海部 だから時々集めては、いろいろな話があつたけれどもね。

伊藤 やはりあの時は、池田だ、ということでしょうね。

海部 池田だ。

伊藤 それで、今度は佐藤内閣になつて政務次官ですね。政務次官というのはどういうものであるかということから始まつて、当時、急に労働問題に首を突つ込むことになりましたね。

海部 急に首を突つ込んで、いろいろなことをずっと勉強していきます。

伊藤 ILOへ行かれたんですね。次回はそこからですので、よろしくお願いいたします。四月の予定はいかがですか。

海部 絵の展覧会のこと、芸術議員連盟のほうの仕事でエジプトまで行つて絵の展覧会をやってきます。すぐ帰ってきますけれども。伊藤 青年協力隊とはちよつと違いますね、同じエジプトでも。

海部 このあいだも久しぶりに行って、懐かしかったですよ。名誉回復の旅です。十年前のことですけれども、クウェートが感謝広告を出さなかったでしょう。日本だけ抜いた。怒り心頭に発して、当時総理として怒ってやったら、このあいだ戦勝国の記念式典にクウェートへ来てくださいというので、行ってきたんです。

伊藤 そうですか。新聞にあまり出ていなかったな。

海部 新聞にもときどき、ちょちよっと出ていたんですよ。大きくは出ないけれども。

伊藤 いっぱいお金を出したんですからね。

海部 宮殿へ泊めてくれたということで、海部氏は破格の厚遇を受けたといつて、珍しく朝日が見出しに書いたんです。あまりこれはPRになつていないな。

田中 全然聞いていませんよ。

海部 日本の国の名誉回復です。だって、日本はあれだけ税金まであげて、あんなにやつたのに、パーにされたんだから。

伊藤 今度は労働問題です。今まで何も絡みのない問題ですね。やはり絶えず勉強しなければいけないですね。絶えず新しいことがドカンとぶつかってくるわけですから。

海部 また、勉強したことが一番頭へ入る頃ですですね。

伊藤 その後も労働問題では――。

海部 スト権ストの時に役に立ったのは、労働政務次官をやったからです。特に勉強しなくても、あの頃のことです。できましたね。労働運動なんかはよく知らなかったけれど、労働政務次官をやった時に勉強しておいたので、やり甲斐ができたということです。

伊藤 これは勝てたわけですね。

楠 スト権ストというのは、戦後の日本の大きな分かれ道だったんですね。

田中 そうですね。あれでストがなくなっちゃったものね。

楠 あれで官公労がやられちゃったし、社会党が駄目になった。

伊藤 僕らはだいたい連休までは大学はないということで、楽だ

ったんですけれども。だってそうでしょう。みんなストばかりやっているから。

田中 昔はそうでしたね。四月でしたからね。

海部 石原慎太郎がこの間思ひ出話に語っていた、「海部さん、あの時よくあれだったけれども、あれはいいことだったよ」、「なんだ」と言ったら、石原のところの息子が「頑張ってくださいよ」といつて駅まで激励に行つたんだって。学校が休みだったから（笑い）。冗談じゃないけれど。

伊藤 ありがとうございます。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 4 回

労働政務次官時代（1966～1968）

【2001年4月13日（金）16:00～18:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■現在の政局から（自民党総裁選前）

伊藤 よろしくお願いいたします。先生はこの政局「橋本、小泉、亀井、麻生氏による自民党総裁選」を遠くから観望ですか。

海部 これは黙って見ていて、「みんな間違った方に付和雷同するなよ」と言っているだけですわ。

伊藤 やっぱり影響力を与えている、ということじゃないですか（笑い）。

海部 どこかで、ボナー・ロー「第一次世界大戦後のイギリスの首相（保守党）」の再現を日本でも考えたらどうだ、なんていう意見があつたけれど、まさにそうだという気がするな。そうすると世の中、変わりますよ。みんないろいろなことを言っている。けれども、現実の進みは、残念ながらそうではありませんよね。

伊藤 やっぱり橋本さんになりそうなんですか。

海部 いや、数が揃っているもの。手兵がだいたいいますもの。

伊藤 そこからこぼれるのもあるでしょう。

海部 いや、ずいぶんありますよ。予想以上に橋本派は――。

伊藤 平成会は統制が利いていないということですか。

海部 はい、そして橋本の票は減るんじゃないですか。

伊藤 票が減るといふのは、派閥が小さくなるという意味でもあるんですか。

海部 その後のこと、のちの行動をどうするかわからん。今の若手で威勢のいいことを言うのがおりますけれどね。ここ「海部事務所」に来ていろいろしゃべるから、「それは結構だけれど、やりたいやつはやれ」と言っているんだ。

伊藤 しかし軽挙妄動してあとで大変、ということになると困りますね。

海部 けれども、あれは国民の方からみているとどうか。橋本再登

板に待ったをかけようと思っておるあの若手の連中の意見や考えというのは、第二幕の準備をしていないからいかんけれど。僕が言っているのは、「君たち、第二幕の準備もしないで、第一幕の幕を引いて、幕間に主演俳優も助演もみんな殺しちゃったら、どういふことになるんだ」ということなんです。だからそこで、ボナー・ローみたいなことを、橋本も含めてきちんと因果を含めて、それならば、言つてやらせなければいけない。けれども、第二幕の準備がまだできていないんでしょうね。

伊藤 加藤の乱と同じことになる。

海部 だから加藤さんもじつと我慢していればね。じつと我慢の哲学というの、あまりいい態度じゃないですね。

伊藤 そうですね。やるときはやる、と。

海部 だから加藤さんも、中途半端が一番いけなかったんだね。橋本さんも、おそらくああいうことになっちゃうんでしょうね。だからその前にはきちんと、自分が総理の頃の政策の間違いを、党の中で謝つたぐらいではわからんから、国民の対してきちんと言わないとね。このあいだちよつと党内の演説会では言つておつたけれど、それに対する反省と、なぜいけなかったのかを明らかにして、二度と再びそちらの亡霊には、悪魔の囁きがあつてもやめるといふぐらいの決意を示す必要があるでしょうね。ほかの人たちは何を考へておるか、よくわからんもの。

伊藤 先生は、自民党の中に昔からのつき合いのある方がたくさんいらつしやるでしょう。それがいろいろな陣営に分かれているわけですね。

海部 分かれていゐるんだ。

田中 分かれていゐるんですか。

海部 はい。僕は比較的開けつひろげにいろいろな人とつき合いもしてきたので、派閥次元、政党次元でいろいろなことをあまりやりません。今でも地球環境行動会議や何かになると、私が代表世話人になるし、地元でやる二〇〇五年の万国博覧会も、共産党だけはこ

つちからお断わりしましたが、旧社会党までは全部、民主党を代表として集まってもらってやっていくとかしている。やはり政党の枠を外して、政党を超えたところで片づけなければならん問題もたくさんあるんです。あまり一党一派にこだわっておっては、そういう問題はできませんよ、ということですね。

■労働省政務次官1（政務次官の仕事）

伊藤 今日（昭和四十一年「一九六六」）年に労働政務次官におなりになったところの話を中心に伺おうと思います。これは「第一次」佐藤内閣「第二次改造内閣」、八月一日改造「ですね。

海部 労働政務次官は佐藤内閣です。

伊藤 労働大臣はどなただったんですか。

海部 早川崇じやなかったですか「↓山手満男、政務次官二期目の第三次改造内閣の大臣が早川崇」。

伊藤 それで労働省の事務次官は——。

海部 当時の労働事務次官は誰だったかな。

伊藤 これはしよっちゅう替わっていますね。

海部 僕が労働政務次官になったときは、はじめは大臣も替わったんだ。僕は二回続けて連続でやりましたからね。それで途中で、これも劇的な思い出だけれど、ILOの委員会に日本政府代表で行って、いよいよ政府代表演説をぶとうという直前に、衆議院が解散になつちやうんですね。解散になると、政務次官という仕事もう当然のことながら「なくなる」。そんなことをいったって、選挙が終わって新しい内閣ができるまで、政務次官もその地位にとどまるということが慣例のはずだから、と言ったんだ。いまクビになつちやうと演説がでんから、日本国代表の演説をやってから帰るんだ、ということ言っていた。そうしたら、結局それが正しいから、いから「演説を」やって帰ってきてくれということになって、やつ

てきました。それはそうですよ。国際会議に行ったら国会が解散になつちやつたんですから。労働政務次官の第一回目（のとき）ですね。

伊藤 そうですか。事務次官はあまり記憶はないですか。

海部 事務次官は——、堀「秀夫」さんという人です。

伊藤 あとで何をやった方だろうな。お役人で終わりますかね。

海部 お役人で終わつた人です。せいぜいやつたとしても、雇用促進事業団の理事長か何かじゃないですか「↓雇用振興協会会長、日本職業協会会長」。

伊藤 有馬元治さんはその当時は局長ぐらいですか。

海部 その当時は、有馬元治は職業安定局長だ。それで労働基準局長が、その後政治家になろうと思つて一所懸命努力しておつた人だ「↓村上茂利」。「楠氏に向かつて」きみ、覚えておらんかな、労働省で字のうまい人。有馬もその頃から政治に志しておつた。いかなる加減か、あの頃の労働省からは衆議院議員が何人か出た。澁谷直藏も出ましたしね。いろいろ出て来た。

田中 選挙の時は、労働省の役人は誰が推すんですか。たとえば農林議員だったら農協が推しますね。労働省の役人は誰が推すんですか。組合が推すわけじゃないでしょう。

海部 いや、それが意外や意外。というのは、これも昔の強面の意識でいけないけれど、各業界団体——。今と違って昔は三六協定

「時間外労働協定」があつた。ご存じでしょう。八時間以上働かせてはいけない、働くときは双方合意の契約書をつくって労働基準局へ届ける。そして一時間いくらと決めた超過勤務手当は必ず払えというようなことがあるわけです。しかしそんなものを守るところはほとんどない。面倒だからね。

それで僕らは当時から、選挙区の小さい下請企業、工賃バタヤと言われる人のところに行くと、「先生、助けてください」と言われる。「なんだ」というと、「監督署にやられちゃった」という。やられちゃつたということは、結局時間外労働を迫及されたということですね。けれども、何月何日までに納めなければならぬので、納

期が限られていた。納めるためには「時間外労働を」やらなきゃならん。そういう規則があることは知っていたんだろうというところ、規則は規則だが、これ「右手で首をちょん切る格好をする」になつたら大変だという。これ「クビを切る格好」というのは、当時は失業ではなくて飯の食い上げだということなんだね。作つて納めなければ工賃が入らない、そうすると、こう「クビを切る格好」なっちゃう。飯の食い上げだ、という意味だね。

伊藤 そうですか。これ「クビを切る格好」は、飯の食い上げなんですか。

海部 はい。組合の方の働く人らは、これ「クビを切る格好」は餓首です。工賃バタヤは、これ「クビを切る格好」だ、というところ、干上がっちゃうんですね。「頼む」と言われるから、僕らはよく労働基準監督署というのが各地方にあるから、そこに行つて、あそこを大目にみてやれ、ここを大目にみてやれ、日頃まじめにやっていたやつだとか、いろいろ言を左右して、告発するな、ということをした。今からみればあまりいいことじゃないけれど、やった。そうすると、何かやつつける理由がなければいけません。勘弁しろ、というだけではいかん。

何かないかな、と思つていろいろ考えたんだが、そのとき労働省の人たちに、なるほどあの時はあれで説得されちゃったな、と言われたのは、日本は輸出ということに関して非常に方向を向けてきている。どんどん物を売つて、どんどん外貨を入れなければ豊かな日本ができないじゃないか。それで頑張れ、頑張れといつて「輸出貢献企業」という制度をつくつて、私が労働政務次官のときに表彰制度もつくつたんです。前年と比べてたくさん輸出をしたところには輸出貢献企業という表彰をする。そして輸出貢献企業になると、酔つたような話だけれど、表彰状を一枚出すんですね。その表彰状を応接間か玄関に掛けておけば、監督署が来たときに、「うちはこれだ」というと、水戸黄門のこれ「印籠を示す手振り」の役割をするだろう。だからそれを言いなさい、といったんです。それをずいぶ

んとつたところがあるんです。

あの頃は、たくさん外貨を稼いで国家予算全体の規模を大きくしなければならぬときでしたから、ある意味ではそれは政策全体の方向としては間違ひなかつたと思うんですね。そんなことをいって、一人ひとりの労働者の保護のために法律もある。

けれども、ここから先はどう受け取られるか知りませんが、組合の連中は「われわれは正直言つて、八時間労働であの月給で終わるだよと言われるよりも、働いて超過勤務手当をもらった方がいいんだ」という。「われわれにとつてはいいんだといつても、君らだけだといかんが、もうちょつと大きな規模で、投票でもやつて数字を教えてくれたら、俺も自信を持つて基準局と掛け合うから」と、そういうことを言つたら、組合で投票をやつた。昔ゼンセン同盟というのがあつたでしょう。ゼンセン同盟の愛知県の地域支部でやると圧倒的多数が、収入がもつと欲しい、ということだ。だからそれは組合全部で要求してもいいんだ、ということですね。

それに自信を得て、「そういう声もあるではないか、この声を踏みにじるな。そしてあなた方にご注意申し上げるけれど、人間は心と心が通わなければ、絵に描いた規則になるよ。だからあそこはいつちも夜中になつてもガーガー音を立てて電力の無駄遣いをやっているとか、騒音をまき散らしていると思つたら、まず一回はニコツと笑つて、門を開けて戸をたたいて、どうや、景気はどうだと言いがら入つて行くんだ。そうすると、うるさいのが来たから、ちよつと機械を止めるとか何とかいう反応が必ず出るはずだ。少しそういうことをやりながら、今の世の中は、一人ひとりの働く人を時間で守ることも大切だから、八時間労働というのはなるべく守るようにしろ。けれども現実の問題として、八時間労働では、簡単な言葉で言うとなかなか飯が食えん。食つていくだけで所得がない。だから背に腹は代えられない、だから働くんだ」と言つたんです。

また見つかったら先生頼むぞというものが、オチですからね。だからなかなかあの超過勤務だけは簡単に収まりませんでした。それは

食うや食わずの人がおったからです。

その頃に、それじゃあいったいあなた方はいくら所得があつたらそういうことをやるかということで、最低賃金法というのを考えたんです。

伊藤 それは出来高のことですか。

海部 一時間あたりいくらかということ。あまり守られなかったと思いますけれどね。

田中 その法律はできたんですか。

海部 最低賃金法というのができたんです。そのほかに、最低賃金法というのがあったから大変紛らわしかったです。最低賃金法というのは、高校卒業の男女が就職すると、当時のお金で八二〇〇円とかいうことが決まつておったんですが、一時間残業すると、それプラスいくらの残業手当が出るか、ということなんです。その代わり、きちんと届け出て守つてやつてくれと。

■労働省政務次官2（政務次官の位置づけ）

伊藤 労働政務次官は「海部先生がおやりになった」最初の政務次官ですね。政務次官というのは、役所の中ではどんな感じなんですか。

海部 まあ一言でいうと、言にくい話ですが、真面目にやつていくかどうか、本人次第です。馬鹿にされないように、あの頃は盲腸と言われたけれど、あつてもなくてもどうでもいいから、こうやつておいて「おだてておいて」、仕事は何も覚えさせないように送り返す、うるさいから。だから甚だしきは役所の省議にも出られない政務次官がいた頃です。そういうときには、馬鹿にされるもとは、常にいないからだ。いつも政務次官室に政務次官が座っていることが、政務次官たるものの勤めだと思つたものですから、私はいつもそこに行っていました。

それから後に国会議員になった辻英雄というのが、当時労働省の官房長で、汗をよくかく男で、いいにくそうな顔をして、「政務次官、今日のご用がおありでしょうかから、お戻りになつても結構ですから」とかなんとか言ってくるわけだ。「まだ勤務時間は五時まであるから、五時までおるよ」というと、「あつそうですか」とかなんとかいって、汗を拭いている。「おつたら邪魔か？」といったら、「いや決して邪魔ではありません」という。「じゃあ、あんたここに座れよ」といって座らせて、いろいろ話を聞いたりしましたけれどもね。

伊藤 ご進講はないんですか。

海部 あの頃は、答弁はさせないんだもの。

伊藤 でも一応政務次官ですから。

海部 こういうこととこういうことが今国会に提出する法案の概要であります、という程度の説明がありますね。はじめに。

伊藤 就任したときに、各局長なりがいまの仕事の概要はこういうことでございますという説明は――。

海部 それはあります。そして、労働省というのはこういう仕事をやっている。予算はこれぐらいで、こうだ、ということはありませんでもそれつきりです。委員会ですらそれを審議しているときに、政務次官が出ていって――そのうちに写真を見つけたら出しますが――、私が答えに行つたら、当時三木さんが通産大臣で、来ているわけです。労働省は、労働大臣早川崇さんが来なかつたので、「じゃあ私が答えます」といって、いろいろと、ILOのこととか、超過勤務のこととか答えたことはあります。そうすると当時としては珍しいから――。

伊藤 政務次官は政府委員ですか。

海部 政府委員じゃない。当然、次官ですから。

伊藤 でもふつうあまり政務次官は――。いまは別ですけどね。

海部 いまは全然別で、副大臣とか政務官とかいって、大臣に代わつて答えていますけれどね。あの頃はそんなでもなかつたでんすよ。

伊藤 あまり政務次官が答弁なさるといふことはなかったんじゃないですか。

海部 あの頃はなかった。それで何をやらされておったかというところ、大臣の式辞や祝辞を持って、ほうほうに代議に行ったりする。それからあの頃は、ちょうど「企業が」創業二十年とか三十年という節目だったんですね。

田中 終戦直後の創業なんですね。

伊藤 昭和四十年、四十一年だから。

海部 そんな代役をやった。

伊藤 じゃあ式典要員ということですね。でもこれをやったらずいぶん勉強になったんじゃないですか。先生は労働問題は初めてでしよう。

田中 労働省の省議には出られていたんですか。

海部 出ました。こっちは厚かましいほうだから、出て行きましたよ。それでいま言ったように、官房長が辻英雄といつて、後ほど政治家になるようやつですね。これが変わった男で、何でも言えるような雰囲気、官房長の方からつくった。だから僕がはじめて行つて、この部屋に日の丸を置けといつたんです。労働省の政務次官室に、ないじゃないか。そうしたら「は、はあ、はあ」と言っている。

「はあはあ言つて、なんだ」と言つたら、「今日までどなたからもそういうご指示はありませんでした」と言うから、「それじゃあ初めをもつて大事とするんだ。ここに置いてくれ」といつて置いた。

それで、省議でも何でも出た。早川崇さんは三木派ですから。

伊藤 ふつうは省議には出してくれませんか。

海部 だから最初に申し上げたように、その人次第です。省議の連絡がないと言つて後からぼそぼそ怒つていたよその省の人もあるし、出ていつてやっているとどこもあつた。

伊藤 ふつう事務次官の方に話を伺うと、「これは事務方の会議であるから」という言い方をしますね。

海部 だから、「政務次官は盲腸みたいなものだから、痛いと思つ

たときに、ああいたのか、と思うだけで、ふだん役所が円満に動いているときは痛くも痒くもないですよ」と言うんだから。

伊藤 あまりあからさまにそう言われたんじゃないや、かなわんですね（笑い）。

■労働省政務次官3（労働大臣・早川崇）

楠 ちよつと横道にそれますが、いまお話に出た早川大臣ですが、早川さんというのは、イギリスの保守党の研究で本を書かれたりして、非常に理論的な方ですね。何か早川さんに関して、思い出はございますか。

海部 それは労働大臣として、と限定しなくてもいいでしょう。あの人は労働大臣にされたことが、不平で不満で、「海部君ね、僕をね、こんなところへ座らせたつて、僕のあれはほかにもつといういろあるんだよ。ええ？ 君、そう思わなかね」と言うから、大臣にそう言われて、政務次官がその通りですとも、そう思いませんとも言いにくい。

それから、保守党として政党は変わらなければならんという。早川さんで一点違つていたのは、総裁公選だ。いまおるなら必ずいう言葉だ。「総裁公選、投票で党首を選ばなければならんというのは、古い。間違ひである。英国では党首はおのずからエボルブされるものだ。君、わかるかい。エボルブされるというのは、日頃からのつき合ひで、早川崇は何を考えている男か、どういう男か、何ができるかということを知つておるわけだ。だから党首は選挙しないで、今度はあの人、今度はこの人、と決めるべきだ。それが議会政治の本筋の姿だ」という。

正直に言う、さつき言つたボナー・ローの話も早川崇さんから、そういう話の中で聞かされたことだ。誰か有名な二人の政治家が争つたときに、それでは保守党に亀裂が残るから、亀裂を残してはい

かん、どうしようかと言ったときに、若くてなかなか将来性があるボナー・ロー君がおる。彼にやらせよう。あれではまだ早いではないか、という意見があつたときに、いや君と俺と二人がみんなの前で協力をして助ければできない話ではないといつて、説得してボナー・ローの内閣ができたんだというんだ。それが日本の保守党の理想であつて、自由民主党の理想もそれだ、と言つたんだ。当時から本当にそうしていれば、いまはこんなことにならないんだ。

そういう意味では、イギリスの議会政治のことを知っていて、いろいろ僕に話してくれた。早川崇という人は和歌山の人です。ただあの人の秘書が、かの有名な玉置和郎さんで、そのまた秘書が、このあいだ有名になった村上「正邦」さんでしょう、小山孝雄さんでしょう。

楠 早川さんは、途中で三木派をやめたんじゃないですか。

海部 朝食会に出てこなくなつたな。ここから先は言わせないで、要するに、「三木さんと一緒にいても、僕は労働大臣止まりかねええ、海部君、きみ」と言うから、「労働大臣止まりじゃない。これからまだまだ先がたくさんあるじゃないですか」と言つても、あの人は「自分の能力というのとはそんなところじゃないんだ、もつと上の天下国家をやれるんだ」という不満が絶えずあつたな。率直に言う。

伊藤 何を希望していたんですかね。

海部 それは大蔵大臣だね。だから時の大蔵大臣なんか、ボロン、チョンです。

伊藤 みずから持するところが高いんですね。

海部 誇りは高く希有広大で、立派な立居振舞をした人ですね。けれども、ちよつとこの人は——。おれもしようがないから、三木さんのところに言いに行ったんだよ。「きみ、政務次官でそばにいてどう思ふかね、そう思わんかね」とかいろいろ「早川氏が」言うから、「三木氏に」そう言つてやつた。「そうしたら三木氏は」、「三木に言つたら、わかりましたと言つておつた、と言つてくださ

い」という。「ほんとうにそれだけでいいんですか」といつたら、「それでいいんだ」と言う。だからちよつとね。その程度にしておこう。ただ、頭は非常に切れた人ですよ。

■労働省政務次官4（ILO総会に出席）

伊藤 労働政務次官になったのが八月で、ILOの総会に最初に出られるのが十一月ですね。三ヶ月ばかりで、日本政府代表でILOにお出かけになるわけですね。じゃあILOについてはかなり勉強なさつたんですね。

海部 それはしました。

伊藤 これは誰がレクチャーするわけですか。ILOについてレクチャーしてくれる人がいるわけでしょう。

海部 それはいます。こちらからも——。総評の方も同盟の方も、幸い自由民主党の青年局長の頃から、労働組合をバンスカやつつたり、労働組合を党の大会に呼ぶから来ないかとやつたりして、みんないちおう顔見知りではありましたから。そのときに、「君らの本當の気持ちを聞かせろ」とか、「誰が行くんだ」といって、行く代表を呼んで事前に話をしたり、出発前に意見調整なんかもやりました。

田中 労働組合を自民党の大会にお呼びになつたんですか。

海部 はい。

伊藤 それで実際に来たんですか。

海部 あの頃は来ませんでした。ただ、来ないでは、向こうもこっちに悪いから、来るには来たけれど、小人数でこそつと党大会じゃない日に来て、党本部の二回の会議室にあがつて、そこで一緒に弁当を食つて一杯飲みながら、ああだこうだ、という話をしました。

田中 それは先生が次官の時のことですか、その前の青年局長の頃ですか。

海部 青年局長の頃です。要するに、新しい自民党をつくらなければならん、というのが自民党が再出発するにあたってのことでしたから。私は「労働組合を敵視していたのではこの国はいい国にならない。だから労働組合の言い分をできるだけ聞こうじゃないか。その代わり労働組合も気に食わんことがあったからといって、なんでもかんでもストを構えるというのはいかんよ」というようなことを言った。特にその頃は、総評とか同盟に敵愾心を持ったのではなくて、日教組だったんですよ。お金はたんまりあるし、教員のそれぞれの月給袋から組合費を一つずつ引くんですからね。五十億になるんですよ。あの頃のお金で五十億といたら、それは労働貴族ですよ。そして自民党は一銭ももらえなかったからひがんで言うわけじゃないけれど、社会党なんていうのはそれをあてにしてやっているわけですからね。「なんとか、組合も両方へ股をかけて、両方と意志の疎通を図れ。社会党とだけやっていたら駄目だ、将来性はないぞ」と言っていたんです。

伊藤 そこで総評なり同盟なりで、あとあと親しくなる方ができましたか。

海部 できました。だから変な話だけれど、後日いろいろなことがありましたでしょう。あれはたいいてい裏で、表に行く前に電話で話をつけたり、俺はここまで今日言うからな、というようなことまで言い合える仲にはなっていましたね。

伊藤 議会対策ですね。

海部 はい。組合の連中も、どの辺で手を下ろしたらいいかということを知りたかったんでしょうね。

伊藤 ここまでは行けるとか、ここから先はちよつと危ないとか。

海部 そう、ずいぶんやりました。その最後の象徴的な火花を散らしたのが、例のスト権ストと言われるものです。

伊藤 あれは向こうが暴走したわけですね。

海部 暴走したんですが、ただ単に暴走とは言えない。僕はいつか「エコノミスト」に、あの頃の裏話がある程度まで――。井上義久

という毎日新聞の新聞記者が書いた文があったんだ。それは、間違った情報を組合に流しておった自民党のある人がいたんです。名前はおぼろげに流れておるけれど。それが、「頑張り、おまえらのストは適当なところで腰砕けになるぞ、がんばればスト権をもらえるよ、スト権をもらってから話をしなさい」というような話をしていた。けれど、こういうことを言っていますよと三木さんに言うと、「それはいけません、プリンシプルに関することだ、むしろ向こうが、そういう自由な判断ができるような雰囲気、体制をつくるのが先である。海部さん、この順番を間違えてもらっちゃいかんよ」という。だから日頃から聞いていたのだからわかっておったので、「そんなガセネタをもらってきて喜んでおったら、俺のほうはおちあがるから、そのつもりでおれよ」と言ったんだ。

富塚「三夫」なんかも、口ではやるやる、と言っていました、初めから終わりまでぶち抜ける自信はなかったでしょうな。けれどもそういう間違った情報を入れた人が二、三人おったんです。それで誤ったんです。だから後になってみれば、そのときの総理の腹で行かなければ、元総理や昔の大親分の腹を聞いてそうするからと言われても、それではいかん。

伊藤 なんとなく腑に落ちますね。この最初に行かれたILOの総会では、何が大きな問題だったのでしょうか。

海部 最初のILOの時は、男女同一労働同一賃金の条約を批准するかどうかがというのが最大のテーマだったと思います。そして、日本はそれを支持します。ただし掌を返したように、今すぐ今年中にやれと言われても難しいから、そのへんがちよつと生ぬるかったんだ。徐々にできるところから法律改正その他も手を着けて前進させていく。

伊藤 それが一番大きな課題だったんですか。

海部 男女の同一労働に対して、同一賃金を払う。それがありません。

伊藤 そのときILOの総会に出席した日本代表の団長は先生だっ

たんですか。

海部 いや私はただ単に政府側の代表にすぎません。労働側の代表と、使用者側の代表がいる。これは日経連のたしか吉村「一雄」さんといったな、頭つるつるでね。それから組合から来た人は堅山利忠さんとか。それから勲章をその後もらった人も来たな。労働組合の代表で勲一等をもらったんだ。

伊藤 ILOの代表には、総評と同盟と両方から来るんですか。

海部 両方です。だから同盟の方はいんです、ゼンセン同盟から来るから。宇佐美「忠信」さんなんかがよく来たな。

伊藤 じゃあ、宇佐美さんなんかとは親しかったんですね。

海部 みんな顔知りだから、「やあ」「おう」で、できますね。それで「今年はどこまで頑張るんだ？」と聞くと、どこまでやるのか言うから、「よしよし、じゃあ帰って来てもおまえは愛知県のあそこに来るなよ」とか言ってる。それから国鉄から来ておったのが、中川君とかいった。これが非常に酒が強く、おもしろい人で、博打が大好き。あの辺には公営公設博打があるんですよ。

伊藤 それはジュネーブですか。

海部 夜、よく誘われて時間つぶしに行こうと言われた。しかしそういう時に、こちらもそうなんだけれど、ああいう人たちは各国の討議や会議を全部聞いておって、よく退屈しなかったな、と思って感心しているんですけれどね。こっちは本当に退屈しちゃってどうにもならない。同じようなことを、ああでもない、こうでもない、と特別用語を使つてやりますね。それで各省からレーバータッシエがみんな来ているんですよ。あれには驚いた。ILOでどういうことが決まっているのか、ILOは何をテーマに議論しているかというところで、各省から来るんです。労働省のみならず。

伊藤 通産は来るでしょうね。

海部 通産も来るし、大蔵も来る。

伊藤 日教組があるから文部省も。

海部 文部省はもちろん来ていますよ。郵政省も来る。それらの連

中とも、どうだ退屈だろうと言って、三日目ぐらいから仲良しになつて、あそこがうまかったから昼飯を食いに行こう、とかなんとかいって、よくやったものですね。

伊藤 じゃあILO総会に行っている日本人というのは、相当な数になるわけですね。労働の側もそんなに少ないわけではないでしょう。

海部 いや、労働側がたくさん来るわけですよ。組合費がザクザクあるから。

伊藤 そうですか（笑い）。じゃあ組合幹部の特権ですね。

海部 特権ですよ。組合幹部の特権という悪いから、組合幹部は常に国際労働の実情に触れ、国家の状態なども身をもって調査をしながら、日本の労働運動の向上のために一所懸命尽くされている姿を、私も行動を共にしながら（笑い）。なるほど、と思ったこともよくありますよ。

伊藤 そうですね、公営博打なども見学されて（笑い）。

佐道 ILOなら大手を振って海外出張できるわけですからね。先生が労働政務次官になられたのが八月で、その前にILO八七号条約の強行採決という話がありますね。これで組合側とぎくしゃくして、それでILOに行かれるわけですが、そういう問題はございませんでしたか。

海部 ありますけれども、強行採決をやっても、やったから人間関係まで切ることはいない。まあ大勢人のおところではあれしませんがね。そこで、その後のことまで全部断ち切るなんて、そんなまっちゃん関係ではなかったから。

伊藤 やっぱ強行採決というのはある程度まで儀式ですか。

海部 儀式ですよ。八七号条約というのは、これはお釈迦様に説教だけれど、組合の代表は組合側がペイを持つ。けれども、なんだかんだといっているいろいろな面でそれを補填しなければならぬわけですよ。そういう裏の取引は向こうはまことに熱心で、代案をいろいろ持つてくるわけです。だいたくたびれました。

伊藤 専従の問題ですね。

海部 専従の問題。本当は、専従は専従できちんとやった方が、いまして思えばいいと思います。

伊藤 いや、本当にその通りです。在職専従というのが問題ですね。だからおそらく国会での強行採決だつて、海部先生はどうか知りませんが、どこかでちゃんとシナリオができていたんでしよう。

海部 議院運営委員会というところが、そういうことを専属で解決していましたね。

■労働省政務次官5（野党対策）

伊藤 先生も議運はずいぶんおやりになったでしょう。

海部 議運も国対もやらされておりましたから、よく知っておるんです。要するに野党の人々が、われわれはここまで体を張って、ここまで勉強して、命を賭けてまでとは気障だから言えないけれど、こんなに努力したよということをいちゃ言わなくてもわかるように絵にしてくれという。ニュースに映るように。だから強行採決の前はワッツと委員長のところみんなが殺到して、ああだこうだと言りますね。ああいうところをなるべく映しておいてくれという。後日の証拠です。それはカンパしたり、応援団がいつぱい来ているから、それに対するお札になるわけだな。

伊藤 ちゃんと芝居をしなければいけないわけですね。

海部 それを言いながらやってきた。だから日本の国会が形骸化した大きな反省点の一つはそれだと思うんですよ。顔を立てちゃったから。顔立て賃とか、寝起こし賃とか。

伊藤 寝起こし賃というのがあるんですね。

海部 寝るでしよう。審議を拒否することを「寝る」というんだな。驚いたけれど。あんな頃は僕らは家来の家来だから、出先の理事ぐらいいただけれど、本職の方から、「いつまで寝かせておくんだ、今週

ただだぞ、来週の月曜からはちゃんと起こせ、わかったな」なんていう話がある。

田中 先生いま「賃」と言われましたが、お金ですか。

伊藤 「賃」はお金でしょう。

海部 それは露骨にお金とは言わんけれど、それはやって負けるんだから、負ければ当然ルールとして、いくらか出せと来たわけだね。昔は。だからそういったことが、悪くしてきた元だ、と思ったね。

伊藤 その「賃」をちゃんと向こうの党なりで配分すればいいわけですが、自分の懐に入れるような人もいたから、それで問題なんです。

海部 それでいっぺん議運の理事会でつかみ合いの大喧嘩をやった。天下周知の事実だから言うけれど、安宅常彦なんていう社会党の暴れ者の理事だ。

楠 女性問題を起こした人ですね。

海部 いや、女性問題のみならず、ノットオンリー女性問題。だから僕が最初に、こういうことが悪くしたんだな、とつくづく横で見えておつて。当時はそんなにえらいほうじゃない。走り使いのほうだけれど、これをやると抜き差しならんところに行っちゃうぞ、向こうに陽の当たるところで凄まじられたり、開き直られて、あの時こういうことがあったじゃないかと言われたら、法律を通したときの正当性や背景の正当性が国民に説明できなくなるんじゃないかとすら思ったことがあったぐらいです。他人事ながらならず、心を痛めた。そういうことを率直に言うのと、当時の先輩は、「まあまあ、いやいや、われわれに任せておけば絶対に悪いようにはせんから」とかなんとか言いながら、今日までやってきたんだよね。

田中 その頃、そういうことは竹下先輩なんかもやっておられたんですね。

海部 いや、忘れしました（一同爆笑）。あいうえお順で言うのと、その前にもう一人いるわね（一同笑い）。あの頃、安倍さんがおるでしょう。忘れしました。

伊藤 安倍ちゃんとか竹ちゃんとか、そういう人たちがいるわけだ。
海部 あまり心楽しい思い出しやないからね。だから、話は飛ぶけれど、三木内閣ができたときに、そういう運び役をやる人がいなくなっちゃったんだ。だから昔から、おいおいと俺には心やすくものを言った人がおる。「あれのところが困っているから、少し持つていつてやれ、あそこの党が口を開いて待っているぞ」と言われても、どうしていいかわからんしね。三木さんに言ったら、「そういうよくない風潮は、ここで断った方が、日本の政治のためにはいいんだよ」という。それはそうですね。

伊藤 そうですけれどね。

海部 俺も内心、そういうことをするのはいやだから、ずいぶん苦労して悪者になったり、嘘までは言わなかったけれど謝りに行ったりましたね。すまん、すまん、と言つて。

伊藤 やっぱ相手に「賃」を渡すというのはなかなか難しい芸でしょう。

海部 難しい。そして受け取りやすくしなければ。だから、そこに忘れてきた格好にしなければならんだ。

伊藤 相手のメンツをつぶしてはいけないわけですね。

海部 そして、そういうことにこっちは慣れていない。慣れていないから、いきなり行つて置いてこいと言われてもね。本当に初めのうちは慣れてもないし、あまりいいことだとも思っていないしね。

伊藤 いやな役ですね。

海部 いやな役ですよ（笑い）。

■労働省政務次官6（海外事情視察）

伊藤 ILOの総会に行かれて、そのあと海外事情視察ということ
で、英、仏、独に行かれますね。

海部 それは衆議院の院の派遣です。それで社自社社公共民という

ような割り当てがあるんです。それは、それ以外はみんな自民党は譲つて、社会党は日頃行けないから、そういうルールみたいなものができていた。共産党だけはなるべく入れんようにしたいがな、ということですね。

伊藤 共産党も仲間に入れておかないと。

海部 入れておかないといかんから。僕がときどき、今度はスペインに行きたいというと、勘弁してください、あそこはちよつと、という。共産党の内部文書で、スペインとかあいう独裁国家は行つたらいかん、というのがあったんだ。それをこっちはいち早く読んで知っておるものだから、それを入れておけば、共産党はまず来ないだろう。あれが来るとうるせえからな、と。

田中 やりますね、先生。

伊藤 この海外事情視察というのは、何でもいから見てこい、ということですか。

海部 いちおう何でもいって、限度がありますからね。だから僕はイギリスに行つて、あの頃ギロチンの制度というのが目新しい制度だったんです。ギロチンの制度というのは、法案の審議のために何時間討議の時間を渡すか。議長はその討議を聞いておつて、もうこれは内容の主な点については両党の意見が出尽くしたな、と思う頃にギロチンの動議を出すわけです。ギロチンというからすぐに切るのかというと、すぐカットダウンじゃない。「議論もおおよそ出尽くしたと思います。だから言い足りなかったこと、これだけは言わなければならぬと思うことを（あそこは「党が」二つしかないけれど）、各党一時間ずつで終わりとします」と宣告するんです。そのときは、東中「光雄」という共産党も一緒におつただけけれど、馬鹿な質問をしてね。「あの、ちよつとお尋ねしますが、いまあなたは一時間ずつ各党が最後にしゃべれとおっしゃったが、それで話がまとまればいいですが、合意しなかったときはどうするんですか」と聞いたんだ。そうしたらそのときにイギリスの議長の答えは、「ちよつとよくご質問の意味がわからんけれど、こんなに長い

ことをやってきたのに合意ができないし、このテーマもこのテーマも出尽くした。だから議論は尽くされたと私は判断したんだ。けれどもここで私がギロチンしちゃったら、それこそ血も涙もない悪逆非道無能横暴なスピーカーだと言われるから、百歩譲って一時間ずつという提案をしているんだ。ご不満だったら、それを二時間ずつにでもしますか。それこそ、そういうネゴシエーションはどうぞご自由におやりください。しかし我が英国では、だいたいそういうと、それで収まるものです」ということだ。赤っ恥をかかされた。

あの話はたいへん説得力があったね。それは英国の議会のルールの一つです。日本だったら、反対、反対とみんな駆け上がっていつて、ひっ捕まえてマイクを引きちぎったりね。それから議長がもつともらしく呼んで、この間のはあれだったから、さらに追加補充質問をやれとか何とかいうことをやったでしょう。そして確認の採決なんてつまらんこともやっただね。あの時は場内騒然として採決が整然と行なわれなかったのではないかと議長は判断しますの、もう一回確認の採決です。二度の採決ではありません。確認の採決という言葉を使いましたね。

そんなようなことを、行つて聞いたり、語ったり。逆に社会党や共産党の教育に利用したということですね。日本でもできたらそれをやりたいんだけど、できない。日本は外圧に弱い国ですからね。昔はアメリカの進駐軍の命により、と言えばだいたいどんなことでも許されるもので、英国の議会政治は神様の国だから、英国ではこうだったというと、だいたいそれで、まあしょうがないな、ということになる。けれども日本の議会では、ギロチンの制度というのは定着していませんよ。僕は定着させたいと思つていらっしゃるだけなんです。

伊藤 議長に伝統的にそういう権能がおのずから育っていないければ無理ですね。

海部 そうなんです。議長自身の自覚と器量が必要ですからね。

伊藤 日本の場合はどうがいないですね。自民党は議長を担いで。

海部 すぐクビにしちゃうんだから、議長を。
伊藤 あれは本当に気の毒ですね。

■労働省政務次官7（祝日改正法案）

田中 思い出したんですが、この頃、祝日法改正案がありましたね。例の紀元節復活ですね。あの頃自民党はどんな状態だったんですか。それから先生はどんなお考えでしたか。

海部 あれは、たしか対決法案になって、若手の質問二、三時間ならいつでもこなせるというやつを集めて、集中的な勉強会をやるんです。そして、名前をいっただけ悪いかもしれんけれども、佐藤誠三郎さんとか、あの頃は舛添要一も御用学者の方だったな。あの頃から友達になったから。それらが来ていろいろ教えるわけだ。そういう話を聞いて、われわれが質問者になるわけですね。それであれば紀元節が元だったんですね。

伊藤 二月十一日ですね。

海部 それでまず奇妙奇天烈な案で答えられるなら答えてみるというところで、提案者に質問したり。最後に社会党がいろいろ言う。

「それじゃあいつたい、うちの天皇の第一号であられた神武様は何月何日にお生まれになったということを経史上の事実をあげて、ここで議論できますか。馬鹿なことを言うな」なんて言うから、「ちよつとそんな失礼な言葉を使いなさるな。それは不敬罪ですよ。天皇陛下の誕生日を聞いているのに馬鹿な、とはなんですか」と声を荒げて度肝を抜いておいて、「生まれられた証拠も証明もないじゃないかというならば、逆に生まれなかったという証拠も証明もないではないですか。どうするんですか。けれどもわれわれの先祖や皆が受け継いできたものは、それが正しいものだ。慣習法的に定着したものと認めるわけにはいかんですか」というようなことで盛り立てて、「世界のどこの国にもそういう祝日はあるんだ」というんで

す。

あの頃、木村武雄という元帥と言われた気骨のあるおじいさんが委員長だったけれど、「君が一所懸命やって、これを通さなければ駄目だ。こんなもの一つ通らんようでは、将来駄目だな」とかなんとか言って発破をかけながらやったんですけれどね。けれども、あの時初めて自民党の青年局の連中が――。ああいうときは青年局とか議院運営委員会とか第一線でいつも切り結んでいる連中が、どういうところへでもまとめて持って行かれるわけです。こっちに來てここでやってくれ、ここでもやってくれと。たしかあの頃は、北海道の中川一郎とか、三重の野呂恭一（師範の卒業生だ）、そういう人がみんな来る。そしてまた知恵と乱闘のためには安倍晋太郎と竹下登が競って委員会でいろいろやったものです。ただ、内容で負けてはいけなから。国民の祝日を決めるんですからね。ずいぶんあの頃はみんな真面目に勉強したんです。だから僕らも本を何冊か読んだり、勉強させられましたね。

田中 ブレーンのような人で、佐藤さんとか舛添さん以外に誰かいましたか。

海部 それは木村元帥が知っている人で、名前は忘れたが、あの頃の古いロートルという失礼だな、名前も知らんような人だったけれど。当時の僕の記録を埃をはたいて探してみます。それから古い写真もいっぺんお見せしなければならんと思つて。

伊藤 ぜひ拝見したいですね。

海部 古い写真も出て来たら、ついついよけて置けと云って、命令だけしているんですが。

■労働省政務次官8（保革対決）

楠 当時、祝日法で対決したということもありましたが、美濃部都政ができたり、左右の対決ムードが高まった頃ですね。左翼の全盛

時代だったと思うんですが、そういうことに対する危機感は強くありましたか。

海部 それは当時の「中央公論」に、われわれを集めてときどきこ馳走して説教しておった石田博英という政治家が、あと何年かたつと保革は逆転すると書いたんだ。

伊藤 あれを「中央公論」に書いたんですね。

楠 それはもうちよつと前の話ですね。

海部 これ以上もつと「革新」が増える、そうするとこうなる「保革逆転する」というようなことを書いたように、あの頃は自民党もいつも自民党、保守という時代ではなくなるだろうというようなことで、おぼろげながら危機感を持っていましたが、そう言われても選挙をやるも勝つでしょう。

楠 ただ知事はずいぶんあちこちで、特に太平洋岸でどんどん革新にとられましたね。いずれは革新政権ができるかもしれないという危機感がありましたか。

海部 それは現実になるという確信はなかったが、東海道の沿線、特急の停車する駅のある県はみんな社共連合政権になっちゃった。

わが名古屋も名古屋市長も小林なんとかというのが社共連合の候補でした。

伊藤 だいたい大都市は取られちゃったんですね。

海部 東京を發つて、横浜に止まつて、特急列車が止まるところはだいたい取られたんです。けれどもそれは、ロールバック・ポリシ―が成功したんでしょう。

田中 ロールバックでどんなことを具体的にやられたんですか。

海部 田中角栄あたりの発想が中心になってきて、現世ご利益ですよ。「あんなのに投票しとつて、いい駅が、いい町が、いい国ができると思つている人が一人でもあるのか、ここは」とかいって脅かして、「それよりもね、それよりもね、もっと美しいものをつくつて、きれいなものを生み出していくためには、やっぱり先立つものがあるんだ。先立つものがあるんだ。先立つものは、みんながよく

働いて、輸出をたくさんして、日本の国がうんと儲かることだ」、
そういうことはおそれず言いましたな、街頭演説で。

伊藤 もつとも、革新の地方自治体も、自治労や何かに押されて、
やたら予算を増やして、職員を増やして、という失政をたくさんや
りましたからね。やがてそのうち自然に滅びるという面はあったん
じゃないですか。

海部 それはあったと思いますね。

伊藤 そういうものと重なるような形で、昭和四十四年に至る過程
で、だんだん新左翼が強くなって来るじゃないですか。

海部 あれは変な言い方だけれど、左翼の人が、理論通り世の中が
変わらない、自分たちの夢や希望を実現するためには何ともならん
じゃないかというふうにもならない無力感、絶望の中にたたき込ま
れたときに、わっと飛びついてくつついていくのが、あの新左翼の
議論だ。「とにかく理屈を言ったり、生意気なおまえらが悩むよう
な時じゃないんだ、まず壊すんだ。まず破壊から始まるんだ。破壊
もしないで悩んだりするな。これが秩序だとかなんとかいうが、秩
序は誰がつくった秩序だ。そんな秩序はいらない」というようなア
ジテーターが来ると――。

伊藤 なかなかうまいアジテーションだな（笑い）。

海部 そうすると新左翼の支持はずいぶん増えたものだ。僕は新
左翼じゃないですよ。

伊藤 いや、なりかかったのではないかと（笑い）。

■労働省政務次官9（アジア労働大臣会議）

伊藤 その労働政務次官の時にマニラに行かれますね。アジア労働
大臣会議。これは労働大臣が行くわけではないんですか。

海部 労働大臣が行くべきなんです、たまたま早川崇さんという
人は、飛行機が嫌いな人だったんです。

楠 じゃあ、代理出席だったんですか。

海部 そうです、代理出席です。

伊藤 他の国はどうでしたか。

海部 だいたい大臣が来ました。フィリピンではエミリオ・エスピ
ノザ・ジュニアとかね。それからインドはなんとかシンといったな。
伊藤 そうですか。なんとなく日本だけ代理というのは変ですね。
これは課題があつての会議ですか、それとも多少お祭りのな会議で
すか。

海部 お祭りのな要素もたぶんあつたでしょうけれど、アジアの国
々の労働大臣全部が、毎年一回一堂に会して、アジアのことを少し
考えようじゃないかという機運が出て来た頃なんです。そしてや
やもすると、反米、反英と流れる風潮があるわけです。それはた
めにならないよ、アジアがよくなつていくためには、反米反英では
よくならない。たしかに英国がイギリスでやったことをアジアに持っ
て来てやろうと思つても、うまくならないこともあるかもしれない。
あるいは甚で言われているアヘン戦争の問題でも、あれは素晴らし
くいことだったとは言えない。しかしああいう試練を乗り越えて、
今日のアジアがあるんだ、せつかくみんなが独立を手にしたんだか
ら、アジアはアジアでお互いに助け合つてやつていくのではないか、
というふうな大きな流れが底流としてありましたね。

私は忘れられないことだけれど、あの頃すでにアジアから日本に
労働者をもつと受け入れてくれと言われた。そうすると技術移転に
なる。人物教育をやつてほしいという。あの頃はまだそんなにたく
さん日本も外国に対して支援ができていない頃だと思ひます。一番
熱心にそれを言ったのは、フィリピンとセイロン（スリランカ）。
そのあたりが日本へ、というけれど、それを日本で企業の人に聞い
ても、「そんな色の黒いわけのわからんのが来て、ちいちいばつぱ
と言われても、言葉が通じない。通訳をつけて働いてもらつておっ
たらきがない」という。

そこでILOの本部の方とも話そうと。アジアにこういう話があ

るけれどもいつて、ILOの総会は二度目でした。一度目が終わってから、そのアジアの労働大臣会議というのが、できればこれもパーマネントな機関にしたい、それは日本にもっと技術協力をして欲しいんだという。そんな頃、青年海外協力隊がスタートしたばかりですから、僕は青年海外協力隊といういい制度があるから、この問題はそちらでやったらどうかといったら、青年と限定しないし、お宅の自由民主党と政党的に仲良くなっているこちらの政党がやればいいけれど、これは国としての国策で、もっと長い目盛りでもっと幅広い話でやってほしいんだという。ところがこちらはそれは駄目だ。

そうしたら、たしかILOの事務総長から僕のところに連絡が来て、「イタリアのトリノというところにボケーショナル・トレーニング・センターがある。イタリアはヨーロッパに移民を出したい方だ。イタリア語では駄目だ。だから言葉ができれば共通語になるように、ボケーショナル・トレーニングだからどこへ向くかしらんが、それに従った教育と二本立てでやっている機関がある。それを日本も見に行つて、同じようなものをつくつて、そこに呼んで、そこで教育したらどうか。そういう提案をします」と言ってきた。

それで、おれもこれはいい話だ、日本も頼られるようになった、やりましょうということで、いろいろなところでその話をしたら、一番最初に反撃が来たのはどこだったと思いますか。総評です。

「そんなことをやられたら、みんなクビになっちゃう。おまえらが言うことを聞かなければ、いくらでも安いのを連れてくるからいいよといって追放される。日本ではまだ待つてくれ、やっちゃいかん」という話で抵抗がありました。そのときは抵抗を乗り切る方法も知らなければ、とことん抵抗されたのではかなわん、と思ったから、それじゃあということ、第二回のILOの総会も代表で行きました、そのことはまだ日本は検討中でございます、ということにしておいたんです。

むしろそれが将来生きたのは、青年海外協力隊の中に語学訓練所

をつくったことです。それが現地に行つてから役に立つためには、最後の三ヶ月ぐらいは派遣国に訓練所をつくらなければいけない。派遣国に訓練所をつくつて、その新しい訓練所で、派遣先の人々と生活と労働を共にすることが、コミュニケーションには一番いいんだということになって、現にやっています。これは最後の三ヶ月は派遣する国に行つてその国で生活と労働を共にしながら、最後に言葉の練習をやる。それはインドなんかに行つたら、「イティ・イズ・ウインポートアント・プロブレム」とかいって、舌を噛むような巻き舌で英語をやる。そんなのは真面目な人はみんなわかりやせんが、だから現地に行つて初めてわかりました、という手紙が来るわけです。

だから初めの頃、言葉が通じなくてトラブルを起こしたり、諍いを起こしたりするのが、だいぶ少なくなつてきた。だから本当に外国人労働者を日本が入れなければならん時期が近づいてきているようですから、本当に入れるときには、僕はもう一回、ボケーショナル・トレーニング・センターをつくるべきだといった。イタリアでそれをやつてうまく行っているんですから。日本は言葉、日本語を覚えてもらわないといけませんね。

■労働省政務次官10（衆議院社労委）

伊藤 労働政務次官になられたからということでしょうか、衆議院の社労委の委員になったりということ、だんだん社労族とも近くなつてくるという感じですか。

海部 社労にもお礼奉公を少ししてあげなければいかん。

伊藤 お礼奉公ですか。

海部 お礼奉公というのは、要するにILO八七号条約とか、同一労働同一賃金の問題とか、いろいろなことが出てくるでしょう。それは労働政務次官でILOに行くためにいろいろ勉強もしました。

日頃選挙の票にならないことは、自民党の人はあまり勉強しないから、必要に迫られた者だけが勉強をして、だんだん専門家に育っていくんですね。僕は必ずしもそれだけではない、文教委員会というのでもずっとやっておったし、商工委員会も主としてやりましたけれども、社労の方もいぶんやらされました。けれども、社労をやったことが、政治家としてはマイナスではなかったわけで、プラスになったわけですね。そのころはいま顧みて、なんでもやるべき時に勉強しておけば、マイナスばかりではない。

伊藤 これは自民党の政調ですね、労働部会の副部長をおやりになつていますね。

海部 やりました。

伊藤 副部長というのはかなり大きな役割ではないですか。

海部 どうですかね、副部長クラスでは大物ではないと思います。

田中 副部長は一人ですか。

海部 部長は一人ですが、副部長は衆議院に一人、参議院に一人という感じだったかな。そして、法律を国会に出すときには、部会できちんと了承を取り付けなければ出せません。よく覚えていることは、公務員の賃金、三公社五現業の賃金をどこまで上げるか、それを拒否するか認めるか、ということがあった。僕らははじめから、「いや、それはそのために人事院があつて出してくるんだから黙って全部呑んじゃえ、全部呑んだのに君らがストをやるのはけしからんじやないかと言えらるから呑め」と言うんだけれど、当時の大蔵その他は、「いや、いま国家財政はこんなでありますから、全部がうまく行きません」という。だからけちな話だな、一年のうちで四ヶ月分は前年同様の凍結で行きます、とかね。

伊藤 後ろに押すんですね。

海部 ずらすんです。また大蔵が説明に來ると、それだけやつてもらわないと、一ヶ月あたりいくらこのお金が出なくなるといふ。まあ、よくああいふ説得材料を持つておつたものだと思います。

すけれど、ずいぶんやられた。そういったことでお礼をしたり。

田中 そういうことは労働部会の承認を得る必要があるわけですか。

海部 あるんですよ。労働部会が承認しなければ、政務調査会にかからないもの。政務調査会が承認しなければ、党の意見にならない。そうでしょう。ややこしいんです。

伊藤 やつぱり、政調会がだんだん実際の政策決定の過程で、力を持つてきたということですね。

海部 いろいろなことがわかるから。

伊藤 ということは、議員さんがみんな勉強するようになったということじゃないですか。

海部 政調の副部長とか部会長とかは、若手の登竜門ですからね。ああいふところに来て、真面目に一所懸命勉強しているやつは、委員会質問をやれと言われても困らないわけです。本会議の質問をやつたつて、堂々と困らずにやれるわけです。日頃そこで切磋琢磨しているから。けれどもそういうときに勉強しないで、飲んだり遊んだりばかりしていると、そういう人は歌の上手な人になる（一同笑い）。

田中 そういうときに勉強するというのは、ご自身で勉強されるほかに、やはりお役所から局長なりなんなりをお呼びになつて勉強されるということですか。

海部 正直に言いますが、いちばん物を知っているのは役所の課長ですよ。あるいは局長はちよつと人をハカにして、政務次官クラスに教えてもしようがないから、もうちよつとお年の近いところでやってください、という気持ちがあつたのかもしれないけれど。局長に推薦させると課長が二人か三人がかりで来ますからね。それらと言いたいことを言いながらやつていくと、それが一番いい勉強になった。

伊藤 海部先生が政務次官になったときに、おそらく局長さんはみんな年上ですね。

海部 そうですよ。だから大学が一緒ですというと、みんな向こう

が先輩ですよ。

伊藤 だから年からいうと、課長か課長補佐ぐらいでしよう。

田中 この頃はおいくつですか。

海部 僕は三十五歳で労働政務次官になったんだから。

楠 課長でも上ですね。

田中 課長補佐クラスですね。

海部 だから困ったのは、アフリカに平和部隊の会議に行くときに、官房長官が僕のところに来て、「どうぞ、外務省と大蔵省から、どんなのをお付けしましょうか。こういう話をよく知っているのがおつたらご推薦ください」というけれど、こっちは「そういうことはどうでもいいんだ、話の中身はこっちがしゃべるから。ただあまり立派なちよびひげに來られたらかなわんから、年が俺より若いこと、その条件だけ守ってくればいいや」といったら、「わかりました」と言った。それはいいことだそう。後から聞いたら、なかなかそういう若いのを指名してくださる人はいないけれど、指名してくださったので、役所でも将来の勉強になるから、という。だからあの頃は若いのがついてきてくれて、やり甲斐があったですよ、青年協力隊の視察旅行の時は。

伊藤 場合によってはノンキャリの人たちがよく勉強しているんじゃないですか。

海部 そういうことでしょうね。けれども、ノンキャリを呼び出したり、ノンキャリに聞いたりすると、キャリアがひがんで馬鹿にする。

伊藤 むくれちゃうということですね。

海部 ええ、むくれたっていいけれど、そういうことはちよつと気を遣いますね。

■労働省政務次官11（ILOでの演説と労働貴族）

佐道 ちよつと確認なんです、この『全人像』の中に、労働政務

次官時代の先生の記録として、「最年少、最長期、最多海外演説」とあるんですが、ILOは二回行かれたわけですね。

海部 本会議二回のほかに、インランド・トランスポート・コミッティというのがあった。委員会も各国ごとに行く。特に日本の場合のように、国鉄労働組合とかバスとか、そういうものにストライキ権を与えていかどうかというテーマになると、そういう地方のコミッティにも本省からきちんとしたのが行かなければならないということになって、僕はそれにも行きましたね。

佐道 それで合計三回になるんですか。

海部 いや、合計すると、本会議が二回と委員会が二回ありますから、四回行っているわけだな。

伊藤 その委員会もジュネーブなんですか。

海部 ジュネーブです。同じパレディナッションの中にあつて、ちよつと日本の国会と同じですよ。小さい会議室でやっているんです。伊藤 用語は英語でございましたか。

海部 英語。それにカタカナ・音符付きです。カタカナで下に書いてある。「デイスティングウィツシュト・ゲスト、レイディース・アンド・ジェントルマン」といって、間違つておつても、これが日本語だと思え、というようなことで、「マイ・グレート・プレジャー・トウ・ハブ・アン・オポチュニティ・ビハーフ・オブ・マイ・ガバメント」とか言つて、覚えていきますよ。だけどあれは半分以上はわからなかつたろうと思う。みんなカタカナ・音符付きですから、ここは力を入れてくださいというところには音符がつくわけだ。

楠 議論は通訳付きでやるわけですか。

海部 もちろん。だから後で問題が起こつたのは、「ちよつと質問させてくれ」といって、べらべらと言うから、おれが「おい」とか言った。「どうして答えていただけんですか、何か失礼なことを言いましたか」というから、「いやそうじゃない。あそこだけは俺は国を出る前に、一所懸命練習してきた。だからいまほとんど原稿を見ないでお話したでしょう。内容もほとんど覚えてる。けれどい

ま聞いたのは初めてのことで、ファーストタイムだ。アイ・キャナット・アンダースタンド」といった。そうしたら、日本の人というのはまことにわかりにくい人だということになっちゃったんだ。練習しているところはしやべれるけれど、練習していないのはしやべれない。当たり前のことだね（一同笑い）。俺は当たり前のことだと言つてやつたんだ。そうでしょう。

田中 先生に限らず、日本の政府の代表の方は、国際会議ではみんなカタカナでやつてらっしゃるんですか。

海部 それは国会議員の一部がカタカナ・音符付きであつて、大多数は上手下手は別にして、理解されるかどうか別にして、英語を読むね。おれは、英語を一所懸命読んでいるやつは目が死んでる、と言つてやつたんだ。だから僕は途中でいつも調子よく演説を変えちゃつて、「アロー・ミー・トウ・スイッチ・ヒア・ジャパニーズ・ソー・アイ・キャン・スピーク・ジャパニーズ・モア・フルエントリー」と言うんだ。そこでみんなワッツと笑うからね。

田中 当然通訳が必要になつてきますね。

海部 ちゃんと打ち合わせをしてある。そう言つてからやるから、おまえはそこにおれよ、と言つてね。組合は初めからちゃんと「通訳を」連れてきていますよ、羨ましい。女性通訳をサイマルあたりから連れてきてね。

佐道 予算が潤沢ですから。

海部 潤沢だからそういうことができる。だから労働貴族よ。

伊藤 羨ましい限りですね。

海部 それで西岡武夫とおれが、榎枝「元文」が日教組のことを言いにいったときについて行つてやつたら、社会党は旅費がないから来られないわけだ。出してやつたらいいじゃないかと言つたら、なんのかんの言う。それで榎枝は女性の通訳を日本からチャーターして連れてくるわけだ。われわれは現地の大使館で、誰か英語に自信のあるやつ出て来いといった。そんなものですよ。

伊藤 だいぶ違うものだな（笑い）。

海部 労働貴族、とあの頃は言っていましたよね。

伊藤 さつき商工とおっしゃいましたが、衆議院の商工委員会の理事をおやりになっていますが、これは自民党の商工部会とは――。

海部 これも商工部会の副部長です。

田中 理事は副部長がやることになってるんですか。

海部 いや、そうではありませんけれど、だいたい理事になるようなクラスのやつは、部会の方では副部長になる。部長になるような人は、理事は卒業した人だ。

伊藤 そうすると、だいたい政調と衆議院の委員会とはリンクしているわけですね。

海部 リンクしている。だから相交わるミツワ石鹸のようなもので、交わったところに丸い部分がストンとある。党の役職、政調の役職、それから理事とかいろいろなことをやる。そのうちに、そういうところから外れちゃう人がおるわけです。どのポストにも就けない人がある。そういう難民救済事業が、いわゆる悪名高き議員連盟というものですよ。一番わかりやすいのが、ついこのあいだうちあつた中小企業・ものづくり大学促進議員連盟でしょう。ものづくり大学のことは労働部会でやりますね。それから委員会は文教委員会です。ありますね。そういうところでやればいいんだけど、そこから外れる人があるんだ。そうすると議員連盟をつくる。その議員連盟の会長、副会長、理事というポストを決めるわけだね。また議員連盟の方も、その気になつてやれば、仕事はたくさんあるんです。

伊藤 難民救済事業だとは思わなかった。

田中 いま自民党には議員連盟がいくつぐらいあるんですか。

海部 百ぐらいあるんじゃないですか。ピンからキリまである。

伊藤 僕も何か議員連盟をつくってもらわなくちゃいけないな（笑い）。この労働政務次官は、四十一年の八月からおやりになって、途中で佐藤内閣が改組「第一次佐藤内閣第三次改組」になつて、それでまた政務次官を引き続いてなさったんですね。だいたいふつうはそういうふうにするんですか。

海部 内閣が替わるとだいたい大臣が替わりますから、「政務次官が」替わらないで居残られると役所がいやがりますよ。前のことをよく知っているから。その頃ちよつと異例だったんですが、引き続いてやりました。

伊藤 大臣も引き続きですか。

海部 大臣は替わったんです。大臣が替わったから、異例だということです。

田中 引き続きやってくれと、誰かに頼まれたんですか。

海部 これは変な話ですが、役所から頼まれた。労働省から、やってください、ということでした。

田中 それはどういうことですか。

海部 おれが替わらないで、やあやあと言っていれば、総評でも同盟でもみんなあれる。天池「清次」さんなんていう民社党の大ボスがおったでしょう。あの人に「勲章もらいなさいよ、労働省からちゃんとあれて勲章もらえるようにするから」なんていう話をしてみたり、いろいろ労働省のためにも役に立つように頑張ったんですよ。それはただ単なる一労働省というよりも、日本の労働界が他の国にひけを取らずに尊敬され、力を付けていくためにはどうしなければならぬか、ということでしょう。それに偉そうなことを言った以上、ILOの委員会でも行けば、あれは会議を三週間やるんですから、三週間いなければならぬでしょう。

伊藤 毎日会議があるわけではないでしょう。

海部 いや、毎日やるんです。

伊藤 会議はやつていられるでしょうけれど、出席しなければならぬ会議は――。

海部 ねばならん、ということはない。だから行って、だいたいこれとこれとこれと出てやろう、あとは適当に遊ぶよ、ということですよ。ですけど、それをやってくれる人もありがたいですね。田中 じゃあいまでも先生は、労働省には力を持っているんですか。海部 いや、力はないけれど、ものを言えば、やあやあと出てくる

人はいっぱいいる。

佐道 それは力があるということでしょう。

■労働省政務次官12（マイスター制度）

海部 道正「邦彦」というのが歴代労働省の事務次官で秀でた男だと言われているんです。彼がいま会長をやっている技能労働者全国会。僕はドイツのマイスターの制度がいいなと思っていたので、日本にももうちよつと働く人に生き甲斐と誇りを持たせなければ駄目だ。そこで「日本版のマイスターを作れ、どうですか、これは」と言ったら、当時「労働大臣が」山手満男さんから早川崇さんに替わった僕の二度目の時、早川崇さんの時に、まあそれをやろうということ、一級技能士、二級技能士という資格をつくったんです。今でもどこかに行くと、金色が一級技能士、銀色の方が二級技能士あの頃だから、そういうことでよく通ったと思うんですが、今だったら一級だの二級だのという位の決め方は反発を食うでしょうね。A号とかB号とか、何かしただらうけれど、今でも一級、二級はあります。あれはマイスターを頭に描いてつくって、働く人に少し誇りを持たせようということです。

それで、ホテルレストラン技能サービス協会というのが全国にあつて、その一級はやはり金色でHR（ホテルとレストラン）、周囲に国会議員と同じエンジ色の縁取りがあるんだ。それはホテルレストラン技能サービス一級認定です。

田中 サービスをする人ですか。

海部 サービスです。それで調理人の方は、調理師の一級、二級というのがまたあるんですね。そういうちよつとしたことだけれど、やつてあげるとみんな誇りを持って胸を張るわけだ。つけなくてもいいものをつけてみたり、やる気を起こさせるといふのはそういうことだなと思っただけですね。それは労働政務次官をやっておつたと

きに、身をもって働く人から教えられたことだと思えます。

伊藤 政務次官をお辞めになるのはどういっかけですか。

海部 それはルーティンワークですもの。

伊藤 でも内閣が替わったわけではない。

海部 あの時は内閣が替わったんです。

伊藤 改造があったのかな。

海部 そう、改造です。総理が替わったという意味ではない。

伊藤 じゃあ第二次内閣の改造内閣ということですね。それでその代わりに、自民党の政調の労働部会の副部長になったんですね。

海部 副部長になった。

田中 これは長いですね。二年半ですか。

海部 はつきり言う、労働関係の人がおらなかった。だってあんな票にならない、役に立たないポストは、苦労した人は手をあげて取りに來ないから。

伊藤 つきあう相手は組合だから、これは別に票になるわけがない。楠 この頃、労働関係では石田博英さんがいちばん力を持っていたんですか。

海部 そうそう。

伊藤 倉石「忠雄」さんは。

海部 倉石さんはちよつとスキヤンダラスな問題があったものだから。田舎の農業協同組合は途上国の国連のなんとかと同じだと言ってみたり、そういうことがあった。倉石さんは石田博英さんに勝るとも劣らないと僕らは見ておったけれど、やっぱりバクさんの方が上だったな。

伊藤 そのバクさんがだんだん見えなくなってくるというのは、どういうわけですか。

海部 あれは肉体的な衰えと共に、やる氣と活力がなくなつたんです。

伊藤 氣力を失つたんですか。

海部 氣力を失つた。

伊藤 そうですか。石田労政とか倉石労政と言われるような存在だったはずなんですけれどね。石橋内閣をつくったあたりで、将来の総理じゃないかなんて言われて。

海部 僕らもみんな早稲田では、石田博英がやってくれるだろうと思つていた。それが石橋さんの無念を晴らすもどかといういろいろ期待もしておつたし、われわれも集まつていろいろやつたものです。

■自民党青年局長1（青年局と地方青年部）

伊藤 それでその翌年ですか、自民党の青年局長になられていますね。いろいろなことをおやりですが、学生の時から始まつて、ずっとその畑を歩いているんですね。青年局長の前任者は――。

海部 早川崇。だから頭の毛が一本も生えていない青年局長だったんだ。あの頃は、自民党には若手はあまりいなかったんですよ。それで、自分で言うのもおかしかったけれど、青年局長も私は六年間やらされましたよ。あとがおらんもの。

青年部の大会をやつたり、青年局の大会をやる前の常任委員会なんかやると、各都道府県連の青年局代表というのは、そうとう海千山千の小生意気なやつが出てくるわけだ。その中の一人に浜田幸一なんていうのがいて、千葉県連の青年部長で出て來ているわけですね。そして青年部の大会で、当時の川島正次郎副総裁の挨拶のあとで、「質問！」といつて立ち上がつて、「いま副総裁の、あれはご挨拶なのか、聞いておつて、まことに残念です。もうちよつと青年よ頑張れとか言えんもんですか」という。なにかデモカストがあった時だな。そんなときの青年大会だから、「だいたい副総裁が、そんなていたらくでは駄目だ」なんていうことを言い出す。

しょうがないから、こつちがそばに行つて、「おい、ハマちゃん、おまえ言い過ぎだぞ」と言つたら、「そうですか、黙れちゅうんですか。しょうがない、兄貴が黙れと言うんだから、言うことを聞

かなきやならんけれど、私は一千葉県連の青年部長だ。兄貴のほう
は党本部の青年局長だ。私もそれぐらいになりたいと思ってる」
と言う。あれは利口だから、終わってから「今日はああやって抑え
ておきましたから」とか言うんだ。頼む、頼むといって、楽にその
後は使えるようになったけれど、全国の青年部長にはああいう人が
いっぱいおるんだから。

伊藤 青年部長は必ずしも若いとは限らないでしょう。

海部 そうですよ。岐阜の青年部長なんていったら、えらい年寄り
だった。県会議員の大ボスですよ。

田中 年齢制限はないんですか。

海部 ない。年齢制限をしたら集まりやしない。青年部は三十歳ま
でなんていったら、まず集まらない。

伊藤 党の青年局長は、ある程度党の予算をつけてもらっているん
ですか。

海部 今から思うと、幹事長と馴れ合いで、やあやあで、じゃあお
まえのところはこれぐらい使ってもいいということだった。毎年ど
れだけ使ったかの決算と、今年はどれぐらい使うか予算を持ってこ
い、なんて言われてね。

伊藤 それは大会とか、遊説とか。

海部 旅行とか。それで青年部の代表でも毎年一回旅行団をつくつ
て、旅行に出したり、協力隊の行っている現場に行つて激励をして
くるとか。そうすると喜んでみんな出て来ますね。そういうときの
予算を取りに行くわけだ。

伊藤 でも局長ですから、自民党の中で偉いでしょう。いろいろな
局長はいますけれど。

海部 いろいろな局長がいる。選挙の時に役に立つのは、圧力団体
を集めて、政策的にそれを締め付けたり票を取ったりするけれど、
どちらかというと、あまり明朗な締め付けじゃないね。ギブ・アン
ド・テイクだから。ギブの方は政策をつくらなければならん。少々
片腹痛くても心痛んでも、何か考えてこういう法律をつくってやら

なきやならんとかといってやるでしょう。青年部の方はそういうこ
とは何もない。

■自民党青年局長2（党の組織について）

楠 自民党の局長の中で、一番有力な筆頭の局長というと総務局長
ですか。

海部 総務局長は選挙を担当しますから。

田中 経理局長はどうですか。

海部 経理局長なんていうのは、自分で自由にできる権限を持つて
いればいいけれど、経理局長といっても権限がないんだもの。

伊藤 幹事長の言う通りにお金を出すんですね。

海部 言う通り。

楠 総務局長は、幹事長の下で、公認とかを考えるんですか。

海部 粗ごなしは全部総務局長がやらせる。幹事長はそこまでとて
も手も目も心も配れませんよ。

楠 よく幹事長は人事権を持っているというけれど、実際には総務
局長がいろいろやるわけですね。

海部 選挙になれば、そうですね。人を選んだら。

伊藤 総務局のほかはどういう局があるわけですか。

海部 総務局のほかは、経理局とか、遊説も局になっていますね。

青年も局、婦人も局になっています。

伊藤 青年婦人局じゃないんですか。

海部 婦人は婦人局、青年は青年局。あと何があつたかな。

佐道 印象が薄いんですね。

田中 団体局というのがあるんじゃないですか。

伊藤 組織局じゃないですか。

海部 組織総局というのがあつて、組織総局の中に団体局があつて、
その中に中小企業の局があつたり、適当につくっていくんだな。農

林局だとか、ＩＴ時代になってきたから、電気通信局なんていうのもあるんじゃないの。

伊藤 それは支持団体を――。

海部 支持団体をコントロールして、政策要望を聞いておいて、それを適当に持っていく。だから政調の役職と、組織総局の役職とはどこかで相交わるようになっておるし、その方が、聞いたことが誤解なくすぐ正確に伝わる。

伊藤 さらにその主だった人々が、議会の中の委員会の委員や理事になっていくんですね。

海部 理事になるんだ。

楠 自民党の中央本部の役員というのは、例外なく国会議員と考えていいわけですね。

海部 そうです。

楠 ノーバッジの人とか地方議員はいないんですね。

海部 いません。

伊藤 純粹の職員はいるんでしょう。役員ではなくて。

海部 純粹の職員はいますけれど、それは役員じゃないんです。○

○局長か、○○局次長というのはみんな国会議員がやります。

伊藤 じゃあその人が落選したら、そこから落ちるということですか。

海部 落ちるんです。

伊藤 ただの人になっちゃうんですかね。

海部 本当に落選したらただの人ですよ。

楠 議員政党なんですね。

海部 完全にそうだな。

田中 落選議員の団体というのはないんですか。

海部 ありますよ。

伊藤 昔だったら院外団でしょうけれど。

海部 今は院外団とは言わないけれど。

楠 自由民主同志会というのがありますね。本部の中に一部屋あり

ますね。あれが昔の院外団――。

海部 部屋もあるんだ。同志会の部屋がある。その同志会の会長もおれば、いろいろあるんだ。

楠 あれは何ですか。

海部 あれは結局、警察に頼めんような護衛とかね、昔は。佐藤栄作さんとか吉田茂さんなんかが地方に行くときに、地方のあれといざこざを起こしたり、演説会を妨害されたりしたら、そのとき会場整理をやって追い出す。手荒なことをやったらいかんから、手荒なことをやらないために、どこかに行って一杯飲んで話をつけておくとか、いろいろあるんだ。

楠 昔はいわゆる院外団だったんですね。

海部 昔は院外団がやった仕事なんですよ。

楠 相変わらずあるんですね。

伊藤 汚れ役ですね。どんな組織でもそういうところはあるでしょうね。

田中 企業でも総務部総務課ですか。

■自民党青年局長3（沖縄遊説と津雲國利氏）

伊藤 しかし先生はよく外に出ていますね、毎年のように。これを見ると、「海外政治経済事情視察（沖縄）」と書いておあるので、まだ沖縄返還前なんだ、と思ったんですが、あれは海外なんですね。海部 それは旅券をもらって、本会議の許可をもらって行くんですからね。沖縄の本土復帰運動を応援しに行くという名目で行った。佐道 このときの沖縄は、党で行かれたんですね。院ではなくて。海部 党です。それで沖縄で演説会をやって、当時は沖縄の大衆党とか人民党という、どちらかというと社会党の左派とか共産党に近いのがえらい勢力を持っているときですから、自民党で沖縄に行つて演説をぶつて、初めはどうなることかと思つた。けれども、行つ

てみると意外に、演説をぶつとピッピと口笛を吹いている。あれはなんだと言ったら、あれは応援しているんです、拍手と一緒にです、というんだね。それでずいぶんやった。

尚家の尚詮という人がいますね。その尚さんが初めて立候補したときにも、応援で党の青年部で行きました。

それからいよいよ、祖国復帰が決まるとき、それをもっと促進しろというので、まだ復帰が決まっている前年に行きました。例の国際通り、あれは昔の通りですね、そこを社会大衆党の連中が日の丸を持って歩くんだった。日の丸を持って歩いているといったら、いやもう祖国復帰運動をやっているんだから、われわれはアメリカから離れて日本に帰るんだから日の丸だといっていた。よくみたら、屋良朝苗も、人民大衆党の人もみんな持って歩いているわけだ。

それでいつか委員会、その人が大変な質問をしていた。僕はこれを言ってもいいか悪いかわからんが、まあいいやと思って、「先生はお忘れになっておるだろうが、私は先生を見て、沖縄の国際通りで大変感動的な思い出を持っております。先生は日の丸の旗をもって歩いておったじゃないですか。びっくりしました。祖国復帰だ、喜ばしいことだ、そのとき先生方が日の丸を持って歩いてくださる。あんなにジーンときた感動的なことはありませんね」と言ったら、「もういいです、もういいです。その話はもういいです」という。「おれは質問者に答えているんだから、答えさせなさい」とさんざん言ったことがありましたね。

あれは本当に感動的なシーンでしたよ。与野党あげて日の丸の旗を持って国際通りを歩いたんだもの。そしてその翌年復帰です。あの時僕らは海外渡航証明書というのをもらって、旅券ではなくてそれで行ったんです。DC3とかいうプロペラ機で。懐かしいな。

伊藤 沖縄に自民党の組織もあったんですか。

海部 ありました。あの頃、沖縄自民党の青年局長というのが、後日、知事にはならなかったけれど、負けちゃったんだ。

田中 沖縄の自民党というのは、時間的にはどこから考えればいい

んですか。昭和三十年にはあったんですか。

楠 もともと民主党か何か、保守系の政党があったんです。

海部 国民協同党というのがあったんだ。そして、熊本の方のお年寄り、鹿児島かな、薩摩揚げをつくっているおじいさんの代議士がおったんだ。その人がいつも沖縄の話をしておったんだ。それで薩摩揚げをもらって、そのうちに青年局に応援に来てくれるかと言うから、おお行きましよう、といった。原さんという代議士だ。もつとも、前から沖縄に自民党の支部があったんです。私が関係できたのは、その人からです。

もつと笑い話は、津雲國利という三多摩の壮士ですよ。その人が原さんという沖縄のあたりに利権、権益を持っておった人と仲が良かったんだ。僕が国会議員に初めて当選してきた昭和三十五、六年頃は、津雲國利さんも、いったん議員生活が終わって、再び返り咲いて、そして最後の議員生活をやって引退なさる頃だったんだ。

津雲國利というのは三多摩の大変有名な政治家だということは、自民党の党史を読んだり、自民党のことをいろいろ調べていると出てくる。けれど、まさかこんなおじいさんのこんな弱そうな人が三多摩の壮士だとは思わないものだから――。

伊藤 見かけはそうなんです。

海部 見かけは本当に小さい、しわしわの人ですよ。こつちのことだから、「まことに先生、失礼なことを聞きますが、津雲國利というお名前、昔有名な政治家がおられたんですが」と言ったら、

「昔と言って、君、いつ頃の話だ」という。「僕が図書館で本を読んだときに書いてあった」とかいろいろ言ったら、破鐘のような声を出して、「それはわしのことじゃあ！」と言った。これは失礼しました、と思いました。

だって早稲田に行ったら、津雲國利さんというのは、北多摩郡か南多摩郡の壮士で、年齢的にいってもわれわれのおじいさんのような方ですね。そして部屋の名札を見たら、同じ名前が書いてあるでしょう。

伊藤 襲名したとか(笑い)。

海部 「今日ここに来たら、隣にその部屋から出入りしている先生がいらっしゃるので、大変これは失礼しました」と言つて、それ以来仲良しになったんだ。「わからんことは何でもいいから聞いてくれ」と言われて、聞いたんだ。そういう人がおりましたね。その人と、原さんという薩摩揚げのおいしいのをつくっている代々の先生もおつて、これからの政治は、自由民主党は大変だけれど、沖縄に議席を取らなければいかん、という話をよくしたな。放つておいたらあそこは駄目になる、といつていた。それで沖縄に三回ぐらい行きましたよ。

伊藤 だいたい党の派遣ですか。

海部 青年局を中心にした派遣です。そして国際大通りでも何回か街頭演説をやらされました。

伊藤 まだアメリカ軍がたくさんいるときでしょう。

海部 そうです。あのとき、基地問題にどういう角度からどういう切り口で入つていったらいいかわからんけれど、あまりアメリカを刺激して、帰らんといい出されても困るし、あまり刺激するのを恐れて唯々諾々としておつてもいかん。できるだけ早い機会に、アメリカの基地がなくてもいいような安定的な沖縄をつくりたいんだというようなことを言つたんだらうな。沖縄での演説は非常に緊張しました。

■三木武夫と総裁選1(連想されること)

楠 昭和四十三年に佐藤総理の三選がありますね。これは佐藤さんと三木さんの対決だったわけですね。これをいろいろ伺いたいんですが、あまり時間はないですね。

伊藤 一通り伺つて、そこで終わりにしましょう。

海部 佐藤さんは、立候補したときに「私は三選はしない」と言つ

た。最初の総裁選挙の時だ。それから、それを唯々諾々と、ほかに立つ人がおらんから、いいじゃないか、いいじゃないかで、談合のように行つてしまつたら駄目になる。そのときに、決定的に佐藤三選でいいという音頭を取つて流れをつくつたのは、椎名悦三郎です。だから思いを巡らすと、後日三木の――。

田中 三木を出したのは椎名だから。

海部 「社会の不正をなくすためには、独禁法を改正(くわいせい)しなければならん」という。そうすると椎名悦三郎は、「わたしは総理大臣の生みの親だと言われておるが、生みの親は、生まれたものはしょうがないけれど、育ての親まで約束して引き受けた覚えはない」と言い切つたけれどね。そして、大変なことになつていったんです。その遠因は、僕に言わせればそこにあつたんだ。

去年の話になるけれど、そういうことを森おろしと引つかけて、「森おろしと三木おろしの違いを教えてください」といつてどこかの新聞が来たから、「あれは違う、全く違う。理念と政策。椎名さん、独禁法。独禁法の裏には業界を利益代弁する議員グループがあつておろそうと思つてきたんだ。『森』と『三木』が似たるというならば、『木』を三つと書くと『三木』になる。それをまとめると『森』になる。『森』と『三木』の字は、そういうところは似ているけれど、片方は自分個人で言つたりやつたりしたこと、天皇中心の神の国なんて言うから間違ふんだ」といつた(一同笑い)。

「あれはいかんですか」と質問するから、「いや、本人はいいと言つているだろうけれど、天皇自身にいつぱん聞いてこい。天皇自身が、神でおつては間違ひだから、人間宣言をされたんでしよう。民主主義だから。だから天皇様があれを聞いたら、一番悲しんだんじゃないか、聞いてこい」と言つた。

三木の場合は全く違う話であつて、政治家とお金の関係をきれいにしなくてはならん、これがわしが選挙法をだす最初の理由だと言つて、最初の閣議でバンと出したんです。その最初の閣議に出した案は、腐敗堕落防止法を中心に考えて、お金と政治生活との縁を、

政治家としてスタートの時にきちんと切れというものだ。もう一つは、選挙だけきれいになってもしょうがない。社会的不正を是正しなければ政治に信頼は来ないというので、独占禁止法の改正案を自分でつくっておったんですね。そしてあの人は自分でつくるものだから、みんなを使ったり、党に相談しないんです。だから副長官の私も知らなかった。

閣議の日の朝行ったら、「海部さん、ちょっとこれを読んでみて」というから見たら、何か選挙制度に関する改正案が出ている。それは一八八四年の英国の腐敗墮落防止法がきちんと書いてあって、日本ではそれをこうやれば選挙がこころできれいになる。それが一つ。もう一つは、独禁法をきちんとしようというもの。これは持てるものと持たないもの、向こうの組はうまくやっていっているのだが、俺たちはどうも損する方だという気持ちで、各界の国民が持つてはいかんということ。「この二つをまず最初に頼むから、これで行こう」という。「先生、それをやったら、政務調査会の手続きも何も進んでいないじゃないですか。いいですか」と言ったら、「それは海部さんね、こういうことは意外性（いぐわいせい）が大切だ。まさに今日それを言わなければ。初閣議だから、三木は何を考えておるだろうかと皆が思うときに、わしは大きくは政治理念として社会的公正をなくすと言う。具体的に言えというならば、それは独禁法の改正だ。それから政治家とお金の関係をきれいにしよう。具体的に言えば、まず選挙にお金がかからないようにしよう」という。ああ、と思いましたね。

案の定それがずっと尾を引いて、二年足らずの間に、党内に反対の声が充ち満ちて、というよりもむしろ独禁法の方で、利益代弁の業界代表からやられたと僕は見えておりますけれどね。

伊藤 まあ、三木さんは二年もつたけれど、森さんは一年ですからね。

海部 だから森と三木を比較してくれという質問は駄目だ、と言ったんです。

■三木武夫と総裁選2（佐藤三選と三木票）

伊藤 この佐藤三選のときに「三木さんが」立候補されて、票集めというのはやられたんですか。

海部 やりましたよ。それは金がないから金はいりませんでしたが、これもぜひ見てもらいたいな。三木さんが全国会議員に手紙を書いたんです、墨で。「それに切手を貼って投函したのはいかんから、必ず会って、相手の顔を見て、手渡して来てくれ」という。おれ一人ではあれだから、仲間をたくさんつくって誰と一緒にやるといった。この人は、というと、三木さんはそれもいいという。これ、といたらそれもいいという。「その代わり、誰と誰に手渡してきたか、報告がほしい」という。それで自分で書いたんだから。

田中 全部自筆ですか。

海部 はい。僕はそれを、三木さんの思いがこもっておるものだから、掛軸にして、選挙区にかけてあるんです。楠さんのところも探してもらったら、「参議院議員楠正俊先生」と書いて、行っているんじゃないかな、と思う。

楠 そうですか。電話はもらったという話は聞きました。

伊藤 海部先生も、もらったわけですか。

海部 それは僕にもよきななければいけませんよ、記念に。そうしたら、「そうだな、じゃあ君のも最後に書こう」といって、最後に「海部俊樹君」と書いた。

楠 それはペンですか、毛筆ですか。

海部 毛筆。あの人は毛筆しか書かなかった。

楠 筆まめな方なんですか。

海部 はい。

田中 全部同じ文章ですか。

海部 どうなんだろう。だいたいほとんど同じだろうな。いちいち

一人ひとり全部内容を変えておらんだろうけれど、「君には特に世話をかけるが、三木の志はこれだから、どうぞ遂げさせてください」とか、表現の違いはちよつとずつあるでしょうね。

楠 当時自民党の国会議員は四百人からいますね。

伊藤 それでいったい、どのくらい票が集まったんですか。

海部 あの時は予想よりもたくさん集まりました。

楠 佐藤さんが二四九、三木さんが一〇七。

伊藤 佐藤批判票が入ったんですか。三木派はそんなにいないでしょう。

海部 いない、三十そこらだ。

楠 ただ、前尾さんが出ているんですね。前尾さんが九五。

田中 前尾さんを超えたところに意義があったんですね。

伊藤 それがあとで効いてくるわけですね。

海部 「そういう関係を大事にしなければならん」といって、僕らに、「三木に投票した人のところにあとで行って来い」といった。

田中 なんてわかるんですか。

海部 それは信頼関係です。

伊藤 誰が投票してくれたかというのは――。

海部 全部が全部わかったわけじゃないけれど、だいたい信頼関係で、三木さんがそこまでやるのなら、わしも応援するよとか、支持するよと言った人はみんなですよ。全部入れたらもつと多くなったはずだけれど。

楠 いわゆるニツカとかサントリーとか飛び交ったときですね。

海部 それがあったときだから、どっちも、あれはおれの方だ、おれの方だといって印をつけたときですから。

伊藤 総計したら五〇〇人になったりする。

田中 そうですか、わかるんですか。

海部 わかるんです。

田中 投票するときに、三木の下に丸をつけるとか、書き方に指示があったとか。

海部 余計なものを書いたら無効ですから。

田中 選挙管理委員はわかる、とか聞いたことがあるんですが。

海部 天井裏から遠めがねでみておると、みんなわかるそうだ。特に日比谷公会堂の時はね。

楠 忍者みたいなのが見えているわけですか。

伊藤 バードウォッチングみたいだな（笑）。当選は度外視ですね。それだけの数を集めたというのは大変なことですね。

海部 そう思います。初めから当選は度外視しておったと思います。

伊藤 あの当時は派閥はかなりきちんとしていたと思います。

海部 今よりはきちんとしていました。

伊藤 それで三木派以外にどこかが推したんですか。

海部 派として推したところはなかったですね。けれども、今にして思えば、松野頼三さんのグループとか、ああいうところが推してくれたと思いますね。

伊藤 おもしろいですね。松野頼三さんは、初め佐藤内閣ができるときは佐藤派でやっていて、その後、三木さんになるんですよ。

海部 そして僕も、松野さんが政調会長の時にずいぶん使いに行つた。彼が最後まで、本当に誠実に独禁法の改正のために、「これだけは海部君やろうや、三木さんもいいこと言うよ」といってやってくれましたね、政調会長として。

伊藤 松野さんは、その前からおつき合いがごいますか。

海部 あります。長い政治家だから、さすがにおつき合いの幅は多かったです。そして田中六助もそうでしたね。あんなタイプの違う大平さんの家来が、と思つてみんな見ているけれど、それはロクさんのために言うのと、「おれは独禁法のこれはやらないとかん」と言っていた。たしか商工委員長か何かだったな。

それから大学の先輩後輩はいいものだな、と思つたのは、九州の三原朝雄くん。あの人も呼びに行つて、呼んできてやつてもらつた。あの人はむしろ独禁法よりも公職選挙法の方を一所懸命やつてもらつた。

伊藤 さつき学者のブレインの話が出ましたが、佐藤君は三木さんのところに入りしていたように思いますが。

海部 誠三郎さんは、昔から私も三木さんのところで親しくなつたし、よく知っております。

伊藤 佐藤君一人じゃないでしょう。

海部 あと誰だったかな。

伊藤 若い人がいたんでしよう、佐藤君ぐらいの年齢の人が。

海部 イギリスに選挙法の視察に行かせる若い学者を選べといつて、誰が何を書いたとか、どういう考えの持ち主か、ということをかさに調べておつたことがありますね。

伊藤 三木さんはあまり学者をブレインにするという格好は取らなかったわけですか。

海部 どうですかね。僕も比較的あの夜の生活まで知っておる方だけれど、学者が来て、当時はまだ日本銀行の理事であつた鈴木淑夫さんとか、外交評論家の平沢和重さん、これは二島返還論の走りです。僕は猛然と腹が立つたから嘔みついてやつたけれど、二島返還論をあの頃一所懸命説いておつたな。

伊藤 あとでソ連とどうのこうのという話題になる人ですね。

海部 それから政治学者で比較的近くて話をしていたのは誰だろう。楠 政治学者ではないけれど、永井道雄さんなんかは親しかったですね。

海部 あれは親しくて、よく来ていた。そして文部大臣にまでしちやつたから。

伊藤 三木さんは、自分でもいろいろ書いたり立案したりということをする人なんですね。

海部 自分で、施政演説でも書くんです。

伊藤 誰かに下書きを書かせるというのではなくて。

田中 じゃあ、役人が持つて来たのはどうしたんですか。

海部 どうせ使わないんだから、といって役人が手を抜く。だから見るだけはきちんと見て、使うべきところは使う。だから、いいと

思うところは使つたんでしょね。

伊藤 そうでしょうね。全く無視ではないと思いますね。あれに背かれると厄介だから。

海部 結局背かれたから、三木おろしが始まつてくるわけだけれど。

伊藤 そうですね。昭和四十四、五年というのは、新左翼のいろいろな事件がたくさんあつた時期ですけれど、その辺からこの次にお話を伺いましょう。相変わらず、労働関係もずいぶんおやりですね。労働、青年と。憲政記念館の運営委員会の委員もやっていたんですね。

海部 それは議員運営委員長だから。

伊藤 自動的に、ですか。

海部 はい、自動的にです。

伊藤 昭和四十五年、議連の理事ですね。今度は議連の話を中心に伺いますか。しばらくまだ大臣まで間があるようですね。どうもありがとうございます。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 5 回

議運副委員長時代（1969～1972）

【2001年5月14日（月） 15:30～17:30】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■現在の政局から（自民党総裁選後）

伊藤 今日、前回の記録を読み直していたんですが、一ヶ月前はまだ自民党の総裁選挙前だったんですね。あのとき、私どもも感じていたし、先生もお考えだったこととはだいぶ違った事態に発展しましたね。

海部 みんなが「総裁選で勝つのは」橋本だと思っていたんだもの。

伊藤 あれよあれよ、という間に――。

海部 今朝またいつもやっている勉強会があったんだ。マスコミの人や学者や、政治家も二、三おられますが、みんなそう思っていたんだ。マスコミも全部、できたらこの人だけは、というような気分がだんだん出て来たとみえる。あれはどう思いますか、決定的に橋本君が駄目になったターニングポイントね。

伊藤 いやあ、わからないですね。

海部 それを言ってバレちゃうといかんが、ある新聞が「帰ってきた酔っぱらい」じゃないけれど、「帰ってきた貧乏神」というタイトル政治漫画を書いたでしょう。浪人が肩を張って、つむじ風を巻きながら、くわえ楊枝で刀一本ぶっ刺して。

僕は、あの時期、あれは悪意に満ちた漫画だな、と思って見たんです。橋本もこういうところに敵をこんなに作っていたらいかんわと思っていた。案の定、今日の各社の代表も、それだという。マスコミが結局そういうふうに変えていくとした。

伊藤 でもマスコミの人も、所詮は橋本内閣になるんじゃないかと見ていたように思いますけどね。

海部 いや、見ていたから、逆に言ううとそれでは商売にならんというと言ひ方が悪いけれど、面白くないのかな。少し面白くないかならん、ということだったんじゃないかしらと思って、今日はみんなの話を聞いていました。

伊藤 そう思いますけれど、それは所詮は橋本になるんだということとが前提で、ちよつといたずらを、ということでしょう。

海部 そうですよ。

伊藤 そのいたずらが本物になるというのは、いったい何だろうと思つたんですね。

海部 その議論もしました。どう思いますかというから、長い間、ああだこうだといちいちここで言えないような澱が溜まって、どこから見ても、誰が見てもどうにもならんぞ、これは悪すぎるという思いがずっと浸透して、行き渡っていたのではないか。それを格好良く、快刀乱麻で、それこそウルトラマンギガで、やられちゃうかなという時にパツと飛び降りてきてピカピカツとやれば、それは人氣も出るし、もてるだろう。ただ、そんなことで移動したら政治の世界は良くないんだけど、そんなことだったんですね、結論は。

伊藤 これはいったいどうなるとお感じですか。

海部 今度の小泉内閣ですか。これはもうちよつと様子を見なければわからんじやないですか。今でもやつておるけれど、小泉も田中真紀子も、だんだん角も引つ込め、槍も引つ込めているから。

伊藤 引つ込めちやつたらおしまになるじやないですか。

海部 だから、わからないですよ。

田中 参議院選までどうですか。

伊藤 参議院選までまだ時間がありますからね。

海部 発言もだいたい軌道修正してきたしね。いわゆる「らしさ」がだんだんなくなってきた。

佐道 小泉さんにしても、田中真紀子外務大臣の今の状況は、ここまでは予想外だったんじゃないですか。

海部 それは言っちゃ悪いが、小泉が一匹狼だから、情報隔離の世界に入つて、天上天下唯我独尊でしょう。だから森喜朗が、あんなものを採つたら必ずこうなるからいかに言つて、事前に止めたというじやないですか。それは森自身が言つておつたから間違いない。

それみる、ということでしょうね。わかるような気がするな、僕は。だって自分の気に入らんことは最高裁の判決でも、あんなものはないと言っただから。それが父親に対する判決だったとしても、それをテレビの前で面と向かって言ってはいけませんわ。だからどこでその角が引つ込むか、槍が引つ込むか。あるいは引つ込まずにとことんまでやるつもりなのか。それはとことんまではできませんでしょうからね。

けれども、一ヶ月前にすでに発令されて、正式の手続きを踏んで派遣されたわけですからね。調べてみたら、彼「小寺次郎・外務省ロシア課長」は、公使は公使でも、ノー肩書きの公使ではなくて、一定の時には仕事の代理ができる特命全権の公使の資格を持つわけだ。そうになると、それを一ヶ月も経つてから戻すというののもどうなんだ。そういう、いろいろな型破りがある。型破りだからこそ、みんなが期待した通り動いてくれるということになる。それまで悪すぎたからね、外務省は。

伊藤 先のことはちよつと迂闊には言えないということですね。

海部 けれども、もうちよつと先にきちんとしてくるんじゃないですか。

伊藤 また来月やるときに少し見えてくるんじゃないですか。

海部 まあそうですね。

■大学紛争と大学立法（一九六九～七〇年）

伊藤 前は労働政務次官の時代のお話を伺ったんですが、今日は議運のことについて伺いたいと思います。はじめは副委員長ですか、理事から始まるんですか。

海部 議運の理事と、国会対策委員会の副委員長と、私はしばらく兼務をしていた記憶があります。

伊藤 それが昭和四十五年ですが、昭和四十七年に議運の委員長に

なられます。ですから、今日はそういう国対、議運について詳しくお話をいただければありがたいと思っております。最初になれるのが昭和四十五年ですが、その前年が大学紛争のピークで、いわゆる七〇年安保の時期です。おなりになった頃は、まだその火がくすぶっていた時期だと思いますが、大学紛争問題についてどういうふうにお関わりになったか、ちよつとお話いただけるとありがたいのですが。

海部 佐藤栄作さんが涙を流して帰ってきたというあの大学紛争ですね。東大に行ったら催涙ガスか何かがぶん投げられていた。当時の手帳にはメモが全部取ってありますが、栄作さんが行って、やって来て、東大の学生証を持っている本物の学生は逮捕者の中の、驚くなけれ何割だ、とか言っていた。

伊藤 ほとんどいないに等しかったんですね。

海部 そうしてみんな、他大学だとか、いろいろな者が混じっていた。そういうことを聞いて、ほおつと思つてびっくりしたことを覚えております。

伊藤 先生はその頃は青年局長ですが、青年局長としてはあまり大学紛争には関係ないんですか。

海部 関係ないことはないんですが、あの前でしたか後でしたか、フランスでありましたね。

伊藤 フランスであつたのはちよつどその頃です。カルチェ・ラタンとか――。

海部 ソルボンヌ大学の第一次の大騒動をやつた頃ですね。

伊藤 青年部として大学紛争をどうこう、ということではできないわけですね。

海部 そんなことは考えずに、あれらはけしからんけれど、けしかる、けしからんといつても、実態がわからなくてはしょうがないから、みんなコソツと視察に行つてこい、捕まらないうちに、バレないうちに、と言つてね。非常に難しいことだった。それぞれ空手部の有段者とか、柔道部の有段者とか、こちらにも用心棒がちゃんと

おるから、コソツと東大で何をやっているか見て来いと言った。その時の結論が、理由はわかりませんが、どう見てもあれは東大の真面目な学生じゃないなという思いを持って、みんな帰ってきたということですね。

伊藤 日大とか早稲田もそうですし、法政とか、東京の名だたる大学は全部占拠されるという状態になっていますが、それに対しては治安問題として考えましたか。

海部 あれは最終的には治安問題になるでしょうね。警官が入るのがいいとか悪いとか、喧々囂々たる非難もあったけれど、警察というのは国家社会の秩序を維持し形成するために許されたる範囲内で取締りも行なうものだ。ここに秩序に反するものがあると思ったら、個人でやれといっても、それは私闘になるわけです。私闘になって、まかり間違つて感情が高ぶると、リンチが行なわれることになる。そのために治安を害するものは警察がやるべきだということで、大学が出勤を要請した。

そのこと自体に対しては、当時われわれが所属しておった青年部とか、早稲田大学でも雄弁会の特別なOB連中というのは反対ではなかった。そこで秩序をまずつくって、目には目を、手には手をと、という話があるけれど、「口には口でやれよ」と言った。というのは、「エイエイ、オー」というかけ声を出して、棍棒を持って、東大では集団的な棒突き訓練をやっていましたからね。あれは何だといったら、東大の学生じゃないけれど、革マルだとかいう。あのあとをつけていつてごらん、〇〇大学の△△寮に入っていくから、なんていうことまで、当時張り番をしておった新聞記者の人がおれに教えてくれた。調べてみたら、事実その通りだったね。

伊藤 その前年、昭和四十四年に大学立法をつくって、それでだいたい下火になっていくということで、あとは残り火みたいな感じなんです。

海部 あの大学立法の時は、ご承知と思うが、ちょうど坂田道太という人が文部大臣だ。この人は、大きく分けると絶対にハト派です

よ。構わんからやつちまえ、なんていう暴発をする人ではない。われわれ青年部にとつても、日本青年海外協力隊の政策の時には支持をしてくれて、自分も参加してくれて、アメリカまで視察に行く团长を引き受けてくれた人です。その人が文部大臣だったので、世間一般はまさか直ちには実力排除をしたり、警官導入みたいなことは考えないだろうと思っていた。その坂田道太さんは、東大を取り囲む連中には手も足も出なかった。

それは手も足も出ないはずです。東大の総長は加藤一郎さんか、加藤総長を連れて行って、話し合いで暴力をやめさせなさいよ、なんて言つたつて、よその学校の学生だから聞くはずがない。ということが、逮捕者を調べてみてあとからわかったことです。とにかくエキサイトしておったことも事実である。放っておくとそういうところへは右翼的な発想を持った腕に自信のある人々が押しかけるとかね。

よう忘れんことは、あのころ司馬遼太郎という作家が、僕に話したというよりも、三木先生と話をするとき、僕が横にいるものだから僕も聞いていた。「学生運動のことは海部に聞けばわかるよ」なんて言われて、僕もいたんだ。司馬さんはあの時、「革命だとかいうと、すぐにあなた方は過大に恐怖心を持たれるけれど、学生にはまだ美意識があった」と言つたな。「あんなものの美意識って何ですか」と聞いたら、「正面突破しようと思つている。そしてとつ捕まる時は、なるべくカメラのライトを受け取る。要するに美しく華々しく捕まるとか、滅ぼされるとか、やられる。そういうことと共に、全員でまだ力があつて突つ込むときは、正門からやる。だからあの時は正門をどんどどこんどこ突破しようとした。ちよつと横に行けばすぐに入り込める無防備なところ、乗り越えられるところがいっぱいあるのに、正門で押したり引いたりしておつたでしょう」という。それが僕には忘れられん言葉だったんですが、そんなところも確かにありましたね。

■国対副委員長・議運理事1（国対副委員長の仕事）

伊藤 大学紛争はだいたい終結するということですが、昭和四十五年一月に国対副委員長になると同時に、議運の理事になられます。これまでも国対はずっと委員ですね。国対というのはどれぐらいの数がいるんですか。

海部 国対の委員というのは、結局一年生が全部そうで、採決要員です。

伊藤 あっちに行け、こっちに行け、とやるわけですね。

海部 ええ。手薄な委員会は採決に行く。言っては悪いが、「今日のはあの先輩も来ないようだ、この人は病院のようだ、だからおまえは朝からそこに行って座っておれ」というような、張り付け、割り振りをするのが、国対副委員長のイロハのイの仕事です。そして各委員会の一覧表を持ってずっと回りながら、この委員会はよし、ここは足りない、ここはどうだ、と見て回る。足りないときは、何人足りないから、おまえ行け、とやる。

田中 委員の差し替えというのをやらなければならないんですか。

海部 そんなことはすぐできます。委員室へ入っていつて事務局に、「おう、いまこれとこれが差し替えだよ」と言えばいい。直前に委員部へ申し出ておけば差し支えないわけだ。「衆議院公報」というのをごろんになったことがありますか。差し替えをやると、例えば誰々を誰々に替えたとか載っている。そして同じ「公報」に、また替えられた人が元に戻ったと出ている。そういう記述がいっぱいあるんです。

楠 最初のところに書いてありますね。

海部 だから形式的に届出主義を守っているという、国会のぎりぎりのおかしな権威の現われですが、翌日見ると全部載っています。田中 それは本人が申し出るんですか、それとも国対の副委員長の

ような方がされるんですか。

海部 結局、国対のほうから便宜的に出すほうが、委員長としても把握しやすい。委員長は事務方に命じておく。衆議院の委員部というところに、それ専門の事務員もいるわけだ。そこに本当は本人が届け出るのがいいんでしょうが、本人が届け出なくても、手続きは進んでいる。

だから笑えない話ですけども、僕も体験したから、ほかの人間はみんな体験していると思うけれど、当然今日は出て行かなきゃならんと思って出て来て、委員会に出ていったら、僕の名札がないんだ。「どうしたんだ」と言ったら、「ちよっと待ってください、先生」といつて、走ってきて、「すいません」という。「すいませんと君に謝られることはない、俺は委員で、出てくるのが当然の責務だから出て来たんだ」というと、「さっき党本部の方から、こういうあれが来ましたので」といつて、一所懸命連絡メモをくくっているんだ。それは笑って済むような小さな話ですが、それを取り仕切るのが、国対の副委員長です。

伊藤 副委員長は一人なんですか。

海部 忙しくなりまして、このごろはすべての派閥から一人ずつ呼んでありますから、副委員長会議というのをやると、党内全体に命令が及ぶわけです。

伊藤 この当時もそうなんですか。

海部 ええ。

伊藤 じゃあ先生は――。

海部 三木派代表の国対副委員長。例えば僕と一緒に国対をやっておったのは、あのころはまだ大野派といったな、中川一郎。それから川島派の代表が浜田幸一、ハマコー。当選したばかりの一年生で国対副委員長だというんだ。

それから乱闘要員だというんだ。いろいろと、人は使い途があるものだ。

■国対副委員長・議運理事2（各党の国対）

伊藤 このころは乱闘の場面がないんじゃないですか。まだありましたか。

海部 そのころは、乱闘は「馴れ合い乱闘」ですから、それまでやっただけで本当の乱闘じゃありません。たいてい裏で話をつけちゃうんです。名前を出すと困るかな。社会党の山口鶴男とか平林剛が、当時の社会党を代表する国対副委員長の主なところでした。僕は民社は外していたんです。こんなものは役に立たん、社会党とだけ話をつければやっていける、といつて。

伊藤 じゃあ民社はずいぶん――。

海部 春日一幸が前後左右に肩を振って、エヘーンと咳払いをして入って来て、「これこれ、国対の連絡に先ほど民社に行ったのは誰だ」と言うから、「しようがない、春日なら俺が引き受ける」といつて、「先生、僕ですよ」と言つた。そうしたら、「おお、貴公か、貴殿ならば怒つてもしょうがないな。俺は奥の方に聞こえるように言つておるんだからな」と言つて、みんなに聞かせる。「だいたいお前たちは、社会党の如き共産党との線も何もわからないような連中に恩を売つて、それとだけ手を組んで議会が運営できると思つておつたら大間違いだ。わが民社党は痩せても枯れても」云々と言う。あの頃は野党第三党だったかな。

田中 公明党の次ということですか。

海部 当時、公明党はあつたかな。社自社公共民という割り振りをしたんだから、あつたのか。公明党はそんなに慣れていないから、肩を揺すぶつて殴り込みに来たり怒鳴るような人はおらん。

ここから先を言うときよくわかつてもらえりけれど、帰り際に振り返る。「どうじゃ、今晩ひとつ、しんみり話でもしよう。組閣を命ずる」と言うんだ。組閣、これまた国対用語であつて、「こうい

話をするときには、念のため、初めは社会党も一人は呼んでおけ、自民党も各派漏れなく伝わるように呼んでおけ。そういうしんみりした話をしなければ、これからの重要法案はうまく行かんぞ、左様に思え」というのが言い分だった。

伊藤 誰の言い分ですか。

海部 春日一幸ですよ。

田中 飲ませろ、ということですか。

海部 うん。

伊藤 いや、しんみりと、ですよ。

海部 しんみりと話そうというわけだ。それでしんみりと話をして帰るわけだ。

田中 ただ話ただけですか。

海部 ああ（笑い）。

伊藤 自民党に国対があつて、社会党にももちろん国対があるわけですね。

海部 民社にもあり、共産党にもある。

田中 公明党の国対というのはありますか。

海部 ありました。後でつくつたんですね。近代政党に脱皮しようというときに、宗教政党では駄目だといつて。公明党というのはご承知のように初めの頃は上の人事は全然変わらなかったんです。竹入「義勝」さんと矢野「絢也」さんのコンビで、ずっとやってきた。そのうち竹入が大奥とこれになって「対立して」、竹入がパツとやられて、その後矢野が昇格してきた。そこに、当時は三多摩出身の大野潔とか、音楽家の子供、大久保直彦とか、伏木和雄とか、そういう連中が公明党の国対で顔を出してききましたね。けれども、おやおやの会合にはあまり呼びませんでした。

伊藤 「おやおや」ですか

海部 「半おやおや」だね。ヒソヒソと組閣をせいと言ってくるのは、「衆議院公報」などには載せられないようなことですからね。裏の潤滑油で、法案の通りをよくしようということだな。

伊藤　　そういう顔を揃えるのが組閣なんですか。

海部　　そうです。通るようになっておけということですね。こつちも組閣をする。そうすると共産党だけ呼ばれないわけだ。彼らは彼らなりの諜報機関を当時から持っているから、東中光雄なんというのが共産党の係で、僕のところに来ては、「海部さん、昨日おやりになったと違うか」というから、「偶然あそこで出会ったからね」と言う。「共産党も政党だから、呼んでくださいよ」という。

呼ばれないと党へ帰ってからえらい叱られるらしいんだ。新聞記者で面白半分^{面白}に党へ言いに行くやつもいるから。昨日与野党でみんな集まってやっていたぞ。社会党も民社党も出ておった。呼ばれておらんのは共産党と公明党だけじゃないか。公明党はそのうち呼ばれるようになった。結局、共産党だけ呼ばれないわけじゃないか。まあ、たまには気にいらんことも言うだろうけれど、やっておいた方がいいよ、ということを書いて来ましたね。共産党は当時まだおとなしかったんですよ。「よしよし、そのうちに呼んでやるからな」と言って終わりになったんですよ。

佐道　呼ばれたこともあるんですよ。

海部　　ありますよ。

伊藤　　来るんですよ。

海部　　来るようになった。

伊藤　　しみりのほうですか。

海部　　いや、おおよけに呼んだらおおよけに来るけれど、それはおおよけに呼んでもいいんですよ。各党の国対副委員長担当者会議という名前だったな。

伊藤　　懇談会じゃないんですか。

海部　　あの頃は担当者会議といったね。

伊藤　　会議をやったんですか。

海部　　ほんとうにやったさ。^{こんごかい}「今国会ではこれとこれは自民党は賛成する。これはぜひ通す。通す順番はこうだ。文句があったら言ってくれ」というと、「それは駄目だ」「これは修正がある」とか、

いろいろなことを各党がそれぞれ言うんです。「そんなことを言ったら、国会はちつとも進まなくなる。わかった。そういうときは話し合いを議院運営委員会ですべてから、法案の採決の前に、法案をどこの委員会に付託するかという議案付託の採決をやるよ」という。そうすると共産党は当時は、「採決は話がつかんからできません」という。「おまえ、話が付いてからならしやうがないじゃないか」という。「いや、それはいけません」という。

それで、当時各党の法案係という副委員長がいるから、それを全部連れて世界旅行をやるわけですよ。名目は「各国政治経済事情調査」というんですから、筋が通っているわけだ。それでアメリカの議会に行つて、アメリカは当時二大政党だけれど、法案の扱いはどうなっているかを聞く。聞いてみたわかったことは、当時日本の国会では主として（オールモーストといったほうが正確かな、全部という嘘言うなど言われるが）、ほとんどが政府提案、ごく一部が議員立法なんです。政府提案のものはそれぞれ担当の各役所がついているから、それが一所懸命いやる根回しをする。役所は役所で、各党一緒に呼ぶわけにはいから、あの頃は手間がかかったろうな。賛成する人は賛成する人で議論にならんから、一緒に来てもらいいますといって、自民党と民社党ぐらいいは一緒に呼ばれたり、当時から公明党も一緒に呼ばれたこともあった。社会党や共産党は初めから呼ばないで、その代わり社会党と共産党の時は、出向いていつて話を聞いて、やっていたようです。役所に後から聞くと、そうでした。

そういうことをしながらやっていたんだけど、当時日本の議会で、何日も何日も審議をやったことがありました。徹夜を三日か四日やると、ようやく採決ができる。それがいかに非効率、非合理的なことであるかということをもつて教えようというわけだ。それは英国の議会のやり方を見てもらえばよくわかるはずだ。あそこにはギロチンの制度とか、質疑打切り動議の成立とかいろいろあるものだから、そういうことを少し勉強して、実物教育をしたら、共

産党も教育できるだろうということ、そういうことを、もったない、勉強しに行ったんですよ。

田中 そのあいだに、見ながら話すわけですね。

海部 みんなが一緒に飛行機に乗って、長いこと飛んでおれば、どうだこうだということにもなるし、そのうちに腹の痛くなるやつもおる。「ほれみる、おまえは行ないが悪いから腹が痛くなる。今度から賛成しろよ」なんて冗談を言いながらね。そうすると、不思議にだんだん仲良くなっていくものですよ。

楠 よく、一緒にゴルフをやったり麻雀をやったりという話を聞きますけれど、実際そういうこともされたんですか。

海部 やったけれど、僕は当時はゴルフはできなかったから、やらなかった。またあの頃ゴルフをやっておったら、落選しちゃうな。選挙区の人にどこで見つかるかわからんし。それから麻雀は、しみり会議が終わった後で、ちよつと時間が早いから一局やろうなんて言い出すやつがおるから、そこでやる。

■国対副委員長・議運理事3（議運と国対の関係）

田中 派閥の会議を毎週やりますね。国対の副委員長として、そこで必ず何かを言うわけですか。

海部 非常に高い次元の真面目な話をするわけです。毎週一回、派閥は定例会議を持ちます。開会の辞が終わって、副幹事長クラスが出て来て、党の基本方針を言う。それから、「議運の報告を願います」というので、議運が「今度の本会議予定はいつである、この法案の扱いはこういうふうにする。野党は何を枕法案にしようとしている」と言う。「枕法案」というのは、審議を拒否して寝るという話です。「この法案を枕にして寝るつもりだから、利害が優先する法案は、その枕法案の前に衆議院を通しておかなければならん。その順番を間違えるな」とか、いろいろな話をするわけです。

そうするとそれぞれ、後援会あたりから頼まれてきた問題とかがあるでしょう。そういう連中だけで、君は社会党に行つて話をつけてこい、議運は議運で引き受けるから、という話をよくしたものですね。

伊藤 各派が出て来ているということは、どの法案を優先するかというの、派によって意見が違ふということがあるということでしょう。

海部 派によつて違ふんですよ。派でリーダーシップを取っているのが誰であるかによつて変わってくる。一番利害関係の強いやつ、この法案が通らなければ地元の有力者から総スカンを食つて落とされちゃうというようなときは、それはそれは頑張ります。

伊藤 議運だけが頑張るんじゃないくて、役所も頑張るし、族議員も頑張る。

海部 後援者は、利害関係のあるものがしよつちゅう族議員のところに行く。族議員は、それで頑張らなければ族議員として力がないと言われるから、代議士会とか、各派閥の例会なんかで、この問題はこうだ、ああだと言つてぶちまくるわけですね。

伊藤 最終的にこの法案を犠牲にして、この法案を通そうとか、そういう戦略は、一体どこで決めるんですか。

海部 そこがまたややこしいところで、責任がばやかしてあるものですからね。議院運営委員会では、どうやっても行き詰まる。それは議運では侃々諤々、本当の喧嘩をしますよ。でも本当に喧嘩して、喧嘩棒ちぎれになってはいけません。共通の了解事項は、ここはどんな事態が起ころうとも喧嘩別れをしてはいかん。政党間の話し合いのパイプである。そういうふうパイプが詰まって壊れそうになると、これは国対マターであるという。国対マターというのは、国会対策委員長マターであるということで、各党国対に回す。国対は国対委員長が各党から出て集まつて、それぞれ複雑な日ごろの組閣もあれば、根回しもある。

国対委員長は、「いまから」数年前も、一緒になつて旅行をした

りしている。何を見に行くのかと思うようなことを揃って見に行ったりしている。今でもそれはあります。しかしそういうのは、ちゃんと大義名分もつくようになっていいるんだね。各国の議会を見て、このテーマについて勉強してくるとか、このテーマについて調べてくるとか。その間に、「今度の国会はこういう法案を重要法案で扱うから、これとこれはケリをつけよう」とか、「これとこれは強行採決をやられると、うちの支持団体がもたないから、それはわかってくれよな」という裏の話をまずしちゃうわけだ。

だいたいそれができあがると、そういうふうにとっていかなくてはならない。そういう作業をしているのは議院運営委員会だから、各党ごとに、議運・国対の共通の会議をやるんです。そこで、一、二の三で手持ちを出し合って、それがいかんときは、「こういうことだから、こちらのほうがいい」とか、「わが党のためにはこのほうがいい」とか、「修正して通すなら、これは修正しなければ駄目だ」とか、そういう思い切った、いっぱいの話をするわけです。

その手続きが終わると、初めて議院運営委員会で、委員会の審議に入ってもよろしいということになる。いけない法案は「つるし」といって、まだ委員会に渡さないで、本会議で趣旨説明をさせたりするんですね。いろいろ戦略、戦術があるわけです。あまり感心しないけれど、議事運営細則がある。

伊藤 国対委員長だけで物事を決めることはできないでしょう。やはり幹事長、総裁というところと相談しますね。総務会も囁んできますね。

海部 もちろんそうですよ。全部それがやるわけにはいきませんけれど、国対副委員長とか議運の理事クラスが、イロハのイの第一読会をやって、その小競り合いでだいたい仕分けをつけて、これはいいと思ったものは委員会に落とせばいい。どうしてもいかん、というものは待たせておく。

■現在の政局から（自公保連立政権、二〇〇一年）

海部 ちょうどいまの例で行くと、地方参政権を永住外国人に与えるという問題で、あれは三党合意の時に、三党の幹事長会談で約束しておるんです。幹事長会談には、国対委員長も全部ついて行っていますから、連立三党の幹事長、国対委員長を含めて三党合意をやっているんですね。連立のできる条件の項目になっているんです。けれども相変わらず、酔だの蒟蒻だのと言って、まだなんともされんから、一番深く介入しているのは――。これはまだ言うのが早いな。

伊藤 いや、公明党でしょう。

海部 本当に血道を上げて応援するから、情にほだされて、あれが一番で、「二十日までに採決してくれなければもたん」とか、いろいろなことを言い出した。けれども、なんとか受験生と同じで、いよいよ試験の前日にならんとみんな真剣に勉強をしない。やらなきゃならんとなると、各党とも真剣に考える。

そうすると、いったい日本の国籍も取らないような人に、たとえば地方議会といえども参政権を与えていいものだろうか。特に地方自治の時代だから、地方自治には非常に国の利益に直接関わってくる問題がいろいろあるはずだ。それから地方議会という垣根を突破されると、次はいよいよ国政だ。あの時はいいと言いながら何だ、地方議会でもいいものが、どうして国となるといけないんだ、という議論に必ずずって行かれる。私もそう思う一人です。

そして、みんなが解決を考えるなら、そのためには妥協案を出す。私も郷里には、はつきり言って昔からの朝鮮の人は住んでおる。盧泰愚さんと首脳会談をやったときに、私は日本における韓国人に、良き日本の国民になれと指示しますといった。指紋押捺の制度を私の時にやめたものだから、そのことを盧泰愚さんは非常に感謝し

ているんです。「けれども盧泰愚さん、参政権まではいけませんよ。あれは国の問題に關することだから、日本の参政権をもらえなかったら死んじやうという人がいるなら、まず国籍を取ってください」と言った。主として日本人と家庭を持った人ですけれども、犯罪歴がなくて、生活に困らない人はみんな帰化しているんです。そういう方法もあるわけだから、ここで参政権を与えるのは私はちよつと反対だ。そういう基本的な態度を持つてゐる。そして、三党が軽率に約束しちゃったね。

伊藤 本當に軽率ですな。

海部 そう思つてもええですか。

伊藤 ええ。

海部 僕もそう思うな。向こうは、「先生の理解がないと一步前に出ませんが、もう一步前に出すようなご理解を」というから、僕はいま言つた自分の持論を述べて、「僕は盧泰愚さんと二度やつて過去の歴史に起因する問題は、もう両国で使わない。これから未来志向で、両国の安定と平和のためにこそやつていこうという約束もしてあるんだから」と言うんだけど、平行線のまま帰ってきますけれどね。

楠 ちよつと調べて気がついたことなんですけれど、公明党というのは変な政党で、あそこだけが黨員の入党資格に「国籍を問はず」と党規約に書いてあるんです。自民党と共産党は、「日本国籍」というのが黨員になる条件になつていて、他の政党はそれについて何も触れていないんですが、公明党のみは「国籍を問はず」とはつきり書いてあるんです。

海部 「国籍を問はず」とあるんですか。

楠 ええ。だから外国人がなれるということがはつきり書いてあるわけですね。だから、あの政党は――。

海部 参政権が當然なんだ。どうしてかな。

伊藤 そういうのは三党合意があるだけで、法案はまだできていないわけでしょう。

海部 できていない。

伊藤 そうするとこれは「つるす」以前の問題ですね。

海部 法案をつくるためには、各党それぞれ党内手続きを取らなければならぬ。党内手続きを始めると、それぞれ不満が出てくる。これは族議員ではないと思うけれど、強いて言えば、それに努力したリーダーシップの筆頭提案者の公明党の某君は、この次の選挙では全力を挙げてみんなで応援しようということになるわけだ。

■国対副委員長・議運理事4（国対副委員長の仕事）

楠 そもそも国対というのはインフォーマルな組織ですね。

伊藤 国対はインフォーマルじゃないでしょう。各政党の組織でしょう。

楠 そういう意味ではフォーマルですが、議会に所属するわけではないですね。

伊藤 議会のレベルは議運ですね。

楠 そうですね。なんで議運だけでは足りないんですか。

海部 潤滑油がないから、摩擦を起こす。喧嘩を始めたときに、修復の余地がない。

田中 議運は衆議院、参議院で別立てになつていますね。その上を超える国対をつくらないとうまく行かないんじゃないか、と思つていたんですが。

伊藤 参議院の国対とか衆議院の国対があるわけではなくて、自民党の国対があつて、参議院と衆議院を通じて、この法案をどうするかということを考えるわけですね。

海部 だから国対委員長はたいてい衆議院でやります。社会党を除くとね。しかし筆頭副委員長は参議院におるとか、副委員長のうちの三分の一は参議院から出てもらうとか。

楠 戦前からあつたものではないですね。戦後ある時期から出て来

たものだと思うんですが、先生のご記憶ではいつ頃からですか。

田中 いや、戦前も似たようなものがあつたんじゃないですか。

海部 戦前に国会対策委員会なんてあつたかしら。

楠 戦後できたものだと思うんですけれど。

伊藤 党の中におおやけの組織としてはなかったかもしれませんがね。

田中 「戦前には」会派協議会というのがありましたでしょう。

伊藤 各派協議会ですね。

楠 先生が秘書をなさっていたときには、もうありましたか。

海部 あつたな、そういえば。国会対策委員長という仕事があつた

ような気がしますね。昭和二十三、四年頃には。

伊藤 各派から副委員長が出るとすると、筆頭の副委員長がいるわけですか。

海部 います。副委員長が複数いますから、筆頭副委員長を決めておく。

伊藤 それは自民党で言えば一番大きな派閥の人になるんですか。

海部 だいたい当選回数が多い者。国会ほど当選回数がものを言うところはありませんか。

伊藤 当選回数は「肩章の」星みたいなものですね。

海部 はい。ですから変な話ですが、各党間でこういう話をしても

あまり位が違ふと、位が違ふから黙れ、とは言いませんが、「君、

あの時のあの話を知っているか。ああそうか、失礼、失礼、君はその時まだいなかったんだな」と言つて、みんなの前で恥をかかされる。

■国対副委員長・議運理事5（社会党の国対）

伊藤 海部先生はまだ比較的小若いでしょう。社会党の国対の委員長、副委員長なんていうのはベテランになりますよね。やりにくいと思うんですか。

海部 それはやりにくかつたですよ、大先輩ですから。だから常に敬意を表して、最敬礼をして、この先輩方が喜んでくれることは何

だろうかと考える。おれだけ多くを言うのに、あれをするのか。人間だから最後はそこに行きますな。

伊藤 最後は、この前のお話の「賃」のところに行くわけですか。

やっぱり各党の国対の委員長ないし副委員長クラスで、ベテランという

と、例えば社会党でいえばどういう方になるわけですか。当時

先生がご覧になつていて。

海部 当時は成田知巳というおじさんがおつて、最後はこれが何でも首を縦に振らないと駄目だつた。

田中 あの人は国対ですか。

海部 国対じゃないけれど、日本社会党の中では国対委員長のものと上のランクだもの。年齢からいっても何からいっても。

田中 まだ委員長になつていませんでしたか、もつと前ですか。

海部 あれは委員長になる前は書記長といひまして、書記長というのがあの頃の社会党では実権を持てていましたな。

伊藤 自民党の幹事長みたいなものでしょう。

海部 そうです。

伊藤 「国対族」というような言い方もあるじゃないですか。

海部 「議運族」とか「国対族」とかよく言われたな。

伊藤 それは社会党で言うところ、さつきお話が出たのは山口鶴男さんですね。山口鶴男さんというのはしよっちゅう名前が出てくる人ですね。

楠 国対はヤマコウさん、山本幸一。

海部 彼は山口鶴男よりもう一世代前ですね。山本幸一が議運や国対を仕切つておつた頃は、まだ山口鶴男や中村重光というのは、まあ並びのいいぐらいの扱いだつたね。

田中 田辺「誠」なんていうのは違いますか。

海部 田辺もそうだろう。田辺はちよつと遅れた委員長だつたから、山口鶴男のちよつと上ですね。

田中 一時から、社会党では国対がけっこう意味があるような傾向が出て来ましたね。国対の委員長を経験して、中央執行委員長をやるというパターンが見えてきたようなときがありましたね。

海部 というのは、中央執行委員長になる前に、社会党にはやるべきポストがあまりないもの。そうでしょう。

伊藤 そうですね。

海部 そして双六でいえば最後の「あがり」が衆議院の副議長ということになる。一時例外はありましたけどね。

伊藤 勝間田「清一」さんなんていうのは、委員長になってから副議長になったでしょう。囂々と非難がありましたね、欲張っている。

海部 あったけれど、あれは社会党の人にとっては、当時は涎の出るようなポストでしたからね。

田中 なんです。

海部 なんてといって、宮中でご苦労様と言われる。

楠 副議長だから。

海部 衆議院の議長、副議長というのは、院を代表していろいろ晴れの舞台もあるし、勲章のランクもちよつと上がる。社会党にとっては垂涎的だな。

佐道 ああいう方々も、勲章とか宮中にはお弱いわけですか。

伊藤 社会党は初めは、勲章はもらわない、と言っていた。

田中 位階、勲等も反対していましたね。

海部 みんなで決めるから、しようがないんです。

伊藤 そのうち、なし崩しにみんなもうようになりましたね。誰が風穴を開けたかわからないけれど（笑い）。

海部 僕の記憶に間違いなければ、労働組合の大物で勲一等をもらった人がおったな。社会党の、柳田秀一という名前だけ覚えていませんか。京都出身の。これは社会党の議運、国対の常連だったんです。その人が「俺がもらうのは、海部さん、どれくらいだろうか」というから、「何を」といったら、「勲章」というから、「おまえ

もらうつもりか」といったら、「もう辞めると決まったら俺はもらっておく。一家一門の誉れや」「そう思うのか」といったら、「それはそうだ」と言っていたな。あれも勲一等だよ。物差しを当てたら少し足りなかったけれど、何かほかにないかと思ったら、委員長をちよつとやっておった。それから、これは理由にならなかったな、当てつけ職だから、社会党の国対委員長が長かったんだ。国会の円滑な運営に終始協力をされたというような理由をつけて、全部合わせ技で、勲一等瑞宝章というのが決まった。それも国会対策の大きな一つですから。

伊藤 ああ、武器ですね。

海部 武器ですよ。そうするとほかの連中が、自分もそれぐらいまでやらないと、と思うでしょう。

田中 そういう先生方の叙勲は、どこが推薦する母体になるんですか。

海部 衆議院です。

田中 議運がやるんですか。

海部 議運じゃない。衆議院の事務総長が推薦する。本院議員の誰々は何々だといって。

田中 事務総長は実質的にはどこでやっているんですか。

海部 それは事務局に履歴があるでしょう。

伊藤 機械的にやっているんでしょう。

海部 ルーティン・ワークだもの。

伊藤 それにプラス・アルファをつける。

田中 柳田さんの話は、プラス・アルファの話ですか。

海部 そうです。プラス・アルファで、ここにつくか、つかないかという話になるわけです。

田中 そういうときに、秘かにお話が来るわけですか。

海部 秘かにやつちゃうんだ。表向きやつてはいかんから。ただ、いまは秘かにいっても、ルール・基準をだいたいみなさんご存じですからね。ああこれはおかしいとか、これはあれだ、となるわけ

です。だからあまり無茶はできません。特に衆議院、参議院の国会議員の場合は、何年勤務すると勲三等、何年勤務すると勲二等、二十五年勤務以上が勲一等のすれすれのラインという決まりがある。

田中 二十五年だと、必ず勲一等をもらえるんですか。

海部 二十五年やると、勲一等瑞宝章の候補者になれる。ただ、二十五年も衆議院議員をやっているれば、よほどのちよんか変わり者じゃない限り、その間に衆議院の委員長というの一回か二回はやるね。与党におれば、政務次官、国務大臣も一回か二回はやる。そうすると、勲一等瑞宝章にそれを上積みして、その一段上の旭日章にします、ということ。だからあまりいい加減の人を連れてきてやっちゃうと、これは足りないじゃないか、ということになる。二十四年というのをごまかして、「なんとかならんか」と言ってきたこともあったけれど、「申し訳ありません、落選する人でない限りは、もう一年待つて二十五年になるようにしてください」というような説得に行ったりしたな。

楠 衆議院の二十五年と異なつて、参議院の場合は四回やつて、かける六で二十四年だから、五回当選しなければならんんですね。

海部 だからそれを救うために、参議院があつて二十四年間の議員生活をおやりになれば、参議院の委員長を二回か三回はおやりになるでしょう。当選三回まで行けば、国務大臣もおやりになるでしょう。だから参議院議員にして労働大臣をやったとか、科学技術庁長官をやったとか、環境庁長官をやったということになれば、勲一等旭日大受章になる。

伊藤 瑞宝章ではなくて。

海部 ええ、瑞宝章はちよつとランクが下だと思われるからね。

伊藤 やはりだんだんインフレになりますね。

■国対副委員長・議運理事6（法案を「つるす」）

伊藤 議運で「つるす」というのは、付託する委員会を決めないということですか。

田中 預かりつ放しということですか。

海部 それはその法律が通過すると、著しく正義に反するか、著しく困るか、どちらかの例を誰かが議院運営委員会に来て言うわけですよ。

伊藤 そうすると委員会付託にならないわけですね。

海部 ならないわけです。だから委員会付託のための議院運営委員会の採決というの、最後になればやるわけです。それをやっちゃうと、国会がストップする。議院運営委員会がそういうことをやると、国対が出て来て、「そんなものは駄目だ、審議には応じない」となつて、だんだん正常が失われてくるので、なるべくそれにはしないようにしよう、ということになっている。

田中 議院運営委員会ではなくて、理事懇談会が一番重要なんだ、ということ聞いたことがあるんですが。

海部 理事懇談会まで上がつてきて、理事懇談会をしておれば、これは自動的に上がつていく案件になるわけです。

田中 理事懇談会というのは共産党の理事も入っているんですか。

海部 入ります。だからあそこまで上がってくれば、まあだいたい行くでしょう。理事懇談会まで上がらないものが非常に厄介だということですね。

伊藤 防衛なんていう名前がつくと、だいたいつるされちゃうんでしょう。

海部 今度の、さつき例に触れた外国人永住者に対する地方参政権。地方に限ると言い出したけれど、地方参政権付与法案が出て、つるされて、なかなか委員会付託にはならない。審議未了、廃案に持ち込まれると思いますよ、今の状況では。

伊藤 それは自民党あるいは保守党の中で異論が多いからですか。

海部 著しく反対だということのもおるし、なによりもかによりも、公明党が一番熱心ですから、そこから先は言いませんが、みんな自民

党の連中は毒麻疹を出しているんですね。「そんなにいやなら別れたらどうだ」と冗談に言う人がおるけれど、別れたら今度は食うに困るというわけですね。

伊藤 三党合意の証文もあります、ということでしょう。

海部 三党合意をやっちゃったんだから。

伊藤 これはなかなか解くのが難しい「連立」方程式ですね。

海部 だから選挙にでもぶち込んで、ご破算にするまで待つよりしようがないんじゃないかと思えますね。

伊藤 先生が国対の副委員長になられたときが、第三次佐藤内閣が発足した時期でございますね。その第三次佐藤内閣の時に、公明党が例の言論・出版妨害問題を起こして、大問題になりました。先生は何かご関係がありますか。

海部 いや、妨害工作そのものには私は毛頭関係ありません（笑い）。ただ、国会対策にとつて見ると、あの問題を上手に片づけて落としどころをつくりませんと、公明党、創価学会が起きてきませんよ。

■よど号事件と山村新治郎（一九七〇年三月）

伊藤 その頃、日航機のよど号事件がございました。

海部 ありましたね。

伊藤 大学紛争は終わったけれど、新左翼運動はまだこういう形で、それからいよいよ激しいことをたくさんやりますね。よど号事件なんていうのは直接ご関係はないだろうと思いますが。

海部 もちろん直接私が仕組んだり協力したりしたことはありません。間接的に大きな関係を持たされたのは、あのとき乗って行った山村新治郎君というのが、国対で私の下の末席副委員長をやっていたんです。九段の議員宿舎に一緒に住んでおったんです。彼は無類に麻雀が強かった。よその党の人に誘われてやらなきゃならん麻雀

の時は、あまり負けて払わずに来るわけにもいかんし、あまり勝って取ってくるのも趣旨に反する。あの頃、負けたら実費返済弁償という制度が党にあったけれど、「そう麻雀をやるたびに、これだけ負けたからこれだけくださいなんて、俊ちゃん、言ってけんよ」と言うんだ。「俺は俺で一所懸命やっているぞ」という男でしたね。

それがよど号の時に、九段の議員宿舎におりました、「俊ちゃん、おれよ、行ってくるからよ」という。「ああそうか、おまえ行くのか。どこ行くんだ」と言ったら、「それは飛行機に決まっているじゃないか」といって、本当に乗り込んでいった顛末はみなさんご承知の通りですね。面白い男だから、死ぬと思って行ったのではないと思うけれど、僕がある程度本気だと思ったのは、「俊ちゃんよ、悪いけれど、俺なあ、これ「小指を出す」に内緒で、これ「親指と人差し指でマルをつくる」を持っているんだ。本のところに挟んであるから、俊ちゃん、すまんが、俺が帰ってくるまで預かってくれ」というんだ。「俺もそんな他人の金をたくさん預かるわけにいかんぞよ」と言ったら、「そうか、そうかな。やっぱりな。こんなことはかかあにも言えねえから、しょうがないからもう白状しちゃうわ。いまならどんなことを言ったって勘弁するから」。それで彼がどこへ隠していったかということまで僕は知っているわけだ。さあとなったら、あれだといってね。

あの時の後日談をいろいろ聞いたけれど、初めは、乗るや否やギューツと縛り上げられたんだってね。もうそこで観念した。これはいよいよやられるわと思った。そうしたら乗客には、全然何もしないから安心しろ、なんていう放送をしている。おかしいな、俺もその中の一人かな、と思ったけれど、どうもそうじゃない。そして結局、ああいう形になって解放されて帰ってきた。帰ってきたときに、テレビにも出たからご承知と思うけれど、赤軍派の連中がみんなヤマシンと握手したんだな。

伊藤 あまり嬉しくない握手だな。

海部 しかもその先は、人生の最大の悲劇を彼は味わったんだ。も

うあの話は思い出したくないんだけど、あの「よど号事件の」時は本当に死んでも仕方ないという気持ちを半分持つて行つたと思えますね。なんとかなるだろうと、あいつは楽道家だから。非常に楽天的な男だから、それで行つたろうと思うけれど、しかしよく決心して行つたと思うね。

伊藤 でもあれで名をずいぶん上げたわけですね。

海部 男・山村新治郎といつて、おかげでもてるようになった。

「俺はな、俊ちゃん、どこのバーに行つても一番もてるんだよ」というから、「おまえ、気をつけろよ」なんてみんなで冷やかしたんだけど、それは一時、大変なもて方だった（笑い）。

田中 あれで政務次官なんて盲腸みたいなものだということが有名になりましたね。

■労働問題調査会副会長（一九七〇～七四年）

伊藤 この年に、先生は国対の副委員長、議連の理事をやりながら、自民党の労働問題調査会副会長におなりですね。労働問題調査会というのは――。

海部 政務調査会の中にあるんです。

伊藤 労働部会というのと違うんですか。

海部 違うんです。労働部会というのは、当時はたしかまだ社会労働委員会、あれは厚生省と労働省が両方持つてゐる。労働省に係する法案を審議かつ応援するところ、それから厚生省関係のほうと分かれておりました。

伊藤 この労働問題調査会というのはなんですか。

海部 組合対策です。

伊藤 一応、部会とは別にあるんですか。

海部 別です。部会というのは、法案をつくったり、予算の時に労働省関係の予算の審議に喙を容れる。そういうことと離れて、労働

問題調査会で年中行事のように当時行なわれたことは、人事院勧告を完全に実施するかどうかという問題ですね。「そんなこと、金もないのにできるはずねえ」という意見から、「出すものだけ出してその代わり、良くないことをやつたらひつぱたいちまえばいいんだ」という意見から、いろいろ硬軟両論がいつぱいありました。そういうこととか、国鉄がストライキをやったときは、それはけしからんことだ、というようなこととか、いろいろなことを取り上げ、基礎的な勉強をしたところですね。

田中 この副会長は一人ですか。

海部 三人ぐらいいたんじゃないですか。

伊藤 やはりずいぶんいろいろな役職のインフレですね。調査会の会長というのがいるわけでしょう。

海部 政務調査会の会長がいます。政調会長。それから調査会の会長もいます。

田中 労働省関係の調査会は、この労働問題調査会しかないんですか。

海部 それ以外はない。

田中 ほかの省は、けっこういっぱいあるものもありますね。厚生関係だと、いくつか調査会がありませんか。

海部 厚生省関係は、そこ「『海部俊樹全人像』の年表」には多すぎて書いてないけれど、医師養成に関する特別調査会があった。私は文部省と両方に顔が利くから、頼む、やってくれと言われた。入学定員をそこで工作することによって、人口十万人当たり一五〇人で医師を抑えるとき、五〇人で抑えるとき、それぞれ何人ずつ学校へとつたらいいか。学校がそれだけの人数を養成するためには費用もかかる。それじゃあ補助金で差し上げましょう。けれどもそうすると、すでに歯医者なり内科の医者になつてゐる人たちが、もうこれ以上増えたら困るという。当時たしか人口十万人当たり、医者の数が五〇人、歯医者の数が一五〇人、それ以上になつてはいかんだという適正規模が決められておつたけれども、だんだん新規が出て

くると、儲からないようになる。それは当たり前前の話ですな。そうすると社会構造が変化して、生まれる赤ちゃんの数が少なくなる。ここをなんとかせよ、という声になってきた。そうすると、設備を増やして教室をつくって、学生を集めておる医学校、歯学校はやっていけなくなる。さあどうしてくれる。そういうときの調整をやったのが、医師、歯科医師養成の各省の調整だね。

伊藤 そういうのは特別調査会ですか。

海部 特別調査会です、特別調査会だから、集めて、それぞれの利害関係者の意見を聴きながら、答案を出さなければならんでしよう。まことに、エブリバディ・ハッピーということは難しい問題です。みんなの意見を聴いて、その時出した僕の結論は、正確な数字はちよつとろ覚えですが、その時の留学生のうち、どれぐらいが医師の国家試験を通じて、あるいは歯医者や国家試験を通じて母国へ帰っていくか。日本に留まっておって、助手になったり勤務医になったりする人に強制退去命令は出せないわけですね。職業選択の自由というものが憲法にある以上。だからそれはいろいろ理由があるからといって、大学に入る前に、医師の国家試験に通ったら帰りますという一筆をとったわけです。どうせ彼らが来る国はまだ医師の数は足りないわけですから。そういう結論を出すための調査会でしたから、歯医者や医者にはきついこと、厳しいことを言われるし、私学からは、「先生、文教族だったら学校補助を増やしてくださいよ」と言われたり、そういう利害がもろにぶつかるところの調整は難しかったですな。

伊藤 そういう臨時のものは特別調査会ですが、いまの労働問題調査会というのは常設の調査会ですか。

海部 そうです。労働問題調査会に似たようなものは外交問題調査会とかですね。

伊藤 これも常設ですね。

海部 はい。それから教育問題調査会も常設ですね。ずっとありますから。

田中 だいたい会長さんというと、何年生ぐらいの議員の先生ですか。大臣が終わっているぐらいですか。

海部 閣僚経験者ですね。それでなければ、委員会を統率するときに、さっきの話じゃないけれど、「おい君、その時何やってたんか」とか、「あの法律の時はどうだった」ということで押さえて引っ張って行くわけにはいかんでしょう。

田中 大臣を一回あるいは二回ぐらいやられて、この調査会の会長をずっと務められる方がいますね。

海部 務める人は務めるんだ。

田中 そうなるともう、ドンみたいな形で偉くなるんですか。

海部 それはドンです。例えば山中貞則みたいなものですね。税調にずっとおる。覚えてるわけだから、ドンになるわけだな。いまは姿を消したが、その跡継ぎが加藤六月という男だ。あのおじさんもういろいろやったね。

田中 労働関係にはそういうドンはいいますか。〔海部〕先生とか。

海部 いや、ドンは森山欽司。

伊藤 〔海部〕先生は副なんだ（笑い）。

海部 ドンとは言わんのだ（笑い）。

伊藤 ドン見習いですね（笑い）。

■種々の委員会、議連での活動（一九七〇～七二年）

伊藤 この年もずいぶん、海外政治経済事情視察というので、ずいぶんいろいろなところに行っておられますね。

田中 これは国対だからですか。

伊藤 この年二回、翌年一回。それから憲政記念館の運営委員会、これは議運にくっついてるわけですか。

海部 これは議運についているんです。憲政記念館は院の付属の機関ですから。

伊藤 議運の理事だと、同時にその委員も兼ねる。国会図書館もそうなんですね。

海部 図書館運営委員会。

伊藤 図書館は運営委員長ですね。

海部 小委員長だ。「小」はついていないか。図書館運営委員会というのがあって、小委員長というのは、議運の中の内部的な仕分けだな。

田中 先生はここで突然、税制調査会委員になってらっしゃるんですか。

海部 それは税の問題について、いろいろ言わなければならんことも多い、ここに著しく正義に反するものがあつたら。税制を調べてみるとあるんです。

伊藤 こういうものは希望してなられるんですか。

海部 希望してなるんです。

田中 先生は特にどういう問題で、ここに入られたんですか。不公正な税制があつたんですか。

海部 それは昭和何年になっていきますか。

伊藤 昭和四十五年、先ほどの「国対」副委員長になられたときです。

海部 その時は何だったろう。繊維の機械が多過ぎるのを処分するときに、国が補助金を出す。それを単純所得に計算しないように、ということだ。それは体質改善をして、国の方針に従って犠牲になる人たちだから、さらにそこから税を取らなくてもいいではないかというので、免税措置を考えるとというのが大きな目玉だったような気がしますね。

伊藤 繊維が出て来たんですね。

海部 繊維とは終生、縁は切れないです。

伊藤 同時に自民党のスポーツ議員連盟の常任世話人というのが入って来ますが、いままでのお話であまりスポーツはなかったように思うんですが、なんでここで急にスポーツが出て来たんでしょう。

海部 なんで、といわれると困るな。なぜだろう。

伊藤 これは希望してなさったわけではないんですか。

海部 いや、スポーツ議員連盟なんていうのができると、会長の方から、「おまえも世話人になってくれ」とか何とかかんとか指名が来るわけです。よほど迷惑なものや、よほど困るものは別ですが、そういうのを断ると角が立つから、まあいいや、受けとけ、ということです。私もまったく無縁だったわけではないわけで、いまでも全日本合気道連盟の役員代表ですから、毎年一回武道館でやる全国大会では式辞を述べに行ったり、いろいろしています。それから少年が肩を壊すといけないというので、野球は中学生までは球を投げたりはしない。それならばティーボールというのをつくりなさいと。ゴルフの親分みたいなものですね。それは早稲田がやり出したんだ。そうしたら総長が、「どこかに頼みに行かなければいかんのだけれど、みんなが海部さんに言えばいいというから」といって、そのの会長にさせられたりした。そういうことで、僕が強いとかうまいということではありませんけれど、行きがかり上そうだったり、人脈上引っぱり込まれたりするんですね。

伊藤 このスポーツ議員連なんているのはどういう人が熱心にやっていたわけですか。

海部 スポーツ議員で熱心なのは、例えば青森の田名部「匡省」なんていうのは、アイスホッケーだ。

楠 それはまだこの時点では議員じゃないはずですけど。

海部 いや、いまの時点でお答えしたんです。当時熱心だったのは毛利松平、あれは柔道の関係だった。それから社会党にいた坂上「富男」、彼はオリンピックに一応ノミネートされた陸上の名選手であつたわけだし。過去に自分で体験したとか、自分で好きでやっておったという人が出て来ましたね。

伊藤 珍しいことをおやりだなど思っただけです。それからこの年に、自民党の繊維対策特別委員会の副委員長というものをおやりになっていますが、これはさっきのようなお話で、要するに機業の整理で

すね。

海部 機業をつぶさなければならなかったんです。過剰生産をつぶす以外には、機業が生き残る方法はないということでした。それじやあ機業を生き残らせるにはどうするか。織機は、みんなが大変な設備投資をして使っている。みんな、機を織ること以外知りませんから、急に「仕事を」替われといわれても無理だ。いまで言う構造改善ですね。職業転換のための制度を考えてあげるということだ。例えばボケーショナル・トレーニング・センターをつくって、そこに行つて訓練する人には月々どれだけ研修手当も出します。要するに織機を国の指示に従つてなくしても、食うには困りませんよ、生活できるような道しるべをつけますよと言わなければ、ああいう政策はなかなかやらせてくれなかったですね。

佐道 繊維に関しては、ちょうどその前年の昭和四十四年に沖縄の一九七二年返還が決まっていますね。「糸と縄の取引」と言われて、アメリカとの交渉の問題がございすね。先生の方から、アメリカとの交渉について、こうあつて欲しいとか、こうあるべきだということは覚に対しておっしゃつていたんですか。

海部 それはありました。あの頃GATTの規定は、被害なきところ規制なしという規定ですから、アメリカにいったい被害があつたのか、アメリカの繊維産業にどれぐらい被害があつたのか、アメリカが立証しなさい。そうすればわがほうも、自主的に輸出を規制して応えましょう。そしてあるとき繊維対策特別委員会がアメリカに行つて、元気のいいのが交渉してこいというから、行きました。あの時は商務長官が虎狩りで有名で、「俺は虎を狩ったことがある」というようなことを言つていた。それで繊維対策特別委員会の委員長は東北の福田一先生で、通産大臣が終わつた後だった。それから石川県は当時から燃糸だったけれど、当時は森「喜朗」よりも先輩で、稲村左近四郎という人がいました。燃糸工連で捕まつたおじさんだから、えらい深入りがあつたわけだな。それで、行くならぜひ私も一緒に行かせてもらわんといかん、ということでした。

当時、そういう人たちとアメリカに行つて、正面から実情を話して、アメリカはアメリカで反論しましたね。日本からいま売つてきておるワンドラー・ブラウス。一ドルでブラウスを売つたんだから、アメリカはこれに非常に侵害されているといわれた。ちょうどいま日本でユニクロ騒動をやっているのとまったく逆のことを、最初の時はわれわれがアメリカに行つてやつたわけだ。それが繊維騒動のときですね。

田中 アメリカに行かれたというのは、これ「『海部俊樹全人像』」には書いてあります。

海部 いや、最初にお断わりしたけれど、それは僕が責任を持つて書いたものではありません。作家が書いたものですから、そこに書いてあつたから行つた、書いてないから行かなかつた、ということではありません。それは僕が後見して発行したものでもない。

田中 先生は「この本が」出る段階ではごらんになつていなかったんですか。先生に見ていただいた上で、これが出たわけではないんですね。

佐道 内容まで踏み込んで、きちんとチェックしているわけではないということですね。

海部 そういつて詰められると無責任になるから、私は全部了解しておりますという立場ですけれどね。後ろに出ているその表は、あだこうだといって、載せてくれたんだな。

佐道 でもいまのお話は重要ですね。

伊藤 まあ、話の糸口になることは書かれていますので、その程度に利用していきたいと思ひます。

■佐藤首相四選問題（一九七〇年）

伊藤 そこで昭和四十五年ですから、佐藤四選問題になりますが、これは何かご記憶がございすか。

海部 あの時、三木先生が猛烈に憤って、「自由民主党というのはもつと自由で闊達な議論がなければいかん。四選するんだ」と、我も我も、どうぞどうぞ、と言う。そんなことでは自由民主党に活力が出てこない。だから、これを阻止しよう」といった。最初に替わるべきだと言いつ出したのは三木武夫さんだったと思うんですね。それから長い敗北の戦いが続いたんだけど、最初は四選阻止だったんですね。長すぎる、自民党には活力がなくなるということです。

田中 先生は具体的にはどういうふうな運動されたんですか。

海部 それは運動しました。こういうわけだから、三木さんをして欲しいと言って多数派工作をした。

田中 この頃、いろいろなところからお金をもらったりして、ゴカホウだとか、ニツカ、サントリーとか、いろいろの俗語ができましたね。

伊藤 あれはもつと前からあったんじゃないですか。

海部 豊かな候補者が立てば、「君にもやるから来いよ。五〇や一〇〇のはした金をもらったら叩き帰してこい。俺がその三倍やるから」なんて言った人もあったと聞いておるし、現にそういうお金の動きも一時あったから、金権政治反対という声も党内からも起こったんでしょう。その頃は、とても五人も立候補していない。二人だけの時はニツカといました。三人の時はサントリーといましたね。それは出す人がおつての話です。はつきり言って、三木さんはもつと早くからたくさん出しておれば、あの頃の時流に乗って、みんなから支持される面もあったらうと思うけれど、それは佐藤さんがいかに強かったかということじゃないですかね。

伊藤 三木さんは、政治資金は森さんですか。ほかにもいろいろあったんでしょうけれど。

海部 ほかになかったとは言いませんよ。非常に親しかった人で、一緒に食事をした財界人もおつたし、いろいろあったけれど、党内に配るほどの湯水の如くという金の使い方はとてもできない人だった、それをしてらいかん、金が幅を利かせすぎる世の中は間違っておると、腹の底からそう思っていたから。

伊藤 金があればまたちよつと別の感じがあつたのかもしれませんが、あまり大した金はなかった。しかしそこそこはある。三木派を運営するだけのお金はある。

海部 けれども三木派を運営したお金は、三木さん自身というより、ほかにスポンサーがいたんですね。

伊藤 議員の中ですか。

田中 先生方からお金が出たんですか。

海部 いや、財界で、三木さんの政治的な主張や心構えに賛同する人がなかったとは言いません。

伊藤 やはり財界の支援がなかったら無理ですね。

海部 それは錚々たる名のある人が支持しておつたことを私は知っております。

田中 具体的に派の運営でお金を使うというのは、三木さんが親分ですと、どういう形でお金を使いますか。盆暮れとかですか。

海部 盆暮れに、派として配ることはある。

伊藤 まず派閥の事務所を維持しなければならぬでしょう。

田中 それも親分がやるんですか。

海部 そうですよ。

田中 そうすると、派閥の事務所費、盆暮れの費用と――。

伊藤 事務所を維持していく経費も大変でしょう。派閥の機関誌もつくらなければならないし。三木派の機関誌はあるでしょう。

海部 あります。

伊藤 国会図書館に行っても、派閥の機関誌は入っていないんです。これはいろいろな人からもらわないと。やはり各議員に配らなければならぬですね。いろいろな場合があるんじゃないですか。

海部 個々に、議員の方で、「実は今度選挙違反がバレて大変な裁判をやっておりますから」なんて泣きつくことがあつたりね。一般的なお金があるときがいろいろあるでしょう。そういうときに、よ

し、といって出す。

伊藤 でも議員の方から、「先生、これをお使いください」というのは、あまりないわけですかね。

海部 三木派に関しては、あまりそういうことがなかったな。子分の方が悪いのかもしれない。われわれの方が持つて行かなければいかんのかもしませんが、そんなことはしませんでした。

伊藤 佐藤派なんて、田中角栄が集めて、というようなところもあるんじゃないですかね。

田中 親分となると、現金を置いてあるというのはどういう感じなんでしょうか。金庫に入っているのを出すわけですか。

海部 三木さんのところはようになっていたかな。

伊藤 先生だってお金をもらったことはあるんでしょう。

海部 あるよ。

田中 その時はどうやったんですか、三木さんは。ちょっと待つて銀行からおろしてくるということはないでしょう。

海部 そんなことはやっていない。

伊藤 やっぱり金庫でしょう。金庫の中に、封筒に入って。あとはこうやって引き出しから出して渡す。

佐道 田中さんのように、見えるようにやっているということはないんでしょうね。

伊藤 お金のあげ方というのは難しいと思うんですが、仮に親分が子分にお金を渡すときも、それはそれなりに作法というものがあるものじゃないですか。

海部 渡し方の個性があるな。

伊藤 でも先生は三木さん以外にお金をもらったことはないでしょう。

海部 それはしない。三木さんと総裁選挙をやっていた相手が一番金を配ることが上手で好きな人だったから。それはわれわれのところに飛んでくるはずがない。けれども、大なり小なりそういうことが行なわれたことは事実ですね。

伊藤 でもお金は、政治においても、それ以外の仕事においても必要なことですね。機密費の問題もそうだと思いますけれど、それをうまく使うかどうかという問題はあろうかと思いますが。

海部 私は節度を超えてはいかんとおっしゃって、機密費の問題などは節度を超えた問題だと思っております。

伊藤 そうですね。でもやはり潤滑油として使わなければ駄目でしょう。

海部 それは、よその国の外交官を呼んで食事をしたり、たまに子供が大学へ受かったと言えば、それはお祝いをあげなければならんとか、そういうことがずっと長い間重なってくれば、これはちょっとした額になると思いますよ。

伊藤 人脈だつて、そういうことなしにあり得ないですね。お互いに呼んだり呼ばれたりとか、それは費用がかかりますね。向こうに呼ばれるよりも、こっちに呼ぶ方が、もつとお金がかかるんですよ。日本は高いですから。

佐道 佐藤さんの四選ですが、三木さんは長すぎると怒っておられたということですが、佐藤さんが四選をされたために、あとで福田さんが駄目になったという話もいろいろありますが、その前の段階で、四選するしないについては、先生はどういう観測をしておられましたか。

海部 僕らはさっぱりわからなかったけれど、四選はあるかないかわからんな、四選して負けたら、えらい赤っ恥で、人生の最後に墨を塗るな、なんて思っておった。そうしたら、忘れもしませんが、副総裁が先頭に立って「四選けっこうだ」と、どこかで言ったんだ。ペースメーカーだな。

佐道 川島さんですね。それには驚いたという感じですか。

海部 驚いた。そうしたらすぐ、みんなが次々と四選支持をしたでしょう。それで三木さんが驚いて、「それは良くない、自由民主党の活力が失われる。みんなが初めから長いものに巻かれよう、一つのものに従おうとする。それではいったい議会政治は何のためにあ

るのか」と僕らを集めて非常に憤慨して、「闘わにやあいかん」ということになるんだね。

田中 三木派は当然三木支持になりますね。ほかはこの派閥に行くわけですか。佐藤派は一番最後ですね。

海部 それは、派閥のメンバー以上に票が入ったわけですね。一回目、二回目、三回目、それぞれ条件は違っておったけれど、頼むところは、秘かに連絡をくれる派閥だね。

田中 それはどういうところですか。

海部 これは言っても信じられん話かもしれないけれど、衆議院の本会議場なんかで、俺のそばに寄ってきて、ぽんと肩を叩いて、「三木さんにひとつ、頑張るように言っておいてくれよ」と耳で囁いていく。「あれ、あれっ、あの人は」と思っただけで見るような人もある。そういう人がずいぶんいた。十指に余った。「そういう人には丁重に礼を言ってこい」と「三木氏に」言われて、丁重に礼を言った。そういう人をみんなリストアップしたら、もっと入る筈なんだ。楠 テレビで、先生の涙ぐんでおられた有名な光景がありますが、あれはこの四選の時でしたか。

海部 違います。あの時は三木さん自身が、四選阻止ということではなくて、田中角栄さんと福田赳夫さんが立候補しておって、勝てると思って、俺も配って歩いたさ、正直に言うところ、いろいろなところへ。

楠 田中、福田の時ですか。三木さんが出たんですね。

海部 出たんです。もうひとり三木さんのほかにもう一人、前尾「繁三郎」さんが出た。前尾さんより、三木さんの方が票が多かったんですよ。それで決戦で、三木さんは田中さんに負けちゃったんだ。

楠 話が飛んじやったんですが、その時のお気持ちを聞かせただけませんか。

海部 ああ、思い出したいくないな。ほうぼうでよく言われた。政治家にとって、鼎の軽重を問われるような話だな。ああいうところで

涙を流して泣いておるといのは良くないな。

楠 それは評価二様じゃないですか。

海部 評価二様だと思うが、僕個人にとってはあれは良くなかったなと思う。ああいうときは歯を食いしばってでも、目を開いてにらみつけておらなければ。

楠 あれは、その後の選挙にはいい影響はなかったんですか。

海部 いや、自分からあの話を人にしたことはありません。人がおっしゃってくださったことはあつたし、特に婦人部の会合に行くと、応援弁士がその話をする、みんなが一緒に思っただけで泣くからいいというけれど、そんなものじゃないってね。

楠 テレビで拝見していて、非常に印象的な場面でしたね。

海部 あれは演技ではできないものな。

■衆議院議員運営委員会委員長（一九七二年十二月）

伊藤 この昭和四十六年に沖縄返還協定が調印されて、この年の暮れに返還協定が批准されるということですが、沖縄関連法案というのは、先生が国対の副委員長時代の代わりですね。

海部 これは騙し討ち日韓条約の前ですが、後ですか。

佐道 日韓基本条約は一九六五（昭和四十）年です。

伊藤 沖縄関連法案は、沖縄返還協定をはじめ、沖縄の復帰にあたってずいぶんたくさん法案が出たんですね。

海部 全部一括でやったんですね。だから特別委員会方式でやりましたね。一括して審議しようということ。それであのとき、縄と糸とを交換したというような噂がパツと流れて、僕はむしろ糸の方であの時は苦労した。

それから沖縄の問題については鮮やかに覚えていることは、当時党の青年局で沖縄返還の応援に行ったときは、パスポートの正式なものがない頃で、渡航証明書のような非常に簡単なものを持って、

沖縄に行つて、国際通りをずっと行進して歩いたときの光景は忘れません。

伊藤 国対の委員長としては、議案の進行、法案の進行をおやりになったんじゃないかなと思うんですが。

海部 やつていましたよ、もちろん。ただ沖縄に行つて来るといつても、土曜、日曜に行つて来られますもの。われわれは街頭演説をやつて、一ヶ所に人をたくさん集めて、ワーワーとぶち上げて間に合うように帰ってきますから、そういうことはいつこうに苦にならなかったですね。

伊藤 昭和四十七年に議運の委員長になれる。今度は副ではなくて、委員長ですね。このときは、田中内閣になった後ですね。非常に少数派閥の海部さんが議運の委員長になれるというのは、なんとなくぐはぐな感じもありますが、そういうこともないんですか。

海部 どうですかね。あの頃は派閥の大きい小さいももちろん大事ですが――。

伊藤 五回当選というのが大きいですか。

海部 いや、そんなに大きくないですよ。六回、七回の人がいた。例えば原田憲さんとか、金丸信さんとかが、私の先輩で委員長をやりましたからね。それで竹下さんをやらせなさいといっぺん言ったら、「あれはまだほかにやる必要がある」と田中さんが俺に言った。

伊藤 議運の委員長なんていうのは田中さんが決めるんですか。

海部 決めるんです。幹事長ですから。

伊藤 このときはもう総理ですよ。

海部 それじゃあ総理が決めたんだ。というのは、田中角栄に直接呼ばれて言われたんだから。副委員長でおつき合っている頃は幹事長だったから、そこへ決裁を仰ぎにいつていたけれど。そのとき議運の委員長は久野忠治さんという先輩だ。沖縄返還協定の時の委員長は確か久野さんで、これは田中派の人だったんだ。それでやり方がちよつとあれだったから、「法案を通そうと思ったなら、委員長、そんなことやつていたって駄目じゃないか」と僕らが言ったんだ。

そのとき仲間のみんなで、最後には辞表も出すよといいながら、「委員長、それはあんたが間違っているぞ」と言いに行つたんだね。田澤吉郎とか、中川一郎とか、ああいうのがみんな各派代表の同僚の理事だ。

何を久野忠治さんのところに怒りに行つたかというところ、これは専門用語になるからわかりにくいかもしれないけれど、この特別委員会をつくらうと。特別委員会をつくるためには、各党から趣旨説明が出て来ている。許しましょう。「社・自・社」で社会党二人にしゃべらせましょう。「社・自・社・公・共・民」だ。委員長はそう言いながら、実際はそれと違う話を違う党にいろいろ言っておつたということが出て来た。

そんな不信があつてはいかん。こういう大事な問題は「社・自・社」というのがいままでの慣例で、各党ごとに、「社・自・公・民・共・社・社」でいいじゃないか。社会党の二番手、三番手は最後にやる。前にやるか、後でやるかで、たしか本会議が狂つたんです。延びちやつたんです。その真つ最中に、「委員長どうなんだ、両方に使い分けをしたんじゃないか」といったんだ。それはテレビに映るからね。最後の三番目、四番目は、映るといっても深夜番組でしか映らない。「ここで中継を途中で中断しましたので、続きをいたします」というのが、十二時半とか、そういう時間だった。だから何人目にしゃべれるかということ、各党にとつて大変なことだった。それをしたものだから、委員長が辞めなければ審議に応じないということになったんだね。大変な騒動だった。

そして、電話がかかつてきて、「誰からですか」「田中幹事長です」「幹事長、用があつたら、こつちに来てもらってください。いまここは議運の理事のみなさんとご相談しているから行きません」なんて委員長がえらい力んでいるわけだ。むしろ田澤吉郎や中川やおれの方が心配して、「そんなことを言わずに、いま大事なときだから、そこが幹事長室だから、行つてきたらどうですか」と言つた。しばらくして、「じゃあちよつと行つてきます」といつて走つてい

ったけれど、行ったらもう最敬礼で、「少しでも早くやろうと思って一所懸命努力している最中ですから」とかいっていた。結局、本会議を開いて、委員長不信任案を出させて、通しちゃって、沖繩法案の審議に追い込んだと思うんだね。久野委員長の首をもって。最後は気の毒なことになるんですね。それはあの人はあの人なりに一所懸命やっていたんだけれど。

伊藤 それは向こうの手柄になるんですね。

海部 なるんです。寝起こし賃というのがありまして、横になっておる社会党に、起きて審議に参加させるためには、ただでは済まんですよ、寝起こし賃がいる。それが委員長のこれ「クビを切る身振りをする」だ。こういう扱いをした。その頃、金丸さんと竹下さんが、国会対策の委員長と副委員長だった頃だ。幹事長が田中角栄さんだったから、うまく相談してやってきたということでしょうな。たいへん強引な、張り倒す戦法だけれど、張り倒しただけで放っておくと恨みをかうから、何か寝起こし賃、顔立て賃をやれ、ということだった。

伊藤 特別委員会の委員長のクビというのは、相当な賃ですね。

楠 伺っているところ、国会は結局のところかなりの部分が顔を立てるということで動いているような印象を受けますね。

海部 顔を立てるといえるのは、顔を立てられるようになるまでには、その人がその出身の党のことをどれだけコントロールして、どれだけリーダーシップを発揮できる人かということが、大前提になりまされどね。それは、何でもなしそこの委員が、顔を立てるといっても駄目だ。間違えるな、ということになるわけだ。

伊藤 間違って払ったらずいでしょう（笑い）。払ったはいけれど、物事は解決しなかったということになる。

海部 そういうこともあるんですよ。

伊藤 すいません、先生、時間です。次回は、いまのお話の続きで、まだ自民党の人事局長というのがありますし、今度はいよいよ田中内閣の副幹事長、内閣官房副長官とられますね。

佐道 田中内閣成立の総裁選の話ももうちょっとお聞きしたいですね。

伊藤 そのへん、昭和四十七、四十八、四十九年のあたりのお話を伺いたいと思います。よろしく願いいたします。

海部 今日は小沢恵三の一周忌でして、生前いろいろ関係があったものが集まるものですか。

楠 それで今日は、黒いスーツを着てらっしゃるんですね。

海部 かばんを開けると、黒いネクタイがちゃんと入っている。

伊藤 黒いネクタイは水玉はないんでしょうね（笑い）。

海部 政治家の七つ道具の一つです。

伊藤 絶えずあるんでしょうね。

佐道 白いのは前もってわかりますから、突然、ということはないでしょうから。

伊藤 どうもありがとうございます。次回またよろしく願いいたします。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 6 回

田中内閣時代（1972～1974）

【2001年6月11日（月） 15:30～17:30】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆 （政策研究大学院大学教授）

佐道 明広 （政策研究大学院大学助教授）

楠 精一郎 （東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎 （東京工業大学教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■現在の政局から（元首相付SP、いわゆる人権派）

伊藤 このあいだ、ブッシュさん「シニア」が来られたんですか。

海部 はい。来ました。

伊藤 お会いになりましたか。

海部 彼は時間がなくて、電話で通訳が入って、「ブッシュさんがここにおりますから、ひとこと『ハロー！』と言ってやってください」という。今度は何か取引の顧問をやっている会社があつて、そこに来たんですよ。時々その会社に来るんですよ。

伊藤 それはアメリカの会社ですか、日本の会社ですか。

海部 アメリカの会社です。ああいうことをよくやっていますね。

伊藤 海部さんもおやりになったらいかがですか。

海部 そういうことにはさっぱり興味がないので、やらないけれども。

伊藤 だいたいアメリカの大統領は、辞めたらみんなそういうことをやっているでしょう。

楠 でも、辞めたら一生困らないだけのものを「もらっているはずですね」。

伊藤 年金ももらえるしね。

田中 「日本の」総理は駄目ですか。特別年金はつかないんですか。海部 現職であるうちは、議員の手当が来ますね。だから総理大臣なるがゆえに特別に、というのはいけませんよ。

伊藤 でも元総理にはSPだけはずっと付くんですか。

海部 あれは付きますけれども、付くこと自体は何もコメントしませんけれども――。

伊藤 何もメリットはないでしょう。ただ、監視されているみたいなので（笑い）。

海部 だから逆メリットで、デメリットの方だな。だって、いつ誰

と会って、どうなったのか全部一目瞭然で、みんなわかるでしょう。楠 でも先生は、お困りになることは何もないでしょう（笑い）。海部 まあ、あまりありませんね。

伊藤 絶対ないとはおっしゃらない。人間、いろいろありますからね（笑い）。

田中 SPの方は、何人付いていらつしやるんですか。

海部 通常は二人です。僕のところへは、そんなにおかしな情報やいろいろなものはありませんからいいんですよ。言つては悪いが、竹下さんなんかには、「おお、増えたな」なんていうと、「ちよつとなあ、やばいんだ」という。いろいろのが来たり、問題があつたりすると、増えることもある。

伊藤 そうでしょうね。

海部 それから、僕には直接「こういう情報がありますから」ということは言わんけれども、何か一人、二人新顔が出てきて、紹介はしますよ。「こいつは新顔ですから、どうぞよろしく」と言つてね。それで、隣の部屋にいつもおつて、「これは帰しますから、お邪魔しました」と言つて終わることはありましたね。けれども、そう目立って何もありませんよ、いまは。

伊藤 何が起ころうと、そう心配するほどのことは起こらないと思いますね。

海部 そう思いますね。ただ、こちらがいいと思つてやつていても相手方にとってはえらい悪いこともあるんじゃないですか。

伊藤 それはそうですよ。

海部 そうでしょう。気をつけてやらないと。

伊藤 誰の行動でもそうです。

佐道 何がいつどうなるかわからない世の中ですからね。

海部 「動機なき殺人」という言葉をよくいうけれども、僕は小学生の集団を襲うなんていうことは、強いていえば動機があつたんでしょうけれども、しかし「動機なき殺人」の不気味なもののようにウェイトが置かれると思うな。といってまた小泉さんが、これは隔

離してあれするというと、精神にちよつと問題があるからそれを隔離すればいいとかいかんとか、再犯防止の措置がひどすぎるというのか、弁護士グループがまた言い出しているでしょう。

伊藤 精神科のお医者さんね。

海部 お医者さんも言いますか。

伊藤 お医者さんもうんですよ。精神神経医学会というのは大変なんですよ、人権の問題が。

田中 人権派ですからね。

海部 だからものを見るときは、両面を見てもらわないとね。同じ一つの事実でも、光の部分と影の部分とがある。両方を見てものを言ってくれんといかん。そのどちらに重点を置いて、どちらに軸足を置いての基本的人権か、ということは、ずいぶん悩みますよ。

伊藤 人権派というのは、人権絶対ですからね。ほかのことはどうでもよろしいということですから。

佐道 人権のためなら、命もいらぬ。

海部 だから屁理屈をいうと、僕は刑法で習ったことで最初に思ったのは、一人の罪なき者を苦しめるよりは、九十九人の罪あるものを泳がして、百人を帰してもいいという。百人捕まえて、この中に一人だけは必ず犯人がいるけれども、あとの九十九人は犯人じゃないということもある。そういうとき、絶対にわからなかったとしたらどうするか、ということですよ。先生はどう教えるんですか。

伊藤 それは全部釈放するんでしょうかね。

海部 そうでしょう。罪なき一人をいじめてはいけません。そこでの間違いが一番多い。僕はその例をいつも思い出しますね、そういう問題があると。

■現在の政局から（小泉政権の誕生、二〇〇一年四月）

伊藤 前回、来月になったら、何か状況が変わりますか、という話

をしましたら、「いやあ、来月じゃあ変わらんだろう」というお話でございましたけれども、そんな状態でございますね、いまは。

海部 そのことについては、私もいささか自分の先見性が足りなかったと思う。状況は何も変わらないね、右からも左からも。そうでしょう。皆さんの方の分析はどうか知らないが、僕の親しかった新聞社の連中は、初めの頃はみんな、今度の総裁選挙は竹下さんの影響力が残っているから、あそこだという。そして亀井静香が騒がしくなると、「わしは」と言って、やめて応援するとか、いろいろなことがあったので、橋本龍太郎がなると思っておった。みんなそうですよ。ところがそうはならなかった。途中で何新聞だったか、貧乏神が入っていたという強烈な漫画を書いたでしょう。あれがほうぼうにずっと影響していつて、むしろあいつたマスコミが世論を誘導した。選挙干渉とは言わんけれど、よほど気をつけてやらないと、きつかけは大きいなあ、と思っておったんですよ。

伊藤 だけどあの漫画を書いた人も、まさかと思つたでしょう。

海部 まさかと思つていたでしょうね。「橋本が」強いと思うからやるわけでしょう。ところが現実には弱かった。そして思いもしなかった小泉の登場となった。だって小泉は総裁選挙は三回目ですもの。三年前も六年前もやって、ビリだったわけでしょう。だから、世の中がそれだけ変わったということですね。

伊藤 弱小派閥であっても、「総裁選を」三回ぐらいやればね。三木さんは何回やったか知りませんが（笑い）。

海部 世の中が大化けしたから、「小泉氏が総裁に」なったんですよ。

伊藤 三木さんもそうでしょう。

海部 そうです。ただ、非常にいま気になる。状況はうまく行っていないですね。

伊藤 特に外相問題が一番大変ですね。ブッシュなんか一体どういうふうにいるのか聞いてみたいものですね。

田中 今度の総裁選挙では、地方に三票あげましたね。仮にいまま

で通りにやっていたらどうだったでしょうね。三票やらないで一票だけにしたら、橋本さんが勝っていましたかね。

海部 勝っていたかもしれないな。分母がうんと小さくなるんだもの。佐道 地方の組織がもたなくなるという可能性もありますね。

■現在の政局から（田中外相とアーミテージ）

佐道 いまうまく行っていないとおっしゃったのは、外務省だけではなく、全体的にうまく行っていないということですか。

海部 全体がです。外務省だけならば、それは最後は田中「真紀子」大臣のほうの手をあげて、一步退かなければね。あの組織、外務省を使わずしては何もできないでしょう。それに「田中真紀子氏」は「今日まで外務大臣としての、言つては失礼だけれども、知識も抱負も経緯も何もお持ちになつておらん人だから。」

このあいだ、クエスチョン・タイムの時に、ちようどおれの前におるわけだ。それで、「ご苦労さん。体だけは氣をつけてやりなよ」と言つたら、「まあ、とにかく」と言つて、そこでも外務官僚の批判だ、「何も上にあげてこない。だいたいあんなに漏れるということは、あなたもおやりになつたからわかるでしょう。だって、誰と誰とが話してどうだといつて、それが漏れたら誰がしゃべったか、一回だけではわからなくても、そういったことが二、三回続けば、だいたいトランプのババ合わせをすれば、残つたのはなんだとわかるでしょう」と言うから、「外交で首脳会談で話した時は、何を話したのかを外へ言うのは、それはあなたが言うように公務員の守秘義務違反だ。けれども、しゃべったことが全部国益に反するよなことだと、守秘義務違反じゃなくて、正義感に燃えて、これはなんとか世論に助けてもらつて元へ戻したいという思いになる者がおるかもしれないから」と言つたら、「いやなこと、先生、言わないで。私の言うことは外務省がみんなリークするからいいけな

い」と言う。だから「リークされていけないことを言つた分は怒っちゃいかんよ」と言つただけだね。それも、言っていることがだんだん変わってくるでしょう。

最初は、これは象徴的にこれからも例に引かれるだろうけれど、やはりアーミテージという人は日本のことをよく知っていますよ。そしてアーミテージについては、会つてやつてくれ、話を聞いてやつてくれ、という紹介がずいぶん来るわけだ。さすがに僕が現職の総理大臣のとき、その当時は「アーミテージは」まだアジア担当の下の方の位で、副長官じゃなくて、アジア太平洋地区担当の国務次官補代理だったかな。その時は外務省からの秘書官や外務省の連中が、「それはちよつと安易に過ぎるので、カウンタートパートとしてふさわしい者を会わせておきなさい。けれども、あの人は日本のことをよく知っている人だから、何を言おうとしているのか、何が知りたいのか、逆にこちらから取材もさせたいですよ」と言つたことがあります。

けれども僕は、「そんなことより裏道からこそつと連れて来いや」といつて、それで会つていたんです。僕がよそへ出て行くと、かえつていかんから、裏から入れてやれといった。そこ「首相官邸の裏口の方を指す」から入れたんです。もういまは駄目だね。みんな氣がついたから。あの坂を下りたところ。知っているでしょう。ポリボックスが一つ建っているだけで、日頃は何も使わないとみんな思っている。あの木戸を開けると、そこから出入りができるわけだ。

伊藤 「官邸の裏から入る」というのはよく聞きますね。

海部 そんなことをやらないでも、新聞記者をまくためには、国会で委員会をやつていたり、僕が外で人と会つてるときは、あの人たちはみんなお利口な人ばかりだから、そばを張っていれば大丈夫だと思ふんだな。だから、おれが官邸に帰る前に、先に入つてもらつておくんだ。

伊藤 官邸にあらはじめ入れておくわけですね。

海部 それは盲点でしたよ。もうこれからはできませんでしょう。そして、帰ったら会う。絶対に張っていませんわ。

伊藤 アーミテージという人は、どんな感じの人ですか。

海部 ルックス・ライク・プロレスラーだな。こんな太い腕をして、ちよつと粗野な振る舞いもあるものだから、暑いときは「ちよつと失礼」とかいって、上着を脱いでワイシャツをまくり上げて一所懸命熱弁を振るう。ただ、日本のことについては本当によく勉強して知っているなあという気がいたしました。あの頃はいまよりもっと厳しい状況の中で、日本に協力してくれという。PKOとか、PKOまで行く前に、アーミテージの言い分は日本にある問題をどうやったら整理できるか、どうやったら協力してもらえるか、よく知っておたし、よく勉強していた。こちらで法制局長官に一夜漬けの特訓を受けた。たぶんこういうことで聞くでしょう、なんていうことを知っているからね。

最近でもそうですよ。あれが、もし会って言いたかったことが何だったかといえば、去年、安保の再確認をしたでしょう。台湾海峡で問題が起こったときにどうするかというテーマだ。それから日本が後方支援に出ていくといっても、どこまでが後方支援なのか、ということだ。社会党の連中は国会で私と議論したときも、近代戦争ではミサイルが届く範囲が前線だという。これは社会党のあの頃の非常に得意な議論ですよ。『じゃあ地球上全部そうじゃないか』と言うと、『そうです』という。だから、アーミテージには、日本にもう一步踏み出してもらいたいという願いが前からあるでしょうし、自分で仕事をやってきた分野もそうでしょう。この間アーミテージも参加して、と言った方が正確だな、日本に対するいろいろな論文が出たでしょう。ああいったものを読んでも、結局そういうことですよ。

伊藤 あれ「田中外相がアーミテージとの会合を」をキャンセルしたというのは大きいでしょうね。何か非常に象徴的なことになってしまふ。

海部 本当に象徴的になった。向こうの方が役者が上だから、「僕は何とも思っておりませんよ」といって、さらっとカエルの顔をやっているから。この次に会ったり、ものを言ったり、頼んだりというときに、逆に困るんじゃないかな。とても大きな借金をつくったことになる。

伊藤 そうですね。そのあとに非常に中国寄りの発言をしたとか、いろいろやってしまいましたからね。

海部 あれは本当に親の恨みで、坊主憎けりや袈裟まで憎い、というようなものがいくらかあるようですね。

伊藤 あるような気がしますね。

■田中内閣の成立前夜（一九七二年）

伊藤 さて、その親のほうの話なんです。この前のお話で選挙の話が出ましたが、田中総理が選出された時の選挙の話と、佐藤四選の時の話がちよつと一緒になってしまいました。今日は田中総理の実現というところから始めたいと思います。その時代に先生は副幹事長や内閣官房副長官をおやりですから、そのお話を――。

海部 田中内閣では、私は副長官ではないです。三木内閣です。田中内閣の時には、田中さんに議員運営委員長を任命されて、「通年国会でやってやれ」と言われたことを、いまでも鮮やかに覚えています。

伊藤 その話ではなくて、昭和四十七年六月に佐藤総理が引退を表明して、七月に自民党大会で総裁選挙が行なわれ、田中、福田、大平、三木という四人の選挙になったということです。これは「三角大福戦争」といわれるわけですが、この時は三木さんとしては、どういう勝算があったのか、といいますが、あまり勝算はなかったんですか。

海部 一言でいうと、勝算はなしだけれども、ここで物を言わなけ

れば(きれいな事を言う)、いったい三木の今日までの政治精神、政治的な発言というものは何だったのか、ということになる。そんな三選も四選もする時に、みんなが長いものに巻かれるで、まあまあといつてそれを支えていたのではないかと、ということですね。

伊藤 それは佐藤さんの四選の時ですね。

海部 そうです。佐藤四選阻止をして、そしていまおっしゃるような田中、大平、三木、福田だ。中曽根は行司役だったんだ。大平さんではなく前尾「繁三郎」さんじゃなかったですか。

伊藤 前尾さんではなくて、大平さんです。

海部 三木と争った相手は、前尾さんではなかったですか。

伊藤 それは前の時じゃないですか。

海部 前の時か。それから田中さんになった時は――。

伊藤 それが三角大福なんです。

海部 そうすると三木さんの推薦人が足らなくなったのは、あの時なんだな。

楠 田中内閣の時は、「福田」対「三角大平」連合でしょう。

田中 「福田」対「その他」ですね。それを組むときに、「海部」先生は田中派とかいろいろな派と――。

海部 それは各派から、いろいろなあれがあるものだから。変な話ですけれども、誰が総理になったとしても、われわれは党のために横の話し合いのパイプだけは残しておこう、なんていうことを真っ先に言い出して、飯を食おう、飯を食おうと言ったのは――。そうそう、思い出してくるなあ、そういうことがあった。そうしたら、田中派のほうからは、当時はやはり竹下「登」さんが出てきたし、福田派のほうからは安倍晋太郎さんが出てきた。それでその頃は三木さんのところに夜いつも呼ばれて行って、情報をとったり、報告をしたりしておった。

あの頃はそういう最中に、ほかの派閥の人と一緒に飯を食って楽しくやっているなんていうことはあまり名譽な話ではないが、新聞はひどく喜んでそういうことを書くんだよ。新聞紙より、週刊誌だ

ネになるといかんと思ったから、その時のために、「今度ちょっと会ってきますから」ということは、三木さんに俺も報告したな。言っておくと、「何を言っていたか、あとで知らせてくれ」という。

田中 あの三派連合ができた時に、事前にたしか協定をしますよね。例えば日中国交回復をやるとか。

海部 日中国交回復というのが、三派協定をするために一番筋が通る話になってきた。要するにあの頃の背景をいうと、福田赳夫先生という少し右寄りの匂いがあつたわけです。そして三木さんというのは中道左派で、右と左は相容れないではないか、というような話があつた。そして新聞記者が、「どうして福田とそんな連合を組めるんだ」という時に、「それは日中を片づけなければいけないんだ」というようなことを言い出した。そして、最後の前日あたりにえらい時間をかけてあれしたけれども、大変な場面も一つあつた。どういう場面だったかというと、あれを協定に盛り込んで臨むか臨まないか。たしかそうだったと思います。

そんな頃、大平さんの方からは鈴木善幸さんが代表で来ておつたと思うな。そして、三木さんと大平さんとが直接福田先生と話をし、というような場面もあつたろうし、代貸しの人がやったこともあつたろうが、とても話がつかないわけだ。

そうこうしているうちに青嵐会が暴れ出した。中川一郎や何かだ。その青嵐会は福田派の別働隊だと僕らは見ていた。それで安倍さんに、「青嵐会のあれだけは少し抑えたほうがいいんじゃないか」と言つたぐらいだ。それ「青嵐会」が総務会とか代議士会とか公のところでも、わんわんぶち上げる。そんなことがありましたね。そうしたら、「抑えろとはなんだ」というから、「中国と国交回復しようということがメインテーマになるとしたら、やはりやつていったらいいんだ」と言いました。

その時一番議論になったことで、三木さんの腹の中には――言いにくい話だが――、国と国の大きな政策を乗り越えるときには、やはり一つの決断があるんだ、ということがあつた。それは台湾が国

連の代表権を失うか失わないかというところに大きな問題があったわけですね。そうすると、もうよろしい、台湾は出て行け、大陸は入ってこい、ということですから、あの国連の議席の交替は大変な議論で、党内論争もずいぶんありました。それは僕も覚えていますけれども、「三木氏は」比較的早くから割り切っていた、というといかんが、そういう時は、それはそれ、これはこれで、大陸を無視して日中関係というのはいまよくいえない「という立場だった」。

台湾とはいろいろなことがあったじゃないですか。誰だったかな、三木派の総会の時にも「三木先生は『信なくば立たず』とよく書かれるけれども、いまはまさに、台湾と手を結んで中国を入れる。今度は、台湾は出て行けといつて議席交替ということになると、台湾の信頼も失うが、中国の方も——その頃はちよつと思ひ過ぎだつたけれども——、同じ中国に将来なろうと思つている台湾を切り捨てるような差をつけると思うだろう。そんなやり方があるか」というような批判が出ていたということも聞きましたね。

そういったことでは、壮士のような人が乗り込んできて、「三木さん、それは違つておるぞ」と言つたりする。そんな話を横で黙つて聞いていると、「蒋介石に対して、彼を守らずして、日本の道義はどうなるんだ」というような説を言つてきた人もいる。あの頃は、それは議論はたくさんありました。

田中 「三木さんには」福田さんと連合を組む、という話もあったわけですか。

海部 その時はね。

田中 でも最終的には福田さんは外されて、田中さん、大平さんとの三派連合ですね。中曽根さんが、あとからちよつと後ろにくつついてきますね。そういうイメージがあるんです。

海部 いやいや最終的には、とおっしゃるが、あの時は札入れ、投票で決めたんじゃないですか。

田中 決戦投票はそうなります。その前の段階で、二、三位連合じゃないですけども、どちらかが二位、あるいは一位になったら、

そちらを応援するということが決まっただけなんですけれど。

海部 あの時そうだったかな。ちよつと資料を調べさせていただきます。そんなものに頼つとつてはいかんけれども、そういうこともあつて、いま引つ掻き回しているのとたくさんいろいろなものが出てくるわけだ。いつの何であつたか忘れたけれど「資料を探す」。

伊藤 三木さんは田中内閣に入閣するでしょう、副総理で。

海部 田中内閣の副総理になつちやつたんだよね。

伊藤 そうです。だからその時は、最初の選挙の時に三派連合ができるから、そうなつたわけですね。

楠 四派じゃないですか。

伊藤 中曽根さんを入れれば「四派」、ですね。

海部 中曽根さんは、自分はもう行司になつちやつたんだよ。幹事長狙いで、初めから自分が総理大臣になれるとは思わなかった。

伊藤 それで、中曽根さんが最初から田中さんに投票したから、田中さんが一位になつたわけでしょう。それで一位、三位連合で当選したんですね。

田中 「昭和四十七年」七月七日ですね。

海部 最も劇的なことなんだけれどもね。

伊藤 あまり劇的すぎて、忘れちゃつたんですか。「資料を探している海部氏に」いいですよ、先生。この次にしましょう。少し思い出してください。

海部 当時の資料や写真を見て、思い出します。

伊藤 じゃあ、別のところから話をしてください。

楠 先生、ちよつと違うことを伺いたいんですが、いま台湾切り捨ての問題で、壮士のような人が三木さんのところにたくさん来たとおっしゃいましたが、例えばどういう人が来たんですか。有名な人で、例えば安岡正篤とか四元義隆とか、ああいう人が来るわけですか。

海部 四元義隆さんが来た時は、僕は立ち会つて話を聞いていないんだ。それは稲葉修さんが連れてきた。四元義隆さんは、来れば何

を話すかはわかってるわけだ。それから、木村武雄という元帥、あの人もそういう類の一人でしたね。

伊藤 この段階では、そうですか、「木村武雄氏は」壮士になってるわけですか（笑い）。

海部 僕らから見ると、そう見えちゃうもの。

伊藤 大変な先輩でしょう。

海部 そう、ちよびひげがあつてね。そして当時、とにかく青嵐会というのは、「台湾を捨てては駄目です」というのが、できあがつた一つの大きな旗でしたから。玉置和郎さんとか石原慎太郎さんもそうだったよなあ。

楠 うちの父「楠正俊」もそうでした。

海部 それはあえて言わずに——。それから森喜朗はその連絡係で、あれも精神的青嵐会に入っていた。

伊藤 古い人では賀屋興宣さんとか、そういう人もいたんですよ。

海部 そういう人がずいぶんいた。そちらのほうが党内では優勢、有力じゃなかったかな、率直にいつて。

そして大陸派——という言い方が悪いが——は押され気味になるわけだ。青嵐会なんか元気がいいからね。そして「この問題はどつするつもりだ、どう解釈するんだ」とやつてくるのは情緒的な問題でしょう。精神に訴えて、道義に訴える。「賠償すら取らなかった蔣介石さんだ」というようなことから始めるんだな。

楠 児玉誉志夫なんかどうですか。

海部 僕の知っている範囲では現われなかったと思うけれども、私宅まで来てやつていればあれだから、ほかのところで会つていらつしやることはない、とはよう言えない。あるとも言わんけれども、事実をつかまえていない。

■田中内閣の成立、三木副総理の入閣（一九七二年七月）

伊藤 そして田中内閣ができて、三木さんは副総理格で入閣されませんが、「海部」先生はとりたててどう、ということはないですか。

海部 僕はそれ「三木氏の田中内閣入閣」に反対だもの。その時は三木先生に「副総理なんかなくてもよろしい」と言った。その頃はまだまだ単純だから、副総理なんていつて入つて行つたらあれだから、対岸に旗を立てたら、その旗のところに全部が集まるまで志を遂げよ、というようなことだ。

「『副』の字だけは余分ですよ」と、三木さん自身が演説でやつたんだから（一同笑い）。だから僕も「それはそうだ」と言った。というのは、総理大臣と副総理大臣とは権限が全然違いますからね。だから志を遂げるには総理にならないといけないわけで、副総理大臣の「副」の字は余分ですよ、ということだ。ここまで何回も勝負をやつてきて、そしてその下の「副」について、どうですか。そしてそのころ石油危機が起こるものだから、お使いですぐにクウエートに飛んで行つたりね。

田中 そうしますと、三木さんが副総理になった目的はどんなところにあつたんですか。「海部」先生の反対を押し切つてなつた、ということですか（笑い）。

海部 それは選挙民を説得するにも時間がかかりましたよ。あの頃ちよいちよい、毎年一回ずつ向こうの後援会総会や幹部会なんかに行つて話をしてあげるんですね。そういうとき、「三木さんは総理になるんだから、ここは総理を出すグループだから、ひとつしつかり支えてほしい。間違つても選挙違反なんかはやらんように」とえらそうな話をしてさ。事前に打ち合わせると、「そう言つてきて結構です。そうですよ。そう言つてやつてください」と言う。

楠 三木さん以前の話ですが、あの時代に副総理から総理になつた人というのはいないですね。

海部 いない。

楠 だから副総理というのは、この時代では、一丁あがりのポスト、というイメージがあつたんじゃないですか。

海部 「党の」副総裁と似てくるわけだよ。しかも、世の中もそう見ておった面もなきにしもあらずだから、そうなたら、それで終わりじゃないですか。

伊藤 三木さんは成仏したと見るんですね。

海部 そうそう、中曽根さんもおるし。「やっぱり副総理なんかやらずに、ひとつやりましようか」と言っていたんだけれども、そうはいっても最後は——。そういう意見が三木派の中には多かったです。

伊藤 そうですか。じゃあその時に、三木派からはほかには入閣はしなかったですか。したでしょう。

海部 しました。田中内閣の時は入閣はしました。それは三木さんが副総理に入っちゃったからです。そしてその時の説得の理由は、そうはいったって、放っておいたら、福田さんばかりがあれをしたら、政策全体の方向が三木さんの信ずるようなところにきちんといていかなことになる。だから、三木さんも入っていつて対等の立場で、権限も資格も持つて、そこでいろいろやり取りしていければ責任が持てんのではないか、というようなことで、いろいろ話し合ったことを覚えています。

伊藤 「昭和四十七年」十二月の総選挙で、先生は五回当選ですか。

海部 まだその頃は、先輩には「青い、青い」と言われたけれどもね。

伊藤 それぐらいだと、ですか。

海部 ああ。いろいろ言うのがある。「まだ青いよ、それでは」と言う。というのは、百戦錬磨の人もおるわけだ。そんな頃は、「一緒にいならずに、どこまでもそんな反目ばかりしているから駄目だ」と三木さんは言っていた。「もつと天下人というのは——海部君、君らも覚えておけ——やれと言われたら、すぐよろしいといってやって、そして次を取るようになければならん」とかね。いろいろな人があったね。

同じ派内で一番急先鋒でものを言ったのは、早川崇と毛利松平だ

よ。わかるような気がするでしょう。そういうときに僕らに「まあまあ、海部さんな、そう言わないで」といってなだめ役に回ってあったのが井出「一太郎」さんだよな。あの井出さんという人は、あの時三木さんと本当に腹を合わせていた。そして三木さんは井出さんを一番信頼しておったんだらうな。だから、「今度、入りますよ」と言われたんでしような。

伊藤 そうですか。田中内閣時代に、「海部」先生に何かが回ってくるということは、全然なしですか。先生に降ってきたのは、自民党の人事局長ですね。議運の委員長はもちろんですけれど。

海部 その前に議運の委員長はやっていて、議院運営委員長も、そう長いことやっておるポストではないし——。

伊藤 議運は、ずっとやってるでしょう。

田中 それじゃなければ、面白くないじゃないですか。

海部 理事としてずっとやって、委員長までやったら、また理事に戻るわけにはいかん。ちよつとそれは自尊心が許さんでしょう。あれはどちらかというと、交通整理係だもの。高度な政治判断を要するときには、もつと上の国会対策委員長同士で話し合いをしたり、幹事長・書記長会談をやらせて決めていましたからね。あの議院運営委員会が決まるものは、銀座の交差点と同じように、わかりやすいところまでわかりやすく決まることだ。それを考察しているのが議運の理事ですから。それを委員長までやったら、またそこへ戻ってきてやるというのは、よほどの物好きでない限りいだらうな。

■自民党人事局長（一九七三年）

伊藤 「海部先生は」昭和四十八年に自民党の人事局長になっていますね。党のそういう組織の役員としては、前に青年局長をおやりですが、人事局長というのはまたずいぶん違った局長だと思います。これは何の仕事をするんですか。

海部 それまでは、「人事局長というのは」あるかないかわからないようなポストだから、そんなものはどうでもいいやと思つた。しかも田中内閣ができる時にちよつといろいろありましたからね。「私は反対だ、そんな副総理になることは」と言つてガタガタ、ガンガン言つたことも「田中氏には」わかつておるし、「対岸へ行つて旗を立ててきちんとやらなければ、田中さんの家来になつてもしようがないですよ」と言い続けてきたこともわかつておるだろう。そうしたら、その時は確か金丸「信」さんだつたと思うが、「海部さんな、そんなことばっかり言つてもな。君もひとつ、もうひとつと別の角度でやつてくれ」という。その頃NHKの討論会なんかへ出ていくと、思いつきりのことを言つたものだから、それでちよつと――。

「人事局長というのは何をやるんですか。代議士の人事を決めて、今度誰を大臣にするなんていうことまでは決めさせないでしよう」と聞いた（一同笑い）。「それはもちろんそうだ」と言うんだよ。「それなら文句言わずにやりますよ」と言つたら、「いや、それは違う」という。実際その時やつた仕事は何であつたかという、ほとんど何も仕事はないんです。

伊藤 ないんですか。

海部 ないんです。ずっと見ておつて、政務次官とか委員長を推薦する時に、「人事局長は」意見を聞かれるわけだ。そうすると、それは、理由こういうわけで、こうだと言う。田中角栄という人は、ちよつと気が短くて、パパパツと「よつしや、わかつた」というようなことでやる人だから、別に根に持たれたわけでもないし、こつちも根に持つたということは――。むしろ角さんに根を持つたなんて、そんなのはみつともねえじゃねえか、というのがこちらの三木先生に対する主張であつたので、それはそれで人事局長の仕事も一所懸命、しっかりやりました。

伊藤 何の人事をやるんですか。どんな人事ですか。

海部 ですから、政務次官の人事とかです。

伊藤 政務次官の人事は、自民党の人事局長がやるんですか。

海部 それは、自民党の中の部会を見ている。部会を卒業していることが、この人は政務次官が務まるかどうかのいちばん大事なことなんです。自民党の政務調査会の部会というのは、出すべき法律の事前審査を全部やるんです。途中で修正するときには、修正案の作成にも囃んでいく。その代わり、部会には初めの頃は大臣経験者も委員長経験者も、みんなまた来るわけだ。ちよつといま税制調査会には、例は悪いけれども、山中貞則だとか林義郎だとか、古い人がまだまだいますよ。それから労働部会には、労働大臣経験者とか、デモやストがあると行くとか、そういうことがありますからね。だから部会というのは、それなりに党が法律をつくるときに必要で、部会の了承がなければ絶対に法律にはなりませんからね。

この前かその前だつたか、これ「速記録」を読み返しておつたら、理事懇が大事だという話をしてるけれど、理事懇というのは中味の話じゃないんですよ。国会運営の手續手管の問題、順番を決める問題ですね。枕にして寝ちやうとかだ。この法案を枕にしておけば、ここからこちらは当選できないだろう、というようなやり取りです。むしろ部会は、法律がきちんと通るか、クリアできるかどうかというところで、その法律の運命を左右しますからね。だから部会が非常に力を持つておつたし、また事実そうだつたと思いますね。

伊藤 そうすると、「人事局長は」部会の人事もやるわけですか。

海部 部会長に誰がいいかということなんかは、人事局長に相談があるわけです。

伊藤 誰が相談するんですか。

田中 総裁が、ですか。

海部 まあ、総裁がじきじき聞くことはあまりないけれど、田中角栄さんだけは型破りですから、「海部君なあ、議連の委員長にあれをしようと思うけれども、あれはどうだい。出てるか、よく」といつて聞いたりしてくる。それから僕は一回、田中角栄さんじゃなかったな、ほかの人に「厚生委員長を紹介してくれ」といわれたから、

「厚生委員長は田川誠一がよろしい」といって推薦したことを覚えてる。

田中 厚生委員長というのは、議会のですか。

海部 衆議院の厚生委員長です。

田中 それも人事局長がやるんですか。

海部 ああ。人事局長の権限ではないけれど、人事局長というのは、党の中堅のちよつと下のところにずっと目配りをする。大臣の推薦権や大臣の人事には口を挟まないけれども、そのちよつと下の委員長とか政務次官のところは、誰をどうしたらうまく埋まつていくかということがわかるわけです。

伊藤 誰が何回当選で、いままでどういう経歴を持つて、どういう業績といいますが、委員会や部会をこなしてきたか、ということを持ちやんと把握しておかなければいけないわけですね。

海部 そうですよ。それから、この人は、さあ、といったときに、委員会をサポートしたり逃げたりした癖がありはせんかとか、いろいろなことをいろいろな角度から、縦糸横糸のように見る。それでもたくさん間違ひは起こるけれど。

伊藤 でも田中角栄という人は、もう誰が何といおうと、自分で全部やりたいという人ではないんですか。あまり他人に相談したりしないのでは。

海部 あの人は、その意味では大変な自信家だから、「これでやりたい、こうしてくれ」ということでしょうね。

伊藤 なかなか、ほかの人が出る余地はないでしょう。

楠 「田中氏は」「国会便覧」が愛読書だという話を聞いたことがあります。

海部 「国会便覧」を読んでやっていきますよ。

伊藤 でも先生もそれをやらなければならぬ役割でしょう。

海部 それが役割で、初めはそれをやらされたものだ、いろいろと特に新しい選挙があつて、一年生が当選してくるとわからんわけです。応援に行った人とか、派閥が同じだとか「ならわかるけれ

ど」、それ以外のときは「国会便覧」を見て、だいたい氏素性、学校、職業、いろいろなものをずっと覚えていくんですね。

伊藤 「国会便覧」を見ないと、やはり人事局長は駄目じゃないですか。

■五回目の当選と選挙応援

佐道 四十七年十二月に、先生が五回目の当選になる選挙がありました。この時はもうだいぶ応援演説にも行かれましたか。

海部 五回目ですか。僕はたしか五回目の時は、選挙が楽になっていました。要するに必ず当選できるというところにリストアップされていたわけです。江崎真澄さんと佐藤観次郎さんというのがおつたけれども、あの頃は中選挙区ですから、三人は当選できるんです。落ちる心配は全くない。順位争いも、それまで一回目、二回目、三回目までは、最高点をとるのは江崎さんだったけれども、五回目の選挙からは私が最高点になつて、ほかにも目新しい人は立ちあはしない。共産党と、それから無所属で出る派閥の違う人たちですからね。それは非常に幸せだったと思います。

伊藤 ちよつと無風状態になつたわけですか。

海部 まあ「無風」じゃないね。「無」といいかにも失礼だから言わない（一同笑い）。そういうことが、心のたるみになるでしょう。だから絶対に自分では無風だとは自覚しなかつたし、思わなかつたけれども、そんなことを言うときれい事になるわけで、やはりそういう安心感もいくらかある。

それで、三木さんや党のほうも口説くわけだ。「海部さんね、自分のことしか考えない、そういうのでは、政治家は将来ないからね。他人のことも考えて、他人の応援にもちゃんと行ってやつてこなければいかんよ」と言われた。

そんな頃、いまと違って別の意味で「ヤングパワー」という言葉

がやはり始めた頃でした。それで三木さんの組の中でも、松浦周太郎さんとか井出一太郎さんとか、ああいうクラスのところまで行った。そして三木さん自身の選挙区にも、今日は婦人部の総会だから行ってきてくれ、なんて言われる。選挙中は、じゃあ何日供出できるかという。五回目の選挙頃からは、たしか一週間ずつくらいは出したんです。三週間の選挙中に、自分のところは、一週間供出した残りを割って、ずっと回れるようにしました。

伊藤 どういうところを回るわけですか。やはり三木派の若い人達のところとかですか。

海部 三木派の若い人か。いまから思うと、僕より年寄りの人のところが多かったな（一同笑い）。

伊藤 年上の若手か（笑い）。

海部 「こんなに素晴らしい先生はない。われわれ若者も一所懸命胸を借りてご指導いただいたて、ありがたがっております」なんて言ってる。それから参議院の鍋島「直紹」さんのところにも応援に行かされたよ。昔の殿様ですよ。ああいう人と一緒に演説をやっていると、勉強にもなりますからね。自分も知らないようなことをときどき言ってくれる。

■自民党選挙対策委員会幹事

伊藤 そして五回目の当選の後ですが、「海部先生は」自民党の選挙対策委員会幹事になっていきますね。これはべつだん選挙の委員会に直接関わったわけではないんですか。

海部 選挙対策委員会の幹事というの、幹事というのは、だいたい当選回数はまだ十分ではないけれども――。

伊藤 「当選回数」五回で、ですか。

海部 五回で、です。睨みをきかせて、若手の動向も知っており、長老のところへはときどき肩もみに行つてご機嫌をとっておるので、

派内のことはだいたいわかるだろうという人を、各派閥に推薦を頼んで集めたのが、その幹事です。

伊藤 そうですか。

海部 だから、選挙対策委員会の幹事会というところで話が決められ、逆にいうと、よほどの問題児でないかぎり、それは通るんです。伊藤 公認がとれるんですか。

田中 じゃあこれは、公認を決めるものなんです。

海部 公認は大將が決めなければいけないから、全部は絶対任せないし、メンツ上そう言わない。といって、上の方では、全国に何百とある選挙区のことを全部隅から隅まではわかりませんからね。だから総裁や幹事長のところでやるのは、だいたい十か十一か、そんなものです。十前後でしょうね、最後の調整は。

伊藤 問題のあるところですか。

海部 ええ。だからそれ以外は、ずっと直接やるわけです。

伊藤 この「選挙対策委員会幹事会」のレベルでやっちゃうんですね。

海部 やっちゃうんです。それは、要するに副幹事長クラスですよ。田中 そういう調整のときには、派閥のリーダーは出てこないんですか。

海部 派閥のリーダーは出てこずに、後ろにおつて、これはどうだ、あれはどうだ、これはこうしてやれ、あれはどうしてやれという指示を出すわけだね。こつち「幹事会」ではやり合つて、これは勝つたとか負けたとかやる。そこでまた、今度は若い連中に評価されるわけだ。

佐道 これは幹事会ですから、選挙対策委員会の委員長というのがいらつしやるわけですか。

海部 選挙対策委員会の中に幹事会というのがあるんです。その幹事はいま言ったように、各派閥からとつてくる。参議院からも幹事はもちろん出てきます。だけど参議院は、あまり重きを置かれない。選挙になると、いつも衆議院が中心だ。「楠氏に向かつて」ごめん

なさいね。言うだけのことは言いますが、みんな割り当てて応援するんだよ。だから参議院議員は、だいたい衆議院のうるさいのをちよつとつかんでおれば、選挙は必ずいけたわけだね。

それから、幹事会で決まればだいたいの上のほうもいけれども、どうしてもここだけは譲れんというところは、十や十一はあります。それはガミガミと最後までやります。そういうところは各派閥の領袖が最後に出ていくけれども、それは、だいたい話を決めてから出ていきましたね。「この人を泣かせる、こちらを今度は泣かせる、その代わり、これはこの次はこうする」とか、必ず落としどころを決めてからですね。

伊藤 最終的には幹事長、総裁のところで決着がつくわけですね。

海部 総裁のところで、と言いたいけれど、そうしないと総裁の權威がなくなるからね。総裁のところで決まる。けれども実際は、幹事長が職を賭して横を向くと、これは総裁にとっては一番やりにくいことなんですね。ここまで言っているか悪いか知らんけれど、最後の最後の場面で、そういう党内手続的な問題になってくると、幹事長が実権を持つんです。

伊藤 やはり幹事長というのは強いんですね。

海部 変な話だけれど、大平さんが幹事長として、「うー」とかなんとか、何を考えているかわからないようなことを言いながら、自分の思った通りにビシッと押していったでしょう。だから幹事長だ。幹事長が全権を握りませんとね。総裁というのは総理大臣を兼ねているわけですから、朝から晩まで自分の家のことばかり考えておられない。対外問題もいろいろあるでしょう。やはり選挙手続きその他については、だいたい歴代幹事長が取り仕切っておったと、僕はそう見ています。

伊藤 でも、とにかくならすところまでは、幹事会がやってしまうということですね。

海部 幹事会がやる。幹事会というのは、副幹事長とだいたいイコールするような立場の人ですよ。各派閥にそれがずっと行くように

する。

伊藤 私は当選五回というからには、もう相当ベテランになったのかと思います。

海部 僕は心情的には、まだまだそうベテランの域には達してないと思いますけれどね。そういうときに、もうベテランだと思ひ込んじやうと、「あの野郎、生意氣だ」ということになるわけです。

田中 自民党の総務局長というのがありますね。あれも何か選挙に関係するって伺ったんですが。

海部 いまほどの程度のことができるのかな。最近のことは僕はあまり詳しくはないけれど、少なくとも私の頃、それからこのあいだの総務局長選挙の時ね。それらは、昔の幹事会のような役割をやっていたんです。だから、名前まで出して悪いけれど、調べればわかることだけれども、鈴木宗男なんていうのがあれだけ口うるさく嘴を容れて、党内にいろいろな影響力が出てきたのは、あれが総務局長をやっていたからだという話をもっぱらですよ。

伊藤 そうすると、やはり総務局長はいろいろなことに口を容れる。

海部 ただ、若い連中に対してですね。われわれクラスに口を容れてきたって何ともないですよ。若い連中にですよ。選挙地盤がまだ十分固まっておらんとかね。そういうふうにしていいですね。伊藤 この選挙対策委員会の幹事というのは、やはり派閥を代表しているわけですから、選挙対策といっても、具体的にどこを重点にする、ということではないんですね。

海部 それはあるんです。それは、「うちの誰だけは絶対重点だ」という。

伊藤 結局、「うちの」ということになるわけでしょう。

海部 だから、うちのことが重点になればいい。当時は中選挙区だから、お互いに相争うんですけれど、これを重点にして、それは外そうとか、いろいろやり方があるじゃないですか。

伊藤 例えば五人区で、「公認が」三人で収まればいいけれど、四人になり、場合によって五人公認にすることもあつたでしょう。

海部 五人ともやったことがありましたね。

伊藤 そうすると、やはり重点を置かないとしようがないですね。

海部 目に見えない重点というのは、曰く言い難いのでよくわからんけれど、重点候補のところには、じゃあ最後に党幹部をぶち込むか、ということになる。総裁もしくは幹事長だ。選挙になつて、最後の超重点地域だということを言えるわけだ。「この追い詰まった選挙に、全軍の最高司令官である総裁が、今日は誰々のところに街頭演説に来て、もうじきやるんですから、いかにうちの先生が党が重点候補に置いておる大事な人がわかりますよね」というようなことが、田舎では意外に効くんだよ。

伊藤 東京あたりの選挙区じゃ駄目ですかね。

海部 東京あたりではね。この前からちよつと、総裁が来ても駄目、ということになつちやつたから。

伊藤 来てもらいたくないという話もありましたね。

佐道 今度は総裁に来てほしいでしょう。

伊藤 今度は大変ですよ。

海部 今度はまた参議院選挙の時は、どうなつちやうだろうな。往年の土井たか子さんみたいに、みんな吹っ飛ばされちやうかもしれない。

■四十七年十二月の総選挙

佐道 この四十七年十二月、先生が五回目当选された時の選挙ですが、いまの小泉さんともよく比べられますけれども、田中さんが就任された時の人気がすごく高かつたわけですね。「今太閤」人前で、日中国交回復をやつて、その勢いで選挙をやつて大勝するだろうと思われていたら、思ったほど勝たなかった。だいぶ苦戦した選挙だったと思うんですが。

楠 十七ほど議席が減っているんですね。

佐道 そうですね。これは自民党にとってはかなりショックだったんじゃないかと思うんですが。

海部 どうだったろうな、それは。

伊藤 ものすごい人気でしたからね。

海部 「今太閤」と言われたくらいだからね。

佐道 しかも日中国交回復をやつて、ワーツと人気が上がつて、さあそれで選挙だと思つたら、負けてしまった。

海部 ただ、日中国交回復はそんなワーツといった最高の人気ではなくて、「腹に一物、背中に荷物、暇があつたらぶん殴れ」というのが、あの頃の党内の実状だからね。だから、日中国交回復をやつたことが、イコール田中さんの人気として、党内ですつと高くなつたとは思いません。

田中 その前の選挙が、沖縄の選挙ですね。あれで自民党がいつぱい取つた。取り過ぎたのかもしれないね。

佐道 この選挙対策委員会の幹事会とかで、派閥の誰を押し込むとかいうことのほかに、そういう全体的な傾向についての検討とか、これからどういふふうな候補を立てていかなければいけないとか、そういう議論はされたんですか。

海部 それはときどきみんながやりました。

伊藤 でも一般論でいつても、やはり「わが派のこの人」というふうになるんじゃないかと思ひますね。

佐道 具体的な名前がありますからね。

伊藤 仮に三人区で、希望者が各派閥からそれぞれあつて五人になつたというときには、大喧嘩をしても、公認を少なくとも三人にまで絞らなければいけないでしょう。三人区で四人公認するということはないわけですね。

海部 ただ、党籍証明というのを出したことを覚えてる。

伊藤 ありましたね。

海部 定員を増えた人には党籍証明を出す。そして党籍証明があるから、当選したら当然公認に数える。

伊藤 しかし、それはすごい話ですよ。だからちゃんと選挙の時のボスターには「自由民主党」と書けるわけですね。

海部 「自由民主党」と書けるんだ。それが党籍証明というやつですね。

伊藤 例えば三木派から推したけれども、頑張って、頑張って、最後は党籍証明をとるのもよし。それも取れないと無所属で出る以外にない。

海部 当時は無所属になってしまうと、中選挙区ではあまり割り込んで当選できる率は少なかったんじゃないかな。

伊藤 それでも当選していますよね。

海部 十四、五人でしょう。それは当選していますけれども、いまいほど簡単じゃなかったから、やはり「公認または党籍証明は」取りたい。このあいだまでは無所属のほうが当選できるから、推薦はしてもらわんでもいい、なんて言い出したやつもおるぐらいだから。

伊藤 それでも小選挙区ですからね。

佐道 みんな無所属で出られたら困るじゃないですか（笑い）。

海部 そこまで、まだ一般の理解が進んでいないんだよな。

田中 ちょっと先ほどの話に戻って脱線しますが、政調会の部会で、昔は偉い人もいたとおっしゃいましたが、いまはいないんですか。

つまり、長老クラスの人はいもう部会には入っていないんですか。

海部 入ったとしても、出てこないんだよ。部会の本当の勉強会というのは毎朝やるんです。忙しい時期、予算時期とかの国会時期になるとね。そしてかなり長時間になるでしょう。だからよほどの人でないと、なかなか出てこないでしょうね。

田中 当時は、けっこう年寄りでもちゃんと出て来たんですか。

海部 そういう意味では、農林部会に行くと、井出先生も松岡周太郎先生もおったからね。だから部会をやっている日にその長老をつかまえようと思うと、議員会館の部屋に行くよりも、党本部の部会の部屋に行けばちゃんといたもの。

田中 今はむしろ逆なんですか。

海部 むしろ逆だな。

伊藤 しかしあまり偉い先生におられたのでは、部長はたまらんですね。

海部 口のうるさいのがおると、部長は困るわね。小舅みたいなのがいっぱい来ると。

伊藤 小舅ぐらいだといいますが、大舅みたいなのが来ると（笑い）。それでは田中内閣の時は、議運の委員長、人事局長、選挙対策委員会幹事ということですね。

海部 けっこう忙しかったんです。

伊藤 やはり法案の問題等ですか。

海部 法案の問題もあるし、いろいろ突発事故の始末の問題もある。ちやうどその頃――。

伊藤 三木さんが中東歴訪に行かれたときには、別についていくということはないわけですか。

海部 あれば政府特使の格好で行くわけですから、院の役員がついていくということはないんです。

■通年国会の議論

田中 話を戻してしまうんですが、議院運営委員長の時に、通年国会のお話がありましたね。法案を通したもので、一番印象に残っているものは何かありますか。

海部 あれば、国会で日韓条約が通らなかったんですね。通年国会の議論が出たのは、たしか日韓国会の問題を通してだと思います。

田中 日韓条約は昭和四十年ですよ。

伊藤 だいぶ前の話です。

田中 改訂か何かがあったんでしょうか。

楠 日韓大陸棚ですか。

海部 何か日韓関係のものがあつたんだ。それで「田中総理は」、「こんな国会は、開けたら一年中やっておけばいいんだ」と言うから、「会期制度だから駄目ですよ」と言ったら、「いや、そんなのは一年開いちやえばいいんだ。一年中開いておけば、野党は知恵がないから、これ以上攻められなくなる。それじゃあもうこの辺で幕にしようか」といつてやれば、すぐに乗ってくる。このごろの委員会を見とつてみる。もう聞くことないだろつ。向こうはそろそろ勉強に困っているんだ」と言つたね。だから通年国会の問題は、田中角栄さんが言い出したことでもあつたし、前尾さんが議長の時かな、なだめるのにたいへん困つたこともあつた。あれは日韓の何かと絡んでいたんじゃないかな。

田中 日韓基本条約は昭和四十年ですよ。

伊藤 それは佐藤内閣の頭の頃ですね。

佐道 たしかに大陸棚がありましたね。

海部 そちらのほうじゃありませんかね。

田中 先生は、通年国会に賛成派だったんですか、反対派だったんですか。

海部 あの通年国会というのは、ホンネで言うと、それが定着すればある意味ではらくになるんです。この国会の会期中にこれを上げるとか、この国会の会期中に上がらなかつたら駄目だとか、法案の中身じゃないんだ。いつ上がるかだ。何か本質的な議論とちよつと離れているんじゃないか、というようになことを思いながらやつていましたね。「それじゃあこれは通してはいけませんな」「いけない」「それじゃあ枕法案を何かつくりましょう」と言つて、枕法案をつくつておくと、その枕法案の枕で寝ているあいだに、あとがつかえちやうから、会期が来れば不成立になる。そういうことをよくやつたので、つまらんとやつたら悪いけれど、そういう本質的ではないところに精力を注ぎ込んだという思いがありますね。

田中 日本は先進国では会期が一番短いですね。ほとんど「の国」が通年ですよ。

海部 それはそもそも、政府が野党の質問攻撃からなるべくたくさん逃げられるようにという発想でつくつた国会制度ですから。まず第一に、ついこのあいだまでは、十二月の召集でしょう。十二月に召集しても何もできんじゃないですか。野党だつて、年末だ、正月だ、帰れ、といったら喜んで帰つていく。与党は与党で、予算編成をやらなければならぬ。そんなときに国会を召集しておるといふのは、まずそこでだけで三十日から四十日逃げられるわけでしょう。

それから連休が今のようになるとまた別だけれど、あの五月連休に向けて、連休までに通ればいいし、連休までに通らなかつたらそれで駄目にしようという一つの暗黙のメルクマールみたいなものがあつたんですね。だから重要法案は、連休までにとにかくやつておけということだった。

田中 「通常国会の会期は」一五〇日ですから、だいたい六月には終わりますね。

海部 終わる。そして今度は、暑い夏休みをどうとるかということだ。あまり長期の会期延長をやると、与野党挙げて、いやだ反対だ、という人があるけれど、ホンネの部分ではやらなければならぬので、会期延長というのでだいたいぶ激突して、二日徹夜するとか、三日徹夜するとか。あんなエネルギーは通年国会にしたらなくなるのにな、というのが、われわれ議運関係をやつておつた者の率直な意見でした。

伊藤 通年国会にすると、会期がなくなるということですか。

海部 はい。

伊藤 第何回国会という名称はなくなるんですか。

海部 それは残るかもしれませんが。「名前」残つても、一年中開いているわけだから、五月の連休までに法案を上げなければならぬ、というような妙な区切りはなくなる。

田中 「何年国会」という名前を付けるとか。

海部 「何年国会」でいいんじゃないですか。

田中 あるいは衆議院の解散の年をとつて、次の四年間とか、それ

はいろいろと付け方がありますよ。「伊藤氏に」歴史学者が考えてください（笑い）。

伊藤 あまり考えたことがなかったですね。

■金大中事件（一九七三年八月）

伊藤 いま年表を見ていましたら、この時、金大中事件が起こっているんですね。先生は、何かご関係というか、関わりはございましたか。

海部 金大中さんは、私が寝泊まりしておった九段の議員宿舎からちよつと降りたところのあのホテルでとつ捕まったわけですね。

宇都宮徳馬という男がいたでしょう。あの人が昵懇で親しかった。宇都宮徳馬は三木先生のところにしょっちゅう出入りする間柄だったので、金大中事件が起こったときには、ああいうことをするのは民主主義に反するというような反応を、まず三木さんはした。宇都宮徳馬さんとか、田英夫というのも来ておったな。これも金大中と仲がよかったんだね。

僕はその頃、三木先生に言ったことがあるんだ。日本は韓国へ、あの頃は経済協力と言っていたかな、お金を出していたでしょう。金大中さんは日本に来て、「あれをやめろ。それは、後ろ向き腐敗政権を助けることになるではないか」というような理屈で言ったんだな。僕は、「先生、それは間違いじゃないですか。それが腐敗か腐敗じゃないかということは、それを含めた相手国の事情です。だから支援しなくてもいいかという、まったくそういう腐敗行為や良くないことに関係のない多くの国民のためには、そういう言動は反国民的な発言になるんじゃないか」と言ったんです。僕はあの頃、田英夫さんや宇都宮徳馬さんにはちよつと違和感を持っていたので、ちよつと違うじゃないですかという話をしたことがあった。そうしたら、「その腐敗政権を延命させることに力を貸しているようなも

のだ」と田英夫さんは言うわけだ。けれどもあれは、何というか、本人があそこまで――。

このあいだの国会の演説でも、彼が終わってから来たときに、総理経験者と一緒に朝食をとった。僕はちよつど金「大中」さんの横、向こうに竹下さんが座って、いろいろ話をした。そうしたら、率直なんだね。あのときはちよつと見直しました。

田中 金さんは日本語を話せるんですか。

海部 充分話せます。

■小選挙区制への動き

伊藤 この田中内閣の時に、小選挙区への選挙法改正を考えて、結局これは三木さんがやめなさいと言って終わりになるような感じでした。

海部 それはちよつど僕が議連の委員長の時です。

伊藤 これは、法案が出たわけではないんですか。

海部 いや法案をつくって、そして区割り表までつくった。田中角栄さんが区割り委員会に行つて挨拶をして、区割り表まで用意したんです。しかもその前に手が込んでいたのは、全国会議員に、「小選挙区制にするならば、例えば一番あなたにとって都合の良い案はどれなんだ」と角さんは全部に聞いたわけですよ。それができたら、中選挙区を小選挙区に変えるんですからね。僕のところなら、僕と江崎真澄と佐藤観次郎と三人とも当選できるような話でまとまればいいんだという意味の話が来て、みんなが考えるわけだ。そのときは、うちの選挙区を三つに割つたらこうですよ、江崎さんはこう言っていますよ、というのをいろいろやった。

伊藤 そこまで行つたんですか。

海部 行つたんです。そして、何郡何町まで分割はできない。それはちよつと調子が良すぎるぞ。三人だから、必ずしも同じじゃなく

てもいいじゃないか。一人はちよつとアバウトだけれど一万票多い。こっちは一万票少ないけれど、行政区画の市は分けなないとか、郡は大事にするとか、そういうことでやろうということで、あのとき三人が了解して、署名捺印したものをつくって、それで持っていってんだですよ。

伊藤 そうですか！

海部 初めはそれをやっただけです。だからみんなが、これは本気だな、と思うでしょう。だから逆路もあつたわけだ。さあとなつたらすぐ退けるように。けれども行けるところまで行つてしまおうと。それで、もしできたら、それでいいんだという未必の故意のような発想が、角さんの中にはあつたと思う。そう思いますよ。

佐道 先生ご自身は、そうなつたらやむを得ないな、と思われませんか。

海部 はい。三人の代議士がそれぞれ当選できるわけだもの。佐藤も江崎も河野「ママ」も。河野さんを当選させるためには、一宮市と尾西市と稲沢市をもらいましょう。そうするとサトカンの方は、津島市から海部郡からあちら全部をあげておけば、四十一万か四十二万ある。江崎さんは大山から江南から岩倉市、布袋町、丹羽郡をあげておくといい。三人がそれで当選できる。三人が手を組んでおれば、まあ誰が出て来ても落ちることはないだろうということで、三人ともこの割り方ならばよろしいという案が、少なくとも愛知県第三区に関する限りはビッチとできた。

伊藤 じゃあ、できないところもあつたでしょうね。

楠 それはいっぱいあつたんでしょね。

海部 いっぱいあつた。

楠 区割りを出したことが、できなかった原因だったんでしょね、鳩山内閣の時も田中内閣の時も。だから後に細川内閣で実現するときには、区割りを出さなかつたんですね。選挙制度だけ変えたんですね。

海部 細川内閣の時は区割り表は誰にも見せないというので、僕も

見なかつたですよ。角さんの時はそういうのをつくって持つていったけれど、愛知県のようにすんなりと割り切れるところはなかったんじゃないですか。

■愛知三区の事情

伊藤 「愛知」三区の定員は何人だったんですか。

海部 三人。

伊藤 じゃあ独占していたわけですね。そういうところはいいんでしょね。

海部 だから例外的かもしれませんが、棲み分けが初めからできていましたので、ずっとそれで来たわけですね。

今度「二〇〇〇年の総選挙」は、ちよつと隣で異変が起こつたのでいけません。サトカン「佐藤観樹」のところ、知っているでしょう。江崎真澄さんの息子の鉄磨君が小選挙区で落つこちやつた。そのときも事前に呼んで、「お前どこでやりたいか」といったら、「ここは強い、お父さんの代から強いところだから」「じゃあ昔分けた選挙区割り表というのは正しかったわけだな」なんて笑いながら話をしておつた。そうしたらその区割り表を決めてから、こちらで出ると言つておつた佐藤観樹が「隣へ行けば勝てる」といって隣「江崎鉄磨の選挙区（小選挙区・愛知十区）」へ行つた。

だから江崎さんと呼んで、「おい、サトカンが行きそうだから気をつけてやれよ」と言つたら、「来たら、そんなもの鎧袖一触にする」なんて言つておつたけれど、そうはいかなかった。蓋を開けたら、江崎さんの方が落つこちた。だからこちらにも罪に感じた。しかしこの次までに選挙区を変えろというわけには行きませんからね。私の後援会があるものだから、そこへはいつも応援に行つて、「江崎鉄磨を頼みます」という演説をやってくるわけですね。

伊藤 そっちのほうに後援会があるんですか。

海部 ありますよ。だって私は中選挙区が終わったときに、「後援会を」解散しなかったもの。

田中 今でも解散していませんか。

海部 今でも、ですよ。だから今でも僕の後援会総会をやるときは、一般の大人の男の後援会と、婦人だけでやっているハナミズキの会というのがありますが、これは今でも旧三区です。

伊藤 いつ中選挙区に戻っても大丈夫なんだ（笑い）。

海部 いつ戻っても大丈夫だし、戻るかもしれないという不確定要素がある。だって、公明の幹部と話してごらんさい。すぐ戻してくれという。ですから、そういうときは逆路の備えをしておくんです。そうですよ。その時になって、それまで手を切つて、ああ俺の選挙区はどこだった、といつてもしょうがありませんからね。

楠 コストがかかりますね。

田中 それは海部先生だけじゃなくて、他の代議士の先生もやっていらつしやるんですね。

海部 オールモースト。だから政治と政治資金の関係も、理想的に掌を返したようにはいつておらんけれど、これはしょうがないね。

楠 人間関係も、選挙区が変わったからといって、そんなに急には切れないですね。

海部 現におとといも、僕が飛んでいったのは、愛知県大山市ですよ。大山市というのは元の僕の選挙区で、今は僕の選挙区じゃないんだ。「今は僕の選挙区じゃないからいやだ」と言ったら身も蓋もないな。「先生、冷たくなったな」ということになる。

楠 でもあまり行ったりすると、その現職議員が文句を言わないですか。

海部 いいんだ、今はそこで江崎鉄磨も落ちているから、俺が適当に口添えして、「江崎君にも頼みます」といっている。

伊藤 そこは誰が当選しているんですか。

海部 サトカンが当選しているんだ。要するに、自民党が社会党に取られちゃったということだ。しかも佐藤が逃げていくときに、新

聞で会見たんですよ。「正直に、ここでやっていてもまた負けるから、負けるのはつまらんから隣へ行って勝たせてもらってくる」と言った。まったく、そういうことが起こるんですよ。

伊藤 初めて聞いたな。

海部 それでも僕が日曜日を一日つぶして行ってきたんですよ。いまの自分の小選挙区ではないところへ。

伊藤 それは、講演か何かですか。

海部 いや、葬式です。これは行かなければ、一族郎党、お隣近所みな集まりますからね。「ああ、先生、選挙区が変わると水くさくなりやあたなあ」なんて言われる。

田中 そのお葬式は、後援会の役員か何かですか。

海部 その村の会長です。これはしょうがありません。そういうことがちよいちよいあります。聞いてみると、だいたいみんな近しい人のことはやっておるようです。

伊藤 この田中内閣の時に、いわゆる「狂乱物価」になって、いろいろな法案が出ますね。これはそんなに難しい問題ではなかったわけですか。

海部 それは小泉の発想と似ているという叱られるけれど、角さんの発想は、「やれ」というときは理屈じゃないんだな。石油がもとで高くなったわけでしょう。それでお正月商戦から価格を安定させなければならん。「田中総理の声音で」「来年になってからでは駄目だ、年内にやっちゃえ。議運が本会議を年内に開いて、いつでもいいから上げちまえ。野党のやつがゴトゴト言ったら、みんな連れてこい。この国がこれだけ困って、これをやらなければ立ち上がっていかぬかどうか、たいへんなことなんだ。やっちゃえ、やれ、やる」ということだったね。狂乱物価は、たしか年末に上がっているはずだ。

それで最後の最後の脅しは、「野党が反対しなければその日にできるじゃないか。最後に野党も乗って、帰らなければならんから、何日まで上げてくれ」ということだね。

伊藤 そういうことになると、田中総理陣頭指揮になるわけですか。

海部 もちろん陣頭指揮です。いちいち手続きを踏んでいる時間も暇ありませんね。あのとき急激に情勢が変わってきた。たしかあのときは、不当に高いものを売った者は御用になって罰せられる。

田中 買い占め売り惜しみ防止法案でしたね。

海部 売り惜しみ買い占め防止法案といったかな。

■エジプト、クウェート訪問（一九七四年一月）

佐道 先ほど、三木さんがオイルショックの時に中東を歴訪されて、特使として行かれてという話があったんですが、三木さんが行かれたのが十二月で、その翌年の一月早々に、先生はすぐに事情調査ということでエジプト、クウェートに行つてらっしゃるんですね。ほとんど同じところに行かれたわけです。これは何か関係があったんですか。また、実際に現場をのぞいたら、どうお感じになりましたか。

海部 三木さん自身も、「日本の外交には死角がある、それをゼロにしていかなければ日本は駄目だな」ということをクウェートに行つてしみじみ思つたんだ。その直後に、クウェートの国会議長が日本に来たんだ。それで僕が接遇接伴した。そうしたら、「ぜひおいでください」と言われたので、それじゃあ行くこうということになった。まだピラミッドの灯りがつかない頃ですよ。

伊藤 これは事情調査ですから、議運ですか。

海部 議長を担ぎ出した。面白い写真があるんだ。「秘書の方に、写真を持つてくるように指示する」

田中 当時議長は誰でしたか。

海部 前尾繁三郎。「ここは一杯も出ないから、つまらない、退屈するところだな、すまんけれど、一杯ウイスキーでも」と言うわけ

だ。「任しときなさい。今晚は安らかにやすませますから」と言つて、石川「良孝」大使に言ったら、やつぱり大使館は持っているんだな。「けれど先生、見つかつてもらうと大変なことになります、どうしましょう」と言うから、「お茶を注ぐ土瓶があるだろう、それにウイスキーを入れて、湯飲み茶碗と一緒に持つて、議長の泊まつているホテルの部屋に運び込むのは構わんだろう」と言つたわけだ。

伊藤 ホテルの中で飲んでもいけないんですか。

海部 いかん。ホテルの中にもバーがあるんですよ。「BAR」と書いてある。「Can I get some whisky?」と言つても、「No」と言つて、全然売らないんです。バーはウイスキーを売るところじゃないんです。「Some beer?」と言つても、「No」と言う。ジュースです。その証拠に、クウェートの王様主催の会合でもジュースですよ。

申し上げたと思うけれど、僕は今年の二月にもクウェートに行つた。「湾岸戦争の」戦勝記念祝賀会。「日本に対する」感謝広告も出さなかった国が、今度はブッシュとサッチャーさんと同列のいいところに私も座らせて、褒めるでしょう。その晩餐会でも、ジュースしか出ないんですよ。

「秘書の方が写真を持つてくる」これが、その写真です。これが前尾議長。僕にだけ金の王冠がついている。あんたは皇太子だから、といわれて、調子がいい。「写真を指しながら」これが山口鶴男、これが箕輪登。これがいま自由党における小沢の家来の平野「貞夫」。

田中 もとは職員じゃなかったですか。

海部 衆議院の職員だったんだ。

伊藤 この写真はどういう場所ですか。

海部 それはあまりよく覚えておりませんが、そこに写っているようなどころです。

伊藤 「写真を指しながら」海部先生はこれですか。

海部 そうです。

伊藤 いまの方がいいですね。総理になるまで、まだ間がありますからね。それでそのホテルで、土瓶でウイスキーを飲んで――。

海部 飲みました。

伊藤 廊下に出たりしない方がいいですね。

海部 それはしない。匂うからね。いっぺん飲み出したら、絶対にしない。

田中 先生、この時は国対をやっていますね。国対は四十八年十二月に終わりになっていますね。

海部 いや、書いていないだけで、国対の副委員長はずっとやっています。国対委員長になるまで。

田中 議院運営委員長に選任されていて、それが四十八年十二月までですね。クウェートに行かれたのは四十九年一月ですから、もうお辞めになって、国対の方をやっていたんですね。

海部 いや、議運で行ったんです。それは議運であつたことは間違いない。議運だから議長を連れて行ったんです。

伊藤 各国議会制度調査云々というのはまだあとにも続いていますからね。

海部 何回も議会制度調査で行っているんだ。

田中 九月にも行かれていますね。これも当然議運か何かをやっているんですね。

海部 はい。僕は議運と国対を兼務してずっとやっていました。

■日米繊維交渉との関わり（一九七四年六月）

佐道 昭和四十九年六月に、日米繊維問題交渉の政府代表でアメリカに行かれて、商務省と交渉にあたることになりますが、これは何人ぐらいで行かれて、具体的にどういうことをおやりになったんですか。

海部 所属は商工委員会のメンバーが多かったんですが、党の中に

繊維製品問題特別委員会というのをつくらせました。何故そんなものをつくらせたかという、貿易摩擦の走りが繊維製品だったんです。ちょうどいまのユニクロとまったく逆の立場が、日本の毛織物、綿織物だった。当時は「シャークスキン」という言葉が流行りましたね。シャークスキンというのは、日本得意の絹を織り込んで、毛を五〇％以上、あとはなんでもいい。絹が入っていると米国ではよく売れるというので、そういうものをつくりました。それとともに、「ワンダラー・ブラウス」という言葉を覚えていませんか。

伊藤 覚えています。

海部 ブラウスがみんな一ドルで売れたので、アメリカでは大恐慌だった。ちょうどいまのユニクロの逆だ。ただその時、田中角栄さんというのはさすがに閃きが早かったんだけど、僕らを朝早く集めた。あの頃われわれは反対しておったんだ。「もうこれ以上売ったら駄目だ。いけない。やったら戦争になるぞ、海部君。戦争になったらいいか。いいかあ」と言うから、「いや、戦争はいかん。そんな飛躍してくださるな。戦争がいいか悪いかの話ではありません。こちらは地元が殺されちゃう」と言った。よし、じゃあどうしたらいいか。アメリカがこれ以上ものを買ってくれなくなると、日本でできた繊維製品をどうしたらいいかわからなくなる。

そうしたら、久野忠治さんという人が愛知県出身だ。いまの統一郎さんのお父さんだね。彼は綿工連で綿の代表だ。僕は毛工連、毛やシャークスキンのほうだ。ほかにかの有名になった稲村左近四郎とか（伊藤 燃糸工連だ）、繊維関係者はみんな行ったんだ。福田一先生、元議長さんも。

そうしたら角さんが言ったのは、「うーん、二〇〇〇億、十万台。これで繊維産業は必ず蘇る」ということだ。いまのリストラですよ。「十万台の織機を、お前ら、努力してつぶせ。その代わり、転廃業資金を二〇〇〇億用意してやる」と言う。そうしたら、スーッとなくなって、みんな、「毛工連にこれだけだ」「いや俺のほうはこれだけだ」という内部争いになっちゃったんだ。それで覚えておるんです

が、結局織機を買い上げてもらったんです。

それで後日談があるんだけど、買い上げてもらった織機に、今度は税がかかってはいけないから、免税にしない。一台十万円とか十二万円で、布を織る織機を政府に売るわけだ。それで過剰にできた織機をアメリカに持って行ってアメリカに怒られることがなくなるわけだ。一時期は、痛くもない腹を探られて、糸と縄を交換した、沖縄と織機を交換したと言われた。そんなときですから、それぞれにわかりやすく説明がきちんと行くようにしておこうということになった。そうすると祖先伝来のいろいろな業として、生業（なりわい）を立ててきた地場産業が、これで崩壊するかもしれない。けれども十万台思い切って廃棄すれば、生産量もこれだけ減る。減れば、やっていける。アメリカにだって、それ以上いけないとは言わせない、なんて言われて、みんながそれじゃあそれを守ってくださいよ、ということになったんだ。

伊藤 それはこのアメリカに行ったのと前後しているわけですか。

海部 前後している。そういうことと関係なければ、繊維関係でアメリカに行くことはないもの。

田中 これは具体的にどういうことをやられたんですか。

伊藤 「商務省を訪問した」とありますが、別に交渉したわけではないんですか。

海部 向こうは商務省の長官が、繊維の問題の関係者の一人なんです。

伊藤 これは話し合いをしたんですか。

海部 話し合いをしたんです。話し合いの根回し、叩き台づくりみたいなものですね。

伊藤 田中さんがこうしようと言ったのは、その後の話ですか。

海部 「全部面倒みるから、十万台、二〇〇〇億」と言った。けれどそれで、日本の繊維業界も、あのときはある意味で整理がついたんですよ。そして逆を言うと、織機をたくさん抱えておって、あの頃そろそろ人手不足が訪れ始めた世の中でした。そうすると、俺の

ところもできたら廃棄してもいいな、と思っておった人もいくらかおったわけですよ。けれども真つ先には恥ずかしいから手をあげなかつたけれど、よそが言い出したら、俺のところも何台出せる、何台出せると言つて、十万台がバツと埋まったんです。十万台の生産をやめると、一日に何メートルか織れる分が明らかになくなるわけですよ。

そこで本当に廃棄したかどうかを誰が責任を持ってチェックするかということになって、組合に自主的にやれと言つたんですが、組合ではなかなか自主的にできっこない。そこで通産省の繊維局というのが、そういう監視行政にまで足を踏み込んだんですね。いまの僕の反省は、ああいうときは組合が責任を持って監視監督もする、約束は守る、ということをしちんとやらないと、いくら良い政策をやつても、ますます官が太るばかりです。通産省がそんな権限を持つものだから、良くない問題がぼつぼつ起りました。それもいまから思えば、反省の一つです。有頂天になつてつぶせばそれで済むんだと思つておつたのは、一つの間違いであつたと思う。

■三木副総理辞任と三木派内の序列

伊藤 先生がアメリカに行かれた直後に、三木さんが副総理を辞めるといふ問題が起りますが、そろそろ田中内閣の前途が見えてきたという感じでございますか。

海部 まあ、言う人はいろいろなことを言うけれど、三木さんは何か予感みたいなものを感じておつたんじゃないでしょうか。

佐道 「三木さんが」お辞めになるとときには、やはり相談をされたりするんですか。それともご自身で、「辞めるから」と突然おつしやるという感じなんですか。

海部 三木さんは、あまり事前に相談しなかったな。

伊藤 例えば派閥のある日の朝の会合で、「俺は辞めるよ」と言う

ということですか。

海部 「俺は辞めるよ」と言う朝の会合の前に、小人数を集める。

当時は井出一太郎さん、松浦周太郎さんは常連だった。

田中 前に、三木さんは福田さんと話していますよね。その結果、まず三木さんが見切り発車みたいに辞めるという形だったと思うんですが。福田さんには、辞めると言っていたんでしょね。

海部 それは福田さんとのあいだでは、あの一件以来相当突っ込んだ話をされておったはずです。それから、僕らもそういう意を体して、福田さんのほうはどの辺まで決心しているんだと思う。いつて、福田さんに直接聞くわけにはいかんから、こっちは安倍晋太郎を呼びだして、いろいろ聞いた。そういうとき「安倍氏は」は、

「やっぱり竹下さんも呼んで、話を聞かせておこう」と言う。「いや呼んだって、あれは自分のことは言いくかろう」「それでも呼んで聞かせておかんと」という。そこが安倍晋太郎という人が坊ちやんだったところだな。抜き身の刀を引っさげて、というところよりも、この国をどうするかということで、「そういう相談には竹さんも呼んでやつておいた方がいいよ」ということを言ったね。

伊藤 じゃあ筒抜けということですか。

海部 筒抜けというよりも、みんなが正確に情報交換して、共通の認識に立っておこうということだと思うな。

伊藤 そう言えばそうなんですが（笑い）。

海部 だから僕らは、その頃はそういうふうな教育されてきたんだ（笑い）。

伊藤 三木派の三木さんの側近ということになると、さつきおつしやつた井出さん、松浦さんで、それは大幹部なんですか。

海部 大幹部ですよ。

伊藤 先生は、中幹部ぐらいですか。序列でいうとどのあたりにあったんですか。

海部 序列は、兵隊の位で言う少尉か中尉ぐらいだろうな。

伊藤 まだそんなものですか。当選五回しているんですよ。

海部 いや自分ではそう思っているんですよ。

佐道 五回当選だったら、それはいくらなんでも――。

田中 先生、三木派を上から並べてみてください。

海部 松浦周太郎、井出一太郎が一番上におるでしょう。

伊藤 それから先生までのあいだに、まだいますか。

海部 いるいる。毛利松平がいるでしょう。丹羽兵助さんというのがおったでしょう。それから、伊藤宗一郎も三木派だ。

楠 栃木県からいま法務大臣になっている――。

海部 森山真弓の旦那の森山欽司、そういうのもおったな。

伊藤 じゃあ、ずいぶんいるんですね。

海部 いったいいますよ。

佐道 河本「敏夫」さんというのは、いつからどうなったんですか。海部 河本さんというのは、付かず離れずのタイプですからね。にっこりとも笑わずに、「笑わん殿下」というから。つまらんことになるムスツと帰っちゃう。みんなで飯を食って、馬鹿話をしておつても、スツと帰っちゃう。

伊藤 でも一応は三木派なんですね。

海部 いちおう三木派に籍を置いておったし、三木派に来ておったそれは間違いありません。

伊藤 でもそういう序列の時には、どこにいるかわからないという感じなんですか。

海部 それは僕らが、いろいろなときに、先生どうぞこちらに来てというんだ。記念写真を写したり、名刺を刷ったり、結婚式の序列を決めるようなときには、松浦、井出、その他が済んだら、そこにすぐ河本さんが来ました。それは森山欽司が、最後はどうしてもこいうする「上に座らせろという仕草をする」から上に座らせたり、伊藤宗一郎が「応援に来てくれて、あの人はニコツともせず、俺の名前も言ってくれん」なんて不平ばかり言っておったから、前にやらせたり、そういうことはしました。

田中 先生の上にずいぶんいたんですね。

楠 河本さんの位置というのは微妙なんですね。

海部 だってそれはそうでしょう。僕の口からは言いにくい話だけれど、三木と田中角栄さんがあれだけ政治的にも思想的にも相容れない距離にあったのに、あの人「河本」は大事な時期に田中角栄さんと二人だけで会って、それをスッパ抜かれたんだ。軽井沢で写真まで撮られた。それは田中真紀子流に言うところ、誰かが新聞社に漏らしたんだ。漏らさなければ来るはずがないじゃないの、ということになるが、それは言わずもがなのことだな。

角さんの一連の話であって、河本さんが二人で会って話した。そしてしばらく経ってから、「素晴らしいタマがおるな。三木さんのところでは、河本君というのは惜しいタマだ。すごいやつがおる」ということを、大平さんと二人のところからリークを始めた。それで頭に来てガーンと三木さんが怒ったことはあったけれどね。僕らもまずいことがバレたんだな、と言ったら、「いや私から言ったんじゃないやしませんよ、私からは何も言いません。言っておりません、はい」なんて言うけれど、誰かがリークしなければ、そんな現場に来て写真まで撮られるなんていうことはない。それが大きく載ったから、なんだ、ということになったこともあった。

伊藤 どうもいまのお話を伺っていると、さっきから先生がおっしゃっている少尉だ、中尉だというのは、なんとなくそんな感じなんですね。

海部 ええ。河本さんもとりのあえずは、大佐か少将ぐらいには思っているし、松浦周太郎さんや井出さんは少将、中将ぐらいに思っておる。森山欽司は、まだ当時は少佐ぐらいのものだ。

伊藤 だいぶまだ上はあるんだな。

楠 まさに青年将校だったんですね。

海部 そうですよ。そういう気持ちでやって来たから、やって来られたんじゃないかという気もする。

伊藤 いや、五回当選で、いよいよ大臣かと――。

海部 そういうことは、僕は正直に言ってあまり自覚もなかったし、

まだまだそんなになったら面白くないから。

■三木副総理辞任から椎名裁定まで

伊藤 だんだん田中金脈の問題とかいろいろなことが出て来て、三木さんの表に向けて言っている政治姿勢、三木さんのイメージとはずいぶん違う形になってきましたね。

海部 田中さんはね。

伊藤 だからそれを批判して辞めるというのは、非常に自然だと思うんですが、その時に、いくらなんでもバルカン政治家と言われた三木さんですから、ただ辞めるということではない。後のことを考えている。

海部 それは福田さんと話をしたと言われるけれど、非常に重要な一つは、その前に保利茂さんと話しているんだ。保利茂さんと長時間話した。その頃、財界でも好きな人があるんだ。福田さんと仲がいい人だ。僕に「三木さんと会って話したいから、内緒で話ができるかどうか聞いてきてくれ」と言う。三木さんにその話を伝えると、「そんな人はよく知らんがな、わしは」と言っていて、その場では興味をあまり示さないんだけど、セットすると、「うん」ということで、行って話をしてくる。あの一連の行動については、慎重な三木さんだからいろいろなところから話を聞いて、情報を集めたんじゃないかと思えますね。

伊藤 そういう自分の行動を決めるときはもちろんご自分が決めるんでしょけれど、側近の人たちには相談なさるんでしょうね。先生ぐらいまでのところに相談ということはあまりないかもしれないですね。

海部 僕らにそういうことを相談されるときには、「飯食いに来い」といって、夜遅く夕飯を食べる。そういうときに、「どう思うかね、これは」と言う。ああ、これは相当思い詰めているんだな、

先生は、と考えたりね。

それから一回、「腰を抜かすようなことを言うけれど、今度の選挙、わしと一緒に無所属をつくってやれる人、わしが考えてみたら、これぐらいはできるけれどね」といって、三木さんがずっと調べて、新党をつくろうという。河野一郎さんの新党がポシャったでしょう。楠 それはすいぶん前ですね。

海部 だいぶ前の話だ。その頃にも、「これは政治が腐敗しておるから、きれいにしようと思ったら、思い切ったことをする。そしてやる時には、わしがやろうと思ったときは」と言っ、十数人派内の代議士をビックアップするわけだ。

伊藤 海部さんは入っていましたか。

海部 入っていた。

伊藤 それは嬉しそうな顔じゃないですか（笑い）。

海部 「腰を抜かすんじゃないか」と言われたことがあったな（笑い）。

楠 それは三木副総理辞任の話のちよつと前ぐらいですか。

伊藤 いや、だいぶ前の話でしょう。

海部 そのかなり前から、構想としてあたためておったんだ。「どうしてもここに許されないというものがあるときは、わしは行動する」と言っていた。

伊藤 三木さんが副総理を辞めて、椎名裁定で三木さんに来る過程で、やはり新党問題が出て来るんですね。だからその構想はだいぶ前からあった。僕が岸さんの話を聞いていたら、「三木というのはちよつと自民党とは違う」という言い方になるわけですね。

海部 それは椎名「悦三郎」さんも同じですね。独禁法なんかどうだと言いつつから、ちよつと違うということなんでしょう。

楠 三木さんは常に風呂敷に荷物をまとめて出ていくような準備をしていたわけですか。

伊藤 そうじゃないですか。だけど、出ていかないで、三角大福中で頑張っていれば――。

海部 そこで勝ると踏んだから、じゃあ勝とう、勝った方がいいと。

伊藤 この時の裁定は、椎名さんとしては、この段階で三木さんに出て行かれては大変だ。三木さんは新党、新党というから、ということですか。

海部 要するに、いま公明党が何を言ってもかきを言っても、無理を聞いているのは、この段階で出て行かれたら政権がもたないということとはみんな百もわかつているわけだ。毎日の暮らしの中で。同じようなことじゃないですかね。

伊藤 逆に今度は公明党だって、この次の選挙で自民党が過半数まで行くかどうかかわからない。保守党と組んだり、民主党の一部と組んだりして、袖にされたらえらいことですね。なんとなく見ていると、小泉さんは公明党はあまり好きじゃないみたいだし、向こうも危機感があるでしょう。

海部 公明には危機感があるだろうな。

伊藤 面白い政局になると思いますけれど。

佐道 先生はダブル選挙はあると思っておられますか。

海部 思っておりません。

伊藤 いや、総理じゃないから、本当のことをおっしゃってください（笑い）。

海部 本当に思っておりません。そこまで冒険ができますかね。元も子もなくなるということだから。

伊藤 やりかねない。

海部 小泉はそこまでやるかな。

伊藤 やったらすごいですね。

海部 選挙というものだけは、やろうと思ってもなかなかやれない要因が多いものだ。

楠 先生、ちよつと話が戻るんですが、さっき私が申し上げたように、三木さんは常に風呂敷をまとめて出ていくような準備をしていたということを考えますと、飛び出て干上がってしまうような

けですね。出ていったら、なんかなるような形を作っていけないとならないわけでしょう。そうしますと、野党の中でいくつかとは常に連携を取って、出ていったときにはそれなりに成算が立つようにする、ということをや常に行っていたということになるわけですか。

伊藤 この時は民社、公明でしょう。

海部 完全に否定するわけにはいかな、それは。

伊藤 このあいだからのお話の中に、公明党の話がたくさん出てきたでしょう。だから、僕はこれは、と思った。そっちの方の係もやっていたんじゃないかと思って伺っていたんですけれどね。

楠 青年将校が連絡将校もやっていたんですよね。

海部 民社は、春日一幸というより、むしろ佐々木良作の方が真剣だったな。受け皿としては。けれどそこまで具体的に、何月何日どうしようかというところまでは、まだまだ機は熟していなかったと思う。

楠 春日一幸さんは同じ愛知ですから、相当おつき合いがあったんじゃないですか。

海部 ある。あれはしょっちゅう向こうから寄ってきては、「そろそろ三木さんとしんみり話をしたいんだ。時局、まさに重大だ」とか言って、一所懸命口説いてきたな。

伊藤 そうやって三木さんが新党らしいものを、三木派と、他のいくつかの派閥にも働きかけたでしょうけれど、公明・民社と組んで新しい政権構想を持っているらしいようなことを、なんとなくあちこちから匂わせていた。それでも三木さんに来るとは、あのときの椎名裁定では、思っておられなかったんじゃないかと思いますが。

海部 椎名裁定は、直前になったらそれとなく匂ってきたわけです。それは新聞記者が中に入っている。しかも、それは椎名さんのごく側近ですからね。こちらが注意して、「これはくさいから気をつけた方がいいですよ、椎名のところにしよっちゅう出入りしているんですから」というようなことで、天下周知の事実の人だったんだけれど、その人の言った話は、本当に近い話だったんだね。

伊藤 そういう可能性があるな、とお考えだったわけですか。

海部 ちよūdō不思議なことに、あの頃国会討論会というと、三木派から出るときは私が出ていった。竹下さん、安倍さん、俺が国会討論会に行く。

伊藤 だいたいそういう顔ぶれになるんですか。

海部 そう。だって、ほかにおりやせんもの。そして、椎名裁定の出る前にも国会討論会をやった。そして、ひどいことを言われた。「海部さんは今日までしかしやべれんものだから、うんと言わしておいて、明日になるとまた場が変わる」なんていわれた。「そう言われてこっちは怒ったりしませんが。けれど吠え面かくのはそっちだ」というから」と言い合ったことを覚えておりますけれどね。

伊藤 それは、この次は三木さんになるだろうということを言ったんですか。

海部 それをちよつと言って、後から注意された、まだ早いと。けれども、そうなたちやつたからいいじゃないですか。それはまだ早いという。少なくとも前日にはそういう連絡がきておった。「椎名さん自身がそういうふうになったんだ」というお使いが来たわけだ。伊藤 三木派としては、どういうふうに受け取ったのかわかりませんが、ある種の青天の霹靂みたいなところはあったわけでしょう。

海部 はい。それからある種ホツとした人もだいたいぶおったな。安堵に胸を撫で下ろした人がおった。もしそういうことになる、選挙区事情などからいって、今度の選挙は厳しいぞ、厳しくなると落っこちるぞ、干されたらいかんという人もいた。三木さん自身は平気だけれど。

伊藤 三木さんは副総理を辞めて、引き金を引いた。そうすると、今度その次になった人に干されるといいう危険性があるということですね。

海部 それはあります。それは覚悟の上でみんなやっておると思いますよ。

伊藤 相当追いつめられているから、本当に窮鼠猫を嚙む可能性が

あるな、というふうには椎名さんの方も考えたわけでしょうね。

海部 考えたから、椎名さんの方で小人数の内輪の話を始めた。そうするとそこでは、当時は福田さんだけを呼んでおけばいいわけだ。それで最後に腹を決めてあの裁定だ。中曽根さんは呼んでおいたら、初めから目的は一つだから。

だからこのあいだうちの森総理づくりの五者会談のように、すぐバレるような浅いやり方だといかんのだな。あの頃はちよつと違っていると思うんですね。

伊藤 時間になりましたので、三木内閣の発足から次回ということで、お話の継続をお願いします。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 7 回

三木内閣時代 I (1974～1975)

【2001年7月2日（月） 15:30～17:30】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■現在の政局から（都議選・防衛省昇格問題）

伊藤 この間、現実の政治はあまり大きな変化はございませんね。
佐道 都議選がありましたね。

伊藤 都議選はありましたけれど、あれもとづくに過ぎたような感じですね。そういえば都議選では、保守党は「議席を」とれなかったんですか。

海部 「候補者を」立てなかったんです。

田中 推薦とか、そういうことだったんですか。

海部 みんな推薦です。与党三党の足腰を強くしようということで、推薦です。

伊藤 無所属の推薦もあったでしょう。

海部 ありました。特に頼まれた人の応援には行きましたが、さもない限りは――。

伊藤 ちよつと出番がないということですかね。

海部 別に出番をつくってもらったって、言うべきことはないでしょう。

伊藤 そう言ったら身も蓋もないじゃないですか。

海部 それで、明日みんなを集めて、街頭に立つときはきちんとやれという。実はおととい、みんなと一緒に福岡に行つて来たんですね。みんな空念仏をしゃべっているだけで、どいつもこいつも力が入らないので、「それでは駄目だ。君たちは軸足をどこに置くんか。国民の側に置いた方がいい、置くべきだ」と言った。いつも言っているんですが、「一刻も早く、民法違反をやっているような今の金利発想を、民法の違反にならないような金利発想にしない。5%の金利をつけていないのは法律違反である」と言ったんだ。

伊藤 法律に違反するんですか。

海部 法律違反ですよ。まあ強制力のある規定じゃないかもしれない

いな。民法の書き方だって、「5%を基準とする」と書いてあったかな。

伊藤 基準ですから、ゼロまで（笑い）。

田中 マイナスもあるかもしれません。

伊藤 マイナスということはないでしょう。

楠 5%なんて、夢のようですね。

海部 だって法律にそう書いてあるんだもの。このあいだ調べたら、そう書いてある。

伊藤 5%ついたら、いいですね。

海部 だから、みんな、「ちよつとこれはお待ちください」と言うけれど、「おじいさん、おばあさんの味方になって、孫におもちやも買つてやれんじやないか、という不満を真面目に受け止める政治家がおらんじやないか。だから保守党がそれを受け止めてやろう」と言っているんだけれどな。

伊藤 今度、防衛省昇格問題は保守党が提起しましたね。

楠 保守党から出しましたね。

海部 あれば、国のいろいろな意味で、いつもいつも言い訳しなければならぬような状況はやめて、世紀の変わり目だから、人並みに、宴会に行くときには背広を着ていく。それはそうですよ。運動着を着て出て来るのは間違いだ。運動着は運動会るときに着てきなさい、というようなつもりです。というのは、「防衛庁」長官には閣議の発議権がないんです。だから一人前に扱ってやらなければいかんじやないか。

伊藤 半人前なんですか。

楠 「防衛庁長官には閣議の発議権が」ないんですか。だけど、国務大臣を兼任しているわけですね。

田中 自分の庁じやないから。総理大臣ですよ。

楠 外局だから、ですか。

海部 そういう法律の難しい理屈は、法制局がどう捌いているか知らんけれど、とにかく防衛庁長官にはない。環境庁長官もなかった

んだけれど、このあいだの省庁再編で環境庁長官は環境省大臣に昇格したから、閣議請求権も、閣議質問権も出てきた。

伊藤 そうですね、保守党はなかなかいいことをやってくくださるなと思ひまして。

楠 ぜひお願いします。

海部 胸を張って仕事ができるようにしてあげるためには、人並みの格好をきちんとしていかなければ駄目だということだ。公明党が三党で出すのは待ってくれ、という。それで公明党の冬柴「鉄三」君に、「君は僕らにいつも外国人参政権のことをごちよごちよ言うけれど、こつちがあれで言うことを聞かなかったからといって、これまでそつちが足を引っ張ってはいかんから、あれはあれ、これはこれで片づけるよ」と言い続けておるんですが。

伊藤 まあ、成立はちよつと難しいでしょうね。

海部 難しいです。

楠 でもそのうち、そう遠くないうちに防衛省に昇格するんじゃないですか。

海部 しなければいかんわ。

楠 もう社民党も東京都から消えましたし。

伊藤 一からゼロになるというのは、何分の一になったのかな（笑い）。

田中 もともと一だから、ゼロに等しかったわけでしょう。

佐道 でも本当にゼロになったというのは象徴的ですね。

海部 しかし僕は参議院がよいと思うから、思い切ってやらせなければならんと思つたのは、例のオレンジ共済「友部達夫」が失脚したでしょう。あのオレンジ失脚の次の名簿に載っていたのが、海部内閣総理大臣秘書官。それであの時に当選させたわけだ。けれども、本気になって強引にやればもうちよつと上にランクできたろうけれど、あの時は僕が党首だったものですから、党首があまりほかの者を泣かせるのは具合悪いから遠慮してくださいと言われて遠慮していたものだから。「楠氏に向かつて」金石「清禪」って会っ

たことがあると思うよ。北海道の寺の坊さんで、清禪という名前を見てもありがたい名前だ。そしてわずか十四日間かな。一輪咲いても花は花だ。長い短いで決めるのではなくて、そこで何をやったかということが大事だから、それで質問をさせる。そしてその質問させる委員会には小泉純一郎も出してもらうから、総理と相対でやれといって、やりましたよ。時間が短かったのが残念だけれど。

田中 ちゃんと写真を撮って、選挙区に配れば――。

海部 それはやつとるよ（一同笑い）。

伊藤 言わずもがな、だった（笑い）。

楠 でも比例区だから――。

田中 いまは名前を書いてもらうから。

海部 しかも自分自身のことにつけて質問したんですね。「あなたは聖域なき改革をするとおっしゃるのだから、国会議員自身のことについても改革してください。だいたい比例区で当選した人が刑事被告人になって、刑務所の中に入つたまままで一日も国会に出てこなくて、それで国会議員としての扱いをしている今のあり方を改革しなければならんと思いませんか。これは政治不信を招く第一歩です」と、自分のことだから、そういう質問をせいと言つた。そして具体的なものを何か入れなければならんけれど、その入れ方を間違えたんだな。細かいことまでもうちよつと見ていなければいけなかった。

「一番で有罪を食つたら、その国会議員の議席は剥奪してもいいし、有権者もそれは怒らんでしよう」と言つたんだ。「きんちゃん、それは無茶だ」と言つたんだ。被告人というのは無罪の推定を受けるわけでしょう。無罪の推定を受けるんだから、そこで政治家の公人としての責任は、一私人に許されても、許されることがあるんだ、という角度で考えてどうですか。そういうと、小泉だから、それはそうだ、と言うに決まっています。そうしたら、そういうときは国会議員は率先して政治不信を取り除くために自分から辞すべきではないか、というふうにどんどん持っていけば、テレビを見て聞

いている国民もおるわけだから、頑張れという声援も起こるだろうけれど、正面からやっちゃうと、それは駄目なんだな。

■三木内閣の成立1（官房長官から副長官へ）

伊藤 さて、とうとう三木内閣までまいりましたので、今日はその三木内閣成立前後のお話から伺っていきたいと思います。三木さんが国会で「総理大臣に」選出される。その前に、先生は「官房」副長官、ということはだいたい決まっているわけですか。

海部 いや、決まっていなかった。あれ「官房副長官に決まったこと」とは、選出されてからです。三木さんがどう思っておったかは別であつて、間違えばあのか、おれは官房長官になるかもしれないと思つておつた時期もあつたんですな。「官邸に行つて、竹下「前官房長官」から主なことだけ引き継ぎをやつてこい」というようなこともあつたので。

伊藤 それは官房長官じゃないですか。

海部 それで僕は、「ああそうですか。それじゃあ副には西岡「武夫」を連れて行きますよ」と言つて、西岡を連れて官邸に行つたんです。そうしたら竹さんが「おお、接収部隊長、もう来たか。早いなあ。おれの任期はあとまだ三日間あるんだぞ」と言つていた。

伊藤 そうですか。じゃあその三日間は――。

海部 その三日間は、三木さんもそういう思いであつたことも間違いないと思う。今のはやりでいえば、あの時は「私は」明らかに降格人事に甘んじたわけですからね。

議院運営委員長というのは、常任委員長の中のトップでしょう。ですから生存者叙勲で、このあいだ勲一等の話をしました。が、議院運営委員長の一期は、国務大臣の〇・七五に該当するという計算を秘かにするわけです。他の委員長はたしか〇・五だった。予算委員長と議院運営委員長は〇・二五だけ増やして計算してくれるという

内規等もあつた。ところが、ああいうときの前には、いろいろなことがあるんです。

楠 前に、木村俊夫さんでしたか、官房長官をやつてから副官房長官になつた例がありますね。

海部 ありましたね。けれど非常にレア・ケースだな。

伊藤 じゃあ竹さんも、自分の引き継ぎだ、官房長官だとたぶん思つたんでしょうね。

海部 思つたし、あの人は抜け目がないから、「やつぱりな、そうなつたら俺が言うことも相当なもんだな」と言つておつたから。それは自薦、他薦がたくさんあつたでしょう。そしてもう一つは、三木内閣がもしスタートするとしたら、一番大変なところはなんであるかと言へば、椎名「悦三郎」さんとの関係ですからね。椎名副総裁とどうやつてうまく話を進めていくかということです。そこに焦点を置いて、三木さん自身もそういうことを十分事前に調査して、話をつけておいてくれ、ということですから。だから椎名派の山村新治郎に「お前も手伝え」と言つた。そうしたら「俺はあれだけだよしわかつた」といって、結局入つて来たわけです。

ですから何を片づける内閣かというと、やはりものすごい政治不信が起こつてしまつた。あの時はロッキードですね。それで、まかれておる政治不信の霧をどうやつて晴らしていくか。それから三木内閣ができれば、じきに選挙になることも間違いない。当時の新聞は、いよいよ第十五代將軍の時代に入ると書いた。これで終わりだという予告ですね。そんな厳しい状況があつたことも事実だと思ふんですが、いろいろなことじつと慎重に対応していかなければならない。

そしてその前に幕引きをやつておつた竹下さんに話を聞いた。こちらはみんな経験のない人ばかりだから。西岡も、竹下さんとはよくものを言える間柄になつていたから、僕と西岡で行つて、いろいろなこと、それこそ裏の話まで「ちよつと教えといてよ。いまここで、人に言えない話は、言うな」といつてくれれば言わんから」とい

って話を聞いた。「だいたいあなたは、どうやって野党工作をやってきたのか」というようなことだ。そうしたら「それはな、ちよつと授業料が高いな」と言うから、「授業料を払うから。また席を改めて西岡と俺で聞くから」と言っただ。そんな話までできるような雰囲気は昔からありました。選挙の応援にも行っておったし、青年局の仕事も一緒にやっておったから、比較的そういう話ははずけとできる間柄だった。

そこで三木さんはそう言っただんじようが、「まあ、あれではまだちよつと早過ぎる」という話が、こともあろうに椎名さんのほうから出て来た。それは三木さんにしても、そう言われてみればそうかもしれない、と思っておったんじよう。いろいろほかの派閥の親分で意地悪しそうながおるでじよう。当時はまだ福田さんも健在であるし、大平さんも健在である。中曾根さんはまだそんな大先生ではなかったけれど、中二階で影響力を持っていた人だから、そういうところと張り合っていくのには、もうちよつと、ということ椎名さんも感じたんでじようね。本当にどういうつもりだったかは知らんけれど。それで、一晚であつという間に変わったわけです。伊藤 降格ですか。

海部 ええ、降格。副だ。でもそんなことは一向に僕は気にしませんでしたね。それで朝早く電話がかかってきた。「なんですか」と言ったら、「ちよつと、こうこうこうだから」と言うから、「あなたが思った通りやってくださいよ、ここは大事なところだから」と言いました。そして最初に僕に言われたように、「十字架を背負ってこれから官邸に行くんだから、その気になっておれは行くから、頼むぞ」と言うから、「はい、どこにでもやってください」と言っただ。そういう気持ちがあつておった。あの人「三木氏」がやろうとしたことは、不幸にして初閣議の朝まで、僕は細かいことをあまり熟知しておりませんでした。例の政治資金規正法、独禁法をバーンと出す話だ。ごそごそと学者を集めて、ヨーロッパに行つてきてくれ、特にイギリスを調べてきてくれ、ドイツでは政治資金だけで

はなくて経営参加方式を調べてきてくれといつて、新しい国の枠組づくりの中には、それも入つていたと思うんですね。

伊藤 それは、これ以前の話ですか。

海部 以前の話です。だからずつといろいろなことを研究して、やりくりしておったんでじよう。そしてもう自分が総理大臣に指名を受けたとなつたときには、そういうことは一切終わつておった。

伊藤 組閣はどんなふうに行なわれたんですか。先生はそれにある程度は参画されたんですか。

海部 それは毎晩毎晩、三木さんの自宅に行つては、いろいろ相談したり走り使いをしておったわけですから。「困つたな、厚生大臣は誰がいいだろう」というので、「厚生大臣なんか心配しておらんでも、大蔵大臣や外務大臣はいいんですか」といっただら、「それはだいたいわしも考えておるわけだが」ということでしたな。厚生大臣をなんでそんなに考えたかといふと――。

楠 何か病気が問題だったんですか。

海部 新政策で太い柱を出そうと思つただんじよう、それについて理解をしておる厚生大臣はおるだろうかといふことになつて、「君らが国会活動を見ておつて、誰かそういう方面の問題に詳しい適格者はおらんか」というので、探したり走つたりしましたね。そのとき、一時期まで名前が挙がつていた候補は、小沢辰男君だったんだけれど、しかし結論として彼は環境庁長官になつたんだ。そして河野平さんも、三木さんの初めの原案では科学技術庁長官か何かで載つておつた。けれどもそれも、いろいろな方々の中で、消えちやつたな。

田中 先生自体、もう当選五回ですから、大臣という話はなかったんですか。

楠 官房長官、ということですね。

海部 ほかの話はなかった。それから、明らかに言われたわけではないけれど、接収部隊長で官邸に接収に行つたんだから、俺は西岡に悪いことをしたと思つてゐるんだ。あれはその気になつたけれど、

副長官になれなかったわけだから。

■副幹事長の経験（田中内閣末期）

伊藤 先生、この人『海部俊樹全人像』の著者・豊田行二氏の作った年譜を見ていると、三木内閣になる前に、自民党の副幹事長ということになっていますが、本当なんですか。

海部 それは、事情がおわかりにならないかもしれませんが、各派閥から一人ずつ副幹事長が出たんです。執行部を握っておる幹事長は、自分が日頃、朝晩顔を合わせて、情を通じておるといふ言い方が悪いが、気持ちを知っている副幹事長、おいと言えばサツと集まれる副幹事長を集めてものを言えば、それが全派閥に通じる。そういう意味で、僕は三木派の代表で出ていたんです。

伊藤 これは短い期間ですね。

田中 田中「角栄」が苦し紛れに改造したときですね。

海部 田中苦し紛れ改造の前後になると、やっぱり、やり方がやや無茶でしたな。そんなことだから、もうそろそろ三木さんにもうまい話があるという来るし、福田さんとも会って話を聞く。大平さんとも話す。中曽根さんが、ご注進、ご注進で来る。三木さんの家の奥の離れに案内していつて、二人が話をしているところをいろいろ聞いたりすると、やっぱり政局が来るな、と思いました。田中角栄さんがあれ以上やるわけには行かなかったですな。健康的な問題もあつたらうし。

伊藤 それでひと月足らずですが、副幹事長ということ、おやりになるわけですね。これは三木派の前任者は誰なんですか。

海部 坂本三十次か鯨岡兵輔ぐらいじゃなかったですか。

伊藤 だいたい副幹事長というのは、それぐらいのクラスの人になるんですか。

田中 閣僚前のクラスですか。

海部 閣僚前だ。だってあの頃、そのへんの人事はそう厳格な基準がないわけでした、だいたい官房副長官というの、当時の扱いは政務次官の右へならえですからね。だから当選二回から三回の人がみんな政務次官になるわけですから。それ以上になつてくると、みんな委員長にならなければいかんし、政調会の副会長の方が実際の力がつくし、選挙の時の票集めには役に立つ。ということ、希望するのならそちらを希望しますね。名より実というか、実を求める。

伊藤 そうですか。副幹事長はひと月足らずですが、いちおう三木派を代表して、党運営の中枢に行く、ということですね。

海部 副幹事長会議というのは、毎週一回あつて、幹事長がそれぞれの時の話をしては、各派で意向があつたら言ってくれという。

伊藤 それは田中内閣の末期で、本当に倒れる寸前ですから、副幹事長の会議でどんなことがあつたのかな、と思いますけれど。

海部 ちよつと僕も頭を整理しないと――。副幹事長の頃のことは切り抜きもあまりないからいけませんけれど、副幹事長時代にこれが一番と思うのは、あの頃確か幹事長は金丸「信」じゃなかったかな。

伊藤 「幹事長は」誰だったかな。

■三木内閣の成立2（組閣事情）

楠 そのときに、組閣の際に河野洋平さんが科技庁長官という話も上がったことですが、これは仮定の話になりますが、もし河野さんが入閣をしていたら、新自由クラブができたかどうかかわからないという話になりますね。

海部 それはできなかったですよ、入閣しちゃったら。

楠 三木内閣に入閣しちゃうわけですからね。新自由クラブというのは三木内閣の最後にできるわけですね。

伊藤 それは非常に複雑な関係ですね。

佐道 しかし、当時河野さんは何回生ぐらいですか。

海部 僕の一期下ではなかったですか。

佐道 四回生ぐらいですね。

海部 三木さんは、そういうことはやりたいと言っておった人ですよ。

楠 目玉商品として入れたかったんじゃないですか。

海部 だから、河野洋平と一緒にいろいろやりましようという、それはよかったんじゃないかな。あの頃、彼のほうがむしろ、今日的に言うと、小泉純一郎みたいなのがあったからね。街頭に出ていつて、とにかく突飛なことを言うんだ。

伊藤 先生、組閣というのは、総理と幹事長が中心になってやるんですか。

海部 いや、幹事長というより官房長官。むしろ官房長官になる前の官房長官ですね。

楠 官房長官予定者ですかね。

海部 結局、強いて言えば予定者だろうな。

伊藤 でもこの場合は、「海部先生が」予定者になっていたわけでしょう。

海部 それはこちらの周辺や、あの当時の新聞がそう書いてただけで、それが当然のことのように言っていましたからね。

楠 毎晩に三木邸に行かれて――。

海部 三木さんの家には、行っていましたからね。

伊藤 実際の組閣の過程では、先生ではなくて、井出「一太郎」さんが「官房長官に」なったわけですね。井出さんは組閣のプロセスに大きく関与したということですか。

楠 三木内閣の組閣参謀といわれるのは誰になるんですかね。

海部 松浦周太郎と井出さんだったろうな。けれども井出さんというのは、ああいうおとなしい性格の人だから。官房長官も、初日の討論会でいやになっちゃったから、おれに討論会は代われと言われたぐらいでしたから。あの人は切った張ったをやる政治家というよ

り、学者だね。けれどもそんなことは抜きにして、そういうことでやっていかなければならんことになって、三木さんが最後には、ここではないかな、と腹を決めて妥協したのが井出さんですからね。松浦周太郎でもなかった。

伊藤 それはほかの派閥との関係ですか。

海部 それは全くのあれだから、あまりしていないんですよ、井出さんは。ほかの派閥とは松浦周太郎の方がやっていたな。だから選挙になると、カバンを持って仲間のところを応援して歩いたのも松浦周太郎さんだったという思いがありますね。

伊藤 官房副長官というのは、人によってずいぶん重みが違う役職だと思いますが。

海部 そんな頃までは、官房副長官は盲腸だと言われたんですから。伊藤 そうですか。いま考えたら、官房副長官というのは大変な激職でしょう。

海部 いま考えればね。それから、相当な場面を担当することになるんですが、あの頃、われわれがなった頃は、まだ世の中も新聞も、副長官はそんな大きな扱いではなくて、やっぱり盲腸扱いだったな。田中 特に先生が就任されたときに、三木総理から、副長官として特にこういうことをやってくれとか言われたことはありませんか。さっきの椎名対策はどことがやったんですか。

海部 椎名対策は、椎名さんと呼ば出すためには山村新治郎がいいだろうと。山村新治郎というのは、僕も長い間青年活動でよく知っているし、あれは千葉県の子飼いだ。そこにもう一人、岩瀬さんという新聞記者で「椎名さんに」近い人がおって、その人たちといつてもよく話をしておったこともあります。

だから三木内閣ができる前から、それはやっておったこともあるので、それが議院運営委員会に出て行っている。山村も、あの頃は川島派といったかな、川島派を代表して山村が出て来ておった。そんな関係で、大きな枠で行くと派閥次元を離れて、政府与党の枠の中で仕事をしておったという気持ちだが、山村にも僕にもあった。む

しろどちらかというと、一時期の竹下さんもそうです。

伊藤 岩瀬さんというのは、千葉日報か何かの記者ですか。

海部 いや、千葉日報だったかどうか知りません。

伊藤 何か聞いたことがあるような名前だと思って。

海部 当時の新聞にもときどき名前が出て来たはずだ。それからもう一人、椎名さんのところに出て来ていたのは、岩瀬のほかに、藤田義郎、これは産経の記者だった。

■三木内閣の成立3（三木氏のブレーン）

田中 話は戻りますが、官房副長官になったとき、三木さんからこうしろと何か言われませんでしたか。こういう方面で活躍して欲しいとか。

伊藤 三木さんはだいたい、海部さんにどういう期待を持っていたんですか。

海部 何も期待していなかったんじゃないか（笑い）。

佐道 具体的な指示はあまりなかったんですか。

海部 あまりないな。それよりもむしろ夜行つては、おれが「国会の情勢はこれこれこうなっているから、あなたは椎名副総裁ともつと密に連絡して、お世辞の一つ二つ言いなさい」と言ったら、「わしゃ、そういうことは好かんがな」という。だからしょうがない、こつちが行つて、代わりにお世辞を言つてくるといつて、こういうことを考えていますからどうぞ、という。ただ政策だけはやっていかなないと、内閣が駄目になりますからね。

それで忘れもしませんが、初閣議に行く前に、「わしゃあ、今日思い切つたことを言うよ」という。あれが指示といえば指示だったんだ。結局、もう用意してあるんだ。しかも今から考えればまったく小泉以上だな。法律もつくつてあつて、党の手続きを全然経ていないのに、公職選挙法改正案と独禁法の改正案を――。

伊藤 それはもう法案の形になっているわけですか。

海部 なっているわけだ。いつのまにやったんですか、と聞いたなら、それはちゃんと学者のみなさんの中に、数名ずつ専門家があつたんだ。それでイギリスまで行ったり、どこに行ったりで、それもやつた。その頃、もうちよつとそちらの方の情報をとつて勉強していれば、誰の意見がどこでどうなつて、というぐらいはわかつたんだろうけれど。

伊藤 どういうブレーンがいたわけですか。

海部 今から思い出すと、ときどき顔を合わせたのは、最後に経済企画庁の次官までいった宮崎勇が、ちよいちよいご進講に現れておりましたね。あとまだあつたんだ。僕が夜ふらつと行くと、応接間でやっているから、「もういいですか、入つて」というと、「どうぞ」と言うから、入つて行くと、そういう人がおるわけだね。永井道雄さんもちよかなる加減がよく来て、座つておつた。だからみんなそういう政治改革の問題について、入れ知恵をしたりしていたんだ。世の中で一番大切なのは公正ということだ。公平じゃない、公正ということだ。それで公正な世の中を作るためには、まず独禁法から手着ける、わかりやすい、ということになる。それから政治改革は政治資金から片づけろ、これがわかりやすい。そういうことについて、来ていた学者はたくさんいた。

伊藤 佐藤誠三郎なんかもいたんじゃないですか。

海部 いや、あの人は中曽根さんの直系だもの。

伊藤 でも、三木さんのところにも出入りしていましたよ。

田中 大平さんのところにも行っていました。

伊藤 一時期は、「三木、三木」と言っていましたからね。

海部 そうですか。だって欣子さんとの関係で、三木さんの思想信条は合わなかったはずですよ。僕は、ああこれは欣子さんの入れ知恵だなと思つた。というのは、GNPの1%条項をどうするのかというのをいろいろ議論するでしょう。そうすると結局それは、あれがあるからいいんだという。またあれは守つていこうという。し

かも経済がだんだん大きくなっていけば、前年と同じ規模じゃないんだ、ということも三木さんは言っていた。ところがああいう一％という枠が駄目なんだ、あれはきちんと撤廃すべきなんだ、それが必要だというのが、中曽根さんの意見でした。当時はなんと言っても幹事長ですからね。幹事長のところがそういう意見だったら、それを説得してもらわなければならぬ。佐藤誠三郎さんはむしろそっちの方で、ああいうものは邪魔になるという説だったと思うよ。僕も何回か話し合ったけれど。

そんな頃、佐藤誠三郎さんについてきて、自民党の短い時間の街頭演説用の論文を作ったりテープを作ったりしますね。僕らはそのモデルの一人だけれど、これも入れてください、あれも入れてくださいという学者の意見や、内閣調査室から上がってくるいろいろな要望、メモを読んでもみると、佐藤誠三郎さんはちよつと三木さんとは違う、三十八度線をちよつと越えている。「一％枠なんていうのは早く撤廃したらいんです、また撤廃してもしなくても、それはそう変わらないんです」というような人だったと思うな。

■三木内閣の成立4（閣僚への自薦、他薦）

佐道 一％の話が出たので、組閣との関連なんです、最初に組閣名簿をお作りになったときに、稲葉「修」さんと坂田道太さんの前で、坂田さんが法務大臣になっていて、稲葉さんが防衛庁長官になっていった。それが実際は逆に決められたという経緯があったということなんです、それは実際にその通りですか。

海部 どこから漏れているか知らないけれど、その通りです。

佐道 なぜ、それではまずいということになって入れ替えたんですか。

海部 何かそういうことを三木さんの耳に入れてくる人がおるんだね。しかも、廊下の立ち話やひそひそ話には三木さんは動かされな

いけれど、夜訪ねてきてしゃべっていくんだ。「僕らにもわからん、そんな話があるかい」なんていう。それは裏を取ってこいという話かもしれないし、それが本当かどうかということを確認する意味かもしれないけれど、「稲葉君の防衛庁長官はいけないというんだよ」と言っていたな。

伊藤 それは派閥次元の話ですか。

海部 派閥次元の話ですよ。派閥次元と、今でいう、よくわかつている族議員次元の話です。これは防衛庁長官にしろ、これはいかにいう。もつといやな話は、これだけは絶対にしちゃいかん、といって足を引っ張りに来る。見るとみんな族議員だ。派閥の違う人が来てやっているからね。それは凄惨な権力闘争だ。自薦、他薦というのは本当にものすごい。

伊藤 いよいよ組閣という段階になって、自薦というののもずいぶんたくさん出て来るんですか。

海部 出て来ますよ。組閣の直前になって、またいろいろなことが漏れていくんですね。今度はあの人に来るらしい、あれだけは来てもらっちゃ困るとか。一番注文が多かったのは金丸さんだったな。あれは駄目だ、これは駄目だ、という。ほかの人は、いまだ存命中だから言いにくいけれど、「これを代えてもらわなくては。海部君、三木さんによく言っておいてくれ。協力できんぞ」という。

「どうして協力できんですか。おたくさん、そんな説得の仕方じゃ、三木さんますます頑なになっていきませんよ」というと、理由はそれなりにあるんだよね。それは国が駄目になるという話なら素直に聞いて動くけれど、郵政事業が駄目になるという角度の話も出る。郵政省挙げての議論だから、これだけは郵政大臣にしてはいかん、これだけは防衛庁長官にしてはいかんという。なぜかと思うと、それはあちらの企業との癒着とか、軍事産業との問題とか、いろいろなことが、その道はその道で集まっているんですね。だから、三木内閣の時は比較的大型の汚職とか疑獄というのは、ロッキードを除いてはあまりなかったと思うんですね。

伊藤 ロッキードはそのときに起こったわけではないから。
海部 前から、角さんの時からあったわけだから。

■三木内閣の成立5（閣僚候補と派閥の推薦）

楠 身辺調査みたいなことは、閣僚についてはやるんですか。

海部 やった、やった。

伊藤 誰がやるんですか。

楠 警察関係がやるんですか。

海部 それはちよつと言いくいけれどさ、警察ではないんだ。警察なんていったら、できものができるとか、禿があるとか、そんなことしかわかりやせん。（一同笑い）

田中 内調。

海部 それは専門家ですよ。内調の専門家。

伊藤 そうですか、内調の方が有能なわけですか。

海部 それはそうですよ。

楠 内調幹部は警察キャリアですからね。

佐道 どのぐらいの範囲まで調べるんですか。閣僚だけで、政務次官とかは関係ないんですか。

海部 関係ない。政務次官までやり出したら、政務次官は喜ぶだろうけれど、とてもではないが人が足らん、手が回らない。

佐道 内調も限られた陣容ですからね。

伊藤 中曽根さんは組閣についての発言権は相当あったんでしよう。海部 派閥の領袖というのは、組閣の前には必ず発言しますよ。しかも会議で発言するわけではありませんからね。

伊藤 三木さんとタイでやるわけですか。

海部 タイでやる。

伊藤 三木さんもちろん、各派閥の長とタイでやらなければしょうがないでしょう。でもそれを全部聞いていたら、閣僚が五十人ぐ

らいになりますからね。

海部 だいたいわかりますけれど、それは僕らは何も縛られる法的根拠はないけれど、守秘義務だけは持つておらんと、自分自身の信用に関わりますからね。そういう話を聞いたときは、それは言わない。

田中 新聞によく各派閥の組閣名簿が出ますね。あれは本当なんですか。あれが派閥のリーダーから総理に渡されるんですか。

海部 派閥から持つてくるんですよ。

田中 派閥名簿を、リーダーが渡すんですか。

海部 いや、本当に渡すのはそれこそ副幹事長クラス。信頼されておれば、その副幹事長が渡す。あるいは、密封して親展にしてお使いに持たせるとかね。おれは三木さんの時は、それはお取り次ぎをしたことがあるけれど、中を読んだことはない。ご機嫌がいいときは、読んで、「おいちよつと見ておけ、こんなものだ」と言つて三木さんが見せる。

伊藤 それはプライオリティがついているものですか。

海部 あまりつけない。一、二、三と三人名前が書いてあるとしても、順位はつけないで、右三名の中から、というようなものもあれば、必ず二重丸をつけて、今回はまずこれを、というものもある。

昔は大きい派閥は、三人なり四人の枠をそれぞれとれるものと思つてやつていましたからね。

伊藤 でもこのときは三木内閣ですから、どれぐらいの閣僚を自分の派閥でとれるかというのは、必ずしも予測できないでしょう。

海部 できません、それは。だつて気まぐれだから、民間人を取つてきたりね。おれも、「永井さんはいいですよ、とりなさい」と言

った。そんなときから西岡に言つて、「おい永井さんは今日どこにおる」といつて張り付けて、「おつたら、つかまえて電話くれ」とやつたりしました。永井さんは前から三木さんのところへもちよいちよいご進講に来ておった人ですから、これはうまく行くだろうと思つたな。

伊藤 でも文教族は文句なかったですね。

海部 幸い私も文教族でしたし、西岡武夫も委員会を押さえておった。その頃の文教は、学校の年次からいっても、われわれの下ですからね。藤波「孝生」にしても森「喜朗」にしても河野洋平にしても。西岡は、「はい、私が行ってきます」と言っ、西岡がみんなやってきてくれた。

■三木内閣の成立6（中曽根幹事長）

田中 三木内閣で思い出したんですが、総裁と幹事長を分離するのは、ここから始まったような気がするんですけどね。

海部 お金から始まったんです。要するに、総裁というのは忙しいから何もできないわけだ。日頃、人前におったり、いつも一個小隊の警察がついて歩いているから、間違っても、落ちとった金を拾ったというわけにはいかないわけだ（一同笑い）。そこに落ちていたから拾ってきたんだ、というわけにはいかんでしょう。だから、分身のような秘書やほうぼうがそういうことはやるんですが、結局、あの頃は政党交付金も何もない頃ですから、そういうことに頼らざるを得なかった。それに頼ってはいかんといって、政治改革の基本は、党の運営費の八割ぐらいは、党員・党友の拠出党費によって賄えるようにするのが理想だ。そういう理想を掲げて始めたんですね。それで党費というのは比較的安かった。高く取るとみんな「党に」入って来ないから。安い費用で党員を集めるにはどうしたらいいか。もうちょっと集まらないか。例えば会社の社長は金持ちだから、年に一百万の党友の費用は出るだろう。党員の費用は、当時はみっともなかったけれど、三百円とか五百円だな。そういうときに一百万の党友を一人つくるということは大変だった。だから総裁投票権も党友には与えますという制度が、だんだんその頃から考えられていったんじゃないですか。

田中 三木内閣の時は、中曽根さんが幹事長をやりますね。中曽根幹事長はいつ決まったんですか。

海部 あれは変な話ですが、むかし早川崇さんという政治家がおつて、あの人がイギリスの政党史をうんと勉強して、「総裁というものは党内で、誰が見てもこれがいいという適格者がおるはずだ。おのずからエボルブされる」と言っていたけれどね。要するにエボルブされるんだ、と。中曽根さんは、トップ会談をやったときに、上手に誘導したんだ。この人が幹事長にエボルブされるように。要するに「自分はみなさんと肩を並べて総理総裁になる器ではないという気もいくらかします。お世話になった方ばかりです。同じ選挙区でたたき合いをやってもらった方ばかりです。だからこの中のみなさんが、党の団結のために、今回は本当に大事な選挙を迎えなければならんから、これはと思う人が立ったらみんなが応援しなければならんから、そういう体制を作ることが自分が一番必要だと思う」ということを滔々とぶったわけだ。それで爺さまたちはコロッとまいったやつたんだ。

伊藤 じゃあ椎名さんが――。

海部 そう、椎名さんが、よろしいといい、まず一抜けたと、そんな雰囲気できたんだ。

伊藤 そうですか。それじゃあ初めから決まっている。

海部 初めからというよりも、会議が始まって、会議をやっているうちに中曽根さんがそういうことを言った。あの人はああいう人だから、熱っぽく話したので、「そういうことも必要だな、幹事長がしっかりするのも大事だ」ということになった。

伊藤 でも、三木さんと中曽根さんではだいぶ違いすぎるな、と思いますね。

田中 三木さんじゃなくても、中曽根幹事長だったということですか。

海部 三木さんじゃなくても、中曽根さんは中曽根幹事長にもっていくつもりです。

伊藤 中曽根さんはそうだろうと思いますが――。

田中 党の雰囲気としてそうだったんですか。

海部 そうです。というのは、あの人は改進黨の頃から三木さんの直系の部隊だったんだから。

伊藤 そういえば、そうですね（笑い）。

海部 そうでしょう。僕はまだ議員になる前から、三木派の朝食会は僕は常連メンバーみたいな形で出ていたものですから、おいおい、と言われるとすぐあれする。中曽根さんはまだ駆け出しで、青年将校と言われた頃だから。事務所も赤坂の木造の小さいところで、いまTBSに売っちゃった。いまのTBSのビルの下に、小さい三木事務所があったんです。中曽根さんはそこに来ておったんだ。だから中曽根さんと話すことは平気で、要するに、中曽根ヒトラーと言われるようになって、三木さんとのあいだは、むかし協同党をつくった同士として、一緒にやってきた人だ。早川崇だとか河本敏夫だとか松浦周太郎とか、そういう人々がいて、三木派を支えていたわけですからね。北海道の河口陽一とか、農業協同組合の親分みたいなのがいっぱいいました。吉川久衛とか、井出一太郎然りだな。三木派というのは農業部会か、と思うぐらい、そういうことに長けた、秀でた人がいました。そんな頃からの関係がありますからね。伊藤 こちら側から見ると、タカ派とハト派ですが、向こうから見ると違うんだな。

海部 全然違うんですよ。むしろタカ派とハト派で、これで合うかなとご心配なさるのなら、僕は玄人のみなさんはなんで気がつかなかったのかと思うけれど、三木と福田ですよ。対外的に言い続けてきたこと、体質、取り巻いている学者たち、タカ派とハト派もいいところですね。けれども、それは党風刷新という面からすると、ピタツと一緒にいる。党風刷新連盟になると福田を支え、田中を倒すわけでしょう。その頭の切り換えを見事なほどできるものだなあ、と見ておった。あの頃は非常にひたむきに考えていましたからね。福田先生というのは右寄りの先生だ、と。あの頃福田さんについて

ちよろちよろ歩いていた連中は、そうだね、その後不思議に続いてきたけれど、森もそうですよ。あれは福田さんの鞆持ちから始まったんだし、加藤六月だってそうでしょう。

■三木首相と民主主義

佐道 今のお話で、三木さんと福田さんとは違うんですが、前の池田・佐藤の時代ですと、日米安保体制と言いながら、アメリカの要求にこたえて防衛力を増強しなければいけないとか、自主防衛と言いながら、実際日本が力を持つていなかったということもあるんですが、日米安保協力を具体的にどう進めるとか、これはほとんど手を着けていない状況だったんですね。

ところが、三木さんの時代になって、坂田防衛庁長官になって、二人ともハト派の代表選手みたいな方のところ、坂田・シュレジンジャー会談以来、日米防衛協力小委員会とかができて、かなり具体的に日米協力の中身について踏み込んでいくという状況があるんですが、これはどういうことでしょうか。

海部 これも語れば長くなるかもしれないから短くしておきますが。

佐道 いや、ぜひ長く語って欲しいんですが。

海部 三木さんの深層心理に何があるかというと、僕は何回も聞いた話だが、彼が一番信頼しているのはアメリカの民主主義なんですよ。民主主義という言葉さえ使わない、おれにはデモクラシーだ、と言ったな。それは明治大学を卒業して、ただちに当時のお金で二千人もらって、世界一周の旅に出て、「私が真つ先に到着したのはアメリカだ」という。「アメリカには活力があった。一人ひとりの人間を大切にする。政治の原点はここであらねばならぬ」という話を、いろいろなところで僕は聞いた。

そしてその後、その旅行は世界一周の旅ですから、アメリカの日程が終わると、今度は大西洋を渡ってヨーロッパに入った。チャー

チルで有名なイギリスも見た。まだ第二次世界大戦の前ですから、ヒトラーのドイツも、ムッソリーニのイタリアも見た。「それぞれの国はそれなりに、幾多の刺激や影響を自分に与えた。けれども、帰ってきて私が留学をしようと思ったときに、躊躇なく選んだのは、最初に訪れたアメリカであった。あそこにはデモクラシーがあったんだ、みなさん」という話を演説会でやるわけだ。

僕はそれを何回も聞かされて、「アメリカのデモクラシーがいい、とおっしゃるが」、黒人問題なんかは僕の根本的な疑問ですからね、「みんな平等だと言ったら、そうなっちゃうんじゃないですか。信なくば立たずと言ったのは、まず信が必要だけれど、アメリカ人はみんなアメリカの政府を信用していますか」、当時は、こっちもちよつと先走っていかれておったものだから、「アメリカの建国の歴史というのは、そんなに誇れるものですか。もともと住んでおった原住民を武力で追っ払って、力で取ったんじゃないですか。侵略戦争のトップみたいなものじゃないですか」とか、生意気盛りだから言うわな。

伊藤 いや、ごもつともです。

海部 そうすると三木さんはおれを説得しようとするんです。ふつうなら馬鹿にして、こういうのを読んでこいとか、勉強してこい、と言うんだけれど、「そうは思わないかね、きみ、あれは結果としてそういうところをみんな抱えて、アメリカという国はできてきたんだ。人間を大事にしますよ、あの国は」という。そうかな、と思つて僕は素朴な疑問を言っていた。それでずいぶん言われたことがある。

楠 それはちよつと私には疑問が残るところがあるんですが、伊藤先生、三木さんは翼賛選挙の時に非推薦じゃなかったですよ。推薦ですよ（注・非推薦の誤り）。

伊藤 ええ、推薦ですよ。

海部 いやいや、推薦じゃないですよ。三木は推薦じゃない。非推薦。

楠 私はある論文で知ったんですが、GHQが三木さんには目をつけていたというのを読んだことがあるんですね。

海部 どういう角度から目をつけていたか知らんけれど、弁士氣をつける、というのをやられているんだからね。

楠 だから、深層心理が知りたいところなんですけれど。

海部 秋田大介というのがいるでしょう。あの秋田大助のお父さんは秋田清というんだ。この秋田清という人が、当時の徳島では大実力者だったんだ。それで推薦も公認ももらえなかったんだ。当時のGHQも軍も、三木は、これはいかん、変な思想にかぶれておるんじゃないかと思つた。「私のどこがかぶれておるでしょうかね」なんて言つたこともあつたよ。

楠 斎藤隆夫の除名の時に賛成したのかな、何か引かかるものが戦前期にあるんですけれどね。

海部 斎藤隆夫は、評価しているんですよ。

楠 斎藤隆夫が衆議院を除名になるときに賛成投票をしたのか――。

伊藤 反対、欠席の中には、三木さんは入っていないんだね。

楠 入っていないんですね。だからちよつと引かかるところがあるんですよ。

伊藤 それと、三木さんは商工委員で、椎名さんとそこで縁ができるわけです。だから当時の商工省と統制経済に、三木さんははまっているわけです。そこで椎名さんにかわいがられた。

海部 あれで一時はかわいがられた時期があつたんですか。

伊藤 そうです。そこに一つの縁があつて、椎名裁定の時に三木さんに行つたという説がたくさんあるんです。

海部 本人は、それは漏らさないわな。その話は初めて聞いた。

伊藤 間違ひなく商工委員だったはずですよ。あの当時、国会議員は各省庁の委員になっているんですけれど、三木さんは商工委員で、そのときの商工省のトップに椎名さんがいたわけですね。

楠 戦前に商工委員というのはありましたか。戦前は常任委員会制度ではないですよ。

伊藤 その常任委員会制度みたいなものをつくったんですね。

海部 三木さんは軍需参与官といわなかったですか。

伊藤 それはあったと思います。

海部 それをちよつとやったはずですよ。

伊藤 各省に、大蔵委員とか、文部委員とか、みんな作ったんです。

海部 ちよつと今の政務官を、もつと数を増やしたようなものです。

伊藤 それは委員なんですが、参与官と政務次官があつたんです。

■官房副長官時代1（初閣議と川島副長官）

伊藤 先生、先程初閣議の話がありましたね。閣議と副長官はどういう関係になるわけですか。

海部 そう言われるとまことに申し訳なかったんですが、私の生涯の二度にわたるルール違反なんです。発令されないうちから、副長官が副長官づらして入っていつて、副長官席に座っておつて、書類をあれしろとかこれしろと言つてゐるのは、ちよつと早過ぎるんです。本当は初閣議が終わるでしょう――。

田中 ああ、そうですね。まだ官房副長官になつていらつしやらなかったんだ。

海部 なつてないんだ。終わると閣僚どもは全部あつちに行つてくださいと連絡が来るんだね。それで上り下りする階段で写真撮影をするでしょう。あの時も一番上にあがつていつて写つてゐるわけだ。今だから言つてもいいだろう。証拠写真も人前に残しちゃつた。あれはいけなかった。

伊藤 じゃあ、副長官はいつ任命されるんですか。

海部 初閣議というのは、宮中で任命されて、夜帰つてきて、官邸で行なわれるわけです。その場で官房長官が、官房副長官には誰々と閣議で言う。閣議で報告されて決定されなければいけない。もちろん反対はないですけど、手続き的にそれまではいかんのじやな

いかな、厳密に言う。

伊藤 じゃあ、その初閣議の場にいらつしやつたわけですか。

海部 はい。これはあまり言つちやいけない話だよな。

伊藤 その副長官は、政務の副長官と事務の副長官がいるでしょう。事務の副長官も、政務の副長官も、閣議には陪席するわけですか。

海部 陪席します。

伊藤 それで閣議の記録を作るのは誰なんですか。

海部 メモを取るノートテイカーみたいな役は、事務の副長官がやる。

田中 当時は誰でしたか。

海部 川島広守。あれはいまセリーグのあれ「コミッシヨナー」をやっていますね。あれも、考えてみれば無茶だったんだよ。乗り込んでいつていろいろやつてね。官房長官になる井出先生も、閣議の取り扱いとか手続きとかよくわからないし、三木さんなんてなおわからんから、「おれは全く知らん」という。だからどうしたらいいか、誰を連れてくるんだと言つたら、竹下が「川島は在任期間があまり長くなかつた。あれはそういうことに長けたい人だから。それにあんたのこともえらい褒めとつたぜ」と言うんだ。「どうして」と聞いたたら、「学生運動をやつたり、東大事件の時に」という。彼は警察の警備局長だったから。それで「川島に留任を頼むと言つたら、留任して三木内閣を助けてくれますね」と聞いたたら、「それは言い方次第だね。総理が電話しちやあ駄目だ。総理はそういう軽いことをやらん方がいから、官房長官に電話をさせる、それで頼むとおつしやれば、たいていそう決まりますよ。なんなら、あんたが座つておつて電話をかけて呼び出して、官房長官に代わればいい」と、そこまで言う。後年気配りの人と言われたところがあつたな。

伊藤 授業料も高くついたかも知れませんが。

海部 それだから、川島副長官を残しておいたんです。そうしたら三木派の先輩連中から、「あんなのを置いておいたら、あれは田中

派の末期の官房副長官じゃないか。みんな知っているじゃないか」と言われたが、「知っているから好都合じゃないですか」と言って強引に置いておいた。三木さんに「いいでしょう」といったら、「ああいいよ」と言った。

伊藤 閣議は閣僚のほかには、事務方は副長官だけですか。

海部 総務副長官というのができたのがその頃だったな。総理府総務副長官というのがあって、高鳥「修」がそれまでやってあって、梶山「静六」をしたらどうかという話があった。そうしたら、田中派はちよつとやめてもらった方がいいぞ、福田派からとりなさい、ということになった。

楠 閣議には当然、事務方で法制局長官がいますね。法制局関係者が、あと一人か二人、はじめの方にいるんじゃないですか。

海部 いやいや、長官以外の法制局が座っているということはないですよ。だいたいこちらは、あとから加わったのかどうか、総務副長官が入るようになって、正副官房副長官の事務方と、政務の副長官。法制局長官もいますが、長官止まり。用があるときには、長官室の秘書官が連絡に入ってくる。

田中 閣議室の外の部屋がありますね。そこで控えているということはないですか。

海部 それは控えています。いつ何時何があってもいいように、法制局と重要法案を担っている担当職だな。

田中 それは事務次官ですか、局長ですか。

海部 まあ局長ですよ。事務次官はそんなところに来ない。

伊藤 やっぱり役所にいるんでしょう。

海部 役所におらなければ駄目だ。

伊藤 メモ書きであっても、閣議の記録はあるはずなんでしょうね。

海部 メモ書きですよ。

田中 情報公開で請求したら公開してくれるのかな。

海部 ノートテイカーという役目をやっておったと、僕は見ておるんですけれどね。

伊藤 後藤田「正晴」さんの話の時にその話が出てきたような気がするんですけどね。後藤田さんは、なんの時だったかな、副長官だったか、官房長官だったか、法制局長官にノートテイカーをやらせたとか。

海部 そういうことは後藤田さんが一番詳しいだろうな。

伊藤 本来おれがやらなきゃならんものを、おれは字が下手だし、とかいろいろ言って。

■官房副長官時代2（閣議と事務次官会議）

田中 閣議の司会は官房長官がやるんですか。

海部 官房長官です。

田中 総理は何もやらないわけですか。

海部 総理は何もやらない。

伊藤 じゃあ総理は何をするんですか。

海部 官房長官が発言を促したら、発言する。

楠 あまり議論する、ということはないそうですね。ひたすらはんこを捺しているだけ、あるいはサインをしているだけ。

海部 いやいや、はんこは許されないから。サインしなければならぬ。

楠 花押ですか。

海部 慣れた人はスツとできるが、新しい人や、二度目、三度目の人は、花押を書くのに時間がかかるんだ。

楠 あれは花押じゃないといけないんですか。

海部 花押が終わる頃には、だいたい重要案件の説明は終わっちゃっているんだ。だからあれは、花押を書きながら説明を聞いておつて、ちよつと待ってくださいとはなかなか言いにくいから、うまいこと反対を抑えるようなあれができてくるのかな、という気がしたことがあったくらいだ。しかしみんなが一步も退けない問題になっ

てくると、閣議で延々と激論をやる。いまの話だよ、宮澤「喜一」さんと坂田さんともう一人誰だったか、河本さんか、三人がこれはどうしても、臨時国会の開会詔書に閣僚が署名しなかったときなんか、内閣の命運をかけるかどうかのところですね。そういうことはありましたけれど、さもない限りはだいたい短い時間で終わりましたね。

伊藤 けっこういろいろな記録、いろいろな人の日記などを見てみると、閣議の時間というのは短いですね。

田中 二十分ぐらいですね。

海部 短いですよ。だいたいずっと読んで、「ご異議ないですか」「はい」。一番いかんのは、閣議の前の事務次官会議で全部やっちゃうことになっていきますから。事務次官会議がまた全会一致でなければいかんし、事務次官の一人が待ったをかけると、閣議そのものが飛ばされることもあるわけですから。だから閣僚自身が出て行って、省のことを責任を持って発言して、そこで決めるという場が閣議のほすだけども、そうなるということはなかなかなかったですね。

伊藤 でも事務次官会議の経験者でも、事務次官会議というのはもうすでに全部調整済みで上がって来るもので、そこで議論が起こるなんていうことはまずない、と言っていましたね。

海部 だから結局、無責任体制ですよ。みんな自分が責任を持って、事務次官が事務次官会議の最後の決定をするべきだから、ああだこうだと言うべきなのに言わない。それから、それまで大臣をみんなつんばい敷にしておいて、こういうことをぜひお願いしますなんて言われたことは、僕だって在任中に五、六回しかなかった。

伊藤 そんなものですかね。

田中 閣議のあと、必ず大臣は記者会見をやりますね。あの時のために用意しておかなければならないですね。

海部 それは、すでに当然、あらかじめ用意しておるわけですよ。

伊藤 閣議の前に、ですか。

海部 前に。だって、前日（まえび）に事務次官会議でやれば、だいたい言いそうな意見はそこで交わされるでしょう。それはやめておいてくださいよ、これは言わない、というのがだいたい決まる。そうすると、誰がこれに待ったをかける、誰がこれにこう言う、というようなことはだいたいダツと筋書きができるじゃないですか。例えば人事院勧告が出れば、人勤に対して、これは直ちに全額払うかどうかというところについては、「いまは懐具合でできません」という意見を大蔵大臣が言う、労働大臣が「それはやってくれ、やることによって守られるルールなんだ」とかなんとか言うようになってくる。そういう細かい役割まで、だいたい全部前日にできちゃうんじゃないですか。

伊藤 芝居じゃないですか（笑）。

海部 だからのはつきり言う、僕は世界がそうだと思うんですよ。サミットだってそうです。サミットに行く飛行機で、「これがご発言要領で、これが向こうから言ってくる合意メモで、共同発表はこれです」というから、「そんなこと、やる前から決まっているのかよ」といったら、「そうだ」という。

おれが途中で手を挙げて発言したらどうするかというと、閣議で面白半分に、面白半分じゃないけれど、「これはいかんから、これだけはやはり言わねばいかん」と思っていると、法制局長官が何かが出て来て、「あとでまたご説明にまいりますから、なにとぞここはひとつ。時間の関係もございますから」という。それはそうだな。若気の至りで、二、三回やってみたことはあつたけれど、衆寡敵せず。

佐道 若気の至りというのは、官房副長官時代ではなくて、次の文部大臣になられたことですか。

海部 そうですよ、閣議というもので。副長官はそんなことはできません。「You can go back」と言われる（一同笑）。それは文部大臣になって、知・徳・体と言うから、「知・徳・体じゃなくてよろしい、国民が願っているのは徳育優先だ。心から行こう、そう

思いませんか」なんて言ったって、「じゃあちよつとそれは後からご説明に上がりますから」と軽く撃退された。

■官房副長官時代3（閣僚懇談会）

田中 閣議のあとに、ときどき曜日を变えてですが、閣僚懇談会と
いうのがありますね。

伊藤 同じ日にやることもあるんですね。

田中 引き続いてやることもあるんですか。

海部 ありますよ。

田中 そこではけっこう自由闊達で――。

海部 自由闊達にやれます。時間もあまり気にしなくてもいい。

田中 そういうことは、三木内閣の時代にもあるのか、具体的にそれで政策化されていくような契機になることは多いんですか。

海部 それは政策化される契機になりますよ。

伊藤 ちよつとアドバルーンを上げるような感じなんですか。

海部 はい。それでやらなければならぬ問題点の交通整理というか、各省で特に意見のまとまらない話なんかは、どこにイニシアチブをとらせてやっていくか。その代わり、顔立てはどこでどうするか。その問題だけを分離したらどこにもついていくかとか、いろいろあるでしょう。そういう落としどころを探す。それが上手にやれる人は、調整能力のある実力者だということに、だんだんなついていくんだな。

伊藤 そういう過程で副長官というのは何か役割が出て来ませんか。
海部 出て来ますが、その場ではありませんので。副長官時代に一番僕が困ったのは、三木さんが閣議の冒頭に出したでしょう。あれが椎名さんの猛反発を食ったでしょう。椎名さんのところへ通ったり、椎名さんの話をとったり、いろいろして、山新を使ったりしてやりましたね。ところがそれではいかんから、もうちよつと正攻法

で、その懇談会の場で、これが軌道に乗るようにならんだろうかと
思つて、発言を頼みに行くわけです。懇談会だから、閣僚以外にも
学識経験者とか、党の幹部にも参加してもらうんですよ。

伊藤 懇談会になった場合は、それができるんですか。

海部 そう。あの頃は、田中六助という人が商工委員長をやつて、
終わったあとで政調会の商工担当副会長をやつておつたんですね。
それで六さんのところへもいつて、「これはどうも悪いから、これ
はひとつやつてください。やらにやあいかんし、今度一つ応援の発
言をしておいて」「これはおれもやらなきゃならんだろうと思つて
おるから、党のためにはそれはいいことだ」「そうしたら頼むよ」
と言つておいた。

そうしたら、これはしばらく凍結しておいてもらわなければいか
んけれど、山中貞則さんも、おれは三木さんの家に連れて行つたん
だ。それで「あなたが応援演説をしてくれんと、通りやせんよ」と
言つたら、「馬鹿野郎、お前らはそういうときばかり人を使いやが
つて、こんなもの」とさんざん言いながら、彼も「それは、本当に
総理が決めたんだから、やりやいいと言いなさいよ。反対しとるや
つはだいたいわかつている」ということだった。そういうときに、
懇談会には党側から政調会長にご出席願つております、あるいは特
別調査会会長においで願つております、といつて、発言を求めるわ
けだ。

伊藤 それで閣議が終わつたら、官房長官が記者会見ですね。その
席には副長官も同席しているんですか。

海部 僕は、「同席」したり、「同席」しなかったりしました。

■官房副長官時代4（議運での日々）

伊藤 閣議の日はそうでしょうけれど、ふつうは副長官はどこでど
ういうふうな勤務しているわけですか。

田中 首相官邸ですか。

海部 これがまたふつうの副長官とは違っておったと思うんですね。国会を円滑に運営するということの法規典例に決まっていらないような根回しをやらなきゃならんでしょう。ですから僕は、だいたい昼飯は、議院運営委員長室に行つて食べていましたね。前官礼遇で。長かったから。それで各党のあれはみんな、「やあ」「おい」で済む間柄で、一緒に何回も旅行した仲間がおつてくれる。そこで飯を食つておると、だいたい、ぎすぎすのごととした問題は、どこに問題点があつて、どこをどうしたらいいかわかる。それを持ち帰つて話す。確か金丸さんが国対委員長じゃなかったかな。あれが「わかつた、呑んじゃえ」と言うんだ。「呑んじゃえ」ということは「言うことを聞いちゃえ」ということなんだ。全部呑んじゃえという。

「全部呑んじゃえと言つたつて、これは党内大変ですよ」と言つたら、「まあええや、呑んじゃえ、それでほかをうまくやっていけばそれでいいんだろう」とまことにアバウトだったけれど。だから、そういうときは竹下さんや、田沢吉郎さんという人がいましたね。僕の前官の委員長経験者も理事として残りますからね。そういう人に、「こういうふうなつてゐるから、ちよつとアバウトスキーのおつさん、頼むよ」と言つてね。金丸さんのことだからね。

伊藤 アバウトスキーか(笑い)。

海部 アバウトじゃなければわからんのだよ。だから陰ではあだ名はアバウトスキーと言つておつた。「いや、いい、まだオーケーをとつてない」「それじゃあ行つてこい」といつて、手分けしてよく説得に行つたことがあつたですけれど。

伊藤 官房副長官の部屋というのは、官邸の中にあるんですか。

海部 官邸の中にあります。

伊藤 その席を暖めるということはありませんか。

海部 なかつた。あそこで席を暖めているようでは、うまくない。飯もそんなところで食べておつてはいかんから、各党の連中と、こういうふうにして「海部氏をインタビューしているようにテール

を囲んで」食べられますからね。まあ、出てけ、帰れとは言わないような仲になつていたので、仲良くずつとやつていた。それで、私にはいささか同情がありましたからね。「かわいそうにな、お前、副長官か、大事にしてやるぞ」というようなことで(笑い)。

伊藤 かわいがつてやるぞ、というのはちよつと危ないと思うけれど。

佐道 海部先生だから、そういう活動をしていたんですね。一般的な官房副長官がすべてそういうわけではない。

海部 そういうわけではない。そんなことをやつたら、それこそけじめがつかなくなります。公私混同ですから。

田中 行政権の立法権への侵害。

海部 だからあの頃は、こんなにひどくなかつたけれど、政治資金についてうるさいときだったから、議院運営委員長室の女の子に、「これはおれの飯代だからな、切れたらすぐに言つてくれよ」と言つて、一万円、一万円、と一週間が経つごとに渡すようにしていた。食べるものはみんなが注文して、各党の理事が、おれは今日、は天井、おれは寿司だ、おれはパンだ、勝手なことをぬかすけれど、こつちも何かそれに乗つかつて、一緒にもつてきてもらつて、そこで食べながら話をつてくるということになる。だからあの頃は、よく雑用をやりました。

伊藤 何か遊軍みたいな感じですね。

海部 まあそうですね。そして終わつてから官邸に行つてしゃべつてゐると、ほかの派閥のやつが隣で呼んでいる。何を話した、何が決まつたという。新聞もうるさい。だから三木さんの家に行つて、こういうふうだ、といつて出来事を報告する。

伊藤 官房長官に報告するのではなくて、三木さんに報告するんですね。

海部 申し訳なかつたけれど、時間がかかるから(一同笑い)。だつて日頃、一緒にやつて中のことを知つておいてくれればいいが、それでもないし。

伊藤 井出さんは、国対とか議連は全然、ですか。

海部 不向きな人です。それは自覚してらっしゃるからいいんだけど。だから、「えらいすまんけれど、こういうことはわしは不得手だから」という。討論会も一回出ただけですよ。特にスト権ストになって富塚「三夫」が相手になってからは、「ああいう手合いは駄目だ」と言ってるね。

■官房副長官時代5（井出一太郎官房長官）

佐道 井出官房長官は何をなさっていたんですか。

海部 三木さんのところへいったときでも、「海部（くわいふ）さんに頼むから、いいでしょう、それで。海部（くわいふ）の方がうまいことを言うから」という。

田中 官房副長官は定例の記者会見とか、そういうものはないんですか。

海部 定例の副長官会見というのはないんですが、代わってくれ、という連絡が来れば、代わりますしね。

伊藤 官房長官の代わりですね。

海部 はい。総理は定例会見がありませんから。「総理と語る」とか、ああいう番組だけでしよう。ですから、官房長官の会見が三木内閣の定例の会見ですね。そしてあれは昼と夕方があるんです。

田中 十一時と四時ですね。

海部 特に四時の会見の方は、「悪いけれど頼むよ」というメモが来ると、行かなければいけないわけです。

伊藤 それはどこでやるんですか。

海部 記者クラブ、記者のたまり場。

伊藤 官邸の、ですか。

海部 官邸にあります。

伊藤 官邸の記者というのは選りすぐりですか。そうじゃないでし

よう。

海部 選りすぐりではない。一年生、二年生の出て来たばかりの人がやるから、それとときどき問題が起こるんです。

楠 いわゆる首相番記者がやるわけですか。

海部 そうです。番記者です。

田中 新聞記者は地方から戻ってきたら、最初は総理番ですね。

海部 そうなんだ。会社が社旗のついた自動車だけは乗っていいというものだから、朝早くから夜遅くまで、さんざんな目に遭う。

伊藤 副長官も追いかけられるわけですね。

海部 そうですよ。副長番という。

田中 副長番というのがあるんですか。

佐道 海部先生からきたんじゃないですか。

海部 いや、それは知りません。

佐道 討論会に出たり、従来の副長官と違う活動をなさっておられたわけだから、それでこれは、ということ。

海部 与野党のあれで、僕のところに来ると、法案の見通しが一番つきやすいというので、来るんだろうと思ったな。本当はそれはおれも悪かったけれど、官房長官に全部報告して、メモ書きでもあげておいて、新聞記者はみんな官房長官のところまで聞いてこい、と言えるようにした方がよかったかもしれない、いまはちよっと反省も含めて思うけれど。

伊藤 まあ、そうはならなかったんでしょうね（笑い）。

海部 だって、夜の十二時、一時に電話したりすると、向こうも迷惑だろう。「もういいよ、それは全部任せておくから、あとでちよつとまた適当に川島あたりから聞くよ」なんていう。川島というのは事務の副長官。

田中 政務の情報は、事務に通じているわけですか。

海部 大事なことだけは、呼んで教えておきますけれどね。事務の副長官が何も知らないでは、各省の次官や局長の押さえが効かないから、「これはこうなる、この法律はいつ頃上がる」という。そ

うすると、「海部先生、そこまで言っちゃっていいんですか」と川島君が言うから、「いい、言っとけ」という。これは最悪の場合は強行採決だ。そこまで腹を決めたら、これを通る。そう言う、たいていそうなるものですね。無益な抵抗はするな、ということ。

■官房副長官時代6（議運理事兼国対委員長）

田中 先生は国会対策委員長みたいなことをやっていたわけですね。そうすると国対との関係はどういうふうになっているんですか。

海部 国対との関係は、私自身が議運の理事と国対副委員長を兼務して、委員長になるまでずっと両方二足の草鞋でやってきましたから、それは同じことです。

田中 じゃあ、ご後任の方とは非常にうまくいったということですか。

海部 いや、ご後任の方は、そういうことのできるのを選べばよかったけれど、選んでなかったからちよつとぎくしゃくしたけれど、それはしょうがない。総理大臣だってそうでしょう。直前の総理大臣なんかいろいろなことをよく知っているはずなのに、自分が新聞記者出身であるにかかわらず、そうであるから、ああいうふうにするから、駄目になるわけだ。それは人によりけりです。あまり後生大事に総理大臣のことしか目が行き届かない鯨岡兵輔君みたいな副長官がおれの後だけれど、僕のところ、鯨岡にもうちよつと話をしてくれるように言ってくれ」とか、社会党のあれなんか、「この法案通すんでしょね」というと、知らんなそれは、と言われる。言下に知らんと言われると、それっきりでどうしようもないからなんとかしてくれ」といってくる。

伊藤 副長官は、国会が開かれているあいだはほとんど議運のところなんですね。

海部 議運のところか、議運は十二時半か一時頃に終わりますから、

それで本会議が始まる。昼飯を食べるまでが議運で、昼飯を食べたら一回官邸に帰る。それから夕方また国会に来たら、今度は国対の部屋にでも顔を出して、その後変化あるかと言って、いろいろ聞いていくよりしようがありません。だいたいそんなふうでした。議運だけで国会の動きはだいたいわかりました。この法案は会期内に通るか通らないか、この法案は次まで引つ張った方がいいか悪いか。

伊藤 言ってみれば、国対の延長のような感じですね。

海部 そうです。

伊藤 じゃあやつぱり、副長官とはいっても、議運の委員長と国対の委員長を兼ねているような感じですね。

海部 当時は新聞にもよく、二足の草鞋と冷やかし記事を書かれましたね。そして二足の草鞋で、本来ならなれたはずの国務大臣——。（一同笑い）それは比較検討すると、同期生はみんな大臣になった。にもかかわらず、僕は議運の委員長とか、最後に双六の時には副長官でしょう。閣議を開くと偉そうな顔をして、座っている。日頃助けてやるのに、なんだと思う。名前を言うといかんが、同期生が二人も入っているんだ。けれども、そういったことは、花も嵐も踏み越えて（笑い）。

楠 まさに双六で、あるところから、ポーンと総理大臣に——。

伊藤 あとから飛ばばいいんですからね。飛び級だ（笑い）。そうすると議会が開かれていないときはまたちよつと違った行動様式ということになりますかね。

海部 議会が開かれていないときは、それこそ、あまり芳しからざることを計画して、中国問題研究会をやりますか、とかいう。というのは、どうせみんな暇ならば、夕飯食いに来いや、夕飯が済んだら、中国問題の研究をしよう。これだ「麻雀牌をかき混ぜる手振りをする」。それから好きな人もおるから、ゴルフにも行く。それじゃあ健康管理だといってゴルフに行く。休会中ですからね。楠 まだその頃はカラオケはなかったですね。

海部 カラオケはなかったんだ。カラオケは、座敷にちよつと機械を持ち込むのが「千代新」あたりで流行った頃で、ゴルフと麻雀だな。

■官房副長官時代7（官房長官代理）

伊藤 それで、昭和五十年の夏に日米首脳会談に出席する三木さんに随行して、アメリカに行かれます。それまで一緒にどこかに行かれるというようなことはなかったんですか。

海部 総理大臣としての三木さんと一緒に、副長官として私が随行したというのは、公にはそれが初めてです。それまでは徳島の後援会総会について行って前座をやったり、三木さんの家来を徳島の知事に出すから、「こいつは当選させなければならんから、海部さん頼むよ」と言われた。武市「恭信」という人でしたよ、背が高い。あれの応援の時には何回も何回も徳島に行きましたよ。けれど、海外に公の立場で行ったのは、そのときが初めてです。

それまでは官房副長官というのは、変な話ですが、何も決まっていなかったんですよ。例えば首脳会談の時は、官房副長官はその首脳会談に立ち会えるかどうか、何も決まっていなかったんです。むしろそれは、外務省あたりは嫌だったんだ。初めのとき、おれが行くといったら、外務省はびつくりして、官房長官のところに確認にいつてゐるんですよ。

伊藤 この、三木さんに随行するときですか。

海部 そう。どういう処遇をしたらよろしいんでしょうかと聞きに行ったらいいんだ。「だからそれは全部、わしが行ったと思つてやつてくれ、とわしは答えておいたがな」と井出さんは言っていた。本当は官房長官が行った方がいいんだけれどね。アメリカだって肩書きを見て、チーフ・キャピネット・セクレタリか、バイス・セクレタリか、これはちよつと考えますよ、と言つただけで、しか

しきちんとそれは対処してもらつたな。

田中 このときは官房長官は行かれなかったんですか。

海部 嫌いなんだよ、あの人は。

田中 嫌いか、そんな問題じゃないでしょう（笑い）。

海部 スポークスマンというんだ、嫌いなんだ、あの人は。新聞記者の根ほり葉ほりのやりとり、ニュアンスがちよつとでも違つと、ガクサ申し上げるやつが嫌いなんだな。

伊藤 新聞記者はみんなそうでしょう（笑い）。

海部 それを我慢してやるのが、官房長官の仕事じゃないですかと言いたいんだけど。

佐道 だつたら最初からご自分が——（笑い）。

伊藤 じゃあ海部先生は、官房副長官というよりは、官房長官代理みたいなものですね。

海部 そうでしょう。

田中 通常、官房長官と総理が懇談するようなことはよくありますでしょう。そういうときにも先生は出られていたんですか。

海部 はい。三木さんの家の夜の懇談のときに来いやという、みんな喜んで来る。官房長官が「それじゃあここは海部さんに任せておいて、我輩はちよつと失礼する」という。それが通つた人なんだ、あの人は。

伊藤 誰も不思議に思わない。

海部 そう。集まっている新聞記者たちも、それを認めておつたんです。だから、それはいいんですね。

■官房副長官時代8（夜の三木邸）

田中 夜の三木邸というのは、どんな方が常連として現れたんですか。三木総理、海部官房副長官、ほかにどんな方ですか。

海部 夜の懇談のときには、当時是一世代古い。だからおとこの

回で開会をやらされた筑紫にしても、いまだこかでやっている中村慶一郎、森田実、みんな若き日だ。昨日は宮崎吉政さんも来ておつたな。それから亡くなった若宮小太郎、あれはみんな仲間だったから。それで生き残りが朝日の天野さんと、毎日の太田さん。ああいう人たちはみんな来ておつた人だ。オオタさん幾つだ、と聞いたら八十六だという。それじゃあずいぶん長生きで頑張つてらっしゃると。

田中 そういう新聞記者がいる中で、海部さん、今度はこういうふうにしませうとか、そういうことをやっていたんですか。

海部 それは限度がある。そんな細かいことまでできないけれど。

楠 そういえば、三木さんは総理大臣の在任中は公邸にいたんですか。

海部 いましたよ。

楠 公邸に宿泊まりされていたんですか。じゃあその、夜のなんとかというの、公邸ですか、自宅ですか。

海部 南平台の自宅です。

楠 そこに戻ってやっていたんですね。

海部 それでなければ。あそこ「公邸」に呼んでやるということとはなかったですね。

楠 基本的には三木さんは、在任中は公邸に住まわれていたんですか。

海部 そうです。だから一回、どこのテレビだったか、日本全国ノーカーデイというのをつくったでしょう。通勤に車を使わない。そのテレビをやっていた。あれはNHKじゃなかったかな、「三木首相、今日は車に乗って国会に来たんですがね」なんてやっているんだ。だから、「ちよっと待ってくれ、官邸から国会まで三木首相が車に乗ってきたというが、何時何分で見えた証人が二人以上おるか。そんないい加減なことを言うな。直ちに取り消して、先程のニュースで言ったことは失礼しましたと訂正しなさい。しなければ許さんよ。あんな嘘を言っちゃいかん」と言った。率先してやって

いるんだから。これぐらいのところだから歩いてくださいよ、といつて歩かせたんだからね。みんなが見ているから。それをああいうことを言つてはいかん。公邸に住んでいたんですよ。

伊藤 私邸には週末とか、そういうときに行かれたんですね。

海部 週末に行きましたね。

楠 海部先生もあそこの公邸にお住まいだったんですね。

海部 はい。

楠 あまり住み心地がよくなさそうなところですね、あそこは。

海部 住み心地はよくないな。

楠 幽霊が出るとかいう話がありますね。

海部 二人の人がそう言つたね。羽田孜の奥さんと、森かな。森は「おれはあそこにあまり泊まらん。泊まったら幽霊が出る」と言うけれど、さすがに幽霊は出なかった。僕も二年以上泊まったからね。

■三木内閣の仕事（独禁法、政治資金規正法の提案）

伊藤 いままでのお話では、官邸にはあまりおられなかったという感じですね。

海部 はい。官邸というのは、週に何回か官邸でやる会議がありますから。最近のように、みんな他人の責任にしようと思つて学者を集めては、あれを出してくれ、これを出してくれといつて。これは小淵恵三の頃からの悪しき問題だと思ふけれど。

伊藤 何々諮問会議ですね。

海部 なんでもありの小淵さんだからね。「恵ちゃん、あまり作るなよ、そんなもの」と言つても、「いや、これでまだ七つ目だ」とかいふ。そういう発想もあるんだ。こっちは「七つもつくつて」と思うけれど、「七つ目だから、まだあと二つ、三ついいやな」というようなことをいう。それで全部そこに議論を頼んで、誰か彼かが

発言してまとめて、それを持つてくる。あれはおかしいもので、日本では「審議会を通った案です、それに従ってやっています」というと、大変なエクスキューズになるんだ。あるいは尊敬の念をこめて、そうかそれなれば、ということになる。だからあの審議会というのを、みんならに使うんだ。僕らも法律を通すために三木先生に、「独禁法の問題でも、選挙法の問題でも、きちんと学者を集めてやって、自分で法案をつくって出すんじゃないかと、その結論をそこに持つていくために、それはとっておかなければいけませんでしたな」と言った。そう思ったな。

伊藤 政治資金規正法は審議会をつくらず、ですか。

海部 そう。政治資金規正法も独禁法も審議会をつくらずに、初閣議の時に挨拶をして、「みなさんにも重責を担ってもらうことになったから、これで協力してもらいたい。ついてはちよつと異例のことかも知れませんが、私は思い暖め続けてきた二つの問題について今日は申し上げる」という。僕は三つ言うかと思つたから、二つになつた。一つはこれが後々厚生省の問題とからむんだ。政治資金規正法と独禁法。特に政治資金規正法のほうは、政治改革に直結する。政治改革のもとがこれだ。あの頃、それじゃそれは小選挙区なのかという議論も出たけれど、よく考えてみると、小選挙区というのは一番直近に身近にその人間を見ているものが投票できる。これが一番いいじゃないか。そうすると必ず、小選挙区というのは、少数切り捨てだとか、少数意見を尊重しないという批判がいっぱい出てくる。それは今日、私がここに用意したこれは「胸ポケットから法案を出す仕草」、といつて、少数切り捨てをなくすため、あの頃から並立制と言つたかどうかは別にして、比例代表を入れて、少数意見はそこで加味していくようになっておる。

楠 じゃあ、小選挙区制を提案したということですか。並立制であるにしても。

海部 そう。比例代表制を併せて加味してやっていけと。ただし一番言いたいののは、選挙にかかるお金で、こんな天文学的なお金にし

てしまったのではどうにもならない。そこで、これだけに絞らなければならぬ。一時期は総支出を全部書け、領収書を全部つけろと、いまの政治資金規正法みたいなものです。そして、千二百万か千三百万か、上限を決めて、それを超えたら直ちに失格、これは厳しい法案だった。

伊藤 それが最初に出した法案ですか。

海部 そうです。初閣議で。

田中 誰もついで行かないな。

伊藤 それで閣議で了承されたわけですか。

海部 了承されたから、手続きを始めちゃったんです。

楠 なんて選挙制度の話は消えちゃったんですか。結局、独禁法と政治資金規正法の二つになつてしまふんですね。

海部 それは当時自民党の選挙制度調査会会長は久野忠治さんという人で、田中角栄さんの直系の家来で、しかも田中角栄さんも小選挙区を言い続けた人だから、「ええだろう」というので、「角さんのところに行つて、ちゃんと話をつけてこいや」と久野さんに言つたら、「大変な火傷をした後だから、小選挙区のことだけはちよつと横へ（当世流行の言葉で言えば先送りだな）。そうしないと党内がもたない」「どっちが優先順位があるんだ」「それは政治資金だ」「じゃあまず資金だけにして、やっていったらどうだ」というようなやりとりがあつたことを覚えてる。

たしかあの頃は、小選挙区というのは、三木さん自身も木村「武雄」元帥のやつておつた政党政治研究会に行つて、ここへ手を着けなければ日本の政党政治はよくならないということを訴えながら、それだけではちよつと自信が持てなかつたのか、少数意見の問題については、比例区の制度で救済すると考えていた。そして結局、法制局の議も経なければ国会には出せないから、その二つの案を法制局へおろして、いろいろやつた結果、おやおやということになつて、独禁法の方が勢いを得て先行してきたわけだ。

それが、椎名さんがますます憤つた理由になつたわけだね。いっ

たい自民党保守政党というのは、これで終わっちゃうんじゃないか、というようになってきたわけだ。だからサミットに行く朝の新聞に、挙党協というのができた。椎名さんはずるいから、出て来たのは船田中さんだ。船田さんが総意を担って挙党協ができた。いまはこんなことを言っているけれど、びつくりしたのは、当時の大御所がみんな挙党協に入っちゃったわけだから、党内挙げて反対だということだ。各派から来ている副幹事長たちに、「どうなっているんだ、いったい」といろいろ聞いてみたんだけど、みんなの反対はひどかったな。それで山新を使いにしたたら、椎名さんのいった言葉は「わしは三木さんになってもらったけれど、家庭教師まで引き受けた覚えはない」ということだ。山村君は「俊ちゃん、まづいからおまえ、副総裁のところに行つて手をついて頼む、頼む、と言つて来いや。そうするとあのじいさん、コロツと変わるかもしれないぞ」という。そういう調子でやりとりがあつて、僕も行つたことを覚えています。

伊藤 そうなりましたか。

海部 ならないわ。

伊藤 いまちよつと副幹事長の話が出ましたが、先生の官房副長官と党の副幹事長との関係はどういうものなんですか。

海部 向こうは向こうで自分たちの方がえらいと思つているだろうし、こつちはこつちでそう威張るなということ、当選回数でいうとおれの方が多だろうというように思つておつたから、両方とも、どっちが上でもどっちが下でもまあいいや、ということできたと思います。ただ、各派と連絡をとつて、副幹事長会議でゴーサインが出ないと政務調査会へ行つてからも総務会に行つてからも、みんなぐじゃぐじゃになる。

結局このあいだの眞紀子節の失敗でモンゴルとの協定がお流れになつた。何も内容に文句はないのに。だからそういうようなことを考えると、党内の一致結束した協力も大事なんです。

伊藤 手続きですね。おれは知らなかった、というのは駄目なんで

すね。

海部 駄目なんです。

伊藤 でも三木さんがやったことは、そもそも最初の初閣議の時は誰も知らないわけですからね。

海部 あれは考えてみれば、無茶苦茶だな。

伊藤 無茶苦茶だからできた、ということもあるんでしょうけれどね。

田中 小泉さんもやらなかった（笑い）。

伊藤 それはそうだ（笑い）。ところで時間ですが、まだ三木内閣は発足したばかりですね。あと数回、三木内閣のお話をしていただきたいと思います。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 8 回

三木内閣時代Ⅱ（1975）

【2001年8月9日（木）14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

岩間 陽子（政策研究大学院大学助教授）

石原 直紀（政策研究大学院大学 COEオーラル政策研究プロジェクト事務局長）

〔記録、編集〕 丹羽 清隆

■独禁法と公職選挙法改正1（初閣議での提案）

伊藤 この前のお話で、初閣議の時に、「三木さんが」独禁法改正案と公職選挙法の改正案を、ちゃんと法案をつくって持ってこられたというのを伺いました。それは、提案なさったわけですね。

海部 結局、ポケットから出して、閣僚のところへみんなポンと出したわけです。だから、そういうやり方自体も――。

それまでの内閣の前例によれば、閣議に出すんですから、事前にね。この間もそこで議論になったんだけど、「これは事務次官会議が知らない資料です」と、こう来たんです。だから、「いや、事務次官なんか知らないくてもいいんだ。総理大臣と各省大臣がここで知っているんだから、いいんだ」という。僕もそのへんのところは何も知らない。

そうしたら、「いや、ここへ配る資料は事前に各省の意見をまとめなければならぬ」という。閣議の前には必ず事務次官会議があるわけだ。その事務次官会議というのに配られる資料というのは、その事務次官のところへ上がっていく前に、各省の中の文書課長とか局の筆頭課長とかそれぞれの担当が、司々でずっと調べ上げるわけです。そして合わないところは、各省間で連絡をしてすり合わせをするという仕事をやるわけです。その手続きも何もなしに、いきなり副長官ごときがポケットから案を出して、そしてそれをバツと各大臣に配っちゃった。

伊藤 それは三木さん自身が配ったんですか。

海部 それは配ったのはこっちさ。

伊藤 もちろんそうでしょうけれども、複数つくって持ってこられたのは、三木さんですか。

海部 もちろんそうですよ。三木さんの政策研究所でちゃんとつくったんです。僕らも、そんな法案になるようにタイプを打ったり、

製本したりする事務作業は面倒ですから、それは三木さんの、いまは私のなっているんですが、中央政策研究所というのが前からずっとあったんですが、そのスタッフがみんな協力してやったんだ。伊藤 それを持って来て、副長官の先生が――。副長官にまだ本当はなっていないけれど。

海部 初閣議の時に、「副長官の」予定者が配っちゃったわけだ。そうしたら、びっくりしたのは前からそこをやっている連中であるけれども、しかし別によくないことは書いてないですよ。世の中をよくしなければならぬ。政治が悪い。政治が悪いのはお金がかかるからだ。お金はどうしてかかるんだ」というようなことから反省を始めて、「公職選挙法から手を入れていかなければいけない」とうたっているわけですね。

最初の時に二つ一緒に出しちゃったものですからね。独禁法改正案のほうは、「ここを変えないと、世の中が不公正になる。著しく正義に反することが行なわれ過ぎておる。これを直していかなければ、政治は国民から信頼を取り戻すわけにいかなくなる」というのが、提案者の本当の気持ちだ。そんなことがあって配ったものだから、まあ最初の初閣議というのは、「ちよっと待ってくれ」というようなことになりましたね。

伊藤 やはり、「待ってくれ」になったんですか。

海部 「副長官、何を配っているんじや、君は」と普通の仲間たちが言うものですからね。仲間たちといっても、ちよっといまとは事情が違ってあの時は、私より年はずっと上だけれど当選同期で初めて入閣した大臣も、その初閣議には三人来ているわけです。そういった何も知らないものだから、初めて配られてびっくりしたような顔をして見ているけれども、「とにかくいちばん最初にこれをやるんだ」と言って、三木さんは退かなかったわけです。考えてみれば、それまでに私が立場、いわゆる根回しと称することを本当はやっておかねければならなかった。

伊藤 でもそこで出されて、どういうことになったわけですか。ち

よつと待て、ということになったんですか。

海部 「おい、なんだ。相談を受けていないじゃないか」という。だって相談もくそもない。ここが最初の相談の場だからね。「あなた方にいま相談しているんじゃないですか」と言った。そういう手順、手続きは、三木さんは得意としなかったんだ。詳しくなかった。それから僕らも、まさかそうなると思って準備したような軍団じゃない。

いわんや井出一太郎先生のごときは、短歌を詠むのが精一杯でね。「窮まらば まなこをつぶりて 谷底へ 飛んで果てんと 誓いてし仲」なんていう歌をつくってね。初閣議でそうやってガタガタもめてくると、そういうのをさらさらと書いて笑っている男だから。これはもう次元が違うんだよ。

■独禁法と公職選挙法改正2（法案）

楠 先生、三木さんが出された原案というのは、かなりかつちりした内容だったんですか。例えば衆議院の調査室などにある程度調べさせて書かせたようなものなんですか。あるいはそうでなくて――海部 内容的には、そういう意味からいくと、かつちりしたものでありますよ。かつちりした内容だと、僕らはアイ・ビリーブ・ザットだったけれど、手続きを経ていないから。それから調べさせる。この前の時に言わなかったかな。三木さんのところへ夜来ては勉強していた学者の皆さんが、何人かヨーロッパへもアメリカへも行っているわけだ。アメリカの選挙法というのは全く役に立たなかったけれども、ヨーロッパのものはいろいろな面で役立った。特にイギリスの一八八三年の腐敗墮落防止法という法律が一番役に立って、それが三木選挙改革の根本になっているわけです。

ただ、ぎこちない発想もあった。ある人の意見を取り入れてやっただんですが、小切手をつくる。候補者が、自分の立候補する選挙区

はここだといったら、有権者の数がわかるわね。そうすると、有権者が何人から何人のところは、法定費用の上限はいくら、ということとがわかるはずだから、それに達する小切手を持たせたらどうか。そして、あの時は大変あらつばいことを考えていましたから、全部経費は公営です。だから選挙は国費でやるわけです。ポスターを注文したら、その小切手で支払ってくる。印刷物をつくったら、その小切手で支払ってくる。そうすると、私は選挙でいくらお金を使いましたよということとは、小切手の控えてわかるわけだ。そうすると、あといくらしか使えないなという時に、もうこれ以上使つてはいかないということがわかるはずだ。そういうようなことさ。あらつばい話だ。それを詰めるというので、専門家はおらんかと言われた。

当時、三木派の中には農林省関係のOBはだいたいいて、詳しい人はあつたけれど、あまり選挙に詳しい人はいなかったんだ。けれどもまたま澁谷直蔵君という人が自治省の出身者で、選挙のこととか金の話になるとやたら詳しいわけだ。法律をつくったときに、自分がどうだった、こうだったという。当時、自治省の選挙担当官も局長も呼んで、来てもらった。名前も、調べればすぐ思い出します。それと澁谷直蔵君とに、それらのことをやってくれと命令を出した。もうひとつは、そういう小切手帳をつくって、公的な支払いだけはこれでやるんだ、ということが許されるものなのかどうか。それが許されるものならば、公営選挙になるわけです。

伊藤 それ以外にお金を使っちゃいけないということですね。

海部 それ以外は駄目ということですよ。僕らの時代になると、自動車まで公費、公営だったんです。宣伝車。その車はどこでいくらで借りてきたかということを出すと、その領収書かなにかで、全部選挙を通して払ったわけです。だから、そもそのスタートで三木さんのつくった選挙法の改正案の根本は、お金の「出」をきちんとしましように、ということでした。

それを初閣議の時にかけたものだから、「まだ聞いておらん」とか、「これはすり合わせができてない」とか、いろいろなことにな

った。ちようどあの頃、久野忠治という人が衆議院の選挙委員長だ。その久野忠治さんが官邸へ来て、僕を呼びだして、「海部さん、ああいふものを出すときは私に言ってください。私に言ってもらったから私が引き受けるが、私が全然知らない法案だから、引き受けようがない。委員会でもこの法案の審議は始めるわけにはいかない。本会議で当分つるしておく」という。

伊藤 でも、その三木さんが出したものは、議案として出たわけではないでしょう。

海部 三木さんは法律として出したかったんですが、それは許さんわけです。久野忠治さんは、ちよつと先走つて、そこで法案になったものとして「言つてきた」。党のほうの選挙委員長もやつておつたし。

党のほうには、たしか長谷川峻とか——。あのとき石田博英さんは、そんなことはあまり専門じゃなかったと思うのでほかの人だ、うん、倉石忠雄さんだ。倉石忠雄さんのほうが政策審議会の関係で、選挙関係は責任者であつた。とにかく初閣議に出したのが、それと「独禁法の」両方ですから、「もうちよつと練り直してこい」「手続きを踏んでこい」と言われた。

伊藤 その閣議では。そういうことになつたんですね。

海部 そうそう。だから先送りになつちやつたわけだ。

■独禁法と公職選挙法改正3（根回し）

海部 さあ、それからいろいろ苦勞が始まつた。そして法律を通すためには、誰かこちらの味方をつくらなければならぬ。

伊藤 通すものにも、法案をちゃんとつくらなければ。

海部 法案の骨子はつくつてあるわけですからね。ただ、それは三木武夫事務所と三木武夫の腹の中でできただけであつて、ほかの人は横を向いて知らん顔をしていますから、手続きを踏まなければい

けない。だから党内の手続きをいつたん踏んで出せるようにしなければならぬ。

選挙法のほうはみんなが考えるけれども、独禁法のほうは考えないどころか、椎名さんという副総裁が頭から反対に回つた。あのじいさんも気が短かつたな。「もうやめにやいかん、こんな法律は」といつて、もう初めから審議も何もしないで、これは駄目だと決めるわけです。副総裁にそんなことを言われたらね。「総裁が出して、手続きを踏んどらんと言われて、これから手続きを踏もうという時に、あんたが駄目だと言つたんじゃあ、めちやくちゃじゃないですか」ということで、山村新治郎というよど号の、いまは亡くなつた男を呼んだんです。彼は当時われわれの仲間で、一緒に働いていましたからね。働いていましたといつても、理解が十分じゃないだらうな。国会の中の議院運営委員会というステアリング・コミティの中に派閥を代表して出てくるんです。けれども派閥代表というような肩書きはないから、理事というだけですけれどもね。あの理事会を通せば、各派閥に全部通るわけです。各派閥全部に通つた、ということに扱い上なるわけです。

それで山村新治郎を呼んで、「どうしたら椎名副総裁が理解をしてゴースインを出すか、おまえ決めてこい」と言つたんです。そうしたら、「俊ちゃん、おれは駄目だ。うちのじいさんもわからないから。それよりも、この人の話を聞いたら、うんそうか、わかつたというのが、商工委員会の理事で田中六助というのがいるから、田中六助をやつつけちゃえ。六助をやつつけば、うちのじいさんもウンと言う」という。別にじいさんがウンと言わないでも、正式の政務調査会で審議委員会が通れば、それで党の方はいいわけですけども、そうしておけば、そつがないという。

それでわれわれは副総裁のところへも正式に頭を下げにいき、ご説明はできないから、田中六助さんと呼んだ。そうしたら六助さんも慌てちゃつて、「海部さん、わしは初めからこの法律をつくる時に相談を受けてないんだよ」と言つたんだ。商工委員会にかける前

に。それじゃあ、いっぺん説明させるから来いやと言った。

そんなころは新聞も材料がないから、何をやっても叩かれるわけです。こういう不都合があったから、こういうことになったとかね。そこで六助さんを裏口から入れて、夜こそつと会わせたわけだ。三木さんの家は知っているかな。

伊藤 私邸のほうですか。

海部 南平台の私邸です。けれども私邸の玄関にはボックスがあつて、番記者がおつて、いろいろある。娘婿の高橋亘という医者がいるでしょう、紀世子の旦那です。それが地続きで、そちらの裏口から入ると、表口からは何も気づかれずに、靴を脱いで持つて歩けば入って来られる。そして母屋の応接間まで入れてベルを鳴らせば、三木さんが出てくる。そうすれば誰にもバレずに会えますから、そうやって六助さんには因果を含めてそこへ来てもらった。

田中六さんと三木さんの話は、三木さんが田中六助に「どうなんだ、きみ」といって話が一段落した時に「こういうことをやらなきゃならんと思わないかね、君は」といったら、六さんは「思う」と言つたな。「思うなら、君、いいことだよ、やってくれよ。一肌も二肌も脱いでやってくれよ。頼むよ」と言つた。まあ昔も今も、人の口説き方というのはあまり変わらないと思つたけれども、いきなり手を握つちやつて、頼む、頼むという。

伊藤 やつぱり膝をさすつたのかな(笑い)。

海部 そう、やられたんだよ、スキんシップを。

伊藤 じゃあ、例えば公職選挙法だと自治省関係ですよ。やつぱり役所も了解しなければいかん、ということになるんですか。

海部 役所は、当時の選挙局長は比較的進んだ頭を持つておつたんですよ。要するに「政治とお金の関係を、わかりやすくきれいにすることだ」と言つたな。

楠 いまの話は独禁法の話ではないんですか。

伊藤 独禁法の話ですけども、ちよつといま戻したんです。

海部 独禁法と選挙法が一緒になって、三木内閣のスタートの日か

ら混乱して大変だったの。

伊藤 選挙法のほうは自治省でしょう。独禁法のほうは通産省でしょう。そうするとそれぞれの役所で、また最初からやるわけですか。

海部 そうですよ。そして党のほうには、政調会の中にそれぞれ、それを司る委員会、部会というのがありますから、そこを通して来るわけです。最後は政務調査会を通じて、総務会を通じて、そして初めて議院運営委員会に回つてきて、われわれが各党と、これを何回目に本会議に乗つけるとか、順番はどちらが先かとか、いついつの委員会では決めるのかというような作業をするんですね。ところが閣議の日にはいきなり出しちゃったから、いろいろところで混乱が起つたということです。

けれども、よく話を聞いて整理してみたら、それぞれの司々で役に立つてもらう人々が納得してくれる内容だったし、「いまここでこれをやっておかないと、日本はこれから先、ヨーロッパやアメリカにあまり口がきけなくなる」と言つたな。「裏で腹芸をやつて、おおかたわかつたか、わかつた、とやっている。それじゃあいけない。こういうこういう理由だから、この法律をつくるんだ、というようなことまで明らかにしよう」といって、確かにあのころとしては相当斬新な進んだ内容の法案でありました。

伊藤 三木さんの原案と現実に議会に出てきた法案とは、だいぶ違つたものになつたわけですか。

海部 どこか一点か二点は修正を受けたと思います。

伊藤 そんなものですか。じゃあ、やはり総理大臣が言つたということの重みというのは大きいわけですね。

海部 やると言つたから。

■独禁法と公職選挙法改正4(難航した独禁法改正)

佐道 独禁法のほうもそうなんですか。

海部 いや独禁法のほうは、椎名さんがあれだけ根性を込めて反対に回ったものですから、一時は通らないかもしれないと思っただけです。前の段階でつぶされちゃうと思った。

佐道 法案になる前の段階ですね。

海部 はい。党の段階でそういう危機はあったけれども、それは田中六助さんという人が高い次元にたつて必死になって協力したし、山村新治郎もいろいろ協力した。あのころ三原朝雄さんという九州から出ていたおじいさんがいたよな。あのおじいさんも一所懸命やつてくれて、結局椎名副総裁のほうも――。

結局、それをやめさせろといっていたのは椎名副総裁じゃないんだよ。あとから浮き彫りのようにしてくると、あれこれという財界の名前が出てくるわけよね。

佐道 中曽根幹事長も、無理じゃないか、という話をしますね。

海部 あの人は風見鶏だから、風の吹き方を見たら、これだけ反対するものは無理だ、というね。

佐道 中曽根さんは、その二法案が出て来た最初の段階からそういう感じなんですか。党内のまとめ役にならなければいけない。

海部 いやいや、あの人は勇ましい人だから、選挙法みたいなものはどんどんやったらよろしいと考えている。

伊藤 独禁法は、必ずしもそうではないということですか。

海部 独禁法の方は、族議員に裏から注射を打たれたか、ご進講されたかで、初めからあまり勢いがいいほうではなかったから、田中六助が一番苦労したんじゃないですか。

楠 独禁法は参議院の自民党の反対にあつて、審議未了、廃案になったということになっていますね。

伊藤 一度、廃案になったんじゃないですか。

海部 最初の時でしょう。

伊藤 だからこれは相当難航したわけですよ。

海部 はい。独禁法は難航しました。そして、あれは可否同数で、河野謙三さんが議長裁定で決めてくれた法律だ。独禁法だったかな。

佐道 それは選挙法の方です。

海部 選挙法だったかな。何かそれぐらい、参議院では賛成派と反対派が拮抗しておったんですよ。

伊藤 選挙法の方が議員さんには直接に関わりがあるわけですよ。だから、それがもめるのはわかるんですけれども、独禁法の方は、議員さん個人として考えてみたら、どっちでもいい、ということではないでしょうけれど――。

海部 裏が反対だったんじゃないですか。裏といったら悪いな。財界ですね。そんなことを詳しく書いてあった新聞の切り抜きがあつたんだけれども「新聞切り抜き帳を括る」。

伊藤 毎日のように新聞を切り抜いていたんですか。

海部 そうです。あとになって困るというか。「切り抜き帳を見ながら」これはもうロッキードになっているな。

伊藤 やはり選挙法の方は、いずれにしても官房副長官である先生は、かなり駆け回ったということですか。

海部 駆け回りました、それは。

伊藤 この前お話しのように、官邸にあまりいないで、議会の中で頑張ったというのは、この話ですか。

海部 これだけじゃない。

伊藤 もちろんこれだけじゃないでしょうけれども。

海部 だから、総理大臣官邸の副長官室なんというところで昼飯を食べたなんていうことはあまりない。私が院内の議院運営委員会とか国会対策委員長室にいますと、各党のいろいろな文句がある人や、それぞれの人々が来る。そこで昼飯を食べながら、やいやいといつて話しておると、いろいろ潤滑油的な役が果たされるようになる。ドアを叩いて頭を下げて入って来て、名刺を出して物を言っていたのでは、とてもあんな根回しはできるものじゃありませんからね。

伊藤 みんながいるところにいた方がいいわけですね。

海部 はい。いるところにいて――。

佐道 ある本によると、独禁法のことでは、田中六助さんだけな

くて山中貞則さんも動いたということですが。

海部 ああ、山中貞則さんにもいろいろお世話になりました。

佐道 それは、じかに三木さんが口説いて、ということなんですか。

海部 結局三木さんが直接口説く場面も最後にはつくりましたよ。

それは山中貞則さんクラスの人になったら、「六助ごときの知恵でできると思ったら、海部君、君は青いよ、まだ」と言われた（一同笑い）。「そうだと思うから、お願いに来ているんじゃないですか」と言ったけれど。

佐道 山中貞則さんという人は何か独特のポジションというか、よくわからないですけども。

海部 一匹狼ですよ。それで、なるべく大勢の人がおるところで平身低頭してものを頼んでおくと、忘れずに覚えておってくれる人なんだ。

伊藤 それはいい方だ（笑い）。

海部 それも人の特性だな。

伊藤 そうですか、一対一で頭を下げるのとは違うんですね。

■独禁法と公職選挙法改正5（参議院と党議拘束）

楠 たしか独禁法の時、私の父「楠正俊」は参議院の商工委員長だったと思いますけれども、反対した口だったかな。先生はご記憶ないですか。

海部 僕は君のお父さんのことはいろいろ記憶しているんだけど、それだけは記憶していないな。独禁法賛成か、反対か。

楠 私の記憶違いかもしれませんが。

海部 参議院というのは、気をつけてものを言わなければいけないけれども、まず衆議院さえ通れば、参議院は放っておいたって一ヶ月経てば成立するんだよな。まあ、そのぐらいしておこう。ここであまりそういうことは――。

楠 一回、参議院の抵抗でつぶれた経緯があるから、それでちよつと伺ったんです。

佐道 いまの、衆議院は通過して、参議院でつぶされちゃったというの、参議院の根回しが――。

海部 足りなかったということです。

佐道 衆議院に集中していたわけですね。

海部 はい。要するに参議院を軽視、するわけではないけれども。

伊藤 まあ、結果としてそうなったんですね。

海部 六法全書を読んでも何を読んでも、衆議院で通った法律を参議院が賛否の意志を明らかにしないで六十日か、経てば、衆議院の議決通りに決まるんだという、きわめて衆議院にとっては都合のいい法律もあつたんだから、まあ参議院は、という気持ちはどうしてもあるわけよ。

伊藤 じゃあ、参議院で採決しなければいいわけだ（笑い）。

佐道 参議院は何のためにあるのかということになるじゃないですか（笑い）。野党は賛成したわけですね。それで自民党が反対している。どこが与党か、という話になるわけですね。

海部 結局そういうことですね。

伊藤 党議で縛れないんですね。

海部 党議で縛ったって、あの頃は平気で出て行っちゃう人もおるしさ。まず、あの山中貞則なんているのは、党議で縛るなんていうと、「縛れるものなら縛ってみる」なんて言う。「自分たちがそういう間違つた法律をつくっておいて、なんだ」というようなことになる。この問題ではありませんよ。ほかの問題の時に、そうやって力み出すぐらいの人だから。

伊藤 そうですか。よほど体制が固まっていないと、党議拘束もあり効果がないということですね。

海部 それはそうじゃないですか。例えば、最近でも党議で拘束をしたら駄目になるから党議拘束を外すというと、必ず赤っ恥をかきましたね、どっちかが。臓器移植法案の時なんかは、人間性の尊厳

に触れる基本的な問題だから、投票の自由はこういうものにこそ与えるべきだといって、党議拘束を大々的に外しましたね。そして、さあどうするかといったら、結局みんな「困ったな、党で決めてくれたほうがいい」なんていう（一同笑い）。言っちゃ悪いけれど、厚生省のそういう法律関係で一番の、同時まではボスであったあの橋本龍太郎が投票に行かなかったんだからね。「おまえどうしたんだ」と言ったら、悩んじゃって、「こんな基本的な難しい問題は——」と言っている。

日の丸、国歌国旗法案を党議拘束にしなければなら、民主党は一票違いで、四十九対五十だったかで、百人ちよつとの党が真つ二つに割れた。

伊藤 そういうふうになったら拘束できないでしょう。

海部 できません。また党議で拘束しても、半分従わなかったら、半分除名するわけにいかないしね。一割、二割が従わないというなら、これは処置しやすいだろうけれど。

伊藤 それでも与党の数がぎりぎりという場合は、なかなか除名はできないですね。

海部 そう。そのまた一人、二人が大事になってくるから、毎晩毎晩攻勢をかけられて、忙しい、忙しいと言いながら、結構楽しんでいたりやつも多い（一同笑い）。だから、あのころの議院運営委員会の雰囲気は非常に異様だったと思いますね。まあ、脱線はそのぐらいいにしましょう。

■佐藤栄作元総理の国民葬（一九七五年六月）

伊藤 いまの二つの法案の問題はちよつと後回しにして、またいずれ伺うと思いますが、ちようど三木内閣が発足した直後に、佐藤「栄作」さんがノーベル賞をもらって、その翌年に亡くなりますね。海部 よく覚えています。あのころ佐藤さんというのは、頭の毛を

伸ばしてね。そしてノーベル賞をもらう時には、ノーベル賞というのはもうちよつと頭の中の詰まっていたいい人がもらうものだと思つたら、ルックス・ライクだけかというような冗談話が国会の中にずいぶんあつたわけですね。そんなことをいうと、いまの小泉さんもルックス・ライク・ライオンだなんて言われてね。あのころ、本当に佐藤さんはそうだったんです。けれどもわれわれが聞かされておつたのは、もつとほかの面からの凄まじい推薦というか、努力があつたんじゃないかということです。

伊藤 それは当時から聞こえていたわけですか。

海部 聞こえていたわけ。そして、当時一番努力活躍していたのは耳に入っていましたか、当時。

伊藤 いや、当時は何も聞いていませんよ。だけどノーベル賞を受賞して、その次の年に亡くなっていますから、亡くなったのは三木内閣の時なんですね。それで、佐藤さんの国民葬が行なわれたんですね。ご記憶はありますか。

海部 あれは国民葬にするのか、しないのかという議論もあつたんですね。

伊藤 国民葬にするという場合には、官房副長官は何か役割はあるんですか。

海部 官房副長官がこうしようというからなつた、というものではないけれども、やつぱりそれは駄目だという強い意志があれば、閣内で駄目なんです。閣議というのは全会一致でいかなければならぬいでしょう。しかもああいう人の死をめぐって、これを国民葬にするかしないかということだから。

初めは国葬かどうかという議論をしたんだな。国葬に対しては大変な反論が出たわけだ。すんなり国葬にはなりそうにない。そうしたら誰か知恵者がおつたのかな、「じゃあ国葬の中に一文字入れたら片が付くよな、国民葬だ」といった。これは一番幅の広い権威の高いものになるじゃないか、というような議論だったな。

楠 そもそも国葬のほかに国民葬というのは、何か法律的なものは

海部 ないんだ。ないから、それは最高、最大だということ。いままでなかったことをやるんだから、というような理屈であったと思いますね。

伊藤 前代未聞だ（笑い）。国民葬の場合でも、やはり国費でやるわけですね。

海部 結局はそうですね。

伊藤 そうでしょう。だから同じことなんです。それでああいうことは誰が仕切るんですか。

海部 内閣官房、官房長官です。

伊藤 そうですか。じゃあ官房長官がやったわけですか。官房長官がやったというのは、この前のお話だと、副長官がやったと聞こえますけれども。

海部 それはそういう部面もあれば、そうでない部面もあるわけですね。

楠 法律や政令に根拠がないものに、公金を支出するんですか。官房機密費かなにかから出すわけにもいかないでしょうし。

海部 いかないことはないですよ。官房機密費というのは、何にどこで使ったということは、いちいち書かなくてもいい。当時は出さなかったんです。出すにふさわしくないものを、文字通り機密だから機密にしておけということで、官房機密費というのが認められたんだから。

楠 まさかそれで国民葬をやったとは、ちよつと想像できないですけれども。

伊藤 国民葬はそんなにお金はいらないでしょうけれども。

海部 お金は一千万円プラスアルファでしたよ。

佐道 会場の費用とか、ですか。

伊藤 武道館でしょう。

海部 武道館を借りてね。あれは榮作様のあの記録を見れば出てくるけれど、そんな大変なお金じゃなかったですよ。

伊藤 そういう時は、副長官は何の役割をするわけですか。

海部 大勢並んでいる一人ですよ。空き地をつくらないという役割だ（一同笑い）。ちゃんと立っているんだ（笑い）。

伊藤 あの時、入り口で三木さんが暴漢に襲われたという事件があったじゃないですか。

海部 入り口でぶんどられて、ひっくり返った事件がありましたね。楠 愛国党の黨員ですね。

伊藤 そういうハプニングも起こりますね。

佐道 三木さんはそのあと何かおっしゃっていましたか。

海部 あの時は、むしろそれよりも、あそこの周辺におった自衛隊というのか、警視庁関係の機動隊というのか、あれがずっと警備しているわけでしょう。それが暴漢が入ってくるのを未然に阻止できなかった。しかも、羽交い締めにして助けたのは、文官の方ですからね。武官じゃない。藤森君だもの、文官だ。そう武術の心得があるとは思われんような男が助けておるのに、特にSPなんていう武術専門で来ている人がいっぱいおって、最後は藤森さんか、ということになりましたのね。

伊藤 そんなことがあったわけですね。そのほか、大したことはないんだろうと思います。

■日米首脳会議1（準備）

伊藤 そのちよつと後で、日米首脳会議で三木さんに随行してアメリカに行かれますね。これは官房副長官として当然のことですか。

海部 あれは当然であるか当然でないかわかりませんが、それまで前例が何もなかったことだから。

伊藤 だって、日米首脳会議というのは、それまで何回もあるわけでしょう。

海部 それまでは、ですよ。ただわれわれ三木内閣にとっては初め

ての経験ですから、前例がないわけです。それから副長官というのが、そもそもそういうところへ付いていくのかどうかというのも、どこへ行ってもわからないわけだ。けれども、行けということになって、行ったんです。

伊藤 それは三木さんの意志ですか。

海部 はい。それは三木さんの意志です。

伊藤 これはただ随行していただくだけで、何か役割はあるんですか。

海部 まあ、いまにして思えば、強いて役割というのは、首脳会談のテータテートに立ち会いますね。そうすると、どこからどこまでは外へ漏らしていいか、どこからどこまでは新聞社にしゃべってやってくれという首脳の本当の真意を、新聞記者に解説しなければならぬ。それが一番の役割ですよ。

伊藤 スポークスマンになるわけですか。

海部 はい、結局はそうですね。

伊藤 そうすると、会談の内容自体はかなり詳しくレクチャーを受けるわけですね。

海部 会談の内容は、行く前に、今度はどういうものになるかということは、もう聞いちゃっておるんですよ。

伊藤 この前、お話がございましたね。

海部 だから変な話だけれど、ああ、あの話は出なかったとか、あれは言わなかったなというようなことも反復した。そんなことは、そのまま外へ出すような話じゃありませんから、これはなかった話で、ボツの話ということにするわけですね。そういう、ある意味で大雑把な打ち合わせは、当時はありました。きわめて慎重にやりました。

伊藤 三木さんはこの時の会談で、自分として一番言いたかったことは何ですか。

海部 あの時、やはり三木さんが一番言ったことは、アジアから初めて参加するんだから、世界政治の枠組に――。

佐道 それはサミットですね。

海部 サミットへ行った時です。

伊藤 アメリカへ行った時はどうですか。

海部 アメリカへ行った時は、思い出してみるとフォード大統領だね。フォード大統領が三木さんに話して、日本もアジア太平洋地域のために「応分の」と言ったか、「イコール・パートナー」というような意味で言ったんだ。それは当然やらなければならないが、それは経済の面ですよ、と。

伊藤 ODAとか、そういうことですか。

海部 ええ。ODAのことよりも、まず経済でいろいろとやりまず、途上国の支援をします、というようなことを話しました。当時は、いま言われるように力でもってどうのこうのというような話よりも、経済でもってアジア地域の安定と発展に役立つようなことをやってくれ、ということでした。

伊藤 サミットの場合はシナリオがあつて云々というお話をこの前も伺いましたけれども、日米首脳会談はどうなんですか。

海部 それは、もう日米首脳会談はずいぶん前から太い流れがあつて、こうこうこれこれのことを向こうは話題にしたいと思つていろいろだと。日本側の方は、むしろ首脳抜きにして集まつて、今度アメリカにはこういうことを言ってもらいたい、こういうことを言ってもらいたいという各省ごとの要求がザッと出ているわけです。それはとても全部言えるわけではない。それをみんな集めて、いま必要な問題でやらなければならないことはこれだ、ということをや、それこそ各省から代表選手が出てきて決めるわけだ。

伊藤 それはやはり外務省が中心になつて、ですか。

海部 リーダーシップをとつたのは大蔵省だったと思う。

伊藤 大蔵省ですか。そういう協議の場面に、官房副長官もいるわけですね。

海部 まあ、いちおう勉強のために聞いているわけです。どんなことを各省が総理に上げておるのか。

伊藤 でも、もう随行していくことは決まっているわけでしょう。

自分も勉強しておかないと、ちよつといけないですね。

海部 そうです。だから勉強のためにチェックしているわけだ。

伊藤 三木さんにも、自分自身の個人的な主張だつてあるわけでしょう。

海部 ありますね。

伊藤 アメリカにこういうことを言いたい。それも自分の意志ではなくて、そういう会議で決めるわけですか。

海部 そこが、官僚経験者と政党政治家出身者の違いであつて、特に南北関係の議論なんかになると、外務省や大蔵省の言うこととはちよつと違うトーンのことを主張することにならざるを得ないわけですね。要するに途上国の立場です。日本の場合はどうしてもアジア地域の平和の問題を考えると、こうだとかあだとかいうことを言わなければならぬ。それはずいぶん言いましたね。

楠 この日米首脳会談の少し前に、南ベトナムのサイゴンが陥落していますね。ですから、だいぶ大きくアジアの情勢が変わつてきた時期にこういう会談が開かれたと思うんですが、そこで何か特に記憶がありますか。日米首脳会談が八月で、サイゴン陥落が四月三十日ですが、何かそういうことも話題になつたんじゃないかと想像されるんですが。

海部 最初の首脳会談の時は――。

伊藤 昭和五十年の八月です。

海部 とにかくサイゴンの落ちたときとか――。日本の最初の時は、むしろアジアの安定のためには、経済力を持つている日本が、貧富の差をなくすような、そういう意味の協力をアジア地域に押し広げることが一番役に立つ、というような感じで勉強しておつたな。

伊藤 それは三木さんのほうでしょう。

海部 三木さんの考えです。

■日米首脳会議2（三木・フォード単独会談）

佐道 この最初の日米首脳会談は、いままでの太い流れがあつたという話ですけれども、いままでの首脳会談とちよつと違うことで二つエピソードがあります。一つは、突然フォード大統領と三木さんが通訳だけで単独会談をやつて、その内容が新聞記者になかなか明かされなくてもめたというエピソード。そしてその前に平沢和重さんが行かれて、二つの正式の共同文書が出ているんですね。日米共同声明と新聞声明が出た。この一九七五年の会談は、ちよつと異色の会談だつたということがあるんです。

最初の、突然フォード大統領と三木さんが通訳だけで会談をしたことは、新聞記者からその内容はどうなっているんだといって、海部先生が突き上げられたとか。

海部 その時は僕がブリーフに行きました。誰も外務省を連れていかずに。それはフォードさんが最初の会談が終わつて歩き出した時に、ちよつと三木さんのところへ寄つてきて、肩へ手をかけて、ちよつと話をしたんだ。それは、「もうちよつと今日、どこかで話したい」と三木さんに言つたというんだ。あとから聞いた話だけれどもね。三木さんは願つてもない機会だから、「よろしい、じゃあいずれやりましょう」と言いながら、その日のうちにやつちやつたわけだ。「全体会議が」終わつてから一時間経っているんだ。何か言つておきたいことがあつたんだらうなあ。それで行ったわけですから行つて会つて話したんだ。

それで、「新聞記者は私に」「どうしてあんなことになつたんだ」というから、おれは「波長が合つたんだろう」と言つておいたが、そんな話で、これはうまくいかなですよ。「副長官、まあちよつとこんな話があつたとか、こんな問題が出たとか言つてくださいますよ」というけれども、「三木さんに」聞いても、あまりないんだよね、正直なところ。特に最初の全体会議、第一回会議で――。

伊藤 第一回会議のあとなんですか。

海部 あとです。第一回会議が終わつてからですよ。

佐道 突然、「ちよつと」という感じだったんですか。

海部 全体会議が終わるでしょう。ああやって「壁に掛かっている首脳会談全体会議の写真を指す」両方ずっと座っているのが終わると、立って別れる。やあやあ、と握手をしたり、それぞれ話をしたり、ささやいたり。その時に何かあったので、「どうしたんですか」と言ったら、「もうちよつと話そうということだ」という。

「いまここですか」と言ったら、「いや、あとであとで」「連絡はどうするんですか」「こつちに電話が来るだろう」というようなことで、それぞれ戻っちゃったんだよね。

そうしたら案の定、戻ったらじきに電話連絡があった。その時に、外務省のアメリカ局長も誰も連れて行かないわけだ。それはそうだろう。そんなことは言っていないから。それで、誰か通訳させなければいけないと思ったから、その時は国弘「正雄」を連れて行ったわけだ。国弘、お前行けと言った。

そうしたら、各社で一番そのことをいう。いまそういうふうにとられているのは、外務省の通訳を誰も連れて行かなかったというんだ。そのことをくどく質問したのは、スピッツというあだ名をつけておったけれど、誰だろう。三木内閣に付いてきていたNHKの随行のやつで、ワーワーと犬のように食いつくので、われわれはスピッツというあだ名をつけていた。それが緊急の会見を申し込んできて、それで会ったらいきなり、「われわれの頭越しに三木さんは大統領と会ったでしょう。しかも外務省のあれを連れて行かなかったでしょう」という。

そうしたら三木さんは「私が総理大臣ですよ。あなたはなんですか」と言った（一同笑い）。要するに、「私が総理大臣だから、フオードはアメリカの大統領で、会って話したいといえ、時間があえば、会って話したいいいじゃないか。何をそんなに目くじら立てて怒るんだ。国民の皆さんはみんなそんなことを怒っているんじゃないか」と、三木さんのことだから、それぐらいの反論はするわさ。そうしたら、「そうじゃない。やはり会う時には会うといつて、通知だけください。通知もしないでひそひそ会われては困る。」

これからも会う約束があるんですか」とかなんとか聞くわな、それは当然。何をしゃべったのかという中味については、あの時はどうと言わなかったよ。

伊藤 副長官には、ですか。

海部 ええ。そんなに長時間やっていないから、あの時は。だって、正式な会談の第一回が終わって、その日はホワイトハウスで晩餐会ですよ。だから、すぐ慣れないタキシードを着なければならぬし、三木さんにも着せなきゃならぬ。ぶきつちよだなあ。時間もかかる。だから、そう長いことは話してはしなかったんだ。外務省の系統が聞いておらなかったということは間違いないし、そこで外務省の頭越しに何かうまい話をしたんじゃないかというような憶測とか何か出たのかもしれない。そんなようなトーンの批判が多かったように僕は覚えています。

■日米首脳会議3（シナリオ）

伊藤 首脳会談というのは、両側は何人ぐらいなんですか。

海部 僕の記憶では、僕のころは両側は、あれ「事務所にかかっている首脳会談の写真を指して」は日中ですけれども、日米のときも、だいたいあんなようなものです。

伊藤 そうですか。そうすると日本側は総理と――。

海部 総理がおつて、だいたい外務大臣がついて行っていますから外務大臣と、駐在国の大使、日米会談だからアメリカの大使、それから局長と副長官なんかがずっといる。ノートテイカーは秘書官とか担当課長とかいうのが並ぶから、だいたい十二、三人になるんじゃないですか。

伊藤 じゃあ、結構な数ですね。

海部 結構な数ですよ。

伊藤 でも、もちろん、発言するのは首脳同士ですか。

海部 そうです。首脳同士がほとんどです。そして首脳が特に「指名」した時は同席者がしゃべりますけれども、だいたいしゃべるのは首脳同士です。

伊藤 それは通訳で――。

海部 もちろん通訳を入れて、です。

伊藤 そうすれば、正式の会合での話が全部わかるわけですね。

海部 もちろん全部わかるんです。

伊藤 それは今度は、一応スポークスマンである先生が、新聞記者なんかにだいたい話すわけですね。

海部 そうそう。

伊藤 その時の話には、やはりシナリオがあるんですか。

海部 あるんです。昔はあったんです。いまは知らんけれども。

伊藤 三木内閣の時はあったんですね。

海部 ええ。それは、もう「ご発言要領」というのが、ずっと上がつてくるんです。こういう順に、この問題とこの問題だけはどうぞご発言してくださいと。逆にいうと、これだけはしゃべっておいてもらわないと困ることになります、というようなことがあるみたいだよ。

伊藤 向こう側もあるのかな。

海部 ありますよ。その証拠に僕が、ああ、なんだと思ったのは、ブッシュとやっている時に、こちらは何も持たないのに、向こうがこういうもの「指で葉書大の長方形をつくる」を持ってきて、チラッチラッと見ながら話しているから、「ご発言要領」を向こうももっている。それは間違いない。初めこっちは、それを持って行つてはかえって迫力がなくなってしまうから、しゃべる時はしゃべる相手の目を見てしゃべらないといかんから、事前にだいたいしゃべることを覚えておいて、セリフは自分のセリフでやりますからね。それから大きなところを落とすと悪いから、そこだけは自分でご発言要領に赤でチェックしたり、自分の字で自分のメモをつくったりしたものですよ。だから、ブッシュが出した時には、なんだ、これな

ら同じじゃないかと思って、ホッと喜んだことがある。これくらいをやつ「葉書大のメモ」をちゃんとかうやって出して、次々見るわけです。

伊藤 やはりそういうものですか。この年にサミットがありますが、そのサミットもやはり同じようなものですか。

海部 同じようなものです。

伊藤 この前、何か飛行機の中で云々という話がございましたけれども、やはりご進講があるわけですか。

海部 はい。それは、各役所がこれだけは特に主張したいし、主張しておいてくださいということを言うんですね。

伊藤 やはりトップの人というのは、自分の気持ちでいろいろ会談をやったり、発言したりというのは難しいわけですね。

海部 もちろんそれを全部しゃべったかと言われれば、そうじゃない。時間がなくて言えなかったことだってあるはずだ。それから興味のあることはどんどん言えるけれども、興味の無いこと、こんなことは言わなくてもいいと自分で思ったことは落とすとか。それぐらいのことは、みんなそれぞれあるでしょう。

■日米首脳会議4（議題と共同声明）

伊藤 この日米首脳会議の場合は、やはり経済問題が主ですか。

海部 当時は経済問題がほとんどです。特に三木さんの頃はそんなにギスギス言われなかったかもしれないが、日米経済摩擦の問題が起こつてからの話は、みんなそればかりだ。

伊藤 でも、この頃だって、もうそろそろでしょう。

海部 はい。そろそろいろいろな問題が起こっていました。忘れられんことは、繊維の一番最初、日米繊維製品交渉の始まりは、佐藤栄作様の時に起こつて、縄と糸を交換したではないかと言われたりしたんですよ。

伊藤 そうですね。そのあとだって、鉄鋼とか車とか次々と出てきますよね。

海部 いろいろ出てきました。そして、いま経済問題でテーマに思っていることを思いきり挙げろというようなことになってきたのは、ジョージ・ブッシュと私の首脳会談の頃で、あれが、なんとかインシアティブというんだ。日本から数多く出せといつて、何でもいいから、アメリカが言うよりもたくさん出してやれといった。あの頃日米間には、経済的に片をつけなければならぬこと、言わなければならぬことが本当にいっぱいありました。それを全部出して交渉したんだから、それは手間がかかり、時間がかかり、日本の生活文化に馴染まないようなことまで出てきたり、いろいろありました。が、これは一つ一つやっていかなければならない。

伊藤 じゃあ三木さんの時は、それほどのことはないわけですね。

海部 ありません。三木さんの時は、糸とあれの問題から始まって、鉄鋼の問題になったりした。

伊藤 じゃあ、三木さんの場合は、多少儀礼的な会談という感じもあるわけですか。

海部 話が全然つかないということとはなかったと思いますよ。いろいろ話をして、じゃあ、この次までにこれは努力すればいいから、こうしようとか、じゃあこうしよう、とかいうような――。

伊藤 でも、そのへんまで事前に大体詰めてあるわけでしょう。

海部 はい。事前に詰めてくるから、最後は総理の決断で、ここはこう言ってもらってもいいし、このへんにもっていつてももらってもよろしい、ということになると思うんですね。

伊藤 それで、共同声明を出して終わりということですね。

海部 はい。

伊藤 その正式の会談というのは、最初の、とさつきおっしゃいましたけれども、何回かやるわけですか。二回か三回か。

海部 一番長くやったのは、三木さんの時は、休憩を入れて本会議（という言い方をしたかどうか知らないが）が終わってからが大変

だ。首脳同士の会談が終わると、今度はお互いにその発表文書が下に降りるわけだ。そうすると、酔だのこんにやくだのという言葉があるけれど、そこから始まるわけだ。あの言葉はこういうふうに直してくれないかと、この何行目は抜いてくれないかと、それを両方から持ち寄って言い合うわけです。

伊藤 それはどのレベルでやるんですか。官房副長官ですか。

海部 それは審議官のレベルでやる。そして随行の審議官たちの話が行き詰まると、「副長官ちよつと来てください」と言う。

佐道 外務審議官ですか。

海部 はい。

伊藤 それは国務省との間でやるわけですね。

海部 そうです。ちょうどあのころにハビブという名前の担当官が向こうにいて、やっていましたね。わがほうからは、三木さんの頃の審議官。背があまり小さくなくて――。

佐道 アメリカ局長をやつて、サミットに行つた吉野文六さんですね。

海部 そうそう、あのおじさんだよ。首脳会談にもいつもあの人に来ておつたわ。

伊藤 副長官が呼ばれることもあるわけですね。

海部 それは、「言にくい話を聞いてください」とか、「これをすまんけれど言っておいてください」とか言われると、しようがないから言いに行く。

伊藤 誰に言いに行くんですか。

海部 それは三木さんに言いに行くんですよ。

伊藤 三木さんですか。これを納得してもらおうと。

海部 納得しないけれども、「ここを譲ったら、党内ではこれとこれが怒るし、各省の間はこれとこれがこうなっているというふうなことも全部判断して、ゴーサインを出されるならば、それでまとめていきたいけれども、今回はこれをまとめないとほかに成果の上がるのが少ないから、これをまずいきましよう。うんと言つてくださ

いよ」というようなことを最終的に言ってきたという。

伊藤 それは共同声明の文案なんですね。「佐道氏に向かって」さつき何かありましたね。

佐道 新聞に発表する声明ですが、そういうものをつくらうというふうにもって決まっていたわけですか。

海部 だいたい新聞発表をするならば、どの程度のものにするか。長いものにするか、短いものにするか。いろいろなこと、大枠を内輪で決めちゃうんだ。そのとき、大蔵省だけに決めさせないで、外務省が窓口で全部やるけれども、大蔵省も必ず相談をしながら入れておかないとうるさい。それから水産関係になると、農水省を一人入れておかないと。設楽という審議官がおったけれども、あれもまあ省のことだけ考えているからね。これを言ってもらっちゃいかんとか、これはここだけにしておいてくださいとか、それにずいぶん時間がかかるわけです。アメリカでも同じようなことをやるらしいんだよ。

伊藤 それはそうでしょうね。共同声明は結局、外に発表する声明という意味だろうけれど、新聞記者発表のためのというのは何だろう。

佐道 よくわかりませんけれども、何か突然そういう話になったというのが、この時にあるんですけれど。

伊藤 何かご記憶はありますか。

海部 だって、あのころはまだ変な話だけれども、日米首脳会談というのをやったら、すぐに共同声明を出すのか出さないのか、出すべき内容は何なんだということを、あらかじめ事前にずいぶん詰めてから行く、というようなことではなかったもの。

伊藤 「詰めてから」行っただけじゃないんですか。

海部 それは、三木内閣というのは想像がつかないだろうけれども、本当に異分子が来たように思われておったんだ。副長官が私で、長官が井出一太郎さんのコンビですからね。人の裏とか官僚の裏とか、いわゆる機密費の扱い方とか、当時はそんなに問題にはなっ

いなかったけれども、いろいろなことについて根ほり葉ほり調べてやろうなんて思う人は一人もおらんから。官房長官以下一人もおらんどころか、誰も知りやせんわけだ。おそらく行なわれておっただろうと思う。だから、扱いやすかったらうと思うな。

伊藤 誰がですか。

海部 役人どもが。その代わり、それ以外のことはきちんと言えなければならんということと、いろいろな事件が突然に起こることがあるでしょう。例えばハイジャックとかね。あれは日米首脳会談の最初の時じゃなかったかな、あのハイジャックは。

■クアラルンプール事件への対応

佐道 クアラルンプール事件ですね「一九七五年八月四日」。

海部 クアラルンプール事件だ。向こうの宿舎へ着くや否やその第一報が入って、どうしますか、と来ている。当時、外務大臣は宮澤さんだ。

佐道 一緒に行っているわけですね。

海部 一緒におつて、「さあ、それはもう少し事情がわからないと、なんとも私の口からは申し上げられませんから、副長官の方でよしなにしてください」という。そんなことがあって、一晩か二晩で片がついちゃうんです。片がついちゃって、何か総理の談話を出さなければならぬ。「人命を大切にしてください」とか何とかいうようなことを書きながらやる。それを閣議に諮らずに、おれが書いて記者にしゃべっちゃった。そうすると、それが日本に行くわけだ。そうすると官房長官から折り返しすぐ電話が来て、「副長官はどこにいらっしゃいますか」というので、「おれだ」と言ったら、「閣議の手続きを経てないでしょう、あれ」と言われた。「閣議もくそも、ここはアメリカなんだから、長官、そんなことはできませんわ」と言ったら、「いやいや、そうじゃない。手続きだけは踏まにやあい

ん。いまこちらでうるさく問題になっておる。手続きを踏まない総理大臣談話だといって」「ああ、そうですか。総理大臣談話というのは閣議の手続きを踏まにやいかんですか。それは失礼しました。すぐ踏んでください」と言ったら、「貴殿ものどかなことを言っておるな。大変だから頼むぞ」といって、その時は叱られた。あわてて閣議抜きでやっちゃったんだ。記者団にせつつかれて、本人にどうですかといったら、「人命が大切にされてよかった。こういったことは不幸中の幸いだ」というようなことで、もともともらしいのを書いて流したら、それが閣議の了解を得ていなかったという。これは大変なボ力ですわな。

伊藤 総理大臣が外国に行っているときは、閣議は持ち回りになるわけですね。

海部 はい、そうです。もうひとつは事前に閣議持ち回りをやる余裕をとって、官房長官にその内容を伝えて、官房長官の方から、それではそれでいかせてもらいますとOKが来た時に外へ出るわけですね。そういう手続きを知らなかったので、初めの公職選挙法と独禁法であれだけ痛い目に遭ったんだから、もうちょっと細かいことまできちんと詰めておくべきだったなあというのが、率直にいうと反省ですよ。

伊藤 しかしいろいろあるんですね。結局クアランプールの問題は、どのへんでどうやってああいう決着をつけたわけですか。

海部 たしか留守番の総理大臣代理は福田赳夫先生だったと思うんです。それで井出さんに言ったら、「出先で勝手に出しちゃたけれども、内容が悪い内容ではないから、あれはもちろんそのまま追認した。それから留守のその後の閣議は、福田代理がきちんとおやりになった」という。

伊藤 いや、実際の処置の問題です。

海部 全部出しちゃったんですよ。

伊藤 そう、その意思決定はどうやってやったんですか。

海部 あれは持ち回りですよ。電話か何かでやったんでしょう。人

の命に関すること、そのために法務大臣が責任を取って辞めたよね。気骨のある法務大臣でな。瀬戸山三男という人だ。

伊藤 瀬戸山さんは辞めたんだっけ。

佐道 最初の時は法務大臣は稲葉「修」さんですね。

海部 稲葉さんはロッキードの時で、田中逮捕のことをのりくりと答えておって、「そのうちにおまえらのびっくりするような、大きなアユが引つかかるぞ」ぐらいのことを言って。

佐道 しかし稲葉さんは、三木内閣ができて自主憲法制定の件で問題になったんですね。ですから、この時は稲葉法務大臣。

伊藤 まだ稲葉さんでしたか。だって、組閣して、改造までいっていないでしょう。これは人命に関わるからというふうなことで、あえて超法規的な解決をするという決断は、やっぱり総理がするんでしょう。

海部 そうですよ。

伊藤 そしてアメリカにいて、情報は、別に不自由はしないわけですよ。ね。どんな連絡がきている。

海部 情報は大使が持つてくるから不自由しない。それでいいでしょう。いろいろな情報を知っていたから。

伊藤 それで決断をするといっても、やはり国内の判断もあるでしょうし。

海部 それは、電話をしてあれ「連絡」をするんですけども、内閣総理大臣談話を、事前に閣議の了承を取らずに出したことが問題になった。けれども、あとで決めたことは電話でちゃんと事前に官房長官に伝えてから決めてもらったということです。

伊藤 この年の十一月ですか、今度は先進国首脳会議ですが、これはやはり主席随員かなにかでついていくわけですか。

海部 それが、ちよつと先ほど言いましたサミットの初回ですね。

三木内閣は――。

伊藤 内閣ができたのは、その前の年「一九七四年」の十二月ですか。それで、次の年の十一月にランブイエでサミットですね。

海部 ランブイエのサミットで、その年じゃなかったか、スト権ストがあつた時は。

伊藤 そうです。

海部 だから僕は、そんなランブイエのサミットの話なんていうのは先のことで、こちらはスト権ストのほうが大事じゃわいというので、毎晩官邸を後にして事前折衝をしていたんです、労働組合のボスたちと。

■三木総理の靖国神社参拝1（公的と私的）

楠 ちよつとよろしいですか。サミットの話に行く前に、申し訳ないんですが、さっきの日米首脳会談の直後に、三木総理の八月十五日の靖国神社の参拝があるんですね。ちよつとこんにち的な話なので非常に関心があるんですが、その時のご記憶をいろいろお聞かせいただきたいんです。これが戦後の歴代首相としては初めての、公式あるいは私的を問わず、総理大臣の参拝なんですね。ですから、これに対する反応とか、そういったことをちよつと覚えておられたらお聞かせいただきたいんですが。

海部 八月十五日に靖国神社に参拝して欲しいという声が、ズバリいうと党内の右派の人たちから。

楠 遺族会関係とか、軍恩とかでしょうね。

海部 遺族会とか軍恩とか、あるじゃないですか、いろいろと。断固行つてくれ、行くべきだという。そういう人々の意見というのは、明治生まれのああいふ政治家にとつて、三木さんにとつても、ホロツとくるようなところがあるわけです。けれども、三木さん本人は、総理大臣というものが行つて、世の中に与える影響がどうかしら、と考えていた。当時は中国との問題は考えなくてもよかつたと思うんです。僕の記憶の中では。

楠 まだ、平和条約の前ですね。

海部 ええ。何を迷つたのかな、あの時は。何か、とにかくいろいろ悩んで考えておりましたよ。その迷いは、公（おおやけ）で行つていいのか、私（わたくし）で行かなければならないのか。

伊藤 まあ、宗教施設という問題ですね。

海部 公か私か、この悩みだったと思うんです。あの時の三木さんの判断は、いろいろな人がいろいろなことを言ってくるので聞いておられたけれども、最終的にはご自分の判断で、やっぱり行こうということでした。

俺は「おかしいな、金を自分で払つて、自分の車に乗れば、公的じゃなくて私的になるのか」、そんな疑問を感じたことは事実ですけどね。総理大臣が国民の税金で出されている車に乗つて動くということは、公の最たるものだけれども、自分の昔から乗つていた車、自家用車である個人の車で行けば、これは公私の区別がそこできちんとしてくではないかと。それから、いくら包んだか知らんが、玉串料というのも、個人「三木」で包む。官邸の袋でもないしアレもないけれども、個人で包んだ。したがって、公的参拝か私的参拝かと言われると、これは私人・三木武夫がお参りするんだ、というような答えをしたことを覚えています。

楠 昭和四十年代には、国家護持の問題が争点化していましたが、靖国神社国家護持については、三木総理のお考えはどうだったんですか。

海部 国家護持というところまでは、まだ踏み切れずにおつたんじゃないんですか。

楠 反対ではなかったんですか。

海部 反対ではなかった。だから最初に言つたように、明治に生まれた人だからそういう思いもあつたろうけれども、国のために散つた人を国民みんな大事にするのがどうしていかんのだろうかと、という考えだ。だからいまの小泉純一郎の一面とまことに似たような発想だつたと思うんだ。「わしは素直な気持ちで行くんだよ。どうしていけないんだろうか」と言つていた。「けれども、それはあな

たが総理大臣だからいかんだ」といって、いろいろな人が言いに来たりしたね。

楠 先生も、当時は素朴な疑問を持っておられたとおっしゃったけれども、素朴な疑問というのは、もっと具体的にいえば抵抗感みたいなものがあつたんですか。

海部 それは、「どう思う」と飯を食いながら聞かれれば、いろいろ言いますわ。「何のために八月十五日は武道館でやるんですか。両陛下がいらっしゃって、何のために武道館でやるんですか。あれが不満ですか」というのが、当時から僕の素朴な意見でもあつた。

楠 なんて三木さんの時に、突然八月十五日の参拝ということになったんですか。各方面からの突き上げとおっしゃいましたけれども。

海部 それは、右寄りの人たちがみんな「行くべきだ、行け、行け」と言ってきたから。むしろ逆に、なぜあの時に言い出したんだろうか。世論に弱い政治家は、強い世論をあげれば行ってくれるかもしれないという思いがあつたかもしれない。ストの時もそうですよ。

三木さんみたいな人は声を大事にするから、国民の声だと言うと、きちんとやってくれるよということがあつた。

楠 どちらかというと党内左派的なスタンスをとっている三木さんが、この問題に関して先陣を切つたということが、あとから考えると解せないところではあるんですが。

海部 それは明治生まれの心の中であつたんでしょう。同時に自分の親族、身内の中でも犠牲者も出ただけけれども、そういう人に素朴に儀礼をして、不戦の誓いみたいなものに結びつけていくたらいいのではないかと、政治家として理屈を考えていたと思うな。明治生まれの人だから。

佐道 総理というお立場とは別として、それまで三木さんは靖国神社に参拝とかはされていたんですか。

海部 知りません。おそらく総理としては行っていないでしょう。佐道 長い政治家としてのキャリアの中で、八月十五日に限らず、靖国神社にお参りに行くこととはされていなかった。

海部 いま行なわれているような、橋本龍太郎的なみんなが参拝しましょうというようなことには、少なくとも、参加していませんでしたね。

■三木総理の靖国神社参拝2（法制局の見解など）

佐道 先ほど先生がおっしゃった、玉串料はどうするか、公用車は使わないとか、私人としてとかいうことが、あとで四原則という形で言われるわけですね。それは、先生なんかが中心になって、こういう原則で行きましょう、としたわけですか。

海部 念のためにそれは内閣法制局に、問題になっておるから、この時はどうしたらきちんと立場がわかるか、ということをしているいろいろな角度から事前に調査したんです。「玉串料というのはこういうです。それからできれば、お車も自分のもので」というので、「じゃあ、自分の二本足で行くのが一番いいな」と俺が言つたのは覚えていたけれどもね。

佐道 法制局が中心になって、ですか。

海部 それは法律的なことを聞くわけだ。国会で問題になれば、それに答えるのは、みんな法制局長官だもの。だから、念のために参考意見を聞きたいと。

楠 三木さんは、私人として参拝するという形を表明したわけですね。だからこそあとで公式参拝という話が出てきたので、黙って行つてしまえば、別に公式も私的もそういう突き上げはなかったとも考えられますよね。

海部 僕も、言葉をはさんで申し訳ないけれども、いまもこういう話がいろいろあるけれど、どうしてみんなそちらにこだわるんだらうかと思う。八月十五日に、武道館へ天皇皇后両陛下を呼んで、そこできちんとやるわけでしょう。「戦没者の霊」というのがきちんと立ててあるでしょう。そこへ行つて、全国の国民がその時間に合

掌黙禱をするわけですね。それにはどこからも、片言隻句文句が出ないわけだから、みんな手を合わせた人は手を合わせるのがどうしていけないんだろうか。靖国神社まであえて行って、その簾をめくった奥にどなたがどうなっているかというところで、いろいろ議論すると問題が起こるから、そういうところへはなるべく行かないという方法と二つあったら、どうしてあの武道館の方でよい、とならんのだろうか。僕は素朴にそう思いますよ。そう思ったから、私は八月十五日にはいつも行くんです。

「全国戦没者の御霊」という字は誰が書いたかご存知ですか。ご存知ないでしょう。そんなことは関係ないんだ。知らなくてもいいんだよ。おれは知っているんだ。それは金子鵬亭という、かの有名な日本の書家が書いたんだよ。それが、もう十年経ったから、そろそろ世代を替えて若い人に書いてもらえと言ったら、じゃあご推薦くださいと言われて、書道界へ話をした。そうしたら一世代若い人がまた精魂込めて書くんだよ。

両陛下と日本国民全部が八月十五日にそこで黙禱するわけだ。だから、儀式としてはそれで十分だと僕は思う。靖国神社へ行くと、またすぐにA級戦犯が祀られているではないかという議論が出てくるわけだ。そうすると、そんなものは中国に言われて引つ込むのかという事になってくるわけで、問題が果てしなくいろいろな方面に伸びていく。私はきちんと素直な気持ちで慰霊をしてくればいいではないかと思っていましてからね。だからなるべく――。

伊藤 じゃあ、三木さんは余計なことをしてくれ、ということですか。

海部 いや、余計なことというのはなくて、明治生まれの人だな、ということですよ。

伊藤 ああ、そういう意味ですか。

海部 しかも日清戦争、日露戦争があつて、自分のご身内にいろいろあつた人というのは、やはりそうなのかなと思っただけで、特別に行くのは間違いだとか、行ってはいけないとは思わなかったし、

言わなかったけれども、私は少なくとも行きませんよ、ということで行かなかった。

伊藤 まあ、こんにちほど大きな問題ではないですからね。

佐道 時系列上で話が続くんですが、このとき三木さんは、やはり先生とかにも相談をされていたんですか。それとも「行くことに決めたから」という感じだったんですか。

海部 結局、いろいろな人からいろいろなことを言われて、「難しい問題だね、これは。もう、行つてくれ、という人が多いんだよ」という相談がありました。相談があつたから、少しでもお御心を安らかにしてあげようと思って、法制局長官を呼んで、秘かに「総理大臣というのは靖国神社に参拝していいのかわいのか、いろいろあるだろう。ちよつと知恵をつけろ。行け、行けと言われて困っているんだ」と、僕はそういう時には正直に聞くわさ。そうしたら、彼らは政治的な返答はできないから、「ご質問を政治的にはお答えできませんが、問題点があるとすれば、こういうところでございます」という。そして、いまま新聞に書いてあるようなこと、車はどうするかとか、玉串料をどうするかとか、それから二礼二拍手一拝でいくかどうか、とかいった。

藤波「孝生」の時には、一礼一拍手とかやってくればよろしいというようなこともやっていたけれども、そうじゃなくて、あの時は確か三木さんの二礼二拍手一拝の参拝方法は、いままでも通りで結構だ、となつたと思うんだ。そのかわり玉串料だけはご自分で出してくれという。

佐道 参拝されたあとの反応については、ご記憶とかご印象はどうでしたか。

海部 特にありません。意地の悪い批判が新聞に二、三出たのは、いまおっしゃったとおりだよ。ハト派の三木さんが、タカ派に押されて、両方うまいこと両手につかむのには、これしかないだろうと。けれども、僕は三木さんには「明治生まれの俺だから」というところと、やはり「靖国神社は行ってもいいんだ」という気持ちが強く

あつたと思いますよ。

■スト権スト1（労働側窓口、富塚三夫）

伊藤 さつきのお話で、ランブイエの時に、それどころじゃない、とにかくスト権ストだということでした。向こう側と秘かに連絡をとって、と言われた。実際にストが行なわれたのは、先進国首脳会議から帰ってこられたあとです。出かける前にずっとそれをやっていたわけですか。

海部 ずっとやっていました。もうあのへんでそろそろストだ、処分だという悪循環を断ち切りたいというのが、三木さんの大きな願いであって、なんとかならんかと言われて、そしていろいろな人と話を始めた。

伊藤 どういう方向で解決しようというお考えだったんですか。

海部 あらっぱい意見であって、組合のほうは処分をやめろというんです。「処分さえしないと約束してくれば、それでいい」という。だから「そんなことを言わずに、ストがなければ処分はないんだから、ストはしない」ということを君らが先に言えればいいのではないか」というような堂々巡りを一所懸命やっていたわけです。

伊藤 違法ストですか。

海部 はい。そうしたら、富塚「三夫」がカウンターパートだけでも、「だいたい三木さんというのは、憲法を守らない人だ」と言うから、「何を君は突然言うんだ。どうしてだ」と言ったら、「憲法上保障されたスト権だから、われわれのやることを憲法違反だ」というのは間違いだ」とさかんに言うわけだ。

それで、僕は「あなたが一番憲法違反じゃないか、富塚さん。憲法違反かどうか、この法律が憲法に抵触するかしらないか、疑いがあった時に晴らすのは、富塚さん、あなたじゃないんだ。最高裁判所だ。そのことは六法全書にちゃんと書いてあるわけだから、一私人

が、これは憲法違反だとか、これはどうだとかいうこと自体が、俺に言わせれば、大変おこがましい越権行為だ。憲法八十一条にきちんと書いてあるようにしなければいかん。そこがまず憲法違反だよ」というようなやり取りをしたことを覚えております。

伊藤 どんなどころでそういう話をするんですか。

海部 NHKの討論会です。

伊藤 ああ、討論会ですか。裏ではやっていないんですか。

海部 裏でやるとね、そんな上品な議論にならないんだ。（一同笑）

伊藤 裏というのは、だいたいどういう場所でやるんですか。

海部 議員会館でやったこともありますね。

伊藤 案外見つからないものですか。

海部 はい。

伊藤 へえ、議員会館ですか。会議室かなにかですか。

海部 はい。だって、社会党の田辺「誠」とか、ああいう連中はみんな大変関心を持っていたでしょう。だから、田辺やなにかと会って話しているぶんにはいつこうに大丈夫だし。そこへ富塚が入って来たといっても、別におかしくない。

伊藤 それは、いちおうそういうふうにはセットされているわけですね。

海部 かえって穴場ですよ、議員会館は。

伊藤 そうでしようけれども、ここでこういうふうにするということとは。

海部 あそこに議員会議室があるでしょう。むしろ議員会議室を使ってやっていた方がよかったかもしれんけれど。

伊藤 このスト権ストの問題では、三木さんは、公共企業体の労働組合のスト権は、もう労働組合のいうようにやろうというわけでは必ずしもなかったわけですか。

海部 そうです。労働組合のいう通りにスト権をやってはいかんといい、その点だけはきちんとしていましたよ。

伊藤 労働組合のほうは、三木さんはハト派だから、あれが言うことをきくには――。

海部 おらんから言うけれど、長谷川峻さんみたいな当時のわがほうの労働大臣が秘かにまた頼まれると「三木さんはああいう人だから、なるべく大勢でやいやいと頼んでこいや」という。

伊藤 長谷川さんは、そういう立場なんですか。

海部 ああ、労働大臣だもの。

伊藤 それはそうでしょうけれども、あの人はどちらかといえばタカ派のほうじゃないですか。

海部 そのタカ派の長谷川峻が言う。「海部さん、あなたそうガタガタいったら、三木さんをもう少しあれしなきゃ駄目だぞ、時代遅れだぞ」なんて言うから、「それは間違いだ、絶対駄目だ。そっちがもう絶対にストをやらんということを宣言しなければあかん。長谷川峻さんがどんな権限をもらって言ってるのか、それは駄目だ。いっぺん三木さんとよくその点を話してこい」と。

伊藤 向こうの話し相手は富塚さんなんですか。もうあの人で、だいたい決まりなんですか。

海部 窓口は富塚で、裏もそうです。

伊藤 窓口が裏口にあるんだ。

海部 せいぜい、ときどきこのあいだ連合の初代会長になった山岸「章」が出て来ておったな。堅山「利文」は、話がよくわかるほうだ。それからストライキ倒しの専門家がいたでしょう、公労協の幹部で。でも富塚が一番――。

伊藤 実際にストをやって、結局国労のほうに負けたわけですね。とにかく評判が悪いから、そこまでやらないと解決はつかない。

海部 そうだと思えます。それから国労の方も、初めは三日間とか四日間とかの計画を持っておった。そして、ほれ見てみる、だいたい四日間やればやめるんだから、四日間お前らのほうも手荒なことをせずに、お互いにわあわあと口で主張するだけし合つて、そうしたら、だいたいこいらが収めどころじゃないかということをして、初

めから両方とも――。

伊藤 でも、向こうはスト権を奪還すると言っているわけでしょう。海部 だから、三日か四日はずっとブチ抜けば、もらえると思っているわけさ。もし三日、四日やって駄目なら、あと一週間ブチ抜けばいい。

■スト権スト2（食糧輸送対策）

海部 あの時困ったのは、世の中が騒然としていますから、東京都の中にある食糧の備蓄がどれだけあるか全部調べたんです。調べてみたら、四日間や五日間ならば大丈夫だということがわかった。けれども一週間やられると、たちどころに駄目になる。全部のトラックを動員して、鉄道を動員しても、鉄道はストで駄目ですから、全部運んで、備蓄して、一週間の籠城に耐えられるだけの物資が確保できるか。この問題については当時、運輸省は物資輸送にずいぶん協力してくれましたよ。

伊藤 それは計画だけではなくて、実際にやっただけですか。

海部 やろうというので、実際に発動を始めたぐらいで、やめになりましたけれども。そして、ここだけの話だが、小学校に東京都の教育委員会を集めた。小学校というのは、人間の住んでいるまん真ん中にあるから、小学校の教室とか講堂とか、そういう普段空いているところに物資を運び込んだ。生鮮食料品が当時は一番大事でしたけれどもね。そして「備蓄の基地にしてくれ」「協力します」ということだ。あとは急病人が出たりしたときにどうするかということ、そのときになってみなければわからないな。けれども、できるだけやってもらう。とにかく食べるものの備蓄さえあれば「安心して待ってくれ。食うものは明日あげますから」とかと言えはいから。

それを本当に集まってやっただけですよ。あの時は、私が副長官だ

ったけれども、党へ行つて、党も誰か副幹事長が一人責任を持って出てこいと言つたら、宇野宗佑が出てきた。あの時、宇野宗佑が副幹事長の一人だった。そして文部省は、人脈も僕らはよく知つていたけれども。さあというときの物資を出す役、だから農林省あたりの米や生鮮食料品の集積はどれくらいあるか。何時間経つたら、どこへこれだけ運べるか。本当に青写真をきちんとつくつて、設計計画をやったんです。一週間ブチ抜かれてもいい。

ただ、あの時はすでに向こうは三日、四日、初めの分は計画があるわけです。合わせると一週間以上になる。だから、これだけの物資で一週間やれるかどうか、真面目に考えていたやつもおつた。当時、国鉄の運輸省の審議官という仕事をやってた細田吉蔵が、自分で回つて、どこまで協力する、どこまではどうする、いろいろやる、と言うんです。それで国鉄の総裁、副総裁なんかを順繰りに集めて、君らのためにもなるんだから、うんと頑張れといったら、中間管理職にさんざんやられていた大幹部たちは、「やつてください、いいです。われわれもここでピシッと筋道が通るならいい」ということだ。それで、あれがなんとかか終わつたということですよ。

伊藤 これで国労は完全にアウトになつたわけですね。

海部 もうその後ストができないということになつた。

佐道 条件付きで「スト権を」付与したらどうかという議論もあつたかと思うんですが、それは――。

海部 あれはガセネタですよ。

楠 ガセネタなんですか。

海部 うん。条件付き付与論というのは、労働省出身のある国会議員を中心にしたガセネタですよ。これならば、おまえらは呑むかといつて組合側に流した。組合側は、もうやめたくてしょうがない時だから、パクツと食いついたというわけです。そして、朝日新聞の論説委員のなんとかというシンパがおつて、ぜひそれは聞いてやれ、条件付き付与論がいいんだという。それは駄目だといったんだ。

三木さんはその問題の解決の時には、「プリンスプルを大事にや

らないといかん。いまあだ、いまこうでは、後に禍根を残す。片を付けるならば、きちんとやらなければ駄目だ」といろいろ言つたことを思い出しますね。

伊藤 そういう計画の中心は、やはり副長官がなつていたわけですか。

海部 いや、僕が中心だとは思いません。三木総理を支えて、そういうことを入れたり話したりしたのは、誰だったろう。いろんな人がおつたからなあ。僕の分野はマスコミ対策だけですからね。

伊藤 スポークスマンですか。

海部 うん。三木さんところへ集まつて、そういう知恵をつけたりしていたのは、参議院に山崎五郎というのがいなかったかな。党の労働部会長というのをやつた人でね。あまりパツとしなかったけれどな、悪いけど。そういう人たちがいろいろ知恵をつけて教えて、「三木さん、頑張れ、あんたのいう通りになるぞ」と言つていた。

伊藤 これは非常に目に見える形で三木内閣の功績ですよ。

楠 のちのち五五年体制がつぶれていく大きな原因にもなりますからね。社会党が消滅する遠因ですから。

伊藤 じゃあ、それをやっていて、先進国首脳会議に出かける準備なんかもそれと並行してやっていたわけですか。

海部 だから準備というのは、正直に言うと、僕はあまりしませんでした。そちらで朝から晩まで――。社会党の労働部会が始まる前にちよつと会おうとか、一日の話が終わつたらやろうとか。

そしてしばらくたつたら、備蓄ができたかどうか、動員したところへものを運ぶにはトラックが何台いるか、トラック業界の代表を呼んできたり、トラックの配置をやつたり、いろいろしなければならぬ。さあストを打たれたら本当に大変だけれども、初めてやらせるんだといつて突つ張つた以上、これはやり抜かなければならぬということだ。生鮮食料品だけはきちんと持つていないと、えらそうに正義を守ろうとか社会の秩序を守れとか言えなくなる。

伊藤 それ以前に比べれば、鉄道輸送に依存する部分は少なくなつ

ているということは確かですよ。

海部 だからわれわれは、鉄道が止まっても大丈夫だという確信が持てたんですから。むしろ大都会だからできるわけです。

伊藤 このあとになれば、農村の方がもっとできるような気がするけれど、この時代はそうですね。

■スト権スト3（社会党と民社党）

楠 労働政務次官時代の人脈というのは、ここでだいぶ生きてきたんじゃないですか。

海部 だいぶ生きてきましたね。あのころほうぼうへ行つて、いろいろつき合ったり、話をしたりしたのは、やっぱり人脈だ。

楠 それは対労組との関係ですか。

海部 対労組ともあるし、国鉄やいろいろなところの経営者のほうとか、中間管理職で手を焼いておった連中とか、いろいろありましたね。

伊藤 これは社会党との関係が非常に大きいでしょう。

海部 国鉄を動かしている社会党と、やはり民社党ですよ。民社党の中には、国労の中に入っている、こちらへ引っ張ってくるための人脈や知恵をたくさん持っている。特に及川「一夫」君なんていうのは、大変な味方になったからね。のちに参議院議員になったけれどもさ。

伊藤 民社系ですか。

海部 民社系。社会党ですけどもね。社会党ですけども、複雑なのは民社系。

伊藤 組合には一定の影響を持っているわけですか。

海部 持っているわけです。

伊藤 そうですか。社会党の中では、この問題に関しては、どなたが中心ですか。組合では富塚さんと直にいろいろおやりになったの

かもしれませんけれども、社会党がずいぶん絡んでいるわけでしょう。

海部 田辺誠とかね。

伊藤 田辺さんというのは労働組合出身じゃないかと思うけど、組合出身ですか。

楠 組合出身です。全通ですよ。

海部 あれは国会対策のレベルに上がって、田辺誠が社会党の書記長は長かったよな。そんな頃のアレもある。それから山口鶴男というのが、田辺の下にいた。この山口鶴男という人が、また社会党の中で、最後は書記長だったかな。富塚なんかと非常にパイプがあつて、オイといえ、すぐに電話してでも呼び出してくれたり、いろいろ協力してくれたんですね。

伊藤 もちろん、それは海部さんがお会いになれば、これは三木さんの代理だと思つて、向こうは会うわけですか。

海部 そうそう。「三木さんにちゃんとこういうことは話してあるし、伝えておく。それから君らとの約束の信義は守る。三木さんがそう言っておる」、こういつて啖呵を切つてやってきましたよ。

伊藤 信義といつても、こちらが何も約束しているわけじゃないんですよ。

海部 けれどもあの人たちも、秘かにこういつて、この案を出したとかね。さっきの話にあつたような、ああいうガセネタでも、これを出したとか。朝日新聞のある論説委員が書いた原案なんて持つて来て、「これを呑んだら一発で三木さんだつて、ええと言ふんじゃないか」とか当時あつたけれども、それは問題の根本解決にならないわけです。だからストをやる。そうすると処分をやる。またその処分反対のストがある。それで迷惑を被るのは国民だけだから、この際ストと処分の関係を断ち切れ。ストをやめるのが最初であつて、処分はしないと。のりしろはそこまで使った。そこまで、というから。

それを持つていつて呼び出して喧嘩をやつていても、なかなか詰

まりませんでした。これはエンドレスになってきたから、もしなんなら、ひよつとしたらランブイエの世界首脳会議は駄目になっちゃう。出発できなくなっちゃう。少なくともおれは付いて行けないよと言って、笑っていたことがあった。

伊藤 でもとにかく行かれたわけですよね。

海部 結局それまでに片が付いたんです。

伊藤 でも実際にストをやったじゃないですか。

海部 やったんですよ。やったけれども、あそこまでいくと――。

伊藤 もう先が見えているということですか。

海部 見えている。もうちよつとやらせておいてくれ、とかね。もうちよつとやっていないと、全軍に号令を出して動き出したから、いまさら引き返すわけにはいかないとか、ここまできてみんなくたびれちゃわないと、ものが言えなくなるとかね。まああの人たちの世界とつき合くと、左翼の我慢の限度というのが、ずいぶんあるんですね。

伊藤 わかりました。

海部 だってあれ、予言した人がおるんだよ。湾岸戦争でも。われわれは湾岸戦争はない、なしにしてくれということをさかんにアメリカへ言ったわね。けれども、それはそういう意見もいろいろあるだろうけれど、もうここまで来たらやらざるを得んのだという。その一番先頭を走っているのは誰だと聞いたら、やはりアメリカの軍関係が五十五万も動員されて砂漠の盾作戦で持って来て、そこへ降りちゃったわけだ。そうすると、ここからもゴースインを出さないと中が爆発しちゃう、駄目になっちゃう。だから、ヤーといってやって、まず突破口をつくってやらならないとならん。その代わり、チグリス・ユーフラテスの川辺までは攻めても、そこからは相手を攻めていかない。そこを越えると、今度は戦いの質が変わってくるし、準備するものの量の桁が違ってくる。

それを最後にいろいろ応援団長になってけしかけたのは、キシシンジャーだ。そのうちにキシシンジャーがもうちよつと正直にそう

いうことを書くなら、面白いなあと思っているんです。
伊藤 ありがとうございます。時間になりました。

〈以上〉

【注】このあと、二〇〇一年九月六日（第9回）、十一月五日（第10回）、十二月十日（第11回）と三回にわたって、別プロジェクトで、岩間陽子氏、石原直紀氏を中心に湾岸戦争時のお話を伺った。オールヒストリーの時系列の流れに沿わないため、この三回分は割愛する。

なお、湾岸戦争のことについては、海部氏の首相時代のオールヒストリー（第29回）で詳しく伺っている。

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 12 回

三木内閣時代Ⅲ（1975～1976）

【2002年1月10日（木）11:00～13:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

※第9～11回記録は掲載省略

【記録、編集】 丹羽 清隆

■新自由クラブ結成への動き1（発端）

田中 ロッキードの時に、河野「洋平」さんたちの新自由クラブができましたね「昭和五十一（一九七六）年六月二十五日結成」。三木さんや海部先生は、新自由クラブができる前に何か交渉はあったのでしょうか。

海部 あの頃のことは、僕の記憶に忠実に覚えていることを率直に言いますが、藤波「孝生」がそこについて行くかどうかということが一つのポイントでした。僕らは、せっかく三木内閣ができたが、三木派は正直言って力も削られておって弱いから、改革をやる者はみんなで助けてくれなければいかんじやないかということで、藤波に焦点を置いて説得しておった。ところで、西岡「武夫」君というのはいろいろな意味で近かったんだ。

田中 先生と近いんですか、藤波さんと近いんですか。みんなと近かったんですか。

海部 みんなと近いんだけれど、特に西岡と僕が近かったんだ。

伊藤 それは青年部の関係ですか。

海部 はい。それからまだ西岡が衆議院議員になる前、長崎新聞の論説委員が何かをやっておったときだ。長崎で知事選挙があつて、長崎新聞の系統の人が、県の農林水産部長を終えた松本さんを推すから、応援に来てくれといわれた。僕はそのとき、もう国会議員になつていました。

けれどもそれは、当時の長崎県全体を敵に回してやったわけですから約束の公会堂に行つても、そのときの知事から手を回されて締め出しを食つたんだ。「あの松本の演説会にこういう公の施設は貸せない」というんだ。そこで僕と西岡と二人で、締め出しを食つた農協の前に（まあ農協でやるのが間違いだつたんだが）、荷台のある小さな小型トラックを持っていって、どこからか持っていって

そこを明るくするバッテリーをつけて、その荷台に昇つて演説をやつたことを覚えています。松本さんがかついでいるから、ぜひやらせてくださいということだ。

僕はその松本さんという人をあまり知らなかったんだけど、西岡にとつては大事な人だった。西岡のお父さん、お母さんは、ご承知の通り長崎ではたいへんな人だった。どちらかというと骨つぱく、ときの知事とか、ときの党主流に弓を引いても平気な人々がたくさん集まつていて、そこからエボルブされてきた候補者ですから、僕もとにかく来てくれということで（笑い）、連れて行かれた。まあ仲間だからしょうがない。それで行ったんですが、演説会場で締め出しを食つたのは、天にも地にも、四十年の政治生活の中で一回きりです。

こつちも相当なものだから、その締め出しを食つた会場の前に車を持つていつて止めて、電気がつくように手配もして、そこでやつたんです。人はたくさん来まして、やつて良かった、ということですか。

伊藤 それで当選したんですか。

海部 たしか当選しなかったんじゃないかな。

田中 その方は党の公認だったわけですか。

海部 公認じゃない。

田中 じゃあ先生は、非公認なのに応援されたんですか。

海部 そんなことはしよっちゅうあつた。いい人か悪い人かで選ぶしね。もつとひどいときもある。そういうことはよくあるんですよ。

田中 そういう場合、幹事長から応援に行つてはいけないとか、いちおうお達しは出るんですか。

海部 お達しは出ますけれど、それは全然守られないお達しだ。それが政党の活力だということだ。勝つためにやるんだ、勝てばこの党は強くなる、ということをやつてきたんですけれどね。どちらかといえど、それは大きな秩序の中からいったら、破れの方だな。

田中 それで、西岡さんと「海部」先生は非常に仲がいいというこ

とですね。

海部 そういうこと等もあった。こちらも灯台もと暗しで、いろいろなことが起こったのは三木内閣ができた直後ですからね。みんな河野洋平が直ちにああいうことになるとは思わなかったが、河野洋平とも相当話が進んでおった。それには石川さんというどこかの新聞の黒幕がおった。その人が約束違反で記事を書いちゃったんです。田中 石川真澄ですか。

海部 石川真澄ではない。アナザー石川だ。

伊藤 そうですか。田川「誠一」さんは、最後まで洩れずに行つた、と言つていたんですけれどね。

海部 いや、洩れたんだ。洩れたから記事を書かれた。記事を書いたのは萩原さんという人です。

田中 何新聞ですか。

海部 まあ、それは本人から、聞けたら聞いてくださいよ。僕から言うわけにはいかん。あまりにも奥に入り込んだ話ですからね。そして「書く」というんだ。僕は「書くのは待ってくれ、いま書いたらいかん」と言つた。三木内閣はまだ始まった直後で、しかも一番頼りにしている人だ。

■新自由クラブ結成への動き2（伏線）

海部 もっと裏の裏をいえば、三木内閣の最初の閣僚名簿には若手代表で、河野洋平と海部俊樹が原案に入っていたわけですよ。ところが、いろいろな派閥力学の中で、両方とも飛んじやったわけだな。それは本人が電話で直ちにOKしてやったからいいけれど、三木さんとしては河野洋平をとりたかつたんだな。

田中 それは、三木さんが最初にお書きになった閣僚名簿に書いてあったことですね。

海部 そう。最初に、こうしたい、ああしたい、これはどうだ、あ

れはどうだという話だった。最後に、「どうだろうな、海部君や。厚生大臣の候補者のいいのがないんだけど、誰かこれを厚生大臣にしたらいいというのが、党内の特に若手の中でいいか」ということもあって、ああだこうだといういろいろ話をしておりました。

田中 それに河野さんがどうか、という話だったんですか。

海部 河野さんは厚生大臣ではなくて――。

田中 その秘密の最初の組閣名簿の名前は、先生は覚えていらつしやいますか。

海部 最初の組閣名簿の時は、三木さんがあくまでも書いたわけだ。田中 そこに海部先生と河野が入っていて、大蔵大臣とかも全部あつたわけですね。

海部 三木さんの最初のつもりでは、僕は官房長官となつておつたんだから。そのつもりで、西岡武夫さんを副長官にするつもりで、一緒に官邸に乗り込んで竹下「登」さんに会つた。そうしたら竹下さんが、「おう、接收部隊がもうすでに来たか」と言つた。「申し訳ないけれど、そうです」と言つた。そのときに、「正直に言うのと、三木さんという人は宮仕えの経験のない人だから、保守本流というところの礼儀作法やつき合い方は知らん。われわれ家来に至つてはまったく知らんから、この官邸のことをいろいろ知つていて、間違えても矩を越えずに、従来の路線で行政のたがは締めていかれるようにしたい。ということ、事務の官房副長官はたまたま私のよく知つた人だし先輩でもあるから、あれは残しておいてくださいよ」と言つたら、「それは新しい人が決めることで、辞めていくわれわれが決めることではないでしょう」という。竹下さんはあのとき、官房長官は一ヶ月か二ヶ月か、「第二次田中内閣の」最後の短い官房長官だったんだ。そこで、行ってそういう話をして、それなら残つてもらおうと思つた。

田中 また新自由クラブのところに戻りますと、藤波さんを巡つて、いろいろなことがあつたわけですね。

伊藤 その前に、そもそもそういう動きがあるということは、かな

り前からわかっていたんですか。

海部 これは言っちゃいかんが、西岡や河野洋平さんあたりから、いろいろな話を聞かされておったんだ。

田中 ええっ！ いつ頃ですか。

海部 だいぶ前ですよ。

伊藤 さっきのお話ではありませんが、三木内閣ができていよいよ改革をやると言っているときに、改革派が出て行くというのは――海部 だから、「逆に利敵行為じゃないか」と僕は言ったんだ。

「おまえらも改革派だと言いつて、改革するんだ、いままでではいけない、と言つて戦つてきたじゃないか。前に戦つた共通の目標をようやく倒して、椎名「悦三郎」さんがわけのわからないおまじないをやつて、三木さんじゃと言つたので、三木になった。そして政治改革というの、みんな唱えていたことで、それを三木がやろうと言つているんだから、それはやらせてくれ。いま君らが飛び出すと影響力が大き過ぎる。三木内閣には破壊的な影響が起きる。考え直してもらえんかい」と言つたんですね。

そのときに「われわれが」間違えていたのは、キーマンは藤波で、藤波さえ残せばこの話は雲散霧消するものだ、と思つておつたんですよ。その前からいろいろなことがありましたが、河野洋平のそのころの行動を調べてください。九州かどこかに、前から応援に行く約束があつたんだ。応援をやつたら、帰りにこそつと降りて、伊勢の藤波のところまで行く。そしてその話はどうするか、出てくるか、一緒に行動するか、思いとどまれというほか、どっちだ、ということ最後の詰めをやることになつていたんだな。

そのときまで僕は、絶対にそれが不発に終わるように願つておつたけれど、たまたま河野洋平が応援に行く日の朝の新聞に出ちゃつたんだ。それは石川さんが書いたのではなくて、萩原さんという人が書いた。これは河野洋平、西岡武夫と近かつた人ですからね。新聞社の方は、水をかけられてだいぶ萎んできたということを感知したんだな。ついていく予定だった藤波もだいぶ萎んでいたという

ことで、それでは、ということ、約束を破つて書いてやった。書いてくれるなということになつてから、絶対に出版せんよ、と言つていたけれど、出ちゃつた。出た以上、これを取り消すためにさらに十倍のエネルギーをかけても、消えるか消えないかわからない。

あのときは未必の故意があつたんでしょね。そうなるかもしれない、なつたらしょうがない、受けよう、ということでしょう。けれども、そういうことにならないように、この際、政治改革をやるから共通の目標を倒そうといった三木さんが立っているんだ。いまお話になつた田川誠一君も、ときどき深夜秘かに南平台の三木さんの私邸に現われた。河野洋平もときどき一緒に来ておつたんだな。三木さんは、そのころは田川誠一に話して、いろいろやつていたんです。そしてときどき、宇都宮徳馬大先生なんかも現われたが、あの人はそういう現実的な生臭い話までには嚙んでいなかった。もつと大所高所、大言壮語で、ふんぞり返つていた。わかるでしょう。伊藤 ミノフアーゲンですね（笑い）。

■新自由クラブ結成への動き3（新党結成）

海部 そういうことがあつて、河野さんが行つて帰つてきた。僕と藤波と渡部恒三は、早稲田大学雄弁会の同じ時で、渡部恒三を幹事長にして、おれと藤波が副幹事長で、われわれは外専門でやる。恒三の演説では優勝旗は取れないから、おれと藤波が行つて取つてくる。藤波は、「私はキャッチャーだから、ピッチャーはやらない」と言つていたが、雄弁会の同期です。当時、三塚博や松永光や、いろいろおつたけれど、あれは一期先輩です。脱線はそれぐらいにして、そこで藤波と話をする自信もあつた。河野洋平さんの方は西岡君が話をつけると言つていた。

伊藤 じゃあ西岡さんは少し揺れていたわけですか。

海部 揺れていたわけだ。だって、あの人がそうだった遠因はいままでの話の中に出てくると思います。西岡君のために、こんな話はなかったとみんなには否定しますが、あの人も本当は官房副長官になって、中に入ってきりきり舞いをやってくれるつもりだったんだ。腹を決めていたんだ。そうでしょう、内々二人を呼んで頼むと言われたんだから。

伊藤 それが無役になったわけですか。

海部 だから、とは言いませんよ。だから、と言ったら西岡にかわいそうだ。そんなものではありません。でもまあいろいろさういうこと等もあった。人事というのは、最後の最後の一晩でひっくり返るものですな。朝早く「三木さんから」電話がかかってきて、「海部さん、すまんけれど、君はな、副長官をやってくれや。その方がすべてうまく収まるわ。君のためにもなるよ」という話だったんだな。

伊藤 じゃあ夜に決まったんですね。

海部 夜決まったんだ。われわれが帰ってから決まったんだ。それでおれは、「副長官は西岡じゃなかったんですか」と言ったんだ。

「いや、西岡さんは西岡さんで、また働いてもらうから」というようなことだった。

伊藤 先生としては、西岡さんに義理が悪いですね。

海部 それは義理が悪いわ。家来みたいなことを言って、官邸に行つて竹下にも紹介したんだからね。格好悪いわ。けれども西岡はそんなことはひと言も言いませんけれど、やがて、僕に言わせれば、そういうこともモヤモヤした原因の一つになったのかな、と思ひまされどね。本当に燃えて燃えて政権を取ったんですから。そのとき、自分もここでお力添えしよう、お手伝いしようと思つたということは大変なことでしょう。

伊藤 そうですね。そうすると、事柄の推進の中心は誰だったんでしょうね。

海部 それを推進したのは、河野洋平がその気になっていたのは、

周辺にいろいろな人がおつたけれど、両方かけて冷静に見ていたのは西岡の方だったと思います。むしろ燃え上がっていなかったのは藤波孝生だと思うんだ。よそから見れば、藤波が動けばみんなついて行くだろうと思つていた節もあった。藤波はああいう人だから。けれども結果から見ると、そうではなかったんだな。

伊藤 藤波さんも、船が出る寸前までは行くつもりでいられたんじゃないですか。

海部 あれも五分五分だったと思うよ。船が出ても、結果として藤波さんは乗らなかったわけだから。

伊藤 ウツと留まったんですね。

海部 乗ってくれと最後の駄目押しの期待をもつて、河野洋平が宇治山田まで行つたんだ。僕らはその前まで西岡を呼んで、河野洋平にも「行つてはいかんよ、出たらいかん、出たら三木が駄目になる。三木内閣がもうじきやるんだ。政治改革を出して党内がごちゃごちゃでどうなるかわかんときは、選挙もやらなければならなくなる。そのとき果たす役割もたくさんあるんだ。いま党を割つたら、さなきだに弱い三木派がさらに腕一本もがれて弱くなる」と。そんなことでしたよ。

伊藤 田川さんに聞いても、なんでここで党を出るかというニュアンスがよくわからないんですね。

海部 けれども、その田川さんが一人で別の行動をとつたんだ。

伊藤 もう突つ走つて、こちらに戻れない。

海部 助けてもやらなかったわけでしょう。それは宇都宮徳馬さんもちよつと違つたほうに走つたし、田川さんもそうだった。田川さんというのは初当選が僕と一緒にだ。田川社会労働委員長の時には、僕は国会対策委員長だからうんと助けたんだ。社会労働委員会の法案を助けたが、採決をしなかったというので、いつか言わなかったかな、社会労働委員会の暴れん坊のハマコー「浜田幸一」が僕のところに来て、「田川を刺します」と言つたんだ。「お国のためです」とは言わなかったけれど。「浜ちゃん、そんなことやったら駄

目だよ、それは通用しない。どんな大義名分があるうと、何があるうと、吉良上野介は駄目だ」と言っただけですけれどね。結局、最後に田川さんが躊躇逡巡したがために、そういう騒ぎが一回あったことも事実。

ところが田川さんは、日頃われわれと一緒にあって相談する人じゃないんだ。自分はもう少し上の方の人だと思っている。だから、三木さんのところには直接行っている話もしてくるし、宇都宮徳馬とはサシで会っている話もあるけれど、われわれとはサシで話をしたことはないんだ。だから西岡やほかの者も、「田川は別格官僚社だから」ということで、一目置いて別にしておっただけな。またそんな感じがする存在だったな。

佐道 西岡さんは揺れてはいたけれど、最後に河野さんの説得は西岡さんに任せたというお話だったと思うんですね。そうすると、最後は西岡さんはやめようという意識になられていたんですね。

海部 なっていて、いったんはブレーキをかけに行っただけ。

佐道 それで、ミイラ取りがミイラになっちゃったということなんですね。

海部 そうなっちゃったんだ。

■新自由クラブ結成への動き4（新党の意味）

伊藤 先生から見ても、河野さんの意図は何だと思いましたか。

海部 それは、自分がこういう行動をすることがいまの政局を変えられることができるんだ、ということでしょう。

伊藤 三木内閣を助けることになるということですか。

海部 いや、三木内閣を乗り越えて、目の前の一内閣よりももっと大きな政治の改革をするという目標があると思ったんじゃないですか。洋平さんという人は、三木内閣を作ったそれにやらせるというのではなくて、自分が必ず総理になって、自分が改革するんだとい

う気持ちがあった。

田中 何か展望があったんですね。

海部 展望がないから、やっちゃいかん、といってみんなでブレーキをかけたんだ。いまはまだ早過ぎると言っただけ。「天の時、地の利、人の和」というけれど、それが熟したときにそういうことは成功するから、それまでは早まるな、ということでもみんなが説得したんじゃないですか。

伊藤 だけどとにかく「新自由クラブは」次の選挙ではずいぶんブームになりましたね。

海部 自分の選挙だけは強いんだ。

伊藤 なにか神奈川の政党みたいなのがありましたね。

海部 そう。自分の選挙だけは強いんだ。だから選挙区を二つに割って隣に息子を出して、まだ当選できる。選挙だけは強いんだ。

伊藤 これは三木さんはどう見ておられたんですね。結果的には、まあしょうがないということでしょうかね。

海部 結果的にはそうですね、しょうがない。けれども僕らがしょっちゅう会って話した綱引きの経緯は報告してあったんだけれど、「最後まで努力せいで、夢は捨てちゃいかんよ、あれらにも迷いがあるはずだ」と言っていた。

田中 実際に党が結成されたとき、連携とか事実上の連立とか、そんな感じで接せられたんですね。それともまったく野党の一つとして――。

海部 連立というのは結果として、佐々木義武以下が金包みを持ってきた、それを出して、連立の話を新自由クラブに持ちかけたわけでしょう。あの頃には、そんなことをやっていかんと断わりながら、結局最後の最後は、それで連立しちゃったんだ。途中の経緯はいろいろあったけれど。

伊藤 新自由クラブは野党になったからといって、三木内閣反対という野党ではないんでしょう。

海部 ないんです。その頃でも、西岡が絶えず、こうです、ああで

すと言う。「予算は通すようにします」とか言って来てくれるから、「頼むよ、そうやってくれよ」ということでした。

田中 じゃあ内閣とのチャンネルは、西岡さんがやっていたわけですね。

海部 はい。

伊藤 河野さんではなくて、西岡さんなんですか。

海部 そうです。

伊藤 思いもかけずに何か面白い覚ができたんだな。この問題はそのぐらいでいいですね。

■ロッキード事件1（発端）

伊藤 さて、ロッキードのお話はまだ伺っていませんね。いよいよロッキード事件が発覚したということで、名前は出ないけれど、「日本の高官」ということがアメリカの委員会に出ますね「昭和五

十一（一九七六）年二月四日」。

海部 コーチャンですね。

伊藤 だいたいそのときには、それは田中「角栄」だと直感的に思っただけじゃないですか。

海部 三木さんは、直感的に思ったかもしれない。

伊藤 海部さんは思わなかったんですか。

海部 僕は直感的に、そこまではまだ行かないと。そうだったとしても、いきなり田中総理のところまで来るとは思わないし、いきなり頂上作戦ができるとは思わない。その下に田中系の幕僚たちがおるでしょう。そのうちの誰かだと思った。ああいうところは尻尾切りといって、それを出すことによって、みんな被せちゃって、チャラにしようという非常に非常に長けていましたからね。誰がその役を買って出るか、ということも興味の一つだったな。

伊藤 ああ、そういうふうに考えていたんですね。三木さんとして

は、これは徹底説明をやるよ——。

田中 おっしゃってましたね。国会でもそうですね。

海部 国会で、あの頃は僕が議連の委員長だったんですよ、いや副長官だったんですね。

伊藤 副長官だけれど、議連とおっしゃいましたね（笑い）。

田中 実際はそんなものかもしれませんね（笑い）。

伊藤 いや、実際そうなんです（笑い）。

海部 たまに忘れちゃって困るんだな（笑い）。議連の委員長のところに行つては、「総理にこういう答弁をさせるが、どうだ。止めたりするなよ、突然の発言だから」といつて。だからあの総理の発言がああいうふうに出るといふことは、誰も知らなかったんですよ。だから当時、議連では叱られたんだな。事前にもうちよつとチェックして、そこらの話がつくまでは本会議なんか開いちゃいかん、ということになるわけです。ところが開いちゃったし、やっちゃった。そして三木さんはしゃべっちゃった。

伊藤 「これは徹底的に追及いたします」と。

海部 「それが日本の民主主義のためになる。日本の民主主義はそんなに弱いものだとは私は断じて思っていない」とすごい顔をして演説をしたね。

田中 ということは、そのときもう田中を、と思っていたんですか。

海部 三木さんのところでは、稲葉修さんを通じて、どうも最後は行くところまで行くぞ、と思っていたでしょう。そこらへんのボラやフナじゃない。

田中 コイですね。

海部 引き具合からすると。

伊藤 三木さんがそのことに賭ける意気込みは大変なものだったんですね。

海部 あの人には口が堅いから、僕らにも言っていないことと、いかにことをよく心得ているわ。下手にしゃべってまたリークされたらかなわない。そういうこともあるでしょうね。それから三人で話した

ことはすぐ洩れるという。

伊藤 二人だと大丈夫ですか。

海部 二人の時は洩れない。

伊藤 誰が洩らしたかわかるわけですね。自分か相手しかないから。

海部 だから僕らも二人で話をして、「言うなよ」と言われたことは言わなかったな。言ったら、官房副長官だとすぐバレてしまう。

田中 三木さんとしては、田中さんをここで取り除くことが自分にとって非常にいいことだと思っただけですかね。

海部 僕だったら小人だからそう思うだろうけれど、三木さんのような志の広くて高い理想主義者は、ここをいま除いておくと日本の政治がよくなる。議会政治がこれで蘇るんだ、というような発想だったと思うな。自分が、という発想ではなかったと思うよ。だって、再三「わしは議会の子である」と言っていますね。そして議会をよくすることがわたしの仕事だということですから。

■ロッキード事件2（フォードへの親書）

伊藤 総理がフォード大統領に親書を送りますね。ああいうことは手続きはどういうふうにするんですか。

海部 あれは「総理が」自分で書いちゃったんですから。

伊藤 自分で書くんですか。

海部 自分で書いた。そんなもの、外務省を呼んで、これを作文してこい、なんていうわけにはいかない。もちろん日本語で書いたんですよ。「この原文を入れて」と言われたから僕はよく覚えていて、原文と訳をきちんと書いて、それは手紙ではなしに、直接渡せということでした。

田中 誰が渡すんですか。

海部 それはパウチャーとかいう極秘の書留があるじゃないですか、

外交ルートでやるものが。あれだと思っています。

伊藤 じゃあ外交ルートで行くわけですか。

海部 だって、外交ルートで行かないと、向こうだって受けとらんでしょう。だから外交ルートで行って、アメリカ大使には直接三木さんが、こういう事態になったからこうする、という。ほかの役人に立案させて、起案させて出していたら、どこでどう改竄されるかわかったものじゃないから、自分できちんと書いたものを送らせた。

伊藤 誰が英語に翻訳するんですか。

海部 それは外務省でしょう。けれど、オリジナルがあれば、下手な訳をされたってすぐにバレますからね。そういうことが私の記憶にはありますね。

田中 海部先生も原文はごらんになったんですか。

海部 日本語の手紙は見た。あのころ、そういうことは外務省から出向して秘書官をやっていた国弘正雄というのがいた。あれは同時通訳もできるくらいのベラベラだから、サミットの時も外務省の通訳だけでなしに、国弘も連れて行った。だからブッシュとの同時通訳には国弘が入って全部やっていましたね。ああいうときには、国弘が起案するなり、あるいは外務省から来ておった秘書官と相談して書くなりしたんじゃないですか。これは僕の推測ですがね。日本語の原文は、僕は見えています。書いて、「どうだい、これで。人に言うなよ」と言われて、読んだ。

伊藤 「人に言うなよ」ですか。

海部 口止めされたから、「はい、はい」と言った。そういうことがありました。

伊藤 それは官邸ですか。

海部 私邸。あの人はときどき帰っていたんです。

伊藤 さっき、田川さんとか宇都宮さんも南平台とおっしゃっていました。それは私邸の方に行くんですか。

海部 私邸です。

伊藤 私邸に行くと、副長官としては誰が行っているかよくわかり

ませんね。

田中 「海部」先生も行かれていますんじゃないですか。

海部 僕もしよっちゅう行っているから、わかるわけです。永井道雄もその頃しよっちゅう現われておったし。

田中 そうすると、グループで私邸に集まるような感じなんですか。

海部 前から共通・共同で研究していたようなグループもあったんですね。これは役人だからかわいそうなので名前は言いませんが、自治省の関係者で、選挙のことに非常に詳しい人と言えたいは絞られてくるけれど、その人も僕は何回も会ったことがある。それは内閣ができる前からだ。そして最初にイギリスに行つて、腐敗堕落防止法のあるところがコツだから、あのコツがあるところから、それをよく見てきてくれ、といっていた。

伊藤 新聞記者なんかも一緒ですか。

海部 別の部屋で待っていてもらいました。新聞記者のおるところで一緒にしやべったら、その日のうちにバーツと広がりますから、それはありません。

伊藤 三木さんの私邸に、新聞記者も入るわけでしょう。

海部 応接間の方に入れてやるんです。だからそういう人が来ると、応接間ではなくて、座敷の奥に入れる。新聞記者にわからないような道は、裏の娘婿の家だ。だからそっちの出入り口から入ってくればよかったです。

伊藤 新聞記者にわからなかったのかな。

佐道 私邸に戻られるのはときどきとおっしゃいましたが、官邸では会にくい人たちと会うために帰られるんですね。

海部 そうでしょうね、僕の推測では。

伊藤 そのフォード大統領に出した親書の返事が来るわけですね。それはごらんになっていますか。

海部 いや、その実物だけは僕は見ていないけれど、フォードは高く評価して、やろうと言うんだ。だから「三木さんが」、「やるから、腰を抜かすなよ」と言われたのを覚えているな。

伊藤 「腰を抜かすなよ」ですか。

海部 「腰を抜かすなよ」と言われた。フォードという人は、三木さんとよく似ていて、長いあいだの議会人としての経歴があったから、相通じるところがあったんでしような。

■ロッキード事件3（稲葉修法相）

伊藤 この段階では、三木さんはかなり事態についてわかっているんですね。

海部 どこからどこへ行ったという、おぼろげな大きな構図はわかったはずですね。だからこれは検察に任せて、検察に明らかにさせればいいということだったと思いますよ。

伊藤 でも検察を守らなければ、いろいろなところから横やりが入るでしょう。

海部 それは法務大臣を呼ぶんだ。どういう言葉遣いをしたかわからんけれど、稲葉法相が呼ばれて二人でじっくり話をした。あの人は長いあいだの同志ですからね。国民協同党の。それからあそこはえらい奥さんがおったんだ。「あなた、しっかりしなさいよ」というようなことではつばをかけられて、いろいろやっていったんだ。

田中 恐妻家なんですか（笑い）。

伊藤 愛妻家というんでしょうね（笑い）。

海部 愛妻家と言いながら、字がちよつと違う。そんなことまで言ったらいかんなあ（笑い）。

伊藤 だんだん火が燃え上がってくるようになると、それと並行して挙党協「自民党挙党体制確立協議会」のような動きが出てくる、ということになるんですね。

海部 そうでしょうね。ああいうことは、椎名さん一派としてみれば面白くなかったんでしような。もっとズバリ言えば、だいたい、いぶし出されて浮き彫りになってきた人たちのところは警戒してい

ましたよ。「三木さんは」あの頃、「わしはもう誰にも言わんけれど、わしが当然中味を知っていると思うから、こないだうちも君がおるときにちよろちよろやって来るのは、知っておるかどうかを探りを入れに来たんだ。おまえさん、誰に聞いてきたんだと言っても、誰も出てこない」と言うんだから、相当な波紋を呼んでいたのは事実ですが、まさか田中角栄さんのところ、総理のところへ直接行くとは誰も思っておらなかったですね。

伊藤 その段階でも、ですか。

海部 その段階でも。それほど自民党のそれまでのやり方で、防衛線はしっかりしておると思っていた。いろいろなトーチカや、突破できないものがあるし、最後に守るべきものはあるはずだ、セリフもあるはずだ、というような説明が一つありますね。

それからもう一つ、これはまったく政治家ではないけれど、かなり著名な作家でいろいろのことを僕に直接話す人が、「本当に三木さんはあそこまでやっちゃうつもりなの。それは三木さんのためにも、日本のためにもならんよ」ということを、大所高所論から言つて、真面目に「思い直さないか、考え直さないか」という意見を述べた人がありましたね。

田中 そうなると、三木さんが検察に直接ご指示なさったということとはないですか。検察は、自民党的な方向に行くかもしれないと。

海部 検察は、稲葉修さんを通じて本音のことをいろいろ言ってきたんじゃないかな。そして稲葉さんに、「その通りやりなさい、それはわしがちゃんと応える」というようなことではなかったかしら。

田中 そうすると田中逮捕に関しては、稲葉さんの性格がかなり重要になってきますね。

海部 稲葉さんはあのときは田中逮捕でも、それよりもっと大きな保護法域の順位ということを、学者だから考えていた。この際、保護法域で一番大きいのは日本の国だという発想じゃなかったかな。そんな詳しく稲葉さんの話を聞いていないけれど、ときどき行つて

は、「よろしいですか、ちよっと報告があるから」というと、稲葉さん自身が「どうぞ、どうぞ」というから、入っていつて聞いた。あの人は中央大学のおれの先生だから。

田中 先生ですか。憲法ですか。

海部 憲法。

田中 学者法相だったんですね。

■ロッキード政局1（挙党協の動き）

伊藤 挙党協みたいな動きがごそごと始まったということは、なんとなくわかるんですか。

海部 あれは船田「中」さんの周辺からポロポロ洩れでした。「船田さんの周辺がおかしですよ」とおれが耳打ちをしたこともありました。聞いたから。「そうかい」というようなものです。

伊藤 船田さんは、かつがれたんですね。

海部 かつがれたほうだけれど、よく聞いてみると、かつがれることにまったく異存はないんだ。そういうふうにして人の目に晒されることは平気だから。世に出た一番の理由は、憲政記念館かどこかに議員を集めて、挙党協を発足させたことだ。

田中 「昭和五十一（一九七六）年」八月十九日となっていますね。

海部 そんな頃だったと思いますよ。

伊藤 でも、前からそんな動きがあるんでしょう。

海部 それは表立ってはあまりないけれど、前から椎名「悦三郎」さんが、「わしは生みの親ではあっても育ての親ではないよ」と言ったことに端的に現れているわけだね。

田中 そういう長い伏線があつて、田中さんが逮捕されたので、燃え上がったというイメージですか。

海部 三木が田中逮捕を抑えなかったのはけしからん、ということですね。

伊藤 そこが一番のポイントですか。

海部 そう。知恵者がおつて、僕にも電話をかけてきて、「総理大臣というのはな、海部君、オールマイティなんだよ。だから大養健の事件があるけれど、法務大臣なんていうのは、総理大臣の、言うならば家来だから、悪ければ替えちゃえばいいんだから」というようなことまで荒々しく言つて来た人があつたな。

伊藤 要するに、指揮権発動をなぜやらなかったのか、ということですね。

海部 その人たちはやれ、というんだ。「指揮権をちよつと発動すれば、そこまで行かないじゃないか」というんだ。

伊藤 佐藤栄作の前例もあると（笑い）。

海部 いろいろ言つてきました。

田中 そういうことを言つたのは、のちに挙党協に入った人なんです。

海部 そう、挙党協に入った人です。

伊藤 挙党協は、田中派はもちろん、福田・大平両派を中心に、椎名、船田、水田とメンツが揃つたら、党内の大勢ですね。

海部 大勢で、数においては勝負があつたということですね。

田中 中曽根「康弘」はどうなつたんですか。

伊藤 中曽根さんは入っていないでしょう。だつて幹事長でしょう。

田中 何か曖昧な感じだったんですね。

海部 中曽根さんのあのときの基本的なスタンスは、行き詰まれば次はおれだ、ということでしょう。またそんな状況でもあつたな。

伊藤 そうですか？ 次だと言つても、挙党協のほうに入っているわけではないでしょう。

海部 だから、入つてはまずい。

田中 入つてしまえば、回つてこないかもしれない。

海部 そういうことだったと思いますよ。

伊藤 しかし入らないで、党内の多数をとるわけにはいかんでしょ。

海部 しかし入らなければ、ほかがみんな潰れたときはそこに行くじゃないですか。

田中 三木も挙党協の一部も推してくれるというイメージだったんですかね。

伊藤 このときはまだ幹事長でしょう。そうすると、三木内閣を支えているのは、三木派と中曽根派――。

海部 それだけになつちやつた。

伊藤 そうすると、もう内閣はガタガタですね。

海部 だから選挙でもやつて、そこで斬り死にするよりしようがないな、ということですよ。けれど、それは華々しくやろうとすればだ。田中 挙党協ができた頃に、解散とか、そういうことは三木先生はおつしやっているんですか。

海部 そんなことは言いません。そんなことは言いませんが、取り巻きが言うんだ。井出「一太郎」さんもその頃は腹を固めていましたよ。

伊藤 いざとなつたら選挙に打つて出ると。

海部 はい。「海部さん、もう殿はその氣になつて、短期でもご出陣だから、そばにおつてしっかり支えてくれ。いざとなつたら、選挙の風はまたどうなるかわからない。選挙をやつて勝てばいいんだ。けれども勝てるか勝てんかを決める前に、選挙をやるかどうかというときには、できるだけまあまあといい全体の合意がなるべくできるように。それには大義名分がいるんだ。立てて走る大義名分の旗がなければ選挙は戦えないんだ」という。選挙をやるには大義名分が必要だということを、あのときいろいろ井出さんが教えてくれたな。

田中 ロッキードなんて、まさに大義名分になつたんじゃないでしょうかね。

伊藤 それで「昭和五十一（一九七六）年」九月十日に臨時閣議を開いて、臨時国会召集の閣僚署名を要請したら、閣僚の大半が署名しない。

海部 十五名が朝、別のところが集まって、いまはこういうことで署名すべきではないだろうとやっているんだから。

伊藤 そのとき、挙党協の人たちが党内調整の方が優先するということですが、党内調整の具体的な意味は何ですか。

海部 これ以上党内に無用な混乱を起こしては日本の政治のためによろしくない、ということですね。

伊藤 でももう田中さんは逮捕されているし、さらに引き続いて、佐藤孝行さんとか、橋本「登美三郎」さんも――。

海部 あの頃は全体の構図が出てきておりましたからね。大変なことになる。けれどもそういうときに、被害を最小限度にとどめる方法はないだろうかと言ってきた人もある。挙党協側の一部の人の知恵というのは、そういうことですね。これでやったら、この党は全部終わりになっちゃうという。そこで三木さんが、「いやそんなことを言ったって、日本の政治のためだ。日本の政治はそんなに弱いものではない。もっとしつかりしたものだから、この際これを一つの突破口にして、改革をやり遂げなければならぬ」ぐらいのことを言うものだから、何をえらそうなことを言っておるか、というような感情的な反発もあったことは事実ですね。

田中 三木さんと、大平・福田とは、何回か会ってお話をしていますね。

海部 会いました。

田中 そのときのお話の内容について、先生はお話を伺っていますか。

海部 いや、あのときはホテルオークラの特別なスイートにみんな集めて、福田さんと大平さんと、当事者二人だけで来てくれということから、そのときは直接腹を割って話をしてくださいということ、連絡をして集まってもらうところまでセットしますね。あとは食事を入れる。

伊藤 本当にその三人だけになるんですか。

海部 本当に三人だけです。

伊藤 誰も陪席していないんですか。

海部 いっぺん、井出さんが中に入ったことがあったかな。

■ロッキード政局2（臨時国会召集か解散か）

伊藤 結局三木さんの方としては、解散という最後の手段がある。解散されると、挙党協のほうは具合が悪いわけですね。解散の大義名分は、どちらかというと三木内閣の方にあるわけですね。

海部 そうです、あのときはね。

伊藤 ロッキードを徹底的に解明しようというのに、一所懸命それに反対しているわけですからね。

海部 これほど大きな疑惑を国民が持つておる問題について、さらに蓋をしようという対策では絶対に救われない。だからアメリカの民主主義も、日本の蘇りのためなら資料も出すという。ところがあれはよく調べると、アメリカは免責約款を取り付けてやっているんだ。けれどそれはそれ、これはこれだ。もらってきてやればいいんだ。要するに明らかにすることだ。最近のことみたいな話で、情報公開をきちんとしなさい、ということだ。

伊藤 そこから先は裁判の問題ですね。

海部 そこから先は裁判で、裁判をしつかりわれわれが支えていけばいいんだという基本姿勢でした。

伊藤 結局、臨時国会を召集する、しないでもめて、国会は召集するけれど解散はしないという線で折り合ったわけですか。

海部 折り合ったわけですね。

伊藤 それはだいたい三者のあいだでの話ですか。

海部 あのとき中に入ったのは保利茂さんじゃなかったかな。保利さんから僕のところへ電話がかかってきて、「海部さん、三木総理によく言っておいてください」という。

伊藤 保利さんは挙党協の側の代表ですね。

海部 まあね。

伊藤 船田さん、保利さんということですね。

海部 船田さんは挙党協側で、代表委員になつていらっしゃるから。それであの頃の構図は、保利さんがそこに入つた。保利さんはなんとかして喧嘩激突みたいな急場は救いたい。

伊藤 要するに自民党が分裂しないように、ということですか。

海部 そう。「そしていま選挙をやつたら駄目だ。自民党は負けてしまう。それで最後の最後によく話をするから、もう一日慎重に対応してほしい」と、保利さんに時間稼ぎをやられたんだ。それはすぐ三木さんに伝えました。いいとも悪いとも言わなかったけれど、「うーん、そうか、そうか」と言つていただけだったな。それで

「井出を呼べ」と言われて、井出さんと話をした。そのときも最後の最後は、永井道雄の話を聞いた。永井道雄は当時文部大臣だった。永井さんと呼んで、会つて話した。それからどうするか、せっかくそこまで言うのなら、保利さんという話をしようということだ。いまやつたら駄目になると言つて、たしか一日待つてくれという電話が保利さんから入つたんだ。それで保利さんのことを当然総理にも伝えましたし、官房長官の井出さんにも伝えましたよ。それからまた相談をした。ずっと張りつめておつたのが、急にフツと抜けたのは、永井さんがそれに賛成したときだ。徹夜みたいな状況でいろいろなことを言い合いしていたときに、時間のことは当時の手帳を見なければわからんが、「ここらでちよつとみなさん、お腹に入

れて、ちよつと空気を入れ換えたらどうだろうか」というようなことを言われて、どこからカレーライスを取つたんです。その瞬間、ああこれは気が抜けたなと思つたな。これで話がついちやうな、と思つた。三木さんにしてみれば、井出さんとのあいだでは、とにかく臨時国会も開かせない、十五人も集まつて今日の閣議で求められても署名はしないというようなことを決めて「といつて怒つていた」。その日じゃなかったかしら、一人逃げちゃった閣僚がおつたな。

伊藤 逃げちゃつたというのは？

海部 逃げちゃつたというのは俺の言つた言葉だから、それは悪いな。ほかの用を作つたんだ。外務大臣という立場上これはやつておかなければならんとかいつて、北方領土のことか何かだった。「あんなもの緊急でも何でもない。いつでもできるじゃないか」と言つて、三木さんが怒つた。けれども外交上の問題で、言われればね。のちのちまでも尾を引くことになるんですが、一人そういう人もあつた。

そういうことがあつたので、保利さんがみんなを集めて「今日一日はあれするから、短気を起こすな、起こしたらおしまいだ」と、保利さんの影響力の効く人に説得もした。あの頃、別に表立つてはいなかったが、金丸「信」さんは保利さんに心酔しておつたし、金丸に言われれば竹下「登」は何でも聞いちやう。そうすると、潮の流れが変わり始めたな、ということになるわけですね。中曽根さんもそういうのをずっと見ておつて、本領を発揮して、よしこつちだ、ということになるわけでしょう。その代わり、今日は辞表を取らない。あのときは辞表を取るところまで行つておつたんですからね。

田中 辞表を取つたら、総理が全部兼務するようなイメージですか。海部 そうです。けれどもそのときに、いちいち兼務というのもあれだから、少々秩序・年齢にこだわらずに、若手を採つたらいいといつてリストアップして、「井出君とよくあれしてみて」というようなところまで状況は行つておつたわけです。

田中 じゃあリストもできていたんですか。

海部 だいたいの粗削りのリストだけれど、それは陽の目を見なかった。

伊藤 それは挙党協に入っていない人たちを中心に（田中 三木派と中曽根派で）やる以外にないですね。ほかの派からは――。

海部 呼べません。ほかの派から呼んで、ということにはなりにくかつたですね。そんなときに一本釣りされて、こつちに來たら、その人はそれで政治生命を失うわけだから。

伊藤 挙党協のほうとしても決め手がないといいますか――。

海部 自民党のためにならないというんだから。守るべきものは何だ、ということはずっと詰めていったら、とても天下国家の前で公にできるような話ではないですからね。

伊藤 自民党の立場ですからね。

海部 そうです。「国民はこれを支持するとわしは確信しておる」と言つて「三木さんは」強かったですからね。

伊藤 そうしたら、いよいよの場合は、辞表を取つて、改造をやつて、それで臨時国会を開いて、何が何でもううまく行かなかつたら解散、というコースですね。

海部 そうです。

田中 私いま記憶を蘇らせているんですが、あのときに挙党協が党大会か何かを開いて、三木さんを降ろす。対立候補、たぶん福田さんぐらいを立てて駄目にする、という話がありましたか。

海部 そういうことを一つとして画策したこともあったので、その対立候補はいつたい福田さんか、大平さんかということで、三木さんはしれつとした顔をして二人を呼んで、「どっちがなるんだい。決まっておつたら話さないよ」という。「福田氏の声で」そんなところまで、まだ「大平氏の声色で」ああ、それはあ、思つたこともありません」とかいふことで、その場は消えてしまふね。

伊藤 本当のところ、そこは調整してきていないわけでしょう。

海部 きていないんだ。だから三木さんが、「わしが今日は性根を据えて聞いてみる」といつて、その直前に風呂に入つて時間が遅れたんだよ。巖流島の時だ。僕は周辺の取り巻きだから、秘書官や井出さんと、「今日は巖流島になるからそのつもりで」と言つていたんですけれど。

佐道 それは八月の三者会談のことですか。

海部 三者会談。その前に、向こうは向こうで集まっているいろいろ話をされたでしょうけれど、誰かを立てて降ろさなければならん、戦わなければならんというときに、両方から話を聞いても、一本化さ

れたという話が入らない。そのときはそのときで、また城内交渉か何かで考えようということがぎりぎりだと思ふんだね。両方でお互いに票読みをやると、これはどう考えても、数の上ではこっちが多いけれど、いま直ちには福田さんの顔を立てなければ駄目だとか、いろいろな話が右から左から入ってくる。

伊藤 そういう状況は、新聞記者とかいろいろなところから情報として海部さんのところに入ってくるわけでしょう。

海部 そう。新聞記者も言ってくるし、両派のいろいろな人も教えてくれるわ。

伊藤 事実上一本化するのはいさし難いでしょうね。

海部 そこで、じゃあ一年経ったら辞めて替わると一筆書けとか書くとか、下の方のレベルで話をしたんだけど、それはまとまりませんでした。それはそうです。

■ロッキード政局3（松野政調会長）

伊藤 この三木内閣には、松野頼三さんがずいぶん協力をしているはずですが、どういう場面で出てくるんですか。

田中 そろそろ出てきますね。

海部 松野さんは、自分が一回幹事長になったんです。けれどもそれは、福田派・田中派両方が共同戦線を張つて、駄目だという拒否権発動があつた。そこが三木さんのジェントルマンらしいところだな。どうしても断固松野に、とは言わずに、また松野を呼んで、二時間か三時間、二人で話し込んだらうな。僕は隣の部屋で待つておつたから、何があつたかわからんけれど。けれども、終わつたとき「三木氏」は、「松野は政調会長だよ」「幹事長じゃないんですか」「幹事長じゃない」「じゃあ誰にするんですか。もう一回中曽根さんですか」「違う、内田常雄だ」という。そのとき内田常雄が初めて出てきたんだ。内田常雄が幹事長で、松野が政調会長で、

事前の三役構想から替えられたわけですよ。

伊藤 それは「三木内閣」改造の時の話でしょう。

海部 いや、松野さんはどんな動きをしたのかということだから。

伊藤 その前からずっと三木内閣を応援していたけれど、あの人はもともと福田派の人でしょう。

海部 福田派の人です。

伊藤 このときは三木派と非常に密接だった。

海部 非常に密接だったけれど、そのときは松野さんの心の中にある「ジギル博士とハイド氏」みたいなもので、政治改革をしなければならんという心と、党のためにはこれはやらなければならんという悪の心と、両方に長けた人ですから。あのときは、この際は三木を助けておかなければ、日本の国際社会における信用がどうなるのか、というようなことで、党大会でやった松野さんの挨拶を聞いて、僕は感銘を受けたな。

田中 いつの党大会ですか。

海部 三木さんを送る言葉だ。

伊藤 最後の時ですか。

海部 最後の時。なんとかの梟というのがあったな。知恵の代弁者、官邸の上にくっついていて梟が。

田中 ミネルヴァの梟ですね。

海部 そうだ、ミネルヴァの梟に三木さんを喩えて、送別の辞をやったんですよ。あれは声涙共に下る話でしたね。直接ここには関係ないが、そのときに、ああ松野さんはこういう気持ちで助けておつてくれたんだな、と思った。

伊藤 三木さんにだいたい膝をさすられたようですけど（笑い）。それで結局、臨時国会を召集する。しかし解散はしないということ、だいたい三木内閣は終わりになるよ、という感じになるわけですか。必ずしもそうではないんですか。

海部 そこまで入れるとおかしくなる。選挙の結果、新総裁のことについては国民が明らかにするだろう。選挙に勝ったら三木内閣が

続くし、選挙に負けたら三木さんはそこですっぱり替わるよ、という腹を決めておつたんじゃないかな。だから選挙で負けたときに、私が「辞める必要はない、分裂選挙を仕組んだんだから」と言ったけれど――。

ちようどあの日、NHKの国会討論会があつて、僕が副長官で出ていつて、安倍晋太郎や竹下と「討論を」やったときに、「挙党協のみなさんがそんなことを言う権利はない。党が一致して選挙を戦つておればね。大平さんのときには二四八に減ったことがある。三木の場合、減つたと言つてもそれよりも多い」とか、そういう屁理屈を一所懸命探し出してやつただけけれど、三木さんは腹を決めていたんだな。終わつてから南平台に行ったら、「聞いていましたよ、海部さん。わしの気持ちをもうちよつとこう、教えとけばよかったな」という。アメリカですね。あの時初めて、グッド・ルーザーという言葉を使った。三木さんは叩き込まれていたんだ。負けたものは潔く退くべきだ。もし他日があるとすれば、それにつながるし、他日がないとしても、グッド・ルーザーは選挙の結果についてガチャガチャ言わない方がいいんだ。負けは負けだ。それが民主主義だ。

■ロッキード政局4（一九七六年十二月の総選挙）

佐道 十二月の総選挙で自民党が負けることになるんですが、その前の九月に三木・中曽根・船田・保利の四者会談で合意ができて、解散を回避して国会を召集する。そのあと、十月にまた挙党協が三木総裁退陣要求をする。このときは後継・福田でまとまることになるわけですね。その前に、稲葉さんがロッキード問題の灰色高官の名前を公表するという一連の動きがあるんですが、そういうことがさらに挙党協の動きに火をつけたということになるんですか。

海部 物語としては非常に推理が正しいけれど、それはあり得る結論だと思いますよ。灰色高官というのは誰だというのは、公表され

るまでは誰もわからんわけだから。しかし、もしかしたらあのときのあれかな、と秘かに思う人もおるじゃないですか。そういうのが集まって、だんだん火が大きくなってきたと僕は見ています。

伊藤 その決着はついたけれど、挙党協は挙党協として、まとまって三木内閣を倒すというところまで頑張るわけですね。

海部 そうですね。

伊藤 三木さんの方は三木さんの方で、それをなんとかしようというところで手を打たなければならぬ。副長官としては何を――。

海部 あの頃は選挙に勝って、そのことを金科玉条にして中央突破する以外手がないと思った。それ以外、頼るべき横のつながりも派閥の力もない。国民の目指す方向はそれではないんだということしか言えないわけです。また事実そうであった。

田中 もう選挙を睨んでいろいろな布石を打たれているというイメージですね。

海部 そうです。それしかないわけです。

田中 ふだんの選挙とは違う対応をされたんですか。普通の自民党の選挙と違って分裂選挙だったんですが、三木陣営としてはどんな対応をされたんですか。

伊藤 完全に分裂選挙になったわけですか。

海部 分裂選挙です。

伊藤 そうすると、選挙本部が二つできたんですか。

海部 いや、選挙本部は二つはできなかったけれど、選挙本部といわずに各派閥ごとに対策本部をつくったんだ。挙党協のほうは挙党協の方だが、おかしなもので、挙党協でも福田派と田中派はまた違いますから。腹に一物、背中に荷物。それがみんな一致結束したも

のにはならなかった。

伊藤 じゃあ選挙協定もできないわけですね。

海部 選挙協定なんてやっていないですよ。

伊藤 分裂選挙というのは、本当に派閥バラバラの選挙ということなんです。

海部 おつしやる通り、派閥バラバラ選挙です。派閥と派閥の日頃の関係が深いところは、お互いに相互援助協定を結んだりするでしょう。

伊藤 三木派にしても、中曽根派と何とかできるわけではないでしょうし。

海部 それぞれの中で、例えば加藤常太郎さんなんていう人は、派閥からいうと違うけれど、あの人は当時からいろいろ連絡をもらってやっていたし、松野さんもちろん最たるものであった。さすがに政治生活も長かった三木さんだから、あんなところにも隠し球、と言うと悪いけれど、隠し球があったのかと思う。応援に行ったりしたこともありまうからね。

田中 先生が地元で演説されるときも、ロッキードの関係でいつもと違った雰囲気を感じられましたか。

海部 あのときは、私の選挙区に関する限りは、断固やれ、ということだ。

伊藤 いつもと同じということですか。

海部 いつもと同じ。「やれ、やれ、頑張れ、頑張れ」ということだ。それから、静岡に福田さんのほうの小島「静馬」君というのがおったでしょう。「応援に来てくれ」というから、「おれは三木派だぞ、応援に行ってもいいのか」といったら、「いや、みんながあなたのことを応援に来てもらえという。自分も当選できるかどうかの運命を賭ける選挙になったから、来てくれ」というんですね。

佐道 ご都合主義ですね（笑い）。

海部 それで僕は小島静馬のところに応援に行ったよ。それでまことに次元は高いけれど、「今日は派閥なんていう小さいことで来たらんじやない。政治改革をやらなければいかんという志に燃えているんだから、その政治改革ができるかできないかは、この小島静馬候補を通じて全体みなさんに広がるわけだ。日本の世直しだ。今度は世直しの選挙だ」というと、だいたいそのへんからみんな納得して、ワーツと拍手を買う。だから日本の選挙は情緒だな、と思いました。

ね。「派が違うことは百も承知で、しかもそれを乗り越えて、なお大きな目標をという優先順位の高い使命感があるんだ。この選挙区でいうと、小島静馬君を勝たせることである。頼む、みなさん」といって――。

田中 もう一度確認しますが、挙党協は統一の選挙事務所はつくらなかったわけですね。つくれなかったんですね。

海部 つくれなかったと思うけれど、集まっつてごそご飯を食ったり、交流したり、話をしたりしていることはその通りです。当時のことは、福田派の中堅若手の仲間から教わったわけだから。

伊藤 実際、統一選挙事務所を作るのは無理でしょう。

海部 無理です。それを作る以上は、どんなアホでも、これで自分は一つ間違つたら干される、消される、それでもいいからやっていこう、という自信と度胸がある人はあまりたくさんいない。

伊藤 ご自分の選挙はらくでしたか。

海部 らくでしたね。

伊藤 もう安定しているんですね。

海部 その頃はいつも最高点だもの。それは選挙区が強いということとはありがたいことであつた。このあいだ率直に言つたように。

伊藤 たしかに強いですね。後顧の憂えなしということですね。

海部 それは日頃から直接有権者と接触する努力をしていますから。

伊藤 副長官として活動していても、ですか。

海部 副長官の時にもずっと回っているし、僕が行けないときは、家内が行つたり息子が行つたり、それは日頃の接触というのはあるんです。

伊藤 やっぱり一家の事業なんだ。

佐道 先生の場合は地元は盤石だから、ほとんど三木派の応援で、あちこち全国を回るといふことですね。

海部 はい、そうでした。

佐道 全国各地での反応はいかがでしたか。

海部 それは自分の選挙区みたいにはいかなわな。ちょうど僕のと

ころには江崎真澄という人がおつて、田中角栄派のやつが応援にきていても、「なんだあんなものは。おれは田中角栄には煙草銭一銭もらつたこともないでな」なんて野次りに行く後援者もおるし、そんなことを得意げに語り合うという雰囲気は当時はまだあつたんですね。

伊藤 どうもこの選挙は負けそうだな、という予感でしたか。うまくいったら勝てると思ひでしたか。

海部 いや、こっちは勝てると思つて、勝てると思つてやつたんだけれど、結果はああいふ状況だったね。だから三木さんはサツと割り切つて、わしは辞めるからと言つた。退陣の辞をすでに書いておつて、「読んでみい、これ」という。

伊藤 ロッキード事件の問題で、自民党全体が評判が悪いから、なかなか選挙で勝つというのは難しいですね。

海部 それをよくするから頼む、といつてもなかなか――。

■防衛費GNP1%枠問題

田中 挙党協が大騒ぎをしているところで、防衛費をGNPの1%にするというのが閣議決定されていますね。そのあたりの経緯について、ご記憶のところを教えてください。

海部 あの当時のことを思い出しますと、GNPの「1%程度」にするだつたか、「1%以内」にするだつたか。

佐道 「1%程度」と「1%以内」でもめたんです。それで「1%を超えないことをめど（にする）」になつたんですね。

海部 あのととき党内からも、1%でいいじゃないか、1%でいきなさい。何も日本は武力による威嚇や武力の行使を好んでする国じゃないんだから、必要にして十分な軍勢力で、というような声があつたな。松野さんが言つた言葉だけれど、「慎ましやかな節度のある軍勢力は、GNPの1%でいいし」と言いながらニコニコと笑つて、

あの一流の言い方だな、「海部君、日本の国というのはこれからどんどん大きくなるんだ、みんなよく働くから。そうすると、その1%はね、きみ、毎年増えるんだよ。この勢いで日本の経済が大きくなっていくと、1%といつても、そのうちに買うものがなくなっちゃうぐらいだよ」というような言い方をされていた。「だからこは君もガタガタせずにはちゃんと腹に納めておけ。1%程度ということでもいいんだ。こちら「GNP」が大きくなっていけば、相対的にこれ「GNPの1%」も上がっていくんだ」と言われたことを覚えてる。

あの頃も討論会をやると、よく1%問題が出てきたものですね。けれど、日本の国力はだんだん大きくなっていくから、「防衛費も」だんだん大きくなっていく、なんていうことはテレビでは言えませんが、「謙虚な1%という枠は、歴史に反省して、近隣諸国と日本との安定的な関係を守っていくために必要なことなんだ、国民のみなさんにもこれだけ拠出してください」とお願いして認めてもらったでしょう」という。当時はまだ災害対策に自衛隊があんなに働くとは思わなかったから、またそちらの方へ専門に使うなんていうことは言えなかったのだ、「いつどこでどういう目に遭ってもこの国を守っていく、みなさんの生活を守っていくためにきちんとやっていく」と言うにとどめておりました。

田中 それはそもそも三木さんの発想なんですか。三木さんが言い出したんですか。

海部 三木さんが言い出した。誰かと勉強会で、合意して納得したんだろうな。

田中 そのアイデアを出したのはどなたですか。

海部 誰だか知らん。三木さんという人は、政治家のプリンシプルに関するについて、あれがこう言っておったからこうだとか、あれがあだからこうだとか、絶対に人のせいにはしない人だな。だから人の意見も聞きながら、自分がいっぺん噛み砕いて、飲み込んで、それから今度自分の表現、自分の言葉にして言う、という人だ

な。

■ミグ25強制着陸事件（一九七六年九月）

佐道 防衛の問題が出たのでついにと言つては変ですが、まさに軍協だなんだといつて大騒ぎをしているときに、九月にソ連からミグ25が突然やってきて函館に強硬着陸するという事件があつて「昭和五十一（一九七六）年九月六日」、これはまた大騒ぎになつたんですが、この一連の経緯は覚えていらつしやいますか。それこそ役所は消極的権限争いで、押しつけ合つたりしてなかなかまとまらなかつたという話がいろいろ出ているんですけれど。官邸にいらつしやつて、だいぶご苦労されたんじゃないかと思うんですが。

伊藤 ベレンコですね。

海部 ベレンコが飛んできて、飛行機を見えないように幕で囲つたんですよ。けれど、下品な言葉だから使いたくないけれど、野っ原で立ち小便でもしているところなら囲っておけばいいんだけど、そんなものを囲つてなんだ。いまの時代は人工衛星が飛んでおつて、地上の十センチのものでもわかるような精密な分解度のものがあるんだ。天井も囲わなければ、と言うようなことを言った人がおつた。まさにそのときの直感で図星で、どれだけ日本が分解して部品ごとに調べ上げたか、またそれを組み立て直すということをやる技術を持つているか、ということを知つて、アメリカも驚いた。

伊藤 アメリカ軍が協力してやつたんじゃないですか。

海部 それはアメリカは承知の上でやっているんだ。ばらして調べているということは承知だ。けれども人工衛星でそれを見ておつたのは全部アメリカです。ソ連の方は、飛んでおつても、解像力の高い絵は持っていなかったと思うんですね。だから逐一壊したり、まとめ上げたりする作業は、アメリカがみんな人工衛星で写したんだな。

伊藤 自衛隊の専門家がそれをやったんですか。

海部 「頷く」

田中 アメリカは画像をとったかもしれませんが、自衛隊はアメリカに流してはいないんですか。

伊藤 情報は流したでしょう。

海部 情報は流した。こういうことをやるとか、こうなっていると、ああだとかこうだとか。それで向こうは、「うんそうか、そうか」といって、自分の知っていることでも知っていると云ったら答えないから、日本の情報は「ほう！」といって初めてみたいな顔をして、「もうないか、もつとないか」と言つて次々に取るわけでしょう。

田中 そのときは海部先生は積極的にコミットされたんですか。

伊藤 現地に行かれましたか。

海部 現地には行きません。全部こうなっていると見せてくれるものの。

伊藤 誰が見せてくれるんですか。

海部 アメリカ。アメリカの大使館の係のものが、作業はああで、こうでということぐらいまでは、ちゃんと説明に来るわけだ。それは僕に説明に来るといふよりも、総理に説明に来るんだ。

伊藤 じゃあ先生は三木さんからお聞きになるんですか。

海部 だいたいのはね。時には一緒にあって、見せてもらったり聞いたりのこともあります。そのときはたしか坂田道太さんが防衛庁長官でしたが、見て知っていたと思うな。それから副長官の川島広守が、ああいった手続きとかやり方について詳しくなかったけれど、軍事内容とか、ミグがどうのこうのということについてはあまり詳しくなかったな。坂田さんもそうだし、三木さんもそうだ。

伊藤 でもあれは、機体を返却するかどうかとか、ベレンコの亡命をどうするかとか、いろいろな問題がたくさんあったと思うんですけれど。

海部 いろいろな問題があつて、各界の人が真剣に説明に来たり、

こうすべきだということも進言したりしていましたね。けれど結論は、これだけ世界が見ておつたことであるし、さつき言つたように、ちよつと困つておいて、用が終わつたから困いをとれというような問題ではない。こちらに対して、これ以上何もなければ返したらいと。

伊藤 そのへんの判断は、どこが中心になつてやつたんですか。官邸ですか。

海部 官邸だと思いますよ。あの頃は内閣調査室とか、外務省の情報とか、そういうものを総合的に判断して、どうだこうだと。そういうことを持つてくると、三木さんのところで報告を受けて、はいといつて、そうしなさいとか、そこはこうしろというようなやりとりをしたんでしょう。最後は結局「返すからね」といつていた。

伊藤 やはり官房の関係ですか。

海部 官房が絡んでいる。

田中 副長官は関係なかったんですか。

海部 おれはそういう知識があまりなかったものだから。

伊藤 ちよつと待つてくたさい、改造「昭和五十一（一九七六）年九月十五日」で、官房長官が替わるわけでしょう。

佐道 井出さんですね。

海部 替わりません。副長官も替わらなかった「ママ」。引き続きやつてくたさいといわれた。

佐道 あのミグの事件については、法務省、防衛庁、外務省、警察、運輸省、そういうものがみんな絡んでくるわけですね。だけどみんな、自分たちはあまりやりたくないから押しつけ合つたりしているところをやるには、官邸がリーダーシップをとつてやらなければならぬ。

海部 そう。そうでないと、あの頃は危機管理の問題で、一つの省庁が全部を仕切つて引つ張つていくような権限は与えられていなかったし、みんなそんなに自信がない。この問題はどうか、これはどうかということで、自分のところに関する限りはこれでこうだ

ということまで心配ないけれど、そういうことでああいうところで合議するんですから、結論はなかなか短時間で明白には出ないな。

伊藤 それは官房長官が仕切るわけですか。

海部 結局はそうです。

伊藤 じゃあ井出さんはそこでちゃんと仕切ったわけですね。

海部 そこがおれじゃないほうの、事務の副長官の川島広守さんが出てきて、いろいろ言ったりやったりするわけだ。警察「出身」だ。伊藤 じゃあ、そこがリーダーシップを持ったんだ。

海部 井出さんは困っちゃって、いろいろ来たときには、直接三木さんに判断を仰いだり、自分で誰かを呼んで聞いたりしておったと思いますよ。

佐道 最終的には、機体は船積みして返すということになったわけですが、大きくいうと反省点として、こういう場合の危機管理体制ができていないということ、それから悠々と着陸されてしまったという防衛体制の全くの不備が明らかになったわけですね。これは両方とも国家的な内情ですが、政界は挙党協がらみで大変な混乱状態。これは事件が終わったあと、どうしようかという話にはなりませんでしたか。

海部 理屈としては、誰が言い出したのかな、許可を求めずに領空に入って、着陸するというとはいかんから、許されない。そういうときにどうして航空自衛隊はスクランブルをかけなかったんだ、ああいうときは、「ここから入ったら……」とか、いろいろなことを言えるはずだ。そういう権限が法的にもあるはずだ。というような議論をいろいろしていた。けれども、例えば権限があるとしても、誰がそれを判断して、誰が指示すれば済むことなのか、また済んだことに対して、そんなことをいくら後追いで言ってもしょうがないじゃないかという堂々巡りの議論があったことも覚えております。どうしたらいいのか。なるほど法規としてみればそうですよ。日本の飛行機が飛んでいったら、あるいは「止まれ、止まらなければ撃つぞ」といって撃たれたかもしれない。

伊藤 それは当然ですよ。だいたい気がつかないうちに着陸していたんでしよう。

佐道 途中で見失っちゃったんですね。

海部 気がついたら来ておった。明らかに手落ちで、防衛に穴があったということですよ。

伊藤 低空はリーダーに引っかけられないんでしよう。

佐道 引っかけられないんですね。ただ最初に入ってきたのはわかってたのに、ある段階から見失っちゃった。だから防衛体制に大変な不備があるということがわかった。

海部 あれが善意というのか、亡命者だからいいけれど、不審船みたいにいるいろいろなものを持ってきて、さあやっちゃおうなんて撃ち出したら、これは大変だったと思うよ。笑い話では済まないと思う。

■三木内閣退陣

伊藤 たしかにそれは凄まじい問題だったと思いますが、三木さんは選挙で負けた、ということであっさりと退陣という決意をされたんですね。

海部 あの人、アメリカ民主主義で教育を受けているから、グッド・ルーザーの原則で退陣する。

佐道 そういうときに、身近にいらつしやる側近中の側近の海部先生のような方にも、進退についての相談はなさらないんですか。

海部 どうしよう、なんていうことは言わない、「わしはもう決めたから」という。そんな挙党協がおって、半煮えの選挙をやって、結果責任だけ負われるのはいかん。しかもたしか大平さんより一議席多かったんだ。二四八と二四九の差があったと思うんですね。

佐道 このときは二四九ですね。

海部 大平さんの二四八だったんだ。それもきちんと出して、という、「そんな、数の一つや二つの問題じゃないんだ」という。

田中 三木さんがお辞めになるときに、遺言みたいな三項目の政治改革を進めろということを提言されましたね。

海部 書いたな。

伊藤 「党改革の提言」ですね。あれは三木さんがご自分でお書きになったのですか。

海部 もちろん自分で。

伊藤 ああいうものは全部自分で書くんですか。

海部 全部自分です。

田中 全部自分ですか。誰にも相談しないんですか。

海部 はい。

伊藤 夜、私邸で書くんですかね。

海部 夜、私邸で。

田中 筆で書くんですか、ペンですか。

海部 ペンだろう。深夜秘かに沈黙考して、自分で書く人ですよ。

伊藤 そういうのは誰にも見せないで公表するんですか。

海部 自分で書いて、公表する直前には「読んでみい」という。井

出さんにも、考えて朱筆を加える余裕を与えないで。

伊藤 「昭和五十一年」十二月五日に総選挙ですから、選挙が終わって、十二月十七日に党三役に正式な退陣の発表をしているわけですね。あいだがあるわけですね。

海部 退陣の腹は、すでに選挙に負けた途端に決まっておったと思いますけれどね。

伊藤 先生がさつきおっしゃった国会討論会に出たというのは、もう選挙が終わったあとでしょう。

海部 結果が出て、安倍晋太郎も来ておった。「挙党協のあなた方が二重選挙をやって、あれだけ取れば立派なものだよ。敗北というものではない」と言って、いろいろやり合ったことを覚えていきますけれどね。

■外交・危機管理問題

（金大中事件の政治決着、クアラルンプール事件）

伊藤 それでは、あとあまり時間がありませんので、外交問題をちよつと先に伺います。

佐道 このあとの懸案にもなるんですが、金大中事件の政治決着を宮澤「喜一」外務大臣がなされたんですが、その一連の経緯をお願いします。

伊藤 これはまだいま微妙な構図がある問題ですけれど。

海部 現職だから――。

伊藤 お話になれる範囲でお願いします。記憶がございますか。

海部 あります。だって九段のプレスホテル「ホテル・グランドパレス」のところで捕まったの、捕まらんという話から始まって、あれは間違いない、あそこに指紋を残していたのは、大使館、出所はK C I Aだ。だから外交官じゃないのが入っていつて指紋を残してきたといわれて、それは間違いない。

伊藤 国家主権の侵害だ、というわけですね。

海部 そうですよ。

伊藤 それで政治決着をして、そのことを完全に認めさせたわけではないでしょう。

海部 あのとときは宮澤さんがえらい張り切ったな。「そんなことを総理、おっしゃるならば、当時警察官その他、そういう立場に立つものには……」、まあ、やめておこう。なかったことにしておいてください。

佐道 まだまだお話になれることではないわけですね。

海部 当事者がまだ向こうの大統領だからな。

伊藤 そうですね。だけど当時のK C I Aだけではなくて、日本の中にも協力者がいたんじゃないかという説もあるわけですね。

海部 金大中の協力者はいっぱいいますわね。

伊藤 いや、この事件に関して、KCIAのほうに協力したやつがまあ、これもまだ危ないな(笑い)。

海部 危ないな。危ないわ、これは。

伊藤 政治決着を図るということは、日韓関係をなんとか普通の形に戻そうということが眼目なんでしょうけれど、基本的なことをおいたままでの決着になってしまった。

海部 あのとときの状況からいったらやむを得なかったろう。決着はせいぜいやむを得なかったということでしょうね。

伊藤 この点はまた別の機会に。時間が経てばまた。

佐道 金大中も今年にはお辞めになりますから。

田中 このインタビュはまだまだ続きますから。

伊藤 終わったときに話していただきますから。

佐道 改めて、またじっくり伺います。

もう一つ外交絡みといいますが、「昭和五十年八月四日」クアラルンプールでハイジャック事件があります。赤軍派ですね。これも超法規的な処置で出すことですが、これも官邸を中心に最終的に決断をされたということになると思います。

海部 あのとときのことは、超法規的にやって、その他の方に重大な犠牲が出ないように、ということを優先しちゃったんじゃないかな。伊藤 たぶん、客観的に考えてみて、それ以外にやりようがなかったと思うんですが、そういうことに直面したときに、誰がどういふふうに対応するものなのか。それがもともと、はっきりしていなかったわけでしょう。

海部 ですから、あのととき僕らは大変なミスをやったわけです。閣議の手続きも経ずに総理談話を発表しちゃったでしょう、官房長官に電話をかけて。もつとも、官房長官に通告すれば、それで手続きが全部済んだと思うが、閣議を開いて、閣議で総理大臣談話は全員が署名する。署名せんまでも了解を与えて記者発表するんだけど、時間がないうちからと言われて、サアツと書いて、「ポイントは」と言

ったら、「人命を」という。そういう手続きを抜いたというミスはあったんです、反省すれば。

だから危機管理という面からいったら、ああいうことについては直ちに臨時閣議を開いて、閣議で文案を示して決定してもらわなければならん、ということがありましたね。けれどそれは守らなければならんという手続的な問題であって、どうするかということになるとやっぱり、身を守る、犯人を確保できるなら確保する、というようなことに指示は当然向いていかなければならないんだけど。

伊藤 犯人を確保するなんていうことはできないでしょう。

海部 できないです、全然。

佐道 ちょうど当時訪米中でいらつしやいましたが、情報は刻々と入ってくるんですか。

海部 入ってきます。「アメリカに」着いたその晩ですから、時差が非常に厳しいわけです。そしてあのブレアハウスというのは、一つひとつ部屋が離れていますからね。僕に割り当てられた部屋には、僕以外の者は来られないわけです。ホテルの方に行くから。それから総理夫妻の寝室と、総理の秘書官などの一群のあれはありますね。ああいうときに深夜秘書官あたりから言われても、じゃあ総理に言わなければならぬ。あのとときは外務大臣と一緒にブレアハウスに泊まっています。外務大臣の意見を聞いてくるといっても、「総理はどうおっしゃっておるでしょうか。一つ総理のお耳に入れておいていただきまして、はあ」なんてさっぱりだから、こっちがのこのこ行って、「こういうことが起こりましたよ」という。「そうか、いま日本の時差は」というので、「それは官房長官にすぐに言いますけれど」といった。当時は福田さんが副総理だったから、「福田副総理に頼んで、そこらのこと、日本国内のことはやってもらってほしいよ」ということまで話があった。それで日程は全然関係ないから、やりますと。

たしかハビブとかいう名前の人がアメリカの国務省の極東担当の局長だったかな。それでハビブに連絡をとって、それをやった。日

程はつつがなくこなしていった。そのうちにいろいろな話が入ってきて、日本の方でも官房長官が記者団に恥をかけた、閣議をやっていないんだから。それはいまからいえば私が手続きを取らなかった手続き上のミスです。けれども、結果、あのクアラルンプールのときは、きちんとやったはずですね。日本国内でも何もトラブルが起こったわけではなかったと思います。

伊藤 とにかく日本がそういう危機に対応できるような状態ではないということは、こんにちに至るまであまり変わっていない。

海部 こんにちはそうですね。いつの時でもそうですよ。こんにちも、良かった良かった、というけれど、一つ前の不審船事件で経験したから、何かあるとそこから――。

伊藤 少し前に進むんですね（笑い）。学習が非常に遅いんです。海部 という気がします。

■総裁選への予備選挙導入

田中 あと、三木内閣で自民党の総裁選挙の規程が変わりますね。

いままで国会議員の先生方の投票だったのが、予備選挙を入れるということに変わりますね。そのへんの経緯は、先生はご記憶ですか。

海部 あのと予備選挙のことをきちんと考えて、これをやったらどうだ、近代的国民政党と三木さんがいつもいつているんだから、国民政党というのなら、国民の声を聞いたって間違っていない。けれども、ポピュリズムという言葉は使わなかったと思うけれど、

そのへんの人に、「おろい、集まってくさい、どうですか」というわけにはいかんから、何かそこにひとつ大義名分を考えてみる、ルールもきちんとしたルールを考えてみる、という話があった。三木さん自身はそういうふうに変えていくことが――。党内だけの戦いでは勝てつこないことが百もわかっていっているわけだから。

田中 やはりそれですか。党外の人気で、自分の党の地位を高めよ

うという意識をもっていらっしゃったんですか。

海部 そこまで言い切っちゃうと要求水準が落ちるけれど、党そのものがもうちよつと生まれ変わって蘇っていくためには、特定の党内の国会議員だけの投票では、日頃いろいろなことで色づけがされちゃうじゃないか。色がついちやうじゃないか。そこで、嫌な言葉だけれども、ニツカとかサントリーとか、いろいろなことを言われるようになる。そんなことに全然関係なく、多くの人が投票して、その結果を大切に。ちょうどいま小泉「純一郎」内閣ができる前の議論と似たような雰囲気だなと僕は思っていましたけれどね。

田中 当時は、総理自体は、いわゆる派閥選挙になって、予備選挙も結局派閥が仕切ってしまうというようなことは、夢にも思っていられなかったんですね。

海部 思っていないかった。国民全体にまず門を開く。だけれども国民は誰でもいいというわけにはいかん。あの頃だったかな、街頭に行って千円出して黨員になってもらって、その人に投票権を与えたら、そういう人は政治に対して良くしようという意識のある人だ。意識のある人だといっても、それならばといって、当時は田中派が金権選挙には強いという党内世論もありましたし、参議院の全国区の候補者の各団体別の推薦指名というのも黨員の数その他によつて決まってくる時代だったから、そこがもう少し変わるように、意識の高い黨員が、というところに絞っていく。それを考えてみい、という。

たしか松野さんが政調会長で、その方法はどうかやったらいいだろうかといろいろな人に意見を聞きながら、政調会でいろいろな意見を出して、選挙制度調査会に下ろさなければならぬ。たしか、自民党の選挙制度調査会長は久野忠治さんだったと思うね。辞めちゃった統一郎のおやじのほうだ。あの人にはちやきやきの田中派だけれど、「これは絶対に角さんの意見ではありません。久野忠治の意見です。これをおやじになるならば、党内でオープンな議論をして

みます。本当にやれという腹かどうか、確認してきてください」と俺が言われたことがあったんだな。

田中 そうすると、田中派自体は賛成だったんですか。

海部 いや、田中派としては賛成じゃないですよ。そんな危ないことをやったらどういうことになるか。というのは選挙の手続きもまだ決まっていなかった。そのうちに党員を作って、その党員は住所・氏名・職業がはっきりしていること。一時期松野さんは、「そこに住んで、住民税を何年間か払ったこと」という条件になれば確かだかな」といつていたけれど、そんなことはしかし、失礼ながら調べられんぞ、ということ、議論としては一蹴された。結局、党費を三年間か四年間、たしか三年間、必ず納めた人でなければいかん。選挙が近づいたから入党して党費を払うといっても、そういう幽霊党員、にわか党員は駄目だといって、住所・氏名・年齢、全部書いて出してもらって党員にしたんだ。

けれどもあのときは、立替党員という抜け道がきたり、タマさんとか、ミーちゃんとか、猫や犬のような名前が出てきた。それから当時新聞の投書欄に「私は労働組合の委員で、自民党なんかこれっぽっちも支持しておらんのに、私のところに手紙が来るとは何事か。誰かが私の名前を使って幽霊党員を作ったんだろう」というようなことも載った。だから、党費を継続して納めることぐらいを条件にしておこうという議論を始めるときには、われわれも加わっていたことを思い出します。

伊藤 ちょうど時間ですので、今日は三木内閣が終わりになったというところで、次回は福田内閣ですね。

海部 先生、外交のことだったら、三木内閣になって初めて、これは日本のためになるんだからやれ、やろう、といったことがある。三木さんのセリフとしては、「もうアメリカも、ヨーロッパとだけ相談しておってできる時代は終わったんだから、とうとう日本にもこういう呼びかけが来るようになった」ということだった。

田中 サミットの話ですね。

海部 最初のサミットです。

田中 じゃあそこから伺いましょうか。

伊藤 そうですね。あと三木内閣の全体としての評価という問題もありますからね。

海部 外交で初めて、西側の一員として出ていった。あのとき三木さんはだいたい「これが必要だ」と言っておりましたしね。それから最初、ランブイエというところのサミットに行くときには、こっちは何もさっぱりわからんわけだ。けれども「よく調べておいてくれ」というんだ。よく調べておいてくれといわれても、日本でやったことがないから調べようがないけれど、と言いながら、外務省の秘書官を使って調べた。そうしたらあの頃ちょうどフランス大使にジャイアンツというあだ名の大きいやつ。欧亜局長を終わってからフランスに行った人がいた。その大使に裏を取らせたら、いろいろなことを言ってきたんです。そのこともぜひ、みなさんも調べて、そこからやってもらえればいい。

ジスカルデスタンがどれほどそれに力を入れていたか。三木さんが「これは日本にとつて画期的なことだ」と言つて、準備を始めたこともありましたから。

佐道 ランブイエ・サミットは非常に大きなことですからね。

海部 第一回目のサミットですからね。

佐道 それでは、次回よろしく願います。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 13 回

三木内閣時代Ⅳ（1975～1976）

【2002年2月18日（月） 14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

■ランブイエ・サミット1（サミットへの招請）

伊藤 前回でいちおう三木内閣の終わりまでたどり着いたんですが、みなさんのほうで、三木内閣のことでもう少し追加してお聞きしておきたいということがありますか。

佐道 前回、サミット「一九七五年十一月十五〜十七日」の話からやりましょうということで終わっていますね。

海部 最初がランブイエでしょう。「秘書の方に向かって」昭和五十年のランブイエ・サミットの前後の新聞を出してください。あるいは、あの時のやり取りのご発言要領でもいい。

伊藤 ご発言要領ですか。

海部 そんなのをくれるけれども、それは僕はあまり使わなかった。伊藤 最初のサミットだということで、その後ほど大袈裟なものではないでしょうが、準備もいろいろ大変だったのではないのでしょうか。

海部 わからないことが多いので、準備は本当に大変でしたね。まったくわからないんですから。

背景として、当時はアメリカとヨーロッパ諸国とが話し合って、世界中のことを心配して取り仕切っているという風潮だった。けれどもその頃に、やはり日本も入れておいたほうが世界経済という面から必要だということになって、日本が入ることになったんです。記憶を思い出すと、ジスカルデスタンさんから官邸に電話が入った。彼らはその前にヘルシンキ会議をやっていたんです「ヨーロッパ安保協力会議、一九七五年七月三〇日〜八月一日」。そして有名な「ヘルシンキ宣言」を出して、戦後の国境線は力でもって変えないということを決めた。

そこで僕らは北方領土の問題を特に言った。あれは戦後のことではないので、明らかに理由があったり原因があるものは、第二次世

界大戦が終結した時の国境線でも変更する余地があるんだぞ、ということを確認した。また確認するのに非常にふさわしいから、それをやろうとした。ジスカルデスタンにはそのことを事前に連絡もした。

当時の「元」欧亜局長の北原「秀雄」さんも中へ入って、そういう点が日本にはあるんだよということを言ったんですが、まだその時の最初のサミットでは、とても北方領土の問題までは入って行かないから、日本側にあるという程度のことで思っておれ、それよりも何よりも経済が大変だ、だからフランスは経済の問題について今度はやるといふ。

だから初めサミットは「主要国経済会議」といったんですね。それで経済問題の勉強をやったり、一つの蛇の道といったけれども、各国の通貨の変動幅をここに収めようというようなことをやるから、日本もそれに協力して参加できるようにしてくれ、というやり取りがあつて、みんな初めてのやり取りだから緊張したことを思い出します。

伊藤 そのヘルシンキ会議とサミットは関係があるんですか。

海部 底流では関係があるんです。そこに出ていて、ジスカルデスタンは少し範囲を広げなければならんという。アメリカも、そうしたほうがいい、日本も入れて話に参加させたほうがいい、ということになってきた。

伊藤 最初は五ヶ国ですね。

海部 五ヶ国です。最初はイタリアもカナダも入っていないんです。ヨーロッパもまだE.U.という前で、ECですからね。ヨーロッパの三ヶ国、フランス、イギリス、西ドイツとアメリカ、日本です。あとからイタリアとカナダが入ってくるようになった。だから、最初の時は五ヶ国の首脳会議だった。最初はエコノミック・サミットと公称していました。

田中 もう一度確認しますが、日本を入れようとしたのはジスカールなんですか、それともアメリカですか。

海部 アメリカです。アメリカだけれども、あの時はみなが向こうに集まったから、それでジスカールが積極的に事前に官邸に電話をくれたり、いろいろ連絡をしたということだと私は理解しています。キャッチャーのほうの立場では。

伊藤 そういう場合は、正式な招請状はあるわけですか。

海部 電話のやり取りから始まって、そして行くということを決めたら、招請状の前にシエルパの会議をやる。日本側は誰がシエルパになって行くか。ああいうときに本当は政治家が行ければよかったんだけれども、外務省が手慣れているから、行ってやってこいということになった。シエルパを決める前に、フランス大使の北原さんがジスカールとは非常に親しくて、二人でフランス語でツーツーで物が言えるので、第一回の時には実質的なシエルパになった。日程とかいろいろなことを決めたり、何を日本が発言するかとかいうようなことは、たしか三木さんと現地の北原大使が何度も電話で話をして決めていました。その意を受けて、北原さんがフランスを説得した。

アメリカのほうはアメリカのほうで、誰が説得したか。あの時は外務省のアメリカ局長がアメリカへ行ってきちんと話をする。そうすると、アメリカは大使がちよいちよい出てくれて、大使が出ていってもいいかと言うから、直接話をしてくれるなら大使で結構ですよ、といった。なにしろ最初のことですから。シエルパの会議もその後は定例的になってきたけれども、初めはただ、参加するかしないか早く決心してくれ、早く精神を決めなさいということだった。

それじゃあ三木さん、行こう、せっかく世界の情勢の中で日本がそういうところに招かれているんだから。それはやはり行って、世界のために発言してくる。あの時はたしか世界経済の再建が主たるテーマでしたからね。それに付随したような形で南北問題が出てきたり、何にどれだけ参加するか、事前の勉強会はたしかによくやりました。

■ランブイエ・サミット2（国内の対応）

伊藤 日本が参加することに反対する意見はないわけですね。

海部 反対する意見はありません。ただ政党の中で、「三木さんにあまりやらせておいて力を持ったらどういうことになるか、わしは三木さんの生みの親だけれども育ての親ではない」なんて言う、今様でいうと抵抗勢力の最たる者がいた。それがだんだん挙党協なんというものになつていくわけだ。

一回目のランブイエの時にはまだそんなことはなかったが、二度目のサン・ファンに行くあたりには、それがこんなに「大きく」なつて、行く前にいろいろなことが新聞に出た。また行った時の新聞は三木さんに見せるとご機嫌が悪くなるから、会議が終わるまでは伏せておこう、終わったらおれがこそつと見せてやるからということとで、新聞も見せずに行つたということです。

二度目のサン・ファンの時は、初めからえんやえんやと挙党協の足引きが始まりましたが、最初の時は送り出すほうもまだ慣れていないから、いったい何事を決めてくるのだろうか、日本の将来の政策の手足を全部縛っちゃうようなことはないだろうな、それはない、というようなことを言っていました。

伊藤 それを心配する人はいたわけですね。

海部 いたんです。だから、お目付役みたいな顔をしてついてきていた大平正芳なんというのは、箸にも棒にもかからないで、「うゝ」とか言いながら、飛行機は一緒に乗らなかつた。政府専用機で行く時に大平さんは乗らなかつたんだ。帰りも「副長官、私はなんとかの会議がありまして」とか言つてちよつと早い飛行機に乗つて、往復ともに政府専用機に乗らなかつた。だから、あの頃からおかしい動きが少しはあつたんでしょう。ただ、表立った動きはまだなかったと思う。ただ、会議の南北問題でお金の高の問題を言ってもら

つては困るとか、総理によく申し上げておいてくださいとか、いろいろなことを言っていた。

伊藤 これほどのぐらゐの人数で行ったわけですか。

海部 八十人ぐらゐになつたんじゃないかな。

伊藤 最初の時に、ですか。

海部 ええ。ランブイエに行った時です。それは各省が全部来るんだもの。各省の局長をどんどん削つていったけれど、だいぶ増えましたよ。一番多いのは、各省局長とマスコミです。

伊藤 マスコミも入れて、ですか。

海部 ええ。マスコミも入れて。

伊藤 マスコミは相当の数になるでしょう。

海部 だから八十人ぐらゐになつたと思う。

伊藤 マスコミも専用機に乗つていくわけですか。

海部 全部ではなかつたけれど、ほとんど乗りましたね。あの頃はマスコミにもまだじめと秩序があつて、乗つて行く人は一人いくら負担しろとこちらから言いました。もつとも、政府専用機だから基本的な料金です。旅費はいくらもらつたか忘れたけれど、調べればわかります。とにかく、何人行くかということではいくらか徴収したんです。そうすると「現地参加はいいですか」というので、「現地参加の人はもちろん乗らないんだからいい」といった。そうしたら「行きだけ乗つて、帰りは置いてくるやつはどうですか」という。現にそういうのがあつたんだ。NHKなんかがそうだ。今度向こうで駐在員にするやつなんだ（笑い）。

伊藤 便宜供与だ（笑い）。

海部 だから語ればいろいろなことが出てくる。「それでもいいから乗つて行けや、そのかわり負担金は半分でもいいよ」といつて半分にした。

それから、「ホテル代も同行のマスコミはみな払え。その代わり、ポリテイカル・ディスカウントができるように、向こうのホテルに話すから」ということで、割引はあつたかもしれないけれども、み

んなそれぞれが払つて来たと思います。

■ランブイエ・サミット3（スポークスマンとして）

佐道 ランブイエというのはもとあまり大きくないお城ですね。三木さんはランブイエにお泊まりになつたと思うんですが、宿泊先にも困る人がたくさんいたという話は本当ですか。

海部 こっち「自分」も本当は泊まつていたかつたんだ。「お目覚めは何時で、朝は何を食べて、朝の第一声は何であつたか」ということをマスコミは聞きたがるわけだ。けれども、それにはとても間に合わないんです。だから、「別々に泊まつているから」と言つたら、「そんなことを言わずに一緒に泊まつてください」と言われた。マスコミから頼まれても、「私は」泊まらないんです。首脳しか泊めないんです。首脳と夫人と秘書官と通訳という、ごく限定された内輪の人たち「しか泊まらないもの」ですから、僕らは通つたわけです。

伊藤 「海部先生がお泊まりになつたのは」少し離れたところのホテルなんですか。

海部 パリの市内にメリディシアンというホテルがあつて、それが一番ランブイエに抜ける道に近いわけです。ロンシャン競馬場のほうへ行く道ですから。そのホテルに泊まつた。メリディシアン・ホテルの朝は、食堂へ行つても朝食は六時四十五分とか七時にならないとオープンしないんです。だから朝食を食べずに行かなければならない。朝のミーティングの前に三木さんを捕まえて、部屋で意見を聞かなければならないから。新聞社の人は「布団はどうだった」とか、ベッドと布団の違いも非常に興味を持って聞くから、行かなければならない。だから行つたんです。

それで、高橋「亘」君という総理秘書官がいた。彼は医者だつたけれども、彼に「おれはホテルでは、残念ながら朝食が食えんのだ。

だからここへ来てから食べるから、君、たくさん取って、残しておけ」と言っておいた。そんなことを覚えています。

伊藤 時間はどのくらいかかるんですか。

海部 五十分ぐらいかかるんじゃないですか。われわれには警察がつきませんから。首脳にはフランスの国家警察がつくから、四十分ぐらいで行きますけれども。

伊藤 こっちは信号に引っかかるわけですね。

海部 われわれは五十分以上かかりました。小一時間かかったわけだな。

伊藤 総理と外務大臣と――。

海部 外務大臣も外ですよ。お城の中へ泊まったのは、総理と総理夫人と秘書官と通訳。それからSPが一人泊まったと思います、SPは泊まれなかったかな。

田中 三木さんの感想はどうでしたか。

海部 「ランブイエのお城の一番上の、一番見晴らしのいい部屋ですから」とおれは言ったけれども、見晴らしはいいかもしれないが、なにしろ不便なところだ。階段も螺旋階段だから、上がっていくのも大変だったろうと思っています。それで下のほうの一番楽なところはジスカルデスタンが自分で取っている。あれは外交礼儀に反するわな（笑い）。けれども、今様というスイートというのか、各国首脳だけが集まって話ができる、七、八人の椅子とテーブルのある部屋は、一階のジスカル部の部屋の横の部屋しかないわけです。だからそこで夜は自由な雰囲気、就寝まで時間を有効に使うということでした。

とにかく古いお城ですから、合理的、近代的な施設や設備はないわけです。それでもやはり朝食をつくったり、夜首脳が集まる時に首脳にサービスするランチとかスナックみたいなものは、さすがにフランスだけあっておいしいものを食べさせましたね。

伊藤 先生がそこにお出かけになって、三木さんとお話になるのは、どういう場所なんですか。

海部 三木さんの寝室へ行きます。ぐるぐると階段を上がって行った。パスはもらっているから。それでいろいろな感想を聞いたり、国内の状況を報告したり、いろいろ雑務があるでしょう。それから三木さんに「新聞社に言わなければならぬけれど、どんなことを今日の会議では発言するんですか」と聞くと、「これとこれとは言うつもりでおるけれども、言ったか言わないかは、もう一回確認してからやってくれんか」という。「わかりました、会議が終わった時にもう一度聞きに来ます」というようなことを打ち合わせしておいて、どれだけ外へ出するか――。

伊藤 やはり副長官としての先生はスポークスマンなんですね。

海部 スポークスマンです。言っては悪けれども、当時から外務省というのは、いろいろな癖がありましたね。「三木総理が」言わないことでも、「ちよつとこれはひとこと触れておいてください」とか、余計なことを言ってくるんだ。三木さんという人は、納得しないことは話さない人ですから。そして自分の言ったことは「僕は言ったよ」ときちんと主張しますからね。いわゆる最近の言った言わない問題は、絶対に起きないわけです。だから、三木さんが「言う」ということと、「言わない」ということをあらかじめ知らせるというのが、各新聞社の言い分です。「実際に行つて言わなかったならば、あとから『言わなかった』と言つてくれればいい」という。そこで紳士約束をして、「初め『言う』』といつていて言わなかったとか、どういう理由で言わないかとか、あなた方に作文されると困るから、それは絶対これだよ。本当に命がけになるだろうな。その代わり、こつちも聞いてきて教えてあげる」といった。

■ランブイエ・サミット4（同時通訳とシエルパ）

海部 僕も同時通訳のブースに入るわけだから。国弘「正雄」君が入るブースへ入るわけですよ。いいも悪いもくそもない、おれも入

る、と言って入る。国弘さんは、「面白いから聞いている」というから聞いているわけです。それでメモを取るけれども、あの場内のやり取りはともわれわれではわかりません。同時通訳についても日本語のほうがわかるだけのことです。それで三木さんが何と何を話したか。

伊藤 同時通訳は日本語はないわけですか。

海部 日本語は国弘さんが入っているから、やっているわけです。

伊藤 とにかくみんなワーワーという感じなんですか。

海部 そんなワーワーと国会討論会のようなことはありません。

伊藤 いちおう流れはわかるわけですね。

海部 わかります。それから、だいたいこういうことを発言をするんだというメモを、あらかじめそれぞれの首脳がつくってあるわけです。ドラフトがつくってある。

伊藤 それはシエルパの役割でしょう。

海部 それがシエルパの役割です。終わってからの記者発表の総括もある。あの時は確か「インフレなき経済成長」が目標で、それに対してはすべての国が賛成する。しかしそのためにやる道はたくさんあるし、国ごとにもいろいろな理由や事情があるだろう、というようなことでシエルパが問題を出し合う。首脳がそれをいいと言いかいかんと言いか。

伊藤 その首脳が発言しているのは、いちおう振り付けがあるということです。

海部 振り付けというよりも、シエルパ同士で話をして、「あの国がこういうことを言うだろう。しかし日本は、こういうことをあまり強く言われると困るなあ」というような意見の交換ぐらいはあったと思います。

共同声明を出すか出さんかの問題でも、アメリカのシエルパは「記者に発表して出します」と言うし、ヨーロッパは「それは出しません」と言う。ヨーロッパとアメリカの問題がよくありますが、あまり突き詰めた細かい話で手足を縛ってしまうのはいかなから、

首脳と首脳が次の会議までフリーで話ができるようにしていこうというところで、シエルパはシエルパ同士で苦労していたと思う。

伊藤 海部先生は、ほかの国の人との接触はあまりないわけですか。

海部 あまりないです。ほかの国の人と接触できるようになったのは、自分が首脳になってからです。サッチャーさんの部屋とかほうぼうへ行つて、「ちよつと頼むけれど、明日はおれがこういうことを言うから賛成しといてくれよ」とか、「EBRDの問題で日本はケチだ、二百億ドルが出せとコールが言うけれども、そこまではともいかなから、こちらは政府で決めてきた五十億ドルとまず言うから」というようなことですね。

伊藤 首脳の会議というのは、本当の首脳だけの会議ですか。

海部 首脳だけの会議と、そこへ一人ずつ外務大臣クラスが入る会議があるわけです。そうしたら大蔵大臣が、おれも入らなければいかなからといって、全部が入ったこともあります。

伊藤 それはもう第一回からですか。

海部 第一回ではなくて、みんなでそういう顔合わせ会議みたいなものも向こうでやりました。

伊藤 では大蔵大臣も行ったわけですね。

海部 外務大臣も行きました。ただ、ここはジスカールデスタンのあれだったと思うから、ジスカールがああいう性格の人だから、「今日は首脳だけの会議にする」とか、「話をする時は首脳だけでやりたいんだ」というようなことを言いましたね。五人だけの飯とか五人だけの時間というものを非常に気にして主張したのは、ジスカールでした。

伊藤 そうすると、逆に外相だけの会議というのはないわけですね。

海部 いや、ありました。外相だけの会議とか蔵相だけの会議もありました。ありました。そういうときにはシエルパがちゃんと整理して、ここではこれだけの話をしてくださいといつて、振り付けをやっていたんじゃないかな。

伊藤 そうしないと齟齬しますからね。

海部 しかも、こういうふうに見える人が行っていて思った通り言われたら、ほかの国になめられるから、「ここでは言ってはいけませんよ、これはいけませんよ」というようなことが、ままありました。

伊藤 先生が一番お氣を使ったのは、やはりプレスに対することですか。

海部 プレスがどういうふうを受け止めるかということだから、プレスに対することにはだいたいお氣を使いました。無理も聞いてやりました。

■ランブイエ・サミット5（G7、組合支部、三木発言）

伊藤 これは何日間ぐらいなんですか。

田中 十五日「に始まって十七日」には終わっているので、三日間のようです。

海部 三日間です。首脳が話し合ったりしたのは。

伊藤 ほかにあるんですか。

海部 いや、ありません。その前にパリに着いて――。

伊藤 パリに着いた時にはほかの国の首脳との個別の会談もあったわけですか。

海部 この時はなかったな。次のサン・ファン・サミットの時は、首脳会議が始まる前に三木さんから、「特にカナダとイタリアとは話したい、ちよつと呼んでこい」と言われて呼びに行ったことはあった。

伊藤 一回目の会議で「参加国を」増やすことを決めたわけですか。

海部 要するに、一回目の会議を五大国でやったら、「こんなことではこの次の選挙の時に共産党に天下を取られてしまう。国内で選挙をやるから負けてしまう」と、そういう言い方で言ってきたんだよ。だからもつとあれをしてくれという。それから、できたら同じ

ようなあれ「状況」があるから、この次はイタリアを呼ばなければならぬかもしれない。イタリアの政情もそのような状況だったから、サミット参加国になったということが、イタリアにとつては大変な助け船になったんですね。だからサン・ファンから呼ぼうというようなことに、終わりがちに決まったら私は理解しています。そうしたら、イタリアだけ呼んで、カナダはどうするんだ、ということになった。たしかカナダもその次から入ってきたはずだ。

伊藤 そうですね。G7になったわけですね。

楠 帰国されて一週間ちよつと経つと、もうスト権ストが始まりますね。ですから、フランスにおられたころから、当然その兆候はあったと思うんですが、官房副長官としては、フランスにおられた時にも、そういうことはかなり気になることでしたか。先ほど国内事情についても総理と意見を交換するということをおっしゃいましたが、日本の大使館から逐次連絡が入るとか、そういうことだったんですか。

海部 あのころ総評の連中やなかは金持ちで、支部を持っているんだよ。

伊藤 パリにですか。

海部 総評支部の駐在員と称する者がおる。それから、呼びもしない、頼みもしないのに、総評の代表団についてきている通訳さんがいる。これはやはり雇ってきたらしいんだけど。

楠 総評の代表団というのは何ですか。

海部 これ「サミット」にあわせて取材に来るんだよ。ずいぶん取材されたよ。それから赤旗もそう。メンバーでもないのに。

楠 じゃあ、八十人のほかにいるわけですね。

海部 それはもう全然「知らなかった」。向こうへ行ってからびっくりしたんだ、そういうのが来ておったから。だからずいぶん金持ちで、情報収集に専心行動していたよ。総評系と共産党とはまた別なんだ。赤旗は赤旗の支部を持っている。

楠 そういところから、副長官としては情報収集をしたり、意見

交換をしたりということですか。

海部 「帰ったら大変なことになるぞ。みんなこのことを構えていますよ」といつて教えてくれるけれども、「そんなのは会議のメインテーマではない。それは帰ってからしつかりやってやるから待つておつてくれ」ということですね。

楠 そういふ感じなんですか。

佐道 この会議では三木さんは、南北問題を中心の議題、テーマにして話し合いたかったけれども、ほかの国々がなかなか乗ってきにくれなかった、ということがよく言われるんですが、実際そういうことでしたか。

海部 南北問題を話したかったわけだし、自分の発言の機会があるときには南北問題にも触れたりした。「ヨーロッパやアメリカの人は、海部君、南北問題といたって、あまりわからないんだよ。アジアを見て、アジアのことを考えて発言しているんじゃない。今後世界のそういうグループをつくってやるならば、アジアのあれ「問題」はどうするんだということが必ず出てくる。元植民地であった国々がどうするのかという問題等も非常に気になるところだろう。だから、わしはできるだけそれやって、帰ったら一回一通り誰か然るべきやつを特使に出してでも、アジアのリーダーとは話しておかなければいかんと思う」ということは、絶えず思っておったと思いますよ。僕にもそういう指示もあった。ただ、向こうで出先のアジアの国々の大使館へ連絡したり、ということはありませんでした。どう決まるかわからないから、あくまで帰ってきってからでいい、ということでした。

伊藤 いちおう問題提起はされたんですか。

海部 どういう形のやり取りがあったのか、速記録の細かいものが公開されていないのでわかりませんが、三木さんは発言しているはずですよ。「南北問題」というと、アジアにはたくさんこういう問題があるから、よくテイクノートしておいて欲しい」ぐらいのことは言ったんですけれどもね。

伊藤 まあテイクノートはされたわけでしょうね。でも、それはいずれまた主な議題になったりするわけですね。

海部 そう。ところがまだこの時は、南北問題とか、特にアジアの問題とかに入っていく前に、どうやって経済成長を各国が協調して図るかということのほうに主眼点が行くものですから、そういうやり取りだったと思います。

伊藤 昭和五十年というと、日本はかなり経済としては大きくなっているわけですね。

海部 大きくなりつつある時ですね。現在進行形、*living*の時ですけれども、大きくなることは間違いない、という時だったと思います。

伊藤 昭和五十年は、ランブイエのサミットと、スト権ストの問題でだいたい終わりですかね。

■天皇后両陛下初訪米1（訪米の決定）

田中 天皇后両陛下の初訪米があります。「天皇后両陛下が一九七五年」九月三十日にアメリカに行かれましたが、何かその件に関してご記憶はありますか。

海部 ご訪米の話は、また別の資料をちょっと引っ張り出して見ないと――。

伊藤 でも、ご記憶としてはどうですか。やはり官房としては――。

海部 それはウェルカムで、ぜひ行つて来てくださいということがまず第一ですね。二つ目は、向こうと充分対応をとって、成功するように図らつて欲しいということですね。陛下はああいう人柄だから、自分でべらべら英語でしゃべったりされる人ではないから。

田中 たしか福田「赳夫」さんが首席随員だったと思いますね。

佐道 一九七一年にヨーロッパに行かれた時に、イギリスでエリザベス女王と戦争の責任の問題の発言があつて、陛下のご訪米でも戦

争に関する発言が何かあるのではないかということから、天皇のご発言問題がいろいろ出てくる。そういう面でも注目されていた訪米だったと思います。そこは政府としてもずいぶん気を使われたと思うんですが。

海部 アメリカに行くことに関しては、陛下のご発言問題というのは、そんなにウエイトを占める大問題ではなかったな。それまでもいろいろ率直に発言されていることで、アメリカにも理解は得られるだろうということでした。中国とは違うもの。

伊藤 こういう、陛下のご訪米というようなことは、どこのイニシアティブで始まるものですか。

海部 当時は、アメリカと日本との間のパイプ役を自称していた人が数名いましたね。そういう人たちが三木さんのところへ報告に来て、こうしたらいい、こうしたらいいと、まず根回しに来るわけだ。

伊藤 外務省ではないんですか。

海部 外務省ではない。広い意味で元外務省かもしれない、外務省OBといったほうがいいかもしれない。あのころは平沢和重なんていう人もちよいちょい出入りしていた。

伊藤 平沢さんはよく三木さんのところに来られたわけですね。

海部 そして、アメリカの国務省の情報や事情をよく聞いては、持つて来て話しておりましたが、それによって動かされたということはないと思います。三木さんは頑固だから、自分で決めて、調子のいいことは、「それじゃあ、それはそのまま」といつて取るけれど、あまり気に入らないことは、「それは駄目ですよ」といつて断わる。断われるような間柄なので、熱心に平沢さんがそれに取り組んでいたことは間違いありません。

ただあの人は幅の広い人で、ロシアとの問題も中へ入ってやりますからね。それで二島返還論なんていうことを言い出すから、「それは引つかかってはいけませんよ、あくまで四でいかなければ。初めが大事だ」ということを僕らも意見を求められた時は申し上げたことがあります。平沢さんはどちらかといえば、いまでいう二島

論のほうでした。

伊藤 陛下のご訪米の決定は、やはり内閣ですか。

海部 内閣です。それは閣議です。

田中 宮内庁は初めから乗り気だったんですか。

海部 宮内庁はどうだったかな。事を荒立てて、それは待ってくださいとか、いけませんとか言わなかった。やはりちよつとプレイアップしたい気持ちのほうがあったんじゃないかな。戦後、人間天皇にもなられて、だいぶ定着してきて、日本の国力も上がっていたから。あの頃ではないですか、世界の自由主義国家の仲間入りをして、肩を並べて、OECDだとかいろいろなものにスタートした。日本もそういうところへ入って行くことができた。そろそろ世界の中の日本になりたいから、陛下もやはり行つて来るべきだ。その時に、一番初めにイギリスへ行きたかったのは宮内庁ですよ。

伊藤 普通の法案になるような問題は各省庁から上がってくるわけでしょうが、この問題は一体どこがイニシアティブをとることになるんでしょうか。やはり総理自身なんですか。

海部 それは総理自身です。最終的な意思を決めるのは。ただ三木さん自身はアメリカが非常に情動的に好きな人だから、だから、最初の演説は、*About 45 years ago* で始まる。「私は四十五年前、

ここへ来たんだ。その時はあの橋はなかったんだ」という演説をやったのを僕が横にいて聴いていた。そのときは世界を回ったんです。

「わしは世界を回ったけれども、やはり一番素晴らしい政治のシステムだと思ったのはアメリカの民主主義である」と言つてえらくおだてるから、リップサービスじゃないかと思つたら、「そうじゃない、暮らした」と言うんだよね。そして「世界を回つて」帰つてから、「いよいよ留学しようと思った。当時はムッソリーニのイタリアも見てきたし、勃興していたドイツも見てきた。どこへ行こうかと迷ったときに、自分は躊躇することなくアメリカを選んだ」なんてアメリカでスピーチをやる、それはもう拍手喝采です。

そういうアメリカの民主主義とか、アメリカ戦わずと言つたこと

に対して、自分もそれは大事なことだと思っていたというようなことを率直に言うものだから、アメリカでは親米とはいわないまでも、知米派で、アメリカの過去を知っている政治家だという評価が高かった。そういう紹介もされたんですね。

■天皇后陛下下初訪米2（政治的な意味）

伊藤 やはり宮内庁から上がってくるとか、そういうことではなくて、いろいろな人のアドバイスがあつて、総理が言い出すということになるわけですか。

海部 あのころの裏の裏まではちよつと、どの場面で決まったのかわかりにくいところがあります。しかし総理は、初めにやり出して、国内政策で不協和音が出て来たり、つまずいたり、いろいろするわけでしょう。だから、最も得意な分野へ引きずり込んで、やらなければいかん。そうすると、「わたしにはできるけれども、椎名「悦三郎」さん（名前を言つて悪かったけれども、ああいう今様の抵抗勢力の親分みたいなもの）がやれる話ではない。これからはやはり民主主義だよ。世界の経済からいっても安全保障からいっても、アメリカを抜きにして世界の秩序はない」というようなことを、むしろ思い込んでいたから、行くならアメリカへ行く。それはわかる。想像に難くない。自分で言い出したんでしょうね。決めたことは、呼んで、そこで行くからという話をする。官房長官は井出「一太郎」さんだから、「ほう、ほう、ほう」と言つて反対はしない人だからね。

伊藤 多少は政治的な意味もあるんですね。

海部 どこへ行くかということを決めるのは全部政治的な意味で、いつでも総理が決断して決めるのではないですか。僕が最初の外遊先を決める時も、当時は幹事長が小沢一郎だったから、小沢一郎を呼んで「おれは今度、選挙前までに行つて来たい。特にベルリンへ

行きたい。演説の内容はもう決まっているから、見てその現場に立つて、その時の感想、印象を混ぜなければ選挙にならない。選挙に勝つためにはベルリンに行つて来たい。東欧諸国もちよつと見てきたい。いままで東欧諸国へ行つた総理がないから、おれが行つてくる」というようなことを言い出すと、「ちよつと待つてください、そのお気持ちなら、そのお気持ちに反対しないように根回ししますから」という。それで一晚根回しして、「全部こうなつておりますから、遠慮なくぶち上げてください」ということになる。

伊藤 じゃあ、三木さんもやはりそういう――。

海部 三木さんもやはり――。ただ椎名さんあたりがああころの抵抗勢力の親分だったけれども、あまり表立つて反対とは言いに来なかったな。

伊藤 特に陛下の訪米なんていうことになる、これはなかなか反対というわけにはいかないでしょう。

海部 いきません。あのころはいまと違って、天皇陛下なんていったら、みんな「ははあ」というわけだから。

佐道 ご訪米自体は、前の田中さんとニクソンのところからの懸案で、三木さんに持ち越されていたわけですね。だから、今度は逆に三木さんの時には行かせたくないという意見もあるのではないかと思つたんです。

海部 点数を上げさせたくないという気持ちも、それはあつたでしょう。そんなことを言つてきた人はなかったけれど。

伊藤 だから福田さんを主席随員にした。

海部 しかしあのころ福田さんは、だいぶ三木さんと接触してしましたよ。そして閣議をやつていても、「福田さんが」自分で簡単なラブレターを書いて、「ちよつと副長官」とおれを呼んで、「あとでいいから、読んでおいてくれ」と言う。あとで読んでみると、「こういうことを三木さんに進言したけれど、三木さんの本音を取つてこい」とか書いてある。それから二人を会わせる時には、時間を調整すれば、いつでも人目につかないところへ行くからというの

で、財界人を利用して、その財界人にお座敷を取らせておく。そこへ行って、おっと見ると、「なんだ、君も来とったか」というようなことになるようにセットをした。福田さんが、それにはえらく理解を示してくれた。

伊藤 まだいい時代なんですね。

海部 それはいい時代ですよ。

■ソ連グロムイコ外相来日（一九七六年一月）

伊藤 ソ連のグロムイコがやってきた時は何かございましたか。

海部 グロムイコがやってきた時は、あれは箸にも棒にもかからないような「ニエツト、ニエツト」というおじさんだった。あの時は、残念ながら何も得るものはなかったんじゃないですか。みんな「ニエツト、ニエツト」だ。来るかどうかもわからない怪しい国だよということ、空港でタラップから降りて飛行場に本当に両足をついた時に、初めて安心できるんだ、というようなことでした。

松本何某といった代議士がよく説明に来て、話を聞いたり、お使いを出したりした（佐道 松本俊一ですか）。

それから当時はまだ始まっていなかったと思いますが、うちの非常に私との接触が多くなった末次一郎君、あの人はモスクワにしょっちゅう行って、人脈もあり、心臓が強いから官邸へもふらふら来るわけだ。僕に会いに来たと書けば、新聞には載りませんからね。

伊藤 「首相の一日」のような欄ですね。

海部 あれには載りません。だって副長官の一日になっちゃう。それでこちらから上がって来て、副長官室に入れるわけだ。

楠 そういう形で会いに来るケースは多いわけですか。

海部 僕もあれ「末次氏」は知っていますよ。「日本」健青会の代表だから。そして僕は青年運動で青年局長のころから一緒だ。青年

協力隊をつくった時は、末次と私が一所懸命になってつくったんだけれども、そういう仲です。あのおじさんは非常に得難い、たぐいまれなる触覚を持った人物で、だいたい接触があったんですね。

楠 去年「二〇〇一年」亡くなったんですね。

海部 だから北方問題なんかについては、絶えず進言に來ましたよ。けれども、間違つてあの人は右翼じゃないかと世の中から見られていて、一番親しいのは中曽根さんじゃないかという見方があったでしょう。中曽根さんも、改進黨のころを辿れば三木さんと一緒なんだから別にどうということはないんだけど、あのおじさんも「直接新聞に名前を出されて総理に会うよりも、あなたがカバーしてくれればそれでいい」といって僕のところへ来るから、来たら、「会っていきなさいよ」といって会わせたりしたことはありました。とにかくいろいろな情報を持っている人でした。

伊藤 「総理の一日」なんて見ていると、隙間がないですけどね。

海部 そうなっているんだから。

楠 じゃあ、あの「総理の一日」を分析しても、あまり意味がないかもしれないね。

海部 あまり意味ないんだよ。

伊藤 意味がないんですか（笑）。

海部 だって本当に正直な人は、差し障りがあるからやめておくけれども、一日にあんなに飯を食って歩けないと思うほど歩く人がいるでしょう。どこで何を食べて、どこに行つて何を食べた。あれは食べていないんだよ。そこで人に会っているわけだね。先に入っておけば、新聞記者はまけるでしょう。あとから自分が行った時には、都合のいい人は隣の部屋へどうぞ、どうぞと入れておいて、都合の悪いのだけ途中から帰す。みんなが何の話をしてきたのかといつても、この話をしてきたと大して問題にならないことを言いながら帰っていくわけだ。正直にいうと、悪い話だけれども。

伊藤 いろいろなテクニクがあるんですね。

海部 そういうことをやったんです。どうしても会ってくれと言わ

れたり、どうしてもこう言ってくれなければならないという、会ってあげることもあったけれども、会ったことが表へ出るのがいやだという人もいますしね。だから口が裂けても言えないし、墓場まで持っていかなければならない名前も、それぞれの人のところにはたくさんあるんじゃないですか。

伊藤 そうでしょうね。ご本人が言えば別ですけども。ソ連との関係は、この時期はとにかく冷たいということですね。

海部 その時期はソ連との関係は非常に冷たい関係だったと思います。グロムイコ、あのニエツトのおじさんは、ちよつと冗談を言つて笑わしてやろうとか、「ボリショイ・スパシーボ」といって片言で挨拶してやつても、何の反応もないんだ。ゴルバチョフになつてからは、「ハーイ、それはよくわかる」とか言うからね。「ゴルバ、わかつたら指切りやらなければ駄目だ。条約だけ署名しても駄目だ」というと、にこつと笑つて指切りをしたぐらいだ。ああいう人間的な心の底を見せるようなことは、グロムイコにはなかったね。ゴルバチョフはそういう人間的なところがあつたけれども、あつたがためにああやつて足をすくわれちゃったんだ。これは危ない、と言われたのかね。

伊藤 しかしグロムイコは長いこと外相をやっていたんじゃないですか。

海部 十九年か二十年でしょう。

佐道 「そういう性格」だから、「外相として長く」もつたんじゃないですか。

海部 ドイツもそうでしょう。野党の連立の自由党の代表でやったのが十九年かな。体が大きかった。なんとかといったな。

■現代中国論1 (台湾問題)

田中 ちよつと思ひ出したんですけれども、田中内閣で日中国交を

やりましたよね。三木内閣になりますと、台湾との関係が修復される時期なんですよ。そのとき宮澤外相が担当されたんですけれども、三木さん自体が、もう中国とはできたんだから、これからは台湾とやっつけていかなければいけない、というお考えだったのか。あるいは宮澤さん独自のもののなか。

海部 三木さんは「信なくして立たず」と言うんだ。そして鯨岡兵輔とかおれなんか、公のところでは言わないけれども、三木さんのところへ行つては夜、飯を食つたり、これくらいの机に座つて話す時に、「先生、『信なくして立たず』とよく書くけれども、向こうに言わせれば、両方守つてやらなければ、信がないんじゃないですか」と言うんだ。そうすると初めは、「中国の実効支配というかな、現実に大きくなつちやったんだから、一つの中国、一つの中国というんだから、やはり中国は大陸を主にして、台湾は地域として（当時はまだ一国二制度なんていうことはなかったですから）、地位も立場も考えてやらなければならんとは思ふけれども、しかし中国とつき合つていくためには、そこを変えなければいかんから」、日中国交正常化の時には（もう三十年前になるな）、三木さんがそれに踏み切つたんです。

あの時は党内の毛利松平とか鯨岡兵輔という三木派の連中は、「それはいいけれども、台湾はやはり現状凍結、平和共存でいかなければいけませんよ」とか言つていた。「ヨーロッパも勝手じやないですか。第二次世界大戦で変わった国境はもう変えない。現状凍結、平和共存ということをさかんに言つておきながら、現状を変えて、すでに国として存在している台湾を認めないから出て行けという。台湾追放決議案なんていうのは筋が通らないじゃないですか」という議論を派閥の中でもずいぶんしたことがある。

全く話は脱線しますけれども、十日ほど前に僕は中国へ行つたんです。その時、中国に台湾関係の弁公室「國務院台湾弁公室」、台湾関係の特別のセクションがあるんです。そこで二時間ぐらい話を

した。そのあと、錢其琛との話に入り、そして江沢民との話になるわけです。

僕は「いつまでもそんなことを言っていてもしようがない。台湾をいまの状況でつぶすといつても、もう国家として厳然としてあるんだから。あんたのほうは一つの中国を台湾が認めればいいというんだから。ちよつとせつちかちかかもしれないが、日本から見ているというならいらしてくる。心配になる。しかも朱鎔基さんが去年の全人代の前に演説をぶっていたのをパツとやめて、『そんなこと、台湾の独立のことなんか考えたら許さない、放っておけない。軍事力（武力）侵攻といったか武力行使といったか』の選択肢も放棄していないんだ」とものすごい顔をして言う——僕はそれを、錢其琛にも朱鎔基にも言つてやった——「朱鎔基さんがものすごい顔をされるのは、あのと初めて見たけれども、あれで日本でもみんなびつくりした。朱鎔基さんは話のわかる平和主義者だと思つていたら、いつでも台湾なんかすぐやつちやう、と言うようなことはよくないから、やめたらどうですか」と言つたんだ。

ところが、「台湾のほうが一つの中国を認めんじやないか」と言われるから、「そこが中国の悠久の歴史の中で懷の広いところを見せるんだ。あなた方がよくおつしやるように鄧小平先生が言つたことだ。僕はこのごろわざわざ『子々孫々までの友好』と書くのは、子々孫々、少なくとも孫の時代になつたらうまくやろうということだ。南沙諸島の時も、そう言つたでしよう」と言つた。そうしたら、「台湾問題もいまは駄目だ」という。「いまはそんなことを掌を返したようには言えないだろうけれども、子の世代になり、さらにその下の孫の世代になつたらもう一回考え直して。お互い同じニイハオの中華国家じやないか。しかも一国二制度でいいというならば、いまは大陸のほうがいぶん譲つて、海部さん誤解せんようにしてほしいが、香港なんかの一国二制度とは違つて、台湾は、台湾軍を持つことも全部台湾の自治権の中に任せてあるんだ」「しかしそんなことをいまいつたつて、とてもそれでいいとは言えないわけだから、もうこれは、鄧小平流に分けたらどうか」。

木村一三さんをご存知ですか。肩書きは国際石油の名誉会長ですが、その人からもいろいろ話を聞くけれども、今日明日のうちに變えることができないことは両方ともわかっている。それに結論を出すと思うと、「武力行使を放棄していない」と判で捺したようにいつも中国側が言うわけだ。錢其琛に聞いても同じことを言う。

「けれども、それしか解決方法がいまのところないように思うので、その問題も南沙諸島の時の解決策と一緒に、鄧小平先生が言つたようなことを今日の取り入れると、新王道主義だ。中国の外交の王道論だ。それは平和の中でやつていかなければならん。そうだとするならば、現実的な解決方法は何があるかというところ、台湾側にいま兩岸関係があるわけだから、兩岸関係を少し太くする。汪道涵（おうどうかん）『海峡兩岸關係協會會長』先生だつて話のわかる人だから、辜振甫（こしんぽ）『海峡交流基金會理事長』さんだつてそうでしょう。そういう人をみんな使う。日本はそういう両方と人脈をもつて、新王道論でいつたら——。そのかわり何年かかるかわからない。孫の世代になるんだから。三十年ぐらひは塩漬けしてもいいじやないですか。ウンともスンとも今日は返事はできないだろうから、この次に来るまでに考えておいてくださいよ。率直に言つと、あんたの国はこのごろ返事が遅い」。

■現代中国論2（通貨、民主化問題）

海部 だつて、環境問題でもあれだけ言つたんだ。「この次の地球環境行動會議の世界大会は中国主催でやつてくれませんか。私が言う以上、日本のほうの環境庁も外務省も全部根回しして、学者の皆さんの了解もとつて案を持ってきたんだから、中国が主催してくれれば一番素晴らしいことだ。そこへ日本もできるだけ応援することは間違ひありませんよ、と言っているのに、あなたのほうが一回も

ウンと言ってくれないから、とうとう今度も東京でやらなければならぬ。中国は参加されるだけだ。中国が主催してみんなを集めて、中国もこんなに変わったところを見せてもらおうと、東アジアで大変な存在感が出て来ますよ」。

「だから、ASEAN+3でとどまらずに（いまや中国はニュージランド、オーストラリアまで入れようという大アジア主義まで考えているわけですから）、それなれば、いま自分の膝元の台湾との関係をガチャガチャして、いつでも、あそこには武力行使をやつてというようなことを言っておられたのでは、周辺の人が怖ろしくてかなわない。そんな怖ろしい存在であつてはいけないから、長い目盛りで、それこそ孫子の世代に誰かが知恵を出して片が付けばいい。その代わり、あくまで『一つの中国、二つの制度だよ』と言いたかったら、ずっと言い続けていればいいじゃないですか。それどこかで変質するかもしれない。そう永久不変のものではない」。

その証拠に、その前に江沢民に会った時は、元「通貨」の変動の問題で世界中があれほどガタガタいつているときに、「中国にはそれをやってくれという申し込みも多いだろうけれども、どうするつもりですか」と聞いたたら、微妙な言い方をした。「元は永久不変のものではないから、必要があれば、その時がくれば、みんなの安定のためにね」という、ちよつと切り下げのニュアンスがあるようなことを言つたんだ。あれは江沢民だから言える話であつて、ほかの人では言えない話だ。

「先生、それをメイク・パブリックしていいですね」と言つたら、「いいよ、それは。このままでいつまでも固定でやつていこうとも今日、明日の問題ではない。今日、明日切り下げなければならぬ問題でないし、近隣諸国もみんなそれぞれ努力されるだろうけれども、いつまでもそうではない」ということを言っているんだ。だから、僕はそういうのを全部集めておいて、さらにもう少しご心配なくやつてもらえないだろうか。

そういう、向こうにとってみればいやらしいことを言うのに、

「海部先生、今度、もう一回来て、ちよつとそういうお話をあちらの連中に聞かせてやってくれませんか」という。山東省のあの国境線の厳しいところへ行つて、そんなことを僕がブツたら、どういふことになるのかしら。

山東省にはご承知のように中央で溥一派というのが頑張っているでしょう。中国の溥さん、あの子供が山東省の書記で頑張っているんですよ。それは危険分子だから北京政府へ採用しよう、引き上げようと思つて声をかけても、青年溥は応じないんだ。山東省の役人で頑張っている。あのへんのところも面白いなと思つて、今度もう一回行つてこようと思つています。

伊藤 いや面白い話だなあ、それは。

田中 その青年溥というのは、民主化派なんですか。

海部 民主化か何かは表立つて口には出さないけれども、出せば、直ちにクビになつて、肅正されてはいけませんから。

もう一つは、僕はウルムチ・トルファンの方も詳しいけれども、あつちのフビライハイタイというのが、いつもケツまくろうとしている。アメリカに聞いてみたら、オサマ・ビンラディンと資金的にも組織的にも関係があるのがウルムチ・トルファンにいて、それがそこで暴動をやっている、操りだからね。それを断ち切るためには、なんとかしてあそこをやつつけたい。だからアメリカに協力してテロ撲滅に一番調子のいいことを、つい十日前から対外的にしやべっている。

それは、自分の国の足元、特にウルムチ・トルファンをやりたいということだ。もう一つは、北朝鮮との国境付近でいろいろゴトゴトしているのがいたら、それは排除したい。そこにいるやつはしっかりしておきたいという両面作戦です。両面作戦ですから、ものわかりが非常にいいんです。

楠 今日はこちらで失礼いたします「退席」。

海部 ありがとうございます。僕も今日は、ブッシュが来ているから、もう三十分で官邸へ行きます。

■現代中国論3（靖国神社問題）

伊藤 ではあと三十分お話を伺います。先ほどランブイエの話があったんですが、今度は、いよいよ挙党協もできて、という状況の中でプエルト・リコのサン・ファンで会議「第二回サミット」がありました。この時は前回より、もっと人が増えたわけですか。

海部 第一回が終わったあとで、どこの筋を通じてかは、ちよつと明確に思い出せないけれど、イタリアが「おれのほうをいつまでも除外しておかないで、入れて欲しい」という。表に言えないようなことだが、「日独伊三国同盟までやった国じゃないか」という（一同笑い）。そういうことを平気で言いますよ。「ドイツとだけそんなことしとらんで、イタリアも入れてくれや」という。これはイタリアの、そんなに大幹部ではない、大使館に来ている武官ぐらいのクラスはそういうことを言うね。

それはドイツもそうだった。僕が日独青少年の日本側の代表で行った時に、ドイツ側の受け入れはドイツユースの青年ドイツ代表団。そのドクター・ゼルターという団長が、「大きな声で言えんが、わしは昔ヒットラー・ユーゲントの経験者だ。組む相手を間違えたから残念だった。初めから日本と組んでおけばよかった。」と、まあものすごいことを言ったものだ。だから、戦い終わってからの感覚は、日本のように、負けて本当に悪かったなと心の底から反省して、間違っていたという一億総懺悔というところはないね。

伊藤 それはそうでしょうね。

田中 イタリアは一番駄目なんだ。

海部 と言われておるわ。

伊藤 いや、ドイツだって同じだと思いますよ。

佐道 イタリアはムッソリーニに全部罪を負わせたし、ドイツはナチに罪を負わせたけれど、日本だけはそんなことしていないから。

海部 だから、東條「英機」さんと一部軍部に罪を負ってもらうようにしようがない。今度の靖国神社問題でもそうですよ。僕はそれだと思ふもの。それで言つてやったんだ。「何を怒っているんだ。八月十五日に怒っているのか。小泉「純一郎」が十三日に変えたんだから、怒らなくてもいいじゃないか」と言ったら、あのシンポジウムの最中に――。楊振亜という大使は本当の知日派ですよ、おれもよく知っているんだ。

「僕が」総理になつて最初に東南アジアに行く時に、ベトナム、カンボジア、あの辺の和平問題に日本が手を差し伸べた。いまほとんどできそうになっているのに、きつかけがないから、日本がきつかけをつくつてくれという。それで、チャチャイというタイの首相の協力を得て、チャワリットという前の副首相がベトナムへ行った。「全部集まるから『日本の総理大臣が来た時にここへ来い』といつて集めてくれ」という。だから「来い」といったんだ。そして、そこでだいたい会つた。そうしたら、東京で一回きちんとした会議をやつてくれという。「じゃあ、東京へみんな出て来い」という呼びかけもしたけれども、結局あの時ちよつと横を向きかけていたのがクメール・ルーージュだ。

それを手直しする、手なずけるのは、中国が一番いいというんだ。初めはチャチャイが、「おれに任せておけ。われわれは隣同士の国だから、みんな各派に連絡があるんだ」といって、やつてくれた。けれども、最後にクメール・ルーージュが出てこないという時は、「あのクメール・ルーージュだけはちよつと難しい。あんたは中国にいろいろパイプがあるだろうから、『中国を』使つてやらせなさい」というんだ。

それで聞いてみたら、本当に楊振亜はその時は動いてくれたんだ。「ちよつと時間をください」といって、すぐに連絡をとつて打診して、とにかく曲がりなりにもみんな会議をやるホテルにまで出席してきたから。ここへ座れと言ったら、席順が気に入らんからとか何とか言つて座らなかつたけれど、おれは別々のほうに向かつて座

るとか、いろいろなことがあったけれども、とにかく中へ入って、一所懸命成功させようと思って協力してくれた。

当時中国にとっては、やはりあそこが一緒になることだ。それはそうでしょう。国境を隔てて隣の国でドンパチやっておられて反対勢力があつては、威厳に関するから、中国できちんと抑えつけられるようにしたいという願いがあつたんじゃないかな。

その時は楊振亜はうんと働いてくれた。その時以来、個人的にも仲良くなったし、楊振亜の奥さんは日本語べらべらだしね。それでいたら、あのシンポジウムの終わった時に番外発言を求めて、「中国の、昔日本に駐在して大使を経験している。けれども、日本に申し上げたいことがある」といって、ひとの顔を見ないで、目を合わせないように自席から立ち上がってワーとぶつわけだ。「小泉はなぜ靖国神社へ行った。日頃言っていることとやっていることと違うじゃないか」とガンガンぶつわけだ。

日頃と態度が全然違うので、終わってから、「楊先生、今日は何を言ったんだ、あんたは」と言ったら、「あれは日頃から言っている通り、靖国問題は片づけてもらわなければいけない」と言う。そこでいろいろ話し合ってみた。「結局、戦犯がいるからいけないというんだな。じゃあ戦犯がいなければいいか」というと、「いいとは言わないけれども、おるからいけないと言っているんだ」という中国人流の答えさ。それで「あれをのけるように、われわれも仲間とまず二、三話をしている。自民党の、あんたもよく知っているのも一所懸命その気になっていま動いているから、それができればいいんだな」ということをいろいろ言ったんだ。

けれども、結局東條さんの孫が一人残っているんだな。あれが反対するんだよ。「祖父はそんなものは、反対ですよ」と言っただけ。祖父は死んじゃっているじゃないか、日本国にあれだけ迷惑をかけて。あの祖父の軍国主義、侵略主義のおかげで、これだけ迷惑をかけて。いま日本が中国とそういう過去の問題を抜きにして未来志向でやっていかないと、これから中国に厳しいことをいろいろ言わな

ければならない時期なので、済んだことで、歴史問題でいつも言われていたのでは進んで行かないから、やりたいんだ、と言うが、全然うまくいっていないんだ、あれは。

伊藤 それはそうだろうな。うまく行くわけがない。

海部 それをやらないと中国も損だと思うよ。

田中 東條のお孫さんだけですか、反対しているのは。

海部 そうです。みんな手を回して、それぞれパイプのあるやつが話に行つて頼んでみたけれども駄目だ。合祀を実際に決めたのは、法人靖国神社なんです。あの時、合祀を決めた者にもういっぺん集まってもらつて、あの時の決断でこんなに両国に亀裂が生じたが、これは国のためにもならない。東條さんが本当に考えた、古い言葉だけれど「大東亜共栄圏」なんていう発想でいくならば、大きいアジアをつくろうということだが、ASEAN+3なんていうのが、いま現に行なわれている会議だからね。中国のごときは、今度そこにオーストラリア、ニュージーランドが加わってもいい、それでやろう、と言っているんだから。今度そこへ行って、僕はそういうことも言つてこようと思うんだ。山東省のウエイハイ（威海）というのは、海軍の軍港のあったところで、もともとは威海衛といったんですが、いまは威海市、山東省の端にある。

田中 ビールは青島ビールですか。

海部 そうそう。青島のもつと先の離れたほうだ。僕はそういうようなことでも、思い切つてここでもう一回机の上に乗せて話し合わないと——。それには中国ももうちよつと懐の広いところを見せて、近隣諸国の不信感や心配を解くようなことをやつてもらわないと駄目だよということをもた言つて来ようと思つています。どういう返事が出てくるかわからないけれどもな。

伊藤 それはありがとうございます。現在問題になって、非常に面白い。

海部 あまり右左動いてしまうから、いかんけれど。それがさしたって連休中に行く話です。いまそちらの勉強も始めているわけで

す。向こうからもしつこいんだ、おれは連休中はいやだと言っただれども。

田中 連休というのは五月の連休のことで、いまから準備ですか。

海部 五月の連休です。準備といっても、いままで思っていることをそのまま言うだけだから、ちよつと整理するだけですけれどもね。

■日本・モンゴル国交樹立三十周年（二〇〇二年）

海部 それで、ちょうどいまはモンゴルと日本の国交正常化三十年記念だ。そうしたら、モンゴルと日本との団体が、議員連盟を入れて十二ぐらいあるんだ。そんなのはそれぞれ勝手に、といって放っておいたら、やっぱり統一して一本になってやって欲しいという希望や要望が出て来た。いろいろみんなで調査して、このあいだ準備会もつくった。参議院にモンゴル議員連盟があるんだ。衆議院にもあったんだ。衆議院は加藤六月がやっていて、参議院は前の議長の斎藤十朗さんがやっていた。よろしいということで、財界や民間人のほうにもモンゴル友好協会とかなんとか会議とかいろいろあるが、みんなで統一した実行委員会をつくって、三十周年記念をやるということになった。

久保田「真司」というのがこの前まで大使だったので、それをやるうということになった。旭鷲山とか旭天鵬とか六人の相撲取りがいます。彼らが十年前に来た時はちよつと海部内閣の時で、官邸まで呼んだ。本当は相撲取りになって大関、横綱になってからしか総理大臣は会って激励しないんだけど、大島親方に頼まれたから、特に呼んでやって、頑張れと言って激励してやったんです。それから、オユンナとかいった有名な歌手もいるんだってね。

伊藤 日本で、ですか。知りません。

海部 みんな政治的なことは強いけれども、そういうことはあまり強くないな。

田中 全然駄目です。

海部 オユンナも連れて一日行って来ようということになっているわけです。今度、モンゴルへ直行便をつくりますからね。

佐道 お客さんは大丈夫なんですか、直行便で。

田中 週一便ぐらいですか。

海部 だから、第一便だけはこっちで満席にしてやろう。おれも乗ってやるから。それから各党の代表も乗せていく。あとはそっちが努力しろと言ったら、直行便ができれば、それなりのメリットはあるんだという。いまでもカシミヤとか、そういったものはモンゴルが最高の品質だそうです。まあ、余談は置いて、そういうことがあるから、中国もしつかりやってくれということです。

■プエルト・リコ・サミット1（サミットの概要）

伊藤 では、サン・フアンへの会議の話に戻ります。この時は新しくイタリアとカナダが入った。日本から行った人数は、前回は八十人ぐらいだということですが、やはり同じぐらいの規模ですか。

海部 サン・フアンへ行った時はもうちよつと増えたと思う。

伊藤 だんだん増えているような感じがしますね。

海部 それは、そこでのいろいろな議題が出てきたりするから、取り扱わなければならぬ問題が多い。それから行く先がアメリカだから、遠慮会釈なくいろいろなことを言うだろうということで、各省がみんな、予算委員会が開けるぐらいだ。

田中 そうですね。予算委員会が動いているようなものですね。

海部 そう思っていれば間違いない。そのぐらい来ました。

伊藤 議員さんも行くわけですか。

海部 ええ、議員も行きます。サン・フアンへ行った時は、三塚博とか、記録を見ればわかるけれども、自民党の中で国会対策でよく働いているやつを、ご褒美に連れて行ったんだ。

伊藤 やはりサミットに行ったということはメリットになるわけですね。

海部 はい。それはその議員にとっても名譽なことでしょうね。

伊藤 別段何か役割をするわけではないでしょう。

海部 何も無い。仕事は何もないし、会議にも出られない。だから時々いろいろ状況を説明してあげたり、向こうの国会議員と会って飯を食う場をつくったり、そんな程度です。

伊藤 この時も、海部先生はだいたい同じような役割ですか。

海部 はい、そうです。

伊藤 この時は、三木さんはどんなことを問題提起しようと考えたんですか。やはり南北問題ですか。

海部 アメリカが相手になると、南北問題というよりも、むしろ日本とアメリカとの共通の価値をあの一流の言い方で言う。「民主主義が勝たなければならぬ。これからは民主主義の十年である。この十年で民主主義の勝負が決まる」というようなことをさかんに考え、そしてやはり南北問題も言いました。「途上国の問題を片づけないと、世界の平和と安定はないんだ」というようなことも言った。それから景気がまだよくなっておりませんでしたから、相変わらず景気の拡大をするにはどうするかというような議論をしましたね。

伊藤 サミットは、何か特定の問題についてみんなで結論を出そうというよりも、首脳同士がフランクに話し合おうというのが趣旨だろうと思いますが。

海部 首脳同士がフランクに話し合うことができるようになれば、つまらないことでいざこざは起きないけれど、フランクに話し合えないから、みんなが腹に一物、背中に荷物で、言いたいことも言わずに帰って行く。それで完全燃焼しないで、よけいこじれてくる。もうちょつと率直な会話をして、日頃から信頼関係を構築していくところというところに大きな狙いがあった。日本から見ればまさにそうだと思うけれども、ヨーロッパ側というのは、そう簡単に胸襟を開いて腹を割ってこない。三木さんにとって一番話ができたのは、や

はりフォードだよ。「あれは議会（ぎくあい）が長いから、議会を大事にするよ」といつていた。

田中 その時も国弘さんがブースにいたわけですか。

海部 ええ、国弘が来ていました。

田中 隣に先生がいらしたんですか。

海部 はい。

田中 そのブースには何人ぐらい入れるんですか。

海部 三人ぐらい座れるように、後に小さい椅子があつて、前に二つある。前の椅子にはマイクがあるわけだ。その一本のマイクは国弘専用で、あれは英語をしやべるものすごい能力を持っている。こっちは後ろで黙って聞いているだけです。代わって通訳ができるという人はほとんどいない。

伊藤 一人だけでやるわけではないんでしょう。

海部 そうです。だから、交替で外務省の総理事務の通訳がいる、あのころは確か沼田さんという人がやっていたと思うよ。

伊藤 あれは集中しなければならぬから、ものすごく疲労するんですよね。だから三十分とか二十分とか、それぐらいでどんどん交替していかないと。

海部 そうです。聞いて、話しながら、ちょちよつと要点はメモしていますからね。僕は邪魔になるといけないから、黙って聞いているだけのことで。それを今度は、ほかのブースで声を取って、そしてドイツ語、フランス語、イタリア語にやっているわけです。

田中 日本語を英語に訳し、それを各国語に訳す、そんなイメージですか。

海部 そういうことになる。日本語を英語に訳すのは、ほとんどが日本の外務省が付けている専門の通訳ですが、時々国弘氏もそれができるから、やった。

■プエルト・リコ・サミット2（サン・ファン）

伊藤 サン・ファンというのは、どんなところですか。

海部 サン・ファンは、プエルト・リコ島の首都ですけれども、植民地のころは総督がいて治めていて、それが終わってからアメリカになったら、だいたいアメリカ的になっていった。サン・ファン・サミットに使った施設とかは、古いものもあつたんだろだけれど、それは使わなくて、ランブイエ・サミットみたいなことはなかった。それでアメリカ流にザーツとコテージをつくっていた。新品のコテージで、それぞれの国に割り振りがあるわけです。二階建てですから二階はわれわれみたいな随員が使いました。それから各省からたくさん連れてきているから、そんなのはとても全部同じコテージには入れません。だから、別の、ちよつと離れたコテージに行く。サン・ファンは完全な保養地になっているわけです。保養地であるから非常に遠いので、僕はその時はヘリコプターを出してもらつて、ヘリで記者が常駐しているところまで毎日通いました。

伊藤 記者はどこにいるんですか。

海部 離れたところのホテルです。プエルト・リコ島のサン・ファンのホテルに泊まっていた。海岸の保養地のほうにずっとバラックがあつて、そこはもう遮断されていて入れません。そこから遠いので、ヘリコプターで通つて、それでブリーフしてまた帰つてくるということをやっていました。

佐道 会場に入れないんですか。

海部 入れない。だから、これとこれとこれに入れるといつて入れますが、会議が始まったら、また「You can go back」ですぐ出されます。何をしゃべるか事前に教えてくれというのが記者団の当然の要求だった。だから、「明日は何をしゃべりますか」と三木さんに聞いておいて、「これとこれとこれは特に言うつもりだ。これは言えるか言えないかわからないから、言つたときは言つたと言つた」と三木さんが言うまで、僕は皆さんにも言つたとは言わない。

だから、三木さんが話さなかったと言うときは、すぐたまりへ電

話を入れて、「あれはしゃべらなかつたよ」と言う。「第三パラグラフは今日は喋るチャンスがなかった、そこまで行かなかつた」というようなことも、いちいち教えてあげた。

伊藤 今度は三木さんのそばにいられたわけですね。そのコテージの中に。

海部 はい、いました。コテージの二階のほうにいたわけです。下で何をやっているかわからんけれども（笑い）。そんなこと「下で何をやっているかわからないということ」はない。かなりの時間まで僕は一緒におつて、話を聞いておりました。

伊藤 さつきちよつと話がありました。ほかの首脳と一対一での会談というのもあるわけですか、その何日間のあいだに。

海部 あるわけです。特にサン・ファンの時には、イタリアのモロさんと会談したり、ジスカルデスタンと会談したり、シュミットはもちろんです。フォードとも何回も会談しました。

伊藤 そういうことは、その会議の終わった後とか前とかにやるわけですか。

海部 そうです。だいたい日程が配られていて、今日は首脳だけの食事があるとかなんとかというときには、それまでのあいだ一時間なり二時間なり空いているでしょう。そういう時に、このあいだでちよつと話したい、というわけだ。

伊藤 そのアレンジは――。

海部 僕が時々お使いに行つたこともあるし、ついてきている外務省の秘書官がやることもあります。ただ、ここ「胸」へ通行許可の色の違うバッジをつけなければならぬから、誰でもいいというわけにはいきません。

伊藤 そのコテージに入ることができたのは、随員全員ではないんですね。

海部 全員ではないんです。狭いコテージだから全員入れない。だから、変な話だが、各省の局長級が来ている場合は、それらを全部集めてまた別の民家を借りて、そこにいます。そこへ時々顔

を出してくださいよ、と言うから、よしよし、今は何をやっている、今日が何があった、というようなことをそこへ行ってレクしてやるわけです。

伊藤 副長官というのは、えらいものだなあ。

海部 忙しいんです。本場に忙しい。

伊藤 そうすると、局長たちは直接には――。

海部 会場には入れない。

伊藤 三木さんに会って、というわけにもいかないんですね。

海部 いかないんだ。

田中 官房副長官は事務もいますね。事務「の官房副長官」も行っただんですか。

海部 事務は行きません。

田中 事務は国内にいるんですか。

海部 はい。

佐道 首脳会談の時に、うしろにお役人さんが控えていて、紙をサツと出したりということがあるみたいですけども。

海部 ノートテイカーというのが一人だけ許されています。

伊藤 その時もあつたんですか。

海部 その時は、あれは誰が入っていたか。各省一人ずつというわけではないですよ。そんなことをやったらキリがない。外務省から来ている秘書官がノートテイカーをやったと思うな。秘書官一人はそこへ入れるということ。

伊藤 あれは議事録はないわけですね。

海部 ないです。議事録はつきりません。

伊藤 だから、結局ノートテイカーがメモったものを各国で持っているということですね。

海部 各国が持っている。だから、自分の国が言ったこと以外は言えない、言わないという暗黙の約束がある。だから、自分の国のことを自分の国のノートテイカーがノートして整理する。だから、どの国は何をしゃべった、どの国は何をしゃべったということは、新

聞記者のほうからするとすべての首脳に聞かなければならないので、記者会見は合同でやってくれということになったんです。

伊藤 この時はおのおの別にやっているわけですか。

海部 おのおの別にやったから、忙しかったわけです。

伊藤 日本人の記者だけではなくて――。

海部 そこへ入ってきます。特にアメリカの記者は、日本語をよく知っているやつもいるからね。

伊藤 記者会見の時は、別に英語の通訳をつけるというわけではないんですか。

海部 つけます。

伊藤 つけるんですか。英語だけですか。

海部 はい。

伊藤 じゃあ、日本語のできる人は、ちよつと通訳がまずいんじゃないかと考えるんだな。時間になりました。ありがとうございました。

海部 はい、どうも失礼しました。

（以上）

【補・サミット概要】

(外務省) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/summit/table/index.html> (4/4)

◎ランブイエ・サミット (第1回)

日 時 1975年11月15日～17日
会 場 パリ郊外 ランブイエ城
参加首脳 日 三木首相
米 フォード大統領
英 ウィルソン首相
仏 ジスカールデスタン大統領
西独 シュミット首相
伊 モーロ首相
加 (不参加)

会議の概要

- 1 石油危機以後の世界経済の運営において、最も緊要な課題は、経済の回復を確固たるものとするに合意した。
- 2 このためインフレに留意しつつ着実かつ持続的な成長を達することが共通目標とされた。
- 3 国際通貨面において各国が協力して為替相場の乱高下を防止することで合意された。

(注) 第1回会議は第1次石油危機とこれを受けた景気後退期において開催された。

議題は上記のとおりであるが、ブレトンウッズ体制崩壊後の変動相場制を巡る諸問題を初めて首脳レベルで討議し、米仏間で一応の決着がついた。

◎プエルト・リコ・サミット (第2回)

日 時 1976年6月27日～28日
会 場 プエルト・リコ サン・フアン郊外 ドラド・ビーチ
参加首脳 日 三木首相
米 フォード大統領
英 キャラハン首相
仏 ジスカールデスタン大統領
西独 シュミット首相
伊 モーロ首相
加 トルドー首相

会議の概要

- 1 景気は順調に回復しつつあるとして景気回復に対する各国の自信を表明した。
- 2 「インフレなき経済拡大」を共通目標として各国の協力を確認し、インフレ再燃に十分注意を払うべきことで合意された。

(注) 会議の議題としては、経済の回復及び持続的拡大、通貨、貿易、エネルギー、南北問題、東西関係をとり上げ、主要

先進国間の協力の重要性を確認した。

他方、準備期間が約7カ月と短く首脳会議自体も24時間で終了と史上最も短い会議であった。

なお、カナダが初めて参加し、G7体制が確立した。

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 14 回

三木内閣時代Ⅴ～福田内閣時代Ⅰ（1976～1977）

【2002年4月1日（月）14:00～16:10】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

田中善一郎（東京工業大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2002年4月1日)

1. 昭和50年(1975年)7月、沖縄を訪れた皇太子ご夫妻に、ひめゆりの塔で火炎瓶が投げられるという事件がおきました。また、この時は沖縄で海洋博が開催されています。沖縄の問題で、三木内閣当時、何か印象に残っておられることはございますか。
2. 同じく8月には米国のシュレジンジャー国防長官が来日し、坂田防衛庁長官と会談し、日米防衛協力の強化のため日米防衛首脳定期協議、日米作戦協力の協議機関設置で合意します。日米防衛協力はその後福田内閣時代に「日米防衛協力の指針(ガイドライン)」が策定されるまでになりますが、当時三木首相は日米防衛協力の進展についてはどのようにお考えになっていたのでしょうか。
3. 昭和51年8月、鬼頭史郎京都地裁判事補事件が起きます。布施検事総長の名をかたり、三木首相に指揮権発動を促すニセ電話をかけるなどのことを行っていたことが発覚しました。奇妙な事件ですが、この件についてご記憶のことをお願いします。
4. 同年9月からは、自民党の国会対策委員長に就任されています。国会対策も、対野党より対与党の方が当時大変ではなかったかと思いますが、挙党協の嵐の中で、この時国会対策としてどのようなことをなさったのでしょうか。
5. 同年12月、福田内閣の成立によって、海部先生は文部大臣に就任されます。『全人像』に三木首相が文部大臣に推薦したとのことですが、文部大臣のポストについて先生はどのようにお考えになりましたか。また、文部大臣に就任して先生は教育改革に取り組まれるわけですが、文部省という組織自体については、当時どのような印象を持たれたのでしょうか。
6. 先生は、前任の永井道雄氏の考え方も採り入れつつ、教育改革に取り組まれます。それは、①学習指導要領を改正してゆとり教育を行う、②共通一次試験の導入など大学入試制度改革、③地方の大学の整備、④学歴偏重の打破、⑤日教組問題などを含めた教育現場改革、などです。それぞれが重要な問題ですので、順にどのようなお考えで、どのように取り組まれたのか、またそれぞれの改革実現にあたって直面された困難などについてお願いいたします。
7. 文部大臣の時代で、もっとも印象に残っておられることがありましたら、お願いいたします。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。よろしくお願いいたします。

■現在の政局から1 (辻元清美と田中真紀子)

伊藤 それでは早速ですが、始めさせていただきます。この前お話を伺ったときは、まだ「鈴木」宗男問題も起こっていなかったですね。

海部 起こっていなかったよ。宗男問題があることはみんな知っておったけれど。

伊藤 知っていたんですか。

海部 首筋をつかんで引きずり回したとか、殴ったとか蹴飛ばしたとか、ガラの悪い話は「知っていた」。

伊藤 そういう話は聞かえてくるものですか。

海部 それはやられたやつがしゃべりますよ。それはみんな知っていたさ。けれども僕は問題の本質はそんなことではないと思います。その意味では、おととい「三月三十日」の産経に花岡信昭君が書いている文章はいい。僕の番記者で、家にもしょっちゅう来ておつたし、三木さんのところにもちよくちよく来た。なかなかいいことを書いていた。合意できることだ。要するに「田中」真紀子さんと辻元のことに關して、二人ともひどい幼児性だという。というのは、外務省であるころ語られた話はひどいもの。

伊藤 世の中に噂として出ていることはだいたい本当なんですか。

海部 世の中に噂として出ていることは、どっちもどっちだと思うんだ。目くそ鼻くそみたいな話が面白おかしく出ている。殴ったとか殴らないとか。

ただ許されないことは、ああいうポストに就いたがために知り得たことを、国益も考えずに、自分だけのそのときの満足感のために語ってしまうことだ。それがどういう影響を及ぼすかということに思いを致さないところが間違いの元だろうな。いつか九月十一日の同時多発テロがあつた直後に、アメリカが国務省をどこかに移動し

たということを、大臣なるが故に知り得たでしょう。それを新聞記者にしゃべっちゃった。あれがものすごい反発を買ったわけだけれど、ああいうことが重なり重なったわけで、指輪がなくなつたとか、言つたとか言わなかつたとか、招待状が来たとか来なかつたということは、そんなに国益に關する根本問題じゃないな。

田中 国益には關係ないですね。

海部 そうでしょう。けれどもあれをリークしたのは明らかに国益に反すると思うんだな。それからもう一つ花岡君の書いていた中になるほどそれはそうだと僕も思うようなことがあるから、そういうことは厳しく戒めてもらわなければいかんということでしょうね。

それから裁判批判だ。僕はあるときすぐに突きつけられて、どう思いますかと言われた。どう思うもこう思うも、三権分立の世の中で、国会議員が一〇〇%身内のことだからという割引を入れて物を言つても、最高裁判所の角さんに対する判決を信じられない、日本の司法制度は何だという裁判否定をやつたわけだな、あれはいかんと思う。

伊藤 わずかな期間にいろいろなことがありますね。

海部 鈴木宗男も全部出てくれば――。返還協定の精神を曲げちゃつたわけだから。

田中 あの人是最終的に辞めることになるんですか。

海部 あれは辞めなきゃならん。

■現在の政局から2 (加藤紘一)

伊藤 加藤「紘一」さんもですか。

海部 加藤ももちろん。だって、彼の言っていることは初めから全部嘘八百だもの。加藤は辞めなければならん。

そして一番最初に喜んで電話してきたのが西岡武夫だ。海部内閣で西岡を総務会長にしたでしょう。あのときも加藤と一戦やつたん

だ。西岡はそれでも「総務会長をやってください」というのは総裁直々のご指示です。だから私は行きます」と言ったんだ。ところが宮澤「喜一」に聞いたら、宮澤は「それはいけませんから、わがほうが推薦する人にやらせてください。加藤紘一君をやらせてください」と言ってきたんだ。そして「総理、宮澤派を足蹴になさるんではようか」と言ったという。「そんなことを言っているのか」といったら、「そう言った」というから、「じゃあもういつぱん呼び出せ」といった。私は足蹴にはしません。口で駄目なもの駄目というから、加藤紘一は駄目なんだ。あの頃からYKKだから。

「宮澤氏は」「どうしたらよろしいでしょうか、宮澤派を派として足蹴になさるんですか」というから、「足蹴というのは手厳しすぎるけれど、私も宮澤先生のご意志を無にしようとは思わんから、どうぞ複数で推薦してください。総務会長候補は誰々と複数で推薦してください」といった。そうすると初めから西岡が入ることはわかってるな。来たら揃んでやろうと思っているから。

伊藤 来なかったらどうするんですか。

海部 来なかったら、次の知恵を考える。そう単純に曲がったり折れたりしちゃいかんから。

佐道 加藤さんというのは不思議な人で、先生の発言のように、あの人はいやだとか問題があるとかおっしゃっておられる方が政界にもたくさんいらっしゃると思うんですが、でも一時期は宮澤派を譲り受けて、プリンスだとかエースだとか言われていたわけですね。何が彼のことをそう呼ばせるのか。

海部 結局、根暗（ねくら）だろうな。

伊藤 根暗ですか。根暗はもてますか。

海部 いや、僕は根暗だと思うよ。ものの考え方の根底に暗いものがある。

伊藤 だけどうしてプリンスになっていくんですか。

海部 それは知らん。だってあの組で、あれ以外にほかにあったかな。

伊藤 資金を集める人が、ということですね。

海部 けれど、最近わかったことによると、集め方もあまり上等ではなかったな。恐喝、詐欺、横領が入っておったみたいだな。根暗であると同時に、政治的な決断をしてもものを決めるときの問題がある。海部内閣では西岡総務会長にしたから、それがボタンの掛け違いの最初なんだけれど、「加藤氏は」総務会に出て来て、西岡のやることには何でも反対するわけだよ。そして阿部文男を総務会の副会長にして、そこで署名運動を始めるんだ。この政治改革法案には反対だという署名運動だ。

西岡を呼んで、「どうする？」といったら、「蹴飛ばして、やっちゃいましょう」というから、「じゃあ蹴飛ばして、やれよ」と言った。それで腹を決めて、やり始めた。そうしたら根暗である張本人は、西岡を宮澤派から除名したんだ。いいですか、総務会長を四の五の言ってもらった。三役ですよ。それを派閥から除名するんですよ。まったく次元の違う問題を同次元のこととして考えているんだ。だからこのあいだも西岡が電話してきて、「総理、あのときのことに戻ってきますね」とか言っていた（笑い）。

だから伊藤「隆」大先生でさえ、あの人「加藤氏」は素晴らしい人じゃなかったかとか、改革派のリーダーの一人だと考えておったわけでしょう。

伊藤 いいえ、僕はとても疑問を持っていました、あの人がなんでプリンスなんだ、と思っていました。

海部 そうですか。

伊藤 だってあの人の感覚は、外交問題についてはまったくおかしい。

海部 あれは中国課の課長補佐が、一つの経験の限度ですからね。

伊藤 だから向こうにべたつとするわけでしょう。

海部 それはそう。だからあの人は、北朝鮮のコメの問題のときでも何の時でも、中国寄りのことをべたべたやるでしょう。

伊藤 野中「広務」さんと一緒にやっただけですからね。

海部 そうだ。だから言えばキリがないけれど、世間的にはそれで通っていたんだな。

伊藤 不思議ですね。やっぱり新聞記者も、よいしょと持ち上げる人がたくさんいたわけですね。

海部 いっぱいいました。僕と加藤紘一と仲直りをさせたいと言ってますね。

伊藤 喧嘩したんですか。

海部 だって、「海部内閣時代に総務会長には」あれは駄目だったものだから。

伊藤 それがずっと尾を引いていたわけですね。

海部 それが尾を引いているんだ。仲直りさせたいと言つて――。

伊藤 一席設けるということですか。

海部 それはいつでも仲直りしてしてやるから連れて来いよ、いつてあれしたけれど、あれは来ても腹を割って話をしないから、仲良しにはなれんわけだ。

伊藤 そういう人柄でしょうね。

海部 これくらいにしておきましょう、これは危ないから。本題に行きましょう。

■三木武夫のアメリカ観

伊藤 これ「質問要項」について、必ずしも順番でなくともよろしいので、お話になれるところから始めてください。

海部 とにかく、きのう、おとといと古い資料を引っ張り出したり話をしたりしておつて、これだけは大前提として申し上げておかなければならんと思うことがある。三木武夫という政治家はアメリカに対して、「知米派」というか「しんべい派」だ。「しんべい派」といつても「親米派」ではないよ、「信米派」なんだ。アメリカを信じろ、という。その話で僕は何回も繰り返し繰り返し教育を受

けてきた。

伊藤 そうか、この前の速記録には「親米派」になっていたな（笑い）。

海部 「親米派」でもいいわ。当時、何故そんなことを言ったかという、あるとき私は、「台湾を除外追放して、大陸とやりますと掌を返すことは、あなたのいつもおっしゃっている『信なくば立たず』という言葉に反するじゃないか。台湾は台湾で今日までの関係があるから、われわれは台湾との関係をやっていきますよ」と言つた。そうしたら「三木さんは」、「世界の大きな流れから言つてそれは通らないんだよ、海部君」という。

私は、「国と国との関係というのは、相手の国が大きければ正しい、小さければいけない、極端に言うとならなければならないけれど、台湾は小さいから駄目だと言われるんですか。罪を憎んで人を憎まずという蒋介石のやり方は正しかったと僕らも教わったこともある」といつた。

この僕の意見には、三木派の中でもわれわれクラスの上級生たちには賛成するやつが多かった。「それは三木先生、いまの話は海部さんの言葉のほうがわれわれに近いですよ。本当に『信なくば立たず』で、信を持つと思つたら台湾は台湾です」という。例えば鯨岡「兵輔」なんかもそうだよ。伊藤宗一郎もそうだ。そういう連中は、総会でがたがた言うとおれだから、三木さんを囲んで飯を食いながら話すときとか、雑談から始まつてそういう話に入っていくときには、「じゃあ私もひとこと」といつて、俺を支持して賛成した。日頃は俺を支持しないやつらだが、この問題に関してはすごく支持するんだ。

それは三木派の中が二つに分かれそうだった。分かれるといつても、割れるということではなくて、考え方が分かれたわけだ。「いままでは三木さんが言ったことは、右向けと言つたらみんな右を向いたんだけど、そうはいきませんよ、先生。今度の問題は、お隣の国、蒋介石の国に、『おまえは出て行け、台湾出て行け、中国大

陸来い』という。大陸は共産党の国じゃないですか」と言ったんだ。共産党の国だということも、当時の自民党には大変説得力があったんだな。

そんなことがあつて、三木さんは言ったわけだ。「それは海部君、やはり日米関係だ。アメリカとの信頼関係がなくなったら日本は駄目だよ。日本という国が生きていくために、日米関係が信頼の根底にあるべきだと思う」という。

いつかこの話もしたと思うけれど、三木さんはそういうときに、「何故アメリカを信頼するかというと、自分は徳島の肥料屋の子供に生まれて、明治大学を終わるときに親から小遣いをもらって世界一周に行った。そのときに自分はアメリカも見だし、ヒトラーのドイツも見だし、ムッソリーニのイタリアも見た。けれどもムッソリーニのイタリアもヒトラーのドイツも、明るい素直なものではなかったという強い印象がある。そこに行くときアメリカは民主主義の国だ、デモクラシーだ。アメリカは、海部さん、デモクラシーだ。だから君も一回行ってきたらいい」という。

それがきっかけになって、僕にアメリカの国務省から招待が来たときに、「先生、行きますわ。あんたが行ってこいと言うから」といったら、「ああいいよ。アメリカの政治がどう行なわれておるか。一つの大きな流れではなくて、一人ひとりの市民を対象に考えておるのがアメリカン・デモクラシーの根底にあるんだ」という。表現はまた別だったかも知らんが、そういう趣旨のことを僕にくどくどと話をしてくれたし、なるほどなと思った。

だから理屈を抜きにして、この人はアメリカが好きなんだと思つた。なぜ好きなのかと思ったら、「自分は世界一周をして帰ってきて、さあ、いよいよどこかに勉強に留学に行こうというときに、躊躇なく選んだのはアメリカである。それは旅行中にずっと見てきたそれぞれの国民の、一言でいうと、なんといったらいいのかな、海部君、アメリカには明るさがあるよ。そういう政治をやっておる国と日本は、今後はお互いに信頼関係を持っていかなければならん」

と言ったな。

このシュレジンジャーと三木の対談のあとでも、そんなことが出て来ますけれどね。そんな意味で、三木さんはハト派だ、手代の海部俊樹もハト派だと、世間で加藤紘一が思われたように思われておるだろう。三木武夫も海部俊樹もハト派の一番左におつて、鯨岡兵輔なんていうとんでもないやつもおるし、宇都宮徳馬とか、あの人たちと同列だろうと思われておつたけれど、そうではないんだな、三木さんは。だからちよつと言葉が変わつたかも知らんが、知米派であり、信米派である。親しいほうの親米派でもあるけれど、アメリカの建国の精神を信じる方の信米派なんだ。「だからあの国と事を構えて喧嘩をした、戦争をしたということは、どだい間違ひである。総合的国力を冷静にきちんと判断しないといけない。これを外交の根底に置いておけ」と言われたことがあつたな。

だから三木さんは、自分が学校を卒業するときに修学旅行と、その次の留学でアメリカを選んだことによつて、アメリカというものに対して全体として信頼できる国だ、と思つていた。そして「デモクラシー」というものはそういうふうになつてきたんだ。日本にはそれが欠けておつたんだ。とにかくアメリカと仲良くしていかなければならんから、そういう意味で勉強して来い」といって、僕がアメリカに行くときも許してくれたし、「アメリカは、アメリカは」といつも言い続けていたんだ。だから三木さんの気持ちの根底では、政治の仕組みとしてはデモクラシーがよろしい、民主主義がよろしいと思つておつたんじゃないですか。

■防衛費一%枠問題

伊藤 それがシュレジンジャーの話につながるわけですか。

海部 そのシュレジンジャーが来たとき、これは三木さんとの話ではありませんからね。僕は坂田「道太・防衛庁長官」さんがその報

告に現われたり、坂田・三木の話し合いの時に横で聞いているわけだ。アメリカと防衛協力のガイドラインが、あの頃はなかったんですから、日本はアメリカともに、なんといったか、洒落た言葉を使っただけで、「共通の利害がある」というようなことを上手に言った。そんなことだと思います。

それで調べてみると、このときはまだ1%のことは全然議題にも話題にもなっていなかった。坂田さんや防衛庁の意識にはちらっとあったかもしれない。これができたのは翌年のことになりますね。けれどもあの頃すでに坂田さんたちは、「日本には節度ある防衛力というものがなければいかん」ということで、「節度ある防衛力とは何か」という角度から議論しておったんですね。当時は、いくらなんだといっても、日本のことは何もかもあなた任せの年の暮れのように、さらけ出して守ってください、うちは何もありません、頼みますよ、だけで良いのだろうかという気持ちもあっただろうけれど、といって一歩踏み出すまでには至らない、というようなことを三木さんはときどき考えては、その節々のことをわれわれにもわかるように話してくれた。坂田さんともよく話しておりました。

坂田道太という人もどちらかというと大変なハト派だと思われていたんだな。ところが坂田さんも、「これからは協力をしなければいけない。協力をするときには、どこの誰とでも平和でありさえすればいいというわけにはいかん。要するにパンなき自由は餓死への自由。パンもなければいかんし、力もいるんだ。知恵の女神も武装しなければならん」という。そういう言葉を誰か有名な人が言ったらいいんだけど、知りませんか。そんなようなことを、いろいろな警句や言葉を並べて言っていた。「日本はやはり防衛力も整備する。日本が自分の国の安全を自分の国で守り抜くことはとても不可能だから、アメリカとのあいだで信頼関係がある人が、アメリカとの信頼関係のもとで、日米安保条約はきちんと結んだから、その線でやって行こう」ということじゃないですか。そういう話をよく聞かされました。

日米防衛協力の進展についてはそう思っていたんだけど、翌昭和五十一年のGNPの1%枠が決まるときは、いまでも覚えていますが、当時の総務会長・中曽根康弘さまはきわめつきのタカ派ですから、「海部君、三木さんによく言っておいてくれ。まっすぐ決まった以上は、全力を挙げて中央突破しないと横波にあおられる。もう突っ走るだけだ。アメリカと仲良くやっていこうというのなら、そちらの方向に向かって全力を挙げて突っ切れ。1%なんかにこだわる必要はない。できたら早く突破しちゃえ」という。

伊藤 それは、その当時ですか。

海部 当時です。

伊藤 1%を決めるときですね。

海部 決める前、いろいろなときに会った。突破するときには、いろいろなことがわかって、みんなが安心して任せたわけだ。というのは、あのころは1%を突破していなかったんですよ。

田中 実際にはしていないですね。

海部 していないんだ。調べたら、そのちよつと前には一・三五%とか、突破した年が続いていたんです。ところがあの頃は突破していないし、当時は幸いなことに経済が高度成長に入って、見通しも立ってきたんだ。そうすると実際に突破しなかったし、そういうことが何年も続いていたんです。

伊藤 まだ余裕があったわけですね。

海部 余裕があったんです。そして経済が成長すれば1%といってもいいから大丈夫だ。1%を決めちゃえ、ということだ。節度のある防衛力の整備といって1%を決めても、その中に入っていられる、ということを書いておいた時期です。

田中 実際には、1%で大丈夫だ、決めちゃおうと言ったのは誰ですか。先生ですか。

海部 僕じゃない。おそらく中曽根さんは、それを見通してわかっておったんじゃないかと思うぐらいだ。中曽根さんが言い出すためにはね。あのとき法制局なんていうのは、そんな政治的な発言もし

ませんけれど、そういうことはわかっておったと思う。一%枠はいかに日米関係を大事にしない一つの砦のように思っていた人がおるけれど、そうでもないんだよということがわかったら、たちどころに、そうか、ということになる。それにあの頃、経済成長は誰の目にも見えていましたからね。「防衛計画の大綱」と防衛関係費の推移を見ると、昭和四十二年からだいたい収まってきましたね。四十一年までは駄目でした。一・六七%とか一・七八%というのがあったけれど。

伊藤 もとが小さいですからね。

海部 もとを大きくするという倍增計画が入って伸び始めると、みんな一%未満で収まっているわけです。だから数字の魔術というか、数字は使い方だということですね。

田中 たしかにそれはありますね。

海部 そんなことを感じました。

伊藤 いまも一%を超えていないんじゃないんですか。

佐道 中曽根内閣の一九八六年に、一・〇いくつかで超えたんですが、そのあとは〇・九八とか九九とか、そういう感じですね。

海部 いまは一%以下ですね。

田中 中曽根「内閣」の最初の時に超えたというときも、実際の数字はたしか超えていなかったんですね。

海部 計算したら超えていなかった。だから、そこまでご承知の上で大元帥はラッパを吹いたのか。

■鬼頭史郎のニセ電話事件

伊藤 わかりました。さてそのほかの問題で、「質問要項の」一から四までのあいだで何かお話くださることはありまじょうか。

海部 この鬼頭史郎「京都地裁判事補」のニセ電話事件。このときは鬼頭が三木さんの南平台の自宅に電話を入れたんです。それで

「ちよつ、ちよつと待ってくださいよ、ここで」と言われて、いつもは「私は」三木さんの電話する部屋にスッとして行くのに、その日は入って行かなかった。というより入っていけないかった。何かあるなと思つたら、それがこの電話だったんだな。

しかし「電話が」終わってから三木さんが直ちに言ったことは、「わしを甘く見ちゃいかんよ、引っかけようと思った」ということだ。要するに中曽根に対する発言を何か取り出そうとした。あのときは中曽根さんがほかの事件で疑惑の対象になっていたんじゃないかな。何かあつたんだ。「それを言えばわしが喜ぶと思つていろいろ話をしてきて、最後はそのことを聞いてくるから、『いや知らない、そんなのは』と答えた。これはニセ電話だということを早くに気がついた」と言った。

伊藤 指揮権発動を促す電話でしょう。あれは田中「角栄」問題ではないんですか。

海部 田中問題で、中曽根さんが中に絡んで何かした事件があつたんじゃないかな。ただ、このときは、何か言葉尻を取ろうと思つて鬼頭判事補は電話をしてきたけれど、三木さんは早い段階で、これは容易じゃないと気がついた。その頃、布施「健」検事総長の名を騙つて指揮権発動を促すニセ電話、「そんなことなら布施君自身がかけてくるはずだ。わしは話しているんだよ、布施君とは。これはおかしいとすぐに気がついたから、おかしいと言わずに、言葉尻を取られないように気をつけてやりとりした」という。これであれにはならんけれど、非常に不思議な事件だ。問題は誰が知恵をつけてかけさせたのだろうか、というところに思ひは行っていたみたいだな。

伊藤 これは結局、鬼頭という判事補がかけたことがわかつたんですが、何のためにやつたんでしょうね。

海部 それは三木さんに、頼むぞと言わせようと思つて、こうこうしませうかというような誘いを言つて、それに乗せようと思つたんでしょう。そんなときにそんなことを言つたら、まさに指揮

権発動になって大問題だから、そんなことは百もわかっていふと。
佐道 この鬼頭という人は、共産党の宮本顕治さんの身分帳を写し取ったとか、そういうこともやっていたわけですね。一体何者なのか、政治的な背後とか、どういうことですかね。

海部 そこまで調べ上げた人はいないみたいだな。

佐道 当時もわからないままというか、奇妙なことをやっているのがある、ということだったんですね。

伊藤 これは三木さんの周辺ではそんなに大きな問題にはならなかったんですか。

海部 周辺ではならなかった。というのは、その日のことも、「もう黙っておれよ、内緒だ、この話は」ということだった。「電話がかかってきて、その電話に出たこと自体がわしのしくじりだった」という。

伊藤 電話というのはどういうふうに取るんですか。秘書のところにかかるでしょう。

海部 秘書のところにかかるか、奥さんが出ることもあるな。夜遅い時間になると。僕らが行って、三木さんや秘書がいて話をしているときに鳴れば、奥さんが出て、「誰々から電話です」と言って呼び出しに来るわけだ。このときは誰が呼びに来たか知らないけれど、私が行ったときは、「ちよっと、今日はこの部屋で待っていてよ」と言っただけで「三木さんは」別の部屋に行った。

伊藤 ではご自分でも、これはかなり機密に属する話だとわかっていたんですね。

海部 それと同時に、「布施の名前をいうが、布施なら布施がわしに直接電話してくるはずだ。検事総長と総理大臣がしょっちゅう親しげに電話で話をしておることはあり得ないことだから。その前に布施とはちゃんとほかのことで話がしてあるから心配ないんだ。けれどもそれを言うから、これはニセ者だということは明らかにわかる」ということですね。これは三木さんの判断が早かった。

伊藤 これは引つかからないで、よかったですね。

海部 ばやで消し止めて良かったと思う。ここでべらべらしやべつたり言葉尻をつかまれるようなことをやったら、次の日の夕刊ぐらいいには一面ぶち抜きで書かれるところだ。

伊藤 それでは一番の問題は記憶にございますか。皇太子がひめゆりの塔で「火炎瓶を投げられたという事件について」。

海部 沖縄の問題では、三木さんは沖縄の選挙応援を兼ねて街頭演説に行きましたね。それに僕がついて行った。あれは何の選挙だったかな、稲嶺「恵一」の前の知事選だったと思う。そのときにはまだ起こっていなかったんだ。この事件のあとで、またなんで行ったのか、「沖縄に」行ったときにはそこに行つて、ひめゆりの塔の下の洞窟を見て、お詣りしてきました。

伊藤 ここでやられたんだ、という話だったんですね。

佐道 皇太子ご夫妻は沖縄海洋博のオープニングに合わせて行かれているんですね。その関係で行かれたということではないんですか。

海部 沖縄海洋博の時もちろん行きましたよ。

伊藤 そのときの事件なんです。

海部 そのときの事件か。いや、記憶があまりないな。入っていった穴の中から投げたんだから、「よかつたらそこに入ってくださいよ」という。「ここから見ればよくわかるわ」と言つた、そんな思い出しかない。

田中 三木さん自体は、沖縄に対して思い入れはあったんですか。

海部 沖縄に対する思い入れはあるでしょう。基地の町というのは、それによって大変ご迷惑をかけておるけれど、それによって日本の平和と安全が守られているということについては三木流の演説をぶつた。僕らに話すほど詳しくは言わんが、「アメリカと日本とが平和的に協力していくことが、アジア太平洋の平和と安定に対して欠くことのできないものだ」というような、あの人の演説の時に出てくる一貫した言葉がある。

■国会対策委員長1（議運と国対）

伊藤 「海部さんは」自民党の国会対策委員長に就任されますね。その前はずっと議運のほうをおやりだったわけですね。

海部 はい、その前は。

伊藤 議運と国対とはけっこう重なるところがあるわけですか。

海部 あるんです。広い意味で国会対策というのは、国会の運営、法案をどうするかということが中心ですが、それよりも裏の環境整備が多いですね。証人喚問をやらせるかやらせないかとか、予算はいつまでに上げるとか、予算がいつまでに上がるならこの法案は後回しにしてもいいとかいう取引まで、国対でやるんです。

伊藤 それは議運で――。

海部 議運のほうがもつと正面、第一線でやり合って、話がつかないと「国対マター」という。これは国対マターだといって、みんなが国対マターにするわけです。国対委員長になったときはもう議運の理事ではありませんが、それまで僕が議運の理事をやっていたときは、国対副委員長を兼務しておったんです。両方のことがわかるように。それは社会党にもおるんです。

田中 どの党でもそうやって兼務するんですか。

海部 数が多いところはね。どうでもいいところ、共産党とかアナーキーはなしで、社会党は議運と国対と兼務している。わがほうもやっている。

伊藤 じゃあ表でワーワーやっていて、裏でまた話をしている。

海部 裏で話をして馴れ合いをやるんだな。馴れ合いという悪いから、円満解決の努力を続けるわけですよ。

伊藤 でも円満というのはただではいけないわけですね。

海部 一杯飲んだり、飯を食ったり。

田中 先生、それだけですか。

海部 それだけだよ。

伊藤 口が裂けても言えない（笑い）。

海部 やっぱり墓場まで持つていくべきことがありますからね。

伊藤 あるということがわかれば（笑い）。

海部 けれど三木内閣になったときに、そういうことにお金が使えなくなつたんですよ。要するに三木内閣になつてからは、名前を出したら悪いけれど、そういう費用が裕福なころの先輩たちから、

「そんなケチケチやつていたら駄目だぞ、行つてこい」といつて叱られたこともあつた。

伊藤 それは党の予算の問題ですか。

田中 官房のお金ですか。

海部 官房の金じゃない、党の金。党には幹事長代理というのがある、幹事長はあれだから、幹事長代理を呼んではツケを回したり、いろいろなことをしたことは正直言つてあつたけれど、昔はもつと派手にやつておつて、社会党の古い議員からは、「このごろはお土産が悪い」と言われた。

伊藤 海部さんはケチだと。

海部 そうだ。「お土産が悪い」という。だから「まあまあ、そう言うな、そう言うな」といった。

伊藤 いまは財政窮乏の状態だと。

海部 「できるだけやつとるんだから」と言い訳をしたんだけど、だからやつぱりそのときの総理とか、そのときの官房長官などの清濁併せ飲む雅量、どの辺が限度なのかということをや野党のほうも気がついてくるわけだな。

田中 思い出しました。このころちょうど共産党が伸びてきまして、たしか料亭政治批判とかを始めたんですね。

海部 やられた、やられた。

伊藤 じゃあ海部先生はその矢面に立つていたわけですか。

海部 矢面に立つてやられていた。ただ悪いことには、三木内閣になる前から、うちには誰も選手がおらなかった。うちを代表して

「私が」議運も国対も二足の草鞋だった。それから官房副長官になったから、その前の曰く因縁、故事来歴も全部知っているわけだ。だからこういうことが起こったらここに言っておけばいいというので、共産党でも社会党でもすたすた行つては話をつけてくるわけだ。お互いに、あのときのこと言うぞ、なんていうと、それはお互いにあの頃は世の中が良かったから、逃げ隠れもないし、新聞にも載っていない。三木内閣の頃からひどくなつたな。「赤旗」に、海部議運委員長は贈賄、誰やらは収賄なんていう大きな記事を書かれた。伊藤 収賄の方は社会党の議員ですか。

海部 そう。それで文句を言いに行つたこともありますね。

■国会対策委員長2（野党対策）

伊藤 国対費というのは、予算として計上されているわけではなくて、幹事長が――。

海部 幹事長代理に直接電話するなり、お使いを出すなり。

伊藤 でも普通の飲み食いは、ただツケを回せばいいわけでしょう。

海部 そう。その頃からうるさくなって、誰かのサインがいるとかね。それはそうだろう。

伊藤 先生は長くおやりでしょうからお感じでしょうが、物事はだんだんレートが上がって来るじゃないですか。

海部 そんなにレートを上げられないんだ。キリがなくなるから。

そこで「悪いけれど、これだ」といって、不義理をしたこともあります。

田中 不義理ですね。

伊藤 それは義理の問題なんだ（笑い）。でも野党のほうにも卑しい人がいるでしょう。

海部 そうですよ。当然そうなるもの、と思い込んで出て来るから。伊藤 最近の海部さんはケチだと言われる。

海部 それはそう言われるんです。また相当言われたんだな。

伊藤 こつちからは叩かれるし、こつちからはケチだと言われる。でもそれを攻撃できるのは共産党ぐらいのものじゃないですか。社会党は攻撃できないでしょう。

海部 社会党は攻撃できませんよ。

伊藤 攻撃される方ですね。

海部 変な話だが、共産党の理事も、なんのかんのと云つて威張るけれども――、まあ言いたくないが、ちゃんと収まつた時期がありましたからね。一番最後までつき合つて、そのうちに、「あそこはまずいから、委員長、今後は赤坂だけは使わんでくれ。本国がうるさくてしょうがないんだ。本国に行つて許可が取れるのは、皆さんといういろいろなもので話をして、国会が円滑に運営されて、同時にわが共産党の発言の場も与えられて、言いたいことも言えるようにするのが国会本来の任務だ。そのために、ときには時間が来れば飯も食つたり、あれもしなければならんと言うが、赤坂で芸者を一緒に侍らせてやる必要は全くないだろう」という。「じゃあどういうところならいいんだ」と聞いたたら、「例えばそれ以外のところだつたら、ホテルとか町のレストランとか」という。そんなところで話したりするわけにもいかんだろう。

僕が議運の委員長になつて、そういうことが問題になつたときに、「じゃあホテルでやろう」といった。僕は昔からホテルオークラをよく使つていたから、「ホテルオークラに行こう。あそこならツケは三木さんのところに回したつていいんだ」なんて言つたら、共産党が「ホテルオークラでいい」と言うんだ。それは一歩改革されたんだな。ところがおかしい結果になつたのは、ホテルでやつたほうが高いんです。それでそのことも新聞に叩かれたのかな。赤坂の料亭とホテルと、どう違う。ホテルも一般庶民とは感覚が違ふとか、ひどいことを書かれた。

そうしたら、「ホテルもやめよう。衆議院には議長公邸があるじゃないか、そこでやろう」という。「そんなことやつたら議長に迷

惑がかかるよ」と言ったら、「じゃあ憲政記念館の食堂でやろう」という。それもやったんだ。「そこまで言うならそこでやってやろう」というわけだ。しかし憲政記念館の食堂は、ご承知のように百円のカレーライスとか百二十円のランチとか、そういうものしかない。「しかもわれわれが食べるような夜の時間にはなかなかね」と言った。そんなことになったら共産党を説得に行くのが社会党だ。「いいじゃないか、細かいことを言わんでも。取ればいいんだ、取れば。海部君、このあいだのあれを、出前で取ればいいんだ。赤坂からはいかんけれど、ホテルからならいい」という。

ところが、これまた笑い話じゃない。ホテルから出前を取ると、その出前に人がついて来るんだな。ケータリングというんだそう。そうすると人件費もつくわけでしょう。ホテルで食べる同質のもの、あの頃はいと違って狂牛病がない頃だから、何を食えるかというと、ビフテキだというんだ。ビーフステーキを必ずつけなければならぬ。三百グラムの大きいやつだ。あそこ「憲政記念館」でそれをやろうと思うと、えらい高いものにつくわけだ。ケータリングで来るでしょう。それであたためるところを頼んで、借りてこなければならぬし、持って来たお皿をきれいに並べて、サーブスに出したり引つ込めたりする必要もあるでしょう。結局、憲政記念館でやると、ホテルに食べに行くよりも、同じものを食べて六割方高かったな。ホテルに行けば一万円で食べられるステーキ定食も、一万六千円かかる。ケータリングの人件費もつくし、いろいろある。「おい、こんなことだけいいか。これをしゃべると喜んで新聞は書くぞ」と言ったな。そうやって共産党といろいろとやるんだ。そうしたらさすがに、「じゃあもうやめよう」と言う。「やめたら、おまえら横になるだけじゃないか」と言って、押したり引いたり、綱渡りみたいな時もあったんですけれど、その頃からちよつとずつですが、よくなってきたんじゃないですかね。

伊藤 社会党の国対のベテランというと、誰なんですか。

田中 田辺さんとか。

海部 あの頃は田辺誠が国対のベテランで、僕が官房副長官の頃のスト権ストと一緒になつてつき合つて、相手の情報を取ったり、倒したり、ストライキをこのへんでやめようとかやった。「全部、これはお国のためだから協力するわ」といつてやったのが田辺だ。群馬県で小淵恵三と同じ群馬三区だから。けれど、小淵も議運の理事だったから、「恵ちゃん、今晚田辺だから来てくれよ」と言つて、「ああ、行くわ」といつて一緒に協力してもらつたり。

田中 山本幸一というのは――。

海部 もっと先輩だ。柳田秀一というのがおつたな。あれは瞬間湯沸かし器というあだ名があるぐらいで、すぐにカアツと怒るけれど、低姿勢で揉み手で出て行つて、「さあ、先生におつてもらわな」と、社会党の他の人では話にならんといかんから、先生頼むよ、今日顔を出しておつてよ」と頼みに行くと、「そうか。そんなに長時間は駄目だぞ」という。「適当なときに手を挙げてください」というと、「しかし今日俺はどうしても京都まで帰らなければならぬから」というので、「それではあの、飛行機をとっておきますから（飛行機は八時何分というのがあつたんだ）、顔を出してもらつて、話が終わつたら間に合うようにお送りしますから」「そうか、それならいい」という。そういう手配をしたり――。

伊藤 じゃあ間に合うように終わらせないといけないですね。

海部 そうですよ。だからあの頃はいろいろやつたな。あまりメイク・パブリックしていい話じゃない。悪い話があるから、どう受け取られるかわからんから。

田中 でもそういうお金はすべて自民党から出るわけですね。

伊藤 それはそうでしょう。公費を使うわけにはいかんでしょう。

海部 もちろん自民党から出るお金です。それは言つたように、三役がトタで出したりしてはいけませんから、幹事長代理というワンクッション下の汚れ役が万事承知して、それはやつてくれたな。だから経理局長のところにもそういう請求書は持つて行かなかつたね。幹事長代理のところだ。

伊藤 そこが握っているお金があるわけですね。

海部 あるわけだ。「これぐらいで仕上げるよ、これぐらいで上がらなかつたら、おまえさんはバツテンだ」といわれる。

佐道 もともと予算で計上されているわけでないとしたら、どこかに潜り込ませているというか、うまくやっているわけですか。

伊藤 いや、幹事長のところにあるんでしょう。

海部 あの頃の自民党は、皆さんがお考えになるよりもっともつとどっぷり勘定だったんですよ。

伊藤 それにお金がいっぱいあったんでしよう。

海部 あるんだ、それは。

伊藤 いまは貧乏ですけれど。

海部 それできれいな事ばかり言ったからといって、三木さんの時には党からガンガン突かれた。野党でも泣きついてくるんだからね。

「海部君、おまえのところ評判悪いぞ、このごろ」「そうですか」「ちつとも出さんそうじゃないか」「それはいけません」「おとつ

つあんによくそう言つとけ」。いや、そういう走り使いもやらされました（笑い）。

■国会対策委員長3（国対への適性）

伊藤 先生は議運から始まってずいぶん長いですよ。

海部 長い。

伊藤 ベテラン中のベテランですね。

海部 ベテランになっちゃったんだ、悪いけれど。そういうことには向き不向きがあつて、そういうところに行つて理屈を述べたり、威張ったり、喧嘩をしたりして、溶け込めないような人ではそういうポストは務まらん。自分を殺して、下手なゴルフでもつき合わなければならん。長かったことも事実だ。それをまた誰かがやっておらんと、三木の派閥だけはつんば数で、国会がどうなっているか

見通しも立たない。三木さん自身が僕を呼んで、「ちよつと外国に行つて来たいけれど、この間はいいな」というと、「ちよつと根回ししておきます」といって、すぐ社会党と話さなければならんものね。当時は社会党だけではいかなから、民社党にもすぐに話さなければならん。

伊藤 物事の順番も大変でしょう。

海部 だから順番はあくまでも民社党が二番さ。「春日一幸氏の口吻で」「貴殿、これは社会党とばかり話していいというものではないから、そういうときには、わが輩に最初にちよつと入れれば大丈夫だから」なんていう。けれどそれをやったら大変なんだ。そう言われて民社党に最初に行ったんだね。それがバレたら大変だ。そう言

田中 いま国対関係は橋本派が握っているとか、そういう言い方がありますね。当時は自民党各派がちゃんとそういう国対の要員を育ていらしたんですか。

海部 各派で副委員長をひとりずつ出したんです。

田中 それは国対要員ですか。

海部 国対要員の中からピックアップするんです。

伊藤 議運に、でしょう。

海部 国対と議運を兼務する人は、自民党と社会党で一人ずつぐらいです。そんなにたくさん兼用させられない。兼用させると、よく知っているやつがおる。僕の前任者は田沢吉郎君といって、これはいなくなつたから平気で言えるんだけど、大平派の国対副委員長で議運の理事も兼務したことがある。当時は竹下登が田中派で出ていて定着椅子だった。田沢が俺のところに来て、「おい君、今度両方かけもちをやるのを、俺に一期譲れ」というので、「ああ、いいですよ」と言つたんだ。そうしたら「すまんけど、竹ちゃんと金丸に言つてきておいてくれ、田沢さんがやると言っているからといって」「言つてきてやるわ」。そうしたら、それがいかんだ。どっちだったか「竹下か金丸か」忘れたが、「あれはいかん」と言うんだ。

田中 田沢がいかん、というんですか。

海部 あかんというんだ。

伊藤 向いていないというんですか。

海部 向いていないというんだ。酒が好きだから、酒を飲んでやたら時間が長くなるし、あかん、というんだ。「困ったな、しかし頼まれたから」と言ったら、「海部、おまえやれ」という。「私がやるのはいいけれど、田沢と僕のあいだがおかしくなっちゃうから、それはいけませんよ」といって、困ったこともあった。

伊藤 それは実際、決着はどうなったんですか。

海部 決着は結局田沢に、「おまえはもう一期やらせる。その代わりもう一期だけだぞ」「わかったよ」ということになった。

田中 田沢さんがもう一期続けたかったというのはどういう意味なんですか。

海部 わからん。情報がたくさん入るから、それで大平さんや鈴木善幸さんにいろいろ知恵を授けられる。要するに動きの中心人物であらねばならん、ということなんだろうな。

伊藤 かなり大事なポストなんですね。

海部 それは大事なポストです。

田中 総裁とか総裁派は必ず出したいという感じになるんじゃないですか。

海部 そうだ。

伊藤 それも、三木内閣だからでしょう。でも面白いですね。腰を低くして、喧嘩をしないで、つまらんことにもつき合って、というのは、それ専門ならわかるけれど、海部さんはもうちょっと理想主義なんじゃないですか。

田中 先生のタイプとはちよつと違うんじゃないですか。

海部 違うけれど、それは三木さんのためならえんやこらだ。それはそうだ。この道を究めておけば誰にも負けない。これも修行の一つだと思つて。

田中 三木派で、適任者というのはほかに考えられませんか。

海部 ほかを出したら、じきに喧嘩をしてくるんだ。「おまえ、喧嘩して帰ってきたらいかんじゃないか」ということになる。鯨岡兵輔なんていうのは、「こんな馬鹿なことはない。これは海部さん、どう思う。あんた、間違つていたら注意してくれ。社会党がこんなことを言う、これは駄目だ」「そんな駄目だ、駄目だと言っていないで、あそこは潤滑油で回すところだから、わからんかなあ」と言つたんだか、「わかりません」という。正論を吐くやつはそういうことだな。だから「もう一步、鯨さん、解脱して高いところに上がつてみると、三木派のためにやらなければならん仕事で、それは三木さんのためになるんだから」と言つたもの。

それから坂本三十次にやれ、と言つても、「そんなことはわたしにはできません」「でんきんよじゃない。行こうよ」といったんだけど。それは僕の方が、当選回数も就任も早かったから、僕を見ているわけですよ。そうすると委員会にもろくに行けず、議運から呼び出されるとすぐに議運に行つて、夜遅くまで話をしたり、夜遅くまでつき合つたりしているでしょう。こちら愚痴をこぼすこともある、「ああ、また議運か」とかいふ。だから代われと言つたら坂本が、「わしは向いとらんから貴殿のような人が」という。だから結局向いているやつが、うちにはあまりいなかったんだ。それでさっきの話じゃないけれど、連れて行くと断わる人もおつたり、なかなかそこは難しいです。

伊藤 でもこれをやると、野党の中枢に近い人物とのネットワークができるわけですね。

海部 それはその通り。共産党に至るまで、人間的なつき合いはできるようになる。少なくとも、どこへ電話しても、おる限りは居留守を使わずに出てくるというような仲にはなれるわけです。

田中 社会党の委員長になった人の前歴を見ると、国対関係が多いですね。田辺さんにしてもそうですし。

海部 難しかったのは成田知巳だけだな。

田中 成田は国対じゃないでしょう。

海部 全然関係ない。だから成田知巳が委員長になった前後に、三木さんが「ちよつと成田の考えを聞きたいから聞いてこい」と言われると、あの人「成田氏」は逆にお酒が入る前に聞きに行かなければならない。お酒を飲んで出来上がりかけちゃうと、もういかなのだ。

伊藤 何を言っているかわからないということですか。

海部 そう。ここから先は慎まないといいかな。わが党の先輩にもおりましてな。目がすわちちやって、何を言っているかわからんようになった、べらんめえ調になる人がおる。

伊藤 それだけおつしやれば十分わかります（笑い）。

海部 だからそういうところには氣をつけて行かなければならんから、時間を計って。

伊藤 成田さんはたしかここ「鼻筋を指す」が赤かったんじゃないですか。

田中 その他はだいたい大丈夫ですか。佐々木更三とか。

海部 佐々木更三は、残念ながら僕はつき合いがないんだ。向こうがえらすぎる。

伊藤 位が違う？

海部 「アメリカ帝国主義は日中共同のテチだ」という。そんなことを言っているやつが委員長では駄目だ。こつちが街頭演説で悪口をたたき合ったぐらいだ。そんな頃は向こうがえらすぎるんだ。成田がかるうじて——。だから議員宿舎に行つて夜、酔っぱらう前につかまえるのが一番いいんだけど、社会党の人がたくさんおるでしょう。「どこへ行くんだ、どこへ行くんだ」と言われる。あの頃は、これ「麻雀牌をかき回す手振り」が好きなのが各宿舎におつたんだ。だから、「これ「麻雀」だ、これだ」と言いながら入っていた。

伊藤 本当に、これ「麻雀」もずいぶんやられたんでしょ。

海部 やった、やった。社会党の部屋に行つてもやったよ。

伊藤 わざと負けたりして（笑い）。

田中 そういふときは負けなければいけないんでしょ。

海部 負けなければいけないというほどでもないけれど、やっぱり負けといたほうが好ましいわけだな。

伊藤 これ以上突つ込むとまた危なくなつてくる（笑い）。

海部 いろいろなことが出てくるからな（笑い）。

伊藤 またそのうち、どこかで引つかかつて出て来ますよ。

海部 限度というものがあるから。

伊藤 限度を少し突破したぐらいのところまで終わりましたよ。

■国防会議と日米首脳会談

伊藤 先生、最初にシュレジンジャーの話が出ましたが、三木内閣のときに国防会議の幹事をやっておられるのですが、何かご記憶はございますか。

海部 あんな頃の国防会議というのは、そう大したことを決めていないんじゃないですか。要するに、一％枠を決めるときも形式的な国防会議をやったかもしれないませんが、その前の党の三役会議とか、そういうところではいろいろな議論をした。断固、断固という中曽根総務会長閣下とか。

伊藤 国防会議の幹事というのは、いちおう形だけですか。

海部 形だけだ。

佐道 ただ三木内閣の時代は、その前に比べてみると国防会議の開催回数が多い方なんです。

海部 その前のことはあまり知らんから。

田中 基盤的防衛力整備計画をつくっていたんですね。

佐道 そうです。それも三木内閣ですね。それと一％がセットになるわけです。

海部 一％の時には三木さんは、節度ある防衛力が必要だと言っていた。

伊藤 だからこの問題とはつながっているという感じですね。

伊藤 それからこの前お話がございましたサンフランのG7のとき、あとでワシントンに行かれて日米首脳会談があったと思いますが、それは随行されたんですね。

海部 随行しました。

伊藤 そのお話はたしかなさったのではないかと思います、他に何かご記憶ございますか。

海部 あときは、サンフランから直行してワシントンに行った。

伊藤 ホワイトハウスに行かれたわけですか。

海部 行って、ブレアハウスへは一泊ではなかったかな。そして宮澤外務大臣ではなかったかな。

佐道 そうですね。宮澤外務大臣です。

伊藤 先生は日本政府首席随員ということですね。

海部 そうです。あれはスポークスマンを兼ねていますから。

伊藤 いつでもスポークスマンですね。

海部 そのときじゃなかったかな、決まった首脳会談のほかにもう一回やったんだ。そのときどちらから話しかけるともなく、三木さんがもうちよつと話すからということ、そのぐらいの話は自分でやっちゃうんだ。

田中 外務省の役人には無断で、ということですか。

海部 そう。あときは外務省の役人よりは英語に関しては早耳の国弘正雄がついてきたわけだ。その国弘を通訳に使ったことが国益に反するといって突つかれたんだな。

伊藤 なぜですか。

海部 外務省の通訳をなぜ使わないか、という角度だったんだ。それで三木さんは「私が総理大臣ですよ。どうして外務省を使わなければならんのか。私が大統領と直接話して、もうちよつと話そうとあったんだから、私の言葉や、主義主張信条を日頃から知っている随行者を使ってどこがいかなのですか」といった。外務省はあのと

き、全部知っていなければならんという思いがあつて、メモ取り魔なんだな。

伊藤 自分が何でも、ということなんでしょう。そのときの非常に強烈な印象というのはないわけですね。首脳会談の時には随員といつても、ずっと付いているわけではないんでしょう。

海部 そうです。ずっと付いているわけですが、横にずっといるわけではない。離れたところにおるわけだ。

■エリザベス女王からの勲章

伊藤 あとこぼれたものをいくつか伺いたんですが、エリザベス女王が来日されますね。それで先生は勲章か何かもらったんですか。

海部 エリザベス女王からは生まれて最初の勲章をもらいました。

伊藤 生まれて初めて、ですか。

海部 それまで勲章をもらったことはないもの。エリザベス女王からもらった勲章が最初の勲章だったんですね。

伊藤 それはすごい勲章なんですか。

海部 すごい勲章。モースト・エクセレント・オブ・オーダー・オブ・ザ・ブリティッシュ・エンパイア。だから相当立派な勲章ですよ、私がいま持っている勲章の中でも。

田中 それはどういうきっかけでそういうことになったんでしょうか。

海部 きっかけはよくわからん。よくわからんけれど、ほかの閣僚どもに羨ましがられた。例えば小沢辰男とかは、「海部、こんないい勲章を」という。

佐道 エリザベス女王の接伴役とか、そういうことですか。

海部 たしか接伴委員会の日本側の代表じゃなかったかな。だからまず飛行場まで迎えに行った。「アルバムを開いて勲章と許可証の写真を示す」これです。

伊藤 これは佩用してもよろしいという許可証ですね。

海部 そうです。これが正式なんです。

伊藤 すごい勲章ですね。

海部 ナイト・コマンダー・オブ・オーダー。だからイギリスでいえばサーですね。サーだよ。笑っちゃいかんよ。

佐道 これは内閣の許可がなければ駄目なんですか。

伊藤 佩用するときはそうですよ。外国から勲章をもらうときは、勝手にもらったらいけないんですよ。

海部 勝手にもらえない。閣議で許可しないともらえないんだ。

田中 そうですか。じゃあこれをもらえば、いつでも「佩用して」いいんですか。

海部 それをもらえばいつでもいいんだ。

伊藤 でもこういうのをつけて行く場がないんじゃないですか。

海部 こんなものをつけて歩いていたら、とうとうここ「頭を指す」に來たかと言われる。新年の宮中の祝賀会なんか、珍しいものはつけてくるんだ。臼井莊一さんとか、山中貞則さんとか、つけてくるんだ。

佐道 山中さんですか（笑い）。

田中 そろそろ（笑い）。

伊藤 先生はつけていかないんですか。せっかくもらったのに。

田中 こんなに立派なものですから。

海部 その国の時だけ、つけて行くんだ。英国のとき。今度は女王陛下の誕生日祝いとかやるでしょう。でももうこのごろはつけて行くことはやめた。ほかの人がつけて來ないのに、みつともないじゃない。

伊藤 ほかの国の人はつけてくるでしょう。

海部 つけてくるけれどね。

田中 しかし全部カタカナで書いてあるところが面白いですね。

伊藤 これは羨ましがられたでしょうね。

海部 それはそうです。こんな勲章は大臣ももらっておらんわけだ

から。勲一等でしょう。それで大臣どもがもらえたのは、ここにける「首からかける」もので、日本でいえば勲二等とか勲三等で、これ「たすきがけ」ではないから。「おまえどうしてそんなものもらえるんだ」「やるもといいたからもらったんだ」。それが本当に天にも地にも第一号の勲章です。

田中 それ以来バンバンもらっていますか。

海部 それ以後は、おかげさまでバンバンもらっています。今度お隠れになったときは、ダーツと並べるでしょう（笑い）。

伊藤 記念館でもつくって並べますか（笑い）。

海部 いま応接間にいっぱい並べてあるんです。外国の友達が來たときなんかはその部屋に入れてやると、みんな珍しがるから、「よかったですら貸してやるぞ」というんだ。

田中 借りるものでもないでしょう（笑い）。

伊藤 ちよつと借りてみるかな（笑い）。

佐道 借りてどうするんですか。教授会に出ますか（笑い）。

伊藤 何かのパーティーに行きますよ。

田中 伊藤先生、それこそここ「頭」に來たと思われる（笑い）。

海部 だって伊藤先生は勲一等でしょう。

伊藤 勲一等なんてもらえないじゃないですか（笑い）。

田中 勲伊藤で（笑い）。

海部 だいたい名誉教授になると勲一等だな。

田中 二等です。調べたことがあるんです。

海部 馬鹿にしているな。そういうときはあなたの方が怒らなければ。

伊藤 いや、そもそもしらないんです。

田中 海部先生ほど貢献していませんから。

海部 俺も日本の勲章はまだもらっていないんだ。

伊藤 まだお若い。

海部 もらったら、またそれで終わりだと言われる。

伊藤 何かさよなら、と言ってくれるような感じですね。

田中 でも先生だと、すごいものをもらえるんじゃないですか。大

勲位の下ぐらいですか。

海部 勲一等桐花賞。

佐道 でも大勲位をもらってますます盛んになった方もいらっしやいますから。

伊藤 時あらば、第二次海部内閣でもつくつて。

海部 でも大勲位も、現職がお隠れになると大勲位を出すということになったから。調べてごらん。現職で死んだから、小淵恵三も大勲位なんだ。

田中 じゃあやっぱり第二次海部内閣をつくらなければいけないですね。

伊藤 第二次海部内閣をつくつて、狙撃されて（笑い）。

田中 狙撃されて大勲位（笑い）。

■三木内閣最後の選挙戦

伊藤 冗談はやめて、三木内閣の最後に選挙があつて、それで負けたということ、退陣になるわけですが、このときの海部先生ご自身の選挙はどうだったんですか。楽勝でございましたか。

海部 おかげさまで、楽勝とはいいませんけれど、非常に苦しい選挙をやりましたが、票は増えて、最高点だったことは間違いありません。それはありがたいことです。

伊藤 「自民党」全体は落ちているのに。

海部 はい。だからそういうときの気持ちというのは非常に複雑です。自分で嬉しそうな顔をしてしゃべるわけにはいかん。それから来るやつがみんな票を減らしたとか、仲間が落ちたとかいう。味方はおおかた撃たれたりという雰囲気の中で、「やっつた！」と言っているか、「やっぱ駄目だな、おまえは」と言われるから、黙っているか、「おかげさまで当選できました」という程度のことでした。喜びを外に出したらいかんという雰囲気でしたね。

佐道 最高点でなかったときというのはあるんですか。

海部 初めの頃はずっと江崎真澄が最高点だもの。

佐道 でもある段階からはずっと最高点ですね。

海部 ある段階というのは、官房副長官になってから。あれもテレビ効果だな。

佐道 副長官になってからですか、最高点は。もつと前から最高点かな、と思っていましたか。

海部 前は駄目です。上に佐藤観次郎、サトカン「佐藤観樹」の親。それから江崎鉄磨の親・江崎真澄がいる。江崎真澄、佐藤観次郎、海部俊樹。そしてその下に、おれを落とそうと思つてついてきている自民党の大野派のキャバレー王とか、いろいろなのがおつて、そういうのがだいたい次点だ。

伊藤 それを振り切つて。

海部 時には民社からひとり出るから、カーツと振り切つて。十四回の選挙のうちで、一回、二回目は僕がラストですね。三回目によろやく上になって、それ以後はずっと、おかげさまで最高点が続いて十四回になりました。いま当選回数で上から数えると、僕の上には三人おるだけです。中曽根さんでしょう。官澤さんは違うんだ、参議院が何回あるから。山中貞則さん。もうひとりおる筈だ。歳だけでいうとずいぶんいますが、当選回数からいうと三人だけだ。国会便覧を見たらわかるんだが、この話はあまりしないように思つておるんです。

田中 先生は先ほど「官房副長官効果」だと言われましたが、官房副長官はテレビに出ますか。

伊藤 討論会とかにしょっちゅう出ておられたじゃないですか。

海部 僕はずいぶん出た。井出「一太郎」さんが最初に出て、「海部さん、わしはああいふ手合いとは合わないから、すまんけれど、あなたやつてくれんか」という。

田中 ということは官房長官効果じゃないですか。

佐道 官房長官の役をやっていたということですね。

田中 実質的には代理でやっていたということになるんじゃないですか。

海部 それが票の増えた元だと思えますね。

伊藤 テレビに出ますし、官房長官の代わりに会見をやったりするわけでしょうから。

田中 十一時と四時の官房長官談話もやられていたんですか。

海部 やった。

田中 記者会見も先生がやられたんですか。

海部 記者会見にも行きました。それは頼むというから、仕方がない。井出さんは目の病があつて、「辞表を出す」と言い出したから、「辞表は出しなさんな。せつくなつたんだし、あなたのことをオヤジは信頼しているんだから、だから代理はやるから」といって、本当に入院中は、私が記者会見も遊説も全部やりました。三木さんの外遊は、官房長官は同行なし。知り尽くした仲間というのはいかんのだな。年格好、当選回数とほとんど一緒ですから。やっぱり井出さんは「そういうことは君にやつてもらった方がいいよ」という。私も勉強になりますから。

伊藤 自民党の中で論客といってもそんなにたくさんはいないでしょう。公の場面に出て行つて、国会討論会とかいろいろやる人は

海部 あれに出ると、本当に厳しいですね。

伊藤 攻められる方ですからね。

海部 攻められて、相手を怒らせてはいけない。怒らせてぶつ壊したら、それこそうちの先輩の議運の理事が喧嘩して帰ってくるのと同じことで、はた迷惑ですから。しかしテレビなんかであまり切つて捨てたら――。

伊藤 あとで恨みが大変ですね。

田中 テレビもまさに国対の延長じゃないですか。

海部 官房副長官が行ったときに、木っ端微塵に恥をかかせられないし。

伊藤 相手を立てて、しかも自分を譲らずに。

海部 それが大事な一線です。それは立場上守らなければいかな。けれども国民やマスコミがなるほどと思つてくれることだったら、どんどん言つて、ぎゅうぎゅうやつてもいいわけだ。例えばこ一番だと思つたら、それは言つてもいいでしょう。

伊藤 ただ相手を傷つけないようにしなければ。

田中 いつも思うんですが、自民党は多数党なのに、一人しか出て来ませんね。内閣が来ると二人になるんですが、ちよつと割が悪いような感じがするんですけれどね。

海部 まったく割が悪い。私はNHKで、前にパツパツと「時間」制限のランプがついたときに、「ちよつと待ってくださいよ。ふだんならいいけれど、五人もおつて、さつきから寄つてたかつて政府の攻撃でしょう。言われておる僕の身にもなってください。駄目だ、ほかにいうこともあるんです」といった。あのとき「の司会」は磯村「尚徳」といったな、「はい、どうぞ」と言つた。あれは気合いい勝ちだった。みんな見ておつた人も、「あれは気持ち良かった」という。何をしゃべつたんじゃないんだ。こうやつた「頭を押さえるける身振りをする」んだ。

だから辻元がなんののかんの言われたのも、「うそつき」とか「あんたは総合商社や」とか関西弁でまくし立てるから、えらい人気が上がつてきたわけでしょう。テレビを意識して使っているわけではないでしょうが、「そんなことを言つたつて、あんた不公平じゃないか。私は五人からやられているんだ、答えるのは一人だ。それで一分半たつたらみんなと同じように発言を切るといふのは天下の不公平だ。もうちよつと僕はしゃべるから」と言つたら、「どうぞ」と言つた。

伊藤 いい芝居でしたね。そういう形で表に出てくるということは、非常にいいですね。

海部 選挙のためには非常にいいことです。

伊藤 選挙のためにだけでなく、自民党の宣伝のためにもいい。だつてなかなか論客がいらないじゃないですか。喧嘩する人はいるに

しても。

田中 ああいうテレビ番組は党の人も観ていて、将来これは使えそうだから、そういう発想はあるんですか。

海部 それはわからない。

伊藤 評価はプラスマイナスでしょう。あんなに表に出やがって、と思われるかもしれない。

海部 それもあるだろうと思うよ。辻元がやられたのもそれだろうと思うし。

伊藤 あれはたぶんそうですね。おまえばかりいい子になって、ということでしょうね。

佐道 三木内閣の後半はそれこそ挙党協で、党の中が割れた大変な時期ですね。それで自民党はなんだと言われて、政府はなんだと言われて、海部先生ご自身も、俺だって同じ思いだということもあると思うんですね。そこは口に出しては言えない。だから察してくれよ、というところもあったのでは。

海部 立場というのは守らなければならんしね。そんなときに一緒になって破れになるわけにもいかん。

伊藤 野党と一緒にするわけには（笑い）。

海部 それはいかん。

伊藤 自民党を潰すために自民党総裁になると言った人もいるんですけれどね。そんなことで、三木内閣の話はまたありましたら追加させていただきます。

■「福田内閣」文部大臣1（就任）

伊藤 いよいよ今度は福田内閣になって、先生は文部大臣に就任されます。ついこの間まで挙党協で睨み合っていた相手が総理になって、その内閣の文部大臣になるというのはいかがでしたか。

海部 あれは複雑な心境でした。

伊藤 これは総理から言われるのではなくて、派閥の領袖を通じて言われるわけですか。

海部 そうです。三木さんからです。そのときはそうだった。

田中 先生は、これは初めての大臣ですか。

海部 そうです。

伊藤 前に官房長官になり損ねたんだから。

田中 でも文部大臣というのは希望されたポストの一つではないですか。

海部 僕は希望はしなかった。そのときはへたに入閣なんかするとね。あのとき福田赳夫さんというのは天敵ですから、天敵の下についてそんなことができるか、と思っていました。

伊藤 天敵ではありますが、三木内閣の最初のころは良かったんじゃないですか。

海部 最初のころは良かった。だんだんそれから離れてきたんだ。

田中 ただ、福田内閣が発足したときには当然、「海部さんを」閣僚に三木さんが推薦されたわけでしょう。それもなかったんですか。そのへんをお願いします。

海部 ちゃんと枠があるんだ。

田中 ああいう大騒ぎの時でもあるんですか。

海部 大騒ぎでも何でも。大騒ぎだから、おまえのところからとらないよ、なんていうことが言えるような余裕はなかったんです。

伊藤 おまえのところはいらないよといって、「自民党から」出られちゃったら過半数割れですからね。

海部 それともう一つは、「率直に言って、私は福田さんの下ではやりたくありません」と三木さんに答えたけれど、「いや海部君、そう言わんでもいい。生涯で断わるときがあつたら、断わる権利は大事にとっておきなさい。いま断わらんでもいい。わしも考えた。ポストももう決まっている。経済政策だとか外交で苦労しろというのではない。文部大臣で次元が違うから、そこに行つて勉強してこい。（しかも前任のそれまでやっておつたのは永井道雄ですから）

永井道雄も政治家でない民間人になったんだから、それはあまり挙
党協だとか派閥だということではなしに、政治家として大事なポスト
だから行つてらっしゃい」といっておった。

伊藤 それまで文教族という感じでは全然なかったわけですね。

海部 文教「族」という感じではなかったですね。

田中 でも先生には文教のイメージが残っているんですが。

伊藤 それは「文部大臣に」なつてからですか。なる前からそうで
したか。

海部 僕は文部大臣になる前は、議運、国対が忙しくて、文教に出
て行つておる余裕もゆとりもなかった。強いていえば、私学振興助
成法をつくるときに、私学の早稲田を代表して出て来てくれと言わ
れて出て行つたことはありますけれどね。しかし議運、国対を二足
の草鞋でやっていると、そういう昼間のおつき合ひはあまり時間が
ないんです。

佐道 議運・国対がお忙しかつたのはよくわかりますが、大臣にな
るためには「族」であつた方がいいというか、系統ができますね。

海部 族とかなんとかいうものにはなつていなかったと自分では思
つております。ただ商工委員会、それは自分の選挙区が中小企業の中
心地で、特に日米繊維製品協定なんかがあつて、いまの狂牛病ど
ころの騒ぎじゃないんだ。やられる繊維を守れということだ。だか
ら繊維のほうのことはよくやつていました。

それから文教のほうは、僕は初めが青年学生部長というポストで、
組織委員会で学生を集めた。そこでつくつた政策は、気宇広大な政
策ばかりで、日本青年海外協力隊になつたし、全国国立青年の家を
つくつて、ただで青少年が泊まれるようにしようとか、そういう政
策を一所懸命やつてきたことは事実ですな。

伊藤 あれは文部省ですか。

海部 文部省じゃないな、総理府だ。そんな関係でありました。協
力隊のことは初めから僕もやつておつたことだし。文教のほうは、

あの頃もうちよつと私学を助けるということで私学出身者だけが集
まる会もよくありました。そこで渡部恒三だとか藤波孝生だとか、
一、二年下の層は森喜朗とか西岡武夫だとか、一、二年上の方は三
塚博とか竹下登とか、そういうのが集まつていろいろな話をしたわ
けです。

田中 私学振興助成法というのはこのころできたんですか。

海部 そうです。

田中 先生が大臣になつてからですか。

海部 大臣になる前です。そして私学振興助成法には、私学出身者
が中心になつてやらされて、やつたんですね。

伊藤 あれは議員立法ですか。

海部 議員立法です。

伊藤 文部大臣ということをお聞きになつて、どういうお感じでご
さいましたか。

海部 えらいことだな、と思つたね。

伊藤 身を清らかに。

海部 いまでも忘れられないことは、小学校の時の僕の恩師から早
速お祝いの手紙が来たことだ。いろいろなことが書いてあつたけれ
ど、「おめでとう、わが校の誇りだ」とか、「大臣が出てくれたの
はわが校が始まって以来だ」とか、「しかしあのときのあの君が、
と思うと、自分はいささか感慨無量だ」と書いてある。「あのとき
のあの君」というのは、わかつているんだ。

田中 どういうことですか。

海部 俺も胸に手を当てて反省しなければならん点がいろいろあつ
たから。小学校の時にはワルのほうのやんちゃもやつておつたから。
それで、このあいだ「波瀾万丈」というテレビの番組をつくつたで
しょう。あのとき日本テレビの記者が昔の僕の友達のところをみん
な歩いて、海部さんはどういうふうだった、と聞いているんだ。小
学生の時にも鶴舞公園という公園に行つて、そこにたまたま来合わ
せたよその生徒と喧嘩になつて、その頃あまり強くなかつたと思つ

ているんだけど、とつくみあいの喧嘩になって池の中に落っこちた。そんなことがあった。

伊藤 それはご自分が落っこちたんですか。

海部 もちろん。それからその次のときにはもつとひどいところに落っこちた。追いかけて走っていると、昔は肥溜めがあった。その肥溜めの中にドボーンと落ちた。もう臭いのなんのつて。そのときは逆に、自分で水で洗ったりした。だから「あのときのあの君は」と手紙で書かれると、まだまだたくさんいろいろなことがあるわけです。「けれどももしっかりやってくれ」なんて書かれてね。そんなことがありました。

だから文部大臣になったときには本当に面食らったし戸惑ったけれど、しかしこれはつけ焼き刃ではいけませんから、一所懸命頑張るよりしょうがない。心の真っ直ぐな、体の丈夫な、そんな児童生徒ができるようにしていけばいいわけだから、頑張つてやろうと思つた。

そうしたら田中角栄さんが、なんで俺にこんなことを言ったのか知らんけれど、「俺はいつもな、竹下にも言っていることだけでもな、海部君な、文部大臣、おまえに向いているよ。おまえ一所懸命やれよ。誰か何か言ったら、いいか、道路は少々曲がった道路ができたつて国は滅びない。子供だけは、真っ直ぐない子供を作らなければ、国の将来が思いやられるんだ。それだけ違うんだ。文部大臣というのはそれだけ厳しいあれだから、しっかり頑張つてやってくれ」といって激励されたな。竹さんに話してやったこともあったんだ、「角さんがこう言ったぞ」といったら、「あの人はそれぐらいのことは言うだろうな」といっていた。

三木さんと田中角栄というのは、天を共に戴かない相手になっていくわけだけれど、あれ以来、人前では二人だけで会っても相好を崩して話したり握手したりしなくなったけれど、それまではずいぶんいろいろなところで、あれ「交流」があったんだな。

伊藤 文部大臣に就任されて、文部省の中にそれまでお役人として

知り合った人たちはいましたか。

海部 僕は文教委員会もちよいちよい顔を出していました。それで知り合っている人もあるし、自民党の青年局長のところに、文教部会じゃないですよ、青少年労働問題ではよく協力したんです。そうしたら、当時「労働省」婦人局長だった高橋展子さん、デンマークかどこかの大使になったな。あの展子さんが僕のところに来て、「青年部の面倒だけでなく婦人部のほうもお願いします」という。あのころ、婦人部では物を頼みに行ったり聞いたりするところがなかったみたいだな。それで、「よし、よし」と言つて、青年部と婦人部、文部省の中ではそういう人たちと仲良くなつていった。その関係で、おばさまたちには高橋展子さんを通じてだいぶ可愛がられるようになった。赤松良子さんとか、その人たちの問題については、よくありました。

伊藤 女性ばかりですか。

海部 女性ばかり。婦人局と青年担当だから。

■「福田内閣」文部大臣2（政務次官について）

伊藤 大臣と政務次官がいるでしょう。政務次官はどなたでしたか。それは全然違うふうに任命されてくるわけですか。

海部 僕の時には、唐沢俊二郎というのが政務次官で来ました。唐沢俊二郎の場合は、僕には格別のお思い入れがあって、あのお父さんは唐沢俊樹というんだ。俺と同じ名前の大先輩がおるんだな、と思つて目をつけておつた。

政務次官を決めるときは総理大臣が決めるんじゃないんですよ。またこれが面白い話だな。あの頃は副幹事長会議というのがあって、俺の村はこれだけだといつて出すわけだ。そうすると筆頭副幹事長がそれを捌くわけですね。そして捌くと有無を言わず、おまえはここ、おまえはここ、と割り振っちゃうわけです。

伊藤 共産党みたいですね（笑い）。

海部 だから誰が来るかわからんのだな。それでいっぺん、政務次官の割り振りのときに、誰か文部政務次官を希望したやつがおったんだ。それで筆頭副幹事長に頼みに行ったら、「ああ、あかん、あかん。もう決まってるから、わがままを言われたらみんなごちゃごちゃになってしまう。そういうのをちゃんと合うように育てるのが、将来性ある閣僚だな」と言われた。だから政務次官は「おあてがい扶持」ですよ。

伊藤 その代わり、あまり政務次官は役割がないわけですか。

海部 ないわけです。それで政務次官を自家薬籠中のものにする。派閥が違ふんですからね。自分の派閥の政務次官を使おうと思っても誰も出してくれない。唐沢俊二郎の場合は、親が俊樹という名前だというだけの理由でしょう。それで唐沢を呼んで、「おまえ俺の政務次官だそうだけれど、どうだ、いやならいつ断わってもいいぞ」と言ったら、「いやいや、いやじゃありません」という。初めが大事だと誰かに言われたから、初めに一発ゴツンとやる。だから通告されて、有無を言わずですよ。そこから先、辻元じゃないけれど、先輩やいろいろな人からいろいろな話がある。政務次官にはなるべくやる気を起こさせる。俺はやるんだ、文部省のために一所懸命やるんだと思わせる。そうすると永遠にあなたの家来の一人になる。何がいいかと言って、お金をやってその気になれと言っても無理ですからね。そこで外国へ、日本国代表の肩書きをつけて、本当は大臣が行く会議だけれど、「あんたは政務次官だけれど、行ってやってきて欲しい。どうだ」というと、それは感激するわ。政務次官として早めに行けるほうがいいからね。文部省にはそういう出るべき会議がたくさんある。

海部 労働省にもたくさんありましたけれどね。僕はそういえば、労働省の政務次官の時には、インランド・トランスポート・コミッティといったか、内陸委員会の代表で行った。何しろ飛行機に乗るのが大嫌いという労働大臣に僕は押しつけられたから。「海部さん、

わしは飛行機が大嫌いで、船で行っておいたら大変なことになるから、すまんけれど行ってきてくれ」と言われて、政務次官としてよく行ったんだ。そのときの政務次官の仲間では羨ましがられたね、「おまえばかりいいな」といつて。

伊藤 海部さんは羨ましがられるようなことばかりあったんですね。海部 そう。それでみんな、そういうところに行くところに行くとえらそうに演説もできるわけだ。英語の演説も覚えてね。

田中 先生は演説はお得意ですものね。

海部 けれど英語はお得意じゃない。カタカナ音符つきで、ディスティングイッシュド・ゲスト、レイディース・アンド・ジェントルメンとやったんだ（笑い）。

伊藤 竹下さんのよりもいいじゃないですか。

海部 それでも英語で演説をやってきましたという証拠になるからね。新聞に頼んでおくと、特派員が書いてくれるわけだ。あれも選挙区に向けるPRには非常によろしいですからね。そういう経験が僕にはありました。文部大臣になったときは、人に羨ましがられたんだよ、文部省の最年少だから。森喜朗が俺のところに来て、「海部さん、私も早くになりたいわ」と言っていた。

ところがそのうち、瓢箪から駒が出たように森が文部大臣になったときに、畏れ多くも両陛下と一緒にあった席で、「文部省でずいぶんお若い大臣様ができたものですね。あなたは一番お若いんですか」と聞かれたと言うんだ。「森は」、「俺もそうですと答えれば良かったが、知っておることをまさかそうも言えんし」という。あれもいまほど図々しくないからね。いまなら平気でそう言って、違ってたと言えは済むことだけれどね。私は四十四歳でなったんだけれど、森さんがなったときには四十五歳だったんだ。一つ、僕より上なんです。

田中 森喜朗文部大臣は第二次中曽根内閣、昭和五十八年ですね。

海部 彼も早かったんだけれども僕より一つだけ上だったんだ。それで俺のところに来たときに、「海部さん、悔しかったな。このあ

いだ陛下の前で」というんだ。「どっちが聞いた？」と聞いたら、「皇后様に『森先生、一番お若いんですか』と聞かれたから、そうですと言いたかったけれど、待てよ、海部さんの方が一つ下だから、『残念ながら海部さんが私より一つ若くしてなっています』と言ったんだ」「おまえ、正直でよろしい」といったんだけれどね。それを貰いておれば、あんな不幸はなかった。

田中 本当にそうですね。

■「福田内閣」文部大臣3（文教族）

伊藤 当時から文教族というのがあったでしょう。この人たちのおつき合いというのが文部大臣としては大事なことになるでしょうね。

海部 文部大臣になったときには、私のほうから、全部文教委員会の理事を早稲田大学雄弁会のOBで揃えたんです。

伊藤 誰が揃えるんですか（笑い）。

海部 それぐらいのことは、おかげさまで、できるようになっておった。

田中 文教委員会の理事が全部揃ったんですか。

伊藤 そんなわけに行くんですか。

海部 行くんですよ。というのは、竹下登があのととき国対の筆頭副委員長か何かだったんだ。筆頭さん、筆頭さんといって、委員会の理事の人選ぐらいはみんなその筆頭さんのところで全権をもらってやるわけです。それで、たまたまあるとき、藤波孝生と森喜朗と西岡武夫と小淵恵三。

伊藤 それはみんな文教族ですか。

海部 これがみんな文教族です。そして文教委員会の理事。竹下さんが国対の筆頭委員長。この写真です「アルバムの写真を見せる」。これは早稲田大学雄弁会の全盛期だな。これは行政改革特別委員会筆頭理事に僕が就任したときの写真だから、いまの話とはちよつと

違うけれど、まったく同じことだ。僕が筆頭理事で、藤波、三塚、小淵と揃えて、竹下さんは筆頭だから、すぐに金丸さんと話がつく。それで強行採決をやらされたのは、やっぱり俺だな（笑い）。十六本の法律の強行採決までやらされたんだ。

文教委員会の時は、これにプラスして西岡武夫君がおつて（まだ自民党だから）、藤波君がおつた。僕が質問を受けても答えにくいことがある。そうすると結論だけを手で合図すると言うんだから、このあいだの甲子園と一緒だ。こうやる「指でマルをつくる」と、前向きに答えてもいい。こうなったら「指を二本立てる」、それは答えちゃ駄目だということだ。これは西岡と藤波が交代でサインを送ってくるんだ。結論さえわかれば、途中は何とでも言える。「お気持ちにはよくわかる」とか、「質問はごもつともだと思えますが、しかしいまの現状から行くとなんとかかんとか」と適当に言って、結論として、「ご期待に添えません」とか、「なんとか前向きに考えてやっています」とか。

田中 そうすると理事席のところから大臣に向かってサインが来るわけですか。

海部 そう、理事は一番前におるでしょう。そこで藤波なんかは上手にこうやって「指を使って」サインをしてくる。これ「マル」だったらい、これ「二本指」だったらいかん、ということだ。答えながらわかるから、早く出せ、どっちだ、というサインを出すと、西岡と相談しながら答えてくる。そういうワルもあつたんですね。

田中 それは海部先生だけの場合ですか。ほかにもよくある話なんですか。

海部 いや、知りません。それは僕が図々しいから、仲間がいっぱいおるから、おまえ今度理事だから頼むぞ、といった。しかも彼らにしてみれば、優越感をくすぐられるわけだ。大臣の答弁は俺の指一本で決まる、俺が動かしているんだ、という優越感を彼らは持つわけだ。それをやっている、心のつながりもできる。

伊藤 こっちの無理もきく、ということですね。

海部 はい。その代わり、向こうの無理もしょっちゅうきく。みんなこんな頃からの仲間だから「学生時代の写真を示す」。これは渡部恒三でしょう。これが藤波孝生、これは岸本昌弘で、これが柏崎「福治」、これが海部俊樹さん。みんなこんな頃から一緒になって演説をやって歩いている連中だから、それくらいのことをやれと言ったら、みんなやってくれる。

伊藤 「海部氏の示した写真を見て」これは毛織会社じゃないですか。

海部 選挙区がそうなんだ。マイ・キャンペーン・ディストリクト。

田中 応援に来てくれたわけですか。

海部 遊説に行っただけです。

伊藤 先生の前任者の応援ですか。

海部 そうそう。

■「福田内閣」文部大臣4（文部大臣としての仕事）

田中 ちょっと真面目にやりますが、大臣に就任されて――。

海部 いや、真面目にやっているよ。これをごらんよ「アルバムの別の写真を示す」。田中角栄を捕まえて、文教関係の政策の喧嘩に行くとんでも、森喜朗と小淵恵三と、これはちよつと違うが加藤六月、それから西岡武夫と藤波孝生がおつて、「おい」というと、これだけついて来てくれる。これは景気を良くするための政策を言ったり、土地政策を言っただけ。そうしたら「田中角栄は」、「もうないか、それだけか、質問は」というから、「それだけです」と言っただけ。「わかった。おまえたちの考えてきたことは、それぞれよく示し合わせて考えて来たろうけれど、いまはではない。駄目だと言ったら駄目だ。早くでけるようにするためには、もうちよつと税収が多くなるように努力するんだ」というようなことを言つて煙に巻いて、「しかしよく勉強した。ご苦労さん」というようなものだ。

そうやって、半ば馬鹿にされながら鍛えられてきたんだね。

田中 もつと真面目に行きますが、先生が文部大臣になられたときに、やつぱりこういうことをやりたいということ、たぶん一年間大臣だろうということで、こういうことをやりたいという抱負のようなものはありましたか。

海部 あの頃は、きざな言い方だけれど、「教育」というのは漢字が二つあつて、「教」のほうは眉毛から上ですね。「育」のほうは眉毛から下ですね。私は教育の中で「教」のほうは、各界の先生方のひたむきな努力によつて日本のどこを捉えても充実して高くなつてきている。しかし、眉毛から下の「育」のほうは「人を育てる」という心の問題、こちらが全然駄目だ。全然と言つたら言い過ぎかもしれないが、象徴的なことを教えよう。

僕が文部大臣になつた頃の新聞に、富士山の河口湖に行つてボートがひっくり返つて東大の一年生が六人、溺れて死んだ。東大に受かる人は頭はびかびかで、仲間から羨ましがられた優秀な人間なんだろうけれど、残念ながら、眉毛から下のほうはゼロだ。人のものを盗つてはいかん、管理者の許しも得ず、定員も守らないで夜の湖に手や足だけでだんだん出て行くというこれはいかに間違つた行為であるかということ、誰一人気がつかなかったのか。そしてひっくり返つてお隠れになつちやつた。こんなにもつたない、こんなに周辺の人を悲しませるようなことがあるのだろうか。だから教育は心の教育が大事だ。イロハのイ、人間として守るべきこと、超えてはならない一線、それをきちんと身につけてもらうのが大事だと思つたので、私は教育は人なりだと思つた。その人の中には、ご家庭の両親がいかに大きな影響力を与えるのか。そんなことをもう一回大事にしてやってみたいと思います。日本の子供はみんな勉強して、素晴らしい頭脳を持つて来たろうけれど、残念ながらそう

だ。そんな頃、外国の人に会つて話を聞くと、「日本はノーベル賞、何人っていますか」という。特にアメリカ人の日本通が、意地悪

くそれを聞いた。あの頃は五人でしたから、私が「五人だ」といったら、にこつと笑って、「五人じゃないでしょう。正確に言うとな人でしよう。あとの二人は、たしかに生まれたのは日本かもしれないけれど、勉強したのはみなアメリカで、アメリカのペーパーを使って、アメリカ人の助手がタイプをしてノーベル賞を取ったんですよ」と言うんだね。あのときほど、これは基礎学問の峰を高くしなければならんな、と屈辱の中から思ったことはなかった。そこに私の教育改革の基本があるんだ。だから、心の教育ということと、基礎学問の峰を高くすること、この二つを私は特に考えてやっていたんだということを申し上げたことを覚えております。

伊藤 それは大臣訓辞ですか。

海部 はい。

田中 そういうことを具体的に施策として進められる場合には、お金をつけたたり、いろいろやられると思うんですね。そのへんはどういうことを具体的になさいましたか。

海部 それは予算の時には頑張って、予算を取るもの。

伊藤 それは担当の局が――。

海部 やって、途中で報告に来て、「大臣、ここまでしか持っていないから、一発お願いします」と言ってくるから、「よし任せておけ、わかった」と言って、向こうと話もする。だから僕の場合は基礎研究費が伸びましたよ。

伊藤 だからこういう力のある大臣が来れば、文部省の役人は大喜びですよ。

田中 遠山「敦子」大臣は駄目ですか。

伊藤 いや、党に力がないと駄目なんです。

佐道 そのために議運、国対であれだけ汗を流したんですからね。

海部 それはそうなんだ。人の和というのはそういうときに利用できるんだな。

伊藤 どこを押せばどうなる、こうなるという道案内がわかってる人が一番大事なんですから。

田中 では実際の予算の時には、先生は党を押したり、友達を押したり、そういうことをやられたわけですか。

海部 はい、そして自分で大蔵省まで行きました。そしてあの頃は、竹下が大蔵大臣だったときがある。私が初めての時か二度目の時だ。佐道 二度目の時じゃないですか。

田中 最初の福田内閣は坊秀男、村山達雄さん。

海部 坊秀男、あれは箸にも棒にもかからん。わかっているのかわかっていないのか、うううと言っているだけだった。

伊藤 そろそろ時間です。今度はこの文部大臣の話から始めさせていただきます。また簡単なメモを用意します。

海部 こういうメモを用意してください。僕のほうでも、頭の整理のために古い資料を見ておくから。

伊藤 引っかけりのためにもあったほうがいいと思います。

海部 あったほうがいいな。脱線するにしても、この枠の中だからね。

伊藤 いや、この枠から一所懸命脱線させようと思っているんです（笑い）。どうもありがとうございます。

《以上》

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 15 回

福田内閣時代Ⅱ（1976～1977）

【2002年5月13日（月）15:00～17:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2002年5月13日)

1. 1976年12月、福田内閣の成立によって、海部先生は文部大臣に就任されます。文部大臣に就任して先生は、前任の永井道雄氏の考え方も採り入れつつ、教育改革に取り組まれます。それは以下のような項目ですが、それぞれ順にどのようなお考えのもとに、どのように取り組まれたのか、またそれぞれの改革実現にあたって直面された困難などについてお願いいたします。
 - ① 学習指導要領を改正してゆとり教育を行うという「ゆとり教育問題」
※ 77年7月 学習指導要領改正
 - ② 共通一次試験の導入など大学入試制度改革
※ 5月 大学入試センター設置
※ 6月 共通一次試験を含む79年以降の大学入学者選抜実施要項を全国の大学長へ通知
 - ③ 地方の大学の整備
 - ④ 学歴偏重の打破
 - ⑤ 日教組問題などを含めた教育現場改革
2. このころ、たとえば7月に岐阜県議会が学校行事における国旗掲揚、国歌（君が代）斉唱を徹底化などを決議したのをはじめ、君が代斉唱問題など「教育正常化」問題が議論されました。この点についてとくにご印象に残っておられることはございますか。
3. 9月、筑波大学と経団連が中心となり、産・学・官で科学技術開発を推進するために国際科学振興財団（会長土光敏夫）が設立されました。これについてはとくにご記憶の点はございますか。
4. 第一回目の文部大臣の時代で、もっとも印象に残っておられることがありましたら、お願いいたします。
5. 先生が文部大臣を務めておられた77年3月、三木派も含めて自民党各派閥が解散します。この問題について先生はどのようなお考えでしたか。
6. また、同年5月には、参議院全国区を拘束名簿式比例代表制にする選挙法改正案が自民党22議員によって提出されています。これについてはどのようにお考えでしたでしょうか。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。よろしくお願いいたします。

■福田内閣の閣議と閣僚懇談会

伊藤 ではさつそく始めさせていただきます。先生は「一九七六年十二月に文部」大臣になられて初めて、閣議という席に行ったわけではないですね。

海部 はい、そうです。その前は内閣官房副長官をやっていましたから。

伊藤 だいたい「閣議が」どんなものかということとはわかっているわけですね。

海部 はい、わかっていました。生意気を言うようだけれど。

伊藤 だいたい、あまり変わりませんでしたか。

海部 変わりません。

伊藤 やはり花押を書く会だと――。

海部 閣議というのは花押を書く会ですね。しかしよほど思い詰めたときには、物を言う人がおりますけれどね。だいたいその前に事務次官会議というのがあるでしょう。事務次官会議で全会一致の決定がないと、閣議案件にならないんです。

伊藤 それは本当はおかしいですね。

海部 それで威張るわけではないが、國務大臣がおるんだから。僕は一回、事務次官会議に反することを言ったことがあるんですよ。

国家公務員給与の問題だったんですが、各省みんなが今度の閣議で決めるというときに、「それはちよつと待ってくれ、駄目だ、そんなのは。公務員も共に苦しんでくれなければ、中小企業に対して示しがつかんじゃないか」と言った。あのときは人事院勧告（人勧）の完全実施だという。ところがそれをいうと、いまの中小企業と公務員の給与にまた差がつく。公務員の方は、大企業が中心でできている人事院勧告に従って上がっていくわけです。中小企業はどうなるんだ、ということで、僕は所管事項ではなかったんですが、反対

意見を述べたんです。選挙区事情もあったので。

伊藤 それはどうなりましたか。

海部 結局、寄つてたかつて説得されちゃった。

伊藤 誰が説得するんですか。ほかの大臣が、ですか。

海部 まあまあ、いろいろな人が（笑い）。

伊藤 大臣のほかに――。

海部 断わり切れない、いろいろな立場の人が、大臣室に来るわけです。あれは賛成してくれとか、こういうふうには決まっているんだ、とか。

伊藤 閣議の席で言ってから、ですか。

海部 言ってからです。

伊藤 でもそれは閣議決定になったわけですね。

海部 なったわけですよ。仕方がない。ああいうときは、よほど腹に据えかねるというか、興奮ではなく公憤があるときだ。閣議で署名しないということは、その後もままあったんです。例えば山中貞則さんも何か署名しなかったんじゃないかな。何か二、三、例がありました。けれど最後の最後には、総理とのあいだで一対一の話し合いをきちんとして、わかったということになると、みんな署名をするわけです。大臣の署名なしで、ということは、まあないんじゃないですかね。

伊藤 それはしないでしようね。

海部 たいていみんな署名するんですよ。あの署名というのは、初めに全部登録してあるわけですから、代わりにやる、というわけにはいかんです。

伊藤 そうですか。文部大臣としてそこにご出席になっていると、やはり自分の所管事項以外のことをお話になるということは、なかなかないことですか。

海部 國務大臣として発言は全部かぶるんです。けれども国会のある日に閣議をやるわけです。そうでしょう。そのために、閣議はたしか朝の八時半からやったわけです。委員会というのは十時からや

るわけですね。だからいろいろなことを演説するには、時間的にもないわけです。それから紛糾してくると、委員会を止めてまで閣議を、というわけにもいきません。まあまあ、という肩叩きがあつて、全部収まっていたように僕は思いますね。閣議が延びているから国会が始まらなかった、開かれなかったというようなことはないと思います。

伊藤 「三木内閣の官房」副長官のときと、福田さんの内閣で福田さんが総理になったときとで、変わったことはあまりないわけですか。

海部 どうかしら。閣議というのは、誰が総理になつてもそんなに――。各省事務次官というのが一番えらいわけだから。

伊藤 一番えらい（笑い）。

海部 枠をはめて、案件を決めちゃうんですから。だからそこを変えなければ、自由に議論をしたいと思つても、議論ができないようになってくるわけですね。

伊藤 閣僚懇談会というのはまた別ですか。

海部 閣僚懇談会というのは別です。終わつてから自由に、言いたいことをお互いに言い合う。

伊藤 それはよくあるんですか。

海部 ちよいちよいありましたね。

伊藤 そういうところで話が出て、やがてそれが物になるということもあり得るわけですか。

海部 あまりありませんでした。

伊藤 じゃあガス抜きみたいなものですか。

海部 やはり閣議できちんと決めていかなければいけません。閣僚懇談会というのはよくあつたんですが、文部省所管の事項で、閣僚懇談会で粗話をして、おいてくれと言われたようなこともあつたんですね。大学入試の問題です。そのときには全閣僚が集まつて、次官会議にかけずにしゃべるんですが、それぞれ忙しいから、閣僚懇談会だからといって、五時間も六時間もぶつ通し、ということはありません。

伊藤 だいたい閣議は、十分や二十分で終わることもあるでしょう。

海部 だいたい、みんながずっと回つてきた書類に目を通して、花押をきちつと書いて終わると、十五分か二十分でひとまわりしますね。だいたいそれぐらいで終わります。初め、閣僚つていうのはこんなことでもいいのかしらん、と素朴に思ったこともありました。物が言いたいこともあつたけれど、「まあまあ、そう言わずに」と言われて、進めることが何回かありました。

伊藤 関係閣僚会議というのがありますね。それは文部大臣は何かありますか。

海部 文部大臣が固定メンバーで入る閣僚会議というのは、人事院勧告の閣僚会議とか、ほかにも何かありました。

伊藤 あまり多くはないですね。

海部 あまり多くはない。

伊藤 経済関係だと、経済関係閣僚会議が必ずありますね。

海部 あります。そして、どの役所をそこに入れるか入れないかという構成の面で、各省が手を挙げて、その調整がつかずにすつたものんだということがよくありましたね。例えばサミットに行くときでも、経済企画庁、通産省、大蔵省。外務省は当然のことだけれど。

伊藤 農水省だって関係があるでしょう。

海部 ずいぶん苦労したこともあります。

佐道 三木内閣のときに、挙党協などで党内がもめているときも、閣議というのは平穩に行なわれるわけですか。

海部 一見平穩に行なわれるな。

佐道 淡々と書くものは書いて、その後何か議論になったということはないですか。

海部 そういうところでは議論にはならない。挙党協のころは、腹に一物、背中に荷物という人がずっと来ているけれど、閣議の場で、そういう政争はきつかけがつかめないから言い出しにくいですね。

だから閣議が終わってからどこかに集まったり、別に集まったりするわけです。政争の真つ最中の最たるものは、十五人の閣僚がほかに集まって、閣議が成立しなくなるということと脅しをかけられた。

■文部大臣5（ゆとり教育の始まり）

伊藤 それで具体的な文部行政の話なんですが、いま問題になっている「ゆとり教育」というのは先生が文部大臣のときに始まるんですが、これは先生のお考えですか。それとも前の永井さんのときからの引き継ぎなんですか。

海部 あのころ永井道雄さんという人は、三木内閣のときの目玉として民間から入れた人でしたから、一目置いて敬意を表さなければならぬという基本的な立場があつたことは事実です。が、あの頃文教族というのはほんとうに早稲田大学雄弁会がみんな雪崩れ込んだような仲間ばかりでした。藤波孝生とか西岡武夫とかがしょっちゅう来て、いろいろな議論もしてやつておりましたから、必ずしも一〇〇%永井さんの案を支持するわけではなかった。けれども三木総理の気持ちの中には、僕を文部大臣にしたときに、永井さんに「永井路線を継承させるから、君の言っていることをずっとやってくれ」というような話があつたんですね。それは永井さん自身も言うし、僕自身も就任した記者会見のときに、「永井路線を継承するんだ」と言つたものだから、「海部君、そうすんなりと黙って白紙委任で永井君の路線を継承せんでもいいよ、君は君なりのものがある」と言われた。

あのととき永井さんが言おうとしたことは、四頭立ての馬車という話でしたからね。四つの項目をつくろうということだった。僕も何か自分のものをプラスしなければならぬと思つたから、それは「教育は人なり」とした。特に教師というのは大切なんだということを考えた。永井さんの路線に賛成できるものはもちろん賛成だ。あの

とき永井さんの言つたのは、「富士の山より八ヶ岳」だったかな。そういうキャッチフレーズが新聞にも載つたことがあるんです。それは、学問というのは一つの富士山が秀でて聳えるよりも、八ヶ岳のようにそれぞれいろいろな面で総合的にいいものが出てくるほうがいい。人間の顔や名前や身長は違つておる。けれども、持っている個性も違ふし、能力も別々なんだ。個性も能力も違ふものを、同じ終点に持つていて一線になるように育てようというのは間違いだから、そのところはきちんとしていこうというような話だったんです。個性を大事にする、そこで「ゆとりある教育」なんていう名前が初めのころ出て来たんですね。こんにちも「ゆとりある教育」といつて、それを繰り返しておるわけです。

伊藤 それで学力低下だといつて問題になつてゐるんですね。

海部 いまはそうですね。けれども、学力低下なのか、人間性の低下なのか、どっちをいうか、いろいろな現象が出て来ている。これは憂うべきことだと思いますよ。

伊藤 本当にそうです。

海部 この議論を進めて、当時の自民党文教族の中で議論していくと、だから一番いけない諸悪の根源は日教組だ、ということになる。ここへ持つていけば拍手喝采で、だいたい通つたんですね。また事実、日教組の人たちは文部省と自民党を敵視して、ことごとく反発して、顔を見合つてもいかん、会つてもいかん、という時代でした。それで僕は、日教組の委員長が会いたいというなら会つてやろう、連れてこいよ、と言つた。自民党の文教族の中でも、会つて話をし、話も聞かんようなことではいけませんよ、現場を無視した教育改革はない、と言つた。私はそう思つたので、現場の無視はしない、会つて話は聞くということにして、あのころの植枝「元文」と会つて、いろいろ話をした。誰が工作したか知らんが、テレビの番組で知能テストをやられた。植枝と僕と、その頃の中学一年生だったかな、植枝さんも海部文部大臣も中学生の入学試験ができるかどうか、というテストを受けたんです。

そうすると先輩方から、「馬鹿な、文部大臣のおまえがそんなところに出て行つてちよろちよろやつておつたら、品格に反する、權威に反する。そんなのは蹴飛ばせ」といつてエライ反発を受けた。

けれども、出ていつて話を聞いてやらなければいかんし、現場を無視した教育改革はあり得ないと僕は思っているから。けれど、総理大臣の了承だけはとつておこうということで、福田さんのところへはそのことを話に行つた。「こういうことで横枝に会つてくれと言われておるが、会つて話をする」と言うと、「みんながいかん、と言つて怒るけれど、会つて話を聞いてやらなければ何を考えておるかもわからないし、こちらはこういうことを考えているんだから、きちんとやれ」と。たしか、あのとき最終的には総理大臣の了承も取つたんです。だつて総理の了承をとらないと、党内の大きな反対があるからね。そういうときにいけない、と言つて立ちはだかる人は、みんな大先輩ばかりだもの。灘尾弘吉先生を筆頭にね。

楠 戦前派の政治家もいた頃ですね。劔木「亨弘」さんは――。

海部 劔木さんなんていうのは、碁盤や碁石を持つて来て、おれにそれを――。

楠 まだいらつしやつたんですか。

海部 あの人は、参議院の劔木さんで、おつたんだ。そしてあの人は、そうタカ派ではなかつたと思うけれどな。最たるタカ派は灘尾弘吉さんかな。そして奥野誠亮さんなんていうのは、ちよつと二乗がつくような激しさであつたし、とにかく激しい人が多かつた。

楠 そういう方々がいらつしやる時代だと、教育問題で「教育勅語」の復活なんていう話が出たりするんですか。

海部 教育勅語の復活という話は、そこまで具体的には出ませんでしたけれど、教育勅語に代わるようなもの、その思想精神は悪いものではないから、それをしつかり織り込んだものをまず自民党でつくれということになつて、「教育憲章」という名前にした。結局それは作業だけで終わりましたけれどね。われわれも、中に書いてある徳目の一つずつ見ると、間違つてはいない。けれども、あ

の教育勅語ができたときの精神、冒頭の精神、皇統連綿と続いている万世一系に忠を尽くすことが大事だというようなことと一緒にされると、これはいけません。ということで、党の教育憲章はやめになつたことを覚えております。

■文部大臣6（学習指導要領の改正）

伊藤 学習指導要領の改正ということでは、ゆとり教育で具体的にはどういうことを考えておられたわけですか。

海部 具体的には、小学校のカリキュラムが多過ぎる。そして、いまとまったく逆で、週に六時間授業ぐらいあつたんじゃないですか。そしてそれが、何の科目は何時間、何は何時間といつてグツと詰められるから大変なことになる。それであのころ、詰め込み教育はやめろというのが、永井さんの言い分だ。そこで僕とちよつと議論が対立したが、いまでもおかしいと思うのは、その延長線上ですね。円周率を三・一四一五……とせつかく僕は習つて覚えてやつてきたのに、いまは三でいいというんでしょう。あれはちよつと受け入れられませんね。それと同じようなことで、苦労して三・一四一五……と覚える。その先もずっとあつたけれど。

伊藤 せめて、三・一四ぐらいまでは言わなければね。

海部 そういうことで、学習指導要領を改訂するときは、もう少し基礎・基本に限つて、児童生徒には基礎・基本を正確に身につけてもらうようにしよう。そして、大人になつてから覚えておる必要のないようなことまで教え込むことによって、その世代のものの考え方を無茶にしてしまうことはいけないのではないか、ということでした。

伊藤 やはり受験競争の問題がバックにあるんじゃないですか。

海部 受験の点のつけ方が、ペーパーテストだけに限るからいけないということになるんですが、教育課程というよりも、教育の中で

与えるものは、これとこれとこれは教えるということで、教科内容の問題が出て来ますね。

伊藤 それが学習指導要領の内容ですね。

海部 永井さんはそれを簡単にしちゃえ、と言うわけです。簡単にしちゃうと、教科書も簡単になるし、変な話、いまの三・一四一五……が、三でよろしいということになってしまう。そうすると学問とか真理というものから逸脱するのではないか。もつと額に汗して苦労して身につけなければ、学問は身につかないというようなことになるわけですね。

佐道 先生ご自身も、永井さんとかなり議論されたわけですか。

海部 教育課程のことについては、議論するほどこっちはまだ偉くないから、一歩下がって話はおったけれど、ただ言うべきことだけは言わせてもらいましたね。

伊藤 いままで、このゆとり教育の路線でずっと来ていて、いまちよつと曲がり角にきているような気がします。先生が文部大臣として、ゆとり教育の推進を一所懸命やったというわけでは必ずしもないんですか。

海部 ゆとり教育の実施というのは、必要以上にそんなことばかり頭に入れてはいかん、もうちよつと心の教育を大事にしなさい、ということだ。目に余ることが多過ぎた。だから僕のとときは、永井さんの路線を継承するだけではなくて、心を大事に育てていかなければならんと言った。教育の「教える」という字は眉毛から上の話だ。眉毛から下の心の教育は、それこそ「育てる」ということである。

「教える」と「育てる」ことのバランスがとれてこそ、本当の教育ができるのではないか。ゆとりある教育といって、みんなゆとりにしようとはあまりよくない。やはり社会人として必要な、身につけなければならぬ一定の基準とかレベルがある。

その頃ですよ、日教組の人が、子供はみんな真面目に一所懸命にやっているんだから、あの通信簿というのが悪いんだ、という。戦後の言い方は通知票ですか、通知票が間違っているという。そして

1から5までの格差のつけ方はなんだ、僕は全部最高の5をつけます、とかなんとかいうとぼけた人が出て来て、またそれが話題になったことも多かった。けれども僕は、「身につけたものでそれぞれ評価を受けることは大事だと思うから、それはそれでいいんじゃないの」と言った。そうしたらある座談会で榎枝某が、「民主主義は公平で平等のはずだから、一所懸命やっているところと重点を置いてみれば、みんな一所懸命やっているんだから、差をつけることはいけない」という。もう一つは、「何も無理して計算だとか九九とか暗算を教える必要はないじゃないか——その頃ですよ、電子計算機というのが売り出された——あれを使えば、人間よりよっぽど正確にパパパッと出てくるから、それでやれ」と堂々と言いましたね。

僕は「基礎・基本」というものと、大人になってからの応用問題というのは違うんだ、基礎・基本がしっかり身に付いていないと応用問題なんて解けるものではない」というようなことをいうようなことをがががんとやっているさなかに、日教組の新潟県選出のガリガリの衆議院議員が、「文部大臣！」といっておれをつかまえて、「あんた日頃ね、ゆとりある教育だとかなんとか言っておるけれど、子供は——」と言って、これが有名になって「雪解け論争」と呼ばれるんですね。「雪が解けたら何になる」という試験問題を出して、答えがどうなっておったら○をつけて、どうなっておったら×をつけるのか」という。「そんなこと、実際にやってみないからわからんよ」ぐらいのことを初め言っておいたら、「雪が解けたら水になる、これは○か×か」と言うんですね。僕は額面通り受け取って、「いや、雪が解けたら、あれはH₂O、水になるから、それは○ですよ」と言ったら、「いや、それじゃあ駄目だ。雪が解けると春が来るんだ。春が来ると書くのが非常に情緒豊かな、心豊かな子供の表現じゃないですか。それはあなたから言うとか×か、かわいそうにな」なんて言う。

それで、まいっちゃって、「いや、ちよつと待ってください。僕

は今日まで物事に迷ったら原理原則に戻れということをよく教わってきたけれど、原理原則は、雪が解けたら水になるということが唯一の真理である。そして世の中では、雪が解けたら、解けて流れて三島に注ぐという歌もあるけれど、それでは駄目だ。質問者は、雪が解けたら春が来るという。春が来るけれど、それは数学の問題の答えではない。春になるのが、花が咲くのが、鳥が囀るのが、太郎と花子が恋をしようが——」と言ったら、みんなワーツと笑う。「しかしそれはそれ、大人の社会の応用問題で、大人の社会で言うのなら、いい。だからそういう小説も文学も音楽も成り立っていくんだ。けれど小学校に入った基礎・基本が必要な児童生徒には、普遍的妥当性のあることをきちんと身につけてもらうことが大事だ」。そこへ行くと、今日の問題とだぶってきて、僕がどうして「円周率Ⅱ」三に反対しているかという、それは真理ではないからだ。もうちよつと突っ込め、ということなんです、それはこことは関係ない。

■文部大臣 7 (日教組と社会党)

伊藤 榎枝さんというのは、お会いになってどういう感じでしたか。
海部 榎枝は、個人的にはなかなか楽しい、いいやつですよ。そういうことに頭から反対しない。日教組のゴチゴチの運動家の連中、日教組から出て来ておる、名前を言つて悪いけれど木島喜兵衛とか、ああいうのが鬼の首を取ったように、おれにそういう質問をするんですよ。

楠 いまの雪解け論争は、ゆとり教育を巡つての論争ですか。

海部 はい。

楠 そうすると日教組は、ゆとり教育については賛成だったということですか。

海部 いやもつともつと自由にしちゃえ、ということでしょうね。

ゆとりという言葉の間違えている。僕はそれはいいけれど、「先生方が宿題を出したり、何かして児童生徒の自由な時間をこれ以上拘束するな」というなら、それはおれも賛成しよう。けれども学校というのは何だ。基礎・基本を身につけるところじゃないか。ゆとり、ゆとり、詰め込み主義はいけないといって、ガンガン反対して怒られても困る。それからこういう問題は、ゆとり教育なのか詰め込み教育なのかということとは別の次元の話であつて、教えるべき基礎・基本は何か、ということをしななければならぬ。すべての人が身につけていなければならぬ基本原則は何か。雪が解けたら水になるということであつて、雪が解けたら春が来る、花子と太郎が恋をして、という話は大人の社会の応用問題だ。そこをこつちやにしてもらつたら困る」ということをよくやりましたね、委員会なんかで。

伊藤 委員会でそういうことをやるんですか。

海部 はい。全部速記録が残っていますよ。僕はこれはただけな

いと思つて、よく反論しましたから。

伊藤 「相手は」だいたい社会党ですか。

海部 社会党です、日教組です。

伊藤 日教組は度し難い人々ですけど、榎枝さんなんていうのはトップのほうだから、余裕があるわけですね。

海部 榎枝はそういうことをそこまで言うわけではないんですよ。

伊藤 でも言わせているわけでしょう。

海部 とにかく教師になつた人に与える最初のパンフレットを読んでもみると、「世の中というのは今日まで解釈だけいろいろ言い逃れしてきて間違つておつた、世の中を変革することが大事だ」という例のマルクスの発想を大幅に取り入れたものだったから、そんなものを新任教員に与えておつては駄目だ。もうちよつと人間として眺め、人間として教育しなければならぬ。社会を変革していく戦士をつくるんだというのはなくて、社会を支える常識的な国民をま

ず育成するんだ。その国民が、右を支持するか、左を支持するか、

いまの世の中は間違っておるか言うか言わないか、それは卒業してから、それぞれの人の個性と判断に変わっていくものではないか。そういうようなことをよくやりましたね。

伊藤 教師が非常に大事ですね。ところがその教師が日教組にとられているわけでしょう。その当方で言えば、ほとんどでしょう。さつき海部先生は、人が大事だとおっしゃいましたが、具体的にどうするのか。教師はほとんど日教組に取られているわけですね。

海部 あのころたしか八〇%近くまで組織率が上がっていましたからね。だから私は、ここまで言うとかの人々に名譽に反するようですが、「四ト追放運動」というスローガンをつくったんです。スト、アルバイト、あと何だったかな。「ト」がつくものです。楠 リベートじゃないですか。

海部 リベートともう一つ「プレゼントか」、四ト追放というのを一所懸命言っておったんです。ストはいけない、何故いけないかという、相手がいたくない子供たちであって、ストの善悪はわからない。「今日は授業がないから、おまえら校庭で遊んで来い」と言えば、「わー万歳、賛成だ」と言うに決まっているんだ。それは一般の労働組合のいうスト権確立の組合決議ではない。教室を先生がこうするからといえば、子供はみな賛成するんだから、そんなところへ場所を間違えて教室へ持ち込んではいけないよ、ということいろいろ言っておったんです。

話は飛びますが、ストに参加して処罰を受けるでしょう、昇級停止というのが来ます。その頃は昇級停止だけではなくて、金銭に代えることのできない大人の楽しみ「が得られなくなつた」。あのころは学校の先生を年間五千人近く研修休暇に出した。そしてその中の一割ぐらいは海外旅行の長期研修に出すという制度を作ったんです。小学校の先生が海外旅行ができるというのは、あのころとしてみれば大変なことです。われもわれもと参加者がいるわけですね。そこで意地悪をしたわけではないんですが、都道府県教育委員会、二つ以上ベケ印がついている人は、長期研修旅行に参加す

る資格がないという罰則を決めたんです。

そうしたら、社会党のN代議士の子供が、その罰に引つかかっているわけです。僕のところ直訴に来て、「頼む、行かせてやってくれ、おやじの顔を立ててくれ」と言うから、「あんた、委員会でもいつもひどいことを言ってる」と言っていると、「よかよか、もう言わないから、よか」という。癒着だな、これは。けれどももう言えんから、「じゃあ一筆書かせろ」「一筆でも二筆でも書かせろ。以後も一切そういう違法ストには参加しないと書かせろ。その代わり、三十分以内の職場だけに限定した小規模スト（というのがあったんだね）、あれぐらいはやらせてやらんと」という。というのはそれを指導してきた張本人だから。「それもいかん。やめなきて行かせない」と言いながら、僕もあのころダラ幹になっちゃったんだ。一筆とって、行かせたわけです。

行かせてみてわかつたことは、帰ってきてどうなったと聞いてみると、完全に愛国者になっているわけだ。日本は素晴らしい、いい国だった。言葉は慎まなければならんけれど、なんとかとハサミは使いたいよるな、と実際に思った。あの政策をつくつたのは田中角栄でしたからね。だからみんなどんどん行って、見聞を広めたら、日本の国の良さがわかるんだ。

■文部大臣8（芸術、文化関係の仕事）

伊藤 田中角栄がなんでそういう文教政策に関わっているわけですか。

海部 関わっていないんですよ。そういう閃きが出たり、発想が出ると、われわれはあの人のところに言いに行くでしょう。そうすると返事が早いんだ。例えば青年協力隊ができるときの経緯も、言いに行ったら、「よっしゃ、カンボジアへ行け」というんだ。「あそこは駄目だ。日本の大事な青年を行かせるんだから、行ける先と行

けない先はちゃんと調査をしなければ。経済協力といっても人的協力だから、やった方がいい」と言ったら、「よし考えておこう」と言った。それが前回写真集を見せたところだ。小淵恵三とか森喜朗とか西岡武夫とか、そういう連中がみんな賛成してついていた。あのときは、「青年協力隊をやりたいたいから、OKを出しなさい」と言つて、田中角栄と交渉したときの場面です。

楠 そこで、なぜ田中角栄に頼みに行くんですか。派閥の親分でもないし、文教族でもない田中角栄に。

海部 文教族でもないし、親分でもないけれど、大蔵大臣だ。

楠 あるいは何か法案成立に向けて、田中派をとりまとめてもらえとか、そういうことではないんですか。

海部 そこまで派閥次元のことは僕らは考えていない。あのころたしか「田中角栄は」大蔵大臣だったはずだ。逆に言うと、大蔵省の金を引っ張り出すには、まずそういうボスを説得しなければならん、ということですね。

佐道 昭和四十年頃、協力隊ができるんですね。

海部 それが軌道に乗って、だんだん成功していった。けれどもそれが行き過ぎたこともある。誰かが教育の知恵をつけに行ったものだから、「医者が足りないか、全国、医者の学校のないところには全部つくれ」と言われて、一県一校主義をやった。「それは反対です。そんなに医者をつくらなければいけません。風土病の医者とかなんとならないけれど、全体の医者はいけませんよ」と言ったんだけれど、「そんなこと言ってもなあ」という。あの人はほかからも耳学問で仕入れてきて、これと信じたら、アイ・ビリーブ・ザットで、「あれを説得してこい」とやる。そういうわけで、話はまことに早かったけれど、理路整然と間違えたこともありました。

楠 そういう話の早い政治家というのは、先生のご記憶の中では、ほかにどういふ方がいますか。話が早くて実行力があるという、田中角栄に類する政治家は。

伊藤 あまりいないんじゃないですか。

海部 あまりいなかったな。

佐道 ほかにいたら、田中派があれだけ拡大することはなかった。楠 例えはそのあとの竹下さんとか。

海部 いやいや、竹ちゃんはい、やめとこう。だいぶ違うわ。あでもない、こうでもないといういろいろなことを考えて、話の根回しをして、積み上がってきて、いいとならなければやらないんだ。わかりやすい話だから忘れないうちに言いますが、竹下内閣になったときに、歌舞伎役者に勲一等が欲しいという要請が出て来たことがあった。部会ではみんな、「やっただけいいじゃないか、国のためにそれだけ頑張ったんだから」という。それが田中角栄内閣だった一発でスツと行つたろうけれど、行かなかった。

そのとき官房長官が小淵恵三だ。「竹さんがまだいかなんと言っているから、いかなわ」という。みんな、日本の文化伝統を大事にしるとか、心を大事にしると言っておるし、日本の歴史だ、文化だ、伝統だと言っている。そして、絵を描く人、歌を歌う人、みんなそれぞれ勲章をもらっているんですね。ただ歌舞伎役者だけはいかなる加減が、そのときまで勲一等が一人もないんです。それで文化国家であるといい、芸術文化を大切にするというのなら、「歌舞伎役者にも」優れた業績を持った一人者に「勲一等を」やることにしましょう。それは汚職とか癒着でなしに、それまで冷遇しているからだ。だから河原乞食だとかなんとかと、まだ言われていたようなことですからね。だけど最終的には、「角さんがおつたらなあ」ということで通つたんだ。

伊藤 通ることは通つたんですね。じゃあ、ざあつという根回しをやつたんですね。

海部 竹ちゃんはやつたんだ。それで、あの業界、あの芸術分野は大変活気づいて、いいのがあとに続いて出ているでしょう。

伊藤 芸術分野は文化庁ですから、文部大臣の所管ですね。

海部 所管事項です。だから「文部大臣は」ミニスター・オブ・エデュケーションだけじゃないんだ。エデュケーション・アンド・

カルチャー・アンド・サイエンス——。

伊藤 スポーツも入っていますね。

佐道 この時期に文部大臣になられたことで、そういう「芸術・芸能関係の」方々との交際も広がったということですか。

海部 そういうことです。

伊藤 そういうことはありませんか。

海部 顔知りも多くなつて、「やあ、やあ」ということになる。

佐道 やはりお芝居を観に行ったりすることは仕事の一環でもあるし——。

海部 それは所管事項ですので、行かねばならん。歌舞伎に行ったら、あんなつまらんものはないと思つた。

佐道 つまらないですか（笑い）。

海部 だって、ものをはつきり早く言わないし、四時間も五時間もやっておつて、このストーリーからいつたらここから先は余分だよ、というものをやる。

伊藤 あまり文化人じゃないですね（笑い）。

海部 何時間も足がしびれるまで座つておつて、感銘を受けたり感動したりということはあまりなかったですけど。

伊藤 僕も非文化人だから、あれはとてもじゃない（笑い）。

海部 しかし、オペラとかオーケストラというのはなかなかいいものもあつたということで、だんだん好きになつてきましたね、音楽は。

伊藤 文部大臣になると、いいこともありますね。

海部 人間のつき合いの幅が広がってきますよ。

佐道 それをきっかけに親しくなられた方はいらつしやいますか。

芸術、文化、芸能で。

海部 後日、その文部大臣の頃の教育がいかに花咲き実を結んだかという、これは威張つて言うことではありませんが、芸術文化振興基金ができたのは海部内閣のときですよ。五百億円ですけれどね。それまで補助金とは関係なかった人々が、潤えるようになってきた。

それは全部文化庁に丸投げでしたからね。けれども文化庁という役所は、それを巡つての汚職とか疑獄はなかったですね。

伊藤 文化庁から、例えば国立劇場とかそういうところに回るわけですか。

海部 どうなっているか知らん。私はそういうところまで顔を突っ込んだり、嘴を容れなかった。李下に冠を正さずということ、せっかく築き上げてきて、おれは関係ないんだ、というのがなくなるといけませんから、そういう方面には一切口出し、手出しはしませんでした。これは筋が通つた陳情だなど思つたら、大きな劇団でなくとも、名もなき小さな劇団でも、地方を回つて実績のあるところは対象に加えてあげなさいと、それぐらいのことは言つたりやつたりしましたね。

芸術文化振興基金ができたなら、今度は同じように、スポーツ振興基金もつくつてくれという。「ああそうか、おみそれしました。スポーツの方もそれを欲しかつたのか」というと「そうです」という調べてみたらそうなので、スポーツ振興基金もつくりました。これも約五百億だつたと思いますね。

伊藤 それは在任中に、ですか。

海部 在任中です。

伊藤 文部大臣ですか、総理のときですか。

海部 またこんぐらりましたか。文部大臣のときではありません、総理大臣のときですね。望遠鏡ができたとき「建設を開始したとき（一九九一年）」だから。

伊藤 ハワイの「すばる望遠鏡」ですか。

海部 はい。自然増収がなみさんと集まつてきて、さあ、どう使うか、ということになつて、まとまつたお金を我こそは国のために使おうと思う人を手分けして探して来い、ということをやつた。その前から芸術文化については何回も言われておつたのが、一本にまとまつてくれ、バラバラではいけない、文化庁がそれをきちんとうまいこと分けなさいということをやりました。自然増収がたくさんあ

ったときにあれだけのことができたということは、僕は悪いことだとは思いませんね。ハッブル望遠鏡よりもはるかに解析度が高いのができているんですからね。僕はあのオープニング・セレモニーに行つて来ましたよ。

伊藤 総理になつてからですか。

海部 いや、辞めてからです。

■文部大臣9 (国立大学と入試制度1)

伊藤 ちょっと元に戻りましょう。国立大学の学長さんたちとはつき合うことになるんですか。

海部 なります。国立大学というのは、全国でたしか八十八あります。

伊藤 いま九十九あります。私のところ「政策研究大学院大学」が九十九番目ですから。

海部 新しいのがどんどんできているからな。僕の場合は八十八だったんです。国立大学というのは私立大学と違って、あまり建学の精神とか個性、特徴がないという評価だった。僕は「そう言うな」と、国会で何回も答えています。「北海道の帯広畜産大学というのは畜産に関する限りは最高レベルの研究をしている。それぐらい自尊心と誇りを持ってやっている学校はないじゃないか、たとえば」とテレビで言ったら、「先生、私の学校を見に来てくれ、見に来てくれ。そういうのは畜産大学だけじゃないですよ」と、なんとか工科大学とか工業大学とかが言ってくる。それから物理学校、これは国立じゃないんですよ。けれども、「そういうことをおっしゃるなら物理学校というのは——」という言う。

伊藤 あれは独特の学校ですからね。

海部 ほんとうに独特ですよ。

楠 物理学校というのは「東京」理科大「学」のことですか。

海部 理科大。聴いてみたら、なるほど思つたので、その後は帯広畜産大学と物理学校とか、いろいろなところを入れながら、「富士の山より八ヶ岳」といって、個性と特徴を持った学校づくりを言つた。

伊藤 じゃあ、けつこう大学を歩かれたんですね。

海部 歩いた歩いた、それは歩きました。歩かなければいけません。ただ大学も「教育は人なり」で、先頭に立つてリーダーシップを発揮して引つ張つていく人がおるところは、活力が出て来て、やる気を持つてやつていく。しかしやる気も全くないようなリーダーに引つ張られておる学校は、沈滞して、なんともならん学校もあった。だから、「もう少し先頭に立つてやりなさいよ。あんた息子みたいなおれにそんな生意気なことを言われて、腹が立っているでしょう。顔を見ればわかる。腹を立てていらつしやる顔だ」と言つて挑発したり、いろいろなことをしたね。

伊藤 共通一次試験の導入とか、大学の入試制度の問題というのは、いつも新しいことをやつては駄目、ということが続いています、入試問題というのは大変ですね。

海部 これまた一人ひとりの能力を点数で評価するのはなかなか難しい。しかも一回や二回のペーパーテストだと、ヤマが当たるとか当たらないとか、そういうこともある。だからみんなが、その前の高等学校の教育課程を真面目に勉強して、いろいろなものを身につけてきたというなれば、その中の五教科で、そこで身につけたものがどの程度なのかということテストする。それは必ずしも百点とらなくてもいいけれど、一定のところまで達していたら合格とする。それを「共通一次試験」という呼び方をしたんですね。

そのころ、「全教科をやらなければならんというのはナンセンスだ」という意見もあったけれど、「いやそうではない、二次試験とというのがあつて、一次試験に合格をして、この人は基礎・基本の問題、あるいは高校レベルまでのものはみな身に付いているから、あとはそれぞれ、その上に立つて専門教育を施したらいい」というの

が、そうだったんです。

そうしたら、それもまた日教組から反撃された。「共通一次試験で点数をつけて、足りなかったといって落ちると、本試験を受けられなくなるでしょう」「いや、全部じゃない。敗者復活戦というものもあるから」と言っただものだから、「敗者復活戦というのは何だ、敗者というのは負けた人のことでしょう」と言う。「まあまあ、そういう葉尻をつかまえて難しいことを言いなさんな」といって、絶えず日教組とは喧嘩さ。

それはそれでいい。そして第二次試験とイコールして点を付けて、ピックアップしていくから、能力のある人は能力に応じて第二次試験で点数をとればいいし、非常に平均的な常識・知識の持ち主は、一次試験の方でうまくいけるのではないかと、言っただけでも、そういうことをいくら言っても、現実には一次試験によつてはねられる人がいますね。

伊藤 足切りですね。

海部 足切り。それについても委員会がよく言われたことは、「そんな残酷無比なことではない。二次試験までほとんど全体の人を受けさせたらどうか」ということだ。「そういったって、精選してきさんとやっついこうということも含まれていますから、わかってくださいよ」といって、足切り論を肯定し、是認するような答弁を委員会でしたわけだ。みんな速記録に残りますからね。そうしたらはつきりわかる日教組出身者が質問して、「痛い、痛いといって足を切られて、そこらに転がっている中でも、みんな切ったらかわいそうだ。そういうのはもう一回呼んできてやらせれば、勉強できるようなになっているかもしれない。だから共通一次試験で足切りをするのは反対だ」という結論を言う人がいる。

しかし同じ委員会ですから、「足切りは親切丁寧に個性と能力を見分けようという段階であって、これは入学試験に伴うネセサリー・イブブルであると思ってください、必要悪です」と言っただ。そうしたら今度は、「そんなことはいかんから、足切りはやめろ」とい

う。「同じ委員会で、あなたたち同じ党じゃないか」と、相手は社会党だから言ったら、「個性と能力と大臣は言うけれど、われわれはそういうつもりでやっているんだ。国民のために、そうでしょう、国民のためにやっているんだ」と言われて、入学試験の問題はガタガタしました。あるとき予算委員会にまでこの問題が上がっていった、引つ張り出されました。

■文部大臣10（国立大学と入試制度2）

伊藤 予算委員会というのは、何を言ってもいいんですか。

海部 何を言ってもいいんです。まあ、ひどい目に遭ったわ。共通一次試験というのは、僕はいまでも責任は感じています。あのとき、いいと思って一所懸命取り組んだ。

けれど、悪口を一つ言わせてもらえば、東大という学校がまったく協力しなかった。向坊某という人は学者としては立派な人ですが、東大総長としてはまったく非協力で、結論は、「そんな文部省のやるような共通一次試験でやってもならなくても、東大はいままで通り全教科をテストします。そして選んだ学生は間違いないわけです」と言い切るわけだ。だから、「東大がそんなことを言っておつたら。象徴的にみんなが東大に行きたい、行きたいというのが、僕に言わせれば社会を悪くしている一つの風潮でもある。だからみんながそういうことを言っているところで、東大が共通一次は、ここ「頭を指す」の程度が知れるなんて言っておやめになったら、全部協力させようと思っっている他の学校が協力しないじゃないですか」と言っただ。それでもやってくれなかったな。

伊藤 いや、最後に駆け込んで、入ったんじゃないですか。

海部 「いま言ったのは」最初の話。最後は五教科七科目ですよ。けれどもそれは、一次試験の科目は全部やるというわけですね。全部やる必要はないと一次は言っていたんですけれどね。得意なも

のに絞ってくださいと。

伊藤 いろいろ問題がありますね。これはどんな方法をとつても、落ちる人がいるわけですからね。

海部 今日までタネは続いているわけです。

伊藤 これはいかんともし難いところがありますね。全部入れて、途中で落としていけという議論もあるんですが、入れるだけの余裕、場所がないですからね。

海部 それに、「おまえはもう駄目だ」と、一年経ったところでドロップさせることに、みんなが素直に従いますか。

伊藤 従わないでしょう。

海部 それが二年目、況んや三年目に、「もうおまえは」と言ったら、世の中のくずになってしまう。私はこういうものです、という烙印を押されるようなものだから、教育はそういうものではないということになってくる。やはり入学試験のところでもう少しみんなが納得できる方法はないだろうか。得意とする科目で点数をつけてあげれば、不得意なところの筆記試験で振り落としをやってもいいだろうと、僕は足切りを認める方の立場に立っておつたんです。

「どうせ救われないものを、いつまでもがんばれば、がんばれという親は親でかいそうに、毎年毎年、受験料を考えなければならぬでしょう。そういうものは、早めに芽を切つてあげたほうがいいよ」と言ったらエライ怒られた。「なんとという血も涙もないことを言う」と言われた。そのときの僕の答弁を転換するには、「良心の呵責に耐えて、たしかに言い過ぎもあつたと思うけれど」と言つてお詫びをしましたよ。

伊藤 いちおうお詫びをするんですか（笑い）。

海部 「けれどもそのほうが個性と能力を伸ばす。ほかに得意なものがあつたら早く社会に出たほうが、お金も儲かるし、技術も伸びるし、国のためにも社会のためにも、そのほうがいいじゃないですか。いつまでも鉢巻きを締めてわからない勉強ばかりしておるよりも、そのほうがのびのびして人間的だと思わんですか」と言つと、

「そうだ」と言うけれど。

伊藤 「そうだ」とはなかなか言えないでしょう。そんなことを言つたらまたあとで大変ですからね。

海部 また日教組にすぐに噛みつかれる。いつかそれをテレビで言つたんです。そうしたら次の委員会の冒頭に飛び込み発言で、「海部さん、あんたはよくいろいろなところに出て、いろいろと良いことをおつしやる、と自分では思つておるだろうけれど」。おれは初めほめられると思つたら、「と自分では思つておるだろう」の先が肝心だと言う。「このあいだのテレビであなたはなんということを言つたんですか。どうせ能力がないやつは、と前置きをしてからした話は全然駄目だ」という。僕は「ここで、時間がかかつてもうろしかつたら、私は全部一つひとつお答えします」と言つたら、「もう聞きとうない」と言う。「聞きとうなかったら、そんなこと怒らなくてもいいじゃないですか」なんて馬鹿げた話をした。

それは顔知りになっているから、終わつたあとで、「まあ、あれは言つとかなければならんから言つたけれど、そう気にせんでもいいよ」とかなんとか言つている（笑い）。

佐道 日教組の側では、具体的な入試の改革案とか、そういうものはないわけですか。

海部 ないわけです。日教組全体では、昇給延伸、ストップしてあつたものを、いつ解除してくれるかという話が、一番大きな話だ。

それはストをやる、処分が行く。スト、処分、スト、処分となつて、処分が何回か重なるという話が主たるものです。延伸になるわけです。それを復活しろという話が主たるものです。小さいものは、さつき例に引いたように、「うちの学校の先生たちが安心してたくさん行けるようにしろ」とか、ひどいやつは「おれの息子はこうだから、あれを止めてはいかん」という。驚いた。そのときそういう話があつたけれど、一番の問題は延伸解除でしたね。

伊藤 要するに、ストによる不利益処分を解除してくれということですね。それじゃあストをやつてもよろしい、ということになるわ

けですね。

海部 なるわけです。それはいけません。もう一つは、あのころの日教組には二百億ぐらい組合費が入っているんですね。だから逆に、「あんた方も正直に言いなさいよ」と言ったんだ。第二月給袋というのがあって、延伸を食った人には、延伸プラスαで、いくらかずつ袋が行ったわけです。それに百四十億ぐらい使っていたわけだな。「そういうことをやめにしたら、その金をあんた方はどうするつもりだ、みんな飲み食いに使うだろう」なんて、そんなケチなことは言えないから、言いませんけれど。

伊藤 革命のために使う（笑い）。

海部 ちゃんと持っているんだ。だから衆議院解散になると、社会党の代議士会に行つて、胸を叩いて、がんばれ、と言う。応援に行くやつは、そういうときにいつも文部省や文部大臣は馬鹿だのちよんだのと言つて噛みついてくる日教組の人たちだ。さすがに榎枝はそこまで言わないだろうと思つておつたけれど、あるとき社会党の控え室で激励演説をやつておつた。それはしょうがありませんな。佐道 榎枝さんは総評の委員長をされましたよね。

■文部大臣11（主任制度と学歴偏重打破）

伊藤 地方大学の整備というのは、何かご記憶がございますか。

海部 地方大学の整備というのは、地方大学の格差を是正しなければならぬということ、お金で片が付く話が多いんですね。東大だけが、たしか二十六の研究所を持つていて、国立大学共同利用機関なんて名前はいけれど、東大が一つ入っていると「お金が」たくさんつく。地方はそういうものが非常に寂しいということ、そういうものをやっていく。それからいい先生が地方の大学へはなかなか行かない。地方出身者が地方の大学へ努力して行けるようにするにはどうしたらいいか。官舎というのは大学にはあるのかな。

伊藤 もともとはあるんです。

海部 衣食住ですから、住の方をしつかりしたら、いい人が行くんじゃないかと、予算のときにまことに次元の低い話をしたことを覚えております。

佐道 なかなか具体的に、これはという決め手はないですね。

海部 要するに、いい先生が行つてくれなければ格差は是正されないわけだ。そこに行くと、また「教育は人なり」ということになりますけれどね。

佐道 いい先生を選ぶ、教官を選ぶのは、その地方の大学の自治、教授会で選ぶわけですね。例えば日教組の先生たちをたくさん供給するような教育学部の先生たちがいらつしやるわけですね。そういう先生は、またそれを再生産できるような方を教官に選ぶということになって、それが地方大学に集まる。

海部 そこで人確法の話が出てくるんです。教育職員人材確保法ですね。それは遠回しに、こんなストばかりやつておられたらかなわん、ということだ。当時、大学の先生たちも、はつきり言うて申し訳ないが、東大の先生が一番非協力で怖しかった、悪かった。特に東大の大学病院なんて一番ひどかったよ。そういうこともあって、あれをもう少し変えるにはどうしたらいいか。やはり人材確保をするためには、一番早い話、給料に差をつけて、よくすることだな、というところに落ち着いた。最後の最後は、小学校の先生たちにも日教組に入るなといつてもいかなから、それよりも教育に力を入れてくれということで、教育に力を入れる人に「主任」という制度をもつてきた。その主任は、それぞれの専門分野で授業も担当する、手当もつく。主任手当だ。そうして少しはやる気を出してもらう。

伊藤 でもこれはすごい反発を食つたじゃないですか。

海部 やられた、やられた。その頃、名前を言うとかわいそうだけれど、某野党代表で出て来ている日教組上がりがおりました。それが主任制度のときに、「大臣、あんたは何も知らんな。地方の小学校に行つて、一番悪いのは誰で、一番いいのは誰だか調べたことが

あるか、実際に」「いやありません。みんな「質問者の」先生みたいな立派な人ばかりが地方の先生だと思つていますよ」と言つたら、「みんなそう言うけれど、一番悪いのは、校長との間柄を考えておる先生か、先生同士のあいだを考えてうまくやろうと思つておる先生か」と、こつちが経験してないまったくわからん難問をいろいろぶつけられた。最後は主任制度反対のところに落ちるわけです。

要するに同じ仲間に肩書きをつけたり、手当が行つていふことになる、それは教育の精神に反するといふところへ持つていきかけたんでしょね。さんざんいろいろなことを言われた。そして、「主任なんかになるようなやつはヒラメ教育といつて、目が上ばかりに向いてゐる。それは告げ口先生になる。同じ職員室の同僚同士であれば悪いとかなんとかいって、上を向いて告げ口に行くようになる。一番悪いんだ、これが。そういう悪の芽は断たなければならん」といつて、えらい怒るわけだ。

伊藤 上の方も日教組なんだ（笑い）。

海部 僕は、「今日は本当に悲しい話を聞きました。先生のように人格高潔と尊敬している人からそんな話を聞くととは思わなかつた。主任制度というのはそんなに悪いですか。主任になつた先生というのは、本当にそんなことをやるんですか。この話だけは肝に銘じて覚えておきます」と言つた。そうしたら、どうもそんな先生ばかりでもないといふことも、委員会の中における教師上がり言うわけだ。それは日教組とこれが悪いんだと言つて、『荒れる教室』という本を僕のところに持つてきて、これを読んでみるという。読むと、やつぱりそういうことが書いてありますね。

主任制度をとると、校長に告げ口に行つたり、外部にゴマをすつたりするような調子のいいのばかりが主任になる、そんなことをしたら教育が無茶になるといふことで、さかんに僕らはいじめられた。「なぜそんな悪いほうにばかり見なければならんですか。もうちよつと、こういうふうに見なければならぬ先生方が、主任になつたがために時間を提供し、主任になつたがために勉強も一所懸命や

らなければならぬ、こういう切磋琢磨の努力こそが教育には一番必要だと思ふが、いかがですか」と言つたんですね。そんなやりとりもずいぶんしたな。

伊藤 しかしどうしても、日教組とのあいだでは平行線ですね。学歴偏重の打破というのは、言うべくして行ない難いところではないでしょうか。

海部 これはいろいろ調査をして、問題を整理して、学歴偏重といふのは何かといふと、その大学の卒業生だといふことが就職にきわめて有利になる学校、指定校制度というものがある。企業が学校を指定する。その指定校制度をやめたらいいじゃないか。ところが企業に言わせると、これも氣をつけて言わなければいかんが、「ペーパーを見ただけではいくらなんでもわからない。結局頼るのは絶対評価の点数で、それでやつていくよりしようがない。それでいいかいと言われたら、どうしたらいいですか」といふことだ。

僕はあのころ、日経連、経団連の幹部といふ話に合つた。労働大臣も引つ張り出した。石田博英という人でした。「バクさん、あんたも手伝え、指定校制度をぶち破るんだ」と言つた。

ぶち破るはいいいけれど、指定校制度が悪いからやめろと言つて、これは大変な影響が出るから、それはいけない。行きたい人が行つて、そこを受ける。それはそれで競争が公正に平等に行なわれたらいいじゃないか。切磋琢磨というのはそういうところで評価されていいんじゃないか。いろいろな議論もしたんですが、指定校制度があるがために教育が歪むんですね。大学の四年生の一学期になると、もうそちらばかりになつて、本当の学問の方に身が入つておらん。企業の方も早くから呼び出して、下品な言葉ですが、唾をつける。

伊藤 いまでもやつていますよ。

海部 いまでもやつてゐる？

伊藤 このあいだ、ある人からちよつと挨拶がありました。大学の四年生ですが、「内定いたしました」と言つてきたんです。まだ五月でしょう。最近三年の終わりに決まるんですよ。

楠 それは指定校制度というより、就職解禁日の問題ではないですか。会社訪問をいつからやるかということですね。

伊藤 指定校の問題は、それを外したら、人がいっぱい来てテストの会場もない、と言いますよ。

楠 でもいま有力な企業では、エントリーシートに学校の名前を書かせないようですね。

海部 いや、いまは変わったかもしれないが、こことこの学校は受け入れる、ここは早稲田でなければいけない、ここは慶應でなければいけない、ここはどこでなければいけないという企業側からの指定はやめて欲しいということだ。それは石田博英もさかんに言ってくれた。けれども結局裏をくぐって、そうきれいには解決しなかったな。

伊藤 それはきれいには行かないでしょう。実際問題は表に出さないで、行くと、「ご苦労さんでした」といって、そのままお帰りにたたくということになるんです。なかなか難しい問題です。

■文部大臣12（日教組との対立）

伊藤 日教組との対決というのは、議場だけではないでしょう。国会討論会もあるでしょうし、現場でもあるんじゃないでしょうか。

海部 現場まで出て行って日教組との対決というのは、当時は各学区単位で活動家の激しいのがあるところがひどいんですね。特にひどいところは、子供に「赤旗の日曜版を買って読むといいよ」なんていうことまで教室を使ってやった人がある。そういうのは僕らも現場まで行って、「そんなものは必要ないから破ってしまえ。誰がそんなことを言ってきた、呼んでこい」とやる。そういうシンパミたいなのがおるんですよ。それは行き過ぎじゃないか。

楠 自民党系というか、保守系の教員組織も、小さいながらもありませんね。それを強化するとか。文部大臣としてはできないかもしれません。

せんが、自民党サイドからやるとか、そういうことはなかったですか。

海部 日教連というのがあってはご存知でしょう。あの日教連というのは、いきなり自民党系といって旗は立てられないけれど、反日教組のグループで、党大会にもいつも代表が来るし、僕らとも定期的に懇談などをいたしました。そういうところが強いところに行くとか、「われわれは日教連です」という。例えば栃木県の森山、いまの森山真弓の旦那の欽司さん、あれはウルトラ・コンサバティブだから、えらいがっちりした日教連があった。

伊藤 地域によつてずいぶん格差がありますね。

海部 ずいぶん違います。それも、一人、そういうことを一所懸命にやろうという人があるところは、そういう組織ができるわけですね。

伊藤 日教組というのは、別に文部省、文部大臣とのあいだで交渉するという立場の組合ではありませんね。

海部 ありません。

伊藤 だけど向こうは、何かそういう形をつくりたいという気はあるわけでしょう。

海部 だから「会え、会え、大臣と交渉がしたい」という。ところが交渉事項ではない。僕が会ったときも、「交渉事項で会っているんじゃないよ」と、初めにきちんと釘を刺しておく。

伊藤 あれは地方公務員ですからね。

海部 全然筋が違ふんだ。

伊藤 あの人たちの要求を聞いて、文部大臣が何かできるという問題ではないですからね。

海部 文部大臣の手を離れたところで決まることだ。例えば学習指導要領だって、教育課程審議会に諮って、審議会のみなさんが審議して決めていくことであるから、そんなものは交渉事項ではないですね。それから給料の問題などは、人事院勧告があって、教育公務員特例法があつて、それによつてどうするか、こうするかというだ

けで、そこで話し合つて決められるような範囲の問題ではないわけ
です。

伊藤 日教組はだいぶヤミの専従をたくさん持っていたでしょう。
それがまた地方でもめたりした。最近もまたヤミ給与の問題などが
出て来ていますね。

海部 しかしこのごろはあまりクビ切りがありませんから、ヤミ専
従で身柄を保証しなければならんという場面はあまりないんですね。
伊藤 それはそうですね。

海部 ただ昇給延伸はまだ残っていますから、その差額を補填する
ために組合費を出せ、という説得に使われているようです。第二
月給袋ですね。

楠 日教組も最近組織率がうんと低下して、さらに共産党とも別
れていますからね。

海部 もう組織率は五〇%を切っているんじゃないですか。

楠 完全に切っています。しかも穏健化しています。

海部 三〇%台じゃないですか。

伊藤 それでも教育界における影響力は大きいですからね。大学の
教育学部というのは日教組の講師団になっていて、そこで教員を養
成しているわけですから、これはたまったものではない。

国旗・国歌の問題も、いろいろ議論はされていますが、まだ法制
化していることはありません。議論が出て来たことはたしかです
ね。

海部 議論はいろいろしました。それが感情的なところに流れてい
くような議論ばかりで、本質論まではなかなか行かなかった。僕の
記憶からいつて、いろいろ言われると、「それじゃああんた、オリ
ンピックのときに何を揚げるんだ。日の丸が駄目だというならば、
赤旗でも揚げるのか。そんなことをやったら余計おかしい国だとい
って怒られるぞ」と言ってみたり、トーンを変えて、「私は沖縄に
行ったときに感銘を受けたことがある。そこにいらつしやる（とい
って、そこに沖縄選出の議員がおるから）みなさんは、国際通りを

何を持って歩いていらつしやったんですか。日の丸の旗じゃないで
すか。私はあれを見たときに、いやさすがに日本人だ、先輩はえら
いな、と思つて感銘を受けました」。喜屋武真栄とか、ああいうの
がおるわけだ。そしておれをキャンキャン突つたわけだ、君が
代はいけない、日の丸は血でしたる旗だ」とか言う。「いつまで
経つてもそういうふうに通つておつたらいかん。国には国の印もい
る、国には国の歌もある、こういうふうに通直に受け止めて、僕は
やつていけるけれど、それもいけませんか」と言つたんだ。

そうしたら共産党があそこ、新国歌創設論というのを一時出し
たことがあつたんだね。「国民的に集めて、国民投票をしてどれが
いいか決めたらどうだ、絶対に間違つても君が代がいい歌詞だと誰
も思わん」と言い出すんだ。だから「あんた方、君が代というこ
とだ、あんたも含むユーだから、そういうことをあまり理屈っぽく
考えると駄目になつちやうから」と言つたら、「そんな単純なこと
でどうするんだ」といつてさんざん怒られたけれど、そういうやり
とりは面白かつたですね。

■文部大臣13（心の教育のために）

伊藤 文部大臣というのは、いつも社会党、共産党とやり合いです
ね。

海部 われわれの頃は、それがほとんどすべてでしたね。

伊藤 文部省としての施策の中では、さつきおつしやつたような国
立大学に対する施策とか地方大学に対する施策は、あまり日教組と
関わりがないわけですから、それはできますね。いろいろな振興財
団もそうですね。

質問票の三番目に書きましたが、筑波大学と経団連が中心になつ
て、科学技術開発を推進するための国際科学技術財団が設立されま

した。これは何かご記憶がございますか。

海部 あのころは、「産学協同」ということが非常にいけないことだという立場に立って攻撃してくる方が多かった。

伊藤 そうですね。

海部 国のため、日本のためにいろいろみんなが知恵を出し合って集める。産学協同がいかにいいっても、それぞれが持っておる経験とか技術とか知識とか、そういうものを一緒にやっていたら、それでいいじゃないか、どうして反対するんだ、という平行線でした。

伊藤 そうですね。とにかく産業界と連携すると大学は会社の下請けになってしまうという感じでしたね。

海部 まさにそうでしたね。それに早く気がついて、やるようになったから、日本はいろいろな分野で大学の力を借りて、研究が進んだこともたくさんある。大学と現場との協力によって新しい分野を開く。そういう経験もたくさんしているはずですから、もうこのごろは産学協同はいけないという話はまったく出ないですね。

伊藤 そうですね。まったくいいほど出ないと思いますね。むしろ、いかにそれを推進していくかという話になりますね。

伊藤 大学のほうは、共産党系も別にそれ「産学協同」に対して反対しているわけではないでしょう。

佐道 それを進めて、いかに大学が生き残っていくかという話になっていますから。

伊藤 自分たちの利益にもかかっている。

楠 いままでの「海部」先生のお話を伺っていると、文教委員会などでも、社会党系、日教組系の議員とのやりとりで、対立する部分はほとんどイデオロギー的イシューということになりますか。

海部 結局そうでしょうね。

楠 共通一次はちよつとおくとしても、それ以外の、例えば地方大学の整備であるとか、学歴偏重の打破だとか、そういうものについては特に激しい対立というのは起きないわけですか。

海部 そのへんは命がけで反対したり賛成したりするテーマではな

くなってくる。愛知県の大学を東京の大学と差をつけているのはけしからん、と愛知県に帰って言えば、ワーツと喜んでくれる。中には変わったのがいますよ。愛知教育大学の大学院の認可を与えたら、教育大学の現職の教員が、「そんなことはやめてください。大学院なんか愛教大に作る必要はありません」と言ってきたのがあった。「おまえ、アホか。みんなが力を合わせて頭脳開発もやろう、いい学校をつくらうと言っているのに」と言ったこともありましたが、それは稀有な例だと思っています。例外です。だから地方のことになるとみんな協力して一緒にやっていたと思いますよ。それで、ぶつかることは、どうしてもイデオロギーに関係することになってくるんです。

伊藤 主任をつくるとか、そういうことになると、バーンとくるわけですね。

海部 主任制度なんていうのは本当にぶつかる。それから「ゆとりある教育」のところでも、一つ問題になったのは学校の先生たちは休暇が多いじゃないか、ということですよ。夏休みとか正月休みとかいろいろあるのに、なんだ、というようなことになってくると、また真つ二つになる。けれどもそれ以外のところでは、いまから見れば遠い昔の話で、いまは二十五人学級とかなんとかいっておりますが、四十人学級の議論の頃には、「生首を切る」という表現が使われたな。四十人学級をやられると教師の生首が切られる、という立場からの反論が多かった。

楠 教師の数が増えないと、四十人学級にならないですね。

伊藤 だんだん子供の数が減ってくれば――。

海部 こんにちはのような顕著な状況ではなくても、やがて近い将来には減っていくという角度が一つと、教師自身の立場、教師自身の受け持ち時間というようなことを考えていくと、行き届いた教育をやるには、もつと児童生徒の数を減らさなければいかん。だから四十人はおろか、三十五人でもいい。あのころ、イギリスかどこかの例で、二十五人学級というのがあった。

伊藤 それは、四十人学級のままでやっていけば、いつか先生が余るわけですね。文部大臣として、ほかに特に印象に残るようなことはございましたか。

海部 文部大臣として僕は、心の教育をもっとやらなければいかんといった。「教」と「育」とを分けて、「教」のほうはずいぶん高く行っているが、心の教育である「育」が遅れている。何故そんなことを思ったかというと、文部大臣になった直後の社会事件の中で、河口湖でボートがひっくり返って人が死んだ事件があった。

伊藤 東大生の事件ですね。

海部 はい。最近の例で、それを写し絵のように合わせてみると、差し障りがあつたらご勘弁ですが、東京大学卒業の優等生がどうしてオウム技術者になるんですか。あれは人間の心が欠けておるからああいうことになるんじゃないでしょうか。だからあのころから教育で指摘されておった「心の教育」はまだ解決されておらん。

伊藤 それは永遠の課題ではないかと思えますね。

海部 永遠の課題ですけれど、大事なことだと思えますよ。僕はそれを初めから非常に重視していた。

伊藤 でも具体的な施策ということになると、どういうふうにするんですかね。

海部 具体策となると、僕らも委員会できり合っておったが、心の教育というのは一歩間違ふとすぐに、「修身の復活か」と野次られますからね。だから、「道德教育というものを身につけてもらうことです。道德というのは普遍的な妥当性のある、人間が誰しも身につけておらなければならないと思われる徳目みたいなものの寄せ集めであつて、怒るな、盗むなと、例えばそういうことを教えていく。だから道德教育ということになるんじゃないですか」と言つたんですが。いまでも精一杯、それぐらいしか言えないわ。あと、心の教育というときは、人が本当に感動するような素晴らしい名画とか小説があつたときには、みんながそれに目を通す。

伊藤 具体的な施策ということになると難しいですね。心の教育と

いっても、日教組の先生に心の教育をやられたら、とんでもない。楠 心の部分に政治がどこまで踏み込めるか、という問題もあると思うんですね。

海部 それについては、僕は初めの頃の答えは、児童生徒の心は真っ白なものであるから、そこは政治が踏み込むべき分野ではないと思う。見るに見かねて踏み込んできているやつがおるならば、それを排除するのが精一杯の政治の役割だと思う。

■派閥解消と三木派

伊藤 次の質問ですが、一九七七年三月に、三木派も含めて自民党各派閥が解散ということがありますが、これは何がきっかけでしたか。

佐道 これは福田内閣で、各派閥を解消しようということですね。

海部 「派閥解消は天の声だ」と福田さんが言つたんだ、ホー、ホー、ホーと言いながら、「派閥は百害あつて一利なしだ、諸悪の根源は派閥だ」とよく言われたんですね。というのは、数は力、力は正義、派閥さえ増やせばいいということで、なんでも派閥が増えてきた。その派閥によつて法律が通るか通らないかまで決まるわけです。派閥同士で話をつければ、この法律が通るとか通らないというのが決まったのも現実ですからね。そういうことだつたと思います。伊藤 でも解消するといつても、実際問題、看板を降ろしただけで、実体がなくなつたわけではないでしょう。

海部 見た目だけが変わつたけれど、一歩奥に行くと、依然として全部残つておるといふことになるんじゃないですか。だから派閥は解消したけれど、何々事務所とか、違うものに流れて行つた。

伊藤 なんとか研究会とか、ですね。

海部 新政策研究会とか。

楠 「元福田派」とか「元三木派」という表現を使つていて、事実

上変わっていなかったですね。

海部 新聞もそうだ、「元〇〇派」だ。選挙区制度が悪いから、派閥の数だけ候補者が立候補して、相争う。この派閥解消に失敗したから言い出したことが、小選挙区制度だ。三木さんが一回、「派閥の数だけ候補者が出てくる。それで天文学的に金を使うやつが当選する。これが日本の政治を悪くしている元である。だから、人には誤解されるかもしれないが、小選挙区もいいよ。けれど一つだけ、小選挙区になると、大政党が強くなって少数意見というものが完全に無視される。(その頃はまだ比例代表の並立制というような言葉は定着していなかったけれど、) 比例制度が何かで少数意見を救済するようにしていかなければならんと思っている。それが解決しなければならん最大の問題だから、考えておけ」といって、学者を集めてヨーロッパにそのことを調べに行かせたり、自治省の選挙担当者と呼んだり、三木さんは一所懸命やっていましたな。

伊藤 三木派もこのとき解散したんですね。

海部 三木派ではなくて、「新政策研究会」と名前が変わったけれど、実態は同じでしたね。

伊藤 研究会だから、いままでのように集まって研究もやっただけでしょうし、情報交換もやっただけでしょう。

海部 そうですよ。

伊藤 その研究会に、組閣だといえ、何名といって割り当てが来るだろうし、何も変わらんですね。

海部 何も変わらなかったし、それは延々と続いてきておりました。

伊藤 派閥解消は何度も言われて、何度も復活している。

佐道 形としては、看板だけ降ろそうかということ、まとまって看板だけは降ろしたんですね。

海部 看板は降ろした。

伊藤 しかし看板ももともと「三木派」という看板が出ていたわけではないでしょう。

楠 「宏池会」とか「清和会」とか、そういう名前ですね。

伊藤 伝統ある名前を消したということかな。三木派はなんというんですか。

海部 新政策研究会です。もともと三木派は三木派だったけれど、その前は新政策研究会。

伊藤 派閥解消したあとはどうなったんですか。

海部 あとは、三木派はもろなくなつたことになっているんだな。それで新政策研究会というのが「中央政策研究会」になった。

佐道 「新」を「中央」にしたんですね(笑)。

海部 そう。

伊藤 それはどこに事務所があったんですか。

海部 四谷の三木事務所があったところですよ。

伊藤 あのお堀端ですね。

海部 そうです。桜がよく見えるところですよ。

伊藤 これはしかし、みなさん本気になって考えたわけではないでしょうね。一部には本気になって考えた人もいるんでしょうか。

海部 三木さんもあるときは本気になって考えたと思うんです。それで小選挙区にしなければいけないということになった。小選挙区になると少数意見が駄目になるけれど、それは少数意見を救済する方法を考えればいいではないか、比例代表並立制を考えたらどうかというところまで一時期は行っておったんです。しかし、並立制になると必要以上に政局が安定しなくなる。少数を必要以上に保護し過ぎることになる。バランスをとるのは、小選挙区比例代表併用制というのかな、いまやっているもので行かなければいかん。あんなころ、そういう議論は、どっちがどうだろうということ、みんな自分のそろばんを弾いてやっていた。どっちでやれば自分は当選確実になるだろう、と思つてそろばんを弾く。けれど選挙というのは、本当はそういうことではありませんでした。

楠 派閥解消をしていたような時期には、組閣とか党役員人事には多少影響があったんですか。少し派閥ごとの推薦を控えるとか、あるいは無派閥の議員が有利になったとか。

海部 表向き、派閥推薦の名簿は出さなくなつて、ときの総理大臣には調子がよくなつた。一本釣りをやっても、一本釣りとは言われ
ないし。

伊藤 でも一本釣りをやったら、そのグループから反発を食らうの
は必至ですね。

海部 その悪弊はいまでも残っていますからね。

伊藤 いま非常に派閥が弱化したと言っているんだけど、やはり
割り当ては割り当てですね。

海部 だいたい昔からのバランスで、どれだけ所属議員がおるか、
議員の数と力でやるんですが、それも変わりつつあることは間違い
ありません。

伊藤 変わっていますか。

海部 だって、最近の組閣を見てくだされば。

伊藤 最近の組閣は変人のやったことですから（笑い）。

楠 その揺り戻しで、また内閣改造をやれという要求が強くなるわ
けですね。

海部 ここでまた元の木阿弥に戻してはいけないということになり
ますね。

佐道 この解消で、派閥を移ったとか、別の活動を始めたとか、
そういう動きをした方はいらっしゃるわけですか。

伊藤 新しい派閥をつくったとか。

佐道 何か再編成のようなことが形としてはなかったのか、という
ことです。

海部 そういうところまでドラステイックな動きはなかったと思
いますよ。

伊藤 三木派だってこれで動揺したわけではないでしょう。

海部 動揺していません。

佐道 定例の会合とか、そういうものは開かないわけですね。

伊藤 研究会では定例の会合は開くんでしょう。

海部 研究会は開いております。

楠 餅代とか氷代はその時期はどうしていたんですか。

海部 いろいろなところで、ある程度自粛したんじゃないかな。公
然と餅代と称して年末に渡すのはやめにして、組織活動費とかなん
とかいう名前に変えて、いつぺんに渡すのをやめて個々別々に集め
た。活動にはどうしてもお金がいるからということで、特に若い議
員はそれを待っているわけだ。油断していると、それでよその派閥
に取られちゃうということもあつたわけだから、それは細々ながら
続いてきたと思います。

佐道 先生は、もう派閥のためになにがしかのものをあげるとい
うか、渡すようなお立場になつておられるわけですね。

海部 終わりの頃は、閣僚経験者は全部、というところ怒られるけ
れど、できるやつはご恩返しをしないさい、ということだ。ご恩返しとい
うことで、選挙の前には少しあげる。みんなが取りに来るからな、当
然のような顔をして。

伊藤 若いのが、ですか。

海部 若いのが。それから応援に行くときは、手ぶらで行ったらあ
りがたみがないと言われる。

伊藤 なにがしかを持つていくわけですか。

海部 なにがしかを持つていかなければならない。

伊藤 応援というのはそういう意味ですか。

海部 そうですよ（笑い）。

伊藤 手土産が必要なんですね。

海部 お土産を持つていかなければならない。

佐道 応援してもらつたら、ふつうはお礼をしなければいけないの
に（笑い）。

海部 それが違うんだな。

伊藤 次の質問は、「参院全国区を拘束名簿式比例代表制とする公
選法改正案を国会提出」ということです。

佐道 いまのお話の関係で、参議院で、何人かが全国区の選挙法改
正案を出したんです。

楠 こんな時期にありましたか。これは八三年のことじゃないですか。

海部 これは例の相打ち法案のときの話でしょう。野党四党が数だけが多くなつた。自民党の方は数が少なくなる。それで厳しい法案を出した。たしか、そうです。七七年の話だ。

楠 父がこの時期、現職の議員だったんですが、全然記憶がないんです。

海部 あのころ現職でしたか。

楠 ええ。

海部 最後のときは、いささか私も関係して、応援団、後継者の話もよく聞いて知っていますが、これは結局自民党には不向きな案だったんです。計算するとうまく行かない。昭和五十二年五月でしよう「新聞の切り抜きを示す」。五月二十四日に、時間切れ廃案ということで葬ったわけです。それが五十二年の話。それで、これはいかんといつて、五十七年にちよつと焼き直しをして成立しているんです。比例代表の制度ですね。

伊藤 それが自民党に不利だというのは、どういうわけですか。計算してみても、ですか。

海部 計算してみても、お前さんこうだ、どうする、こうするというのを全部やって、結論としては不利だとわかったから、別案を出してぶつつけて、議会でよくやる手ですけれど、相打ちだ。おまえの方も引つ込めろ、こちらにも引つ込めるからということだ。自民党が野党四党の案をつぶすために出した案が、この五十二年の案です。細かいことや詳しいことは正確には覚えておらんが、当時の新聞を引つ張り出して読んでみると、そういうことが書いてありますね。

■文部大臣14（役所と秘書官）

伊藤 文部大臣としては、文部省にずっとおられるわけでも必ずし

もないでしょう。秘書は、議員さんとしての秘書と、役所の秘書官と両方あるわけですね。

海部 あります。

伊藤 役所にいるときはそちらの秘書官がついているわけでしょうが、議員会館に來ればご自分の秘書がいる。

海部 あのころは、役所の方にはちよつと迷惑だったのかもしれないけれど、秘書官室に政務秘書官の椅子と机も用意させておいた。いつ用があるかわからんから、二十四時間そばに置いておくということになつていて、文部省に出て行くときも一緒について來ました。

文部省で仕事をしているときも、よそとの仕事がある。文部省にも、自民党の議員以外の人がいろいろ会いに來る。特に選挙区の人とか仲間の議員が來るときには、役所の政務事務官に應對させておると、その氣があるのとなないと、官僚的な受け答えをするのとしなないと、えらい格差が出てくるんですね。それは当然のことでしょうね。だから僕は一人連れて行つて、やつておりました。

伊藤 その政務秘書官というのは、議員としての秘書ですか。

海部 大臣の秘書官。

伊藤 大臣の秘書に、政務と事務とあるわけですか。

海部 そうです。政務秘書官というのは、大臣が自分の好みで連れて行つて任命していいわけです。

伊藤 そうすると、海部先生のスケジュール管理などはどっちがやるわけですか。

海部 本当なら、大臣としてのスケジュールはみんな役所がやるんですが、こちらは議員としてのいろいろなこともあるし、派閥の関係もあるし、頼まれた地方遊説もありますから、そこは常に僕の場合と一緒に私設の私の秘書官を連れておりました。文部省に籍のある秘書ではない。それがびしつとやりました。

伊藤 そうすると海部先生を全面的にバックアップする秘書は、私設秘書の方ですか。

海部 そうです。

伊藤 これが全部コントロールするわけですね。役所のほうの秘書と、議員会館のほうの秘書と、全体をコントロールするんですね。

海部 はい。それでなければ危なくてしょうがない。

伊藤 大臣のとき、役所にいる時間の方が多いですか。

海部 初めのうちは、珍しさも手伝って、暇なときには課長を呼んで、ご進講と称して、「君のところの仕事を教えてくれ、これはどうなんだ」ということでいろいろ話を聞く。新しい知識がどんどん増えるから、これは面白いということで比較的役所におりましたね。それから役所に行くと、文部省というのは何とこのかな、現業を持つている役所と違ってあまり品の悪いのはいませんが、一杯飲みに行こうということがないみたいなんです。だから御殿女中と言われたんです。その代わり、何時までもつきあってやってくれるということもわかったので、これはいかんと思つて、ほどほどで切り上げて出てくるようにしました。

伊藤 文部大臣として、次官から局長クラスで、あとあとまで関係が深かった人はいらつしやいますか。

海部 おりますよ、文部省の人は。彼らにとって大きな仕事ができるときは、やはり満足ではないですか。

伊藤 それはそうでしょうね。どこの世界でもそうですから。

海部 いちばんそれを感じたのは芸術文化振興基金ができあがつたときで、あの連中は喜んだ。結局最後は、あの連中もそれに生き甲斐を感じておったのかもしれない。そう簡単にできる問題ではありませんが、振興基金でも天体望遠鏡でも、まあ一緒にやってよかったな、ということがある。それは比較的理解されやすい共通の喜びです。

もう一つは法律を通すためにいろいろ苦勞する。ああでもない、こうでもないといつて打ち合わせをやったり、答弁の打ち合わせをやる。朝なんて七時から起きて出て来て、委員会の始まる前に最新の打ち合わせをやってから入るということだ。特に主任制度の頃には、よくそれをやりました。

それから教育課程を決めるときには、一応初めから終わりまで目を通さなければならんじやないですか。教育課程のレクチャーを受けたら、この前までの教育課程と今度はどこが違うかと、いろいろなことをやる。専門家たちはそれに一所懸命打ち込むわけですね。

伊藤 前に田川「誠一」さんの話を伺つて、田川さんから自治大臣のときの日記を借りて読んでいるんですが、しょっちゅう「何々についてレク、レク、レク」、絶えずそれですね。役人がレクチャーを受けるということは、時間的にもかなり多かつたんじゃないですか。

海部 かなりの時間、役人のレクチャーに時間を割きました。

伊藤 役人もそれをちゃんとやっておかないと、あとで怒られても大変だから。

海部 そして要点だけは、「ツボを外さないように」という表現をしたかな。この問題のツボはこれですから、というようなことを言う。僕は思いつきで発言することもままあつたみたいだから、「答弁要旨をもうちよつと先の方までお読みください」と言われる。「おれは読んでないわ、こんなものは」と言うんだけど、途中でやめてはいけない問題もあるんです。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 16 回

福田内閣時代Ⅲ（1977～1978）

【2002年7月1日（月）14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 三條 薫、丹羽 清隆

(2002年7月1日)

1. 当時、自民党は総裁公選を控えて党員獲得運動を展開し、78年2月28日に党員登録を締め切ったときには党員数が三倍になっていました。各派閥が党員獲得を競い、中でも田中派の党員獲得は多かったと伝えられていますが、この点についてはいかがでしょうか。
2. 上の問題と関連しますが、78年6月、田中派は総裁公選実現と大平支持を表明します。こうした動きに対し、三木派、それから先生はどのように対応されたのでしょうか。
3. 一方で、野党の側も5月に公明・民社・新自由クラブ・社民連の党首が会談し（7月、9月と会談を重ねます）、中道結束で一致します。こうした動きには何か関係しておられたのでしょうか。
4. この年6月、元号法制化促進議員連盟が設立され、10月には閣議で元号法制化が決定しました。この問題についてはどのようにお考えでしたか。
5. 福田内閣は、米国との防衛協力のあり方を決めた日米ガイドラインを策定したのをはじめ、有事法制の検討に入ります。当時幹事長だった大平氏などはこの動きに反対の意思を表明しますが、三木派や先生はどのようなお考えだったのでしょうか。
6. 78年8月、日中平和友好条約が調印されます。覇権問題で難航していた交渉がやっとまとまったわけですが、先生ご自身はこの平和友好条約をどのように評価されているのでしょうか。
7. 78年11月、自民党総裁選挙が公示され、福田・大平・中曽根・河本の四氏が立候補しました。三木派からも河本氏が出馬されたわけですが、三木氏の後継として最終的に河本氏に決まった理由や総裁選の状況、予備選が大平圧勝となったことについて当時どのように思われたのか等をお願いします。
8. 79年早々、グラマン社による航空機不正取引疑惑が発覚し、東京地検の捜査が開始されました。また自民党が疑惑の対象になったわけですが、このときの党内の状況はいかがでしたか。また、ロッキード事件のときは三木総理が徹底的な真相究明を求めて結局田中元総理逮捕という事態になり、自民党の反三木運動につながったわけですが、グラマン事件についてはどのように対応されたのでしょうか。なお、このとき先生もよくご存知の松野頼三氏が国会で証人喚問に立ち、そのあと議員辞職しています。この点については当時どのようにお感じになられたのでしょうか。
9. 上の問題とも関連しますが、このとき、E2C予算削除・凍結をめぐって与野党が対立して国会審議が中断します。予算凍結で收拾するものの、衆議院予算委員会は一票差で79年度政府予算案を否決、本会議で一四票差の逆転可決（三一年ぶり）となります。このときの国会対策には先生も関係されたのでしょうか。

10. 79年6月、新自由クラブから西岡幹事長が河野代表と対立して離党、以後4議員が離党し新自由クラブは一気に弱体化します。西岡氏は先生と大変親しいと思いますが、この動きに関しては何か関係されたのでしょうか。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。次回は9月の解散・総選挙の問題からお願いします。

■総裁公選と党員獲得1（党員獲得競争）

伊藤 前回は文部大臣としてのお仕事の話を伺いましたが、今日は党関係のお話を伺おうかと思います。最初に、総裁公選ということで党員獲得が至上命令になったときのことを伺います。このとき急に党員を増やしましたが、あとでいろいろボロが出たりしましたね。猫の名前だったとかいう話もあります。もちろん三木派がものすごい党員獲得をやったわけですね。もちろん三木派もおやりになったと思います。先生はこのときは、どうでございましたか。

海部 まだその頃は三木さんがいろいろなことを考えておって、「党員が入って総裁公選はきちんとやらなければならん」と。

「事（こと）志（こころざし）」と反して」という言葉が世の中ではよく使われますが、あれこそまさにそうだと思います。「諸悪の根源は総裁の公選のいまの制度にあるんだ」と、三木さんはいろいろなところで話していたんですよ。

僕らは、「諸悪の根源ではない。投票する一票の作り方にいろいろな手練手管を使うから、そこが諸悪の根源になるんだ。そこさえきちんと考え直せば、党員が投票するということは、そう悪いことではないと思いますよ」と言うと、「いいことです。いいことだから、それをきちんとやるためには、もっと君、党員を増やしなさいよ。一握りの党員ではどうにもならんから」という。

ところがその時は、上には上があるもので、竹下さんなんか集めたやり方というのは、絨毯爆撃ですからね。みんな、市議員、村会議員クラスにまで降ろして、名簿を取るわけですね。その時非常に不明朗なことに、名簿は出すけれど、党費を誰が出したかという立替党員の問題が起こってきたんです。けれども、それはそれ、これはこれで、こっちに置いたんです。それで結局、あの最中から僕らが反対すると、竹下さんあたりが言ったことは、「海部さんね、

将来政党が本当に国民の批判から離れて、自分たちで集めた本当の浄財で党を運営しようと思ったら、党員を増やす以外ないな」ということを言うんですね。

伊藤 まつとうな論ですね。

海部 そう、ですから議論したら勝てつこないんですよ。それで、これをやれよ、というから、やりましょうと。

伊藤 もともと三木さんの主張ですしね。

海部 はい。そして、どこでどう事志と反するのか知りませんが、やってみたら、途中・中間は省略して結論を言いますと、党にものすごい党費収入ができたんです。そして、その党費収入で党が運営できるまで行くはずだったんですね。ずいぶんお金ができたことは間違いない。ただ、そのお金の使い方に後日問題が出てくるんです。

まず集め方というのは、それで集まったわけですが、先ほどもじくもおっしゃったように、調べてみたら、タマさんやミケさんがおった。みんな、要するに偽名なんですね。一人ひとり説得して口説いて取ってきたのならないが、そうではない。

僕らはその頃、まだどちらかというと、そういう知恵が働かなかったほうだから、自分の後援者を集めて、「今度こういうことに制度が変わった。みんな海部俊樹を可愛いと思って今日まで育てくれたんだから、今度は党員になつてくれ」と言った。あのとき二千元とか三千元とか、お金が要ったんです。「すみませんけれど、お金もつけて、党員になってください」と言つて、「名前を」書いてもらつて党員づくりをやつておったんです。

けれどこれは非常にスピードが遅い。それで僕らは困った。どうやったら、そんな、人が言うようなところまで達するだろう。けれどもやはりやらなければならんし、みんなやつておるといふんだからやりましょうと言つて、始めたんですね。だから本当に初めのころの人は、自分で署名して、自分で党費を払った。最初は三千元、高いから二千元にしろとかいう議論になったと思います。そうやって「お金も」取つて、人を集めるでしょう。集めて、持っていって

出すと、意外に少ない。恥ずかしいぐらい少ないわけだ。

それで、やつぱり田中派がようけ集めておる。田中派は、絨毯爆撃で行けという命令を出している。僕らはそれも額面通り受け止めて、みんな署名してお金ももらって入れた党员だろーと思つたが、たくさんできてゐるわけだから、「いい加減なことをやつて集めてきたのと違うか？ 犬や猫の名前書いて」なんていう話があつたところから新聞にもちよいちよい出ましたね。そういう立替党员、幽霊党员というのがだいぶあつたことは間違ひなかつたんですが、それまで党员集めというのに汗を流そうともしなかつた党が、汗を流して党员集めをやつたし、われわれ自身はよかつたと思つて、努力をしたんです。

ただ、そこから先でちよつと間違ひが起つたのは、「ちよつと少なすぎるから、もつと増やしてくれんか」という指示が来るわけですね。特にあゝのとき、三木さんから言われると、そうだ、たくさん作つてやらなければいかな、と思うでしょう。「どれぐらい作るんですか」というと、「君の得票数の何分の一ぐらいがいいだろう」と言われるんです。そこで困つたのは、得票数のといつても、僕の場合は、票だけはたくさんもらつてゐるとしてもお金はそんなにもらつておりませんから、調べればわかるように。正直なところを話して、それまで集めた人は、お金をもらつて党员になつてもらつたんですから、あるとき掌を返したように、「急に増やさなければならんから、ここから先の人は党費を払わんでもいいですよ」なんて言つたら、こちらがガタガタになつてしまふ。

伊藤 もらつた人から、なんと言われるか。

海部 だからそんなことは言えませんか。「初めに出してくれた人は真面目な人だ」といつて、いろいろ僕なりに抵抗したんです。「だからできるだけにしてください」と言つて、集めた。そして僕のほうは、どれだけ作つたかしら、とにかく万に届かなかつたんです。何千票という台で終わつたんですね。

伊藤 やはり後援会の人ですか。

海部 僕の本当の後援会の人を入れた。後援会の人で、それまで入つてゐる人は、もう党費も払つた経験者なんです。そこで当時、青年会議所とかいろいろなところによく呼ばれていくから、「甘えた気持ちでお願いするけれど、みんな党员になつてくれ」という。そこで配つて、党员になつてもらいますね。そうすると必ず出る質問が、「メリットは何がありますか」ということだ。三千円なら三千円払つて、党员にはなつてあげるけれど、党员になつたといつて、メリットは何があるかということだ。それで、そういうことをなくするためにはわれわれはいま苦労してゐるんだけど、「メリット、お返しを初めから期待された人の票は要らないだ」と偉そうなことを言えるほど強ければいいけれど、そんな強くないから、何か考えよう、といつた。

そこで、デパートの名前まで出してはいかんかもしれんな、地元だからわかるな、「党员証を出した人には何かメリットをつけてくれ」といつたら、「どうしたらいいんですか」というから、「あなたのところはお得意さん割引をいつもやつてゐるだろう、あれに準じたことをこれにも考えてくれ」といつた。

いまから考えれば、これも変な利益誘導で、よくないことなんだ。そうでしょう。当時バレなかつたからいいけれど、バレたら「鈴木」宗男さんになつちやうわけだ。

楠 それは、愛知の一部の地域でそういうことをやつたわけですね。海部 愛知のあの辺で、メリットがなければ地元の人を説得できないし、この制度、仕組みが始まるころは、私はまだ全国規模のそんなことに携わつていませんでしたから、地元を固めなければならん。伊藤 でもこれは総裁選挙に間接的にメリットがある。それから当然、自由民主党の機関誌をもらえるわけでしょう。

海部 そんなことをいつたつて、「自民党の機関誌なんか読んだつてなんにも新しいニュースはないし、時代遅れにならんように」と言われて、エライ苦労したこともありました。そこで自民党で、「りぶる」という当時としては非常に洒落た名前の婦人党员中心の

雑誌を考えて、それを差し上げましょうということにした。僕は最初の初め、妙な行きがかりで、編集長というか、責任者になったんです。編集はできないけれど。だからあの「りぶる」という雑誌の第一号は、海部俊樹さんと加山雄三さんの対談とかね。「りぶる」の裏には、りぶるの愛読者には、ここそここの美容院は〇・何%まけますとか、いろいろな特典を考えたものですよ。

伊藤 それは機関誌局か何かで出したんですか。

海部 いや、青年局でやった婦人専門の雑誌なんです。そんなことで、あれやこれや考えながら、どうやって党員を党費付きで集めるかということをやりました。

■総裁公選と党員獲得2（党員、党友、職域支部）

海部 けれども、そうこうしていると、一部の人から、「いや、おれはそのへんの一山いくらの党員とは違うんだ、今日までどれだけ君のところにも貢献したかわからん。党員にならんでもいいから、もっとほかのことを考えろ」と言われた。それじゃあ、党費が二千円だったか三千円だったか、それを月々一万円にしたら、お金持ちの偉い人しか参加してこないということ、一万円で、「党員」ではなく「党友」というのをつくったんですね。これには総裁選挙の投票権は、党員と一緒に与えます。一万円だから二票だとか十票だ

という人がおったけれど、そんなことをしたら計算ができませんからね。投票制度というのは、党員であろうが党友であろうが、認められた人が一票ということで組織をつくったんです。

楠 党友というのは党員よりもっと幅広い、一段下のものかと思っていました、逆なんですね。上級党員みたいなものですか。

海部 上級党員というと、一般の人が怒るから。それから金持ち党員というのはいかん。要するに一般の党員は二千円払って入って投票しているんだけど、われわれはもっと昔からちゃんと応援して

おったじゃないか、という自負心のある人ですね。だから変な話だが、中小企業の社長級になると、みんな両方に登録して、党員証と党友証と、二枚ずつ持っているんです。「どっちか片方でいいんだ」というと、「いや、だって君が両方入れといたじゃないか」という。なるほどそう言われれば仕方ないな。

佐道 両方入るといふこともできるわけですか。

海部 できるんだ。あのころは言い方は悪いが、なんでもいから党費を払って住所氏名を登録してくれる人を党員様にしたわけだ。その党員のところには機関誌が配られるようにしたわけだ。機関誌といっても新聞と違って、タブロイド判四ページで隔月の発刊ですから、全然質も意味も違うけれど、それが届くようにしたんです。党友のところにはもちろんそれが行きます。そのうちに、今度は機関誌と党友・党員への手数料とかを計算すると、もう党費の何割かが完全に消えてしまう。もうちよつと高くしなければならんといつて、党費の値上げ問題も当時はときどき、くすくす議論したんですが、それなら党員が減ってしまう。「じゃあ、おれのところから入れた党員は全部引き揚げる」と言うような者まで出て来た。

そこで、初めは本当に真面目に考えた。私はそのころ党の何をやっていたのかな、党友を作るのに、古美術鑑定協会、全国組織委員会にまとまって入ってくる団体があるでしょう。それを、党員では安すぎるから、全部党友になってもらおうというので、〇〇支部、△△支部という支部の名前にして、全部党友にしたわけです。そうすると、例えば環境衛生同業組合、喫茶同業組合党友になる。愛知県で環境衛生喫茶部は全部党友になったんだと決まると、党友の紹介欄に海部俊樹と書いてある。そうすると、そんなところ断われ、こっちの名前で入れといて、近郷近在から入り込みがあるわけだな。

伊藤 よその議員さんから、ということですね。

海部 よその議員からだ。「おまえ一人でそんな全部集めちゃ駄目じゃないか。少しは分け前をこっちにおいとけ」ということになっ

てきた。その裏をいうと、あのころはバックペイ、リベートをつけたからだ。それが悪かったんですね。だから一人三千円の党員をとつてくると、例えば三分の一の千円だったと思うな、紹介議員のところにバックする。いまはどうか知りません、当時の話だ。

伊藤 じゃあ立て替えれば千円で済む。

海部 そうそう。どうせおまえのところには還付金が来るから、とって、それをいちいち組合員に全部返す必要はないから、それを取って置いてこちらで使おう、となる。時が変わっても、大蔵省の積み立てのあれと同じだ。そんなことがあったことを思い出します、党員はうんと増えたんですよ。

楠 いま伺っていて気がついたんですが、そのころから自民党では職域支部ができたんですか。

海部 つくったんです。

楠 地域支部だけではなくて、産業組合とか宗教団体とか友好団体を、まるごと党員にしてしまいましたね。

海部 全国組織委員会の中にまるごと取り込んだわけです。

楠 それはそのころ、できたんですか。

伊藤 床屋さんの組合とか、みんなそうですね。

海部 そうですよ。三千円の党費では申し訳ないから、一万円もらって、会員ではなくて会友にしよう、結局党友ですね。あれやこれや、試行錯誤でした。結論は、党員の基盤をどう増やせばいいか。そしてその党員を集めてきた県連。昔は県連と地域町村支部というのがありました。県連支部に三分の一、町村地域支部にどれだけ、とだんだん置いていくから、たくさん党員がいれば、党の支部は潤ったということですね。

そんなころ、しばらく経つうちに気がついたのは、これはひよつとすると県会議員がみんな力を持ってしまうのではないか。県の支部に降りていくし、県会議員が紹介議員になって地方の小さい支部を作る。そこで何十票、何百票と投票権をまとめて持っておれば、これまた脅すいい武器になるじゃないか。だからそれも、事志と反

してきた一つの結果だったと思いますね。

伊藤 名簿はちゃんと県連を通して、党本部まで行くわけですか。

海部 ということになっているんです。

伊藤 現実の問題としてはどうですか。

海部 現実の問題は、真面目に来ているところもあるし、来ていないところもあったわけですね。要するに数だけ責任を持って申告しなさい、ということですね。

伊藤 数とお金ですね。

海部 お金がいくら、ということですね。もう一つは、そんなところ、地方に行つて「政経文化パーティ」というのを始めたんです。あのお金も県連をうんと潤した。そしてあれは、三分の一が県連の取り分、あと三分の一が紹介した職域団体の取り分が何かになっていまして、本部にはあまりたくさん来ないということがその後だんだんわかってきた。それは、これが始まったころです。

この党員募集、党員獲得を始めたころに、野呂恭一さんという人がおった。野呂恭一さんが広報委員会のこちらの担当者で、総理とか名のある大臣とか党の三役に、色紙を十枚ずつ書けとか、書を何枚ずつ書けとかいって、そういうものを帰りに福引きで差し上げますということまで考えた。そのうちに、さしもの書をやたらに配つたら有難味がなくなるから、あれはやめようということになった。三、四回は配りましたが、それぐらい汗を流して苦労して、党員募集と資金集めをやったということです。

伊藤 これ「党員」は一回入って、リベートしてくれないとあつというまに減っていくわけですね。

海部 はい。公選がないというムードがざつと流れると、ガタガタと党員の数も減っていくことは事実でしたね。そこで知恵者が、投票権は会費を納めたら与えるというのではなくて、連続して会費を納め続けていなければいかん、ということにした。それは何年にするか、いろいろ議論の結果、初めは三年連続して納めた人を投票権者にしようということになった。そうすると、党員は三年連続だ

けれど、党友はどうか、二千円の人は六千円だけれど、一万円の人は三万円か。それは百も承知でなつてもらっているんだし、何の誰某と看板を掲げて商いをしていращしやる人だから、払える分野で、分相応の支援をしてもらうのが民主主義の支えではないか、というような屁理屈をいろいろ考えて、丁々発止をやつて、スタートはそれに決まつたんです。ですから特に党員については、連続して党費が納められていることが投票の条件になった。

伊藤 立て替える人にとつてみると大変ですね。

海部 だから覚えておつて、別帳簿を作つては、これとこれは立替だから、これとこれも払つておかなければ、とやつて、一回で済むと思つたら、二年目も三年も払わなければならん、どうもならん、そういうところからポロポロと洩れたところありましようし、締め付けをやつて入れたところもあるでしょうね。比較的安定的に推移したけれど、総裁公選の前にガタツと減つたことはありましたね。またあわてて入れるけれど、入れても今度は投票権がないわけですから三年連続という規定にしておけばいい。

■総裁公選と党員獲得3（田中軍団）

伊藤 やはり一番問題なのは名簿だと思ふんですね。名簿をどこが握っているか。海部先生が集めたところは海部さんが持っているのか、それとも県連が持っているのか、それとも党本部が持っているのか、それはどうなんですか。

海部 僕の集めたものに関する限りは、僕のところにも名簿がありましたし、党のほうへ提出してあるものがあります。それはもちろんコピーをとつて出したものです。それから本当は出身母体というか、町村単位のところにもなければいけないはずですね。

伊藤 例えば愛知県の、先生の選挙区に行つても、今度は市町村会議員から県会議員から、みんな地盤が入り組んでいるわけですね。

それぞれの支持者がいる。そうすると、同じ自民党員でも敵だ、という関係が絶えずあるわけですね。だからこの名簿を誰がどう持っているかというのは、かなり深刻な問題ではないですか。

楠 それに、後援会の人間にまず優先的に依頼して党員になつてもらうわけですね。そうすると、自分の後援会のメンバーを公表してしまうことになりまふね。それは議員にとつてみれば怖いことですね。だから本当に正直に申告するのか、と思います。

海部 それはあとから話すけれど、みんながしまつた、と言つたのは、大平票がいっぱい出るようになった。竹下と佐々木——、個人名はやめておこう。

伊藤 名前を言つてもいいですよ。当時から言われているんですから。

海部 「名前を言うのは」よくないわ。それ「名簿」を持っているのが一部であると、きわめて不公平なことが起こるんですね。

伊藤 総裁選挙の時にそれをやつたでしょう。

海部 やつたんだ。党本部の事務局長室の横の部屋に積んであつたそれを、「あんなの見たつて猫に小判のようなものだ、君らのようなものには」と言われたことがあつた。「それはどういうことだ」と聞いたら、「あれを何区、何町まで拾つて、細かくコピーしたのを持つて、一軒一軒全部つぶして歩ける人がプロなんだ。そういうプロ集団はよその派閥にはないはずだ」という。それで、あのころは田中派はなんといったかな。

伊藤 田中派は田中派でいいでしょう。

海部 田中派の秘書団が集められた。

伊藤 秘書団というのはそんなにたくさんいるんですか。

海部 議員のところには、僕のところだけだつて、いま一人、二人出せと言われても、職務に差し支えないだけはいるわけです。それから議員会館のほうの部屋には四、五人おつて、郷里から陳情ごときを持つてくると——。これはあまり詳しくしゃべると、宗男さんのな政治になつちやう。言われたことをおれが全部聞いて、おれが全

部取り次ぐわけにはいかんから、おまえら行ってやってこい、ということ、やってくる。その代わり、誰とどこに行つて、何の話を頼んで、どういう回答をもらったかを報告して、帳面につけておいて、おれがあとからチェックするから、ということをやってきたわけですから、みんなたくさん「秘書が」おるんです。田中派なんていうのは、それがたくさんおったんじゃないかな。

伊藤 それを各議員の秘書団を全部集めて――。

海部 そう、それで歩け、ということになる。それが党員を増やすときの大きな原動力にもなったわけですね。だから、田中派の秘書団が、票の掘り起こしが一番できるといことが語り草のように言われるのは、そういう手足が日頃から歩き回つて、どこに行つてどこの筋を押したら引くかということがわかつているからだ。

伊藤 それがプロ集団ということですね。

海部 プロ集団ですね。

楠 田中軍団ですね。

海部 それに比べて、差し障りがあるけれど、お公家様集団なんていうのは、世界の経済ばかり心配しておつて、世の中のためにならん（笑い）。だからどっちが国会として大切な仕事かというのは、あのころまさに主客転倒したな。その言葉をいみじくもわれわれに語り続けておつたのが、「政治は力だよ、海部君。力は数、数は金だ」。

伊藤 それは田中さんですか。

海部 田中派の五箇条のご誓文だ。

伊藤 現実に七八年の総裁選挙で大平さんを圧倒的に強くしたのは、田中派のプロなんですね。

海部 そうなんですよ。あのころはまだまだ竹下、金丸の亀裂が生じる前のことで、全部二人が相談して、全部二人で歩くでしょう。その下に秘書団が全部ついているでしょう。いまの青木幹雄、あの組はみんな竹下事務所のナンバー4かナンバー5の秘書ですから、それが一所懸命走り回つて、修練を受けたわけですね。

佐道 秘書団がそういう活動をして予備選をやったということですね。それは予備選が始まってからわかったことですか。

海部 それは妙なもので、われわれ自身も動くけれど、どうもこのへん「身体の一部」に何かとまっているのではないか、蚊がくっついていてのではないか。自分の組織、自分の人脈の末端から、思わぬ反応があつて、そこを逆調査させて、「どんなのが来た、誰が来た？」というところ、「こういう人が来ました」「そうか」となるわけだ。それは圧倒的に多かった。手足もたくさんおつた。それが動き方も上手だった。

伊藤 じゃあやつぱり名簿は危なかったんですね。

海部 危なかった。だから「事志と反して」と申したけれど、最初は、党を活性化させるためには、多くの人に参画してもらうことだ、一部の者が集まつてがさがさと話して決まっていくなことはよくない。一部の者が話し合っただけではならん、射程距離を超えて、大衆の世論が決める制度でなければならんというのが、三木さんの考えであつた。そういうことをわれわれは一所懸命教わっていたわけだ。

そうすると、そう広くなつても、広くなつたら多々ますます弁ずで、広くなつたものをまとめて集めるにはどうしたらいいか、ということまで考えていたんだな。だから失敗したわけだ。

■河本敏夫について1（三木派の後継か）

伊藤 このときの総裁公選では大平さんが勝つわけですが、このときは三木派はどうしていたんですか。三木さんを――。

海部 どうしたんですかと言われても、結果を言つと、惨めに負けた。それだけ本気になつて動かなかつた。本気になつてということ、は、やり方とかお届け物を入れて、ですよ。

伊藤 三木さん自身も、事志と違つたな、という感じなんですかね。

海部 そうです。あの人の持つていた強烈な自信は、「大衆は馬鹿ではない、国民大衆を信頼しなさい。初めから裏をかくようなことや、いわんやお金でもって世の中が動くというのは慢心だ、思いがりだ、そんなことを思っているのかん」という、あくまで正論で、われわれを口説いて、やらせていたんだな。

伊藤 ちよつと覚えが悪かったですね。

佐道 大衆と党員は違うんですね。

楠 このときは、しかし三木派からは誰も出ていないでしょう。

佐道 河本さんが出ていませんか。

海部 それはその後ではないですか。

伊藤 このときでしょう。

佐道 このときは、福田さんと大平さんと中曽根さんと河本「敏夫」さんが立候補しています。

海部 その時は三木さんが、「あれでやってやれ」と言われた。

伊藤 「やってやれ」というのはどういう意味ですか。

海部 河本さんを応援してやってくれということだ。河本さんの票作りをわれわれもやったということだ。

伊藤 要するに派閥の代替わりをしたということですか。

海部 結局、代替わりをせざるを得なかったんだな。

伊藤 せざるを得なかったというのはどういう意味ですか。

海部 それは、河本さんがその気になっているから。

楠 なんで河本さんが三木派の跡を継ぐことになったんですか。やはり資金的な問題ですか。

海部 まあ半分はそうでしょうね。ベリ・インポータント・イシューだけけど、ノット・オンリーそれだけじゃない。ほかにいろいろあるんだ。三木さんは金だけじゃない、理想的なものを絶えず掲げて、これがなくなったら世の中真っ暗だという人だから、せめて河本君ぐらいのやつにやらせないか。あとのやつだと駄目だ、という比較検討をして、われわれにも河本をやれといった。

伊藤 河本さんというのは三木さんの直系なんですか。

海部 どうなんでしょう、直系なんでしょうね。

伊藤 これまでのあいだ、海部さんのお話の中にあまり河本さんの名前は出て来なかったんですが。

海部 あの人には派内でも金持ちで、三木さんのところに金を運んでいる人で、「笑わん殿下」という名前があるぐらい、われわれと笑って飯を食ったこともないし、あんなものは放つとけというようなことだ。

その当時、後に衆議院議長になった伊藤宗一郎なんかがおれにこぼした話は、「もうちよつと、海部さん、あんた方がわれわれのところに来ると、せめておれでも褒めて頼んでくれるけれど、河本さんというのは何だ。計っておったら三十分近くしゃべったけれど、みんな経済の話ばかりで、最後に一言だけ、『そういうわけで今日は伊藤君に頼まれてきたんですから、よろしくお願いします』と、これで終わりだ。これではわからんよ」という。要するに政治家としての心の触れ合いというものをあまり感じなかった。

それまでのあいだは、あの人は三光汽船の社長と二足の草鞋で、いまにして思い出せば、児玉誉士夫に食いつかれたり、いろいろなところで食いつかれた。香港のほうに便宜置籍船の会社をつくって、そのペーパーカンパニーへ、自分のところにあるタンカーの大半を移した。これがいまの世の中だったら脱税だな。当時は節税といういい言葉が出てきたから、節税といって乗り切ったけれど。そういうことがあったから、自然僕らとも接点がありません。日頃、飯を食ったり、思想信条に共鳴したりということはない。

佐道 そうしますと、先ほどの三木先生の理念はどうなるんでしょう。河本さんが財政・経済通という印象は一般的にもあると思いますが、河本さんの政治理念はよくわからない。三木さんが河本さんに、というのはなぜでしょう。

海部 それは後日の話になるが、彼が総裁公選に立候補する前に、全国行脚をしたり、いろいろしましたけれど、そういうときに三木さんに教わったセリフだなと思うようなことを言い続けていた。要

するに、「人間は、特に政治家は一本のロウソクたるべし」という河本敏夫のロウソク論というのがあるんだな。ロウソクはみずからの身を焼き焦がして、あたりを照らす。ロウソクは細いけれど、いつまでも燃え尽きるまで、身を粉にして明るくする。

伊藤 そうですか、自分の財産を全部注ぎだすわけですね（笑い）。やはり派閥の中でも特に、例えば田中派の中で竹下さんがだんだんグループを作っていたような感じでは全くないわけですね。

海部 全くないですね。自分でグループを作って、跡継ぎにしてもらうなんてまったく思っていなかった。だから逆に言うと、松浦周太郎さんとか井出一太郎さんのほうが、われわれにとってみればうんと身近だし、相談しやすい先輩である。しょっちゅう国会にも顔を出しておったから。そういう関係は、井出、松浦を除いてなかったでしょうね。

だから三木さんのものの考え方とか思想信条を受け継いでいないとはいいません、そばにいてあれだけやったんだから、河本さん自身も自分の番になったときはそういう話をきちんとしましたけどね。

伊藤 ただなんとなく、ちよつと異様ですね。

海部 ちよつと異様だというのは、初めにちよつとニュアンスがわかるように、それがすべてではないけれど、重要な部分があったではないか。これは現実と妥協しなければならんということが、政治の世界では必要だと思えば、ああいう役割ができる人が必要だったんじゃないかな。

伊藤 その河本さんのブレーンになるような人は誰なんですか。

海部 だから、あまりいい人じゃないですか。

伊藤 でも派閥の長になったら、周りに人がいなかったら困るんじゃないですか。

海部 それは自分自身で独自に、自分の主義主張に合う学者だとか、三光汽船の岡庭「博」さんとか、生え抜きの「人を集めた」。時の政権や時の政策に逆らってやるのがとれるんだ、というから、少数

勢力で、いまでいうベンチャービジネスの社長といったようなものですね。

「六万トン級の小型の船が大事です。私はそれを何百隻つくりました」なんていう昔話を聞いたので、「どうしてそういうことをやるんですか」といったら、このへんは今日流だけれど、「お金を借りて船を造れば大きい船ができるけれど、いろいろなことに、ああでもない、こうでもないと言っていると口を容れられる、それはとても駄目だ。運輸省から金を借りてやると駄目だ」という発想なんですね、河本さんは。だから時の流れにいくらか反したと思うけれど、六万トンという、まことに小さい小型船だけれど、外洋船ではある。その外洋船をたくさんつくったという話をしょっちゅう聞かされた。

■河本敏夫について2（笑わん殿下）

佐道 このときに「河本さんが」立候補されて、三木さんが応援しなさいというところで、三木派内は、以後河本さんでまとまろうというのか、いや、やはり面白くないとなるのか、どうなんでしょう。

海部 あのとときは、「おやじがそう言うんだからしょうがない、やろう」ということだ。

伊藤 ふつう、そういうことがあると脱落する人もあると思うんですが、三木派の場合はなかったんですか。

海部 脱落するほど数がなかったな。

伊藤 そういったら身も蓋もないですけど、そうですか。

海部 最小派閥だ。せいぜいその危険があったのは森山欽司ぐらいだ。不平不満をぶうぶう言って、われわれを集めて、「ねえ海部君、もう時代が変わるんだ。たしかに今日まではああいう人も大事だけれど」という。さっきちよつと言ったように、伊藤宗一郎なんかもそうだが、「応援に来てもらっても言葉一つかけてくれないし、な

んのためにあんな人を呼ぶんだ。今度からあんた「『海部氏』」来てちょうだいよ、褒め称えるから」とみんなが言う。そういうやりとりをして、その後そういうことになったこともあるけれど、それはある程度派内にあった空気でありまして、どこにだってあるんじゃないでしょうか。

伊藤 それはあると思いますね。大きい派閥だったら、そういう人たちが出て、ほかのところに行ってしまう。

海部 出て行くほど、三木派は数が大きくなかったということですよ。

楠 「笑わん殿下」というのが河本さんの呼び名ですが、全然笑わない、愛想のない人だったそうですね。

海部 「なぜ笑わんのですか」と聞くと、「面白くないのになぜ笑うんですか」という。「そう言われたら身も蓋もない。けれどイメージチェンジをやらなければならぬから、あなた笑いなさいよ」と言ったらけれど、笑い方も上手じゃないんだ。だから「皆さんは『笑わん殿下』」といって、河本さんの笑った顔を見たことないだろうけれど、今日は皆さんにお目にかかって、生涯初めての総裁公選のお願いをしているんだから。皆さんが拍手をして聞いてくださるのは嬉しくないはずがない、これは笑えるはずだ。河本先生、立って笑ってください」と言ったら、立ってまことにぎこちなく笑った。

それを本当にやっただんですよ。あまりかわいそうだったから、「あれはやらん方がいいですから」と言ったら、「いやいいですよ、あれで」といった。逆に言うと、非常に生真面目というのか、面白くないのに笑って、人をそのことによって寵絡するのはよくないことだと思っているんじゃないですか。

伊藤 変わった人ですね。政治家とは思えない。

海部 政治家とは思えない。だからどうして、三木先生、承知の上で選んだんでしょうが、と言ったら、そうだという。

佐道 河本さんはどうしても経済とか財政の話というイメージがあるんですが、河本さんは、三木さんが語るような、こういう国にし

たいというようなビジョンがあったんでしょうか。

海部 結局、今流に言うところ、国民生活を豊かにすることが政治の要諦だ、ということだ。国民生活を豊かにするといっても非常に抽象的だが、三木さんがあれしたんだろうけれど、「道路一本作るにしても、橋一本通すにしても、それによって、その地域の発展に役立つんだ」という。公共事業積極論者ではなかったけれど、そういう言い方をした。例えば神戸に第二空港を作るとか、神戸港を近代化しようというときに、「それにはお金がずいぶん要るけれど、そのお金もこの地域の活力と活性化から初めて出てくるんだから、要は景気をよくしなければいけませんよ」というようなことを、それこそ面白くもおかしくもなく、淡々と大学教授のように説かれるものだから、盛り上がり欠けるんだな。

佐道 河本さんの財政経済政策というのは、公共事業をどんどんするということではないということですが、基本的には景気拡大、積極財政論者だったという印象があるんですが。

海部 積極財政本位であるけれど、その積極財政の担い手の第一は、中小企業の力をつけること。その地域地域の企業が活力を持たないことには絵に描いた餅になる。

あの人で際立っていたことは、予算編成の前になると、政府がだいたい、今度所得税減税を三兆ぐらいやらなければならぬとか、三兆五千億やらなければならぬというでしょう。「それに対して河本氏は」びつくりするようなことを言うんだ。「私は十兆円は、いえると思います。十兆円の減税をやって、世の中に刺激を与えないといけません」。だから河本積極財政論というのがあのころから定着して、新聞記者がそういうことを言ったり書いたりするようになったということです。

佐道 十兆円の減税なら、減税した分の財政をどうするのか、ということが当然出てくるわけですね。福田さんから大平さんに替わるといふ流れの中で、政治の大きな流れは、今ほどではないにしても、行財政改革という問題が出て来ている。とにかく財政再建というの

はこの時期からすごく大きな課題になって出て来ますね。河本さんは後に行管庁長官とかをされますが、そういう流れに棹を差すような感じではないでしょうか。

海部 そうかな。本人はちつともそんな自覚も意識もなしに、信じ切って、「それをやらなければいかんから。減税が誘い水のようになって、社会にやる気と元気を与える源になるならば、経済は刺激を受けて蘇っていく。病は氣からというから、氣のほうだけまず治して、それから力が出てくる」と、こんなに力を入れてうまく話さないけれど。メリハリが利いていないから、聞いていてもわからんわけだ。まことに淡々と、ニコリともせずに話す。

伊藤 それでよく派閥の長になりましたね。本人はその氣だったんですかね。

海部 その氣だったんでしょうね。

伊藤 やはり総理総裁をめざすと。

海部 それがわかっておるから、日が経ってから、河本さんは最後までそういう思いがあったんじゃないですか。

伊藤 さっきのお話だと、河本さんは自分の会社からお金を持ってきた、三木さんに献金するということですね。今度自分が派閥の長になったら、どこからかお金を集めるという才覚はないでしょう。

海部 そういう才覚は、結局自分のところに有り余るほどあるから、それをちよつと持って来たらできる、ぐらいに思っておったんじゃないですか。だから児玉誉士夫とああいふ裏の取引をしたり、ベネズエラの船会社とああいふことをやったり、それはいろいろなことがあった。それ以上しゃべれませんがね。ずいぶんたくさんの人と取引があった。

伊藤 一応は親方になったわけですからね。

海部 そうです。

■中道四派と三木派

伊藤 ちょうどそのころ、公明・民社・新自由クラブ・社民連という中道四派が結束します。自民党と対抗していると思うと、自民党の中のどこかに、ちよつと働きかけなければならぬ。これは力学的に言えばそうだと思うんですね。いちばん狙われそうなのはたぶん三木派ではないか。やはり中道からいろいろお誘いがあったのではなからうかと思えます。三木さんに直接か、海部さんあたりを口説かなければいようがないのではないかという氣がするんですが、そんなお話はございませんでしたか。

海部 あのころは、佐々木良作とか春日一幸とかね。特に春日一幸なんかからは、「海部君、しんみりと話をしようよ」なんて、ときどき誘いかけられた。選挙区も近いし、一緒によく話も聞いた。そういうときに三木さんに、「こういうことを期待している組もおるから、決心しろよ、とくとよく話しておくように」と言われたことがあったな。

佐々木良作さんなんかは、春日さんほどぎつぱらんではなかったけれど、そういうことで話をした。そして誰につなぐと言ったかな、「誰かとつなぐから、誰かと会って話してくれんかな」といったことが、ままありましたね。僕も佐々木良作のところまでは、当時は暮夜秘かにおつかいに行つたこともありますから。

伊藤 それくらい何うと、なんとなく何かあったなと思いますけれどね。

海部 あつたんだ、本当にあつたんだ。そういうことがまたすぐ地獄耳でバレちゃうんだ。その裏の話というのは、バレるのが早いんだな。

伊藤 そういふのはどこからバレるんですかね。隠密がいるんですね。新自由クラブの人たちというのは前からの知り合いですね。

海部 前からの知り合いどころか、半分以上は身内だったわけですからね。身内になって、三木内閣ができるころには、ある意味で非常に頼りにしておつた若手グループが造反を起こすわけですからね。伊藤 あの党は三木内閣の時にできるんですからね。

海部 だから、それだけは本意だから止めてこいというので、呼び出して止めたり、密会をやっている場所まで飛んでいったり、いろいろしたんだ。結局、中心人物は河野洋平だと言われているけれど、焚きつけたのは田川誠一ではないかと思うな。その尻馬に乗って、いろいろ走り回って火をつけて歩いたのが西岡武夫でしょう。

伊藤 先生は西岡さんとはかなり親しかったんじゃないですか。

海部 かなり親しいし、今でも親しいですよ。脱線していかんけれど、いずれ出てくるかもしれないかもしれませんが、加藤紘一が失脚と決まったときに、アズ・スーン・アズに電話をかけてきたのは西岡で、「よかったですね、総理」という。あのころの恨み、思いをいちばん持っているのが西岡だ。

私が「西岡君、総務会長に来て、手伝ってくれよ。死ぬかもしれないけれど、井出さんと一緒だ。『きわまらばまなこをつむりて』という心境になれよ」と言ったら、「もちろんそうですよ」と言っておった。ここから先は微妙だが、YKKができた理由は、西岡を総務会長にしたことも一つの大きな原因にあるんですよ。加藤紘一を外したんだからね。宮澤さんまでが、「海部さん、宏池会を足蹴になさるんですか」という。「足蹴なんかにしないよ」と言ったら、「加藤紘一を総務会長にするならしてくれ、西岡さんでは宏池会は困ります」という。「困る困らんよりも、固有名詞は僕は聞きませんから。三役の推薦は複数でお願いします」というようなやりとりをした。宮澤さん本人までが官邸まで電話をしてきたぐらいだから、相当思い詰めておったんだらうな。

伊藤 その西岡さんが、やがて新自由クラブから出て来ますね。それを引っ張り出すときには、多少ご関係なさったんですか。

海部 いやあの人は、自分と派で決めると、非常に頑固ですからね。それ以上のことは申しあげたくないけれど、いろいろ話しました。伊藤 出るときに、ですね。

海部 はい、いろいろありました。

伊藤 いや、新自由クラブを出るときですね。

海部 そうですよ。

伊藤 あれは単独で出たんですね。

海部 あの人は何でも思いついたら電話をしてくる。単独でしか電話をしてこないです。

伊藤 電話ですか。

海部 電話です。その加藤紘一が「議員辞職したとき」、「これでよかったですね。ちよつと遅かった」とか言った。ただあの晩は、西岡は満ち足りた気持ちの声で電話をしてきたことは間違いないな。伊藤 恨みは深し、ですね。

海部 恨みは深し、ですよ。だからYKKといって、小泉なんてYKKのKのナンバー2のほうだったからね。だから西岡に言わせれば、いちばん悪いのは加藤紘一だと思っているから。

伊藤 新自由クラブの中でも西岡さんとはいいいんでしようが、河野さんとか田川さんとはあまりおつき合いはないんですか。

海部 僕は田川とは同年兵ですから、いろいろなところでおつき合があるし、三木さんのところにもちよこちよこ来ていましたから、おつき合いはあるんです。それからもう一つ、田川誠一というのは社労委員長になったことがありますね。僕は彼が、浜田幸一に国対でひどい目に遭わされようとしたときに、ちよつと中に入って助けてやったことがある。それぐらいの仲です。その後はこちらの期待通りは動きませんでしたけどね。

伊藤 全然、動きませんでしたね。自民党にも戻らなかったですかね。

海部 進歩党とかをつくったんですね。

楠 新進党で一緒になられたんじゃないですか。

海部 なりません。

伊藤 あの人は進歩党、進歩党、進歩党ですから。

楠 西岡さんとは新進党で一緒になりましたね。

海部 西岡とは、新進党でまた一緒になった。

伊藤 新自由クラブとの関係はそうでしょうし、さつきおっしゃっ

た民社党との関係はそうでしょうが、公明はどうですか。

海部 公明党は、あそこもまた懐の深い政党で、いろいろな出会いがあります。本当に本心がわかりません。よく新宿のほうに行くのと、一文字の漢字の名前のバー、クラブがありますよ。そこは全部筒抜けだと思って間違いないね。

伊藤 そういうところではやべると危ないんですね。社民連は何か関係がありましたか。

海部 社民連は田英夫に、いろいろなところで刺激を受けたり、激励されたりした。田に言わせると、僕が総理になる直前にその情報を僕のところに持ってきて「教えたとおりの、当たったろう」というけれど、あの人に教わった覚えがないんだ。だからそういう、ところどころまでは覚えがないが、そんなころ、よくレストランと一緒にいました。彼は孫を連れてたり娘を連れて夕食に来ていた。やっていることは昔の金持ちと同じことです。ゴルフ場をいくつ持っているとかね。シングルプレイヤーでありますしね。

伊藤 名家の人ですからね。

海部 名家だ。そして名家だというだけではなしに、いろいろなことがある。

■自由社会研究会

伊藤 そうすると中道四派とは、いろいろなご関係があったわけですね。

海部 いろいろところで関係があるわけです。というのは、もともと三木さんが、国民協同党だからでしょう。だから三つ子の魂百までで、大きいだけがいいことではない。正論をきちんと述べられる中道少数政党から三木さんはスタートしているわけだから。

伊藤 そうですね。だから自民党の主流派から言わせると、三木派というのは自民党のちよつと外側だと。

海部 亜流だと言いますから。

伊藤 あれはいつ裏切るかわからないと思つて見ているんですね。

海部 「どっちが裏切りだ」と言つて、僕はよく喧嘩したんですね。だつて村山を担いだのは裏切りの最たるものではないかと言つて。

伊藤 いや、それはそうですね（笑い）。

海部 それはそうですね。今日は「自由社会研究会」の二十五周年記念日だったんです。朝集まつて、みんなで例の朝食会をやつて、そのころの話をぼそぼそしてきたんです。

伊藤 それはどういう研究会ですか。

海部 自由社会研究会といつて、自由社会を盛り立てていこうという研究会で、今から二十五年前にできたんです。

伊藤 どういう顔ぶれなんですか。

海部 政治家では、当時から竹下、安倍「晋太郎」、中川一郎、やや至らないが海部俊樹。僕もスターティングメンバーです。それから財界のほうは、盛田昭夫、豊田章一郎。

佐道 すごいメンバーですね。

海部 毎月やっているんです。学者も入っているんです。初めて聞きましたか。新聞にもあのころよく出たじゃないですか。

ただ、今日も大笑いしたんだけど、当時の新聞で——「今朝の「自由社会研究会」で配付された、当時の新聞記事のコピーを持ってくるように秘書に依頼」。

伊藤 それは発会の時の新聞記事ですか。

海部 そう、誰が、ということが全部出ている。三塚博とか。

伊藤 それは自民党ですね。

海部 自民党中心でできたんです。

伊藤 中心といつても、今のお話ではそれしかないじゃないですか。

海部 自由社会を守ろうと言うんだから。

伊藤 民社も入っていませんね。

海部 民社は入っていません。入れようかと言つただけけれど、入

れませんでした。

楠 話はちよつと変わりますが、このあいだ国会便覧を見ていて気がついたんですが、先生よりも国政に早く出た方は三人しかいないんですね。

海部 そうそう、中曽根康弘と。

楠 中曽根、山中貞則、それから参議院から回ってきましたが宮澤さんですね。衆議院議員としては先生のほうが上です。五年体制に入つて先生は最初の当選組なんですね。自民党ができてから最初ですね。その三人は自民党ができる前からの人ですね。与野党を通じて、先生は上から三番目ですね。

海部 ある意味では三番目、ある意味では四番目。けれども、昨日もサッカーの決勝戦に行つたら、あの二人も来るわ、宮澤さんも中曽根さんも。来るけれど、面白くもおかしくもない顔をして、沈思黙考して見ているね。「先生、心情的にどっちを応援しているんだ」と聞いたたら、「それはうまい方を応援していますよ」と、これも当たり障りのない返事だな。おれはドイツを応援しているんだと旗幟鮮明だけれどね。

楠 それはドイツ友好協会の会長ですからね。

海部 会長だ。今日もラオさんが来ているから、ラオさんに会うわけだ。脱線はそのぐらいにしよう。

■三木派とマスコミ

伊藤 やはりいざという場合には、中道の中に加わるという可能性も全然否定していたわけではないんですか。

海部 いや、中道というものがあることも必要だということを、本気になって三木さんは考えていたわけだ。私もそういうことを朝から晩まで考えながら行動しておると、それは必要だな、という気に

なりますよ。

楠 実際にはこのあと、四十日間抗争でそういう可能性が出てくるわけですね。だからそれが伏線になってくるわけですね。

伊藤 もともと三木内閣ができたときだって、三木さんが向こうに行くんじゃないかという風言があつて――。

楠 その封じ込めのために――。

伊藤 ということが言われていますが、あれはそうなんでしょう。

海部 と、僕らも露骨に言われたことがあります。

楠 ということは、出るかもしれないというのは一つの力の源泉になつたとも考えられますよね。少数派閥として。

海部 出て行けば、それで政局になるという恐怖感を持ったわけだから。

伊藤 そうですね。少数とはいえ、「出て行ったら」倍数だけ変わりますからね。与野党逆転ですね。やはり先生だけではなくて、かなりいろいろなところで、いろいろな線で話し合いがあつたということでしょうね。三木さんご自身も、いろいろな方とお話になっている。

海部 三木さん自身もずいぶんいろいろな方と話をしたはずです。中に入ったのは、政治家以外の財界のお使い役もおつたし、マスコミ関係者の中にもおりましたし、一言では言い表せないようないろいろなしがらみもありました。

伊藤 マスコミといつて思い出しましたが、三木さんと一番近いジャーナリストは誰ですか。

海部 どこまで気を許しておるかわからんけれど、平沢和重なんていうのはしょっちゅう出入りしておりましたね。

伊藤 海部さんご自身はどうですか。

海部 僕は平沢さんはあまり信用しないんだよ。あれは二島返還論をもつておつた男だから。僕はあのころから四島でなければ駄目だと思つていましたからね。

伊藤 先生のいちばん親しい、といっても今もあるからまずいかも

しませんが、総理時代とか、その前にずっとある程度心を許せる記者はおりましたか。

海部 僕の場合はまだ若い記者だもの。総理になったといっても、あんなころ、毎日新聞にいる井上君とか、中日新聞の佐久間君とか、官房副長官のころからの海部付きの番記者が朝な夕な来ておったでしょう。そういう連中には、こつちも心を許しているから。それが各党へ行き、各国へ行き、いろいろな話を集めては持つて来てくれる。ある意味では、誰しも持つていく便利屋というのかな。ただただ便利だけではない、心配して話を聞いたり、自分の思想信条を達成するにはどうやって実があるかということ語ってくれる人というのは稀少価値ではないですか。

伊藤 新聞記者というのはある意味では情報源でもあるし、場合によつては自分のある目的を実現するための協力者でもある。いろいろな側面があるわけですね。

海部 そうです。

伊藤 でもこれは使い方を間違えると大変なことになりますね。新聞記者同士の関係もあるでしょうし。

海部 そこは最後は、個人と個人の信頼関係になってくるから。

伊藤 でもだいたい政治家というのは、そういうふうにな新聞記者とのつき合いは大事にしているわけでしょう。

海部 また大事にしておいた方が、いろいろ自分の知らないことや視野に入らないことや、射程距離の違う世界のことを的確に話してくれる。

伊藤 逆に言えば、新聞記者のほうだって相手を選びますよね。ここへ来ても情報がないと思えば来ない。やはり副長官であつたということは、非常に大きいことですね。

海部 それはそうだと思います。私にとつては、大変大きな一つの政治的な財産になったと思いますね。

伊藤 そこからの新聞記者とのつき合いは非常に大事なわけですね。海部 そうです。もちろんそうだと思います。それから今でも続い

ておるように。意外に、おやつと思うことは、僕は総理外遊というのをたくさんやりましたが、あのおとき同行する記者団というのは、現地の懇談をしたり、機中懇談をしたりしますが、それだけで終わらずに、終わってから会を作つて、もう一回話を聞きたいとか、なんとかだといつて、いまでも「俊樹の会」なんていうのがある。当時の外務省の秘書官が出世して、いまイギリスの大使をやっています。そういうのがたまに帰つてくると、それらを集める。ただ、あまり前向きな話にはなりません。思い出話が中心になってしまうが、懐かしいですよ。

伊藤 やや思い出になつてしまふわけですね。

海部 はい。

■元号法制化問題

伊藤 突然ですが、元号の法制化問題というのは、先生ご自身が関与なさつたということではないですか。

海部 僕自身が介入したということはありませんが、当時のことですが――。

「自由社会研究会の新聞切り抜きのコピー（昭和五十二年八月十八日付・朝日新聞朝刊など）が届けられる」

伊藤 理事長が盛田さんじゃないですか。これはすごい顔ぶれだな。海部 俊樹先生は、三木派代表みたいなものですかね。

海部 そう、各派から出せということで、田中派から、安倍派から、三木派から、というようなことでした。

伊藤 石原慎太郎もいますね。二十五年前というところ――。

佐道 昭和五十二（一九七七）年ですね。

伊藤 これはいま聞いている話よりもっと前ですね。それで元号問題ですが――。

海部 元号は、とにかくやれという強いグループと、反対というグ

ループに二つに分かれて、それぞれ院外で国民大会をやったり、決議をしたりした。党内ではほとんどが、やれ、ということでした。ね。やるなということをしきりに言った人はいないんじゃないですか。

伊藤 じゃあ特に問題になったということではないんですね。

海部 特に政治的問題になったとは思いますが、院内がやかましかったということです。一二〇団体が集まったとか、一二一団体が集まったとかね。

伊藤 まあ、団体の数なんていくらでもできますからね。

海部 そして元号法制化復活賛成という人はどちらかというと右寄りの人で、日教組とかあいうところが反対で、国家統制につながるとか、またいつものような白か黒かというパターンに分かれておったことは間違いありません。僕は個人として命をかけてどっちかなれというようなことには、当時は思っておりませんでした。

伊藤 法制化できれば、それでいいじゃないの、ということですか。海部 そうです。

■有事法制の問題

伊藤 防衛問題に行きましょう。

佐道 三木内閣で日米防衛協力を坂田「道太」防衛庁長官の時に約束されて、それがどんどん進んでいって、一九七八年に「日米防衛協力の指針」が福田内閣でできるんですが、その一方で、来栖「弘臣」統幕議長の発言とかいろいろながあって、有事法制問題がワツと議論になりました。そして福田さんの時に有事法制化の検討をするという話がありました。一方で、幹事長だった大平さんが、そんな必要はないんじゃないか、と言ってみたり、もちろんジャーナリズムは、いまよりもっと反対でした。それで党内で有事法制をどうするかという議論が結構あったかと思いますが、これは三木派の立場で、先生はどういうふうに対処されていましたか。

海部 あの問題はいつも、言っては悪いが福田派が中心なんだな。

火元はそうだ。そこに、よそから助太刀に来るのが民社党なんだ。

そして福田先生に、民社党の中には永末英一なんていう筋金入りの軍人上がりがおって、ああいうことは何でもやらなければいかんという。僕が聞いた話で、「永末、それだけは言い過ぎだよ」と言ったのは、「日本防衛のために一番有効なのは小型核兵器を持つて備えることだ。いかに大砲を海岸に並べておっても、そんなものではとてもじゃないが防ぎ切れるものではない。沖を埋め尽くした輸送船団でも、本土に爆撃に来る大編隊でも、そこに小型核兵器をぶち込めば、その破壊力は相当なものだ」と言ったからだ。「おまえは真面目か」というと、「真面目だ。おれは海軍大尉だ。そういう実戦的経験から言って小型核兵器は日本防衛のためには必要なんだ。侵略に使えと言っているのではない、専守防衛から言っても、これほど効果のある兵器はないんだ」と言われて、いろいろな資料を読んだり、人の話を聞いたりしたこともありましたね。

伊藤 三木派が防衛政策について非常に消極的であったというわけでも必ずしもないでしょうが、どちらかというとハト派だと言われている。ただ、三木さん自身は、かなり防衛問題は真剣に考えておられたのではないかな、という気がするんですが。

海部 あの人には考えていましたし、よく人を呼んで話も聞いていましたね。

伊藤 どういう人の話を聞くんですか。

海部 当時国会では、なんというか、武官は国会議事堂の中にも出入りさせる。このごろようやく委員会にも出て来られるようになったということですね。だから三木さんの話を聞こうというときには、南平台の自宅で夕飯を食いながら話をするから、そこで聞こうということです。

伊藤 それは自衛官に聞くんですか。

海部 自衛官に。誰か、三木さんのところに行つて教育して来い、とその自衛官に言うやつがおったのかもしれない。

伊藤 三木派の中で防衛問題にかなり熱心だった方はどういう方ですか。

海部 毛利松平。あれは満州開拓の国粹主義者ですからね。

伊藤 たぶん海部先生はハト派ですね。有事法制などはどうしてもよろしいということであつたかどうかはわかりませんが。

海部 有事法制のことは、僕はやらなければいけませんといった。その時になつて何もなければ大変だ、と言つてはおれないじゃないか。

伊藤 何もないから、何でもできるんですよ（笑い）。

海部 そこまで無責任でもなかつたな。

佐道 この問題のときには、あえて議論に加わらず、ということだったんでしょか。

海部 あえて議論するほど逼迫する問題が起こつておらんでしよう。むしろそれよりも、足下に火がついているようなことをずいぶん背負わされておつたから。国会対策の問題とか、会期末の問題とか、よその党とのつき合いだとかいろいろありますから、そんな、大事なことであるけれど、悠久の未来に向かつて。

伊藤 今日来る途中で議員会館の前を通つたら、「有事法制反対」「戦争はもういやだ」とかいふプラカードを持って座り込んでいる人たちが何人かいましたので、有事法制も長いことだな、と思ひました。

佐道 本当ですよ。

海部 これを利用して、自分たちの組織作りをやるうと思つている人がおるから。あの連中にも逆に聞いてみたいことは、さあとなつたときに、あんたどうするんだ、ということだ。

伊藤 だから降伏するんですよ。

海部 いや、降伏するんだと言つたら、そんなやつは今から死んじまえ、ということになる。その時は抵抗しないで、意見も吐かずに降伏しては駄目じゃないか。むかしロンドン大学に行つておる森嶋「通夫」教授とそういう議論をしたんです。「やられていかんとき

には降伏すればいいんだ」という。「なぜだ」と言つたら、「そうしたら血を流さなくても済む」と言つたな。

伊藤 そんなことはないんですよ。それだね。

海部 人間社会には、血を流さなければならぬこと、それでも守らなければならぬ大義というものはあるはずだ。もうちよつと考へて、あなたのお子さんなりあなたのお父さんなりあなたなりが、何も他に頼むことができないところで、殺されるか犯されるといふときには、あなたはこれに対して立ち向かわないですか、手をあげて負けてしまふんですか、というような素朴な疑問を感じたことがありますな。

伊藤 そういうことを、自分が亜細亜大学にいるときに学生に聞いたら、かなりの人たちが、そうです、手をあげます、という。

海部 そのとき、私自身の善意を信じるように、脅迫している人の善意も信じるから、手さえあげれば、いまこも平和で収まる、明日もそうであるうという期待がある。だから手をあげると答えると思うんですよ。手をあげたら、こつちさ来いといつて連れて行つて、すぐにひどい目に遭ふことを想定しないんだ。

伊藤 それでも戦うよりはいいです、という。もう先に言う言葉を知らない。

楠 この時代と今とは違いますよね。この時代はまだソ連が健在の時代で、もし戦争になったら、核戦争になる時代ですね。今はソ連がいらないから、そんな大戦争はない代わりに、ちよこちよこした武力衝突が起きる可能性が逆にありますね。ですから、いまの方が有事法制は求められているんじゃないかなと思ふんですけれどね。このときに民社党から来栖さんが立候補していますよね。

伊藤 やはり民社が熱心なんですね。

海部 あれは民社党の中にある一部の勢力。例えばさつきちよつと触れたように、永末英一ひとりだけではなくて、民社党というのは大内啓吾もそうである。湾岸戦争の時も、そこまで言つていいのかと思ふぐらい、頑張れ、しっかりやれと激励に来たのがそういう連

中だ。そうすると、民社党のものの考え方、流れるものは個人の来栖さんの突発的な発想ではなくて、そういったものを許容する雰囲気があったんじゃないかと思えますね。

伊藤 同じ中道といって中道を指向しても、民社のそういうメンタリティはだいぶ違うんですね。

海部 だいぶ違いますね。

■日中平和条約問題1（覇権問題と台湾問題）

伊藤 その話はそれとして、この福田内閣の時に一番大きな外交上の問題は日中平和友好条約の調印です。このときに覇権問題ということで非常にもめるわけですね。こういう問題について、先生は何かご記憶はございますか。

海部 大きな議論をしたら、全体として隣の国と仲良くしようという単純な話ですから、それに対しては、いけないとは言いきれない。だから平和友好条約というのは、全体として平和を作り上げていくんだからいいではないか、となるんですね。ただ中国のとってきた態度とか、起こる細かいいちいちの問題については、ああでもない、こうでもない、言いたいことがあったことも事実です。

伊藤 この覇権問題というのは、ソ連を覇権国家だ、あれを許すな、ということが条約自体の中に入ってくるということですから、非常に厄介な問題でしたね。

海部 ソ連自体が、今日と違って、世界を二分した一方の武力を持った雄でもある。だからソ連の覇権が相当な脅威を与えていたことも間違いありません。けれど中国はそれに対してもいろいろ言ったり、三木さん自身も覇権は駄目だということはきちんと言っておりましたから、そのことは向こうにもきちんと言っているんじゃないでしょうか。

佐道 この交渉の時に、尖閣列島のところに中国の大漁船団が突然

来て領有権を主張したり、鄧小平の鶴の一声で引き揚げたりということがありました。中国問題は必ず裏腹に台湾をどうするのかという問題があつて、福田さんのお膝元の福田派自体が台湾とのパイプが一番あつたわけですね。中国とは国交正常化をしているわけですが、さらに平和友好条約を結んで、対ソ連、対台湾という大きな問題をどうするのかというのがいろいろ議論になったと思うんです。たしかに隣国ですから仲良くしなければいけないんだけど、非常に扱いが難しい中国と、どうしていくのか、そのへんはどういうふうにお考えでしたか。

海部 今年の二月に、日中国交正常化三十周年記念で、党対党の交流で行きました。向こうに行くと、中連部の部長が最初に会って、形式的な挨拶をして、なんのために今度はお土産を期待していますか、というようなことをやるわけですね。中連部長との最初の議論が終わったら、日程に全然入っていなかったのに、「大陸との関係を台湾がどう考えているかという兩岸関係の委員会の委員長を閣僚級にかさ上げしました。予定外だけれど、それとお話し願えますか」と言うから、「誰とでも会って話をするから、呼んで来い」といったら連れてきた。

それで、「台湾問題についての日本の基本的な考えはどうですか」と言うから、「これは中国が中国の領土だと言って、一つ中国だと言っておるんだから、それは二つの中国だと日本から言うのは越権でもある。けれども、それを素直にあなたの方はとりいれるような国ではない。僕に何を言ってもいいといって聞くのなら、台湾が喜んで従うことができるような一国二制度をもつと今日的に拡大したものを考えたらどうだ」といった。

そうしたら、「一国二制度とおっしゃるけれど、最初の一国が肝心で、一国の原則さえ守ってくれば、二制度はさらに拡大しましょう。それは台湾が台湾国防軍を持ってもいいし」とかいふんだ。

「けれどもそんなことよりも、あなたのところは一つの中国は認めないというけれど、それを認めるというと、こんにちの台湾では

それを認めるような雰囲気ではないよ。そうするとどうするかと言えば、例えば日本でわれわれがやっているような、軟式テニス、ソフトテニスがある。おれはアジアの会長もやっているけれど、そこは中国の大陸も台湾も一緒に、同じ会場に参加してくるんだ。そこでがちやがちや言っても駄目だから、『一緒にここでプレイしなさい。その代わり一つ約束をしよう、演奏する国歌は違う』、それで今日までやってきたんですね。この問題は掌を返したように、いまここであなたと初対面だから、そういう制度ができておれが部長だと言ったのは、そんなことは初対面の人に、そんなに奥深い哲学的な話を結論が出るまでできるわけじゃないから、簡単に言うけれど、僕は台湾問題の解決のためには鄧小平先生がお隠れになったことがまことに残念でならん」と言った。

そうしたら「どういうことですか、それは」というから、「鄧小平先生がいまここにおったら、あの人は『子々孫々、子供の代に片づかなければ孫の代になれば、いい知恵が出て海部さん、片が付くから心配するな』と言った人だ。だからその後、僕は揮毫を頼まれると、ときどき『中日友好子々孫々』と書くんだ。その視野の中には、台湾問題もやがてはこの方法で片づくよ、あの難しかった香港だつて片づいたじゃないか。サッチャーさんがあればキーキー言ったのは、ちやうどいまから五年前の返還式の式場で、中国の溥儀さんときゃんきゃんやり合つて合意できなかった問題が、いまは両方ともそれで収まつておるじゃないか。台湾問題はその逆で、あまりあわてていまここで一つの中国にするんだ、それでなければみんな間違ひであつたなんて言わない。だからもっと長い目盛りで見て、鄧小平さんのように、子々孫々になれば、だんだんいい知恵を出すのも出てくる。ここまで来たらこれ以上のことは詰めても駄目だということも残る。あるいはお互いの国内の事情が変わつてきて、この方がもっとメリットがあるではないか、ということになるかもしれない。ヨーロッパなどは非常に現実的だから、フランスとドイツがオーデル・ナイセ線を巡っている議論をしても何を

やっても、ドイツの知恵は、一緒になつていったほうがメリットがあるんだということとで今日までやってきたわけでしよう。台湾と中国も、香港が片づき、廈門が片づいたら、これだけじゃないか、残っているのか。どうしてそれをせつかちに、いまここで決めるなんて、初対面のおれに聞くのか。いま掌を返せといわれても、それは無理だ。そこは大人物同士が腹を割つて話をして、もしここに鄧小平さんがいたら、どう思うだろうか、子々孫々にわたつて考えればいいんだとおっしゃるよ」と言った。

わかつたようなわからんような顔をして、「はあ」といつて聞いておつた。合意したとは言わんけれど、「おれはしつこいから、また今度来たらこのことを言うから」といったんだ。「どうぞ」という。それでまた呼ばれるんです。このあいだ呼ばれて、瀋陽に行つたんだ。瀋陽は清朝時代のあの地域の古都だ。そこに行つて、古都なんか展を見せてもらったあとで、まさかあんなことになるとは思わなかつたけれどね。銃撃戦になるとは思わなかつた。

伊藤 台湾問題は、この時点からそういう考え方はずっと一貫しているということですね。

海部 その時点からずつとそうで、焦つてはいけない。すぐに掌を返したように、じゃあ二つがいいとか、三つがいいとか、一つがいいとか「言つてはいかん」。

伊藤 軟式テニスの場合は、国歌は両方やるんですか。

海部 台湾の国歌はやりません。中国の国歌ひとつだ。そして台湾は、国といわないで地域という。それでやります。それかしょうがない。悔しかつたらやつつける、試合で勝て。中国大陸を前に置いて、こてんぱんにやつつける。

佐道 やつつけるとおっしゃったから、戦争でもしろということかと（笑い）。

海部 いや、実力でテニスをやって、対等に戦えるのがおるんだ。それはスポーツだもの、戦争じゃないもの。

佐道 実際はどうなんですか、軟式テニスはどっちが強いんですか。

海部 台湾がまだ強いですね。でもそのうちに中国が強くなるでしょうね。

伊藤 母数が違いますからね。

海部 中国の方が数が多いからね。ああやって強制的に教えればそうなるだろうな。

伊藤 まだサッカーは惨めだけれどね。

海部 サッカーは駄目だ。

伊藤 あれも何年か経てばわかりませんね。平和友好条約の問題はそんなところでよろしいかと思いますが。

■日中平和条約問題2（靖国問題）

海部 ただ平和友好条約を片付けるためには、もう一つ大変厄介な問題がある。靖国問題だけはきちんと解決しないと片が付きませんよ。この二月に行ってきたときも、みんなかわるがわる言ったことは、この靖国問題は許されないということだから、おれは「許されないなんて言わずに、そこは大きな目で見て、許さなければいかんじゃないか」といった。

楠 先生は、どうしたらよろしいと思われるんですか。

海部 僕は分祀だ。ところが分祀しろというと、東条さんの奥さん、未亡人が分祀はできません、と言ってきた。

伊藤 それはそうだ。

海部 しかし、あれを合祀したときは、国民の意志を問いましたか。問うていないですよ。

伊藤 じゃあ分けるときは問うんですか。

海部 いや、問わないで一緒にしたんだから、問わないで分けたほうが、波静かにうまくいくんだと。いまもちろん、それはいかんという反対論が猛烈に出て来ますよ。だからいまここで国論を二つに割る必要はないとおっしゃるかもしれませんが――。

伊藤 僕はそう思います。中国の言うことに従って日本国内の国論が二つにわかれるような議論をやるべきではないと思うんですね。

海部 それは中国との関係ではなくて――。

伊藤 いや、これは中国との関係ですよ。

海部 そうかな。中国だけですかね。

伊藤 だけだと思えますよ。

海部 だから、おまえはどうするんだと言うから、中国に行つて、僕は海部内閣の時に初めから八月十五日という日に戦没者慰霊の日というのをわざわざ書いて国がつくつて、それを武道館に報知して、そこに全国の遺族の代表も来てもらつて、天皇皇后も来てもらつて、外交団も来てもらつて、みなそこで遺族に対して礼を尽くすんだから、僕はあのやり方が一番いいと思うんだ。別に新たに神社をつくつてどうのこうの言わんけれど、中国がこちらが言いたいものに、「合祀したところに行つて額ずくのは間違いだ、許せない、小泉はまた行った」なんて言い出すでしょう。

去年の中国の会議の時に、日本の大使をやつておつて、よく日本の実情を知っているはずの楊振亜大使がきておつて、会場の中から発言を求めて、あの一点がいけないという。おれは「楊振亜先生、あんたは日本の大使で日本のこともよく知つておるし、私とも話をし、またいろいろなことで協力もしてくれたけれど、どうしたらいいと思つてゐるんだ、あんたは」といったら、「戦犯が祀つてあるところへ行かなければいいんだ」という。調べると、祀るときに国会決議も何もしていませんし、選挙に問うたこともありません。何もしてないんです。合祀しましたよ、という内閣の布告も出してないんです。

楠 でも先生、靖国神社は国とはなんの関係もない。

海部 なくなつちやつてゐるんです。

楠 宗教法人ですから、合祀するも分祀するも、それは政治と関係ないところで行なわれるわけですね。

海部 それはそうだけれど、その理屈は日本の国内に向かつて通用

する理屈なんだ。中国も韓国もアジア近隣諸国も影響するんだな。

伊藤 それはないと思いますね。中国だけじゃないですか。

海部 僕はそう思う。だからそういった雑音、周辺諸国の過剰な取り越し苦労は一切やめてもらったほうが、今後いろいろな話をしていくのに具合がいいということになるんじゃないですか。

伊藤 今までだっているいろいろなことがありますけれど、それだけで済む問題ではなくて、次は教科書問題だし、次は何問題だと、これはODAが続く限りあるんです。

海部 僕はODAもやめろ、と言っているんですよ。

伊藤 ODAを減らすと言うと、その問題が必ず出てくるんですから。

楠 政治問題化しているんですね。

■松野頼三氏とグラマン問題

伊藤 ちよつとこの問題はまたあとで話しましょう。あと十五分ぐらいですが、グラマン問題で、松野「頼三」さんが引つかかって、それでどこまでどうなのかということがよくわからないんですが、とにかく松野さんが国会議員を辞めなければならぬということろまで追い詰められるわけですね。松野さんは三木派ではございませんが、三木内閣を支える重要な柱だったわけです。先生もだいたいお近しかったのだらうと思いますが、このときの状況というのは、いったいどうしたことだったんでしょうか。

海部 松野さん自身は、非常に開けっぴろげに現実的なことを言う人だから、三木さんに話をしたときも、誰かがあのときはかぶってやらなければ、私ですと言うのがいなければ、全部上まであげたのでは、感心できる話ではなくなってしまう。本当に全部切られちゃう。だから皮を切らして、それで辞めなければならぬ。

伊藤 それで「松野さんは」ご自分が皮になる。

海部 皮になる。だいたいそんな方針で、受領までは認めた。たしかあのときは五億円とか何とかの受領は認めたんです、国会で。ただそれはこういうわけで、請託を受けたのではない、というところだけはきちんと守っておったんですけれどね。

伊藤 もっとも時効になったんですね。松野さんとしてはあれで政治生命を失うことになるわけですね。

海部 結果としてそうになりましたね。

伊藤 ただ松野さんは、三木派とはかなり近かったんですね。

海部 かなり近かったですね。

伊藤 本当は福田派でしょう。

海部 はい。

伊藤 そういう福田派で三木派に近いというのは、福田派からは敵の陣営に行ったみたいな感じで見られていたんですね。

海部 そして三木さんは、松野さんを初めは幹事長にしようと思っただんですね。ところがそれを、福田さんが駄目だといったんですね。それでそこからあの細かいことは、裏でどんな取引があったか知りませんが、とにかくそれで、松野さんの心は寒々としたものになった。それで内田常雄さんという人が「幹事長に」なったんですね。あのときもおれが、内田さんを連れに行ったんだ。宏池会まで行って、「内田先生、すぐ来てください」と言った。そうしたらほかの人は、そんな行かなくてもいいよという顔をしたり言ったりしたやつがおったけれど、「前尾、よくないこと言わんでください、来てください」といって連れて行って、何日か何時間か遅れて内田幹事長が三木総理と会ってOKをとったという場がありました。それまでは松野さんがなるつもりでおったんですね。新聞記者にもだいたいそういうことが伝わっておったから、松野さんにしてみればたいへんな赤っ恥をかけたわけですね。

伊藤 だけど三木さんにはよく尽くしたんじゃないですか。

海部 そうですよ。よくやってくれました。

伊藤 やっぱ膝をさすられた話を伺いましたが。

海部 松野さんから？

伊藤 はい。

海部 それからもう一つは、三木さんは首脳会談の時も、松野さんを連れて行くとしたんです。そうしたら、誰からか知らないが横槍が入って、松野さんは俺を呼んで、「やっぱりね、僕が行くと具合悪いわけだから、君行ってくれ」と僕に言うから、「君行ってくれよ」といって、政調会長が具合悪いのに、副長官が具合いいということはないでしょう」といったら、「いやいや、三木さんもそういつとるんだよ」ということだった。あの人は最初のサミットはついて行って、自分が犬馬の労をとろうと、そこまで同化しておつてくれた人です。そういう思い出があります。

伊藤 「松野さんが」議員辞職をするプロセスは先生はご存知のわけですね。

海部 はい。

佐道 このときは、松野さんと岸元総理の名前とかも出て来て、先生とお名前が同じですが海部八郎が逮捕されたりしましたね。そういう中で、ロッキードに次いで、自民党がそういう体質だということにマスコミでもなった。党内でもいろいろ議論が出たと思うんですが、親しい松野さんとはいえ、疑惑の問題をどうするんだということについて、ロッキードの時にあれだけ頑張った三木さんはどうお考えだったんでしょう。

海部 あの前後に、三木さんと松野さんのあいだには信頼関係というか、友情よりもっと深いものが生まれたと僕は見ていますよ。松野さんの物の言い方や、三木さんの松野さんに対する評価の仕方もあるところから変わってきたと思います。ここまでいろいろとあれしてくる。そして、上の方に責任をなすりつけようとするのは、松野さんに言わせれば、簡単だということからね。「知っていること、思っていること全部しゃべってしまったら、ああそうか、そっちに行っているのか、ということになるけれど、それをやったら、そんな脇のいろいろなことで国全体がぐちゃぐちゃになるから、それは防

げるものは防がなければならん」という。松野さんはそういうところがありましたね。「おれが知っていることをみなしゃべったら、それは吹っ飛んじゃうよ、内閣は」というきわどいセリフまで言われたことがあったから。

伊藤 やっぱり松野さんの男気みたいところですかね。

海部 ありましたね。それはやはり熊本県人だということに、いくら熱いものがあるんじゃないですか。

佐道 この問題が伝えられたときに、これはロッキードのように大きな問題になるというような予想を持たれましたか。

海部 軍用機に関することになってはいけなかったのは、三木さんだ。「軍用機に関することになっては一番いけない。そこまで本当にやったのかどうかは、わしは知らんけれどもね」と言う。それで松野さんにも僕はそれを言っておいたら、「わかった、よくそう言っておいてくれ」という返事があったことも事実ですね。だから、後日のロッキードもそうだけれど、ロッキードの時も、あれはP3Cの身代わりではないかという説が巷にちらほらあったときにP3Cのことでは絶対じゃない、ということにみんなしてやつたんじゃないかな。いろいろな立場の人が。

伊藤 要するに、ロッキードの問題にしたということですね。

海部 そういうことですよ。

伊藤 この松野さんの問題も含めて、E2Cの予算を凍結するということがありましたね。

佐道 E2C導入問題のための賄賂ではなかったかという話なので、これは当時の話ではけしからんということで、予算を削除した。

海部 E2Cの分だけ凍結・削除しろと言ったんだ。凍結というのは冷凍庫に入れることと同じだから、いつでも状況が変わったら、出して解除してできるようにしなさいよという裏の交渉も各党とやらされたことを思い出します。

佐道 先生がおやりになったんですか。

海部 おお、そうだ。走り使いだ。

伊藤 もう走り使いをやらされるような地位ではないでしょう。

海部 あのころは相手も相手で、竹下さんがたしかあのころは凍結派の窓口みたいなことをボランティアみたいに行っていたんじゃないですか。本当の本筋が出て行ってやったら、すぐに大問題になるから。暫時凍結するけれど、こうなったときには国会決議で凍結解除するという事です。

伊藤 こういうふうに議会がもめたりすると、まだ国対の長老中の長老の先生も出て行くことになるんですか。

海部 出て行く。意見を聞きに行ったりね。「こういうときは先生どうするんですか」と聞きに行ったり、「どうしたんじや」と聞いたりするものですから。そうでしょう。「まさに総力を挙げて、派閥を乗り越えて、党のためにお国のために国会を動かさなければならん」というようなセリフが、きざですけれど通った時代ですね。伊藤 これは政府予算案が予算委員会で否決されて、本会議でまたひっくり返るという、えらくきわどい話ですね。

海部 たしかそのとき、大平さんが大蔵大臣じゃなかったかな。

佐道 大平内閣です。

海部 大平さんになっていたか。大平さんが、「私はこういう予算の扱いについては非常にシビアだから、国会対策や皆さん方が決めても、これは認められません」ということをいつか言って大問題になったこともあった。

伊藤 かなりきわどいことになる、国会対策から、もはや大臣もおやりになった方も、やらざるを得ない。

海部 やらざるを得んです。

佐道 大平内閣で、田中派ががちり支えてというところでも派閥を乗り越えて。

海部 それはそうです。そういうときにいやだとか、四の五の理屈を言わないように、日頃のおつき合いもみんなしているわけですから。おつき合いというのは裏金ではないですよ。一緒に飯を食いに رفتたり、暇なときに一緒にゴルフをやるうやと言いながら、さあ

大変となったときは助けてくれよという。その遠因がいまお見せした自由社会研究会でもあるわけです。毎週一回ずつ、朝の八時からだ。今日も朝の八時から行って、飯を食って十時半まで話をしてきたんですからね。

伊藤 朝八時ですか。

海部 昨日遅くまでサッカーで、「オーレー、オレオレ」なんていつておつて。

佐道 この研究会は、経済人とかだいぶ代替わりをされているんですね。

海部 もちろん代替わりをしょっちゅうしていますね。

伊藤 政治家の方も代替わりしていますね。

海部 政治家の方も、代替わりをだいたいぶしています。

佐道 このメンバーですと、先生が一番の長老ですか。

海部 一番長老は宮澤喜一。お間違えのないように。

伊藤 いや、数え方による（笑い）。ちょうど時間ですので。

海部 今日はすみません、ラオさんが来ておりますので。私が日独の会長ですから。本当は今日は開会の辞をやってくれと言われたので、「それは勘弁してくれ。今日はちよつと開会に遅れるから、誰でもいいから適当な人にやらせておけ」といっておいたんですが。伊藤 どうもありがとうございます。今日のお話は、大変興味深く伺いました。また次回よろしく願いいたします。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 17 回

大平内閣時代（1978～1980）

【2002年9月9日（月）14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2002年9月9日)

1. 79年9月国会が解散します。このとき大平首相は84年度赤字国債解消を目標に一般消費税導入を主張していました。9月末には80年度の導入断念となりますが、結果として10月の選挙では自民党は248議席と大敗しました。このときの選挙戦についてどのような印象ですか。また、大平首相の一般消費税導入論については、当時どのようにお考えでしたか。
2. 上の問題と関連しますが、選挙での大敗をうけて、福田・三木・中曽根の各派は大平退陣を要求し、40日抗争に入ります。各派との連携の内容と、海部先生がどのような活動をこのときなさったのかについてお願いします。
3. 40日抗争によって、11月の首相指名は自民党から大平・福田両名が候補に立つという異例の事態となりました。新自由クラブの支持などで結果は僅差で大平首班となりましたが、新自由クラブの動向をどのようにご覧になっておられたのか、当日の各派の動向や票読みはどうだったのかなどをお願いします。
4. 福田擁立は自民党からの分裂とも言える事態だったと思います。どうして分裂は回避されたのか、また公明・民社を中心に中道政権構想がこの時期活発化していますが、これらに乗る可能性はなかったのかという点も含めてお願いします。
5. 先生は、96年11月から自民党広報委員長に就任されています。広報委員長の仕事内容や、どのようなことをされたのかについてお願いします。
6. 79年は、年末のソ連のアフガニスタン侵攻で暮れました。このニュースをお聞きになったときのご印象をお願いします。
7. 80年1月20日、自民党は党員310万5873人と発表します。田中・大平派90万人、中曽根派41万人、福田派35万人で、三木派は84万人でした。三木派が大変多かったのはどういったことだったのでしょうか。また、これが年末の12月29日の発表では142万へと半減するわけですが、これについて何かご記憶の点はございますか。
8. 80年4月、自民党非主流派有志がKDD問題・浜田代議士問題の究明と党綱紀肅正を求めて「自民党刷新連盟」(代表：赤木宗徳)を作りました。先生はこれとの関係はいかがだったのでしょうか。
9. 5月、社会党提出の内閣不信任案に、非主流派69人が欠席して不信任が可決、衆議院解散となりました。この事態を先生はどのように見ておられましたか。

10. 選挙中の5月31日大平首相は入院し、6月12日に亡くなりました。選挙は自民党が大勝するわけですが、大平首相の死亡と選挙の勝利という一連の事態をどのように見ておられましたか。また大平首相について、現在どのように評価しておられますか。

11. 大平内閣のあと、大平派の鈴木善幸が内閣首班となりました。鈴木首相誕生について、当時どのように見ておられたのでしょうか。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。次回は鈴木内閣成立後の問題からお願いします。

■一般消費税導入論と七九年総選挙

伊藤 前回、福田内閣の時期を前後するような話をしていたんですが、大平内閣で、赤字国債解消のための一般消費税導入という問題がございました。これで「一九七九年十月の」選挙は大敗してしまうわけですが、この議論自体には先生は関与なさっていらっしやいますか。

海部 いや、この議論自体は——。たしか当時、まだわれわれ若手の昭和会の結束が堅くて、「あんなことを言われたんじや選挙にならない。選挙の始まる前にそんなことを言うのは馬鹿じやないか」というような言葉まで使って、いろいろ反論しようというって、大平さんに申し入れまでしたんですね。

ところが、その頃からすでに揺れ始めておったんだな。「うー、それは大事なことから、あー、やらなきゃならんと思っておるが、みなさんがそういうふうに認めてくれなければ、国会の場で議論しなければならんことでしょうが、しかし大事ですよ、これは」といって、あの人一流の、どこが終わりなのか、どこが出口なのかからん話ですつと引つ張られた。いずれにしてもあのとき、「これ「一般消費税導入」は提示はしたけれど、それで選挙を戦ったら大変だぞ」ということを僕らが言ったんですが、「なんとか引つ込める」と言った。

僕はそのときの資料がどこかにないかと思っただけで、結論としては引つ込めたんです。そして選挙戦に臨んでは、それを主要テーマにしないとまで約束したんですが、どういう表現で、どこでそれを言ったのか、いまよく思い出せないんです。そういう事態で、消費税を引つ込めたあとで選挙は始まったわけですね。伊藤 そうですね。それが尾を引いているわけじゃないですか。

海部 結局、それはみんながそう見ておる。あのとき選挙前の国会

討論会があつて、僕の相手は田中六助だったけれど、「それを争点にしないんだよ」という。「争点にしないではいかにから、諦めたなら諦めたといい、そしてゴミ箱にきちんと捨てなさい」というようなやりとりをしたことを、いまは覚えておりますけれどね。けれどもあれが、大きく見れば敗因だったと思いますね。

伊藤 そういうことは、選挙民からいろいろ反応があつて、ということですか。

海部 いや、「税金がまたかかるんですか?」と言われる。それはあれだけ言ったんだから。一時は僕らも、「この国の財政ということも考えなければならんから、これ以上国が駄目では、国民生活も駄目になる。しかし、いきなり税金ということはちよつと考えが浅はかだな」とか、「もうちよつと打つべき手を打つてからとか、無駄を省いてから考えるべきで、しかも選挙前にそんなことを言うのはいけない」とか言っていた。いまから考えると、選挙だから言わなければならんのだ。正論を言うというこのことですね。

伊藤 まあ、そうですね。

海部 そんなことがありました。

伊藤 その結果、果たせるかな大敗、ということになったわけですね。

海部 そうです。

伊藤 普通ですと、選挙で負けると、総理の進退が問われるということになるわけですね。

海部 そうでしょう。それであのときいろいろな抗争が続いたわけですね。まだ覚えておりますが、たしか三木内閣のときは二四九議席とつて、責任をとつて引退したでしょう。こつちも覚えてるわ。ところが今度はそれよりも一つ少なかったんだ。「にもかかわらず、居座つて責任を取らないとは何事か」と言ったら、田中六助あたりは、「いやまあ、海部さん、そう言うけれど、時と場合によつていろいろ状況は変わるし、辞めるばかりが責任の取り方でもないし、これを元に戻すのが大事だ」とかなんとかかんとか、彼一流の言い

方で説得に來たわけだ。「駄目だぞ、來ても。おれは言うべきことは言うし、テレビに出るときはみんなが聞いているんだから、あかん、あかん」と言つて、「責任をとつて退陣すべきだ、辞めるべきだ」という意見を述べておつたわけです。

あのときは中曽根派も福田派もそういう線であつたが、大平派を田中派が支えたんだな。田中派は数が多いし、そんなことは構わん、やつちまえというようなことがあつた。思い出すのはそんなことです。一議席、三木のときの方が多かつたんだから。それでも、三木内閣は結果に対する責任は取れと言われて、取つたんだから。それよりも一議席少ないんだから。それを、言葉を弄んでいくと、「結果に対する政治責任というのが最もわかりやすいのに、政治に対する信頼がだんだん崩れていきますよ。出処進退と責任は明らかにしてもらわなければいかんとわれわれは思つておるんだ」というようなことを旗印にして、いろいろ言いました。けれども言を左右して、退陣にはならなかつた。

■四十日抗争1 (三派連携)

伊藤 福田・三木・中曽根の三派が連携するわけですね。そういうとき、連携するというのは、具体的にはどういうことなんでしょうか。海部 連携するというのは、責任を追及して、替わつてもらおうということですよ。もつと具体的にわかりやすく言えば、まだ中曽根さんはちよつと若いから早い、とりあえず次は福田さんが政権を担うべし、そのために連携して、そのときになつて慌てないでもいいようにしておこうじゃないかというような話の下の方である。それはもちろんそれぞれの派ごとに派の幹部会を開き、派の領袖に話して、そういう動きをしますよと了解を取り付けて、それで動き出したわけですよ。だから選挙の結果、数がこうなつたときには責任をきちんと明らかにしたほうが政治としてはわかりやすい。わかりやすさ

れいな政治をやるうというのがこちらの派のスローガンでしたから。いろいろなことがありましたよ、あの頃は。だからわかりやすい、そしてきれいな政治をやりなさい、ということですよ。

伊藤 それで三派が連合した。選挙があつて、首班指名は十一月ですね。

海部 選挙が済んでから首班指名に入るまで、そう簡単にいかなかつたんですよ。その頃のことを「四十日抗争」というんです。四十日も、ぐちゃぐちゃしとつたんだ。そのかんに、お辞めになるならば早くお辞めになつた方がよろしい、というような話をしたり、そういう動きをしたりしました。

伊藤 このときは本当に大変で、大平さんは辞めないというし、片方は福田さんを立てて、あんな辞めなさいというし、自民党は事実上分裂ですね。

海部 そうですね。

伊藤 それぞれが結束を固めなければならぬでしょう。切り崩しも当然あるわけだから。そうすると、三派連合の本部みたいなものは――。

海部 各派閥で、派閥の中は派閥ごとにやつておいて、それから三派の連絡会議というのがあつて、三派の当主だけで集まることもあれば、あのころ各派の代貸しとかいう変な名前がありましたな。それで三木派からは井出一太郎さんが出て行つて、福田派からも中曽根派からも来てもらつて、やつたんです。そのクラスはそのクラスで集まる。われわれはそのさらに一段下ですから、特に名前はつけなかつたけれど、集まれということ、実務者連合といったかな、実働部隊の会をやつたわけです。それは毎日のようにどこかで集まつて情報交換をしたり――。

伊藤 何の情報交換をするんですか。

海部 派内で、これで結束は大丈夫だな、これからこれで押して行つたらこうなるよ、というようなことをいろいろやつたんです。

伊藤 結局、票読みをしなければならぬですね。

海部　そうです。票読みと同時に、大義名分をどう考えるかということだ。

伊藤　でも大義名分はさつきおっしゃったことに尽きるわけですね。

海部　大義名分はそれですが、あの頃たしかハマコー「浜田幸一」の問題が絡んでおったんだな。

楠　ラスベガス賭博でしたか。

海部　それを明らかにしろ、という問題が絡んでいた。みんな、あれはいやらしい男だし、全国にいろいろアレがあるので、表面切って言いにくい話だったけれど、とにかくそこがネックになっておる。それはそれで片付けましょうと。

伊藤　ハマコーさんは、派閥はどこに属していたんですか。

海部　派閥はどこでもいいわけだ。どこでも出入りしているから。

田中派にも出入りしておったが、一番元を言えば、椎名派です。椎名派の前は、川島正次郎の家来であつた。それは地域の関係、千葉県との関係だ。

■四十日抗争2（福田・大平密約）

楠　この質問事項には出ていないんですが、そもそも福田さんのと大平さんの確執の根底にあるものとして、三木さんが三木おろしでお辞めになって、そのあと福田さんになります。そのときに「福田・大平密約」があつたという話がありますね。その「福田・大平密約」というのは、二年で福田さんから大平さんに政権を禅譲するということが話の中心ですが、それを福田さんが反古にしたところから、福田・大平の確執の一つは始まっているという話を聞いたことがあります。その密約について、先生がご存知のことはありますか。

海部　それは本当は田澤吉郎が実務者会議の代表だったから、田澤吉郎が面白おかしく全部知っているんだけど、本当に約束があつ

たんだよ。「本当に信じておったのか？」と聞いたたら、「それは信じなきゃあ、そんなことはできないよ」ということで、最初は福田さん、それではおやりなさい。その代わり次は大平ですよ、ということだ。

伊藤　それは二年後ですね。

海部　「次は」という言い方をしたな。だから何かあつたとき、二年任期いっぱいもつとは思わんし、途中でお隠れになることもあるし、何か横風が吹いてきたり、横波が来て溺れることもあるから、「次の」という言い方だったな。

楠　「次の」ですね。ただし、総裁の任期が三年から二年になつたんですね。それで二年という線が出たんだと思います。

海部　あのころの自民党を調べてごらんよ、毎回総裁の任期は変わるから。選挙のたびだ。四年であつたり、二年になつたり、三年になつたり。

楠　ではそれは「密約」とはいえ、自民党内では一般にその約束は知られていたんですか。

海部　事細かいことまでは知らんにしても、とにかく大平と福田という不倶戴天の敵が手を握った。そこにもう一人、煮ても焼いても食えん三木武夫というバルカン政治家がおつたから、あの二人は手玉に取られた。それで順番を決められて、あんなことになった。というようなことをどこから聞いてきて、おれのところにそういう言い回しで言ってくる他派の実務者もあるわけだ。

伊藤　元は三木だというんですね（笑い）。

楠　田澤吉郎さんがそのことを一番ご存知だというのはどういうわけですか。

海部　あのころは、田澤が大平の代理の使いで、われわれのところに来たんだから。その横には田中六助という変わったのがおつた。要するに両方からの話を聞いておると、大平派のことはすべて全部わかる。けれど、田澤の方が入り込んでやつておつたし、あれは前尾「繁三郎」さんのところにも前からいろいろ出入りしておつたか

ら、源は深くて古いんだ。大平さんにしてみれば、順番をよその派閥の後にされるのみならず、同じ派内でも前尾さんがなかなか首を縦に振らなかったということ等もあって、そういうときにはいつも田澤は大平派の懐刀みたいな役をやっておったということですね。

伊藤 それはよくわかる話ですね。それで結局、二人とも絶対に降りないという形になったわけですね。しかし国会を開くには――。

海部 だから国会がなかなか開けなかったんです。開いたら首班指名をやらなければならん。首班指名はどちらが出るか。同じ党から二人出るというのは、これは憲政の常道に反するという意見も長老のほうからはあった。けれどもどうしても話がつかんときは、みんなが出て行って、わかりやすくきれいにだから、本会議場で記名投票をやればいいじゃないか。われわれは単純に割り切って、そのほうが片が付く。結果的にはそうなったわけですが、そういつて引った張ったわけです。

そうしたら、思わぬところで四十日抗争が早く片付きかけたのは、院の構成をやらなければならん、という問題が出て来た。選挙が終わってから、やれ一議席多かったから、少なかったから、辞めろ、辞めるなどやっていったって、日が経つばかりだ。そこで院の構成ぐらいいはしようという知恵をつけたやつは、われわれの一期上の議運族・国対族だったと思う。それでわかるわな、園田直とか江崎真澄、福田派が園田、大平に近くてやった江崎真澄は本当は田中系ですが、大平・田中は一心団体であった。もう一人は誰だったかな、福田一さんだったかな、そういう人がおって、「まずきみ、院の構成ぐらいいはきちんとしなさいよ。世論もそれを見ておるし、新聞もそういうことを言うし、まず院の構成だけをやろう」という。

ところが院の構成をやるうというところ、そこが突破口になるわけですね。せっかくガチツと止めておいた水門がそこだけ開いて、議長選挙はとにかく入ってやってやるわけだから。そうすると、議長を決めておいて、その上の総理が決まらんというのはどういふことなのか、ということになる。

それで押せ押せになって、「勝負があつたな。いよいよ札固めをやつて、一票でも多くせい、話し合いとかなんとかしている時間はないぞ」ということで、実務者会談だけで決められないから、それぞれ持ち帰って、おやじに話した。おやじたちも、「もう仕方がない、やるう、その代わりみんな自分の分担の票だけは逃がさないように、増やすようにしろ」ということになった。

あの頃は本当に赤坂の店はどこにいてもいっぱい、お互いに馴染みの店があるんですけど、派閥の馴染みの店は、その店が泣くぐらい他派閥は行かなくなります。話が洩れるから。それから、今日はちよつと遠出しようといつて浅草に行つても、靴がたぐさんあるところは、「ここは誰が入っている？」と聞いてね。そんなところで洩れてもいかんしな(笑い)。

■四十日抗争3 (主流派と中間派)

伊藤 これは、田中・大平が片一方で、福田・三木・中曽根がもう一方となるんですが、こぼれた中間派みたいなところが少し残っているんでしよう。

海部 少しは残っています。その中間派というのが、いまちよつと申しあげたように、われわれの一代前の議運、国対をやっていた元実務者の人たちで、あの頃は、「わしは大平の家来じゃないよ」なんて言う人もいたしね。山中貞則あたりはその頃、大きな声でみんなに聞こえるように、「僕はね、海部君ね、あんな中曽根よりも、君の方が仲がいいぞ」と言う。「そんなこと、大きな声で言っているんですか」というと、「いやいや、それはそうだ、おれは中曽根の家来ではない」という。本当にそういうことがあつたし、田澤のように、本当に一辺倒の者もおれば、いろいろあつたんですね。伊藤 これは国会に二人が立候補すればいいですが、ほかの党の態度がどうかということで相当影響するでしょう。

海部 ほかの党とおつしやるけれど、ほかの党は、対岸の火事や喧嘩は大きい方が面白いといって、傍観して眺めておるわけですね。あのころはまだ例の民主党が社会党と民社党に割れておって、民社党の国対委員長はたしか池田禎治さんじゃなかったかな、たしかイケティだった。そしてイケティさんは「どうじゃ、どちらが優勢じゃ」といって、よく探りを入れて来たものですよ。それで「いっぺん三木さんに会わせろ」と言うから、「都合のいいときに会わせませんが、人にしゃべっちゃいかんよ」「わかった、わかっておる」という。それで密かに場所を決めて、「ここに来てください、三木はそこにいますから」といって会ってもらったこともある。

伊藤 味方にはならないですか。

海部 味方にはならん。「一票入れてくれるか」と言っても、「貴殿、何を申されるか、まだ海のものとも山のものともつかん」といって、ああいう大政治家だから、結局楽しむわけです。

伊藤 対岸の火事を楽しむわけですか。

海部 佐々木良作さんのほうが、民社党の中では毅然としておったな。けれども、一説によると良作さんは、大平の陣営で数えているんじゃないかという話があつて、その一覽表も見せてもらったこともあつたな。だから両方とも勝手にマルをつけるわけですよ。これは話がついた、これも話がついた、といつて。けれどもついておらんこともあつた。また本会議場でそこまでやったら、これは憲政の常道に反するわけですから、自民党の枠内で取れる票だけ取って、一票でも勝って、本会議を乗り切ろうというのが基本姿勢ですし、またそれ以上のものはなかったんです。

伊藤 なかったんですか。

海部 ああ。かろうじて出て来たのが、あのときじゃなかったかな。新自由クラブが大平に流れたのは。あのときも語れば長い物語がいっぱいあるけれど、佐々木義武あたりが、何が入っているというか知らんけれど、大きなものを持って来てドーンと下に落としました。「拾って来い」という。拾って来いといつても、勘弁してくれよ、

そんなことは。朴訥な人だから。

佐道 主流派のほうは新自由クラブを抱き込んで、首班指名では勝つわけですね。しかし非主流派のほうも、もともとは分かれた新自由クラブですし、特に先生はパイプも非常に太かったわけですね。

海部 だから田川誠一とか、河野洋平とか。

伊藤 西岡「武夫」さんとか。

海部 西岡はしよっちゅうあれしていたから、そしてそれはちゃんと話をした。最初から記名投票の場合は、本会議では一票入れるわけにはいかんけれど、できるだけのはれはしますということだったな。

伊藤 マルをつけたんですか。

海部 マルはつけたさ。たいへん失礼だけれど。

伊藤 どのぐらいで負けたんでしたっけ。僅差ですね。

佐道 僅差ですね。

海部 そんなにたくさんじゃないですよ。一〇票だ。大平一二五票、福田一二五票。

伊藤 これは事前には勝てると思っていましたか。

海部 これを取れば勝ると狙ってやっただけでしょう。

伊藤 いや、海部先生の側はどうですか。

海部 それは、勝つつもりでおったけれど、結果は一〇票差で負けただけです。

伊藤 何が狂ったんですかね。

海部 それは、入れてやるという人が入れてくれなかった、それだけのことだな。人間不信がここから生まれるわけです。

伊藤 入れてくれるといつても、大平・田中派からは入れてくれる人はまずないでしょう。

海部 はるかに考えれば、あのとき田中派から三木武夫に入れた人もあるのではないか。それは三木が三木内閣をつくったときに一本釣りを入れた田中派の議員がおったでしょう。あの人のところには僕らもお使いに行っているわけだから、そういう微妙なグレイゾー

ンはあることはあるんだ。

伊藤 そういう大きな派閥だと、一番外れの方はグレイゾーンになるんですね。

海部 そうそう。そして、加藤常太郎さんなんていう人も、田中派におったのではなかなか大臣になれなかったんだから。それで「ツネさん、こんどいつべん大臣になつてもらわなければいかんぞ、とおやじが囁いておるぞ。ちよつと会つたらどうだい」といったら、「いや、いや」といって、結局なつたからね。加藤常太郎は三木内閣で……。そうしたら三木派の中から、「誰がああいうくだらん事をやったんだ、あんな者を連れてきて入れて」という不満が起つた。こつちは百も承知だけれど、黙っていた。そんなことはべらべらしゃべることじゃないからな、「まあまあ我慢しなさい。それは三木さんも高い次元に立つて考えたんでしよう」と言うぐらいだね（笑い）。

伊藤 でも結局これは、新自由クラブの動向で決まったという勘定ですね。

海部 だってたつた一〇票だもの。新自由クラブの票で勝つたんでしよう。あのころ新自由クラブの票は十何票だったかな。

■四十日抗争4（分裂の回避と財界）

伊藤 そうですね。敗北のときの感じはどうですか。よくまあ分裂しなかつたものだと思うんですが。

海部 あのととき分裂したらまた面白かつたんだよな。面白かつたと言えるのは、僕らはあの頃、分裂しようが分裂しまいが、自分自身の選挙だけは自信を持っていたから。あの頃の実務者たちは、よしやれ、ここで、と言っていた。三木さんなんかも、絶えず全国の政治情勢を見ては、「君は大丈夫、君は大丈夫、本気になってテコ入れしなければならんのはこれとこれだな」というようなことをいつ

も頭の中で弾いておつたんですからね。そういう選挙になると心配だという人は困るだろうけれど、選挙に自信があるやつは、あのころ「分裂した方がいいじゃないか、こんなわけのわからんことをやっていて、裏に回つて足の引つ張り合いばかりしているんだつたら、わかりやすくきれいにならないから、そうしなさい」と思っていた。僕は分裂した方が、あのときはみんなが精神状態もよくなったと思いますよ。

伊藤 海部先生ご自身は分裂派なんですか。

海部 あのとときはね。

伊藤 新自由クラブが自民党から分裂するのとは違って、ほとんど半々ですからね。しかしもし本当に分裂したら、党本部の取り合いで大変だったでしょうね。

海部 まずそこから始まりますね。

佐道 分裂をとどめたのはどういうことですか。

海部 誰があのととき主導的な役割を果たしたのか。ああいうときは変な話で、「空気」が出てくるわけだな。

佐道 割れちやいかんよ、という空気ですか。

海部 そう、割れちやいかんという空気だ。いつでもそうだ、最後は割れちやいかん、ということになつちやう。それは共通の利益に反するぞ、ということだ。いまでもそう言い続けておるんでしようけれど、それでは世間が見ておつて、口で言うだけで行動が伴わないじゃないか、もうちよつと期待しているから、こうやつたらどうだと。

例えばごく最近の例で言えば、加藤の乱のときに外野はあれだけ「やれ、やれ」といって支持しておきながら、結局加藤「絃一」がああなつたのも、分裂しちやいかんぞ、というあれが働いたんでしよう。だから分裂するときというのは、自分自身のこと置き換えてみると、選挙は大丈夫だろうか、ということが第一の心配になりますよ。

伊藤 そうですね、具体的に思い浮かべられるわけでしょう。分裂

した場合、向こうは自分の選挙区に誰を立ててくるか。

海部 立つようなやつがおるところは、なおいかん。だから選挙に弱いやつは、こういうときには勇ましい意見は絶対に言いませんし、分裂派には入りません。

佐道 各派閥で見ますと、もちろん海部先生は大丈夫なんです、選挙に強いといわれるのは田中派ですね。福田派がどうか、中曽根派がどうかというのと、どちらかというと、当時の非主流の方が弱いのではないかという気がするんですが。

海部 一般論としてはそうですが、事実一般的にいつても、そういう影響を受けますね。

佐道 このときは結局割れなかったわけですね。加藤の乱のときも言われたんですが、だからといって、非主流派の方に大きな懲罰的なことがあったわけではないですね。

海部 ないわけですね。

伊藤 それをやったら分裂ですね。

海部 やったらすぐ分裂ですよ。

佐道 分裂させないために、そういう方針はすぐ決まるということですね。

伊藤 しかしよそで、分裂させてこの機会におれも政権の一角に入ろうとか考えるのはいませんか。例えば民社とかですね。

海部 民社はもともとそうだったじゃないですか。特に春日一幸のおじさんなんか描く絵はそういうものです。

伊藤 公明だって、この機会に――。

海部 公明はまだちょっとそこまでは――。少なくとも僕の感じでは、民社はその気になって来ておるけれど、公明はそうではなかったと思いますよ。公明はちゃんと全部、背景に通報ですもの。だから、行って会って飯を食ってくるときでも、今日はここに行つてやってくるよと報告して来るんだ。その日のうちに、ここにおつてこうしますよと報告するわけだ。どんな話をしたかということもあの頃、田中は心からそういうことを許していなかったんじゃない

ですか。

伊藤 公明を、ですか。

海部 公明まで入れてやるのはいかんと。

楠 公明も乗りにくい位置にいたかもしれないね。田中批判が世間にあつて、本質的には田中派と一番通じている。もちろん福田には政策的には乗ることができない。そう考えると、まだ公明党と田中派が合体するという段階ではなかったかもしれないね。

伊藤 さっきまで外野で見ていた人が、分裂を見て楽しんで、ついでに自分も政権に乗りうと。

海部 やがて中長期の目標として見れば、政権にも入りたい、いわゆるこのごろ公明がぐらつと墮落してきたそのもととは、わがほうから大臣がとれるんだ、なんて喜んで言うようになったことじゃないですかね。

伊藤 でもこれは長期的に見ると、その後の自民党の分裂、宮澤内閣での五五年体制の終焉というところにつながってくるわけですね。まだこのときはそれほど――。

海部 このときはそれほどでもなかったし、まあ言いにくい話だが、財界が真剣になって、「自民党を割ってはいけませんよ、割ってくださるな」という。

伊藤 ということは、財界の影響力が――。

海部 財界の影響力がまだまだあったんだ。そのときに、のちのち自由社会研究会の核となるような――。あのころ僕らは、主流でも非主流でも、横の連絡はがっちりしていましたから。だから竹下

「登」さんも安倍「晋太郎」さんも、おれも田中六助も、一緒になつて飯を食つて情報交換をしたり、親分があれしているからこれをやろう、これをやるとおまえのほうは勝てるか、というような話もいっぱいした。またある程度本当の話をしないと、向こうも本当の話をしやせんし。そうやって情報交換もよくやったものです。

それは「NATO」だな。ノー・アクション・トーク・オンリーだ。しゃべることとはしゃべるけれど、アクションは起こさなかった。

みんなそれぞれ派閥に帰って忠誠を誓っておるわけですね。ところが、財界の方は、それを見て非常に心配したわけです。だからあるところで、安倍晋太郎と僕が呼ばれて、「自民党を割ることだけは絶対にやめてください」と言われた。

■四十日抗争5（東西冷戦との関連）

楠 先生、私は学生に、なんで自民党がその後分裂したかという説明に、ごく簡単に言えば、敵がいなくなったからだという説明をするんです。つまり冷戦が終わって、ソ連という外の敵、中にあった社会党という敵が、消えたり弱くなったりした。だから気楽に分裂できるようになったんだ、と説明しているんです。それは一つの後知恵みたいな話ですね。実際にこの当時はまだ冷戦が激しい時代でしたね。年表を見ますと、レーガン大統領当選なんということがありますが、そういう冷戦の中にあつて、いま自民党が分裂すると敵を利する、という意識はありましたか。あまりそれは関係なかったですか。

海部 そのままで視野に入っていなかったんだよな、みんな。

楠 足し算をしていけば、自民党が真つ二つに割れた場合、社会党があつて、これが二つに割れたうちの半分ぐらいの数はいるわけですね。可能かどうかは別にしても、それにほかの野党が相乗りしてしまえば、野党軍の政権が取れますね。それが可能だったとは思いませんが、足し算をすればそういう状況にもなったわけで、そうなると、途端にいままでと質の違う政権ができる可能性もあるわけです。分裂しちゃいかんという意識の底には、そういう冷戦の意識があるかなと思つたんですが。

海部 それはご意見としては、いろいろな方面から考えられた結論でしょうから、それが間違つておるとかどうだとは言いませんが、われわれはあのころ、そんなことは視野に入れていなかったんです。

よ。東西の冷戦が続いておるからどうのこうのではなくて、目の前の敵が、あまりこいつらは強くない、蹴散らしていける。それだけこちらにも体力があるし、やれる。だからこんないやなやつは、俱に天を戴くに値しないやつだというような、もつと視野の狭い、スケールの小さい地盤での争いで、絶えずそのときの算盤は、どのぐらい当選できるか、味方はおおかた撃たれたりで死んじやつてはいかんけれど、残っているならそれで力に残るじゃないかと。

楠 東西冷戦の中で、東に通じるような社会党とか共産党に乗ぜられるような危険があるという意識は、あまりなかったんですね。

海部 ないと思つていた。それは絶えず背後の、財界とか経団連とかあの頃の組織が、「割れんてくださいよ、割れると大変なことになります」と言ってきた。「何を言っているんだ、おまえらは」という感じで聞いておつた。また獅子身中の虫とも言ふべきような論文を書く人がおつて、名前は言わんけれど、何年か先にはエンプロイーの時代になる。エンプロイーが力を持てば、社会党政権に変わるんだ、という。

楠 Iさんですね。

海部 「中央公論」で読んだことがある。けれどもそういった流れを既成事実として捉えて見ている人はごく一部であつて、エンプロイーの数が増えていったら、エンプロイーの中に手を突っ込んで引いてくればいいんだから。

楠 ただ、そういうものを利用して、財界から献金を取るようなことはあつたんですね。

海部 あつた、あつた。おありだ。「おまえら、割るな、割るな」というのなら、割らん代わりに、ちよつと献金出さない」と。それからもう一つは、エンプロイー方が増えていつて票がみんなそっちに行くというから、僕は党大会で「そういうことを言う先輩もおつたけれど、自民党はその声を謙虚に聞かなければならん」と言つて、あのとき自民党本部の広報委員長室に初めて労働組合の代表を集めて、党本部で昼飯会をやったこともあるんです。意見をいろいろ

る聴きましよう。そして社会党の中にも手をつ込んだわけですから。

楠 ときどき自民党は、自由社会の危機を選挙で訴えたりしますからね。

海部 まあ、一応は（笑い）。

楠 それが、どこまでが本心でそう思っておられたのか伺いたかったんですが。本心というか、実感としてそう思われていたのか。

伊藤 全然ないわけではないでしょうけれどね。

海部 全然ないわけではないが。ただ、こう言ううちよつと生意気に聞こえるから、この言葉は使っちゃいかん言葉だが、選挙の結果の得票を見ると、少なくとも私の場合は、毎回毎回票が増えていたんだ。そして労働組合の幹部と称するやつも、名古屋に帰ってちよつとと呼んで集まると、来てはいろいろおいしい話もしてくれるわけだ。現に、ゼンセン同盟なんていうのは組織ごと僕に票をくれたことがある。日教組の一部も僕に票をくれたことがある。そんなことから行くと、皮膚感覚で怖いと思ったことはないんだよ。

石田博英はさかんにそれを言っておったんだ。必ずそうなるぞ、ということ「中央公論」にも書いたんだ。

伊藤 そうですね、いつ逆転するとかね（笑い）。

海部 あの人の欠陥の一つは、そういうことを物理的に証明するためか、利口者に見せるためか、何年先の選挙ではこう交わる、交わったときには終わるから、それまでにこちらは改革をしなければならんというところに問題を落としておったから、それはいいけれど、そんな危機感はこちらは持っていなかった。選挙のたびに票が増えるんだもの。

佐道 あの論文の主旨に則って、自民党もウイングを広げて、という分析をされる方もいるんですが、そんなにピッタリしたものでもないですね。

海部 結果として来ませんでしたね。それからもう一つは、結果としてそのときそのときに、政策も協力しなければいかん。だって考

えてごらんない。あの頃社会保障政策を一番最初に採り入れて実現したのは、われわれ自民党の政権ですからね。野党は演説とビラだけだ。演説とビラだけではよくありません。われわれは予算をつけた。そうすると先取りして、児童手当を付けましょうとかなんとかかんとかいうポスターだけ貼る政党もあのころ出て来たよ。ポスターだけでもよくなります。

■四十日抗争6（連立政権構想と組合）

佐道 いまの楠先生の質問との関連ですが、ちようどこの一九七九年から八〇年の初頭にかけては、公明・民社・社会党も乗ってきて、いわゆる連立政権構想がどんどん出てくる時期なんです。それを見て、自民党の側が危機感を感じたということではなくて、自民党の中の状況を見て、そういう野党が、これなら保守が分裂した場合には政党の枠組で政権を取れるということで、急遽そういう活動を始めたと考えたほうがいいですよ。

海部 そうだと思いますよ。そんなことを期待されてもかなわんという雰囲気もあったし、自民党から現実になんとなく手をつないで政権が取れたら、なんて真面目に思う人はいなかったんじゃないかな。真面目に思っ、そんな政権をつくったら、とりもちを踏んだようになっちゃって、政策が動きはせんよな。

それは加藤紘一でも、それから名前を言うといまの総理だから差し障りがあるけれど、小泉純一郎でも、山崎拓でも、あいつらがYKKをつくってやり出したころ、おれに対しては、「あんたは竹下や田中派の援助があつて、あれが切れたら宙に浮いちゃう。だからああいふ連中と一緒にやっていかなければならんから、なんののかん」と言っておった。けれども「そんな心配するな、そうだったかならんか見ておれ。今度政治改革法案を出せば、田中派や竹下派が一番嫌うことがそこには出てくるし、きっとそのときになると、目

先の利く田中派は竹下を中心に、みんなこっちに来て一緒にやるんだから」と言った。

政治改革のあれは、三木さんの考え方が正しいんだということを竹下が僕に言ったんだよ。三木さんにそう言ったら、「誰でもいいですよ、いいと言ったら君ね、しっかりそれを何回もリピートさせて、それじゃあ協力しろよ」といつて追い詰める。利用されてもいいんだ。それがよしんば結果として竹下の勢力拡大につながってもしいじゃないか」というのが三木さんの考えだったわけだね。竹下はそれにもちよんと乗って来たわけですからね。それに乗せられた格好をして、志を遂げればいいじゃないか、という思いがこっちにもありました。だからみんな自民党の中の争いですよ。

伊藤 やはり外に手をつ突つ込むという必要もなかったんですね。

海部 なかったんだ。ただ余計向こうを慌てさせるためには、労働組合でもこっちになびきそうなやつはちよつと取っっちゃえというところで、日教組対策とか、ゼンセン同盟対策だ。それが僕の場合には政策的にも選挙区的にも一番近かったから。どこに行ってもみんなおるわけだから。ガチャマン時代には繊維がとにかく多かった。

伊藤 それはゼンセン同盟ですね。

海部 ゼンセン同盟だ。それから日教組。

伊藤 日教組は全国至るところにありますからね。

海部 この日教組の中にも主流と非主流があつて、主流じゃない日教組の中で、今でこそ日教連なんというのもあつて、あのころから割れているわけです。それからもう一ついうと、日教組の組織率が、よく調べてみると、必ずしも増えていない。

伊藤 増えていないどころか減っていますね。

海部 減っているんです。それは新たに採用された教師たちが、あのころから入らなくなったんだ。それならその隙間が空いているだろう。その隙間に手をつ突つ込んでやつつけちゃえ、ということいろいろやりました。そういうことをエトセトラ、エトセトラと合わせると、お家騒動をやっているにも負けることはないし、大丈夫だ。

相手は大したことはないわ。

そんなことは外に行つては言いませんでしたが、演説なんかでは、「今度の相手は本当に強いから、こっちも死に物狂いです」と言うけれど（笑い）。それから、そういう気持ちがないと有権者に伝わりませんからね、あれも自惚れちゃつて勝ったつもりでおる。生意気だ、傲慢である、という印象を与えたら、選挙のときに票は激減しますからね。だから自分自身もその気になって、悲壮感を持つていなければならぬ。そういうことでやつてこなければならなかったと思いますね。

伊藤 選挙の要諦ですね。

海部 要諦です。それはみなさんには申し訳ないが、大隈重信に育てられた政治家は、そういうことになるんです。大衆を怖れてはいかん。大衆の中に入つて行つて、大衆と語れ。そして大衆は離れることがある。なぜ離反されるか考えろ、真心を込めて正面からぶち当たらんからだ。

佐道 福沢諭吉さんは違うんですか。

海部 福澤さんはちよつと違うな。慶應だからいかんという怒られる、差し障りが出るから、これ以上言いませんがね。福沢諭吉さんには、僕はいつぺん心から聞いてみたいことがあるといったことがあるんです。それは、あの人は「脱亜入欧」ということを言われた。大隈さんは「東西文化を統合して世界の平和をつくるんだ」と言っている。脱亜入欧と東西文化の融合とどちらが今日の、ということを説くと、やはりみんなさすがだという。

伊藤 歴史もそういうふうに使われるか（笑い）。

海部 そういうふうには、いいところだけつまみ食いするんですよ。そうすると、ヒトラーの演説じゃないけれど、大衆を全部自分の言いたいことのほうにまづ向けさせる。

伊藤 慶應出身の人がたくさんいたらどうするんですか（笑い）。

海部 だから初めに断わっておくんだ。「慶應の人は腹が立つたらうけれど、これは事実だ。福沢諭吉さんはそういったじゃないか。

どうして福沢さんの顔ばかりをお札に使うんだ。大隈重信を五千円札に何故使うわんか」と言う、ワースとなる。事実、金銀相互交換のときに大変な損をするのを助けたのも、大隈重信が大蔵卿のときでしょう。

伊藤 お札にならないですね。

佐道 そうですね。今度もあれ「紙幣デザイン変更」でも、福沢さんは消えませんでしたしね。

海部 だからそういうつまみ食いをして、大衆に訴えるときに、みんながそうだとワツと思ってくれるような材料をいくつか絶えずインプットしておいて、ここではこれが必要だと思うときには、それを引っ張り出してぶつわけだ。

■党広報委員長1（広報委員会の位置づけ）

伊藤 ちょうどそんなさなかに、一九七九年十一月に「自民党の」広報委員長に就任されますね。広報委員長というのはどんな地位ですか。

海部 広報委員長というのは、当時は党七役の一人と言われた。三役が「幹事長」「政調会長」「総務会長」ですね。そして「幹事長代理」というのをいつのころから党四役扱いにしたんです。総裁派閥は党の最高役員は出せないから、幹事長代理を出して、それを党四役と称して、党の最高役員会議に出られるようになったんです。そうすると、その三役にも入れない派閥はどうなるんだということ、それでは「組織委員長」と「広報委員長」とを党役員会のメンバーにしよう。それで六役か。それではいかなから、もう一つ派閥もあるから、七ついる。

楠 派閥の数に合わせるんですね（笑い）。

海部 そうだよ、もちろんそうさ。きれいな事を抜きにして本音を言う。そうすると、あとは「国民運動本部長」だ。これも入れて七

役。そこから先が奮っているんだ。幹事長の下には七人の副幹事長がおる。総務会長の下には七人の総務副会長がおる。政調会長の下にも七人おる。こう決めると、各派から一人ずつ出せるわけだ。

伊藤 それは派の大小にかかわらず、ですか。

海部 そう。そうすると今度は、幹事長代理を出す総裁派閥が、おれのところもつと優遇しろよ、と言いつつ。それなら、副幹事長は特別に八人にしてもいい。そうしたら、おれのところは参議院もあるんだから、あつちからも本部の副幹事長をとれという。じゃあ九人でいい。多いときは十人か十一人、副幹事長がおりました。伊藤 そうですか。じゃあ副幹事長というのはたくさんいるわけですね。

海部 たくさんいる。各派から一人ずつというのが原則であつたけれど、それでは大きい派閥、小さい派閥のけじめがつかんとか、変なことを言われて、それならやってくれよ、ということだった。

佐道 筆頭副幹事長というのがありますね。

海部 そういうポストもあるんですよ。ところが私が筆頭副幹事長のときは、総括副幹事長というのができちゃつて。

伊藤 どっちが上なんですか。

海部 どっちが上だといったら、お互いに両方とも上だと思っていればいいと。

佐道 融通無碍ですね。

海部 それは融通無碍ですよ。

伊藤 広報委員長というのは、その下に党本部に広報室とか広報局とか、そういうのがあるわけですか。

海部 事務的には広報委員会事務局というのがあって、そこに広報担当の事務局長がおります。それから、広報委員会の中に初めは各派から副委員長を七人ずつとると言つたでしょう。ところがあの山下徳夫を副委員長に三木派から拾ったときは、「ほかのと並びではいかんので、なんとか名前をつけてくれんか」という。それで筆頭副委員長という名前をつけてやったんだけど、選挙区では筆頭副

委員長といつても、副委員長の方に重点が置かれるから、「それじゃあおまえは委員長代理としたらどうだ」と言ったら、「それはありがたい、それを使つてよかったら、選挙区内だけでも名刺に刷らせてもらうから」というから、「ああ結構だよ、どこで刷つても」といった。それで、広報委員長代理という名刺はできたんだけど、実際に党の規約には、広報委員長代理はないんです。組織委員長代理もないんです。ところが筆頭副委員長はあるんです。けれども対外的には委員長代理といった方が一段上みたいに見えるから、そうしてくれという。

だんだん副委員長とかいうものが増えていったものだから、最後は広報委員会の三役会議をつくつて、委員長と委員長代理と筆頭副委員長の三人でだいたいのことを決めていた。結局三人ぐらいで決めないと、行動要領でも、全国遊説をやるときに、どこどこでやるとか、何と何をキャッチフレーズにしようとか、そんな各派を一人ずつ集めて、十二人も十三人もおつたら蜂の巣を突いたようになって決まりはしませんからね。

■党広報委員長2（広報委員会の仕事）

伊藤 広報委員会というのは何を担当するんですか。

海部 これは読んで字の如く、党の広報でありますから、広報委員会の出している雑誌がありますね。党の機関誌です。

伊藤 機関紙、紙の方はどうですか。

海部 紙の方は新聞局の担当になりますが。

伊藤 委員会の下にあるわけですか。

海部 委員会の中に機関紙局があるわけですか。

伊藤 雑誌はまた別ですか。

海部 雑誌の「自由民主」というのは月刊誌ですからね。

伊藤 紙の方も雑誌の方も、両方ともですか。

海部 はい。これも融通無碍ですから、機関紙にいろいろPRしたいことがあったら、雑誌に使う材料をまず上げておいて、それを総括的にまとめて出すというようなこともしました。そのうちに、どうも自民党の機関紙は硬い、「自由民主」も硬いという。たまたま出ているのは、地方選挙がどうか、誰が勝ったとか誰が負けたとか、どこの派閥はどうなっておるとかという記事しかないから、面白くない。地方の婦人局から、もつと面白いものも出してこれといわれて、私のときに「りぶる」という名前の婦人党员対象の雑誌を新たにつくつたんです。それはなるべく面白おかしく、ご婦人を対象にやるんです。「最初の対談は加山雄三を連れてこい。あれならばおれでも対談するよ」といって、加山雄三が来て、広報委員長との対談というのが、「りぶる」の創刊号のカラーグラビアと内容を飾つたわけですね。そしてそれはいくらかで買ってもらつて、婦人局の組織拡大には、「りぶる」がずいぶん役立ったと思つています。いまも続いているのかな。もうなくなつちやったんじゃないかな。

伊藤 どうですかね。それは婦人局で出したわけですか。それとも広報委員会ですか。

海部 広報委員会でした。

伊藤 広報委員会というのは、そういう定期刊行物のほかに、まだ何かあるんですか。

楠 さつき遊説の仕切とおつしやいましたね。

伊藤 遊説もそうなんですか。

海部 はい。

楠 遊説局との関係はどうなるんですか。

海部 あれは全国組織委員会の遊説局であつて、広報委員会の方は、正面に出て行つてやる。国民運動本部というの、あとから派閥の頭割り、中小派閥を救うためにつくつたものだから、国民運動本部は何をやるんだということになる。これもまた出て行つて、街頭演説から何からやるわけですから、広報委員会と似たようなことをやるじゃないか。そこは話し合つて決めよう。選挙が始まつたとき

は総裁遊説、閣僚遊説、そこまでは広報委員会が全国統一的にやる、日頃のPRは国民運動だから、国民運動本部の仕事でしょう。

その代わり一年生議員の登竜門にしよう。一年生議員はみんな国民運動本部の副本部長にしちゃえ。だから名称はみんな国民運動本部副本部長という名称を持つ。そこで真面目に働いたやつは、その先、政調なり組織なりで優遇するぞ、といってみんなを励ましたわけですね。そして北から回るとか、今度は南から回ろうとか、いろいろ国民運動のあり方、それからこれをテーマに使おうということを決める。例えば教育改革とか、あのころはまだ環境というのはあまり賑やかではなかったですけどね。

伊藤 広報委員会の委員長はけっこう忙しい仕事ですね。

海部 はい、忙しい仕事ですよ。

伊藤 しよっちゅう党本部に行くということですか。

海部 そうです。そして、党の役員会には毎週出なければならんし。

伊藤 その七人ですね。それは総裁も出てくるんですか。

海部 まあ、暇なときは出て来ます。

伊藤 それは幹事長が――。

海部 幹事長が責任を持って取り仕切る。

伊藤 その役員会で何をやるわけですか。総務会とは違うんでしょう。

海部 違う。外に出していけないこと以外のことをそこでやるんですな。

伊藤 表向きのことですか。

海部 表向きのことです。それは終わってから新聞記者が、「何を話したんですか、何を決めたんですか」と聞くし、耳を当てて中の話をだいたい聴いていますからね。

伊藤 それで聞こえるものですか。

海部 ドアに耳を当てて聴いていると、だいたいわかるんじゃないか。だからどうしてもこれは聞かせてはいかん話というのは、別の部屋に行くとか、三階の総裁応接に入るとか、場所を変えて逃げ回

ってやったわけです。職員を張り番させて、耳をつけるやつがいたら、ケツを蹴つ飛ばせといって追い払ったものですよ。どこでもそうです、社会党でも共産党でも、院内の会議はみな耳を当てて聴かれちゃう。

佐道 広報委員長というのは、党の広報関係のことはあらゆることをカバーするということですね。このときの自民党は、普通の国民からすると、四十日抗争に明け暮れていて、その前の田中さんのスキャンダルから、その後のグラマンの事件もあり、ハマコーさんの事件もあり、KDDの問題もありということでは、はつきり言ってもかなり難しい状況にあったと思うんですね。国民的な評判ということ言いますと。そうすると、それをどうやってイメージアップするかという話になっていくと思うんですが、まず何をしようと思われたんでしょうか。

海部 それは国民大衆を怖れてはいかんから、まず宣伝車を持っていつて街頭演説をやるうと。「皆さまのお怒りやご不満はよくわかっております。たしかにあれは間違いです。あれはいけません。わかりやすくきれいにやろうと思っているんだ」ということから始めて、「謝るべきは謝るが、何もやらなかったらどうなりますか。泥棒だつて喜んで入ってくるかもしれない。交差点に行ったら交通渋滞で巡りがいなくなったら、がちやがちやになる。そういう混乱をしないためにも、齒を食いしばって、われわれはきれいな政治をやっていかなければいかん。わかりやすい政治をやらなければいかん。大変残念な話であるが、よくないことをやった人にはお引き取りをいただくということになる」、そういうPRをやれと言って、全国でやったんです。

伊藤 全国でやる場合は、議員さんですか。

海部 広報委員会の専属の議員や、それこそ広報委員会に所属していなくても関係ありそうなやつを連れてきてはやったわけでしょう。伊藤 やはり広報委員会がどこで演説会をやるうと言ったら、議員さんをつかまえることができるわけですか。

海部 できるわけです。それは党の役員会を通じてオーソライズしておくから。毎週の役員会に出て行って、「今度広報委員会はこういうことをやるから、それぞれの理解と協力を求めます」という。言う内容も少々過激なことを言うかもしれないが、それぐらい言わなかったら、いま国民は怒っているんだ。だからそのレベルにまでいっぺん下りて、入っていったら、そこからなるほど生まれ変わらなければならないとわかってもらうように、みんなで汗を流さなければいけません。

伊藤 みんなで汗を流すのはいいですけど、演説の人とか、どうにもならないような人がいっぱいいるじゃないですか（笑い）。

佐道 それは選別されるわけですか。

海部 それはもちろんそうです。それは「あああ」と言っているだけじゃ駄目です。

佐道 テレビはどうなんですか。テレビも積極的に活用するということになりますか。

海部 テレビ局からの申し入れは、当分のあいだ広報委員会を通さなければいけません。広報委員長のところにも各局から来て、いついっとうという番組をやるとか。

伊藤 それは討論会や何かですか。

海部 そうです。そうすると、誰を出すかも決めるわけです。それは広報委員長の三役会議で決めますね。これはどうだ、と。

佐道 テレビに出たいという人もいるわけですね。

海部 あまりあのころは、出たいやつはいなかったよ。

佐道 ああそうですか。最近のことなんですね。

楠 それでは党の了解もなしに勝手にテレビに出るといふことは、その時期はあまりなかったわけですか。

海部 勝手に出るやつもおったでしょう。網の目をくぐるようにマンツーマンで直接交渉してね。いまやだいたいそうなっちゃって、どこでチェックするか、党がいい悪いを認めるようなところがないですね。よほどのことがない限り。

伊藤 その当時は、討論会とかそういうことは決まり切ったことです。これはいい役者を出さなかったら大変でしょう。

海部 いい役者を出さないと、かえって反撃を食うのを出すといかんから、一応の了承はしますわな。ここへ出たいと思うがどうかと、誰を出したいということ。

伊藤 向こうから言ってくることもあるでしょう。この人をお願いしますと。

海部 あまり変わった意見を言うような破れを指名してこられても困るじゃないかということを使うこともありましたがね。でもああいうところに出して、それが本人にとっては選挙に影響が大きいということで、出たいやつは出たいわけだ。

伊藤 下手の横好きというのがありますからね。

■八〇年総選挙

佐道 翌八〇年の五月にはまた選挙ですね。選挙の経緯はまたいろいろ問題があるので、あとで聞きたいと思いますが、選挙戦に突入するということになると、広報委員会は国民運動本部と分担して、全面的にそれに入っていくんですか。

海部 それは選挙対策本部が立ち上げられるところになると、選挙対策本部の中に広報委員会も国民運動本部も、場合によっては全国組織委員会の一部も全部集まって、選挙本部の何々となる。それから選挙本部に遊説案ができますから、選挙本部の遊説案で、広報委員会も入り、国民運動本部も入り、みんな入ってやる。そういうところになると、党本部の執行部の方でも担当が決まって、担当副幹事長が来ては、「この人」とこの人は強いので応援に行く必要はない」とか、「この人はちよつとテコ入れしなければいかん」とか、「総裁遊説をやるときはこういう人たちですよ」ということを予め決めてくる。総裁派閥の中の弱そうなやつとかね。こいつを当選させたら、

将来もうちょっと勉強させたら使えるかもしれないというリストもできるわけだ。

伊藤 それはどこが作るわけですか。

海部 それは各派の副幹事長が集まっている会議で決めるわけだ。各派から出し合って。

佐道 この八〇年の選挙は、結果的に大平さんが亡くなって大勝するという選挙ですが、まさか選挙になるとは思わなかったといわれていて、急に選挙になったわけですね。それで四十日抗争以来の主流派、非主流派の自民党内部の抗争も引きずったまま選挙戦に入っていくということになりますが、なかなか調整とかも大変だったのではないですか。

海部 そうはいうものの、あのときもやりました。それがなくて、両方入り乱れて無秩序なことをやったら、みっともないからということだ。あのころは自民党には美意識がまだ残っておったんだ。だから守らなければならない一線、乱れてもいいがここまでではな、という乱戦は防げということですね。

伊藤 これは分裂選挙ではないんですね。

海部 結局、分裂選挙にはなりませんでした。要するに様相はそうなっても、表面は繕ってやっていかなければいかんという認識があった。

伊藤 総裁の遊説も、反総裁派の人のところにもちゃんと行くんですね。

海部 一応はオファーするんです。そうすると、「そんなもの来てもらわんでもいい」とはよう言わんですからね。「ちよつと取り込んで準備不足で、動員力が欠けるかもしれないが、よろしくどうぞ」なんていう返事がくる。来たかったら来い、ということですよ。伊藤 ああ、そういう意味ですか（笑い）。そうですね、来たかったら来い、というのはそういうふうに言うんですか。知らなかった。海部 だから宇野宗佑なんてかわいそうに、選挙の最中に、参議院だったな、党本部でしか演説できなかったんですよ。党本部の前で、

党の職員とかを集めて総裁第一声をやって、テレビカメラがジャーッと回って、手を振りながら官邸の横へパツと降りただけで、総裁遊説は終わったんです。それは稀有な例ですよ。象徴的な例ですが、楠 全国的に準備不足になっちゃったんですね（笑い）。

■韓国との関係

伊藤 突然話が変わりますが、ソ連がアフガニスタンに侵攻するということになりました。これはどんな感じで受け止められていたか。

海部 今日ほどアフガニスタンのことが日本では一般的ではなかったです。アフガニスタンというのは、カブールだとかへ行くと高層の建物があるということもわれわれは知りませんから、煮ても焼いても食えんところ、何も無いんじゃないの、と思っていまして。ただ戦争だけは、ああいうところだから強いということ、それ以上のものはありません。予備知識はないし、私はアフガニスタンに行ったことがないし。

伊藤 ソ連圏以外にところにソ連が軍隊を出したのは初めてでしょう。

海部 しかも勝てなかったんですからね。

伊藤 それはそうですが、始めたときは勝てないとは思わなかったと思います。

海部 勝つつもりで行ったんだもの。

伊藤 勝つつもりで行ったし、周りも「ソ連が」勝つんじゃないかと思いませんでしたか。アフガニスタンがソ連をやっつけることができるか、と思っていたんですけれどね。だけどあまり日本に直接関わらないから、それほど印象はないということですかね。

海部 印象は強くないんです、申し訳ないけれど。

佐道 国外ネタで大事なことを一つ聞き忘れていたんですが、七九年にはお隣の韓国で朴正熙大統領が暗殺されるという事件がありました。こちらの方がインパクトがあつたんじゃないかと思いますが。海部 それはそうです。その方がうんとインパクトが大きいですね。しかも韓国については、日本人はそれなりに思いも惑もあるわけですから。

佐道 これはニュースをお聞きになったときにはどういうことをお考えになりましたか。

海部 怖ろしい国だなと思った。変な話だけれど、いまの韓国は北朝鮮という反面教師がおるから、物わりのいい紳士みたいに思つておるが、白昼堂々とコレ「銃撃」でしょう。怖ろしい国だな、なかなか信用できない怖ろしい国だなと思った。

楠 これは軍人がやつたんでしたっけ。

佐道 このときはそうですね。

伊藤 しかしこれは日本の政局にはあまり影響はありませんね。

海部 はい。コリアン・ロビーの一部にはいろいろあつたでしょうけれど、日本の政局全体に影響はないです。

伊藤 先生はあまり韓国は関係ないんですか。

海部 いや、あまり深入りしていません。

楠 日韓議員連盟とかは関係ないですか。

海部 それはおつき合ひでしています。そして、最初に三十八度線に招かれて行つたときは、青年局長として青年局の代表を連れて行つたこともありますし、ヘリコプターで三十八度線の上空から現場を見たり、話を聞いたりしたこともあります。そして、定期交流をやるうということもあつて、全国の青年組織の代表を各県ごとに三人ずつぐらい集めた。それでも百何十人になるんだ。

伊藤 向こうの政治家とつき合つて、向こうの政局になんとかく関わるということはないわけでしょう。

海部 向こうの政治家といつても、行けば大事にしてくれるし、われわれのカウンターパートは、二人の李がおつて、無任所国務大臣

だつたね。日本にもちよいちよい来ましたね。それから丁一権、当時の国務総理じゃないですか。われわれが最初に韓国に行つて、丁一権さんなんかと仲良くなったころは、まだ日韓国交正常化の前だ。そしていろいろな話を聞いた。ただ、日本は民主主義の徹底した国になつておつたけれど、向こうはあまり徹底していない民主主義ですから、真つ黒に塗つたジープに乗つて、若手議員がわれわれを迎えに来て、そしてピッピッピーと乱暴に笛を吹きながら、バスも車も止めてヒューンと走つたりする。そんな体制のころでした。そしてあのころ、まだ日韓共同漁業水域の境目の話がついていなかったんですよ。

伊藤 李承晩ラインですね。

海部 そう、大陸棚議論からいくと、韓国が非常に有効になるし、それでは日本と韓国の等距離のところに線を引こうかなんていう案をいつた人もありました。そんなことで揉めている最中で、河野一郎、洋平のおやじが、河野派の宇野宗佑とおれを呼んで、きちんとやつて来てくれよ、と言つた。日魯漁業の方から頼まれておつたんだらうな、いろいろ。

伊藤 平塚「常次郎」さんだな。

海部 これではひどすぎるということだね。そんなやりとりの影響がありました。私と韓国とのつき合ひは。ただそれ以上でもそれ以下でもなくなつたのは、忙しくてほかのことをやっているから、そう韓国ばかりとつき合っているわけにもいかない。僕はそんなころから日独議連の会長になりましたからね。日独議連の会長になつたら、お隣のオーストリアも陸続きだから、わかり切つたことだから面倒を見てくださいという。

■日独議連会長として

楠 なんで日独議連の会長に就任されたんですか。

海部 あれはドイツ側の議連の会長が、十何年ずっと会長を続けておって、ドイツの国会の中で毛色が変わった、なんといったかな、背の低い、ごつい、南の方の出身者で、党大会で、南の端の地方政党なんだけれど、「わがドイツの中心地からやってきたわれわれは」なんていう演説をやるくらい人気があったんだ。中川一郎を直したような顔をした男だよ。これと意気投合した。

伊藤 どこで意気投合したんですか。

海部 ドイツで。

伊藤 ドイツにいらつしやって、ですか。

海部 はい。僕はドイツは日独青少年交流の第一回の団長で、青少年代表を連れて行った。

伊藤 みんな青少年代表の関係だな（笑い）。

海部 そして、バイエルン州の山の中のテントで、合宿をしながら意見交換をした。それから、向こうのカウンターパートになった議員たちがベルリンに行こうという。ベルリンを見せずにあんな方を帰すわけにはいかんというので、ベルリンに行った。それは壁とか有刺鉄線がまだ荒々しいときです。そこでその日の晩に、みんなとの交流のときに、「みなさん、今度おれがベルリンに来るときは、ルフトハンザに乗ってこられるようなドイツを作っておいてくれ」と言ったんだ。あのときはルフトハンザが入れなかったんだ。占領下ですからね。アメリカ、フランスなんかの共同管理です。そんなころあの辺を統治しておったのが、ハンス・モドローという。その後東ドイツの初代の総理大臣になった男です。それとバイエルンの合宿も一緒にやりましたからね。そのモドローが総理になったときに私も総理になって、ドイツを訪問したでしょう。ですから、モドローと会うのもちよつと感傷的なところもありましたね。おまえよく頑張ったな、ということがあったから。

伊藤 それ以来ずっとなんですか。

海部 私はずっとです。ずっと日独議連の会長です。

伊藤 日独議連を作ったのはどなたなんですか。

海部 僕が作ったんですよ。それまでなかったんだから。

伊藤 ああ、それをお作りになって、自分が会長になったということですか。

海部 そう。

伊藤 どのぐらいの人数の議員さんが集まるわけですか。

海部 いまの日独議連は、日本の衆議院では、最も大きな五本の指に入る議員連盟ですよ。いま百五十人ぐらいおるんじゃないですか。

伊藤 出発のころはどうですか。

海部 出発するころは四十五、六人かな。そして、その後はいろいろあったが、自民党で原田昇左右というのがドイツ語がわかるんだな。それから大坪健一郎というのもドイツ語がわかる。それはみんな駐在したことが契機になっている。そいつらはドイツへの思いもあるから、入れと言って、スターティング・メンバーになって入って来ました。いまも引き続いてやっています。

伊藤 それは別に党派とは関係ないんでしょう。

海部 関係ない。ただ、共産党だけはちよつとご勘弁願いたいとみんな言うから、共産党だけは外れておるんですよ。

楠 この時代はまだ東がある時代だから、社会党も駄目じゃないですか。

海部 いや、東があっても、東ドイツの方も一緒に会長をやってくれときたから、一人で西と東の会長をやっておったら格好がつかんし、二股外交になるからよくないと思って、東の会長はこつちで考えてやるからと言った。ちようど院が違うから、参議院に行つて手を挙げると思ったら、手を挙げて応じてくれたのが土屋義彦ですよ。いまは知事になっていくれどね。

伊藤 ええ、埼玉県ですね。そうですか。

海部 だから東独議連の会長は土屋義彦、西ドイツの議連の会長は僕でした。それで東西ドイツが一本になったので、その後議連も合体して、日独友好議員連盟というものにした。最初にベルリンの壁を壊すときもおったんだから、あんなやつてくれと言われて僕が会

長になって、土屋はもう参議院を辞めて知事になろうというところだから、それで片が付いたということです。

伊藤 いまでも日独議連の会長なんですか。

海部 会長です。

伊藤 そうですか。じゃあずいぶん長くなりますね。

海部 長いですよ。ゲンシャーと海部俊樹が一番長いぐらいです。

佐道 日本の議連の中では東西ドイツが合体して、日本でも西が東を呑み込んだわけですね（笑い）。

伊藤 そうしたら、社会党もいるわけでしょう。

海部 いますよ。共産党だけは入れていないけれど。東中「光雄」というやつがおつて、「入れ」と言ったら「いっぺん党に帰つてよく相談してきますから」と、そんなものだった。「じゃあ席だけ空けておいてやるから、決心がついたら、これに署名捺印のうえ、一切規則には従います」といって、毎月三百円だったかな、の会費を納めてきたら、君は共産党を代表する幹事にしてあげる」といったが、何も言つてこないから入れていないんだ。

伊藤 言つてこないんですか。やつぱり朱に交われば赤くなるの逆だから（笑い）。

海部 向こうは警戒しているんだ。

佐道 朱が白くなつたら大変だ（笑い）。

海部 けれど、最近が変わってきましたよ。このあいだ中国と同じで、日本とモンゴルの国交正常化三十周年記念祝典があつて、モンゴルのバカバンディ大統領が「ぜひ一番機に乗つてきてください、大統領の賓客にします」という招待を寄越したんだ。

伊藤 それも議連の会長なんですか。

海部 会長です。それで議連の会長はおれはあれだから、誰かやれといったんだ。これは衆議院も参議院も全部合わさつて、同時にモンゴルはカシミヤの工場があるんだ。それで財界のモンゴルもあるから、それも全部集まつて、日本モンゴル友好協会を結成して、そ

れで招待を受けましようといつて、その一番機に乗つて、このあいだ行つてきましたよ。そうしたらバカバンディ大統領もちゃんと出て来てくれる。なお面白いことは、十年前に向こうの総理大臣を呼んだとき、来たのがビャンバスレンという学者です。

伊藤 当時はまだ人民共和国の時代じゃないですか。

海部 そうですよ。僕が最初にモンゴルに行ったのは、中国に行つた帰り、平成三年だ。そのときナードムという有名な国民体育協会の大会で優勝した馬をくれたんです。そんな馬をもらつても馬がかわいそうだから置いておくわ、といつて置いて帰つてきたら、日本人のメンタリティをよく知つておる。こんどバカバンディの晩餐会を天幕でやつておつたら、当時のビャンバスレン総理が、いまは閣僚を離れておるけれど、その馬を連れて飼い主と一緒にそこに現われたんですよ。みんなで拍手喝采だ。だから馬とのご対面もしてきました。

伊藤 それは海部さんの馬なんだ。

佐道 河野さんとかだったら持つて帰つたかもしれませんね（笑い）。

伊藤 しかし競馬馬にはならないでしょう。

海部 競馬馬にはなりません。ジンギスカンのところからの馬ですからね。

■三木派党員数の増減

伊藤 先生、七番の質問はどうですか。「八〇年一月二〇日、自民党は党員Ⅱ三一〇万五八七三人と発表します。田中・大平派Ⅱ九〇万人、中曽根派Ⅱ四一万人、福田派Ⅱ三五万人で、三木派は八四万人でした。三木派が大変多かったのはどういうことだったのでしょうか。これが年末の十二月二十九日の発表では一四二万へと半減するわけですが、これについて何かご記憶の点はございますか」

海部 これは、三木派が多かったことは事実ですが、これは組織的な立替黨員ですよ。

伊藤 でもこの前の海部先生のお話だと、海部先生はとてもじゃない、立替黨員なんかはできない、とおっしゃっていましたね。

海部 僕は作りませんでした。河本「敏夫」さんがつくった。自分のことだから。三光汽船から、造船会社から、下請けから――。

伊藤 それはものすごい数ですね。

海部 ですから、びっくりするような数で、八四万人集まったんだ。佐道 ちよつとびっくりするんですね、この数を見ると。

海部 僕らは、それまで自分が広報委員長で、黨員の運動の先頭に立つてやってきた人だから、自分の後援者も説得して、党費は自分で出してくださいと説いて、私の細胞の責任者が集金して回ってつくった黨員ですから、みんな知っておるんですよ。おれは海部を支持しておる、育てておるという自意識の高い人が多かった。そこへ名簿だけ出してもらって立替で黨員になつてもらいますなんていうことを言ったら、おれの後援会はガタガタになっちゃいます。だから僕はそれは断わった。

三木さんにも河本さんにも、「一万でも二万でもいいから、海部先生お願いします。金はいくらでもこちらで準備しますから名簿だけはきちんと集めてもらったら、それで黨員になるんだから」と言われたけれど、そのときは大変言いにくかったが、「先生、それは勘弁してくれ。おれの手足、おれの足腰が全部駄目になっちゃう。僕の手足、足腰で言うことを聞くやつはもう黨員になつているんだから、それは全部「河本敏夫」と書かせます。でもこれから金を払ってやるから、ただでいいからおまえら入れと言うと、海部俊樹の後援会は二つに分かれる」と言ったんです。

伊藤 そうですね。金を払う黨員と金を払わない黨員と。

海部 「それはできん相談だから」と言ったら、三木さんは「それはそうだな、海部君の言う通りだ。それはそれでいいよ」と言った。楠 河本さんが日大の校友会を使って増やしたというのは、このこ

ろからですか。

海部 そのころもそうだ。日大の校友会の総会も、おれが頼まれて行つて演説をやつてきたんだ。それは日大を知った人が多いから、仲間もいっぱいおるし。

楠 それは雄弁会の関係ですか。

海部 雄弁会の関係もおるし。

伊藤 私大ということでしょう。

海部 私立大学の私学振興の方の問題もあるし、ずいぶんやつたし、やつてくれました。おかげで、びっくりするぐらい票ができたんです。

伊藤 八四万ですね。これは日大関係と三光汽船関係なんですか。

海部 それが主力でしょうね。

伊藤 先生は一万にもならなかったんでしよう。

海部 ニア一万だ（笑い）。

伊藤 しかし八四万の中のニア一万だったらい成績ですね。

海部 全体の国会議員の中ではない方さ。精一杯無理しても、二千とか三千とかしかできなかった人もいるわけですから。

佐道 福田派が三五万人ですから、派閥の大きさから考えたら――。

海部 それはそうです。このときはみんながびっくりした。これは河本さんが先頭に立つて一所懸命やつて、三光汽船とか、日大が組織的に動いたんだ。

伊藤 これは選挙のためでしょう。

海部 もちろんそうです。総理にしよう、ということですよ。

伊藤 総理にしようといつても他派閥との関係もありますからね。

■自民党刷新連盟

伊藤 この「八〇年四月にできた」自民党刷新連盟というのは、先ほどの三木・中曽根・福田派の連合ですか。

海部 というふうにお考えただいてけっこうだと思います。

伊藤 KDD問題と浜田代議士問題ですね。浜田さんの問題は、ラubeガスの問題ですか。それだけではなくて――。

海部 ほかにあったかな。とかくの風評がある人だけれど。

伊藤 いまごろはテレビのタレントになっていきますけれどね。

海部 あれ以外にはあまりなかったんじゃないかな。やくざ出身だということ売り出してみたり、そういう強面の一面もあったし。

伊藤 実際に机を振り回したりしていましたからね。

佐道 四十日抗争のときですね。

海部 それから、「田川誠一を私は刺します。委員長、認めてください」と言ってきたから、「駄目だ」といった。なんだったか、健康保険法案の採決を党がやれと言っても田川がやると言わなかった。それで委員会が延びたことがある。

伊藤 社労委でしょう。

海部 社労委だ。社労を開くように、僕らが説得しておったんだ。そうしたらおれのところに来て、「駄目だ、そんな生ぬるいことでは。ハマコーにお任せください。私は刺します」という。「刺しますって、本当に刺すのか」と言ったら、「私が刺します」という。だから「業界言葉を使っちゃいかんよ」と言った覚えがあるんだだけだな。

伊藤 やっぱりそっちの業界なんですかね。

海部 だって彼のいろいろな古い記録を読んでもみると、「浜田幸一（住所不定）」なんていう新聞記事があったんです。

伊藤 このKDD問題は何でしたっけ。

海部 KDD問題というのは服部安司が嘔んだ問題じゃないの。郵政族の。どうもそんな感じがするな。

伊藤 やっぱり、前でいえば党風刷新ですね。

海部 とにかくわかりやすくきれいに行かなければならないということだけで、ずっと頑張ったんだけれど。

伊藤 この連盟というのは議員連盟みたいなものですか。

海部 いや、これはもうちよつと別の角度の生臭い連盟ですわ。政策を実現しようという連盟ではなくて、政局をやるう、変えてしまおうという倒閣運動です。

伊藤 赤城「宗徳」さんが代表ですが、これはどういうわけですか。そもそもこの時期、赤城さんというのはどういう感じでしたか。

海部 赤城宗徳さんがどうしてなったのか、僕はよくわからないな。伊藤 担がれて――。

海部 あのころから足腰ご不自由になっておった人ですから。立つのに一分、そこまで二分といったら叱られるけれど、あまり、アズ・スーン・アズで動き回ってもらえるような人ではなかった。

伊藤 シンボルですね。

海部 シンボルですが、あの人はソ連との関係で不愉快な動きがあったでしょう。それで僕らはあの人を全面的に信服していなかったんだ。ソ連寄りなんです。三木さんにも、あんなことでは駄目ですよ、と言った。けれども、このときにはいかなる加減か自民党刷新連盟の代表になった。このときあの方は岸「信介」さんの批判をよくやっただな。そして、この下におったのが水野清じやないかな。将来因縁ができたあの水野清だ。

伊藤 もちろんこれは先生も加わっておられたわけでしょう。

海部 そうです。

伊藤 この運動はさつきお話のありました。三派の連合と同じような形でございますか。

海部 結局構成メンバーの顔を見ていれば、だいたい交わりますし、それから「星の王子様」ではないけれど、二人で腕を組んで見ている方向、見ているものは同じだったというようなことで、こちらのときでもあちらのときでも、三派が集まってみんな議論しながら目指す方向は、同じ方向になるんだな。政局です。

■大平内閣不信任案の可決

伊藤 社会党が不信任案を提出して、そのときに、先生も含めてだろうと思いますが、欠席して、不信任案が可決される。それは筋書きとしては、社会党がこのとき不信任案を出して、われわれが欠席をして、それが通過して、そこから先解散になってという筋書きなんでしょうか。

海部 そういう筋書きですよ。要するに、「未必の故意」があったというのが正確なところですよ。初めからやつちやおうというのではなくて、こうなるだろうではなくて、しかしこうなるかもしれない、なったらなつたでしようがないじゃないか、それは甘受しようという、せいぜい未必の故意ですな。

伊藤 でも社会党が不信任案を提出するところまで手を回したわけではないんでしょう。

海部 はい、そこまでは手を回しません。

伊藤 もしかしたら回しているかもしれないよ。

海部 いやいや、そのとき選挙を本気になってやって、どうのこうのということはないですね。

伊藤 これは、自民党刷新連盟が欠席した人のすべてだというわけではないんでしょう。

海部 欠席した人はだいたいみんな欠席したんじゃないかな。ああ、一人欠席しなかったのは安倍晋太郎だ。誰かと約束して、どこかで言われて、議場が閉まる直前にこそそこそと滑り込んだな。

伊藤 そうですか。なかなか妙な動きですね。

海部 それはやつぱり、いろいろな意味で、「安倍さん、あんたはもつと王道を歩きなさい」というようなことを財界から言われたりなんかしておつたんじゃないですか。あるいは竹下が手を回したのかもしれない。

佐道 中曽根派はこのときに「本会議場に」残つたんですね。

海部 残った。

佐道 それがあとの政権につながったという。

海部 そうそう。

伊藤 でも六十九人が欠席すると不信任案は可決になりますね。

海部 不信任案が可決してギブアップすると思つたんです、情報としては。ところが、これを一所懸命一人になって支えて「そんなことはいかん、解散でやつちまえ」と言つたのが世間では田中角栄だということになっていきますね、あのときは。田中角栄の意を受けて、票読みをやつて計算しておつたのが金丸信ですよ。だから田中派が断固解散だ、といって決めちやつて、あれよ、あれよという間にそくなつちやつた。なつても、結局それは選択肢の一つとしてあるわけですからね。

伊藤 全然予測していなかったわけではないんでしょう。

海部 そうですよ。だから腹は決めて、選挙になるかもしれない、なつたつていいじゃないか。

伊藤 それは欠席するときに、ですね。

海部 欠席すれば、そこまで行き着くかもしれないけれど、そういうときは最悪の事態も絶えず計算し、対応も考えながらやらないと。

伊藤 でも、ギブアップするんじゃないかというほうに相当賭けていたんでしょう。

海部 賭けていた人が多い。これは総辞職だよ、解散にはならんよ、と言いつつおつた人もおる。こんな状況で解散したつて勝てるものかといつて、結局解散にはならんだろうと言つていた人もあつた。ああなると町の評論家みたいなもので、いっぱい出て来ますからね。佐道 先ほど未必の故意とおっしゃいましたが、非主流派自体も、四十日抗争のときのように綿密に相談し合つたとか、そういうことでもなかったんですか。

海部 そんなことはありませんでした。そんなことをしておる暇も時間もなかった。四十日抗争のときは選挙が終わつたばかりで、みんなおれは当選したと胸を張つておるし、安心しておるし、落ちたやつはもう出て来やせんから、どうとも言ふやつはおりやせんし。伊藤 今度は当選して間がないですからね。

海部 間がないから、みんなそれぞれやだつたらうけれど、しか

し間がないから思い出の中に、おれは当選できたんだから、今度もまた一所懸命やれば、それは間違いないだろうという安心感もみんなそれぞれあったんじゃないですか。

伊藤 これは大平さんが亡くなるなんていうことがなければ、この選挙はまた負けたかもしれないですね。

海部 それは亡くなることがなければ――。ここらで負けておる方が、この政治は早く直ったと思うな。

伊藤 そうしたら大平さんは総辞職ということになりますね。

楠 流れがだいぶ変わったでしょうね。最近解散のときに万歳しないんですか。

海部 このあいだは、やったようだったな。

楠 やりましたか。最近テレビを見ていると、やっていなかったよな。

海部 あまり昔のように元気がないな。

楠 昔はやけくそな感じでやっていたようですが（笑い）。あれはなんで万歳をするんですか。

海部 それがわからんのだ。そういうしきたりだと思って。先輩が作ってきたしきたりだから。そしてわれわれは、その勢いで自分を勇気づけてね。

楠 万歳って、降参という意味がありますよね。縁起でもないですよな。

伊藤 そういうことではないでしょう。やったあ、ということ。

海部 気合いを入れるんだ。わけのわからん精神の高揚感から出てくるんじゃないかな。

伊藤 別に先例集にあるわけじゃないと思いますが（笑い）。

佐道 今年も春先から、三月か四月に解散だと言われて、それが過ぎて夏は危ないと言われて過ぎて、また訪朝という話があつて十月はという話が出て来て、何度も出ては消えてはしていますが、どうなるんでしょうかね。

海部 それはわかりません。それは任命権者がその気になればでき

る話なんですけどね。

伊藤 そこはなんとも言いがたいですね。ところでちょうど時間です、このところで終わりますようか。

佐道 そうですね、鈴木さんに替わるところですね。

伊藤 大平内閣は大勝したけれど、大平さんが亡くなって、鈴木善幸内閣になるというところでちよつと切っておきます。まだ鈴木内閣から先もだいぶありますから。

海部 このとき田中六助活躍の場が出てくるんだ。覚えとるだろう。伊藤 鈴木善幸内閣のときですか。わかりました。それは記憶しておいて、次回はそこから入っていただきます。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 18 回

鈴木内閣時代 I (1980～1981)

【2002年10月28日（月） 14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2002年10月28日)

1. 80年7月、大平内閣のあと、自民党最高顧問会議で話し合いによる総裁選出の方針が決まり、西村副総裁裁定によって大平派の鈴木善幸が内閣首班となりました。鈴木首相誕生について、当時どのように見ておられたのでしょうか。前回の最後に、田中六助氏の動きについて少しお触れになりましたが、それはどういったことだったのでしょうか。
2. 先生は、鈴木内閣成立後の80年8月、自民党の文教制度調査会長に就任されます。当時、中野区教育委員会で教育委員の準公選制度ができたり、奥野法相の社会化教科書批判に見られるような、自民党内での社会科教科書「偏向」批判が行われていました。先生の文教制度調査会長就任はこのような状況を背景にしていたと思いますが、いま述べたような状況に対しては先生はどのようなお考えだったのでしょうか。
3. 上の質問とも関係しますが、12月には自民党文教部会・文教制度調査会が合同会議を開催し、「高等教育」「教員問題」「教科書問題」「学制問題」「基本問題」の五つの小委員会を設け、戦後教育の全面的見直しを行うことを決定しました。この間の経緯や、審議の状況等をお願いします。
4. これも前期の問題との関連ですが、81年6月、自民党文教部会・文教制度調査会が合同会議を開催し、教科書検定の強化、広域採択制、教科書法の制定など、教科書制度改革案をまとめました。この経緯等についてお願いします。
5. 80年10月、自民党憲法調査会で、3年を目標に改憲に向けた議論が開始されました。その前には(8月)奥野法相が「自主憲法制定の議論が望ましい」という議会発言もあり、この時期改憲問題が議論されています。先生はこの問題にはどのような立場でおられたのでしょうか。
6. 81年2月、竹田五郎統幕議長が、徴兵制を違憲とする政府見解に異議を唱え、防衛費GNP1%上限を批判し問題になりました。この問題について先生はどのようなお考えでしたか。
7. 5月、訪米した鈴木首相がレーガン大統領と会見しましたが、このときシーレーン防衛を約束したのかどうか問題となり、また鈴木首相が日米共同声明の作成経過に不満を述べたため、伊東外相が引責辞任する問題となりました(5月16日)。この一連の経過について先生はどのようにご覧になっていたのでしょうか。
8. 伊東外相辞任騒動の直後(5月17日)、ライシャワー元駐日大使が、核積載米艦船が日本に寄港していると述べて問題になりました。非核三原則や事前協議制度に関する疑問が野党などからさかんに提起されたわけですが、この問題についてご記憶の点をお願いします。また野党に対する工作などをおやりになったのでしょうか。

9. 81 年 3 月、臨時行政調査会（第二次臨調）の初会合が開催され、以後一連の行革の議論が本格化します。鈴木内閣下での行革議論については、先生はどのようにご覧になっておられましたか。
10. 5 月、自民党は参議院全国区に比例代表制を導入する公職選挙法改正案を国会に提出しました。これは廃案になりますが、翌年 7 月には成立します。この選挙制度改革問題については先生はどのようなお立場だったのでしょうか。
11. 先生は、81 年 11 月、国民運動本部長に就任されます。国民運動本部長就任の経緯や、その仕事の内容等についてお願いします。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。

■対北朝鮮交渉について（一九八九年頃）

伊藤 最初に、ちょっと最近の状況なども伺いたいんですが、それをやっていると先に進めませんね。

海部 いいんじゃないですか。

伊藤 北朝鮮問題はどうなりますか。

海部 北朝鮮問題はね、一番最初にお話ししたと思うけれど、内閣を組織したときに、ある新聞社の、当時国会に出入りしているボスがいた。その大人物が僕のところに来て、「今日は直接北朝鮮からのメッセージだから、聞いてください。公式な場所で共和国の名前が速記録に残るようにちゃんと発言してください。『北朝鮮』というのは金輪際やめてもらって」というようなことを言ってきた。

あのころは、こちらもやろうと思っているときだったんですね。

当時自民党の北朝鮮問題対策委員長は久野忠治さんだったな。クノチュウさんは、僕の中学の先輩でもある。ここ「海部事務所」へいらつしやって、「壇上で答えるときに、人民共和国の名前を正式に発言してもらえると、それが大変いいシグナルになる。前向きのメッセージとしてとるから、そうすると日朝国交正常化交渉がすぐスタートできます」「じゃあそのところで僕が呼びかけるから、前提条件を置かずに無条件で交渉を開始しようという提案をする。それに素早く反応してできるようにしてくださいよ」というようなやりとりを、中に入った久野さんを使って、やったんだな。久野さんは佐藤栄作さんの系統だけれど、田中角栄さんの直系の家来だから、栄作さん自身からはあまり思召しがよくなかったんだ。けれども、「駄目だ、そう早まっちゃいかん」というような意見がいくらかあったんだね。そんな時期でした。

伊藤 それはいつごろの話ですか。

海部 僕が総理になったときです。久野忠治さんというのは、それ

まで何回も何回も向こうに行って、いろいろやってきた人だから、この人の話は間違いないだろうな、と思った。裏を取ったら、ある有名な新聞社の人が間違いないという言ってくれたので、どうせ日朝国交正常化はやらなければならんことだから、やろうと。金丸訪朝の前です。

楠 金日成の頃ですか。

海部 もちろん金日成です。そして三木睦子さんがちよこちよこ手紙のやりとりをしたり行ったりしてあった頃さ。ここへも三木睦子さんが、こちら「朝鮮総連」の責任副議長・許宗萬といったかな、それを連れてきて、いろいろ話をした。「向こうから来るならば、それはどこかで会ってもいいけれど、まだ総理大臣が直接話ができるようなことになっていない。そういうことができるようになるまでは、それはできないから、まず官房副長官か誰かに非公式に、官邸以外のところで会ったらどうですか」というような話もしたことがありました。

当時は直接会うことはたいへん冒険でしたので、新聞の裏に載せられてもいいような人と飯を食う約束があつたら、その会場を教えておいて、「その横の部屋に、もし用があるなら来ておれ、そこで話を聞くだけ聞いてやろう。その代わり、そちらも誠意を持って答えてくださいよ」ということを、新聞社を中に入れて確約をとった。当時の、クノチュウさんという名前まで出してはいかん、自民党の北朝鮮問題対策特別委員会の委員長で、当時パイプであったと思うんだ。しかも私とは中学の先輩・後輩という関係もあって、それでいろいろ話したら、「本当です、本当です」と言うから、まあ風穴を開けるだけは開けた方がいいと思った。

あのころパスポートを見ても、ウィズアウトはノースコアだけですからね。それはいけないので、とにかく向こう三軒両隣はまず仲良くして、敵対関係を打破して進んで行きたい。そのことを速記録に残るように壇上で答えるのは、当時としてはちよつと勇気のいることでしたね。まだ青嵐会も華やかに勢揃いしておるし。

そこで日朝関係は、こちらにおける責任副議長というのと会って話したんです。そのとき相当窮乏した状況であることはよくわかっておりました。ただ拉致問題というのは今日ほどポピュラーではありませんが、一般的なにも知られていなかった。ただ李恩恵の問題だけは、当時から相当象徴的なものとして出ておりましたね。そういうことを話そうと思つてやつておつて、何回かやろうということになった。

伊藤 何回かというのは、許(きよ)さんですか。

海部 はい。また会いましょう、ということですよ。許はいっぺん向こうに帰つて、上のほうの言葉も取ってくるからということ、向こうに帰つたり来たりしておりました。結局そのやりとりが、いまにして思えば金丸訪朝団に通じた細い細い糸であつたんだろう。そのときむしろ金丸「信」さんというよりも、国会議員の中で一番出入りしておつたのは社会党ですね。そして名前を忘れたけれど、ちよつとデブツとした社会党の責任者を覚えていますか。自民党側がクノチュウであるように、社会党側にも朝鮮問題委員会の委員長がおつたんだ。

伊藤 深田肇。

海部 深田肇だ。

楠 左派ですね。

伊藤 埼玉じゃなかったかな。

海部 聞いたことも見たこともないようなおじさんだつたけれど、廊下で会つと心やすそうに最敬礼をしたり、ちよつと招いてひそひそやるものだから、危ないな、これは氣をつけておらなければいかな、と思ひながら、金丸にだけ教えておいたら、「海部、任しておきな、あんなのはおれが腹の中に入れちゃっているから」と言うんだな。

伊藤 そうですか、腹の中に入っちゃっているんだ。

佐道 どっちが本当なのか(笑い)。

海部 金丸さんが腹の中に入れちゃっているということは、一緒に

何回も金丸流の手練手管を使つてあれしてあるから、ということでしょう。そこから先はおれもちよつとつまびらかにせんから具体的には申しあげられないけれど、腹の中に飲んだり食つたりもしているわけだな。

その深田は、本当にちよこちよこ連絡にも来ました。「まさに機が熟したからやつてください」という。ただそのとき僕が思ったのは、向こうが非常に窮乏しておるので、もうちよつと経済援助をしてくれんか、というようなところから話が始まつておるということだ。それでこちらは、向こうの言いなりになつてお金の話だけ先にやつていくわけにもいかない。その前に、李恩恵さんの問題がそろそろくすぶつて出て来ておつたから、あの問題を片付けようじゃないか。「李恩恵さんを、日本語の先生として一人拉致していったんじやないか」というようなことを言つたら、机を叩かんばかりに向こうは怒り出して、「そんなことを言われるならば駄目だ。それは横に置いて、なんら条件を付けずに日朝国交正常化交渉を始めようとおつしやつた。それを評価してわれわれは乗っているんだから、まず国交正常化の話を」というようなことで進んでいった。

伊藤 一応は進んでいったわけですね。

海部 一応進んでいったんです。だから代表も決めて、そこで出會つて、いろいろ話もさせたんです。そういうことが三、四回続いたと思います。

伊藤 その延長線上に金丸訪朝があるわけですか。

海部 金丸訪朝は延長ではないけれど、そうやつて地下水が通じ始めたんだ。金丸訪朝は、紅粉「勇」さんといったかな、捕まつた船長さんを帰すとか帰さんの話があつた。そんなことで現われたのが、例の石井ピン「石井一」だよ。石井ピンが出て来て、あれはこつちのほう「頬に傷を描く」の筋もあるものだから、それで情報を取ってくるわけだ。「金丸さんが行つたら、そのとき内閣総理大臣親書を渡してくれ。そうすれば紅粉さんを連れて帰ってくる」ぐらいのことを石井が言うのさ。

楠 日本としては紅粉船長を戻すという実益はあったでしょうが、それ以上のものは何かあったんですか。あっちはお金欲しくてしょうがないでしょうが、こっちは別にそんなに急いで回復しなくても何も困らないと思うんですが。

海部 ただ、極東の平和と安全に役立つような約束を取り付けようということさ。

伊藤 それは難しいですね。

海部 そういう腹、下っ腹があるから。

佐道 いまの日朝交渉でも、アメリカ側の意向みたいな話が出ていますが、アメリカの意向も外務省を通じて打診するんですか。

海部 それはもちろん、こういうことを言って来ておるから、こうだよという。許宗萬が官邸にちよろちよろ連絡したり顔を出したりは、当時は絶対にできないけれど、見つからんとところで会うように、それは新聞社がセットするわけだから。そこへ出向いて行けば、おれがほかの話をしているとメモが入って、ちよつと行くと、近くの部屋に向こうが来ている、というような出会い方が、詳しくは言えんけれど、ままあった。

伊藤 新聞社としては、それをセットして、将来何かいいことがあったときに――。

海部 書くつもりだったんだろうな。

伊藤 そうでしょうね。

海部 けれどもそんなことよりも、その新聞社にも「国のためだからこれはこうせよ」と言うのと、ちゃんといういろいろな情報を持って来た。だから、持ちつ持たれつの関係だったんですよ。

佐道 その新聞というのは、ついこのあいだまで、けつこう親北朝鮮的な記事を書いていた大きな新聞社ですか。

海部 大きい新聞、五大紙の中の一つですよ。

伊藤 たぶん朝日でしょう。

海部 いや、それが意外や意外、その点だけは違う。

伊藤 そうですか。読売の可能性もあるんだな。それはお聞きしな

いことにしましょう。それで結局その話はどこかでぶち切れるわけですね。

海部 駄目になったというわけではないけれど、金丸さんたちが行って、金丸さんがそこで償いと補償まで言ったでしょう。あれでは政府はともそんなことはいけません。「総理、それはいけませんよ」というから、おれもいかんと思つた。そこまで始めたら、言葉は悪いけれど、金丸さんはノーブロジーやないか、駄目だ、ということになって、それであの話はちよつと待て、ということになった。けれども、紅粉さんはやがて帰ってくるようになるんだ。

佐道 金丸訪朝のあとに、正式の日朝交渉という政府間交渉が何回か続いて――。

海部 何回かあったんだ。そして僕の記憶では、李恩恵の問題で置いて、向こうが席を立つちやつた。

伊藤 それと紅粉船長の釈放とは、前後関係は――。

海部 全然関係なかった。

伊藤 わかりました。北朝鮮問題は――。

海部 もうちよつと進展があるでしょう、交渉が始まれば。

■鈴木善幸内閣の成立1（後継総理）

伊藤 この前は大平内閣が終わったところで終わりました。それで鈴木さんが総理になられる。このとき、同じ派閥での継承も非常に微妙な問題ですね。この決定には、いったい誰が参画したのかというところもかなり微妙な問題ではなからうかと思うんですが、先生はまだ蚊帳の外ですか。

海部 蚊帳の外。蚊帳の外だけれど、当時海部俊樹に対する向こうのカウンターパートというか連絡将校は田中六助だったんだ。六助からの呼び出しで、いろいろなところに行つて会つて話を聞いた。六助曰く「もう善幸さんがその気になつちやつてゐる。『六ちゃん、

頼むよ』と言って手を握った」と言う。「で、おまえ、どうしたんだ」と言ったら、「それは仕方がないから、おれもよしよしと言って、そちらに持って行こうと思う。そのほかに持って行きようがないんだから、一番素直にスムーズにそれで行くじやろう」というような言い方だったな。

伊藤 ほかの可能性はなかったんですかね。

海部 それは、やりたい人はいろいろあるだろうし、われと思わん人もあったろうけれど、「大平が」ああいう街頭演説の最中の名譽の戦死みたいな格好で、厚化粧までして無理してニコッと笑って、すぐにこわばるような顔でテレビにも出たりして、いろいろ演技をなさったけれど、それがうまく行ってもあまり長くはないということとは、六さんは主治医を通して聞いていて、いろいろなことを考えねばならんと思っておった。それでいよいよというときにはどうするかということ、それは鈴木善幸が容易にできるじやないか。あの派、宏池会の中で。

楠 官澤さんという線はなかったんですか。

海部 なかった。六助が大嫌いだもの。

楠 いわゆる一六戦争ですか。田中六助さんが官澤さんを強く排撃したので、つぶれたというようなことを聞いたことがありますけれどもね。

海部 当たらずといえども遠からずだな。それは六さんの話を聞いておいたら、官澤のいいことを言ったことがないもの。鈴木善幸さんが自分でその気になって「六ちゃん、頼むよ」と言ったというから。

伊藤 ほかの派閥という可能性はなかったんですか。

海部 なかった。

伊藤 なんとなくそういう感じになっちゃっていたわけですか。

海部 なっちゃっていたんだ。

伊藤 先生は、鈴木さんとはそれ以前、どういうふうな関係でしたか。ほとんど関係ないですか。

海部 鈴木さんが農林大臣で、おれが文部大臣のときは、閣議の席が隣同士で、あの人は真つ先に日露漁業交渉で出かけちゃって、帰って来ないんだ。そんなことがあって、帰ってきてから「どうしたんですか」といろいろ話を聞いたりしたけれど、あのころ善幸さんというのは総務会長を何回かやって、「寝技の善幸」というあだ名があるぐらいだから、寝技ばかりやる人で、あまり表芸をやる人ではないという理解をしておりました。

伊藤 一般的な評価もそうだったと思いますけれどね。

海部 ええ。それから、その前に大平内閣を作るときも、鈴木善幸さんは大平派の代表で、出て来ているいろいろやっておった。なんかあの人は上手にまとめる。三木さんも、「鈴木善幸がこういって、こうやった。ああやった」といって、いろいろとあとでボンボンと話してくれる。だから鈴木善幸が舞台回し。大平内閣を作るときはうまく根回しをやったんだろうと思う。そして、大平さんがああいう状況で、負けるかもしれんと言われたような状況で、圧倒的に勝たせちゃったわけですからね。

伊藤 そうですね、みずからの命をもって。

海部 そういう意味では、救世主でもあったわけですね。その大平さんがお隠れになるわけだから。たしかにあのとき、宏池会↓宏池会と続くのはいかがなものかというあれもあったけれど、さりとてそれに代わって直ちに誰がやるんだということになると、漠然とエボルブされたものがなかったんですね。

佐道 中曽根さんが結構その気になっていたという話もあるんですが。

海部 腹の中のお気持ちはわかりませんが、新聞情報なんかによるとそうだけれど。

佐道 やはり衆目の一致するところ、宏池会で鈴木さんで、ということですか。

伊藤 田中派の考え方というのが、かなり大きいわけでしょう。

海部 田中角栄さんはこのときどういう態度をとったのか。竹下な

んかはそれでいいことを言っておったね。六さんが呼ぶときは、あまり裏話はしたくないけれど、竹下と安倍と、ときおりは中川、そして僕が呼ばれて、そこでこうこうこうだという本音話をして、各派の状況を教えてくれ、というようなことを言ったけれど、竹下さんは反対しないんだ。

楠 でも当時としては、ずいぶん思い切った人事でしたよね。派閥のオーナーでもなくて、主要閣僚を務めたわけでもない、そういう人が総理大臣になった最初ですよ。

伊藤 鈴木さんはちよつと思いがけないことだったんじゃないかなという気がします。

海部 思いがけないことだよ。だから全体として、あの人の辞任までのことをずっと見ておってもらうと、意外に恬淡としておったと思うんですよ。おれはこうなったんだから、石にしがみついても人をはねのけてでも、というようなところはなかったと思う。

伊藤 それ以前に、鈴木さんの人柄に触れるような場面はございましたか。

海部 決まってから投票までのあいだ、あまり日においておくとか駄目になる。善幸さんだから敵が出てくるのか、あれは頼りないからやられるぞ、とかいろいろなことを言った人がおったけれど、それは主として六助の筋の話だ。それは駄目だということで、善幸さんにはこういう雑音もあるから、きちんと早くまとめるというのは、田中角栄さんの意志だったんだろうか。竹下が来て、決まったら、ああと言っている暇もないぐらいにバシッとやらなければこういうことは駄目だ、という。

伊藤 このときは議員総会か何かで決めるわけですか。

海部 結局最後はそういうことになるんでしょう。けれども、党大会に代わる両院議員総会というのは、緊急に総裁の跡を充たさなければならんというときのことですから。

楠 両院議員総会で無競争ですか。

海部 それは方針ができてから、手を打って、格好をつけるために

両院議員総会を開いて、そこで中曽根も誰も立たないという状況づくりをした。あのころはまだ死んだ仏様がそのへんにいらつしやるので、化けて出られるぞということで、そう長期政権になるとは誰も思ってもおらんし、選挙も勝ったことだから、というような党内世論があったと思います。

■鈴木善幸内閣の成立2（組閣）

伊藤 だいたい一本化されるという状況のときには、組閣の大難関は見取図もできていたということですか。

海部 そうだったでしょうね。三木さんは頭から、このことについては強い反対はなかったし、各派の中堅代表で、安倍はこうだった、竹下はこうだった、六助はこうだった、という話をして、黙ってずっと聞いておって、「だいたいそうなるか、見通しは」というような疑問や聞き方をされた。何が何でもそれは壊さなければとか、反対しなければいかなんというような、思い詰めた意志はなかったですね。

佐道 官房長官だった伊東正義さんはどうだったんですか。やはり健康の問題ですか。

海部 伊東正義さんは結局、僕らから見ると日米同盟の問題で、官房長官がいろいろ手続を踏んでやっておったにかかわらず、善幸さんが「おれは知らん」なんていうことを言うものだから。

伊藤 それは「鈴木内閣の」終わり頃の話でしょう。

海部 だから正義さんとは初めから、政治に対する基本的な姿勢の齟齬みたいなものがあつたんじゃないですか。

楠 一時、伊東さんが臨時代理でしたね。

佐道 大平さんが亡くなったあと、そうでしたね。

楠 それが臨時ではなくて、正式な総理大臣になる目はなかったんですか。

海部 臨時代理になったときはまだ正式な総理大臣という目はなかったですよ。急場しのぎにそうしたんだろう。けれど、きちんとした話し合いで、お得意のあれで候補者を生み出さなければならん、という雰囲気だったと思いますね。そういう報告を僕らもしておつたし、そういう前提で、話が入って来た。

伊藤 鈴木さんという方は政治家としてずっとやってこられて、だいたい裏方に徹しておられた。将来は総理大臣にという意志は――。

海部 ギラギラしたところは僕らも見抜いておられない。もちろんお酒を飲んで食事をすることもあった。総務会長とわれわれは、あのころ党の七役の一人で、総務並みに呼ばれるわけだから、行くけれど、そういう政治のギラギラした話はなかなかしない人ですから。だから恬淡とした人だな、という感じが全体的な印象でしたね。

伊藤 そうするとなぎの内閣という感じなんですかね。

海部 と思っておつたんだけど、初めから本人が欲を持って、

「『六ちゃん、頼む』」と言った。あんなことは珍しい、善幸はその気になつちやっているよ」という話だったんですね。「六さん、やるのかい」と言ったら、「まあそれは、しょうがないなあ」という煮え切らないところもあつたけれど、しかし彼には彼のいろいろな計算があつたんでしょうから、この際ここで一つやっっちゃおうということですね。

佐道 大平が亡くなったからということ、鈴木さんの名前が挙がるということ自体、ご本人が「じゃあやりたい」と言うか、それとも誰かが「鈴木ならいいんじゃないか」と言うということですか。

海部 結局、放っておくと、言いにくい話だけれど、それ以外の人がなつてしまふと極めて面白くない。それ以外の者だけは拒否しちやおうという一部の勢力があつて、それがギラギラつと動いて、一晩で素早く連絡とつけて、この際は一つ、本人もその気になつておるし、鈴木にやらせようと。

伊藤 「鈴木善幸は」宏池会の中では田中派みたいな人ですからね。そつちの筋が動いたんだらうと思いますけどね。

海部 と、思いますよ。竹下さんもそれに反対ではなかったし。六さんと安倍さんとおれと話を聞いておるときでも、そういう方向で話されていたから、そうだろうと思いますね。

伊藤 そうですか。この内閣で、三木派から誰が入ったんでしたっけ。

海部 モリキン「森山欽司」か、河本「敏夫」さんかどちらかだろう。

伊藤 河本さんは入っていますね。でも三木派は閣僚ポストは二つぐらいですか。

海部 二つだったと思いますよ。河本さんとモリキンとかね。「経企庁・河本、環境庁・鯨岡兵輔」

伊藤 外務大臣が伊東正義さんで、大蔵大臣が渡辺美智雄さんという布陣ですね。

海部 渡辺美智雄は大平さんのところに食い込んでいって、いろいろ知恵をつけたりなんかしておつたですね。

伊藤 「渡辺美智雄は」このときは中曽根派ですかね。

佐道 中曽根さんは行政管理庁長官ですね。

海部 河本は、やるならば経済企画庁ですよ。

伊藤 こういう組閣の問題になると、先生は何か。

海部 情報を聞いたり、どこの派ではどうやっているということ、三木さんに報告するだけのことです。

伊藤 情報のもととは国対で養われた――。

海部 そのころでもみんな国対には来ますから。昼飯を食べながら話をするとか、場所を変えて話をするとかいうことは、しょつちゅうですからね。

伊藤 情報はすぐ集まるんですね。

海部 ああ。しかもああいふときは、お互いに自分のところの情報に正当性を持たせようと思うから、両方から誘いが来ることもありますね。

■文教制度調査会長1（調査会と部会）

伊藤 それで、鈴木内閣のときは、先生は文教制度調査会長に就任されるわけですね。これは前からある調査会ですか。

海部 文教制度調査会というのは、前からある調査会です。

伊藤 これは文教部会とは別なんですね。

海部 別なんです。基本問題になるわけですから。

伊藤 文教部会とこれとはどういうふうに違うわけですか。

海部 しばらく前までは各部会というのが、役所の持っている常任委員会の縦割りみたいな格好でできておって、部会長は、たいていその常任委員会の理事を務めておったんですよ。それは法案の審査というようなことについての勉強会が中心ですから、当面の問題の解決を部会でやる。

当面の法律に賛成するとか反対するとかいうことではなくて、もう少し深い根本的な議論をしたい、しようというときに制度調査会が開かれて、そこで議論をするという仕組みだったと思います。

したがって、部会に入っておる人、文教部会の幹部、部会長とか副部会長とかはだいたい当選二、三回のところで占め、制度調査会の方は、もっと上の五回生、六回生。むしろ制度調査会長は将来文部大臣が務まるように、党の文教グループが考えている考え方と常に接しておってもらいたいという願いがあったんじゃないですかね。

伊藤 先生はもう前に文部大臣をやっているじゃないですか。

海部 それがやらねばならんこともあるんです。要するに、このころの自由民主党の文教制度調査会、文教部会というのは、僕が調査会長になってから、面倒くさいから両方一緒にやれ、二つに分けて別々にいろいろな議論をして、酢だのこんにやくだのと言ってもしようがないじゃないか、一緒に集まってやれ、と言った。特にあのころは教育問題が大事だったと思うんですよ。

伊藤 教科書ですか。

海部 教科書問題というのはまことに象徴的な問題で、特に北海道なんかで教育正常化運動なんていうのがあったのは、教科書問題が中心で起こってきた。むしろ右寄り、右傾の教科書を左寄りに持つて行きたいという願いの動きと、右寄りとは何だ、あるべき日本の姿に戻すべきなんだという説があった。たまたま名前が出て来たから言うけれど、奥野誠亮さんとか稲葉修さん、そういうところは右寄りの方の理論的指導者のような存在だった。

それに対して比較的進歩的というのかな、そうじゃないんだという論陣を張っておった人が坂田道太さんじゃなかったかと僕は思うんですがね。僕は坂田学校に入れられた一人だと思えます。河野洋平だとか西岡武夫とか、その後ちよつと幅が出て来たけれど、初めにやったころは。そこに森喜朗とか藤波孝生が入って来たものだから、だんだん若手の中にも右寄りのグループも出て来たということですね。

■文教制度調査会長2（高等教育の充実）

海部 そこで、当時文教制度調査会では、僕は大学というものをもつときちんとしなければならんと言った。というのは、ちよつと話が遡りますが、戦後OEC Dの教育問題調査会が日本に来て調査をした結果、「日本の教育というのは、初等教育は非常に素晴らしい、全国民が義務教育を受けて、文盲のいない国民教育をやつて、十五歳までの義務教育は非常に素晴らしい。ところがその先がいろいろ問題が多い国だ」というようなことを言い置いて帰ったんですね。当時のOEC Dの教育問題調査会の報告書を僕らも金科玉条のように読んで、なるほど、先進国になろうと思つたら、こういう問題点に気をつけなければならんと思つた。

そこで当時ヨーロッパで、これが理想教育だなんて言われていた

のがドイツの教育。ドイツ系の信奉者が当時の自民党の中にいました。それだけじゃなくて、ほかのもいたけれど、もうちょつと日本の場合には基礎基本をしつかり身につけることが重点だけれど、分かれていくための能力に依じての選抜も考えていかなければならん。みんなに同じものをぎちぎち教えてどうなるんだ。当時、日本の高校の教科書は微分積分も入っておったんですね。微分積分なんていうのは面白くもおかしくもない。サイン、コサイン、タンジェントもそう。それは果たして国民全部が知っておらなければ成り立たないことなのか、というような屁理屈を言う人もおって、それには賛成しがたいなということで、高等教育というものがなぜあるのか、そこへもメスを入れようということになった。

高等教育というのは、日本は恥ずかしい話ながら、最近だったらあんな議論にはならなかったろうが、ノーベル賞の受賞者の数でいくと、当時は五人とか七人というオーダーだった。それで、アメリカやイギリスでさえと言ったから、あとから、あれは怒られるから取り消さなければいかんと言ったんだけど、イギリスでさえ三桁に近い数をとっている。アメリカはたしか百六十人ぐらいじゃなかったですか。イギリスが九十何人。日本はもともともらってもいいはずだから、そこに力を入れなければならんと思っておった。中曽根内閣でやったときは、中曽根教育改革は二度目だな。

伊藤 教育臨調の話ですか。

海部 はい、最初のときは福田内閣のときでした。福田さんもいろいろ言いながら、教育問題専門の閣議を一回やらせまして、全閣僚に、閣僚懇談会で、いまの教育の抱える現状と問題点をきちんと言ってお報告しなさいということになったので、それでOECD調査団の報告書をずっと読んでみたり、アメリカの現状の調査にも行ってみた。当時、西岡とか河野とか藤波というのがわれわれと一緒に考えてくれる仲間でしたから、それぞれ問題を分配してやった。その結果、大学改革というのが一番大切で、それは基礎研究の峰を高くすることが日本の大学で遅れておるんだということになった。いま

にして思えば、その指摘は間違いなかったと思いますね。

ノーベル賞受賞者の数が多ければいいというものではないけれど、当時と比べると、まさに雲泥の差ができています。私がアメリカの大学だったかどだったかで話をしたときに、日本でノーベル賞受賞者が七人だったか、そのときに言ったら、ニコツと笑いながら、「海部先生、今後は数字の訂正をお願いしておきます。アメリカの大学に来て教わったあのひとあの人は優れた研究者であつたけれど、みんなアメリカのお金で勉強してもらったんだし、取り巻いてタイプを打って協力したのもアメリカの研究者である（リサーチ・スレーブなんていう言葉がアメリカにはあるそうですが）、リサーチ・スレーブのことを考えると、あの賞はアメリカに持って来てもらった方が、自然にできあがつていく」というようなことを言つて、「もちろんこれは冗談ですが」と言つてニタツとウインクして笑われた。僕はぎやふんと来たことを思い出すな。そう言われてもしようがないような、アメリカ頼りのところがありましたよ。だから日本でもそれはやらなければいかんということで、ようやく毎年、しかも同時に二人もとる年も出て来たぞ、と言えるようになったと思います。

あのころはしかし、そんなことまで目指さなかったけれど、やはりそれはやろう。そして大学にそういう基礎研究、基礎学問の峰を高くしなければならんという大きな柱をボンと立てたんですが、そのことが新聞に出たら直ちに異論を述べてきたのが、東大の経済学部の小宮隆太郎という先生だ。あの人は講座制を廃止しなさいという。各大学の中に講座制があつて、そこでこぢんまりと固まつて、講座の中で教授・助教授・助手の定員まで決まっているんですね。そんなことを言つて、「自由な研究とか自由な学問の幅ができません。だから大臣のように基礎研究の峰を高くしようとおっしゃるなら、講座制なんていうものはいろいろ弊害があるけれど取り払つて、そこはそこの教授が責任を持つて、これとこれを入れるとかいろいろなことを言つてやれるようにしたらどうか。そういうことも検討

してください」と言ってこられました。書いたメモまでもらった。

両方の正副部会長会議というのがあると、文教制度調査会からも正副部会長が出ますし、文教部会からも副部会長まで出て来ます。

当選二回ですでに副部会長がおりますから、若い人の意見から、われわれ当時中堅であつたものの意見から、閣僚経験のある人、長谷川峻さんとか、坂田道太さんとか、まだヒマな頃は稲葉修さんも、坂田道太さんなんかも来たんですよ。それから剣木亨弘とかいう人もいたな。化石人類みたいな人だよ。

楠 文部大臣だった人ですね。

海部 文部大臣経験者には部会には出席してもらつてよろしいという通知を出すものですから、そういう人も来て、まさに幅広い国民的な議論ができた。そういう大学の問題になってくると、小宮隆太郎さんの言つた講座制をやめなければ絶対駄目だから、そこから解決しなさいという意見もある。それから、アメリカの大学にある七年目のテスト、セブン・イヤーズ・イグザミネーションとかいうのがあるでしょう。いまの大学は、なればその後冬眠状態が続いちやうから、七年ごとにチェックして論文を出させれば、大学がよくなるという。本当にそうですかね。

伊藤 まあ、多少それはありますね。

海部 そんなことを言つて来て、それを議論しろと言われたこともありました。そのことは、坂田道太さんなんかにはえらい支持されて、「海部さん、それはその通りだ。それを高等教育に加えて真剣に考えてください」という指示が出て、やつたわけです。

■文教制度調査会長3（地域特性の活用）

伊藤 これは文部省からは誰か来るわけですか。

海部 大学局長というのを陪席させます。

伊藤 呼ぶんですか。

海部 呼んでおきます。それで積極的な発言はさせませんでした。「何か言うことがあつたら言つてごらん」といって、発言の場は与えました。

伊藤 大学局長はどなたでしたか。

海部 あのころ大学局長は、のちに次官になった、あまり大きな声を出して議論しないようなおとなしい人でした。

伊藤 役所からのサポートもあるわけですか。

海部 ありません。勝手にやられたら迷惑だ、ぐらゐの気持ちでおるんだもの、あいつらは。そうでしょう。説明に來い、報告に來い、資料を持つて來いなんて言うものだから。また西岡武夫なんて激しい男だから、局長の答弁が氣にくわないと、カーツとなつて、与党の部会長が、「あれは駄目ですから替えてください」なんて大臣のところに行つてね。

佐道 西岡さんが部会長なんですね。

海部 部会長をやつたこともあります。僕のあとで。そして、さらにここに出てくる教科書問題というのは、タカ派が乱入してきて、教科書になぞらえて日教組批判、日教組攻撃をするわけだ。日本の教育が間違つておるのは教科書が悪いからだというのがあつて、そこはタカ派とハト派が激突する場みたいになつた。

伊藤 そこに奥野さんがいたわけではないでしょう。

海部 いや、ときどき顔を見せましたよ。そこに担当としては来ておらんけれど、あのころ奥野誠亮は、文教制度調査会の副会長か何かのポストに就いておつたんだ。ときどき出て來ました。長谷川峻さんも出て來ました。ああいう人たちには、われわれ以下は一目置いたわけです。大先輩が出て來ていろいろおっしゃるから。

伊藤 奥野さんはいまでもお元氣だけれど、当時でも大変な先輩なんですね。

海部 そうですよ。奥野さんというのはたいへん変わった一匹狼で、派閥には全然属せずに、派閥は呼びに來ませんな。物の言い方がああいう厳しい人でしょう。平氣で政權批判もボンボンやつたんです。

特に奥野誠亮が自治大臣を終わって、当選してきて、文教制度調査会に行つたときに、何を間違えたのかぶち出したのは、「国の予算の文教予算で、国からどの学校にいくら、どの小学校にいくらなんて決めるのは間違いだ」と、そんなことを言い出したんだ。それで僕らは、「いや、それはそうでしょうけれど」といつて、党文教としては、日本国民として生まれた以上、等しいレベルで、等しい環境で教育を受ける、それが教育を受ける権利だと思う。せっかくそれでやってきたんだから、こんなものはこうでいいとか、学校の校舎を造るときの予算はどうかの、それを出すのは、持つて行つたら自治体を使うときにチェックが激しい。自治体をそんなことで手足を縛つたらいいとか悪いとか、いろいろな意見を言われたことを思い出すな。

伊藤 地方財政の専門家ですからね。

海部 そうですよ。そういう観点から言われると、僕らは、そこまですべて自治体のことを言つて、地方のことをおっしゃるなら――。小学校の建築予算というのは、あのころすでに文部省に査定させて、何点制度で、五千点までチェックできなければ建て替えてはいかんとか、つまらん規則があつたんだ。ところがそのお金は、必ずそのトンカチで使つてしまわなければならんというのはいかにもいかに、その五%以内なら学校の文化施設に使つてもよろしい、むしろ積極的に使うべきだというぐらゐのことを言つたらどうだといつて、われわれも議論したことを思い出しますね。

例えば、と言うから、郷土出身の先輩があつたら、その先輩の絵とか書をみんなの見えるところに出すとか、いろいろなことが大事だと思ひます。校舎を造るときに、設計図がまことに画一的だから、奇を衒うわけではないけれど、もう少し変わったことをやつたらどうか。あのころみんなコンクリートで画一的な、まさに共産国のコルホーズに建つ共同住宅みたいな味も素っ気もないドーンとしたのが建つただけだからね。そこで、それぞれの地域の特性に応じた芸術文化で、そこはかとない心のゆとりを持たせる。そういうことにお

金を使つて、画一性を少しづつ排除するというようなことが、当時から僕自身の考えでもあつたし、それはいいことだった。

それが高じたので、その地域の特性を、といったら、ある地域は山のように木材を持つていても鉄筋コンクリートを使わなければならんという。木造校舎というのはいいではないかという議論が出て来て、それはいいでしょう。ただ木造の耐用年数があのころ二十年としか、はじかれていかなかったと思うんですね。しかも最初の木造校舎をやめて、みんな鉄筋に切り換えて行きつつあるさなかであつた。そんなときに、木造校舎を造つてくれ、残してくれという議論は、そう圧倒的多数の支持を得られなかったけれど、しかし木に触れるということは、日本の文化や日本の伝統を守ることにもなるじゃないか。木造にするとかえつて高くつくという変な議論もありましたが、事実高くついたらいいんだな。

けれどもPTAなんかの意見を聴くと、一部の人のことだけれど、木造の廊下を走らせたならトゲが刺さつて化膿したらどうするかというから、そんなことはよく気をつけてやるから。フローリングをするときは、トゲが刺さらないようなものをちゃんと造るから、というような愚にもつかん話もした。

ただ木材の方が、鉄筋コンクリートよりも物の響きがやわらかくて、温かい雰囲気を中心に与えるよ、という説得方法があつて、僕もそうだと思つたので、それはやろうということになったんだ。成果はあまり上がりませんでした。福島県とか、木材県の中でやらなければならんところは、それをやつたんです。今日と違つて、小学校建築ということにそう土建会社が目の色を変えて飛びつかなかつたし、そんな仕事をもらわんでも、民間とかいろいろところで新しく民需が伸びていく頃だったものですから、あまり伸びなかつたけれど、伸びることは伸びたんです。

そのことが、後日、学校建物には文化的な要素のある絵画とか書とか、なるべくその地域出身の人のものを使つて、それを利用して実物教育で故郷に対する愛郷心とか、日本に伝わる古き良き物は何

かということをお教えるようにして欲しいというようなことまで、学習指導要領の中に書き込むことができるようになった。それは教科書問題から出て来た思わぬ成果であつたと僕は思います。いまもそれは行なわれております。

■文教制度調査会長4（戦後教育の見直し）

伊藤 これは五つの小委員会を設けて、戦後教育の全面的な見直しということをお催い文句にはしたわけですね。

海部 当時は、戦後教育の全面的な見直しということでは、戦後教育というもののなかで、戦前教育に対比して、という意味で、変えるべきものは変えていく。そこで必ず議論が出て来たのは、いったい今まで悪かつたのは何か、教育勅語が悪いのか、教育勅語はいいじゃないかという森喜朗みたいなやつまでおつた。大前提を抜きにすれば、教育勅語のどこが悪いんですかと、事実真面目な顔をしてそんな議論をした。失効決議もしているじゃないか、「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」という発想自体が、戦前教育の帰属主義の間違いであつて、民主主義というのはそういうものじゃないんだ。もっと個人の能力を伸ばし、もっと自由にやっつけていけるようなところから、能力も伸び、いい成果も上がるんだ、というような議論を、本当に真面目に、本気になつてやつたものだ、あのころは。

伊藤 いちおう、いろいろな改革案をつくつたわけですね。

海部 つくつたわけですね。それなりに、それぞれの部会ごとに、部会の中間報告や結論が出ると全体会議に報告するわけですね。そういうときは文教部会の全体会議ではなくて、合同部会でやりました。いっぺんで済むから。またそうした方が、反対意見が出やすい。そういうところへかける。

伊藤 先生が調査会長をおやりのあいだに、一応の結論を出された

わけですね。

海部 全部は出なかつたと思う。こういう方向でやるんだという大きな方向付けですね。また教員問題は大変だね。特に西岡君なんか専門的に掘り下げて、いろいろ議論もしました。結局、教員というのは労働者なのか、聖職者なのかという哲学論争から始まつた。

自民党ではあのころは、教員は聖職者であるという大前提、錦の御旗を立てて、そうだ、そうでなきゃいかん、というような大先輩もだいたいいらつしやつた。「日教組ができたときから世の中が間違つてきた、日教組の綱領を持つて来い」。

「初めて教員になる諸君に」というパンフレットをお読みになつたことあるでしょう。「あれは始めから終わりまでとことん間違ひである。教師が自分は労働者であると宣言したときから、教育の頹廢が始まつたんだ」という発想の組と、「いやいや、教師は教師としての使命感と誇りを持つてやっつけていくべきであつて、労働者と一緒にだとか、そんなことをいつた覚えはないんだ」といつたら、いやそうじゃないんだということ、ストは何だということになりました。

それからストライキ権の問題が入つて来て、あんなころ部会の中でいろいろ議論した教員問題は、教員にはスト権なんていうものは全くないんだ。与えてはいかんのだ。だいたい教師なるものがストをやつて誰のためになるのか。労働者は資本家、企業者に打撃を与えて目的を達するためにはストをやればいいけれど、教師が学校でストをやつたらどういうことになる。いたいけな子供の向学心を摘むだけではないか、間違ひだ、というようなことから、ガツとあらゆる議論をしました。

結論は何だつたかという、教師は自覚しなければならん、教職者であるという自覚をしてもらいたい、ということですね。そんな頃、四ト禁止法案、法案ではないけれど、それを出したいといつて成りませんでしけれども、それはアルバイト禁止、リベート禁止、四つ目がスト禁止なんですよ「もう一つはプレゼント禁止」。それは

NHKも取り上げて、一時間やったんだから。当時はまだ相手が横枝元文なんです。四ト追放運動を声高に言わなければいかん、とやったんだ。

伊藤 そういう合同会議で決議したものは文部省に行くわけですね。
海部 そうです。高等「教育」局長は絶えず呼んで聴かせていますから。

伊藤 高等教育だけではないですよ。

海部 初中局長もちろん出て来ますよ。

■文教制度調査会長5（週休二日制と初任者教育）

海部 それから余暇善用政策の議論もやるから、今度は社会教育局長も出て来い、と呼んで、やりました。当時私たちはドイツの教育制度が縦から横から研究する材料になると思ったので、このごろその残滓だといえましょう。私は週休二日制を實行するならば、中小企業も家庭も本日に土日は完全に休めるような状況になつてからで、それまでは学校を五日制にしてはいかんということを、このころから言つておりました。そうしたら、試行期間が済んでいよいよやるというんですね。局長が来たから、「駄目だ、そんなことをやっちゃ。まだヨードンと、一般社会がそれに伴つておらんじゃないか」と言つた。そうしたら、あのころ議論した中で、心の教育が大事だとか、各家庭が子供の教育をお金と便利なおもちゃに換えてしまったところに、心の荒廃が始まったんだ、もつと心の教育が大事なんだという議論を真剣にしたことを思い出した。けれどもそのうちに、「まあここまで進んできました」「ここまで進んできました」と言つて、とうとう来年から「学校完全週休二日制を」全国一律に着手するんですよ。

伊藤 いや、もうやつているんじゃないですか。今年からやつていきます。

海部 もう十年のあれ「試行期間」が過ぎましたからと言つて、このあいだここに来たから、それは駄目だと言つたんですけれどね。

伊藤 今年の四月から実施していますね。

海部 そうですね。ただそのとき説明に出てくるのが、十何年前だから、役所に入つてしばらく経つた、ペえペえの苦勞した仲間たちがいま偉くなつて、それが担当局長だよ。加茂川「幸夫」なんていう局長がここに来るんだけれど、「君はな、むかしよくやつてくれたから、いろいろ思い出すとこれ以上ノーとは言えんけれど、駄目だな、そんなことでは。同時発車にしないと。各家庭で両親を安心して子供の休日とつき合えるような、そんな社会の雰囲気ができなければ駄目だ」とかいろいろなことを言いました。

そしてそんな頃に始めた制度の一つが初任研修。教員問題の中で教師の指導力。私は教師の指導力というものは、ただたんに学科を教えるだけではない。「教」と「育」とを分けて、「教」のほうは教室の専門だけれど、「育」はそうじゃないんだ。育のほうのために教員の船を造れといつて、ちやうど海部内閣のときに予算要求をして、去年までずっと続けておつたんですよ。

楠 じゃあ、やめたんですか。

伊藤 初任者研修でしょう。

海部 そうですね。初任者研修。船に乗つてやつてこいといつて、一週間それに乗せる。いま一人つ子が多くなつてきて、その中から二十何年経つて初めて教師になる人は一人つ子が大部分なんです。そしてなぜ船に乗せるかというと、運命共同体という言葉はちよつと連想が悪いかもしれないけれど、運命共同体とか連帯の精神が非常に欠けておる。僕も初めの頃は一緒に船をちよつと見に行ったり、乗つて帰つてきた初任の教師と教育会館で座談会をやったり話を聞いた。ところが各論になると反対で、その最初のものは個室を与えてくださいという。みんな個室で育つてきているから。「おい船でな、個室をそれだけ用意できんから、それは無理というものだよ」という。

ではなぜ個室が欲しいかと言ったら、「いびきという妨害にあったのは人生最初であります」という。「寝言というような非常に気持ちの悪い状況の中で私の精神はいらいらします」とか、そんなことが平気で出てくるんだ。

「そんなことは、僕らの頃は、みんな各家庭で体験してきたことだ。いびきが喧しいと思ったら、いびきをかき出したら、枕をパンと取ってしまえば、それで黙るじゃないか。寝言を言っておいたら、頭を叩いても起こせば、黙る。黙った瞬間に素早く上手に寝込む術を覚えなければならん。そういったことも人生なんだから、そうといったことも社会のあるがままの姿なんだから、そういうあるがままの姿をみんな身につけて、表からも裏からも指導してもらうのが全人教育で、教師に期待されているものだ」と僕は言いますね。そうすると「それはちよっと期待が大き過ぎやしませんか」とかいいうけれどそんなことは、ドイツのスポーツ・ユーゲントは、日本と同じような敗戦国でもありながら、野外テントの生活をバイエルンの湖のほとりでやっている。その現場に行つて僕も寝泊まりしたんだけれど、ああいったことが連帯意識や仲間意識を産むんだから、やりなさい。

僕がそう言ったことが二、三の広報のところに行ったら、みんな「あれ「教員の船による初任者研修」がなくなるんだったら、われわれも反対しますから、先生しつかり、なくさないようにしてください」なんて調子いいことを言う人が出て来たけれど、問題は全く別のところから出て来た。文部省がギブアップしちゃったんです、もう船は出せないといつて。どうしてかといふと、「予算が……」と、みみっちいことを言うんだな。船を借りて出すと、一航海で六億四千万ぐらいかかるんですよ。

佐道 そんなにかかるんですか。
海部 はい、六億四千万。それは無駄を省けば省けるかもしれないし、外務省的に船会社の中に入ってピンハネしているような悪いやつはいないと思うけれど、六億四千万。けれどもその六億四千万で、教

壇に立つ初任教員が生まれて初めて雑魚寝ということをしてきた。伊藤 「雑魚寝」という言葉も死語に近い言葉になっていきますね。海部 僕らはその雑魚寝の中から、部活動の鍛錬や研究をした。早稲田大学雄弁会の初任者も雑魚寝をして、四の五の言っているやつはみんな布団をおっぱがして、外を一周してこい、その間にわれわれは寝るから、と言ってやったこともあるんだから。佐道 最近の若い教員になる人というのは、どんな育ち方をしているのか――。

楠 学生下宿なんかはいまワンルームマンションですから。

海部 みんな独り暮らしだもの。

伊藤 そうですね、独り暮らしですね。それも子供のときから個室を与えられているし。

佐道 サークル活動とか、そういうのはないんですか。

楠 もう数が少ないですからね。

伊藤 サークル活動も、集団的な起居を共にするということがまずないわけです。

海部 脱線しますよ。僕がこのあいだうち学生を集めて話をしたり聞いたりしていると、大学の部には積極的に参加しないのであつて、サークル活動というのは友好の部活動だから、それはあまりやかましい規則に縛られないようにという。いわゆる規制緩和のつまみ食いだな。

楠 そうですね。いわゆる体育会は、いまやどこでも絶滅の危機に瀕しているんですね。

海部 そうなつてくると、船に乗って雑魚寝をすると連帯感が出て来ないか。朝昼晩、腹を減らして、同じものを食べて、おれはあれがうまかった、おまえは食べなかった、という経験を人生の中で一回することは大切なことだと思ふよと言つてやると、そうですね、先輩たちはそんなことをやってきたんですか、という。

伊藤 おそらくいまリーダーになつていいる人たち、中堅どころの人たちは個室生活ですね。

海部　そして個室に電話付き、テレビ付き、みんなそうなたちやっているからいけないのかもしれない。しかし僕は厳しいかもしれないが、小学校の先生というのは社会人として役に立つべき子供を育成する使命があるから、あるがままの社会の縮図の中にいろいろなことがあるんだということを知って、身をもって教えてもらいたい。それは高望みかもしれませんがね。

伊藤　いや、高望みということじゃないんですか。どこの国だってやっていることですから。

海部　ところがイギリスなんかでも、パブリックスクールというのは規則が厳しいといって、親の方から拒否して、成り立っていかないようになっていくという。だからインターナショナル・ボーディング・スクールなんていうのもだんだん衰退している。うちの娘を放り込んでおいたところも、いま廃校になっちゃったでしょう。だからある程度世界的な傾向かもしれない。しかし残念ながら、今年までやってきた小学校教員の初任者研修の制度は、たかが六億四千万円の予算のために、来年から廃止だ。

伊藤　今年はやったんですか。

海部　はい。だからいかに君らは駄目かと、このあいだもここで、予算の説明の前にわんわん言ったんだけれど。

伊藤　予算のせいじゃないですね。プライオリティの問題だから。海部　いくらでも無駄金を右から左に回すことができるんだから、あれだけ大きい組織の中では。だから子供の心が大事だの、精神が大事だの、譲り合いの精神が大事だとかいろいろなことを言うけれど、教師自身がそれをやるべきだ。僕は、大切な教師の資質であると言いつけて、教員問題を最重点に置いてきたんですが、残念ながら、これで駄目になったんだな。

■資料の保存について

伊藤　こういう調査会や部会で決められたことは、いろいろな意見の人がいますから、すんなりときれいにまとまるわけではないでしょうが、一応最終的には文書としてつくるわけでしょう。

海部　部会としては、こういうこういうことをみんなだまどめてやった。だから文部大臣宛に、大臣はこれに従ってあれをして欲しい、という。

伊藤　それが実際にどの程度行なわれたかとか、議論が十分煮詰まらないで報告書にまで至らない、というものもあったんじゃないかと思いますけれど。

海部　もちろんそうです。全部議論をまとめて、全部ペーパーにできたわけはありません。

伊藤　先生は調査会長をいつまでおやりになったかわかりませんが、その後に引き継ぐわけですか。

海部　そうです。政策の一貫性ということで、次の調査会長に会って渡すわけです。

伊藤　誰だったんですか。

海部　僕の次の調査会長は西岡じゃなかったかな。

伊藤　こういう調査会ときの資料というのは、先生はお持ちですか。

海部　持っておるはずですけどね。

伊藤　どこにあるかわからない。

海部　こんなたくさんさんの資料をずっと整理しなければならんものだから。

伊藤　それはここ「海部事務所」には置いてないでしょう。

海部　うちのほうです。ここに置いてあるのは、せいぜい総理の後半ぐらいからのスクラップとか写真帳とか。

楠　先生、自民党の中の組織の資料というのは、自民党のどこかにちゃんと整理されて保存されているものなんですか。

海部　そうですね。それは整理されていると思います。

伊藤　それはどこにあるんですか。

佐道 政務調査会ですか。

海部 政調会の事務局に。

伊藤 書庫か何かあるんですか。

海部 それはあるでしょう、あれだけ大きな建物をつくってやったんだから。

伊藤 一度紹介してくださいよ。

楠 宝の山です。それとも、シュレッダーでもかけてどんどん捨てているのか。

伊藤 いや、捨てている危険性はあるんじゃないかと思うんです。

海部 捨てている可能性はあるな。

伊藤 捨てるんだったら、捨てる前にもらいたいですね。

海部 もちろん、ものすごく膨大なものになりますから、全部は取っておかんでしょうけれど、結論をきちんとまとめたペーパーぐらいのものは持つておくべきだと思いますな。

伊藤 それはそうですね。

佐道 保管庫があれば、それを見せていただきたいですね。

伊藤 そうですね。一度ちよつと自民党の本部の人に紹介してくださいませんか。

海部 本部に永野君というのがおったんですが、死んじゃったんだ。事務的な総まとめをしていた。自民党本部一階の売店で、歴代総理大臣の書いた色紙を売っているわけだ。好きな人が来て買っていくね。そんなものを自民党本部でやり出した。ごく最近是小泉純一郎の写真集なんかをつくったりしたやつがおったけれど。しかし昔々の資料まで持つておるかどうか、ちよつとクエスチョンマーク付きだな。

伊藤 でも積極的に捨てなければ、あるはずですね。

海部 それはあるはずですよ。だから僕も、大掃除をやって腰が痛くなるぐらい、書類を下から上から見ると、古いものがいろいろ出てくるわ。

楠 それは先生の書庫の話ですか。

海部 そうそう。個人のものです。

佐道 先生、個人でちよつと整理をしたいなと思うときにお声をかけてくだされば、いつでもまいります（笑い）。

海部 いろいろなものがいっぱい出てくるといけないからな。

伊藤 そんなまずいものとはついていないでしょう。

海部 （笑い）。

伊藤 いずれは整理しなければしょうがないでしょう。

海部 いや、しようと思つて、特に総理の時代のもものは整理しなきゃなければいかんと思つておるけれど、なかなかできません。

伊藤 整理しちゃうというのは捨てるという意味ではないでしょう。きちんと後世に残さなければいけないじゃないですか。

海部 ですから、いまときどきこのへんでこういうことを聞かれるから、文部大臣時代の古いものが、例えばここ「後ろのロッカーの扉を開く」にずつと入っているものが、労働政務次官から文部大臣の頃までのものがあるけれど、いまわからんだ、どこに何が入っているのか。

伊藤 それはリストがなければわかるわけがないですね。

海部 リストなんかないですよ。だからイロハのイから間違つておった。ただ順番にバタバタと溜めていたから。

伊藤 いまここにはないお宅にあるものを預けてくださいよ。

海部 うちも官邸に行つて、官邸から持つて来て、秘書官がつくつたいろいろなものがありますね。もうちよつと目を通して、いいもの、悪いものを整理して、取っておくものは取っておかなければならんと思うんですよ。例えば電話の速記録なんていうものまであるんだもの。

楠 官邸時代のもですね。

伊藤 総理大臣時代ですね。

海部 はい。

伊藤 そこは踏み込むのはちよつと危ないから、それ以前のもですね。この「いま伺っている」時代のもを。

海部 この時代のことになると、いま申しあげたように、僕の記憶も大変虫食い状態になっていますから。

伊藤 だから最終的には、そういう文書を見ないと確定的なことが言えないわけですから。そういうものを先生はいずれ整理するといつても、絶対無理ですよ。

海部 無理だろうな。

伊藤 だからやっぱり専門家に任せてくださいよ。

海部 最近ね、「例の前尾繁三郎さんのところでいろいろな整理をしておつたら、こんなものが出て来たんだけど、海部先生、これはどういうことでしょう」と言うから、このあいだ京都に行ったときに見てきたら、いろいろな政治家との手紙の往復。それを整理してどうのこうのと一所懸命汗を流しておるけれど、そのときの秘書官なり誰かがおらないと、それはわかりませんな。

伊藤 前尾さんのところ、整理していますか。

楠 誰が整理しているんですか。

伊藤 前尾さんのお宅の人ですか。

海部 そうそう。

伊藤 じゃあ頼んでみよう。

海部 いや、あれは佛教大学がやっていますよ。このあいだ僕は佛教大学の通信教育五十周年記念式典に行って、講演をやってきた。

佛教大学の学長は水谷幸正といって、彼は中国のニヤ遺跡の発掘を専門でやっておるんですよ。

伊藤 考古学ですか。

海部 考古学。そうしたら中国の考古学の担当の役所、国庫文物局長にOKをとってもらわんと、国外に持ち出しができないとかできるとか言つて来よつたので、このあいだ北京に行つて話をしてきてあげたけれど、佛教大学は五十周年記念で、前尾さんのところに来た手紙とかなんとかを――。

伊藤 前尾さんと佛教大学は何か関係があるんですか。

海部 それは水谷幸正と、佛教大学のいまのそちらの責任者がいろ

いろやつてくれるわけだな。

伊藤 関係があるわけですか。

海部 はい。

伊藤 佛教大学の水谷という先生ですか。

海部 はい、水谷先生。

伊藤 学長さんですか。

海部 元学長。

伊藤 そういふうちにちゃんと落ち着くところがあればいいんです。そうでないと、あとはバーツと――。

海部 分散して、なくなっちゃう。

伊藤 もう捨てる。

海部 子供世代になるとまとめて捨てちゃう。

伊藤 その前に僕らが整理しますから。

海部 それはそうだと思うな、すいません。

伊藤 古いもの、これはもう二度と使わないというものを整理しますから。

海部 どれが使うか使わないか。

伊藤 使うといつても、整理しなければ使えないでしょう。リストがなければとても使えないでしょう。

佐道 こちらで仮の目録をおつくりいたしますので。

伊藤 ちよつと考えてください。いくら将来のことを考えても、政治家・海部俊樹が何をやったかということを後世の人が勉強しようと思つても、資料がなければやらんわけですから。

海部 それはそうですね。

伊藤 やはり後世の人が調べると言つたら、資料を残した人ですよ。どうしてもそれが中心になります。だから、例えば大正時代のことを考えると、原敬が細かい日記を残したでしょう。だいたいあの路線で大正史というのはできていくわけです。全然違う路線で物事を考えた人もいるわけですけど。

海部 原敬文庫のこんな「五十センチぐらい手を開く」のができま

したね。

伊藤 影印版ですね。前に活字になったものでは落としていたものが全部入っているわけです。先生が日記をお書きかどうか知りませんけれど。

海部 日記は書いていないんです、残念ながら。

伊藤 いや、書いていっていると言ふ人はあまりいないですよ。書いていと言ったら最後、あまり人がしゃべってくれなくなりますよ。

海部 日記は書いていない。

伊藤 矢部貞治さんが日記を書いていて、それが出版されたんですね。僕の先生の岡義武先生は、「ああいうことをすると、世の中の人に変迷惑をかける。日記なんていうものは書くものではない」というふうにおっしゃっていたんです。亡くなってみたら、ご本人の詳細な日記がありました（笑い）。そういうものです。誰も日記を書いていなんて言ったら、何を書かれるかわからないと思って、言わないですよ。

海部 そうですね（笑い）。日記でも何でも、書き出すと、ちよつとでも体裁よく書こう、ちよつとでも良く書こうと思つて、だんだん時間がかかつて、添削していくときに、自分に調子のいいような付け加えはするけれど、調子があまりよくないものは全然書かないしね。

伊藤 そういうものです、日記というものは。それは自伝だって日記だってみんな同じですよ。

■憲法調査会

伊藤 ところで、今日はあまり時間がないんですが、いまの文教の問題はまたあとで続いて出てくる問題だと思ひますので、憲法調査会の問題をお願いします。自民党は一九八〇年に改憲に向けた議論を開始する。これは奥野さんなんかが議会で発言されたことがきつ

かけだと思ひますが、憲法改正問題が議論になりかかるんですね。また萎んじやうんですが。いままたやっていますね。これもどこまで行くのかわかりませんが、先生はこれをどういふふうにお考えでしたか、この時点では。

海部 基本的にはいまの憲法の問題は、中曽根さんが考えてやり出したこともあつたんですよ。そしてあのときは、どこか探すと中曽根さんが自分で、「海部君、こうこうこういうことだ」といつて、問題を誰に書かせたんだらうか、メモがある。「これにしたがつて考えたことがあつたら教えてくれ」なんて言っていました。ただ、あまり劇的な内容ではなかつたと思ひますね。基本的人権、議会制民主主義を尊重のうへ、個人の福祉をなんとかすると。

伊藤 九条問題は――。

海部 九条問題は棚上げだよ。最初のご下問では、「九条問題は特に議論しない」、そういうメモが下りてきた。

伊藤 中曽根さんは九条を中心にした改憲論者ですよ。

海部 そう。そして話は飛ぶけれど、いま憲法調査会になってきて、いまも九条問題です。それはまったく入口の形式的な手続論の中で、いまの憲法改正の手続法がない。だから九条問題の議論を手続法としてやつていきたいという。

伊藤 しかし憲法改正の手続は、いちおう憲法それ自体の中に書いてあるわけですね。

海部 書いてあつても、その具体的な国民投票法という法律がないでしょう。それをつくらないと、日本の憲法は憲法そのものに改正を前提としながら、いざ改正しようと思つたら、国民投票をする法律がないじゃないか、まずそれからやろうということですよ。

楠 最近はその議論ですが、このころはどうでしたか。手続法の議論はほとんどなかったですか。

海部 なかつた。そのころはもっとアバウトな大議論で、世界の国はあのころ一六〇ぐらいあつたかな、そのうち憲法改正がなされたことのある国はアメリカを初めどこやら、という議論をして、日本

だけは何もやっていないからよくないんだ。時代が大きく変化したら、時代の変化に対応するということは憲法改正の議論もできるよ
うにしておかなければならない。いまから先走って、こうあるべき
だという結論を出すべきではないが、というのが初めの中曽根さん
の言い分であつた。あのとき憲法調査会が、文教部会のように部会
をつくって、それぞれ担当させていた。

伊藤 それで議論をしたわけですね、自民党の中で。

海部 したんですよ。

伊藤 先生はそこに入っておられましたか。

海部 僕はその中に入っていないかったです。要するに、僕はそ
ういう意味で、憲法改正論者とはちよつと一線を画しておつたん
です。

伊藤 自主憲法の制定という言い方ですね。

海部 憲法改正が具体的な政治日程に上るものとは思っていない
なかつた。

楠 社会党がありましたからね。

海部 そしてあのころの政治家の僕というのは、また元に戻って悪
いんですが、三木派の行動隊長ですから、いつも、さあと言うとき
には三木さんと一緒に、街頭演説でも選挙の演説でもやっておつた
んですね。三木内閣ができたときに、憲法の問題は必ず出てくるわ
けですよ。あのころは歴代だ。あなたは憲法をどう思いますか、と
聞かれる。そういうときに、学者を呼んでは、三木さんは夜勉強し
て、自分の納得のいくようにやっておつたが、三木内閣のあいだは
憲法改正をしないという結論を自分で出した。それは三木内閣にと
つては一番らかな結論じゃないですか、ここを変えろというといか
んという。けれど、それには理由づけがあると言って、私は平和主
義、基本的人権擁護、民主主義という基本に賛意を表しておる。あ
れはいいことである、という。

伊藤 それに反対する人はあまりいないんじゃないですかね。

海部 そういう角度の議論だったんです。

伊藤 問題はどうしても九条の問題ですよ。

佐道 実質的に、奥野さんのように本当にこれは変えなければいけ
ないと思っている人は別として、議論はするけれど全体としてこれ
で改正ができると思っている人は、この当時はまだ少なかつたん
ですね。

海部 いや、いまでも三分の二以上の発議でもって、できますか。

それからもう一つは、国民投票にして、国民の過半数の支持を得な
ければならんという。けれども三分の二以上の発議なんていうこと
を憲法で決めてしまった以上は、よくよくのことがないと衆参両院
を通るなんていうことは当面は考えられないことだったんですよ。

伊藤 非現実的な感じがしたわけですね。たしかに社会党が社民党
になつてちよつと怪しくなつてきたという今の段階で、多少可能性
が出て来たかな、という感じだろうと思いますけれど。

海部 それも手続法として、憲法改正の手続がないからその法律を
まずつくろうというのが、いまの中山調査会だ。中山太郎君も僕
のときの外務大臣ですから、いまでもときどきいろいろなところで会
つて話を聞いたりしたりするけれど、「いっぺんとにかく憲法調査
会に入ってくれ」と言われたんです、いろいろな立場で。「特に国
家の最高責任を経験した人はみんな入ってきて、自分の意見を述べ
てもらいたい」と言われたけれど、しかし彼の本当に考えているこ
とは何であるかといったら、要するにまず手続法をつくること、国
民投票法をつくることです。ですから、これは日暮れて道遠しの議
論だな。

憲法九条の問題というのが、象徴的な憲法改正の問題の中心だか
ら、そうするとそれはどういうことになるのか。刑法の問題でも図
上演習といったかな、ケース・バイ・ケースで何かやるでしょう、
想定問答集か。そうしたら、例えばお隣の朝鮮半島で、このごろは
ちよつと緊急の事態は遠のいたみたいだけれど、わかりませんよ、
まだまだ。そうすると朝鮮半島で一旦緩急があつた場合は、わが国
はどういう対応をするのか。僕らのときは、そういうときこそ日米

安保条約を援用して、アメリカが助けに来るべきだし、助けに行くからと言われて、バンデンバーグ決議の唯一の例外になっておるんだから、日本は、余計なことはせんでくれと。

あのころの近隣諸国の心配を抑えるためにアメリカは、「われわれが日本が出て行くのを抑えるから、安心して任せておいてくれ」という言い方をしたわけでしょう。だから何も日本は余計なことを考えるな。スカッドミサイルが飛んでくるときに、スカッドミサイルに対して有効な反撃手段が日本にはないから、そういったものを少し出したらどうだといっても、それはアメリカは決してイエスとは言わないんです。それはそうだろうな。ですから、ついこのあいだまでは非現実的な問題だったんですね。日常性の中で考えると。

伊藤 議論のための議論という感じですね。

楠 「論憲」ということでしたね。

海部 ただ僕が、これはなるほどと思ったのは、湾岸戦争のときに、社会党の若手が委員会に対して出た。ペーパーがあるんです。僕はそれは手放さずにとっておるんです。

伊藤 先生、時間です。どうもありがとうございました。次回また、よろしく願います。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 19 回

鈴木内閣時代Ⅱ（1981～1982）

【2002年12月2日（月）14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2002年12月2日)

前回は、主に文教問題についてうかがいました。今回はその他の問題からお願いします。

1. 81年2月、竹田五郎統幕議長が、徴兵制を違憲とする政府見解に異議を唱え、防衛費GNP1%上限を批判し問題になりました。この問題について先生はどのようなお考えでしたか。
2. 5月、訪米した鈴木首相がレーガン大統領と会見しましたが、このときシーレーン防衛を約束したのかが問題となり、また鈴木首相が日米共同声明の作成経過に不満を述べたため、伊東外相が引責辞任する問題となりました(5月16日)。この一連の経過について先生はどのようにご覧になっていたのでしょうか。
3. 伊東外相辞任騒動の直後(5月17日)、ライシャワー元駐日大使が、核積載米艦船が日本に寄港していると述べて問題になりました。非核三原則や事前協議制度に関する疑問が野党などからさかんに提起されたわけですが、この問題についてご記憶の点をお願いします。また野党に対する工作などをおやりになったのでしょうか。
4. 81年3月、臨時行政調査会(第二次臨調)の初会合が開催され、以後一連の行革の議論が本格化します。鈴木内閣下での行革議論については、先生はどのようにご覧になっておられたか。
5. 5月、自民党は参議院全国区に比例代表制を導入する公職選挙法改正案を国会に提出しました。これは廃案になりますが、翌年7月には成立します。この選挙制度改革問題については先生はどのようなお立場だったのでしょうか。
6. 先生は、81年11月、国民運動本部長に就任されます。国民運動本部長就任の経緯や、その仕事の内容等についてお願いします。また、先生が本部長時代の国民運動本部にどのような方々が参集しておられたのかもお願いします。
7. 82年3月、米ワインバーガー国防長官が来日し、シーレーン防衛の具体化、防衛費の12%増などを要求します。米の防衛費増大要求は以後も強くなるわけですが、当時防衛費問題についてはどのようなお考えだったのでしょうか。また、議論の中心となっていた1%枠問題についてはいかがでしょうか。
8. 日本の政治ではありませんが、この年4月にフォークランド紛争が勃発し、英国とアルゼンチンが戦争します。どのようにこれを見ておられましたか。
9. 6月、東京地裁でロッキード事件初の政治家被告判決公判がありました。元運輸相橋本登美三郎、政務次官佐藤孝行に有罪、二階堂進、加藤六月、佐々木秀世、福永一臣らへの金銭供与も

認定するというものでした。この判決は当時どのような影響を政界に及ぼしたのでしょうか。先生はこの判決についてどのような感想をもたれましたか。

10. 7月、教科書問題が発生します。中国側の「歴史改ざん」という抗議に文部省や外務省から局長等が中国に派遣されたりしますが容易に収束せず、結局8月26日に宮沢官房長官が「歴史教科書についての政府見解」を発表してようやく解決に向かいます。教育問題については関係の深い先生は、この問題についてはどのようなお立場だったのでしょうか。

11. 10月、鈴木首相は退陣を表明します。鈴木退陣についてはどのように見ておられたのでしょうか。また、その後党首脳による候補一本化調整が失敗し、結局11月24日に総裁候補決定選挙（予備選）が実施され、中曽根氏が57%を獲得。翌25日に臨時党大会が開催され、中曽根総裁が誕生しました。予備選には河本氏も立ち、二位となったわけですが、この一連の経緯についてお願いします。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。

■現在の政局から1 (自由党と民主党)

伊藤 政界もいろいろ動きがあるようでございますね「民主党の鳩山代表と自由党の小沢党首が新党を結成する意向を表明、鳩山氏は代表辞任を示唆」。

海部 いろいろありますが、登場役者があまり変わっていないものだから。あの壊し屋が出て来ては、成り立つものも成り立たないな(笑い)。

伊藤 先生は高みの見物ですか。

海部 もう高みの見物です。いろいろ流れ矢が飛んできたり、会いたいという。会いたかったら会ってあげるからいらつしやいといって、ただ話を聞くだけだ。

楠 いよいよ保守党は自民党に戻るとい話をチラツと聞きました。

海部 戻るとか戻らんよりも、保守党ができたとき、これは派閥争いみたいなものですからね。自民党の中の一つの派閥みたいな感じになっちゃうから、むしろ公明党との間をはつきりするためには保守党もおつてくれたほうが、というような本音があるんじゃないの、向こう「自民党」には。

伊藤 そうでしょうね。

海部 そう短気を起こしてくれるな、頼む、頼むと言って、表面は非常に慇懃丁寧で、保守党を大事にしますよ。それに引つかかると、ふらふらつとして、みんな喜んじやう。

伊藤 いちおう「三党」連立ですからね。

海部 そう。その三党連立を決断したときに、また壊し屋が出て来て壊そうと思ったから、そこで小沢グループと保守党が別れたという経緯があるわけでしょう。あの壊し屋が入っていると、ほとほと疲れる。

伊藤 今度の民主党の問題も、その方がいろいろと――。

海部 あれは結局、小沢が壊しちゃったんじゃないかな。誘惑して、その気にさせておいて壊しちゃったということですからね。何回やつても、あの癖は治らんだろうな。

伊藤 しかし鳩山さんもうまく乗ったんですね。

海部 鳩山さんはそういうところはない、と思ったんだけど。

伊藤 苦し紛れに。

海部 苦し紛れにやったんだな。一昔前には、小沢辰男君というのがわれわれのグループにおつて、小沢辰男がいかなる加減か鳩山兄弟と非常にパイプが太かったんですね。鳩山も僕のことをいろいろ言うから、「いっぺん海部、一緒に会ってくれんか」と言われて、会ったことがある。それから二回ぐらい一緒に食事をしたりすることがある。もちろん、その前から知っていますからね。小沢辰男が紹介したからどうのこうの、ということではなかったけれど。小沢辰男には、えらい思い入れがあったんだ。けれども鳩山由紀夫さんという人は、僕に言わせると、ちよつとお殿様の子供だから、甘いわな。

伊藤 何か物事をきちんと詰めないでやっているという感じがしますね。

海部 そして最もそばにおる連中が、ぶつぶつ文句を言ってくるんだ。「そんなこと、おれに言ったつてしょうがないだろう、本人を捕まえて言つてこい」と僕はいつも言つてやるんだけれど、そういう癖(へき)があるな。あれでつぶしちゃうんじゃないか、鳩山さんは。だって、本当の弟でさえ、最後は見放したでしょう。邦夫のほうは、文部大臣をやった頃にいろいろあつて、僕の後輩だから、相談に乗つたり話したりいろいろしたんです。心を割つて話さないというのか、本気になつて真面目に話さないというところがあるんじゃないですかね。

伊藤 みんな、人それぞれ癖がありますからね。

海部 けれど、今度これで駄目になると、民主党の中で鳩山を追い

出した反代表グループは、とても小沢一郎の壊し屋グループとは一緒になれるわけがありませんからね。

伊藤 やはり民主党をぶっ壊した、ということになるわけですかね、結果だけ見れば。ちよっとちよっかいを出して。

佐道 でも、人のところに手を突っ込んで壊しちゃうというのは、すごい力といえはすごい力ですね。

海部 まあ、いい悪いは別にしてね。

■鈴木・レーガン会談と「日米同盟」

伊藤 それでは本番に入らせていただきます。前回、だいたい文教関係の話を伺いましたが、今回はそれ以外の鈴木内閣の時代のいろいろな問題についてお話を伺いたいと思います。質問要項はごらんいただいたでしょうか。

海部 はい、見せてもらっております。

伊藤 一番ですが、「一九八一年二月」統幕議長の竹田「五郎」さんが、防衛費の問題「一％上限批判」や、徴兵制の問題「徴兵制違憲の政府見解に異議」で、こういう意見を出して、かなり大きな問題になったように思うんですが、ご記憶ですか。

海部 どういうところに原因があつたかということは知らずに、あの竹田統幕議長がいろいろ発言をしたり批判をした。批判された方ですから、よくわかつております。

伊藤 この人との接点は、先生は全然ないわけですね。

海部 僕は個人的にはありません。その人はむしろ、民社党の春日一幸さんとか、ああいう組と近かつた。春日一幸さんは、いろいろな話を僕には昔からしてくれておつたんですが、当時の民社党の防衛政策に、この竹田五郎さんという人はちよっと深入りしておつたんじゃないですか。ただ僕は、そのまた昔の来栖「弘臣」さんという人とこの竹田さんがどういう関係にあるのか、寡聞にして知りま

せんからいけません。民社党は、野党の中で防衛庁が一番信頼した政党ですからね。むしろ自民党より信頼しておつたわけだから。うちの親方あたりが一％枠なんていうことを言うと、それに対して表面切つて物が言えん人々は、代わつて言ってくれるこういう人たちがありがたいわけだから。

伊藤 これは特別に先生と関連した問題ではないわけですね。

海部 僕は直接は関連しておりませんでした。

伊藤 では二番目の、「八一年五月の」鈴木・レーガン会談ですね。これが大問題になるわけですが、伊東「正義」外務大臣がそれで辞職をするという事態に発展します。こういう問題は、先生は直接には関係なさらないだろうと思いますが。

海部 この問題は、鈴木首相が自分の本当の腹を伊東さんとはすり合わせをしてなかつたからでしょうね。そこまでは聞いていなかったと思う。範囲が違ふんだということを伊東さんは言い出したわけだ。伊東さんというのはああいう生真面目な性格だし、善幸さんも上に言葉がつくような正直な人だから、二人がおつしやつていることやその議論は、どっちもどっちとして、いろいろあるでしょう。

伊藤 何か物事の事態がよく理解できない事柄ですね。

海部 そうです。そしてむしろああいうときは、三木さんに言わせると、「それは総理の責任だ。これは鈴木君が悪いんだ。外へ出る前にきちんということは詰まっていなければならんし、況んや日米共同声明なんかをまとめるときというのは、あらゆる角度から議論して最後にバンと決めるときは、外務大臣とか官房長官は全部よく知っているはずだ。そうでなければいかん。手続としては、それでやつたんだろう。それをやってあれば、あとになって外務大臣に、おれはそれは知らなかつたということはないし、卑怯であるし、間違つておる。けれどもそれを抜きにして、本当に寝耳に水でやつちやつたというならば、別のところに問題が出て来る」ということです。このときにはどういう経緯手続でこれが発表されて世に出た

のか、よくわからんところが、われわれにもあります。だから三木さんの批判というのは、自分がもしこの場にあったら、というような角度・考え方から、従来の自分の体験に属した話をされたと僕は受け取りましたね。

佐道 鈴木・レーガン会談がございますね。そのあとアメリカで記者会見があつて、それで一千海里防衛とか、共同声明に「同盟」という言葉が出たということで、まず新聞記事で話題になつて、日本はアメリカとの新しい防衛協力に乗り出したのかということが話題になつたあとに、鈴木さんが帰つてきて、「あの共同声明は自分はいさぐよく見ていなかった、外務省のやり方に問題がある」という批判をされて、伊東さんがお辞めになる、という経緯だったと思うんです。

ですから三木さんがおつしやつたような、共同声明ですから出すときには総理に責任があるという問題と、もう一つ前の、同盟と打ち出したとか、一千海里シーレーン防衛という問題について約束したのかしなかったのか、という問題がここで取り上げられたということがあるんですね。

海部 そんな議論がそのころありましたな。

佐道 それについては、どうなんでしょう。日本はアメリカと新たな防衛協力体制に乗り出したのかどうかということが、ここで議論されたわけですが、この問題についてはどう見ておられましたか。

海部 一千海里のシーレーン防衛ということになれば、いままで全くなかった新しい発想ですが、僕らの素朴な疑問としては、たしかあのとき一千海里の線を引いて、百歩譲つてこれはわかるが、「ここが一千海里です、さよなら」といって、一千海里になつたらさようなら、というような非常に単純な発想をして、言の葉に出し、質問もしてみんです。「それは数字（すうぐわく）の問題とは違ふんだよ」といって叱られたけれどね。だいたいそれが生命線というか、非常に大事な海路だという意味で議論があつたんでしよう。けれども善幸さんは、最終的にはなんと言つたか、「自分は一切聞

かされておらなかつた」とか、「聞いていなかった」とか、あるいは「勝手に越権行為でやられちゃつた」とか。当時の風評はそんなことでしたね。

伊藤 共同声明は自分がサインしたわけですからね。

海部 だから三木さんが、「誰がやるうがやるまいが、共同声明にサインをして発表すれば、その瞬間から全部その人の責任になる。重いものだよ、総理大臣の共同声明に対する責任というのは」と言われたのを覚えていますね。

伊藤 知らなかつたと言われたんじゃあ、国の権威がまず保てないですね。

佐道 「同盟」云々という話が出たということに関しては、何か記憶がございますか。

海部 日米のあいだは、同盟なのか同盟でないのか。よく「同盟」というと、上に二文字付く「軍事同盟」ということをすぐ言いますね。軍事同盟になると、短絡的に言えば憲法違反ではないかという議論があつたように思います。けれども、日米同盟というのは、あのとき常識的に言うところ、軍事同盟ではないんだよね。日本のほうに力がないから、頼られ甲斐がない。

佐道 アメリカが日本に対して、ということですか。

海部 そうそう。いまでもそうでしょう。

■現在の政局から2（イージス艦派遣）

海部 ちよつと脱線しますが、このあいだイージス艦を派遣すべきかどうかということで、いろいろ議論がありましたね。僕の個人の考えは、「せつかく（という言い方は悪いが）あるから、それがあの地域の安全と平和に役立つというならば、使つたらどうか。使わなければ、宝の持ち腐れという言葉があるぞ」ということだ。そうしたら保守党の中におつた連中が「ほう、驚いた、最高顧問がそん

なことおっしゃってくださいるなら、それは大丈夫だ。党の意見はこれで固まった」という。おれが反対すると思っただろうな。「僕は反対する理由もない。せつかく国民の税金をもらって。考えてみる」。

伊藤 あれはものすごく高いものですよね。

海部 一杯、一五〇〇億です。それを見たことも触ったこともない連中が、いいとか悪いとか言うから、日帰りで行って来たんです。党の全体会議で、「暇なのがおつたら、みんな行こうよ」と言っていてきたんです。横須賀には、僕は不思議なことに何回も行っているんです。掃海艇を送ったとき、帰ってきたとき、迎えに行ったとき、防衛大学の卒業式、防衛大学の何かの行事、何回も行ったことがある。イージス艦もそこにあるから、見に行ったんです。みんな見たことも触ったこともない連中が、それは日米安保に抵触するとかしないとか、出すべきだとか出していないかとかいう。むしろ出しては行けないという公明の意見が強いものですから、三党協議に出ている連中は、それを壊したくないから、なるべく保守党の方からぶち壊しはしない。自民党も「三者の意見がまとまればその結論に従います」という。自民党もそう積極的に、党内の賛否を分けて、反対派を説得しようなんていう努力はまだ見えていないんですね。テーマとして取り上げていないんだ。せつかく日本も国民のみなさんの理解を得て、手続もきちんと踏んで、一五〇〇億という高いお金を使って買ったんだ。しかも持っている国が、アメリカ以外は日本とどこかに一隻だけあるんだってね。

伊藤 日本以外にもあるんですか。

海部 いや、日本だけだと僕は聞いておつたが、もう一ヶ国どこかに一隻だけあるんだ。だからアメリカと日本だけだと言われても、いいですよとよく言われましたが、それがいま四杯あって、そこに二杯追加になるわけですね。国民がそれを持つと認めたのは、この国の平和と安全を守るためだ。だからそこに焦点をきちんと置いて、日本よ協力してくれといってくれたら、このへんの平和と安全のため

めに役立つとなったら、十分慎重に配慮しながら使ったらどうか。その代わり、攻撃的な一部のものがありますから、それは厳重に封印でもして、「これは使いませんよ、抜かずの宝刀だ」ぐらいのことをわかりやすく言っておけば、国民の理解と支持も得られるであろう。だから、行って見てきたんです。

直角のような階段を甲板からずっと下まで降りる。鋼鉄の縄梯子みたいなもので、こんな急傾斜を降りる。それで一步一步がだいぶ「間隔が」ありますから、厳しいんですよ。そして翌日、このへん「太ももを叩く」が突つ張るかと思つたら、まじらの如くやったがためなんだ。

伊藤 やつぱり最新鋭の情報収集のための機器を備えているんですね。

海部 それは事実です。そして驚いたのは、甲板の上にあるマストというのか、その中二階に電波探知機が回っていることです。あれは一回転するのに約四十秒かかるらしいんですが、その四十秒のあいだに、四方八方全部の情勢をつかめるわけですから、相当な防御能力だと思えますね。ギリシャ神話の中に出て来る「平和の盾」がイージスです。だからギリシャ神話の平和の女神を守っているイージスという名前をつけられた盾、その名前をとって、完全に防御するんです、ということでしたね。

見てきて、そういうものがあるならば、しかもほかの国にないならば、頼むといって頼まれたら、侵してはならない一線はあるけれど、そこは慎重に判断し話し合えばできることだから、出したらどうだ。いまごろ、出すの、出さんのと議論しているようだけれど、あれは公明対策です。だから僕は、「直ちに武力の行使をするわけではないし、弾の撃ち合いに入って行くわけでもないんだ。情報を耳を長くしてきちんと探り、取り、この地域と自分の安全のために使うならば、それは許される範囲内ではないか。おれが言うんだから間違いない。それでこの党をまとめろ」と言ったら、みんな喜んで、「最高顧問にそう言ってもらえれば」なんていう。うち

には月原「茂皓」なんていう勇ましいのがおりましからね。その道の出身者だ。それから泉「信也」君なんかも案外激しいんだ。国土交通省の副大臣ですよ。「本当ですか、最高顧問」と言うから、「それはそうだ、その代わり慎重に判断して、他国に少しでも脅威を与えないように、文字通り『イー・ジス』で行け」。そして、本当にみんなで行って見てきたんですよ。

伊藤 効果はありましたか。

海部 翌日になってみんなが——。だって見たってわからないんだもの。これが何をやるものか。ただ、上の方ですつと回っているアンテナというのか、非常に性能が高い。さらに攻撃的なものはほんの一門だけの二十ミリ機関砲ですが、そうではなくて甲板の下に艦対空というのか艦対艦ミサイルというのか、それが二十一基ぐらい入っているんだ。けれどそんなものは見てもわからない。「なるべくそういうものは封印して、使わんようにしろ。心構えとしてはそういうものだ」ということを私は言ってきました。

■自民党、中選挙区事情

伊藤 先生は伊東正義さんという政治家との接点はあまりありませんでしたか。

海部 あの人は非常に真面目で、堅い先生であるが、それよりも何よりも、自由民主党が中選挙区の時代には、伊東正義とともに戦った自民党の議員がおれの仲間であると、「伊東氏とは」仲良くなれるはずがないじゃないですか。

伊藤 やはりそんなものですか。

海部 それはそうだ。選挙になると応援に行つて、いじめるでしょう。ここまで言ったから全部言っておきますが、ちょうどこのあいだ済んだばかりで、これ「赤い表紙の『早稲田大学雄弁会百年史』」を見ておつて、なるほどな、と思つた。渡部恒三なんていう

のがわれわれと同期で、一所懸命頑張つたんですが、その渡部恒三が選挙区に帰ると、伊東正義とは犬と猿。これは仲良く行けるはずがない。そういうことが、全国を見るとずいぶんあります。

伊藤 選挙の問題があるんですね。

海部 選挙区で、応援に来てくれ、来てくれるという関係が、中選挙区の時はずいぶんありますからね。古い話になるけれど、楠君のお父さん「楠正俊」が、初めの頃、玉置和郎と二人でおれの選挙の応援に来るといふ。というのは、こっちは新宗連の票を全部もらおうと思つたんだ。こっちはまだ出たてで、あまり基盤がなかった。僕が住んでおる一宮市にも、立正佼成会とか、新宗連に属するものがたくさんあるんです。行くとみんな、ポスターも貼つてあるわけだ。玉置さんも楠さんも全国区だから、衆議院の私とはち合わない。「応援に来てよ、頼むよ」といふと、「よし」と言つて、来てくれるわけだ。

そうしたら江崎真澄が怒つて、「どうしてあなたは、ああいうところまで手を伸ばすんですか」と言うから、「どうしてといったつて、当選したいからです。先生、もうちよつと手を緩めておつてくれれば、それはやらんけれど、あまり締め付けが激しいので」と言つたら、「いやいやいや、あなたの方がこのごろはたくさん票をお取りになるので、そういうところまで手を伸ばしてこせこせおやりになると、かえつて将来のためになりませんよ」なんて脅かされてね。それぐらいのものなんです、中選挙区というのは。

ようやく小選挙区になつてから、自民党の派閥争いの垣根がちよつと低くなつたかな。だから党内で各派閥が派閥事務所をつくつていろいろやつているときは、むしろ僕らは、自由民主党は自由主義者連合といったようなものだと思つていた。愛党の精神だのなんなのきれいごとを言つても、それは平時の話であつて、戦時国際法は別なんですよ。それから夜の六時以降も別だ。それでよく長い間、自民党はもつてきたと思う。

佐道 そうですね、よく一緒にやつてくれましたね。

海部 何回も亀裂の危機はあったが、よくもつてきたと思う。それはバランス・オブ・パワーの妙だったと僕は思う。派閥の数が二つや三つだったら、もうちよつと激突が激しかったけれど、一強五弱とか、一強六弱とか言われたように、六つ、七つに分かれているのが適正規模なんです。

伊藤 それは中選挙区の定員数と関係があるわけですね。それが小選挙区になったから、模様がだいぶ変わったと思いますね。

海部 変わったんだ。それはそうです。

伊藤 そうすると、いまお話の伊東さんなんかとはほとんど接触の機会はない。

海部 ないんです。とにかく選挙になれば、渋谷直蔵とか渡部恒三とか、ああいう連中と私は持ちつ持たれつで応援に行ったりしますから、中選挙区のいろいろなところで、バッティングするわけです。伊藤 同期で応援するというのは、また派閥が違うわけでしょう。

海部 そこがまた自由民主党の曰く言い難い自由なところだ。だって楠さんのおやじだって、派閥の関係から言ったら、僕の応援には来られないはずなんです。

楠 うちは派閥に入っていなかったから、どこでも基本的には「応援に」行けたはずなんですけれど。

海部 派閥に入っていなかったの。

楠 派閥に入っていないので、ワリを食っちゃったんです。

海部 そういうことを乗り越えてみんなやって来ているから、一種不可思議な派閥以外の友情も、別なところで生まれているわけだな。伊藤 そうですね、すべてが派閥で理解できるわけではないんですね。

海部 すべてが派閥ではない。だから僕が今日もこうしてのんびりとした顔をして、えらそうなことを言っていられるのも、誰がどこの派閥で、誰がどこの派閥でどういう世話になっていて、という人脈がだいたい投影されるものだから、さあやろうというときは、昔の仲間が生きるからですね。

伊藤 面白いものですね。

海部 面白いものだと思いますよ。だからこのあいだ、ヨハネスブルクのサミットに行ったときも、結局、民主党からも環境族が数名出て来るし、自民党からは十三名出て来た。保守党からは僕一人だけだけれど、全体で二十人で代表団をつくって行ってきました。そしてそれができた頃からの曰く因縁、故事来歴を一番よく知っているのは僕のわけだ。僕の次に知っているのが橋本龍太郎ぐらいだな。だから向こうに行っても、はい、といって演説をして、それから橋本にも頼んでやってもらおう。だからヨハネスブルクまで行くと、民主党の出番はないわけです。

佐道 でも以前に比べて、いま先生がおっしゃるような政党横断的なグループをつくることは、やりやすくなっているわけですね。

海部 やりやすくなっていますね。全員集合じゃないけれど、政党横断的に集まって、環境問題なんかをやろうというときは、それはよろしい。

それからついこのあいだも、日中国交正常化三十周年記念の記念行事を何かやってくれという。中国の宋健さんという人が、中国側の対日団長なんです。何か顔を立ててくれ」と言うから、「顔を立てよう」と言った。こっちも少々意地悪だったけれど、「今度中曽根さんが頼むといったから芸術議員連盟の会長になった。こちらから油絵を持って行って君の国で展覧会をやってあげるから、宋健さんのほうも何人か絵ぐらい描くだろう」、おそろく墨絵しかないだろうと思ったので、そう言ったら、本当にそうなんだ。「油絵を描く人は中国の全人代の中にはおらんけれど、書（しよ）ならいっぱいある、書でどうだ」というから、「いや書もいっぱいいるけれど、書は格差がすぐわかる」「じゃあ絵も出すが書も出すことにしよう」ということで、やってきたんです。

伊藤 書画展ですね。

海部 そうするとそれには、不思議なことに共産党以外、全部出品してついて来ましたね。

伊藤　なんで共産党は駄目なんですか。

海部　知らん。描くやつがいらないとかなんとかいって、参加しなかった。参加料が十万円かな。

伊藤　あその党は、お金がいっぱいあるでしょう。

海部　個人負担になると、出せないんだな。そんなことは相手の党の内容だからどうでもいいですけどね。

それからほかにモンゴル。モンゴルも三十周年記念ですよ。中国ばかりもてはやして、モンゴルのことをもてはやさんから、少しモンゴルもやってやろうということまで話を進めると、みんな出て来ますよ。そういうときには、派閥を超えてやりやすくなったということですね。

伊藤　やはり中選挙区の時、あいつの顔も見たくない、会いたくもないという感情はどうしても出て来るわけですね。

海部　はい。例えば、江崎真澄さんなんていったら、僕の顔はもちろん見たくないだろうし、佐藤観次郎だって見たくないといっている。それは票を取って、だんだんこちらが強くなってきたから。けれどもその結果、小選挙区になったときに、棲み分けがいつも簡単にできたんですね。それで佐藤観次郎の息子の佐藤観樹は離れた。自分の家もある九区「海部氏の選挙区」から、十区に行った。おれは江崎さんにさんざん憎まれたけれど、結果的中だ。佐藤観樹は「十区で」、江崎「真澄の息子・鉄鷹」とやったら勝てる計算盤を弾いたんだな。自分の生まれた家も事務所も捨てて、現にサトカンが当選しているわけだ。江崎君は油断をしておったものだから、ちよつと惜しいところだ。だから今度は一所懸命応援して、彼をもう一回すくい上げないと、なんのことはない、逆恨みされちゃいますからね。そういう悲喜劇が全国にいっぱいあるんです。

■非核三原則についての議論

伊藤　その次の質問ですが、ライシャワーさんには何回かお会いになつていらつしやいますか。

海部　はい、何度かお目にかかっています。

伊藤　どんな場面でお会いになるんですか。

海部　ライシャワーさんという人が大使になられる頃は、日本の政治家をときどきアメリカ大使館に呼んでは、お食事の会をした。初めの頃は、三木先生が呼ばれていくものだから、「海部さんまた行くから、行こうよ」というので、呼ばれていって、一緒に会って話をした。あそこの奥さんはかなり有名なハルさんというんですよ。そのハルさんは、日本語はもちろんべらべらのアフガニスタンですからね。だから非常にアットホームな関係でお話もできましたね。

伊藤　ライシャワーさんが、「核搭載をしたアメリカの軍艦が日本に寄港しているよ」ということをおっしゃったので、ちよつと問題になったんですね。例の非核三原則問題で野党が騒いだ。こういうときには、海部さんの出番があるのではないかと思うんですが。

海部　いや、僕の出番があるというよりも、そういうときは日本側がどういう対応をするかということになると――。このときはまだ大平先生がご存命中だったと思うんですが。

佐道　いや、もう亡くなった後です。

伊藤　亡くなったから鈴木内閣になつてゐるわけです。

海部　大平さんが、核問題については一番深刻に考えて、悩んでおつたんです。三木さんが総理になつて、大平さんが外務大臣の時、首脳会談に僕もお供して行つておつたものですから、飛行機の中でもいろいろ話した。大平さんは例の調子で、ボソッボソツと言われた。結局あの人は、「核を『持たず・つくらず・持ち込まず』という三原則は、二原則が本当だ。三原則と言うから、いくらかオブラートで包んで、本当でないことをときどき言わねばならんから、つらいことですよ」という。それを劇的に変えるには、それに必要な大義名分もあるし、頭からそれを言うわけにもいかない。だからあの人は、自分の心の中で問題提起はよくされていたけれど、だか

らこうしようという解決策は持っていなかったな。持っていらっしゃっても、口には出さんわけだ。

そのころ三木さんがポロツと言ったのは、こちらのほうが正直だと思うけれど、『三原則はやめにして、『持たず・つくらず』はいけれど、『持ち込まず』と言うのはもうちよつと別の、幅のある表現はないだろうか。例えば『持ち回り』ぐらいはさせるとか』ということだ。これは極めて現実的な話だったんだけど、持っているか、持っていないかというのがわからないから抑止力があるんだ。持っていないよ、ということがわかったら、抑止力にはならない。核というのは、日本にちよつと寄るから、これ預かっておいてくれよといって一時預かりするようなお荷物じゃないんだ。だから結局、あるかないかわからん曖昧なところで、日本政府は事前協議でないものはないと言えば、アメリカはそれを無条件で信頼する。その信頼関係の上に成り立っているのがこれでしょう。大平さんはそこに深刻な疑問があつたし、三木さんはもうちよつと前向きに、大きな大義名分があつたときにそれは考えるべきだということを、相当長時間議論されているのを、横で黙って聞いておりました。

伊藤 いまこの非核三原則については、核搭載のアメリカの軍艦が日本の港に寄港するということが、社会党がなくなってしまうものだから、あまり話題にならなくなりましたね。

佐道 土井「たか子」さんがこれを法律にしろということを主張しておられますが、さすがにそれはほとんど無視されているという状況ですけれどね。

■第二次臨調の始まり

伊藤 それでは先に進みましょう。臨時行政調査会が八一年三月にスタートします。これは第二次臨調ですが、その前の臨調はだいぶ前ですね。

佐道 そうですね、池田内閣の時ですから。

伊藤 臨調でとにかく行革の議論が始まるわけですね。これは次の中曽根内閣までつながっていくわけですが、行革の問題は、先生はあまり関わってはおられませんか。

海部 行革は、あの頃はという角度からいっておったのかな。一番心に残っておるのは、行革をやるのに、役人が出て来る。三木さんは「役人の古手」という言葉を使ったかな、「役人の古手が出て来てやることになっては行革はできっこないんだから、発想の転換をして、こういうときは思い切ってやらなきゃならんよ」ということでした。例の永井道雄さんとか在野のやや無関係の人が、三木さんの家と呼ばれて話をしたり、青写真を描いたり、いろいろしていたことは、ときどき僕もその会に侍らせてもらって、聞いておりました。本当にできるのか。抵抗が非常に大きい。抵抗が強い面がわれわれには見えたり聞こえたりしました。行革というのは本気になつてやらないとできないものだよ、ということをして、いろいろな面でいやというほど体験させられているな。

ちよつと前後しますが、小渕恵三君という人は、廊下で「海部さん、海部さん、ちよつとちよつと」と言つて、「行革の時だけはな、オール行政とオール議会のこれ「両手の拳をぶつけ合わせる」になるから、みんなが力を一緒にしなければならぬ。そのときはいろいろホットラインで頼むから協力してくれよ、頼むぞ」と言ったな。あれは誰かに言われたんじゃないかと、自分でそういうことを思っておつたんじゃないかな。そう言われたことを、本当に覚えております。

伊藤 それは小渕さんが総理の時ですか。

海部 小渕さんが総理の時だ。だから総理になるときに、誰かによっぽど言われたんじゃないかな。それまでできなかったことを彼自身も顧みて、これがテーマだと思つたんでしような。これは脱線です。

伊藤 行政機構に手をつ突つ込むと、とにかく官僚からの反発がすご

いというのは確かだと思いますが。

海部 ものすごかったんです、それは。

伊藤 先生はこの臨調には直接には関係されなかったと思いますが。

海部 このころはそんなに深入りしていません。

楠 いまの小淵さんの話は、いつごろですか。

海部 小淵が「総理に」なったときだ。

楠 じゃあ、まだ自由党と連立を組む前ですね。

海部 前だ。

楠 そのとき自由党はまだ野党だったわけですね。

海部 そう、「われわれはオール議会でやらなければならんから」と言っていた。そのころから彼は「みんなが力を合わせてやってもらわないとできっこないんだから、行政に負けるから」と言っていた。

楠 自由党はたしか第二次小淵内閣から連立を組んだんですね。

伊藤 そうですね。

■参議院への比例代表制導入

伊藤 同じ年の五月に、参議院全国区に比例代表制を導入する公職選挙法改正案が出されますが、これは廃案になります。それで次の年に成立するんですが、この選挙制度改革について、先生は何か関わりましたか。

海部 関わりません。

伊藤 これは参議院の問題だということですか。

海部 ああ。他院のことにみだりに口出しをすべきではないという鉄則を、当時自民党の国会対策委員会ですつと鍛えられていたものは知っていますから。他院の問題について嘴をみだりに容れるのはいけません。むしろ、あのころ自民党の国会対策の現場の部隊長をやっておった竹下とか金丸さんは、そこだけはきちんと線を引いて守

っていくようにしておりましたね。

伊藤 こういう制度が参議院で作られるということは、衆議院にはあまり影響はないんですか。

海部 間接的に、結果としては影響がいろいろあるでしょうけれど、それよりも何よりも、あの頃は全体として、衆議院と参議院の違いをもっとわかりやすく、きちんと国民に理解してもらわなければならない。なんのための二院制か。もたもたして放っておいたら、参議院はいらんじやないかという参議院不要論が、ときどき忘れた頃に、ぼそぼそと休火山というのかな、ときどき噴火する火山みたいに出来来る。だから、参議院はこうだ、衆議院とは拠って立つ基本盤も理由も違うんだということを明確にしたらいいだろうという意味で、衆議院側も参議院のことには嘴は容れない。そういうふうにやろうということだったと、私は記憶しております。

伊藤 参議院では、決算を中心に審議しようじゃないかという意見もあるそうですね。何か違いが欲しいんですね。

海部 違いが欲しいんですよ。

佐道 先生は参議院は必要だと思っておられますか。

海部 思っていました。ということは、非常に書生論だったかもしれないけれど、人間の判断や人間の決定にはややもすると間違いが起こるかもしれない。だからもう一回別の角度から審議してやってみる、二院制度というものの本当の理念から行くと。人間が欠点があるということを自覚すればするほど、二院制に任せておくことのほうがいい。衆参両方で通ったことなんだからということが、最後の心の慰めになるわけですね、強行採決をやっても。だからあの頃は、いまもそう思っていますけれど、参議院があつたほうが、それは間違いなく、わかりやすく審議できるじゃないか。噛んで含めるようにというけれど、民主主義の中では国民のみなさん徹底してよく理解してもらふ必要がある、だから審議は尽くした方がよろしい。

伊藤 だけど、政党化した参議院は、与野党逆転していれば別ですが、与党多数でやれば、党議拘束ですつと行くわけですから、チェ

ツク機能はないですね。

海部 しかし先生、そこは個々の議員が本来に見抜いて、ここにおかしいことがあるんじゃないかというのを堂々とぶちまければ、初め無関心で送り出した衆議院のほうにも影響が返ってくるものなんでしょう。そういう経験・体験が、僕も二、三回ありました。

伊藤 でも、それで修正ということになりますか。

海部 それは政府が修正できるように、そういうムードづくりをやるわけです。修正したこともあるんじゃないですか。絶対にできないものもありますよ、それは。けれど、それをしようと思ったのが、例の大平大蔵大臣の予算の修正案問題なんだ。あれは衆参両方で違う議決になりますから。大変な議論をして、結局あときは駄目でしたけれど。

楠 支持団体の顔を衆議院で立てておいて、参議院でつぶすという法案もありますよね。

海部 まあ、そこまで裏に回って高度な判断ができた人は――。

楠 例えば遺族会がずっと押していた靖国法案なんていうのは、衆議院で通つても参議院でつぶれたり。あれは一説には、参議院ではつぶすからという約束があったという話もありますけれど。

海部 「衆通参没」という言葉がありましたからね。衆議院で通過させる、その代わり参議院に行ったら没だ、そこで沈没だよ、ということだ。これは衆通参没の法案だと初めから決めてやると、衆議院のほうは気が楽です。

楠 鳩山「一郎」時代の小選挙区制もそうですね。衆通参没ですね。佐道 参議院でいえば、いまの自民党の青木「幹雄」さんの存在のように、以前と比べると参議院の地位がかなり上昇しているという言い方をしている人がいるんですが、それはどうなんでしょうか。

海部 どうですか。

楠 それは結局、参議院で自民党が過半数割れしているから、衆議院の思い通りに参議院がいかないだけ、参議院の力が増したという解釈なんじゃないですか。

海部 もう一つは、自民党だけでやってたことであるならば、参議院も自民党同士ですから、衆議院の自民党に呼んで説得できた。

いまのように、それぞれに出戻りがいるものだから、ご機嫌を取らなければならんのが本妻以外におるわけだ。そうすると、むしろ衆議院より参議院のほうが、公明は強いですからね。一般の位では上の人が多い。だから、衆参両方で合同会議をやると、自民党とかは衆議院の言うことが圧倒的に通るけれど、公明の参議院は強いから、衆議院より強いことが多いですよ。

伊藤 そういう意味はありますね。

佐道 そうすると、参議院の問題で公明を抱き込もうというのがあって、公明の参議院は公明党の中でも強い立場の人なので、そういうことになってきている。青木さんはそのパイプがあるから、ということですね。

海部 昔話になってしまいうけれど、社会党だってそうでしょう。衆議院より参議院のほうが圧倒的に強かったんだから。参議院の代表は、みんな全国委員長ですよ。衆議院に出て来ている連中は地区の委員長ですよ。全体会議をやると、ひな壇の一番いいところに座るのは、参議院の全国区だ。衆議院はその下にいて、「おい」なんて言われているんだ。

佐道 全然違いますね。

海部 全然違う。

佐道 ちよつと話が違いますが、さっき出た話で、野中「広務」さんがこのあいだどこかで講演をされて、「イージス艦派遣を認めるようであれば、公明・保守も（自民党を）もはや仲間とは思わない」という発言をされていたんですが、あれは、保守党の中にそういう意見があるということもありますが、公明にもそういう意見が出て来るのではないかという危惧が野中さんにあるというのか。それから自民党の中では野中さんぐらいが派遣について非常に反対をしているということなんでしょうか。

海部 この問題について野中さんとサシで話したことはありません

から。最近党の意見がおかしくなりかけたので、ちょっと背中を押しただけで、おれが押すと効果百倍だ。平和主義者の海部さんが、やれ、手を貸してもいいというのは大変なことだから、党の意見はそれでいく。野田毅がしゃべったりすると、ちよつとわかりきったことだ、二階「俊博」とか。だからおれが言うからやれといつて、議論をまとめたり押ししたりしたんです。

それで月原とかの連中が喜んで、あとからお礼に來た。それぐらい言われているわけですから、野中さんも、自民党の中で、ことさらにそういう姿勢を取っていらつしやる。北朝鮮との関係があつて、それ以来あの霧を払拭したいから、いろいろなどころで八面六臂の動きをしなければならんのだろうと私は見ます。

伊藤 すごくよくわかる話ですね。

■党国民運動本部長1（位置づけ）

伊藤 その年に国民運動本部長に就任されますね。これは前任者はどなたですか。

海部 三原朝雄じゃなかったな。

伊藤 そうですか。これは党の役員の交替ということで、一斉に替わったわけですか。

海部 一斉に替わったんです。そして露骨に言っちゃうと、このころは、大臣にしてあげたいけれど枠があつてなれない人が、国民運動本部長とか、広報委員長とか、組織委員長というポストに就く。まあ、向き不向きがある。死んでも街頭演説はいやだという人を国民運動本部長にはできませんから、呼んで、「君は閣僚名簿から外れたけれど、一年我慢しておつてくれ。その代わりここで雨宿りしとつてくれ」と言つて、分けるわけです。

伊藤 待機の間所ですか。

海部 はい、自民党というのは、そういういい場所がいろいろあつ

たんですね。

伊藤 国民運動本部長というのは党の中では結構大きな顔のできるポストなんですね。

海部 できるんです。

楠 これは閣僚経験者になるものではないんですか。

海部 そんな決まりはあまりないと思うんですけどね。

楠 そうですか。でも先生はもうすでに閣僚になられていましたね。

海部 はい。そして、もう一つは党の七役です。言にくい話ですが、党の七役は、役員会のメインテーブル・メンバーといつて、メインテーブルに座るわけだ。ニュースが映し来ると、みんな映るわけだ。そこに映っているということは、伴食大臣になっておるよりはるかに仕事もあるし、やり甲斐もあるということではなかったでしょうか。

伊藤 国民運動本部というのはどういふことをするわけですか。いろいろな関係団体とか――。

海部 関係団体を統轄して集めるのは、全国組織委員会というのがあつたわけですね。国民運動本部と組織委員会とは、絶えず共通の問題を協議する必要があります。組織別に行つていろいろな応援することは、国民運動本部がやろう。それから選挙が始まつてしまつと、党の執行部が前に出て行つて、総裁遊説とかいろいろやりますが、平常の選挙対策行動は国民運動本部がそれこそ常時戦場の心構えで、北は北海道から南は沖縄まで、それぞれの問題を探して、解決のために出て行く。そして意見を聴いたり取り上げたりします。そういうことでやつたんですね。

伊藤 実際に国民運動本部は、本部長以下役職がずっとあるわけですね。事務局もあるわけですか。

海部 あります。

伊藤 それは党本部に、ですか。

海部 はい。そして私が国民運動本部長になつた頃は、派閥の数が六つありました。副本部長は、まず派閥にいつて、一人ずつ出して

こいという。各派では副幹事長の枠を一人ずつ持っています。副幹事長に手を挙げてもらえなかった人を、国民運動本部の副本部長に回したり、組織委員会の副本部長に回したり、広報委員会の副本部長に回したりして、それぞれ副本部長というのが各派代表として入ってくるわけです。逆に言うと、自民党の議員である以上は、どこの派閥におっても、党全体で近く問題になりそうなことは何か、近くやらねばならんことは何か、というのは、出て来ておる各副本部長が帰っていった各派閥で報告・発表するわけですね。それでガチッとまとまっておった。

伊藤 そういう構造なんですね。

海部 そういう効能がありましたね。

■党国民運動本部長2（仕事）

伊藤 日常業務としては何をしていますか。

海部 日常は、わかりきった話だと思いますが、各都道府県連と絶えず連絡をとって、都道府県連が必要と認めて要請があったときは、誰か弁士を派遣して、講演会の講師になったり、街頭演説をやったりする。それから選挙に弱い県連があれば、その県連のテコ入れに行きます。そのためには広報委員会と話をし、人目を引くようなポスターをつくったり、その端のほうに候補者をちよつと入れておくとか、きめの細かい対策をしたものです。そして、これは主に夏の仕事でしたが、全国遊説を組んで行くときには、その地域の議員に会場とか場所を提案させて、責任を持たせて、集めておかせて、そこに行つて国民運動本部長の演説会をやったりしました。

伊藤 本部長というのやるんですか。

海部 やるんです。「これは国民運動本部の主催する演説会です」と言つて、やる。組織委員会が主催する、というのはなかなかないんです。

佐道 先生ご自身も、かなりあちこちに本部長として出かけるわけですか。

海部 本部長の時は、ほとんど全国を回りましたよ。四十七都道府県ほとんど。

伊藤 だいたい各府県の主要な人たちを知ることになりますね。

海部 その通りです。そして変な話ですが、いまでも地方に行くと、自民党の名の知れた大ボス、各都道府県連の会長とか幹事長とか、そういう人たちとはみんな、「おい」「やあ」といって顔馴染みです。簡単に物も言える。幸いに保守党と自民党は、今日まで血で血を洗うような選挙をやったことがない。むしろさっきの話ではないけれど、選挙協力をやらせる。みんな選挙協力をします。

伊藤 棲み分けですね。

海部 ああ、棲み分けができていますから。

伊藤 棲み分けができていますことは、いつでも合同できるということですね。

海部 それはいつでも合同できるんじゃないでしょうか。少なくとも保守党に関する限りは。公明党はそうは行きませんよ。

楠 合同した方としない方と、どっちがメリットがあるんですか。

海部 どっちがメリットがあるかな。

伊藤 やっぱ三党連立じゃないですか。

海部 やっぱ別々でおったほうが――。わが党議員で、早く一緒になりたいと思っている人はあまりいないんじゃないか。いまのままでおつて、結構みんなそれなりに楽しくやっておるもの。

佐道 党のレベルでは、自民党も、大事だということで保守党にずいぶん配慮されているということですが、保守党がいろいろおつしやることを、官邸にいらつしやる方があまり言うことを聞かない。それで野田さんがだいたい渋い顔をされるということがありますね。

これはどうしてくれるんだ、という話は相当言っているわけですか。

海部 それは相当積もったものがあると思いますが、野田毅さんの基本路線は、やっぱ血は水より濃しで、彼が物事を判断するとき

にどうしても昔おった大蔵省的な発想をする。彼は主計官でしたからね、それがどうしても最後は出て来るから、コツンとぶつかるときには、それでぶつかるんだな。彼はそういう政策面での不平不満があるんですよ。それを保守党としては、「連立しても、埋没して助けるというのではないから、主張しろ。言いたいことは言ってもよろしいし、言いなさい」ということでやっていきますから。ペイオフなんかも先送りだとか、補正予算をもっと組めというようなことは、彼は生き生きとして言いますね、得意分野だから。

伊藤 しかし言っても、なかなか受け入れてもらえない。まあ、言わないよりはいいでしょう。

海部 「言って、やって来い」というんだ。言うと、一つ二つは、小泉さんは受け入れるんですよ。今日までも、総裁選挙に立候補したときには、彼は背に腹は替えられないという立場でやったんだから。橋本龍太郎が強いという下馬評をひっくり返すためには、靖国神社に参拝することだ。遺族会の票が全部変わる。それなら八月十五日には行きますということを公約して、票を取っちゃったんですね。

けれども、なかなかそれが曰く言い難く、できにくくなった。そこで知恵者ができて、先送りはいかんから、前倒しなさいといった。あれは八月十五日というところに意味があったのか、行けばよかったのか。いま全体のムードでは行けばよかったというようなことになっているでしょう。そこらがあのデマゴグの上手なところだな。私は行ったでしょう、という。

■党国民運動本部長3（副本部長）

伊藤 そうですね。その国民運動本部長の時代に、副本部長として一所懸命先生を助けてくれた人はどんな人たちなんですか。

海部 本部長代理というポストに、山下徳夫というのがついてきた。

あの人は相当な経歴の持ち主ですからね。

伊藤 演説がうまいんですか。

海部 まあ、演説もうまい。ノット・オンリー演説、バット・オールソー根回し。あの人は県会議長が長かったから。県会議長当時の横の関連もあるから、それで海部内閣の時は最初の官房長官にもしたんです。けれど、調査不足で最初躓きましたけれどね。人間的にも、面白い人だし。それで国民運動本部の本部長代理ということに最後はなってもらいました。

伊藤 本部長代理というのは、副本部長の筆頭ですか。

海部 副本部長の筆頭です、一番上です。

佐道 このときの関係で、先生が見込んだというわけですね。

伊藤 面白いものですね、そういうところから人間関係ができていくというのは。これは自分が各派閥から選ぶのではなくて、各派閥から――。

海部 各派閥に任せておかないと、うまく行かないんです。だから小泉みたいなやり方では、いろいろなギンギンが出て来るんじゃないの。「一本釣り」という悪い言葉が流行るようになったのはそういうことですね。だからできるだけ自分を殺して、党を円満にやるためには今日までのルールに従う。そのルールに従って、各派閥の長は派閥を治めることに喜びを感じておるわけです。だから派閥の長の喜ぶ人事権を取ったらいかんわけです。

極端なわかりやすい例を言うと、たとえばいまになっても、「おれの働きを評価してくれなかった」と言って根に持っている議員がおるんです。飲んで酔っぱらうと、必ずそれを言う。「おまえもな、そんなことを言うならば（その派閥の親分は死んじやったからいかんけれど）、いっぺん行って聞いてこい。おれは取ってやろうと思っても、あの頃の力関係はこちらのほうが弱かったんだから、しょうがないじゃないの」。

やはり各派の長に推薦を頼むわけですね。それは終わり頃になると、激しいものになってきましたよ。組閣をやっておる最中に、

「どうしても出てもらってください、電話に」といって、派閥の長が電話をかけてくる。電話のかけ方にも、いろいろ人柄が出ていて面白いんですね（笑い）。

伊藤 そうですか、派閥の長の人事権を侵してはならない。

海部 そう、侵してもいいんですけれど、侵すと、たとえば西岡武夫のような犠牲者が出るんですよ。官澤派からの推薦に、あの人はないんですからね。それを取ったんですからね。そうしたら、「総理は、私を足蹴になさるおつもりですか」なんて電話がかかってきた。「いやあ、先生を足蹴にしようなんて思っておらんけれど、推薦を複数で出してくださいといっても、先生のところは複数で出してくれんから、ああいうことになるんですよ。なんなら、いつペン元に戻して、複数で出し直してくださいよ。そうしたら、お立場も体面も立つでしょうし、足蹴にしたなんて思わないでもいいでしょう」といった。そういうような裏の裏まで、教えたり教えられたりしながらやることもありますしね。

これはと決めた人がいけないと、派閥の長から直接電話がかかってきて、「こういうわけで、いかん。あれだけは困る、あれだけは」という。「じゃあ、それを外へ言ってもいいですか」「外へ言ったらこつちの鼎の軽重も問われるから、その話は悪いけれど、先生、聞かなかったことにしておいてくださいよ、その代わりこつちにします」というようなやりとりまでしたことがありますよ。だから組閣の日の一日前というのは大変なことでした。

伊藤 組閣は一番大変でしょうけれど、それ以外の人事でもすべてそうなんですね。

海部 すべてそうです。このへんの副委員長の仕事でも、各派閥から言ってくる副委員長がいて、これをとつてくれとか言われる。

楠 逆に派閥がないと、人事は大変ですね。まだ大臣ぐらいたったらいけれど、いまや副大臣、政務官、常任委員長と数がたくさんあるから、派閥の推薦で仕切っていかなかったら、総理大臣総裁が一人で、誰にしようか彼にしようかと、とても考えられませんか。

海部 それをやるとまた偏ってしますからね。

伊藤 でも自民党だって、非主流派を干すということを昔やったことがあるじゃないですか。

海部 いまでもやっていますよ。

伊藤 いま、またやっています。それがうまく行く場合と、うまく行かない場合がありますね。国民運動本部長というのは、誰が副委員長にならないとどうしてもうまく行かないとか、そういう話ではないでしょう。

海部 と思いました。けれども、これはその気になってやる人にとつてみれば、いろいろな意味での利権にもなるわけです。

伊藤 そうですか。

海部 こつちはそういうことはさっぱり教わらなかったし、私が育てられた派閥のリーダーが悪かったから、というのか、良かったかと言ったほうがいいんだな。いろいろ、その筋の人を見ると、国民運動本部長というのはまたやるべき仕事もあつたんだなと、顧みて思うところです。

伊藤 そんなに面白いポストなんですか。

海部 その気になって探せば、いろいろあるんですよ（笑い）。

伊藤 何のことだかさっぱりわかりません。

佐道 では結構人気があるポストなんですか。

海部 そうです。

伊藤 じゃあ、海部のやつはうまくこれをせしめたな、ということになりますね（笑い）。

佐道 広報部長と国民運動本部長では、国民運動本部長のほうが。

海部 いろいろな意味で、幅広く動いたり、仕事をしたりしなければならぬ。

楠 山下徳夫さんというのは同じ三木派ですね。先生とはかなり毛色が違うような気がするんですが。

海部 外からごらんになるとそうでしょうね。この人は県会議長としてずいぶんやってきたし。

楠 性格とか、どういう方ですか。
海部 どういう方かと言われても、ひとことでは言いにくいな。非常に政治的な動きができる人です。

■党国民運動本部長4（派閥と人脈）

伊藤 政治的な動きができる人ということですが、海部さんご自身は、自分をどう思っておられますか。

海部 これは自分でそういうことを言っても駄目ですわ。客観的に認められていないと。

伊藤 なんとなく、自分はどうだと思いいですか。

海部 そういう方面の世渡りはずいぶん下手であつたなと思います。言わんでもいいことを言ったり、せつかくあれがあつてもつかみ取りをして来なかつたり。それはやっぱり、育てられ方がそういうことでしたからね。

伊藤 まあ、危ない橋を渡るというようなことはしなかつたわけですね。

海部 絶対にしていないですから、どちらから流れ弾が飛んできて、ああそのことは、と言って、全部言い逃れというか、違うと言えますからね。

これはいつかお話ししたか、僕自身が深夜呼び出されて、「この金は返して来い」と言われた。「金は欲しいんだけど、こういう金に手をつけてはいかんのだ」といって、実物教育をされました。

伊藤 それは三木さんからですか。

海部 おお、三木さん。そういうふうに理解しておりますね。

伊藤 国民運動本部長をやつて、何か献金があるようなことというのは、あるんですか。

海部 人脈ができますよ。

伊藤 各地方ですか。

海部 各地方、各業界とか団体。

伊藤 業界や団体は組織委員会のほうでは――。

海部 組織委員会より、むしろ政務調査会と利益団体はつながってきます。けれども、言いにくい話だが、国民運動本部には、いろいろなことをやるために国民運動を起こしてもらつて、全国でそういう機運を盛り立ててもらいたい。そうすると、それによって大きな意味でメリットがあるグループがたくさんあるじゃないですか。一例を挙げれば、いまはそんなに目の色を変えて頼みに来ないし、やらないだろうけれど、文化勲章だつてそうですよ。

伊藤 文化勲章が国民運動と関係がありますか。

海部 関係がある。びつくりしたことがあつたもの。そんなもの今まで手を伸ばして、応援してやるような制度仕組みが何十年という長い間にずっと構築されてきておつたということでしょうね。そのように敷かれたレールの上に乗って走らないと、ある意味で評価が高くなつても、ある意味では全然無視されて、あの人は話がわからん人だ、ということになるわけですね。

伊藤 そうですか、じゃあ話がわからないほうになつちやつたんですね。

海部 話は全然わからなかつた（笑い）。

佐道 副本部長になるような方々も日本全国に行かれるわけですか。

海部 はい。

佐道 そうすると、穿つた見方をする、みなさん派閥から来ておられるわけですね。自派閥の弱い地域にテコ入れに行つたり、集中的に行つたりということも可能になりますね。

海部 見て、明らかにこれは偏りすぎているというような派遣計画は、三役会議ぐらいでつぶします。

佐道 そこは良識が働くわけですね。

海部 そうそう。一回行くとお金もかかりますからね。職員を事前に派遣しなければならん、ポスターの用意をしなければならん。楠 そういうお金は党から出るんですか。

海部 党から出るんです。それは予算で要求してありますから。

伊藤 年間経費が配分されているんですか。

海部 遊説費とか、PR費とかいろいろ入っていますから。

■党国民運動本部長5（労働組合対策）

佐道 毎年毎年、国民運動本部の運動方針を立てるわけですか。

海部 党大会決定事項になっているんです。私が国民運動本部長になったときは、労働組合のほうにも少し手を差し伸べて、働く人々も敵視しないという政策に変えていかないといけない。自由民主党は国民政党といっていたのではないか。というようなことを党大会でぶち上げた。

伊藤 それは海部先生が、ですか。

海部 僕がです。僕が国民運動本部長のときの自由民主党大会でぶち上げたんです。

伊藤 じゃあ労働対策とか、そういうことをおやりになったわけですか。

海部 はい。やりました。

伊藤 入口はどこですか、民社ですか。

海部 いや、社会党に初めからアタックした。だって日教組に手を突っ込んで会おうと思ったら、これは民社ではいかんわけです。民社的な日教組は日教連といって、ごく一部ですからね。そしてどちらかというと、正攻法で行こうということです。それからもう一つはゼンセン同盟。これは地元でもあるし。

伊藤 これは民社ですね。

海部 はい、民社です。もちろん民社ですが、民社ではなく海部派に変えなければならんから。いまでこそ言うが。

伊藤 そうしたら民社と喧嘩になるじゃないですか。

海部 日米繊維製品交渉のころ、地元のことで、助けるべきところ

は助けてやらなければならぬですね。それがきっかけだったと思います。

伊藤 あそこには大手があるんですか。

海部 大手というのはあまりないですけど。中小ですけど、企業の数は一。生産量も、特に毛織物なんかは全国の七〇%あったわけです。繊維産業はほとんど私のところが中心だったわけですね。

伊藤 もちろん経営者の側にも入って行くだろうし、労働組合の側にも手を着ける。

海部 そうです。

伊藤 これに手を着けたら、ゼンセン同盟は民社で固まっているので、大変なことですね。

海部 いや、労働組合のほうは、自分たちがよくなればそれでいいんだ。働くものの立場に立って物を考えるということになれば、そう敵視ばかりもしてこないんだな。懐に入ってきて協力した方がいいよ、といったわけですから。

伊藤 かなり成果はあったわけですか。

海部 と思います。

伊藤 じゃあ組合の事務所に海部さんのポスターを貼ってくれるのか。

海部 各工場の組合ごとに、「選挙が始まったらおれのポスター貼っておけよ」というと、「先生見に来てちょうだい、貼ってあるから」という。それで行けば、止めちゃって、聞いてくれましたね。

伊藤 日教組とは会ったんですか。

海部 何回も会いました。

伊藤 植枝「元文」さんの時代ですか。

海部 植枝です。テレビにも一緒に出て、恥をかきましたから。あのときは、一緒に中学の入学試験も受けさせられてね。「問題をあらかじめ教えておけ、教えてくれなければ赤っ恥をかくといかんから」と言ったら、「いや教えるわけにはいきませんが、だいたいこ

ういう傾向です」といって、容積とか体積とかのことを言っているね。

伊藤 それでテレビの場面で試験をやるんですか。

海部 そうです。それでどちらがマルか、どちらがペケか決めるわけです。それをテレビの前でやったんですよ。

伊藤 榎枝さんとは、しかし話が通じないでしょう。

海部 それが不思議によく通じた。榎枝ともよく通じたし、その次の田中「一郎」ともよく通じた。東海道線で乗り合わせても、「おい、呼んでこい」といって秘書官が呼びに行くと、榎枝が隣の席に来て、一緒にパンを食ったりビールを飲んだり。人が見ておっても平気ですから。それで四ト追放だけは約束しなさいよというのがこちらの願いですから。ストをやめさせようと思った。

伊藤 それはウンとは言わないでしょう。じゃあ労働組合にも多少浸透していいこうと――。

海部 したんです。その成果もある程度上がりましたよ。

伊藤 でも自民党を支持するという形の組合は――。

海部 組合は、自民党支持までは明確には行きませんでしたけれど、単位組合ごとに、決議して支持してくれる。たとえば日米繊維製品交渉のころは、私がアメリカまで行って、向こうの商務長官と会って、いろいろな話をつけてきた。帰ってきて、廃業しなければならんときは、転廃業の機械の買い上げ政策をやりました。そのようなことで、現場の労働組合では「選挙になったら、今度は支持します」と決定してくれたところもありましたね。繊維は地場産業ですが、放っておいたら本当につぶれてしまう。なんともならんものでしたから。

伊藤 でも全国の本部長ですから、ほかにもっとたくさん組合があるわけですね。

海部 ほかの組合も呼んで、来てくれるなら自民党本部で朝飯と一緒に食べに来てくれやと呼んで、朝食と一緒に食べながら、要望を出してもらったり、質問を出してもらったりして、いろいろ顔馴染

みにはなりましたね。そのころまでに、私は官房副長官のころに労働担当もやりましたから、国鉄労働組合だとかもね。私鉄の労働組合では、変な話だけれど、「あのときの副長官はようしゃべったから」なんていって、みんな覚えていてくれるものだから、喜んで来てくれて、話をした。ただ組織しようと思っても、なかなか自民党を支持する労働組合というのは組織できなかったですね。

伊藤 それは無理でしょうね。

海部 僕がそれをやったということは、組合も成長したと言われて、いいんですよ。あの頃、一緒に写真を写した「写真を探す」。

伊藤 榎枝さんですか。

海部 ええ。「使ってもいいか」と言ったら、「使ってもいい」と言った。日教組の連中はだいたい一緒にやったはずですが、残念ながらいまお見せするものはないけれど、テレビでテストを受けているところだ「アルバムを探すが見つからない」。

伊藤 それはテストをやって、また討論会をやるんですか。

海部 はい、話をした。挑発すると、彼はときどき決定的なミスを言いますね、「そんな電子計算機の使いなんて教えたって、喜ぶのは独占資本だけだ」「なんだおまえ、そういう発想か。あれでやると、人間が計算するより、もっと正確にもっと早く、より高くより強くで、ボラーレ・オ・カンターレになってくるから。そんな科学技術の進歩を頭から否定しちゃ駄目だよ」と言って、「お聞きになっているみなさんはどうですか」なんていやみを言うと、反響は大きいんだよね。

伊藤 それはNHKの討論会ですか。

海部 はい。

伊藤 先生は、いつの時代も、よくNHKに出ておられますね。

海部 出してもらっています。だから労働問題とか教育問題とか、そういう問題のときは国会運営や国会対策で、副長官というのはそういうことによく引張り出される全天候戦闘機みたいなものから。

伊藤 民社系の組合の人たちとも仲良くなったわけですか。

海部 はい。社会党系も仲良くなりましたよ。

伊藤 どんな人が一番記憶に残っていますか。

海部 組合の中で、ですか。最後になって勲章が欲しくなっちゃって、勲章がもらえるならばというので、僕が推薦者になった人もおりますしね。

伊藤 それは民社系の人ですか。

海部 勲一等瑞宝章をもらったでしょう。労働者の中ではあれが最高の勲章じゃないかな。

伊藤 まあ、そうですね。それじゃあ同盟の会長だ。社会党でも勲章が欲しいんじゃないですか。

海部 欲しいという人がいますよ。生きている人のことは言わんけれど、亡くなった板川正吾なんていうのは、商工委員会が長くて、社会党の筆頭理事だったんですよ。この板川正吾は勲二等なんとか賞をもらいましたな。結構喜ぶんだ。これは国家褒章ですから、国家のために長らく頑張った人だ。しかも政治的には中立無色の天皇陛下からのものになるわけですから、選挙区に行っても言い訳が立つんじゃないですかね。

伊藤 この国民運動本部長と勲章はあまり関係がないですね。

海部 関係ありません。

■ワインバーガー米国防長官の来日

伊藤 翌年、アメリカのワインバーガー国防長官が来日して、いよいよシーレーン、防衛費の増額などを要求してくるわけですが、当時防衛問題というのは、先生はどんなふうにお考えでしたか。防衛問題はノータッチでしたか。

海部 全然防衛しなくてもいいという非武装中立論には与しませんし、何回も討論会に出て勉強したこともあります。防衛費にいくら

使ったらいいかというのは、むしろ僕は1%枠というのは三木武夫さんが非常に頭が良かったというか、狡賢かったなと思うのは、1%以内にみんな収まるんですよ。毎年、結果として経済の成長が大きかったですから、全体のパイが大きくなって、その中の1%も、毎年毎年、イヤ・バイ・イヤで上がっていくわけですね。それでみんな1%以内に収まっているわけです。それはそれで、一つの節度ある政策としてはよかったんじゃないかと思えます。

伊藤 先のことは後の内閣が考えるということですかね。

海部 先の内閣の手足まで縛るのは越権行為である。そしてあの頃は幸いにも、日本は侵略されなかったんですよ。

伊藤 そうですね。いまでもそうですが、深刻な問題として受け止めていなかった。

海部 あの頃は、どんな厳しい状況のときでも、全部突破できましたね。

佐道 アメリカは七〇年代後半から八〇年代になって、こういう要求をどんどん強く出してまいりますね。アメリカの議会でも、経済摩擦と一緒にあって、対日関係がだいたい悪くなるという報道もずいぶんなされるようになるんですが、こういうアメリカの出自については、三木派の中などで議論されていたんでしょうか。これはますます強くなるぞ、というような感じでしたか。

海部 恩着せがましい要求も多かった。日本が今日あるのはどこの誰のおかげであるかという。たとえば輸送船を護衛しているアメリカのパイロットは、リビアの沖なんかで襲われると飛び立っていつて、リビアの戦闘機と空中戦をやって、守りながらアメリカのタンカーを運んでくる。その油はどこの誰が使うのか、ほとんど日本に持ってくる。そういうところからいろいろ議論していくと、なるほど日本がいくらか負担しなければならんのか、と思う。お互いに持ちつ持たれつという言葉もあるぐらいだから。そういうのは潜在意識の中にもずっとありますね。

評判は悪かったけれど、日本は金だけ出すのかといわれて、例の

一三〇億ドル問題のときも、出さないよりもいいじゃないか、精一杯の感謝の気持ちの表明だといった。そうしたら、その一三〇億ドルの計算の基礎は何なんだと聞かれると、何もありませんという。言うなればつかみ金だったんだね。世界が納得してくれるためにはどれぐらい要るかという角度から考えた。アメリカもあのころおかしかったと思うのは、もつと出せ、もつと出せといっても、何に使うか、どれだけ出したら満足できるのかということと突っ込んだ議論をしていくと、向こうにも何も説得力のある根拠がなかったろうと思います。

伊藤 日本の防衛努力をもう少しやれということですかね。

海部 そういうことです。それで一%枠なんていうのはもつてのほかだ、ということですね。

伊藤 しかし現実には一%枠の中で着々と防衛の整備をやったわけですね。

海部 はい。また、できたわけです。国全体が右肩上がりであったので、一%は必ず前年の一%よりも増えていた。額で言いますと、増額されていた。

■フォークランド紛争

伊藤 この年「一九八二年」の四月にフォークランド紛争がありました。これは遠くの離れた話ですので、あまり話題にはならなかったのではないかと思います。

海部 面白い話を一つしますと、私は当時は日英二〇〇〇年委員会のメンバーの一人だったんです。それで毎年往ったり来たりして、イギリスといういろいろやっていたんです。当時私は、日英友好議員連盟の幹事長でもあったんです。そしてあのフォークランド紛争が起る年はどういう状態だったかという、前後間違うといけないが、竹下内閣が左肩下がりになってきたんじゃないかな。

佐道 このときはまだ鈴木内閣です。

海部 フォークランド紛争のときは、鈴木内閣ですか。このとき僕の役割は、日英二〇〇〇年委員会の初めの会議で、政治問題について日本側の意見代表で言わなければならん。英国側も、それぞれリチャード・ニーダムとか、サー・フレデリック・ウォーナーとか、いろいろ日本通と言われる人が出てきてやっておった。ところがあのフォークランド紛争で、軍隊出動を決めてから、イギリスで世論調査をした。旗艦はシェフィールドといたしましたかね。シェフィールドに乗ってずつと行くと、だんだんイギリスの世論の支持率が高まっていったわけだ。それはやはりアングロサクソンの血を引いているイギリスの好戦的などころで、しかも遠いところでも辱められたら黙って見逃すわけにはいかん、断固戦えというアイロンレイデイの評価があつたときガツと高くなった。そのとき向こう側の幹事長が、たしかリチャード・ニーダムといった。記憶ありませんか。

伊藤 ニーダムというのは聞いたことがあるな。

海部 彼は北アイルランド省の大臣が閣外大臣かどっちかをやっていたんだ。初めの会議が終わった後で飯を食っておいたら、「戦争をやると政府の支持率がうんと上がる。日本も、なんなら、近くの相手とやったらどうだ」という。北方領土の問題を軽く考えて、「フォークランド紛争みたいにならねえ、あれもおまえらは取られた、取られたと言っているんだから、だったら行って返せと言って、船をみんな並べてやったらどうだ」というから、「いや、それはとてもできない、相手が悪すぎる」というようなことを言って、笑ったことを覚えていますね。フォークランド紛争というと、そんなことが思い出です。

伊藤 アルゼンチンとソ連では、これはどうしようもない（笑い）。
楠 第三次大戦になります。

海部 「ソ連を相手に、北方領土を返せと言って乗り込んでいったら、えらいことになるから、いけませんよ」という話をしたことを覚えています。

■ロッキード事件の判決1（判決と反響）

伊藤 そのあとで、ロッキード裁判の丸紅ルートで、橋本「登美三郎」さん、佐藤孝行さんが有罪になりました。あとは灰色になるんですね。二階堂「進」さん、加藤六月さん、佐々木秀世さん、福永「一臣」さん。これは政界にとつて非常に大きな影響があったんじゃないかと思いますが、先生はどんなふうにごらんになっていましたか。

海部 これは三木さんが異常なまでにこの問題を大切に考えて、「日本の民主主義」というのは、こういう問題で挫けたり沈没してはいけない。そんななまやさしいものじゃない。情報公開をして、

（いまから思うとごく当たり前の銀行の情報公開と似たようなことだが）、日本側にある資料も全部アメリカに提供する」という。そこまで言ったことが、三木おろしの遠因になったんですね。情も何もないではないかという議論に最後はなっていくわけだ。とにかく初めは異常な決心を持って、「こういう問題が起こったときには情報公開をして、国民にできるだけ明らかにすべきである。日本の民主主義はそれに耐えられるものであると私は信じておる。そして何かあったときには、日本は捜査協力もする」と、これは本会議でも答弁しましたね。

当時、田沢吉郎が議連の委員長であつて、僕のところへ飛んできて、「おいおい、三木さんはあんなことまで言つたけれど、あそこまで言つていいのか。いつでも議連の秘密会を開いて、日本のわかつておる情報はみんな公開して渡すからと言つたのは駄目じゃないか」と言うから、「いや、本人もそう思い込んで言っているんだ。日本の民主主義はそんなことに耐えられないようなものではないと言つてやる気だから、やらしておきなよ」と言つた。そしてアメリカのほうも、持つておる資料その他は全部出して、公開裁判でわか

りやすきちゃんとやつてくれというようなことを言つたので、なんだ、この人は、情もなさけないではないか、というのが、やがて長い目で見ると、僕らには三木おろしの直接の原因になつたのではないかと思う。

楠 このころは、先生は国民運動本部長だったんですか。

海部 ロッキードが起きたときは、官房副長官。

佐道 それは三木内閣の時ですね。この判決が出たときは国民運動本部長ですね。

楠 そうすると、だいぶ世間の風当たりが、立場上あつたんじゃないですか。

佐道 国民運動本部長でいらつしやつて、全国にいろいろ行かれるわけですね。

伊藤 事件ではなくて、政治家の側の判決が出たときですね。

海部 政治家の判決ですね。それは一所懸命言い訳をしたな。それを伏せて通るわけにはいかんから。

楠 国民運動本部長というのは、それをもろに受けて立つ側だと思ふんですね。何かそこで、ご記憶になつてゐるエピソードとかないですか。

伊藤 ロッキードで有罪になつた人を弁護するわけにはいかんでしょうし、といつて、自由民主党の中の話ですからね。

海部 加藤六月なんていうのは、最も仲良く議連の理事を一緒にやつてきて、使つた人です。安倍派代表の若者頭だったものですから、そういう意味では辛かった、個人的な友情としては。ところが世間の風当たりはそうは行かなかつたということですね。

佐道 たとえば演説会とかでは、質問とか疑問とか、そういう形で出てくるようなものですか。

海部 そうです。「どうするんですか」「どうしたんですか」「あれは悪いことじゃないんですか」「間違いないじゃないですか」と、そういう質問は厳しく来ましたね。そういうときはなるべく素直に僕は受けて、一歩下がつて、その力を利用しながら、「それはそうだ

けれど、しかしこうしていかなければならん」とか、「二度と繰り返さん、ということをお約束することの方が大事、再発防止はどうしたらいいかということを考えねばいかん」とか、いろいろその場はうまいことを言っておかなければならんですな。

伊藤 灰色高官になった人たちは大変でしたね。

海部 大変だね。

伊藤 有罪になるならなつたで、決着がついていいわけでしょうが。海部 半殺しだもの。だからあの灰色高官の資料の公表ということについては、あのころ刑事訴訟法をいろいろところで勉強させられた。無罪を主張したい人のためには、こういうこともあった、こういうこともあったと言つて、メイクパブリックしてもいいけれど、そうじゃなかったら、かえつてそんなことをメイクパブリックするのは、議会が裁判所と仕事を勘違いしているんじゃないか、という角度の議論もずいぶん硬骨な法曹関係の議員からはありましたね。伊藤 そうですね。やはり司法関係と国会とは違うということですね。裁判批判を国会でやるというのはなかなか難しいんじゃないですか。

海部 それは難しいですよ。それは三権分立を侵すことになる。

■ロッキード事件の判決2（灰色高官）

楠 こういう事件があったわりには、二階堂さんや加藤六月さんなんていうのは、その後ダメージが少ないというか、政治的な影響力はあまり衰えなかったんじゃないですか。色合いの違いがこの「灰色」とされた議員の」中でも見えますけれど。

海部 それは加藤六月でも二階堂さんでも、個人の選挙区との間柄、関係というものが、こういう噂をされても欠落しなかった。だから日ごろの努力がずいぶんあったんじゃないかと思えますな。それは弁護するわけじゃないけれど、藤波孝生の場合も言えることですね。

いまでも選挙があつたら、また出て来るでしょう。あのとき、官房長官の役目がどうだった、あれがどうだったという議論ではなしに、あれはかわいそうだったと。お詫び行脚をして、泣いて回つたものだから、そちらのほうに焦点が行く。加藤六月の場合も同じようなことが言えると思いますね。これは徹底的に三木先生の悪口を言つて歩いたけれど。

伊藤 誰がですか。

海部 加藤六月だ。そして僕のところには、「まあわかつてちようだい、兄貴、それを言わんと、わし自身が踏み殺されちゃうから。ちよつと大きな蠅螂には、ダーンとぶつかつていくとまたお返しがあるんだ」とかなんとか言つていた。

佐道 「有罪、灰色と」名前が上がつている方々の中で、個人的に一番思い出があるのは加藤六月さんになるわけですか。

海部 だって同じ世代であるし、できたらあれはいっぺん最初の時に選んでやるうと思つたぐらいの関係もありましたから。

伊藤 ハシトミさんなんかはどうですか。

海部 橋本登美三郎は大先輩ですよ。だから「やい」「おい」で物は言わなかったから。

伊藤 そんな大先輩になりますか。

海部 大先輩です。むしろ三木先生と「やい」「おい」の間柄だから。それでいつか会期延長の時期の時、僕が議運の委員長で、橋本登美三郎さんが幹事長という時代があつた。それで幹事長に頼んで、「総理を抑えることができるのは議会だけだ。議会で議長にこういうことを言ってもらうから、党のほうではそのとき総理に、議会の言うことを聞いたかい、議会政治というのはそういうものだと言うと、それは三木先生の泣き所でもあるから、前尾「繁三郎」議長をそれで口説いてくれ」といろいろ言つて、やったことがありますね。佐道 同じ橋本さんですが、橋本龍太郎さんの内閣の時に佐藤孝行さんを大臣につけて、それで世論の反発があつて、人氣が一気に下がるということがあつたんですが、佐藤孝行さんについては、先生

は個人的にはどうなんでしょうか。

海部 あれは年格好も似通っていて、ちよつと向こうの方が年上だが、中曽根派の若者頭みたいなのがあった。三木さんと中曽根さんがいろいろところで接点も出会いもあったから、よく地方に行くのと、三木・中曽根の二人が、飯を食いながら長く話しておられる。われわれお付きのほうも横で「向こうに出したのと同じ物をここへ持って来い。請求書は向こうが払うから」なんて言つて、横の部屋で佐藤孝行とはよく一緒に飯を食つた。あれもいろいろ中曽根さんのためになるようにごそごそ動いておつた人だから、ある意味ではああいうことに引つかかつてかわいそうだったな、という気がちよつとしますよ。

佐道 有能な方ですか。

海部 それは有能です。有能なやつだからこそ、ロッキードの時に、運輸政務次官ぐらゐで入り込んでいつて、ちよろちよろやれたわけだ。

佐道 まともに一度ちゃんと大臣とかやらせたかったという感じですか。

海部 それは、もつと自民党がきれいになつてからやるべきだ。だから悪かつたけれど、佐藤孝行が入閣候補に挙がつたときは、僕はコメントを求められればそれは反対だという。もうちよつときちんと政治改革ができあがるまでは、ああいう人々は野に在つて、政治改革のために協力をしていくべきだ。それが終わったときに、晴れて入閣するのならいいけれど。

伊藤 どうでしょうか、次の教科書問題は。

佐道 ちよつと問題が大きいですからね。

伊藤 教科書問題と、その次に鈴木さんが退陣されるところですが、この前後のことは次回にしましょうか。教科書問題は、先生は直接はご関係なさつていらつしやらないと思います。

海部 このときですか。このときは文教関係は何をやつていたかな。

佐道 国民運動本部長の前が文教制度調査会長だったんですね。

海部 このころはたしか小川平二という人が文部大臣で、中国に招待されていて、行く予定であつたんですね。ところが、宮澤ばにばにがつまらんことを言つたものだから、それで奥野誠亮とか長谷川峻とか、ああいう文教の先輩の右寄りのうるさい方が、断固そんなものは、といつてカツカした頃ですよ。

佐道 やはり改めて伺つたほうがよろしいですね。

海部 僕は、それまであまり中国には親しく出入りしたり、腹を割つて話す人はいなかつたけれど、それでは中国へ行つて来ましようといつて、中国に行つたんです。

伊藤 そうですか。それはちゃんとお話を伺わないとまずいですね。

佐道 やはり文教族のボスとして動かれたんですね。

伊藤 この時点になると、「文教族のボス」といつても、必ずしも間違ひではないでしょう。

海部 ボスであつたかどうかは別にして――。

佐道 相当な有力者であつたことは間違ひないですね。

伊藤 それでは、次回よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

（以上）

平成16年度 文部科学省科学研究費補助金 特別推進研究(COE)

研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕

発行：2005年3月31日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2

Tel:03(3341)0458 Fax:03(3341)0446